KAIZO

改造

無產政黨進出號

四月特輯



昭和の榮養飲料
森永コーラス
春の宵
華やかなる
客あり
談笑のつれ
づれに
純良の……
温かき
コーラスこそ
相應はし
森永
コーラス

CH—24

(福本和夫著)

經濟學批判のために

唯物史觀のために

四六判三九〇頁
定價金壹圓
送料拾八錢

四六判三六五頁
定價金壹圓
送料拾八錢

左翼理論の廉價版として

過去一二年の我が無産階級解放運動を顧みる時、突如彗星の如く突入し來りて、直ちに運動の最尖端に立ち「唯物辯證法」の旗幟高く、理論闘爭」の大渦卷を捲き起したる福本氏を知らぬ人はあるまい。今回發刊する所は氏の二大主著で所謂「福本イズム」の精髓である。前書は嘗つて「經濟學批判の方法論」として、後書は「社會の構成=並に變革の過程」及び「唯物史觀と中間派史觀」として刊行されたるを、其構成序列を改め、且つ幾多の加除訂正をなし殆んど……

……、又は解放運動に……

東京・芝・愛宕下町

改造社

振替東京四八〇二番
電話芝 自一一三一 至一一二四

東洋美術論……野口米次郎……
ヨッフェ氏の遺書……和田軌一郎……

世界大衆文學全集

ルパン

第二回配本開始

探偵小説で世界で匹儔のない深刻さ、面白さを以つて鳴るルブランのアルセエヌ・ルパンは世界大衆文學全集の第二回配本に決定し四月上旬を以つて配付します。この小説のやうな特異のものは他に絶對にない。本全集に加入せんと欲する方は大至急御申込下さい。

義賊アルセエヌ・ルパンには三つの名前がある。一度ルパンと云へば賊となり、セルニン公爵と云へばロシア貴族となり、ルノルマンと言へば巴里警視廳の刑事課長となり、さしもの巴里も神出鬼沒な彼の脚下に飜弄される。彼はあれ程な兇賊でありながら殺人が嫌ひだ。彼は長い間の準備の後破天荒な計畫で泥棒を決行する。世界第一の柔道の達人で腕ひしぎを得意とし、強きを挫き弱きを助け、富める者を脅かし、貧しき者を賑はす仁俠の義賊である。奇智縱橫、敏捷快活なモダンボーイである。アルセエヌ・ルパンこそは戰後佛蘭西青年の理想の人物である。原作者ルブランは處女作「八一三」を出して以來新興の探偵小説壇に彗星の如く光つてゐる佛蘭西現代の人氣作家である。飜譯者保篠龍緒氏は歐洲探偵小説の研究家でルブラン殊にルパン物の飜譯は專賣とする所、譯文流麗明快宛らルパンを見るやうだ。

一冊五十錢

改造社　振替東京八四〇二

新闘争目標の前に

無産政黨が日常鬪爭を以つて大衆に喰ひ入るの策は機宜を得たもの。ただ香川、岐阜、新潟、岡山の如く小作爭議によつて飛躍的にその地盤を開拓したる無産黨の金城鐵壁の地に於て尚ほ且つ一名の當選者を出すことの出來なかつたのは我々をして無産政黨進出の前途未だ容易ならざるものあるを看取せしむ。農村勞働者は工場勞働者と異り、思想的に、敎養的に一段の遜色があり、殊に傳統を斷つ能はざるの困難がある。加之、積年の經濟的不振より來る疲弊と農村生活の前路の不安定を心疑して自分達の行くべき將來を懊惱苦悶の狀態ありありと見らる。彼等は現在の窮乏をいかにして脫却し、いかにして其日を無異に生活するかに迷ふてゐる。そして地主、資本家等の壓迫を強く受けつつも、それに對してどうにも對策がつかぬのである。今回の總選擧に當りて我々は新有權者の一、二割は少くとも無産階級の支持者であらうことを力強く信じていたが、結果は案外にも僅々五分弱の得票を獲得したに過ぎない。この現象は政府及資本家、地主の干渉が烈しかつたからのみと見てよいか。否、我々は斷じてそうばかりとは受けとれない。無産政黨の政綱や政策が現在農村のそれにしつくりしないものがあり、そして彼等を信頼せしめる準備と態度が缺けてゐるからであつた。都會勞働者への策戰をそのまま農村に充當しやうとする失敗にあつた。無産各派の分裂騷ぎが彼等の期待を裏切つたのにあつた。理論鬪爭に熱中して農村の實際に關心することの少きにあつた。今やブルジョア政黨は階級的利益の爲に政民の聯合軍を結成して無産黨に當らんとするの兆候の歷然たるものがある。總選擧後の八幡市がそうである。つづいて高松、足尾、京都にもそうした既成政黨の聯合軍は續々と起つてくるであらう。この重大時機を現前して無産各派が合同し百年の鬪爭目標の前に、階級的利益の前に勇敢に邁進することは全無産政黨に與へられたる刻下の總ての任務であり、役割である。



激流に抗して

勞働農民黨は香川縣第二區に於て如何に選擧戰を戰つたか？

大山郁夫

一　その日は來た

『ソノヒハキタ、、、、セイフノシヨウタイハテツテイテキニバクロサレタ、ゲキリウニコウシテイキマスマスソウレツ、ドウシヨコレヨリマツシグラニツギノトウソウヘ、オオヤマ。』

東京の黨本部に残つて後方勤務に服してゐる同志たちにあてたこの電文を發送した上で、私は琴平町の或る旅館の一室にさびしく獨坐したまゝ、今一度心のうちで、最近數週間に亘つての我々の悪戰苦闘の跡をとゞめた選擧戰の行程を振り返つて、あかず眺めて居た。

私の落選に關する最後の確報が私の選擧事務所に入つたのは、その前夜(二月二十二日)の深更のことであつた。ビラ、ポスター、演説會のプログラム、報告、激勵文、等々で四壁を貼り廻はされてゐた事務所の二階の二室の隔ての襖を撤して陣取つてゐた數十名の運動員たち——その大部分は農民——は、彼等のその日の早朝からの不安な豫想が愈々決定的に裏書きされたのを知つたとき、みな一齊に、各自の戰闘的な顏面の上に、千仭の谷底に突き落された感じの表情を見せた。數分間、嚴肅な沈默がつゞいた。だが、それはやがて、そこゝから起り始めた深い溜め息によつて破られて行つた。どこからか、啜り

泣きに近い聲さへが、微かに聞きとられた。薄暗い一個の電燈で照らされてゐたその場面の光景は、一種異様の陰慘味と苛ら立たしさとに充ちた空氣を漂はした。

瞬間々々、一座の人々の絶望の聲は、憤激の語氣に變はつて行つた。官憲の野獸の如き狂暴さと、反對黨の陰險卑劣を極めた潜行運動とに對する糺彈的語句が、次第に彼等の唇を突いて、發作的に漏れ出るやうになつた。そして、その奥に限りなく深き恆久の怒りと呪ひを秘めてゐる農民の魂の表象とも見られる彼等の眉間に刻まれた幾條の縦皺には、或る沈痛なる決意が讀みとられるやうにさへ、私には感じられだした。

「鬪爭はこれからだ！」

かうした彼等の心の騒ぎが私の神經に傳はつたとき、私の心はたゞ何かなし感激にふるへて、拝みたいやうな氣持にさへ誘ひ込まれた。

やがて正式の會議の開始が宣せられた。人々は居ずまひを直ほした。司會者は開會の辭を述べた。つゞいて私は、一時間ほどに亘つて激勵演説を試みた。私は開口一番、まづ運動員たち一同が過ぎ去つた選擧戰を通じて遺憾なく表示した驚くべき殉難者的精神と獻身的努力とに對して、全黨を代表して熱誠をこめて感謝を捧げた。實際彼等をして、官憲と反對黨とが協力して彼等の進路の上に置いたあらん限りの障碍を排除し、あらん限りの陷穽を突破して、起つては倒れ、倒れては起ち、戰友の屍を踏み越え踏み越え、火の出るやうな激戰を最後まで戰ひ拔かしめたその勇氣と忍耐力とは、正當に勞働農民黨的精神の最も典型的な表現として記録されるべきものであつた。そして、それは單に我々の側に於ける幾多の戰術上の誤謬を償つて餘りあるものであつたのみならず、實に無産階級の絶大なる歴史的使命の意識の下にすばらしき全面的政治鬪爭に乘り出したわが勞働農民黨の最近の歴史の上に輝ける一ページを加へたものでさへあつた。で、私はその點を力説した後に、更らに私自身の當落如何に拘はらず、今度の我々の選擧戰が決して無益には終らなかつたこと――殊にそれが一の歴史的規模に於ける暴露戰としての効果を完全に擧げ得たこと――を附け加へた。實際我々は、所謂法治國の制度下に於て、如何に、、、、、、、支配が、資本家地主の政府の手によつて、直接に勞働者農民の上に加へられ得るものであるかを、また現實に加へられて來たかを、選擧戰に於ける我々の體驗を通じて、まざまざと見て來たのであつた。私は倚ほ引きつゞいて、わが勞働農民黨が從來掲げて來た政治的自由獲得の鬪爭目標の正しさが、かゝる狀勢の下に於て、如何に決定的に證明されたか、――そしてそれが如何にわが黨獨自の旗じるしとしての地位から、一般大衆の共同の旗じるしとしての地位にまで引きあげら

れるに至つたか、——從つて我々が如何に我々の鬪爭によつて、一般大衆の次期の政治行動の方向を明確に指示することに成功したか、——等々の諸點にも觸れた。更らにまた、私はそこから一轉して、我々のすべてが、さしもに强烈を極めた官憲の組織的彈壓の砲火を潜り拔けて來て、ますます戰鬪力を鍛ひあげ、戰鬪意志を燃やしてゐる狀況を、私が眼のあたりに見て居る欣びを會衆に告げることを忘れなかつた。『激流に抗して意氣ますます壯烈！』——それがその瞬間、私の胸を鋭く射貫いた實感であつた。最後に私は、我々全黨員が今後益々結束を固め、常に全民衆の先頭に立つて、勇敢に資本家地主の政府に抗爭し、あくまで我々の政治的自由獲得鬪爭を勞働者農民の政府の實現にまで戰ひ拔く決心を以て、まつしぐらに我々の鬪爭の次の段階に猛進する必要を强調し、そして私自身はそのために、全黨員と手を取り交はして、勞働農民黨の旗の下に生死を誓ふものであることを切言して、私のその場の演說を結んだ。

次いで數人の感想が順々に述べられた後、選擧戰直後に於ける縣支部聯合會の活動方針に關する協議がなされ、それが終つてから、更らに會衆の決議により、私の發聲で「勞働農民萬歲」が高らかに三唱された。人々は直ちにそれを引き取つて、私のためにもまた、熱情のこもつた萬歲を叫んでくれた。私の眼に淚にかき曇つた。かくて感激にみちた我々の夜半の集會は閉ぢられた。

その翌朝おそく、私は宿の一室で眼をさましたとき、急に黨本部の同志たちにもメッセージを送りたい衝動に驅られたので、直ちに賴信紙を取り寄せて書いたのが、本文の冒頭に掲げられてある電文である。私はそれを發送し了つてから、何か一つの役目を果たしたかのやうに、私の心が段々と平靜に復して行くのを感じた。それから私は、過去數週間に於ける選擧戰中に我々が遭遇した樣々の經驗を次から次へと手繰りよせつゝ、いつしか輕き冥想狀態に陷つて行つたのである。

二　香川へ

『香川へ！』——

かうした呼び聲が私の意識に響き始めたのは、一月八日のことであつた。それは黨の新任中央執行委員會の第一回の正式會議の第二日であつた。その席上で、來るべき總選擧に對する黨の公認候補者の人選と、各候補者のそれぞれの地盤への振り宛てとが、大體決定されたのだ。私が香川縣から打つて出ることにきまつたのも、その時であつた。

それまでは、實際私が立候補すべきか否かの問題さへも、黨內では

一の要素として殘されてゐたのだ。私自身は、少くとも私が黨の中央執行委員長としての地位におかれてゐる間は、立候補しない方が當然ではないかと考へてゐた。細迫書記長も、その點については、初めは私と同意見を持してゐた。それは、黨の中央執行委員長の地位に附隨する極度の劇務と、黨選出代議士が當然行はなければならない猛烈な議會鬪爭上の活動との兩立が相當に氣遣はれたからであつた。だが、他方に於ては、黨が階級的大衆黨として持つ諸機能の上から見て、その代表者が議會外の大衆行動の一尖端として議會内に議席を占めるとは、必ずしも不適當でないばかりではなく、寧ろ樣々の點に於て多大の便宜を與へるであらうといふ見解もまた、相當有力に主張し得られる根據があつた。そして細迫書記長は多くの常任中央執行委員諸君と共に、次第にその方に傾いて行つた。私自身は固より、頑强にそれに反對の立場を取らねばならぬ程の論據を持つてゐなかつた。それに、『我等の書記長』はまた、私（大山）がアジテーターとしての特殊の能力を具備してゐることが私を無產黨議員として資格づけるといふやうな、私としては肯定していゝか否定していゝのか判斷のつきかねるやうな今一つの理由を持ち出して來て、私の立候補を可とする說を支持するやうになつた。尙ほまた、香川縣の黨支部聯合會からも、主として地盤擁護に關する考慮から、黨の常任中央執行委員上村進氏と私とを、それぞれに第一區および第二區から立候補させしめたいといふ希望を通達して來た。さういふ諸般の事情から、八日の中央執行委員會の會議に於て、ともかく上村常任と私との香川縣からの立候補の件が、滿場異議なく可決された。尤も、上村常任が第一區へ、そして私が第二區へ振り向けられることが最終的に決定されたのは、それから約二週間の日子が經過した一月下旬の初頭のことではあつたが。

中央執行委員會が黨大會から委任された事項の範圍内でなした決議は、各黨員に對しては、黨の決議としての拘束力を持つ。そして、わが勞働農民黨の如く極度に統制を重んずる政黨にあつては、一旦黨議で決定されたとは、各黨員によつて嚴守されなければならない。で、私の場合には、既に黨の決議を代表する中央執行委員會の決議によつて、私の香川縣からの立候補が決定された以上は、一黨員としての私は、最早私自身の個人的立場からそれに對して兎や角と口を挾むべきではなかつた。私は絕對にそれに服從しなければならなかつた。『香川へ！』と何處からとなく響いて來だした呼び聲に、私の心が漸く聞き耳を立て、しかも多少なりともそれによつてせき立てられるやうに感じだしたのは、その時からであつた。

だが、私がこの未知の地盤を訪づれてその一般的情勢を測定しておくことが、如何に選擧の上から見て必要であつたにせよ、私の手には

まだ、その前に是非とも果たしておかなければならない幾多の任務が残されてゐた。殊に私は、黨の既定のプログラムに從つて、他の諸地方を先きに駈け廻はらなければならなかつた。わが勞働農民黨にあつては、選擧といふが如き一時的性質の活動のために、その恒常的活動——特に既定のプログラムの上にまで載せられてゐるそれ——が犠牲にされるやうなことが絶對に許されてならないのは、當然すぎる當然であつた。

そこで私は、香川行きを暫らく保留して、先づ千葉縣を振り出しに、關東地方の一部および阪神地方における私の當面の使命を果たすべく、一月十五日から遊說の旅程に上つた。

千葉縣での私の仕事は、同縣の縣會議員選擧に際して出馬した三名のわが黨公認候補のために、四日間を應援演說にさゝげることであつた。それを濟ませてから、私は更らに十九日に山梨縣の一地方に黨の宣傳のために出掛け、翌二十日歸京して始めて第五十四議會解散の報に驚かされた。私の香川行きは、一層喫緊の急務となつたのだ。

だが、それにしても、私はまだ既定のプログラムを濟ませてゐなかつたので、更らに二十一日には群馬縣に赴き、それから西に長驅して、大阪神戸を歷訪し、漸く一月二十六日の早朝におよんで、岡山縣から瀨戸內海を橫ぎつて、あこがれの香川縣に第一歩を踏み入れたのだ。

三　情勢偵察

その日の午後、私は琴平町で開かれた日本農民組合香川縣支部聯合會大會に臨んで、勞働農民黨を代表して祝辭を述べたが、それは十分間ほども進行しないうちに、臨監によつて中止された。その小さき一事件が、それ以來選擧戰を通じて繼續されたのみならず、選擧戰後の今日に至るまで少しも緩和されてゐないところの、香川縣の勞働農民黨員の上に加へられた空前の組織的大彈壓の第一擊であつたとは、後になつて思ひ合はされたことだつた。

その夜は、同じ琴平町で開かれた日本農民組合香川縣聯合會大會記念演說會に出演して、黨の宣傳を試みた。氣勢は大にあがつた。

翌日午後、香川縣第一區から立候補することになつてゐる上村常任が琴平町に來着、第二日目の日本農民組合縣聯合會大會に臨んで祝辭演說中、矢張り臨監の中止に會つた。

前日私に加へられた中止といひ、當日上村氏に加へられた中止といひ、更らに前後二日に亘つての組合の縣聯合會大會の上に加へられた官憲の橫暴を極めた干涉ぶりといひ、いづれとして、來るべき選擧期間に於ける形勢の不穩さを我々に豫感せしめる材料たらざるはなかつ

た。

それから月末までの數日間に於ては、私はたゞ一日岡山市に於ける黨主催の演說會に出演のために縣外に出たきりで、あとは私の全活動區域を香川縣内に限り、選擧の前哨戰といふ意味で、上村氏外數名の黨員たちと同伴して、縣下の主要各町村を、黨の宣傳演說のために驅け廻はり、傍ら選擧のために必要なる狀況視察を行つた。演說會に對する官憲の干渉は依然として激烈を極め、注意中止の濫發は例の通りに行はれた。だが、二月に入つてから實際に行はれた組織的彈壓の暴狀の程度に至つては、その頃にはまだ我々には充分精確に豫測ができなかつた。それは、一面からいへば我々の不敏だつたともいへるが、他の一面からいへば、それはその組織的彈壓が平常の狀態の下に於ては到底想像もつかないほど深刻で、野蠻で、且つ大規模のものだつたためだともいへるのだ。

さういふことの外に、私はまた、わが黨の側に於ける組織および戰術上の幾多の缺陷を注意したが、それは寧ろわが黨獨自の問題で、一般的關心の繫がれる問題ではないと思ふから、玆にはその記述を省略する。だが、さうした缺陷の或る部分は、我々の選擧戰の進行中に於て次々と揚棄されて行つたとだけは、玆に附記しておかねばならぬ。なほ、その組織および戰術上の缺陷に附帶して、わが勞働農民黨の黨情が、黨の支持團體である日本農民組合以外の未組織農民大衆や都市の小市民層の間に案外に知られてゐなかつたことは、さすがに私たちをして一驚を喫せしめた。しかもそれが、昨年秋の府縣會選擧を經た後のことであるだけに、猶ほ更ら重大事であることを私たちに思はせた。で、私たちは、それ以來の選擧演說でこの點を充分に補はうと考へてゐたが、何にせよ、我々の言論は官憲の毒手によつて假借なく緘封され、その上反對派の逆宣傳は放肆に、無制限に、かつ繼續的・反復的に飛ばされてゐたために、遂に選擧戰終了後の今日に至るまで、我々はそれを如何ともすることが出來なかつたのだ。

だが、わが黨の上に掩ひかゝつてゐた如上の不利の形勢を或る程度に緩和する効果を擧げた諸要素も、若干は見られた。それに關しては、我々はまづ第一に、昨秋選出されたところの四名のわが黨縣會議員の異常な奮鬪ぶりによつて克ち取つたその輝けるレコードを擧げなければならぬ。彼等は彼等が縣會の議事に全然無經驗であつたこと、政友會・民政黨系議員らの反對乃至妨害が不斷に行はれたこと、特に縣會の會期が極めて短かゝつたこと、等々の幾多の不利なる情勢の下におかれてゐたにも拘らず、縣下の貧農および小市民層の負擔輕減のために死力を出して戰ひ、或ひは産米檢査の撤廢とか、或ひは惡縣稅の撤廢とかの要求に於て、少くとも部分的成功を獲得し、かつ將來の

全的勝利への地ならしをした。更らに彼等はまた、昨秋の水平社全國大會へ縣會の名に於て祝電を發する提案を出して、反對派議員の妨害によつてその採決を阻止されたが、しかしその討論の際に、わが黨の政策の一項目である『封建的賤視觀念の撤廢』の精神を强調し、全被壓迫民衆のための政治的自由獲得の意義を高く宣揚したのであつた。彼等のかうした美事な成績は、少くともそれが知れ渡つただけの範圍内に於ては、民衆からのすばらしき賞讃を浴びてゐたし、またそれから延いて勞働農民黨の本質に對する一般的理解を進めるための誘導物となるべき可能性を多分に見せてもゐた。たゞ不幸なことには、豫てから企てられてゐたわが黨縣會議員の成績報告演說會の計畫が、その頃までには、まだ充分に實現される運びにまで立ち至つてゐなかつた。で、我々はわが黨の宣傳演說會に於ても、また後に二月に入つてから開始された我々の政見發表演說會に於ても、わが黨縣會議員たちを煩はして、毎回出演して彼等の縣會に於ける活動を報告せしめることにしてゐたが、その聽衆に對する効果が漸く顯著に認められるに至るや、彼等の發言は例外なく臨監の中止を食ふやうになつてしまつた。

第二に、香川縣下の勞働農民黨員たちの士氣がすばらしく旺盛で、その歩み方がまた非常な堅實味を見せてゐたことも、玆に特筆されなければならない。彼等の殆んどすべては、日本農民組合員として、今日まで數度の激甚なる爭議の鐵火の試練を通じて彼等の互腕を鍛ひあげられて來たものである。たゞ彼等は、過去に於て、かくの如く經濟鬪爭にこそは申し分なく訓練されてゐたにも拘らず、しかも様々の原因から、日常政治鬪爭には殆んど全然といつていゝほど無經驗であつた。いかにも彼等は、昨秋の縣議戰を或る程度の成功を以て戰ひ拔いて來たが、それにしても、その時とは比較にならぬ程の大規模の上に行はれ、しかも多くの點に於て可なり異つた情況の下に戰はれた今回の衆議院議員選擧戰のための準備としては、それは決して充分なものだとはいへなかつた。そこに、わが黨が香川縣に於て今回の選擧戰を通じて最後まで持續した最も根本的な缺陷が潛んでゐた。だが、それにも拘らず、更らにまた、官憲の手によつてわが黨の上に加られた稀代の組織的、、、のあつたにも拘らず、わが黨が第一區に於て八千票に近き、そして第二區に於て九千票に近き得票を克ちとり、その點に於ては全體として昨秋の縣議戰の時の戰績を遙に凌駕する收穫を擧げ得たのは、ひとへに同縣下のわが黨の鬪士たちが、驚嘆に値ひすべき果敢かつ執拗な不斷の努力によつて、その異常に苦澁であつた鬪爭を最後まで戰ひ拔いたためであつたに相違ない。我々が今回の敗戰にも拘らず、更らにまた我々が同縣下に一の近代工業も見られないといふやうな不利な情勢の存してゐることを知り拔いてゐるにも拘ら

ず、しかも尙ほ同縣下に於けるわが黨の黨勢に關して一の輝やかしき未來を想望することができるのは、我々がそこにかくもすぐれた素質を具備する多數の農民鬪士たちを持つてゐるがために外ならないのだ。我々は確信する、將來他縣の工場勞働者たちの協力と影響とが彼等の上に一層多く加はるであらうとき、彼等は更らに一段と眼ざましき飛躍的進展を遂げるであらうことを。官憲の必死になつての彈壓の如きも、その前には、一杯の水の上に起る嵐ほどの効果をも持たなくなるであらう。

私は香川縣に於ける一週間ばかりの短き滯在中、宣傳演說の傍ら、そこでの政情に關して出來得る限りの觀測を試みたところで、さし迫つた黨務のために、二月はじめ一應歸東することにした。途中私は京都府下に立ち寄り、わが黨公認候補の同志水谷および同志山本(宣)のために三個所で應援演說をして、そこでの氣勢の大にあがつてゐるのを實見し、非常に意を強くして東京に向つた。

四　『すべての人民に自由を與へよ』

東京に歸り着いたのは、二月二日の正午に近い頃だつた。その午後は黨本部に赴いて各種の打合はせをなし、夜は府下第五區に於けるわが黨公認候補の同志鈴和のために、二個所で應援演說をした。

翌三日――それは私にとつては、今回の選擧戰の全期間中で最も記念すべき日の一つであつた。それは實に、同夜東京朝日新聞社主催の下に同社の講堂で開かれた五大政黨代表者立會演說會に私も招かれて、出演の機會を與へられたからであつた。

その演說會には、日本勞農黨から麻生久氏が、社會民衆黨から安部磯雄氏が、民政黨から床次竹二郎氏が、政友會から三土忠造氏が順々に出演し、各自それぞれの演題を揭げて政見を發表し、最後に私が勞働農民黨を代表して、『すべての人民に自由を與へよ』といふ演題の下に演壇に立つた。

會場の全光景については、私はそれをその翌日の『東朝』の記事に讓らう。茲では私はたゞ私に關する或る一點を抽出して記載することを以て足れりとする。

私はまづ、『從來既成諸政黨のいづれかが內閣を組織したときでも、我我が終始一貫して反對黨の立場を固守したが故に、常に彼等の迫害の標的とされて來た』ことを語り、『彼等とはそれ故に過去に於ては彈壓の砲火を通じて微かに相見ることが出來ただけであつたが、今夜はからずも彼と同じ演壇から大衆に呼びかける機會を得たことを欣ぶ』旨を述べ、直ちにそれを受けて、『我々を抑壓して來た彼等が果たして民

衆の味方であるか、彼等によつて抑壓されて來た我々が果たして民衆の敵であるか、それを聽衆諸君の明敏なる判斷に訴へる』と叫び、更らに一轉して、『至るところ大衆が我々の主張を聞かんとしてわが黨の演說會に潮の如く押し寄せて來るが、我々の言論は常に官憲の手によつて封ぜられる』ことを指摘し、なほ進んで、『現在大衆の意識は、それにも拘らず、我々の沈默を通して我々の眞意を理解し得るまでに成長して來た』ことを言ひかけた時、臨監の田村日比谷署長の聲は、不意に『中止ッ！』と叫んだ。かくして私は、まだ本題に入らない先きに、私の演說を斷たれたのだ。その間僅かに約十分。

しかも私は、私がそこに現れたことが決して無意義に終らなかつたことを喜んだ。まづ第一に私は、私の演說中言葉の切れ目切れ目に、滿場の聽衆から嵐の如き拍手を送られて、大衆の支持がわが黨の上にあることを確めた。第二に私は、――それは翌朝のことではあつたが、――私の未了の演說が中止された場所までの速記が東西兩『朝日』に掲載されてゐたのを見て、勞働農民黨員の言論が如何に官憲の不可解とまで思はれる暴壓の下におかれてゐるかに關して、一の典型的實例がその點に不案內な公衆に示されたことに對して、或る滿足を感じた。東朝主催の演說會場を辭した私は、その足で東京驛に赴き、數百名の黨員たちに見送られて、感涙にむせびつゝ再び香川縣の戰場に向つた。

翌日香川縣に着くと、私はそこでの形勢が更らに惡化してゐたのを見た。それは政友會が三名の候補者中の一名を選擧場裡から引退せしめたことによつて一段と陣容を固めてゐたこと、並に豫てから今度は出馬しないやうに噂されてゐた日勞黨の藤本金助氏が何時の間にか立候補することになつてゐたことからである。そこには、わが黨に對する政友會と民政黨との陰謀的妥協の存立が推測し得られる根據もあつた。政友會と藤本日勞黨候補との關係について專ら流布されてゐた風說の必ずしも絕對に否定は出來ないのではないかと考へられる理由も、私には認められた。だが、さうしたことは、我々には寧ろ小問題にすぎないものであつた。我々にとつての主要問題は、我々の敵が三土藏相だといふことであり、從つて彼の必勝の確保のためには、、、による强烈なる彈壓が我々の上に臨んでゐたといふことであつた。

さうした事情の下に、來るべき私の落選の運命に關しては、その頃から略々見通しがついてゐた。それにも拘らず、我々はあくまで彈壓に抗爭して、最後の瞬間まで戰ひ拔かうと決心した。そしてその決心は實現された。

五　一命を大衆の手に托して

二月七日には、再び記念すべき日が私を見舞つた。私は、その日の午後、大阪毎日新聞社主催の下に大阪市中之島公會堂に於て開かれた八大政黨代表者立會演説會に出演の機會を與へられたのだ。

その日、私の外には、革新黨の田川大吉郎氏、政友會の三土忠造氏實業同志會の武藤山治氏、民政黨の床次竹二郎氏、社會民衆黨の鈴木文治氏、日本勞農黨の杉山元治郎氏、日本農民黨の北山亥四三氏が、順順に同じ演壇から叫んだ。

香川縣から演壇に向つて直行した私は、疲れきつた軀を提げて、今度もまた最後に聽衆の前に現はれた。と、滿場の拍手と喊聲とは突如として怒濤の如く起り、堂もゆるげと鳴り響き轟きわたつて、私は五分間ほど壇上に突つ立つたまゝ、一語も口を開くことが出來なかつた。何といふ凄ざましき光景だ！　それは無論私一個人に與へられた歡呼ではなくて、私が代表することを許されたわが勞働農民黨に對する大衆の支持應援の表象であつた。さう考へたとき、私の心は限りなく踴躍して、壇上に倒れても敢て辭さないどころでなく、ならば私の魂を引きちぎつて、聽衆に投げさゝげたいやうな心地にさへなつた。

それから私は連日連夜の疲勞を全然忘れてしまつて、渾身の力をこめてあらん限りの聲を振り絞り、私の前面から緊張しきつた注意を私に投げかけてゐた滿場の聽衆に向つて、血を吐く思ひで呼びかけた。私は『政治的自由獲得への進出』の題下に、私が東朝主催の演説會で述べようとして述ぶることが出來なかつた論旨を、そこに全的に展開した。私は、わが勞働農民黨が今度の總選擧に臨んで掲げた中心スローガンである『勞働者に食と仕事を與へよ』、『働らく農民に土地を保證せよ』、『すべての人民に自由を與へよ』、『田中反動政府を倒せ』を基調として私の論歩を進め、わが黨が如何なる政策を提げて、勞働者・農民・無產市民の生活と自由とのために、いま如何に血みどろの闘爭を戰ひつゝあるか、また如何に鋼鐵の如き決心を以て、その闘爭を最後の勝利にまで戰ひ拔かうとしてゐるかを、次々と疊みかけて絶叫した。

私の演説は四十分間ばかりつゞいた。そして今度こそは、聽衆の熱烈を極めた聲援によつて、中止を受けずに無事に終つた。私は再び、その場面の全光景に關するこれ以上の敍述を、その翌日の『大每』の記事に讓らう。それからまた、私の演説の內容は、大每社出版の演説集に出てゐるから、こゝではそれを再現しないことにする。

だが、私が會場を出たとき、そこに何といふ凄絶な情景が私を迎へたか！　會場內から雪崩れて出た雲霞の如き群集は、豫ねてから會場

外に待ち構へてゐた數千の群衆と和合して大渦を卷き、大江橋から迄し立てゝくれた自動車に乘つた私の周圍で、勞働農民黨と私とのために萬歲を連呼して、折柄蒼然たる暮色につゝまれて居た中之島公園の天地を震撼せしめた。私はその時のことについて、これ以上何も言はないであらう。また若しそれが私一個人に與へられた歡呼の聲であつたなら、私は始めから何も言はなかつたであらう。だが、それは明白に、私がその日何等の幸運にめぐまれてか、私の身を以て代表することを許されたわが勞働農民黨に向つて惜しみなく與へられた大衆の支持應援の美事な表現であつたことを確信せしめる理由があるが故に、私は敢て玆にその狀況の一端を髣髴せしめようと試みたのである。

私がかく書いてゐる時でさへ、私の心は感激にふるへてゐる。ましてその實際の場面にあたつてゐた時は、私の感激はまさに最高潮に達してゐた。で、その或る瞬間に私はふと、

『一身一命を大衆の手に托して、最後まで正しく戰ひ進まう！』

と、心のうちで叫んだ。その感じは、今も尙ほ、私の心の底に活きてゐる。それは必ずや、私の生のあらん限り、そこに活きつゞけて行くであらう。

その夜は、私は大阪府第五區に於けるわが黨公認候補の同志野田のためにニ個所で應援演說をなし、終つて夜汽車で香川縣に向つた。車中野警がつゞいて眠れなかつた間、私は絶えず心のうちで、

『一身一命を大衆の手に托して……』

を繰り返してゐた。

六　彈壓雨下

香川縣第二區が如何に今回の總選擧期間を通じて全國の注目の標的となつてゐたか？　そこでは如何に全國に於ける最激戰地の一つとして全情景が遺漏なく發露されてゐたか？　また香川全縣下にわたつて如何に强烈なる、、、、がわが勞働農民黨の上に無制限に雨下されたか？——

かうした諸點に關しては、少くともその概要がブルジョア新聞紙上にも傳へられたから、私が玆で特にそれに立ち入る必要はあるまい。尤も、ブルジョア新聞のそれに關する記事は、その實況の萬一をも髣髴せしめなかつたといふことは事實だが、しかしそれを詳細に如實に再現することは、私にも出來ないことでもあり、またすることを欲しないことでもあるのだ。

で、私はそれに關しては、あまり多くを語らないであらう。だが、私は同時に、官憲による彈壓だけが今度の選擧戰を通じて我々の行く手に立ち塞がつた唯一の難關ではなかつたことを、序ながら附け加へ

ておかなければならぬ。即ち、それと并行して、例によつてわが勞働農民黨に向けられた型通りの逆宣傳が、――常に下等な對個人的誹謗中傷も交へられて、――そこにもこゝにも盛に飛ばされた。更らにまた、、、の暴力の利用による惡どき潜行運動が反對黨によつて縱横に行はれた形跡のあつたことも、さういふ地下的活動には全然無緣の學生である我々によつてすら、鋭く感知された。要するに我々は、今度の選擧戰を通じて、骨の髓まで腐爛しきつてゐる既成諸政黨の醜き世紀末的諸形相を、我々自身の眼を以てまざまざと見て來た。さういふことのすべては、官憲の、、なる權力の行使と共に、資本主義沒落期に於ける支配階級の内部構造の、、によつて醸し出された膿汁の如きものでなくて何であらう！

だが我々は、支配階級の自由處分の下におかれたるさうした巨大なる、、、、、、、、、、、、の效力が比較的に少くしか反應しないところでは、無數の大衆がわが勞働農民黨に寄せてゐる共鳴・信頼・支持・應援の、如何に自由に、如何に眞摯に、如何に率直に表現されるかを見るときに於て、我々の現在の惡戰苦鬪が、いつの日か豐熟せる無量の收穫を以て酬ゐられるべきことを、確信を以て期待することが出來るのである。

わが勞農民黨に、全國を通じて一律に、すべての無産黨中、最も直接的に、最も辛辣なる彈壓の鋒に當らしめられたが、しかもそれが特に香川縣に於て最も集中的な實例を示したこともまた事實である。

何故さうだつたか！　それは問ふだけ野暮だ。由來香川縣は政友會が多年金城湯池と頼んでゐたところの最も堅固な地盤の一つであつた。しかるに昨秋の縣議戰に際しては、政友會に對して――民政黨はじめ一切の爾餘の既成諸政黨に對してもさうだが――調和不可能の仇敵であるわが勞働農民黨が、新たに猛然として擡頭して來たのが見られた。そこへ持つて來て、今回の總選擧に當つて、運命はわが黨をして、田中反動内閣に今を時めく三土藏相を敵方の直接の代表者として、向ふに廻はして戰ふに至らしめた。政友會がその使用し得る限りのあらゆる、、、、わが黨の陣營の上にのしかゝつて來たのは、もとより決して偶然ではないのだ。

わが黨は、昨秋の縣議戰に於て、多くの人々には意外に思へたほどの好成績を擧げたとはいへ、今回の總選擧に於ては、その時とは比較にならないほどの大規模の戰ひを戰はねばならなかつた上に、わが黨をめぐる諸般の情況も、その時とは多くの點に於て可なり相異したところもあつた。特に、反對側に立つてゐた政民兩黨が、おそらく彼等の間に取り交はされた陰謀的協定によつて、彼等の候補者の數を緊縮

に制限し整理してから後は、わが黨は當初の豫期よりも餘程多數に出て得票をあげなければ、必勝を期待することができないやうな狀態に陷つた。從つてわが黨は、黨が最も信賴してゐる支持團體の一つである日本農民組合以外にも尙ほ、各農村の未組織農民大衆および都市の小市民層の間に於ても、相當多數の投票を獲得することを絕對に必要とするに至つた。

しかもその目的のためにわが黨が用ひ得る唯一の武器として賴んでゐたものは、實に活潑なる言論戰以外の何物でもなかつた。ところが我々の言論戰は、官憲の、、、、、、、、、、、によつて、殆んど完全に蹂躪されてしまつたのだ。東京から遙々と應援に來られた長谷川如是閑氏が、『これで大山氏が當選すれば、默つて突立つてゐる琴平神社の石燈籠でも當選するだらう』と述懷されたのは（『我等』本年三月號『編輯室から』欄參照）、當時の香川縣第二區に來て見た誰れもの實感であらねばならぬ。

七　新恐怖時代

我々の政見發表演說會の上に加へられた『注意』、『中止』、『解散』の如何に狂暴を極めたものであつたかは、ブルジョア新聞を通じてさへ、少くともその一端が一般世人に知られてゐる。我々の應援辯士中には『諸君』といひ出したばかりで、直ぐに中止を喰つたものもある。第一區の上村候補は、論旨が普選法に觸れるや、忽ち中止に會ひ、それに憤慨して臨監にその理由を詰ると、直ちに退場を強制され、更らに檢束を加へられた。私自身は或る時など開口數分間にして『勞働農民黨の本質を說かう』と言つたところで中止に會ひ、同じくその理由を糺さうとして、退場（閉會後であつたにも拘らず）を強制された。かうした實例は、幾ページを重ねても書き切れないほど澤山ある。だが、今それらを一々玆に持ち出す必要はないであらう。それよりも寧ろ私は、應援辯士の感想の一代表として、ふたゝび長谷川如是閑氏の言葉を次に引用する。

『最初の一回は、少しむづかしい事を黑板を使つて「これと、これが」などゝいつてやつたので無事に濟んだが、其あとの分は悉く三分としやべらないうちに中止された。少しも中止され相なことをいつた覺えがないから、何をいつた爲に中止されたのかよく判らない。一度などは、ちつとも不穩なことをいつた積りでなかつたのに、「中止」と叫ばれて、思はず「オヤ」と大きな聲を出したので聽衆に笑はれた。

『最後の日の丸龜では夥しい聽衆で、それが甚だ熱心らしく感じられたので、今夜こそは無事にやりたいと思つて「今晩は普通の學術

演說と全く同じ內容のことをいふのだから警官も中止されまい」といつたらそこで「中止」された。聽衆が憤慨して私を圍んでわい〳〵いつた。そこで私がその人達に何かしやべると「檢束」といふことをされるのだといふことをきいてゐたので、たゞその人々のいふことをきいて「ありがたう」といつた。

『かういふ狀況の下に於ては、人間の言葉で演說するよりも、犬にでも吠へさせた方が餘程効果がある。それでも「中止」するなら犬の皮で張つた大皷をかつぎ出してドン〳〵叩いた方が、主義が徹底する。』（『我等』本年三月號卷頭言參照）

更らに京都から態々來援された河上肇氏は、私への私信——發表することを許されるであらうと思はれる部分だけを取る——に於て、『私自身はおかげで一ヶ年の讀書にまさる學問をいたしました』といひ、更らにそれにつゞいて、——

『大兄が香川から立たれたことは決して無意義ではなかつたと思ひます。らく〳〵と都會から當選されたならば、われ〳〵に問題——解決さるべき問題——の重心を見誤まる事に至るかも知れません。

『十九日の夜は水谷、山本兩君のために疲勞しつくしたからだを演壇に運びました。が、香川とは全く空氣が違つてゐます。あんな風の演說會へなら何遍出演しても私は考へさせられることが無かつたらうと思ひます。

「しかし貴地の情勢は殘念に堪へなかつたので、昨晩までは全く寢附かないでゐました。大兄落選の報を見て、急に全身の疲勞を覺え、昨日は全く無力でした。今日は元氣を恢復しました。……』

と書かれてゐる。河上氏がいづれかといへば蒲柳の質を以て、當時全香川縣を支配してゐた陰惡凄愴を極めた空氣の中に異常に神經を苛だたせながらも、四五日間も我慢して幾回も應援演說の勞を取られたのは、私をして衷心からの感謝に堪へざらしめたことであつたが、しかし氏をそれほどまでもの疲勞狀態に陷しいれたものは何であつたか？それを考へると、私は今でも血を沸かさずには居られない。

さうした彈壓は、投票日間近になるに從つて次第に猛烈さの度を加へて行つた。演說會場で濫發される『注意』や、『中止』や、『解散』の如きも、その頃では最早、段々と慣行によつて寧ろ些事だと考へられるやうにさへなつた。我々の運動員や勞務者で、戶別訪問とか個々面接とかの如き選擧違反の嫌疑を口實として警察署や檢事局に召喚されるものが引きも切らずに出て來て、忽ちその數が見當もつかない位大きなものになつた。或る日の『大阪朝日』はそれを無慮五百と註したと、私は記憶してゐる。また東京およびその他の諸地方からやつて來た應援辯士たちは、殆んど全部が、、、、といふやうな封建的な取り

扱ひを受けた。我々の選擧事務長すら、或る短き期でこそはあつたが、全然我々の間から見失はれたことがあつた。私自身にしても、屢々宿の一室に一人ぼつちで殘されたきりで、しかも事務所へ行つて見ても人ッ子一人も見出せなくて、まるで手足を捥がれたやうな目に合はされたことさへあつた。そして、私の宿の階下に始終詰めてゐた、、、、、は、私にたまらなく鬱陶しい感じを與へることを誤らなかつた。

かゝる手段によつてあくまで、、、に與へられた恆常的彈壓は、一方に於ては、わが黨の言論戰を極度に攪亂し、黨員たちの行動を嚴密に束縛し、その日々の生活の陰影を暗澹たらしめたと同時に、他方に於てはまた、全縣下に亘つて、わが黨の方向へと歩み寄りかけてゐた多數の選擧人たちを、、して後退せしめる効果をも擧げた。かくて、後難を恐るゝあまりに勞働農民黨から背き去つた人々も少からずあつたことは、我々が縣下の各地の人々から幾度となく說き聞かされたことであつた。

で、そこには、少くとも事わが勞働農民黨に關する限り、言論行動の自由は極端に抑塞され、尋常一樣の些事にまで、、、、、が不斷に暗示され、在來のブルジョア的解釋による、、主義の精神すら、完全に跡方もなく影を潛めた。あるものはたゞ、、、、の中世紀的・封建的乃至、、、的・歪曲解釋およびその假借なき適用のみであつた。一言にしていへば、そこには、、、、、ともいふべき時機が突如として縣民の前に出現した。そして、事は選擧後に屬するが、縣下の日本農民組合中から自殺者および自殺未遂者を各々一人づゝ出したのは、その貴くも痛ましき犧牲者の、、、されたものとして見るべきものであつた。すなはち、我々が探聞したところに依れば、彼等は選擧違反の罪名の下に警察によつて彼等に加へられた、、處置を恨んだあまりに自殺を遂げたもの、もしくは企てたものであつた。

かゝる事態の發生によつて、我々は何を考へさせられたか？　我々は何よりも殊に、さうした、、政治を通じて、現代日本のブルジョア政治が持つところの、あまりにも濃厚なる階級的、、、を見た。我々は屢々最近のブルジョア新聞紙上に、『選擧の自由公正』といふ言葉が用ひられてあるのを見る。時としては、田中反動內閣の閣僚さへも、そんなことを言つてゐた。だが、日本の全人口の最大部分を構成する無產階級の立場から見て、どこに『選擧の自由公正』があるか？

いはゆる普選法そのものも、その中に供託金の規定とか、性および居住年限による制限とか、煩瑣極まる罰則とかを含むことによつて、著るしく選擧の自由公正を奪つてゐる。ところが今日では、その普選法の中に僅かに片鱗だけを示してゐる選擧の自由公正の保證らしき餘

項すらが、治安警察法の、、によつて、散々に蹂躪されてゐるのだ。たとへば、その普選法の第百十六條には、官吏の職權濫用による選擧干渉が三年以下の禁錮を以て罰せられることが規定されてゐるが、しかし我々はそれが如何に、集會・演說等に對する『中止』『解散』『退場』等に關する治安警察法中の規定によつて、、、、、に歸せしめられてゐるかを示す實例を、あまりにも多數に見て來た。ブルジョア學者たちは、選擧法は憲法附屬の法律であつて、立法部の構成を規定するものだから、國家の基礎法の一つとして尊重されるべきものだ、といつたやうな說法をする。ところが、實際に於ては、その國家の基礎法の一つとして尊重さるべき筈の選擧法の一規定が、警察の取締まり用のためにのみ存してゐるにすぎない筈の治安警察法によつて、、、、、、、られてゐるのではないか？　いやしくも、候補者や應援辯士の選擧演說が、、、、、、、、、、、によつて何の理由をも示さずして『注意』されたり、『中止』されたりするところに、どこに『選擧の自由公正』があるといへるか？

我々は我々の政治的自由獲得鬪爭への出陣の血祭りに、選擧法や治安警察法やの徹底的改廢によつて、言論・集會・結社等々の完全なる自由を、無產階級的立場から見ての選擧の自由公正と共に、眞先きに戰ひ取らなければならないことを、しみじみと考へさせられたのである。

八　選擧後に於ける彈壓の續行

選擧期間中全香川縣を吹きまくつた暴壓の嵐は、その終了後にも尙ほ暴れやまなかつた。香川縣警察のその後の遣り口は、一旦、、はつた、、が猛りたけり狂ふさまを偲ばしめるものがある。

何故に彼等はかくも執拗に暴壓をつゞけるのか？

彼等は選擧期間中、思想取締の名目に下に於て、盛にわが黨員たちの上に彈壓の手を下してゐた。それから推して考へると、彼等が今日に至つて尙ほその手を緩めないのは、同縣下に於けるわが勞働農民黨およびその支持團體である日本農民組合の勢力の絕滅を期してゐるからであるのかも知れない。

だとすると、過去に於て絕え間なき彈壓の試錬の下に成長して來た黨や組合やの勢力が、その彈壓の加重によつてどうにかされようなどと考へる愚かさは寧ろ憫笑に値ひするともいへようが、しかもその小生意氣な、、意圖は、、、、、、、、、おかれるべきでない、といはなければならぬ。

我々は今頻りに、その對策を講じつゝある。もとよりそれは、まだ玆で發表ができる運びにまでは立ち至つてゐないが、しかし彈壓續行の事實に關聯しては、我々は次に、最近香川の同志の一人から東京の

同志の一人へ寄せて來た書信を公開しようと思ふ。（書信中の字句には僅かばかりの修正を加へたが、文意は全然もとのまゝだ。）

全國の兄弟よ、香川の同志を救へ！

今兄弟は、、、、にされてゐる。選擧期間を通じてのわが香川縣下に於ける彈壓は、かつて何處にも見られなかつた狂暴さであつた。

選擧は終つた。しかし彈壓は選擧と共に終りはしなかつた。十八の兄弟は、今尚ほ、、、、、、、な檢束によつて、あちらこちらと盥廻はしにされ、、、扱ひを受けてゐる。期間の最も長きものは既に二十日に及んでゐて、短きものも六日だ。

(a) 廿四日（二月）の政戰批判說演會でやられたものは次の通り。

〔書信には十名の姓、居住地、摘要が記載されてゐるが、省略する。〕

(b) 廿七日高松市での演說會の前後にやられたもの。

〔六名の姓、居住地、摘要が記載されてゐるが、省略する。〕

(c) 廿九日上村氏の公判廷からやられたもの。

眞屋卯吉（香川縣黨支部聯合會執行委員長。）——六日夜釋放。

——一切の會合に出席してはならぬとの條件附き。

(d) 三月一日上村氏公判廷からやられたもの。

藤澤平太郎（香川。）——來歸。

(e) その他。

〔二名の姓、居住地、摘要。——省略。〕

右のうち釋放・追放されたもの八名。あとの十二名は何時歸るか不明。、、、、、、、は「選擧熱の冷めるまで」と言つてゐる。

檢束の理由。

眞屋氏の分。——上村氏の起訴に關係のある事件の起つた際、眞屋氏は同席してゐたので、廿九日在廷證人として證人申請をしたが、檢事はこれを却下した。それは、氏が事實をよく目擊して居たし、また眞相をよく知つてゐるので、證人に立たれたら、上村氏に、、、ふることが出來なくなるから。

藤澤氏の分。——氏も上村氏が中止になつた晩同席してゐたので、在廷證人として廿九日に申請したが、それも却下された。警察は同氏をも檢束する心算で血眼になつてゐたが見當らず、同氏は一日の公判廷に紛れ込んでゐたので、再び證人の申請をしたところ、その日も檢事は一應却

下したが、遂に取調べを受けることになり、被告に有利な證言をしたので、公判廷を出ると、直ぐに、、された。

他のものに對しては、大衆行動を企てる虞れがあるといふのが理由である。また、他縣から來てゐたものに對しては、警察側は『危險思想の宣傳に來てゐるからだ』と言つてゐる。

香川の同志、朝倉、宮井、羽原、杉澤、爲廣氏等に對する取扱ひは實に殘虐で、彼等は事實、、、にされてゐる。病弱な朝倉、宮井君等は、、かも知れない。

同氏等は、一昨日からハンガー・ストライキをやつてゐる。これらの事情に對し、應急策を講じようとしても、組合の有力な幹部の家の附近には、、、、、り込んでゐて、手紙さへ出せない有樣だ。兄弟よ！ 諸君の力によつて香川の兄弟を救つてくれ！

香川の縣民たちも、この警察の、、、對し、極度に憤慨してゐる。

〔以上、三月六日附の書信〕

……三月一日からやられてゐた藤澤平太郎氏は今（八日午後二時）歸つて來ましたが、、、、、、に於て、勞働農民黨脫退の聲書を、、、に書かされたさうです。若しそれを、、ば何時までも出さないと言つたのださうです。『國居明吉さんは書いたのだから、諸君も書け』と言つて、實は國居さんはそんなことをしてゐないのに、、、、、、、せたのです。、、は各支部を廻はつて、『とこの支部も解散したから、この支部も解散してしまへ。でないと、いつ人のために、、、られるかも知れないが、その時は、、は知らないから、さう思へ』と言ひ歩いて居ます。やられてゐる人々はハンガー・ストライキをやつて反抗してゐるが、人間のからだ故、何時まで續くか判りません。……

〔以上、三月八日發の書信。〕

讀者諸君！ 私は諸君に、香川縣の暴壓の實情に關して、普通のブルジョア新聞によつて傳へられてゐるそれよりも、より具體的な概念を得ていたゞきたいと考へたので、少し長すぎると思ひつゝも、以上二つの書信の拔萃を掲げたのだ。さうしたものを讀んで憤慨しないものは、無產階級解放運動を語る資格のないものだといはなければならぬ。

九 『田中反動政府を倒せ！』

それと同時に、諸君は以上の記述によつて、勞働者・農民・無產市民

の生活と自由との切實なる要求を提げて敢然と資本家地主の政府に抗爭するわが勞働農民黨が、勞働者農民の政府の實現へのその途上に於て、現在『政治的自由獲得』の旗印を高く揭揚してゐることの絕對的に正當なる進み方であることを、充分に理解されたであらう。我々は今『勞働者に食と仕事を與へよ!』『働く農民に土地を保證せよ!』と要求する。と同時に、我々は更らに高際に『すべての人民に自由を與へよ!』と叫ぶ。そして我々は、現在刻一刻と反動的流れに深入りしつつあるすべての既成諸政黨に對して絕えず猛烈に挑戰してゐるものであるが、特に當面その現實に把握してゐる政權を、直接に無產階級への、、、、、、、とのために縱橫に振り廻はしてゐる現内閣に對しては、『田中反動政府を倒せ』のスローガンを投げつけて、眞ッ額からまつしぐらに、火の出るやうな突擊を試みつゝあるのだ。

香川縣で我々が今度の選擧戰を通じて受けた彈壓の如きは、それ自身としては如何に激烈を極めたものであつたにもせよ、實はこの田中反動政府の、、支配の末梢的一部分をなしてゐるにすぎないのだ。もとより我々は、それに對しても鋭意對策を講ずることを怠るものではないが、しかし同時に我々は、その根本の主力である田中反動政府そのものに向つて斧鉞を加へることを以て、一層重要なる任務と心得てゐるものである。現在その、、、、、、に頼つて全民衆の生活を、、し自由を剝奪——香川縣に於てはその最も露骨な實例が見せられたまでだ、——しつゝあるその田中反動政府こそは、勞働者農民を始め、全民衆の當面調和不可能の共同の、、である。我々は大衆の正當なる憤激を最も合目的的に組織して、極力それが倒壞の促進に當らなければならぬ。この肝要な仕事を一日も早く完成することこそ、今やわが勞働農民黨の如き最も戰鬪的な階級的大衆黨の肩上に課せられた最も喫緊の急務であると同時に、更らにまた、それはわが黨が最近香川縣で得たばかりの生々しき經驗を最も適當に活かす途であらねばならぬ。いかにも我々の進路は、決して坦々たるものではない。それは荊棘の路である。だが、『激流に抗して意氣ますます壯烈!』今こそ全勞働農民黨員は、この精神で奮ひ起つてゐるのだ。そして、この當面の烈しき鬪爭を、あくまで最後の勝利にまで戰ひ進めようと、固く決心してゐるのだ。されば讀者諸君!私は諸君がこの鬪爭の全意義を正當に把握して、そのために諸君の自由意志から出た强大なる協力の手を我々にさしのべられんことを、衷心から切望してやまないものである。——完——

足尾血戰記

麻生久

（一）陰鬱な總選擧

記念すべき普選第一回の總選擧は二月廿日を以て其幕を閉ぢた。

今回の總選擧は、其性質上から云ふならば極めて明かるかるべき筈だつたに拘らず、實際上は稀に見る陰鬱至極なものであつた。

政權の爭奪以外に政治なしとする政友會内閣は、常に世間に向つて公言しつゝあつた如く、與黨候補者を當選せしめんがためには、既に總選擧以前に盡さゞるなき準備をとゝのへたのである。府縣知事、警察部長等の露骨な交迭は勿論、下つては警察署長より一巡査に至るまでの大異動を行つた。

斯くの如くして世間は、未だ選擧の始まらざるに、早くも一大干渉の行はるべき事を暗示せられ、官憲の彈壓が徹底的に來るべきに戰いた。解釋さへ一定せぬ多枝多端にわたる選擧法の末節は、官憲の手心一つで野黨を壓迫干渉するに十二分の好武器である。明かるかるべき總選擧は未だ幕を開かざるに先だつて早くも重くるしい陰鬱な雲に蔽ひ去られたのである。

果せる哉、一度選擧戰が開始せらるゝや、野黨の言論は極度に壓迫せられ、選擧干渉の聲は全國津々浦々から聞こえ始めた。

併しながら、政友、民政兩黨間の戰ひは、干渉と稱し、壓迫と叫ぶも、夫れは要するに既成政黨同士の事に過ぎない。誰か烏の雌雄を知らんやである。たゞ、我々無產黨の戰ひに至つては眞に言語に絕するものがあつた。

官憲の彈壓が如何に無產黨に對して辛辣になされたかは今更云ふまでもない。言論の壓迫は、單に注意中止の連發に止まらない。やゝもすれば、政見發表演說會は解散せられ、檢束せられ、甚しきは不法にも拘留に處せらるゝ狀態であつた。

併しながら、我々を彈壓したものは、單に官憲に止まらない。而し

て又我々が當面の敵として戰つたのは既成政黨に止まらない。總選擧に直接關係なき資本家地主等も亦、渾身の勇をふるつて我々の迫害に熱中したのである。事茲に至つては選擧戰は單純なる投票戰ではない。純然たる階級戰と化し去つたのである。

今回の選擧法は買收行爲を嚴格に禁じてゐる。併しながら、其實際に於て全然買收の行はれざるところが何處にありや。投票日の迫れる十七日頃より、殆んど買收は公然と行はれたりと云ふも過言ではない。既成政黨は十七日頃より無意味なる演說會を無數に開き、徒らに辯士を羅列して甚しきは聽衆四五名を相手にして夜一時二時頃まで繼續せる狀態であつた。彼等の目的とする處が演說會に非ざるは勿論である。さらでだに手不足の警察官を演說會に集中せしめて、其監視の至らざる隙に乘じ盛んに買收を行つたのである。演說會は警察官つなぎの一手段として使用され鬼のゐぬ間に、大びらで買收戰をやつた譯である。

官憲の干涉、言論壓迫もさる事であるが、更に深刻にして陰慘な彈壓は、大資本家が直接に加ふる經濟的迫害と、既成政黨の、、行爲に如くものはない。一度或る一地方に、、の手が延ぶるや、其地方の心理狀態は忽ち一變して、昨日の明るさは何處にか消え去り、陰鬱な空氣に閉されて青菜に鹽をぶちまけた如き觀を呈するに至るのである。其狀態は恰かも惡魔の魔酒に吸ひ寄せられて毒盃を唇にするが如きものである。多きは、、、、少きは、、より、、に至るまで千差萬別。私は今度始めて此不可思議な狀態を目擊して眞に其意外なるに一驚を喫せざるを得なかつた。而も大資本家が其金の威力を發揮して經濟的に勞働者を强壓し、其町を迫害し、完全に既成政黨と握手して總ての人々の自由意思を蹂躙しながら、匕首を胸につきつけて其投票を奪ひ去るに至つては其陰慘なる到底表現すべき言葉を知らない。

私は、今回の總選擧に於て、栃木縣第一區より立候補して、此陰慘にして深刻な經驗を滿喫するを得た。

私の選擧戰は單に、代議士たらんとするための選擧戰と云ふ事は出來なかつた。私の敵は、長年同選擧區に蟠居して牢乎たる地盤を有する政民兩黨の候補者諸君ばかりではなかつた。足尾銅山の所有者、、鑛業所と栃木縣政友會支部長にして大谷石材の大御所たる、、、氏こそは、更に深刻にして必死的な、候補者ならぬ選擧戰の相手であつたのである。

私は多くの同志と共に必死の戰ひを續けたのであつたが見事に落選を遂げた。

私に問ふ者がある。『君は何故にもつと安全な選擧區を選ばなかつたか。惜しい事をした。』と。併しながら私は此私に對する同情深き言葉

に對して深く感謝の意を表すると共に夫れに對しては次ぎの言葉を以て答へたい。『栃木縣第一區には、過去十年の間、よきにつけ惡しきにつけ、共に深刻な苦勞を分つて來た兄弟が私を待つてゐた。假令當選に對しては危險であつても、未だ戰はざるに夫れを棄てゝ他に走る事は出來ない。夫れは少くとも勞働運動者としての私の良心である』

私は見事に落選を遂げた、戰ひには勝つたけれ共選擧には敗れた。私は多くの同志と共に衷心から光榮ある落選を祝はなければならない。私は敗れたる私の、戰ひに對する、官憲の彈壓や、既成政黨の醜惡や、資本家の暴逆やに對して徒らに愚痴を並べんと欲する者ではない。激烈なる階級戰に於ては、斯くの如き事は將來に於ても常に我我の覺悟しなければならないところであらう。

併しながら栃木縣第一區に於て行はれた私の選擧戰の實際を明にして、滿天下の輿論に訴ふる事は決して單なる愚痴と云ふ事は出來ないと信ずる。私は以下、私の選擧戰の實際を摘記して無産黨の選擧戰が如何なるものであつたかを明かにしやう。

(二)　足尾の血戰

(1)　昨年の縣會議員選擧に於ける會社側の慘敗

今回の町會選擧戰に於て、、、鑛業所は全力を傾注して私の叩き落しを策したのであるが、政治運動上に於ける、、鑛業所との戰ひは今回を以て始められたのではない。その第一回は大正十四年に行はれた町會議員選擧を以て其發端となすのである。此町會選擧に於て日本勞農黨足尾支部は一擧に七人の町會議員を選出して會社側を驚嘆せしめたのである。而も町會に於ける七人の行動は常に正しく足尾に於ける無産階級の利益を代表して屈する處なく會社側との戰ひを續け來つたので、町民の大多數は日勞黨の共鳴者となり、會社側をし漸次に不利の地位に立たしむるに至つた。足尾支部は七人の町會議員を中心にして不斷に日常鬪爭を行ひ、其勢力は愈々伸張し、昨年九月の普選に依る第一回の府縣會議員總選擧に於ては、町會議員にして最高幹部たる石山寅吉君を立候補せしむるに至つたのである。

足尾は、大正八年鑛夫組合が設立せられて以來、眞に我等の血と牢獄とを以て築き上げ來つた勞働階級の一大堅城である。今や其勢力が單に勞働組合のみに止まらず、時代の進展と共に政治的に伸張して、其勢力下より縣會議員を送らんとするに至つては、會社側も拱手傍觀するを得ない。一度石山君が立候補を宣言するや、會社側も亦直ちに一役員を選んで立候補せしめ石山君の叩き落しに狂奔するに至つたのである。

併しながら縣會議員の戰ひに於て、會社側は自巳の金權を自負する處多くして、石山君の落選を確信して疑はなかつた。從つて其戰ひも激烈ではあつたけれ共、必死の努力を致す程には立ち至らなかつた。這般の事情は、開票當日、開票に先だつて會社側の幹部等が、某料理店に會合して會社側候補者の勝利を確信しながら前祝ひをなしつゝあつたに見ても明かである。

併しながら刻々に至る開票の結果は、彼等の豫期に反して、會社側候補者の慘敗を示し石山君は見事に當選を遂げた。彼等が頼みにした足尾銅山の得票は、石山君、一九〇〇の多きに反し、僅かに一三〇〇、而も、更に彼等にとつて悲慘な事は、彼等が模範工場として其票數を頼みにした日光製銅所の票を含む日光町の得票が僅かに八〇に足らざるに反して石山君の得票は五〇〇を突破した事である。此報一度達するや最高幹部の一人は自己の耳を信ずる事が出來ず、數回にわたつて開票場に電話をかけ、遂に交換手の叱咤を蒙つたとの事である。前祝ひの宴會場は忽ち白けわたつて敗戰の離宴場と化し去り、某最高幹部の怒聲罵聲は宴會場を遂に修羅場と化せしめたとの事である。

當時、會社側の幹部中には、時代の推移を考慮して、會社は經濟的經營に主力を注ぎ、政治に對しては中立を可とすべきを主張する者もあつたとの事であつたが、事玆に出でずして、四億五千萬の富を背負ふ、、は、自己の使用する勞働者と直接對抗して一縣會議員を爭ふに血道をあげたのである。

斯くの如き事の是非は之れを第三者の批判に委するとして、、、鑛業所のなせる事實は正に斯くの如くであつたのである。

(2) 慘敗後に於ける會社側の復讐

以上の如くして脆くも縣會議員選擧に敗れた會社側の懊惱は其面目問題にからんで極めて深刻なる形勢を呈するに至つた。最高幹部は本社に向つて豪語した手前其職を去るべしとの風說が流布せられ、會社側は其深刻な懊惱を醫するために、二つの復讐的手段に出づるに至つた。其一つは足尾町民に對する經濟的威嚇であり、其二つは勞働者に對する鹹百の風說の流布である。

會社は山羊會と稱する一つの購買會を所有して勞働者に月掛けを以て物品を販賣してゐるのであるが、選擧後、會社側は、一切の品物を山羊會に集中して、勞働者をして、、、、、、、、せしめずとの風說を流布せしむるに至つた。之れが石山君に入れた町の投票に對する、、、、、、である。山間にあつて勞働者を唯一の顧客とする憐れな足尾の町にとつては、會社の此經濟的封鎖こそは生死の威嚇でなくて何であらう。而も石山君に對して應援した町の主要なる小商人に對し

ては、更に特別なる魔手を延ばしてあらゆる迫害を企てた。遂に深刻な迫害の魔手は、個人の縁談の上にまで及んで、足尾支部の最高幹部の一人が關係して成立せんとしてゐた縁談の一つは、これがために破壞せられて思はぬ悲劇を演出するに至つた程である。

足尾の町民は、此强壓的な經濟的迫害に對して極度に恐怖し萎縮せざるを得ざるに至つた。而して此陰鬱な經濟的迫害の下に置かれた町民の間からは一つの悲鳴として、

『石山が縣會議員になつたから足尾の町は不景氣になつた』

と云ふ叫びが擧がるまでに立ち至つたのである。石山君は此悲痛な町民の悲鳴に對して、

『若し自分が縣會議員を止めて足尾の町が好景氣になるならば何時でも止めやう。けれ共我々は此横暴にして不法な、、に對しては、我我の政治的自由のために徹底的に戰はなければならない』と應へた。

勞働者側に對する馘首の風說は盛んに流布せられて不安の氣は足尾全山を蔽ふに至つた。併しながら、多年會社の暴壓と戰ひ抜いて來た勞働者は、會社側の威嚇に屈せずして愈々潑溂たる活氣を發揮したのである。

既に戰はざるに先だつて斯くの如き不安と陰鬱とにとざされた足尾を唯一の根據として、私の栃木縣第一區に於ける選擧戰は開始せられたのであつた。

(3) 私の立候補と會社側の策戰

一度私が立候補するや、、本社の勞働課は足尾に出張して、全努力を傾注して私に對する對抗と叩き落しに水も洩らさぬ策戰を立てた。

先づ第一に栃木縣第二區に於て會社の幹部秋村光三氏を政友會の公認として、擁立し、萬一の私の當選に對して議會内部の備へを立てたのである。

次で、足尾を中心として私の投票を奪ふためにはなされざるなき策戰が立てられた。其陣容は實に次ぎの如く水も洩らさぬものであつた。

(一) 首を掛けた投票

先づ第一に勞働者の票を私から奪ふために次ぎの如き策戰が立てられたのである。

最高幹部は、直接勞働者と關係ある係役員に對して、左の如く宣言した。

『今度勞働者達の多くが麻生に投票するやうであれば、君達が勞働者に信用のないと云ふ事が立證されるのであるからして、勞働者に信用のない樣な係員は、、、、、、する必要はない事になる。、、、、

を以てやつて貰ひたい』

蓋し、縣會議員の選擧に對して係役員の言の信用するに足らざるを知つた最高幹部は、再び失敗をまぬかれんがために、慘酷にも係役員に對し、、、、、、、、、飛車手王手を以て悲慘なる選擧戰に追ひやつたのである。會社側は先づ斯くの如き陣容をとゝのへてあらゆる手段を盡して私の、、を企てた。

鑛夫組合を切り崩すためには、新たに御用組合を急造して、之れに對抗し、、、、に鑛夫組合の脫會書に捺印せしめて之れを支部に郵送し來つた。其壓迫が如何に峻烈を極めたかは、最後には一千に近き組合員にして脫會書を出さゞる者は百を以て數ふるに足らぬに至つたにに見ても推測するを得るであらう。係役員をして二度三度、『麻生に、、するか否か』を訊問せしめ、『否』を云はざる者に對しては直ちに、、、、、、、其數二十餘名の多きに及んだのである。斯かる者に對しては其罪を三族にまで及ぼして迫害を恣まゝにした。

併しながら其反面に於て、涙ぐましき手紙は頻々として私の選擧事務所に舞ひ込んで來た。夫れは、斯かる會社の殘酷な迫害に依つて首をつなぐために表面會社に降伏してゐるけれ共、心は決して降伏するものでない。投票日には、必ず『麻生久』と書くから安心して奮闘せよと云ふのである。

會社側の深刻にして手段を擇ばぬ迫害のために勞働者は極端に昂奮して不穩の空氣は足尾の山に漲ぎるに至つた。

『おいお前の首は綺麗にあらつてあるか』

『うむ、いつ切られたつてかまはねえや。毎日綺麗に洗つてあらあ。』

此迫害の双をくゞつて選擧事務所に決死の奮闘をつゞくる者達の會話は首の話ばかりである。

斯くの如くして何の普通選擧であり、何の明るき政治であるか!!

（二） 死せる町

町に對する經濟的威壓は愈々深刻の度を增して、流言は流言を生むで町民の間を這ひづり廻つた。『今度麻生が當選するならば足尾の町は廢墟になるだらう。會社は最早一切の手筈をとゝのへてゐる』

たちどころに、『足尾町の平和を維持するために』と云ふ名目の下に會社の手先の發起に依つて團體が組織せられた。何の足尾の平和であるか。會社を擁護するために、足尾町民の一切の政治的自由を奪ひ去つて會社に隷屬せしむる事が彼等の所謂足尾の平和なるものである。

此間にあつて昨年の縣議戰に石山君に好意を寄せたるものは、他の見せしめのために極度な迫害を蒙つて、町民をして勞働者側に近づく者を戚嚇し去つた。此陰鬱極まる空氣の中に、町民は遂に選擧の事を

口にするさへ憚つて、死の如く默する狀態にまで壓倒し盡されたのである。そして其陰欝な胸苦しき抑壓の中にあげ得た最後の悲鳴は實に次ぎの如きものであつた。

『あゝ普通選擧程怖いものはない』

金權の力もこゝまでに立ち至れば其威力も亦絶大と云はなければならない。足尾の町は眞に死せる町となり終つたのである。

斯くの如き狀態を內心痛憤して、私等に心を寄する町の人々がない譯ではない。併しながら之等の人々も此强大なる壓力に對しては如何ともする事が出來ない。一切の會場が會社側に買ひ占められて、演說會を開く事が出來ないからして、止むを得ず好意を有する人の家を借らんとしても、內心は滿腔の同情を寄せながら貸すを得ないで嘆息するばかりである。

（三）ダニの如く會社の尻にぶら下つた既成政黨

會社側が、私を叩き落すためには、單に其投票を私に入れしめない丈けでは尙ほ足りない。之れを既成政黨に入れしめなければならない。、、は元來政友系と見なされ、其幹部松村光三氏は政友會から立候補したのであるが、併しながら、足尾に於ては、會社は萬全の策を持して、政民の候補者に對して等分に援助して其仲間割れを避くるの策戰に出でたのである。其周到なる用意を見るべきである。一度足尾を出づれば大敵もたゞならぬ政民兩黨の候補者が、足尾に於ては、如何に仲よく肩を並べて會社の尻にぶら下りながら日勞黨と戰へる事よ！會社のあらゆる建物を見よ、塀を見よ、電柱を見よ、森山邦雄（政友會）と高橋元四郞（民政）のポスターは必ず二枚宛仲よく肩を並べてはられてゐるではないか!!

栃木縣第一區政友會公認候補、政務次官森格閣下（足尾にはられたビラには閣下と書いてあつた）まで遠く那須の原頭から足尾下りまで出張されて、大雄辯をふるはれた。そしてお土産に、會社から廻された馬車が轉覆して、眼のふちに負傷まで持つて歸られる程の狀態である。此間に於て會社が幾何の×を如何にして散じたか等と問ふ丈け野暮である。

我々の演說會場は一切封塞せられ、其代りに買ひしめられた會社側の會場では、政友會の三位一體の演說隊が、日となく夜となく、日勞黨の惡口專門の演說會を開催し續けたのである。忽ちにして何を憂國するか憂國同志會なるものが生れた。會社側は無數の推薦狀を雨の如くばらまいた。尙ほそれを以て足れりとせない。左に掲ぐる如き馬鹿氣たビラが之亦數限りなくばらまかれた。他所に於ては互に醜惡の限りを盡して嚙み合ふ政民兩黨が、足尾に於ては如何にお互ひをつゝしみ、必死となつて日勞黨の惡口に憂身をやつせるかを見よ！

十六日の夜、諸君は外務政務次官森格氏の獅子吼を聞かれたであらう。

政治の實際に卽し力強く大地を踏みしめて一歩一歩國利民福の增進に努力しつゝある既成政黨は皆この樣に立派であつて、××××××××り、下億民の信託に背くものでない。

獅子の吼と赤犬の遠吠は何れが諸君の胸底に力強く響いたか。

諸君!! 來る二十日には力強き政黨政友會の候補者

森山邦雄氏へ

諸君の一票は是非

森山邦雄氏へ

―・―・―・―

シベリアの荒野を經て赤い國から吹きつける冷い風と、暖かい日本の君子國に醞釀された空氣とは何れが民草の芽生に役立つか問はずして明かであらう。

空吹く風はたゞ聞き流せ

やがて春の女神の出現と共にシベリヤの空風は吹き止むべき運命を有つてゐる。

諸君の淸き一票は春の女神だ。一票の行使に依つて赤く冷たい風を吹き止めさせろ。

政治的立春は二月二十日に迫つた。諸君は擧つて力強き年男として立派な政黨民政黨所屬の高橋元四郎を援助せよ!

―・―・―・―

愈々二月二十日は來た!!

赤鬼の泣言や空念佛にだまされるな

諸君の一票を以て祖國を護れ

既成政黨....力強い立派な政黨

民政黨候補者....憂國の士

高橋元四郎へ　是非〳〵

―・―・―・―

昔足尾に住んで居つた痩狼の一群が遙々都から吾等の生血をすひに來るとか云ふ噂がある。

羊の皮は被つてゐても飢ゑてる狼だ!!

猫なで聲はしてゐても骨までしやぶらねばやまぬ狼の群だ!!

狼の甘き言葉に欺されるな!!

足尾憂國同盟

以上示す如き事態は明かに將來に於ける日本の政治の縮圖に外なら

ない。それこそは明かに無産黨の勢力の増大と共に、資本家と既成政黨とが完全に一體となつて、無産政黨と對立するに至るべき、階級戰の好模型ではないか。

(1) 悲壯を極めた最後の演說會

二月十八日、辛じて選擧戰最後の演說會を私共は足尾の通洞と本山とに於て開催した。此日雪は足尾の全山を蔽ふて、殺氣を帶びた陰慘な空氣は白雪に蔽はれた夜の鑛山町に立てこもつてゐた。極度に緊張した對立のうちに悽慘な氣持は溢れ、演說會の開かれんとする日暮方には、演說會場は勿論山と云はず町と云はず、足尾は演說會の入場者を阻止せんとする、殺面せる如き會社の役員を以て滿され、恰かも戒嚴令下に置かれた如くであつた。彼等手帳を持して其入場者の姓名を記して、、にそなへんと威嚇するのである。此公然たる選擧、、に對して普通選擧を擁護すべき足尾の警察官は何處にありや。既に足尾の警察官は二十日ばかり、耳は聾し、目は盲し、口は啞してゐたのである。足尾の警察官を攻むる勿れ。たゞ四億五千萬の富豪、、に對しては餘りに其建物の輕るきをかこてば足りるであらう。檢事局の一應の警告も何の効力があつたであらう。

鑛業所は、訪問の新聞記者に豪語して曰く

『選擧、、？　そんな事は何でもない』

既に金權の威力を以て、、を無視してかゝつてゐるのである。たゞ我々は、我々に對しては絕大な威力を奮ふ官憲が、足尾に於ては餘りにも微力なるを嘆息するのみである。

通洞に於ける演說會は開會十數分にして解散を命ぜられた。既成政黨に對しては上揭の如き不當なビラを撒布するも不問に附する足尾警察は、一辯士が釋明のためになせる演說を中止し、餘りの偏頗なる處置に思はずコップを机に叩きつけたるを以て直ちに解散を命じたのである。

本山の演說會は眞に悲壯極まるものであつた。見よ！　演說會場の外には我等の幹部と、入場を妨害する會社側の係員との間には、夜闇の中に白雪を蹴立てゝ、至る處に格鬪が演ぜられてゐるではないか。可憐さうに、會社に勤務する安月給取の生活がどうして日勞黨の政策に反對する理由を有するであらう。彼等も亦、、に依つてその首をしめられてゐるのである!!　さうしなければ彼等の首が飛ぶ!!　坑夫の女房達は、會社の迫害に悲憤して、雪の中を物ともせずビラ撒きに八方に走せた。

眞に此夜程悲壯な同志の奮戰に出會した事はない。ストライキ、否、否、夫れは私が十年の長い勞働運動の生活の中で限りなく出會したど

のストライキの夜よりも、もつと深刻な悲痛な窮迫した同志の奮戰であつた。

（三）戰の跡

足尾に於ける私の戰ひは斯くの如きものであつた。併しながら、、の、、は單に足尾に止まらない。政民兩派は、足尾を本據として、、と策應しながら上都賀に於ける私の根據を、、を以て悉くくつがへし去つたのである。

而も私の栃木縣第一區に於ける戰ひ、、、と血みどろの戰ひをなしたに止まらない。河内郡城山村大谷石村の日勞黨支部は、眞に同志の血を以て購つたのであるが、今度選擧戰が始まるや、いち早くも運動け再びその地に於て同志の血を以て染められた。政友會支部長にして城山の大御所、、、、氏の配下の暴力團は我等の運動員を襲つて鮮血に染めた。城山に於ける私の選擧立會人は、敵のために負傷して十數日を病院に暮して、未だ頭のホータイさへとらざる名譽の負傷者であつた。

官憲の彈壓に對しては今更こゝに記すを要しない。既に、、あり、、あり、何ぞ官憲の彈壓を要せんや、彼の大資本家等が經濟力を傾けて壓倒し來る其迫害は、官憲の注意や中止の言論壓迫とは其種類を異にしてゐる。其底力のある事、其陰鬱なる事、其徹底的なる事、實に言語に絶するものがある。矢板に於ける私の演説が中止せられたる時、聽衆の一人は、

『私は六里も歩いて麻生さんの政見を聞きに來たのですから、警部補殿もつと聞かして下さい』

彼はさう云つた丈けで檢束せられて、、、の拘留に處せられた。天下斯くの如き愚劣な壓迫が何處にあるであらうか。併し足尾の壓迫に馴れた私にとつては夫れさへも普通な事の樣に思はれた程私の神經は深刻な迫害に馴らされてゐたのである、

斯くの如くにして戰ひは終つた。而して二月廿日、栃木縣第一區に於て、其根據とするところを無殘にくつがへされて尚ほ且つ此迫害の中に贏ち得た得票は五八一〇であつた。一市四郡、私の顏を知ると知らざるとを問はず、私の聲を聞きしと聞かざりしと問はず、一ヶ町村と雖も多少の投票を得ざるはなかつた。

會社は、足尾の票の麻生に行くは三百を出でずと豪語した。併しながら、見よ！その首と共に麻生久の名を書いた者が足尾に五六九もあつたではないか。大谷の勞働者は極度な迫害と、、の間にあつて縣會の得票を死守したではないか。首と共に書かれた名前が日本の何處にあ

るであらうか。私は眞に感謝しなければならない。そして又私の落選を以て光榮としなければならない。無産階級運動に身を捧ぐる一戰士として眞に夫れは感謝すべきであり光榮とすべきである。

私は當選せんがために栃木縣第一區を棄てざりし事の正しかりしを今にして痛感するのである。我々の選擧戰は單なる投票の拾ひ集めではない。夫れは一つの明かな階級戰である。私は多くの同志と共に熱火の戰ひの中に六千に近き同志を得た事を眞に悦び、眞に感謝し、眞に誇らなければならない。

一度私の落選の報傳はるや、同志の血と涙ににじむ同情と激勵の手紙は雨の如くに全國から集まり今日も尚ほ盡きない。私は、眞の理解の上に立つて私に投票して呉れた栃木縣第一區の同志に對し、更に全國の熱誠なる同志に對して深く感謝の意を表すると共に、更に勇猛して階級戰に臨む事を誓ふものである。

(四) 未來は我等のもの

私の血戰記も既に終りをつげた。私にとつて最も感激深かつた今回の選擧戰の記錄を終るに當つて、私は一つのエピソウドを記したい。

私には、今度の陰惨な選擧戰に於て唯一つの大きな慰さめがあつた。夫れは演說會場にあてられた小學校で、多くの無邪氣な小學生と仲よしになる事であつた。上都賀郡の西方小學校に行つた時にはちやうど學校のひけ時で皆は未だ校庭で遊んでゐた。子供達は私の姿を見出すと皆集つて來て私をとり圍み、

『やあ、麻生久だ、麻生久だ』

とはやしたてゝ呉れた。私は暫時くは演說の事も忘れて皆と遊んだ宇都宮では小學生達が私のポスターは、貧乏人の味方だからはがすなと警戒して呉れた。私にとつて夫れ程悦しい事はなかつた。

今此血戰記を終らんとする時、一通の手紙が舞ひ込んで來た。封を開けば大ぎのやうな小學生の手紙と新聞の切り抜きである。

（手紙）

拜啓御メンクダサレタク、コノタビノタタカイワマケテモヤモエズシカタガアリマセン、コノ新聞ヲ御ランナサイマシ

私儀足尾ノ一人デス

麻生久樣

（新聞の切拔）

僕等に選擧權があれば麻生久氏が最高點

兒童の『選擧ごつこ』

普選最初の總選擧戰は將來に幾多の謎を遺して幕を閉ぢたが此選擧の反映が頑是ない兒童等の純な腦裡にどんな芽生えを見せてゐるか？ 彼等兒童の間に持ち上つた事象に次のやうな話がある。

× ×

宇都宮市某校六年の男生徒等は選擧が終つた後二十四日の晝休み時間、教室に殘つて『選擧ごつこ』の遊びに耽つたが黨派は日勞、民政、政友の三派に分れ擬候補者を押し立てゝ政見發表もどきの演說等宜しくあつて、投票に移り、次で愈々開票となつて見ると、日勞麻生久　三六　民政齋藤太兵衛　一七　政友森山邦雄　七　で麻生君が最大多數で當選の榮を負ふた。一兒童曰く

『僕等が選擧權があれば麻生久は當選したんだがなあ』と殘念がる。『ナゼ麻生君がいゝの』と聞くと、『ダッテ貧乏人が助かるもの』となかく眞劍だ。――兒童と政治、そして政治と生活、これほどまでに考へられてゐるとは大人もぎやふんと參らされる次第である…。

新入生諸君に與ふ

阿部次郎

改造記者の依頼を快諾して、新入生諸君に與へる言葉をかく。私は色々諸君に告げたいことを持つてゐるからである。

吾々は如何なる社會に住んでゐるか。その状態を諸君の前に描き出さうとするのではない。私はたゞ、恐らく諸君の意外とするやうな一隅に一つの穴を穿つて、其處から今の社會の一端を諸君に覗いて貰ひたいと思ふ。話は二月の總選擧に關する。その時民政黨五名政友會二名の代議士を出した東北の某縣ではすぐに知事及び警察部長の進退が噂に上つた。そのとき知事の談話として新聞に出たところが本當ならば、彼は、この結果は政府の役人としては悲しく思ふ、といふ意味のことを記者に話してゐた。更に警察部長は、病氣と稱して官邸に引籠り、知事を通じて辭表を提出したのが内務省から其儀に及ばずと附箋して返還されたといふ話であつたが、今夜の夕刊を見ると、その部長はもう或二等縣に轉任を命ぜられた様子である。私はかういふ噂、かういふ談話、かういふ進退が事實であるかどうかを知らない。併し某知事並びに某警察部長個人のことを離れて、これを世間の豫想役人の考へ方の一代表と見做すことは優に許され得ると思ふ。さうして私は今諸君とともに、かういふ豫想、かういふ考へ方の中にあらはれてゐる世相の意味を探りたいと思ふのである。

凡そ知事や警察部長は衆議院議員の選擧に對して如何なる責任を持つか。彼は有權者の意志を最も公平に自由に投票によつて表示せしめるために、朝野兩黨の買收や脅迫やその他の誘惑を等しく取締つて、民意を最もよく選擧に反映せしめるために積極的消極的に選擧權を保護するといふ職責上及び德義上の意義を持つてゐる。かくの如くに最善を盡した選擧の結果が現内閣に有利であるかどうかについては、彼は全然何の責任をも持つてゐないのである。政府の役人としても全然責任を持つ必要がないのみならず、寧ろ地方官といふ政府の役人なるが故に、彼はその責任を持つてはいけないのである。彼の責任を負ふべきところは日本の國家であつて政友會ではない、縦令現内閣は政友

會總裁を首相としてゐるにしても、地方官の責任は内閣の交迭によつても何の變更するところなき國家——この永遠なる國家の意志を執行するものとしての現政府に對して負ふべきであつて、政友會内閣に對して負うてゐるのではないのである。故に知事は「政府の役人として」政友會の敗戰を悲むべき何の理由をも持つてゐない。彼が若し政友會員ならば政友會員として——政府の役人としてではなく政友會員の資格に於いて——始めてこの結果を悲む理由が生じて來るのである。故に國家の任命せる地方官が政友會の失敗を悲むといふのは極めて不謹愼である。然るに地方官が自ら進んでこれを云ふか、若くはいや〱ながらもこれを云はなければならぬやうに見えるのは何事を物語つてゐるか。それは最も善意に解しても、國家の官吏としての職責執行に當つてこれを枉げるやうに、背後から彼を壓迫してゐる私の力に對する悲鳴でなくて何であらう。吾々は一知事の悲鳴を通して、吾々の社會に暗黑な私が横行してゐることを認めなければならぬ。而もそれは或個人のみではなくて、國家の公平な行政をも妨げるほどに暴威を振つてゐることを認めなければならぬ。

併し地方官と雖もその政治上の所信に於いて政友會員であることは可能である。所信上の政友會員として——繰返して云ふが政府の役人としてではなく政友會員として——現内閣の存續に危險を生ずるやうな事態の發生を悲むのは理由のないことではない。併し國家の地方官が政府黨に對して不利益となつた選擧結果のために責任を負つたり、そのために貶黜されたりするやうなことがあつては、更に奇怪千萬と云はなければならぬ。選擧の神聖は地方官がその一票以外に選擧結果に對して全然無力なときに始めて保たれるのである。衆議院議員の選擧とはその地方の有權者が知事若くは警察部長に議員の選定を依托することではないのである。この意味に於いて地方官の勢力は選擧結果に對して屁の如きものでなければならぬ。彼等は屁の如きものとなることによつて始めてその職責を果すことを得るのである。この屁の如きものが選擧結果に對して何の責任があるか。政府も社會も彼自身も、萬一地方官が與黨の勝敗について責任があると考へてゐるならば、それは地方官がその公權を濫用して選擧に不公正を行ふことを公然承認するのである。政府及び地方官にあつては、彼等がこれを行へる告白であり、世間にとつては、此の如く事實の是認である。昨今の新聞に選擧の「論功行賞」といふやうな言葉が濫用するのを見て私は戰慄する。それは公權の私用を家常茶飯事と見る恐るべき觀念麻痺であるからである。この觀念麻痺に政治的細菌の侵入に對する抵抗力減退の徴候として戒心を要する症狀であるからである。私は吾々の社會に於いてこんな危險症狀が生じてゐることを極力信じたくないと思ふ。少く

とも私が冒頭に諸君に話した警察部長がこんな意味に於いて辭表を呈出し、こんな意味に於いて轉任させられたのではないことを飽まで信じたい思ふ。併し一般的に云つてこの點に於ける社會の觀念麻痺は如何にしても疑ふことが出來ない。これは恐るべきことである。吾々の國家が、横暴な私によつて壓迫されてゐるだけではなくて、國家の權力そのものが横暴な私によつて占領される危險が觀念麻痺を通じて刻々に吾々に迫りつゝあるからである。一旦國家の權力を占領した以上、その私が惡魔の腕を延して何時どんなこと仕出來かすか知れたものではない。それが自分達の都合のために無用の兵を起したり、國家の財政を救ふべからざる紊亂の中に陷れたりすることも決してあり得ぬことではないのである。

時に法科志望の諸君に告げる。上述の例はたゞ諸君の注意を脫れてゐるかも知れぬと思はれる割合に些細らしいことを特に選んで擧げて見たに過ぎない。もう少しく、嚴密な擧證の責任をゆるめて、世間や新聞の噂の中から如何にも根據のありさうに思はれる多くの現象を拾ひ出すとき、其處にもつともつと醜怪な事實が簇出して來ることは、諸君が熟知するところである。諸君はかういふ社會に於いて法律や政治の學を修めむとしつゝあるのである。若い純潔な心と眼とを輝かして將來を望みつゝある諸君の前途を、かういふ社會の醜惡が待受けつゝあるのである。諸君はかういふ社會に立つて將來如何なる役目を演ずるつもりであるか。諸君のうちには將來地方官となつて知事や警察部長の職に就く人もあるであらう。そのとき、諸君は如何なる覺悟を以て諸君をその手先に使はうとする私の暴威に對抗するつもりであるか。諸君は俸祿若くは榮達のために男子の人格の威嚴を犧牲にして、この私の暴威の陰險な手先となるつもりであるか。純潔な諸君のうちで、後の質問に對し然りと答へる人がゐないことを私は確信する。併し諸君のうちにも、他日、言葉で否定したところを實行を以て肯定する人が出て來ないかどうかを私は疑ふ。流れが急なときに、多くの人はその流れに足を浚はれるからである。問題はこの流れにある。諸君は今からこの流れに働きかけてその方向を轉ぜしむべき責任を負ふことを覺悟してくれなければならぬ。この覺悟は在學中に於ける諸君の生活に、緊張と精力の集中とを與へる力となるであらう。諸君が學校にはひるのは世間と隔離された暗室の中で脆弱な花を開くためではない。他日喬木となつて社會の暴風雨と戰ふべき不拔の根を確かに地中に張るためである。

不拔の根を確かに地中に張る――それは單に法科の諸君のみならず、あらゆる學科を學ぶあらゆる學生の努力の中心でなければならぬ。成熟せる者には學校の必要がない、學生は原則として、その[illegible]

せむとする學科の方面に於いては未熟者である。自分は未熟者であると考へることはあらゆる學生にとつて必要な自覺である。この自覺を持たぬ者が學校にはいるのは、家から學資を貰つて遊んでゐる口實を作るためか、若くは所謂「資格」を得て貧しい社會的特權を獲得するためか、孰れにしても最も本質的な意味に於いて入學試驗にふるひ落さるゝに價ひする部類に屬する。凡ての學生が皆自分は未熟者であるといふ事實を明瞭に把握するならば、學生々活はもつとずつと緊張した、活氣ある、純潔な、無邪氣なものとなるであらう。諸君は諸君の學級を成熟を望む未熟者の無邪氣な純潔な熱中の雰圍氣を以て包まなければならぬ。この雰圍氣の中に諸君は矻々として勉強する者とならなければならぬ。私は敢て勉強といふ——勉強とは單位の終了と成績の優良と卒業後に於ける就職の便宜とのみを打算して、ノートにかじり付くことを意味せぬのは云ふまでもない。自分の志す方面に不拔の根を確かに張るために身心の努力を傾注することは凡て勉強である、寧ろたゞこれだけが本當の勉強である。從つて諸君が友人と共にする集會遠足運動——或場合には適當に酒を飲むことさへこの勉強の中にはひつて來るのである。その努力の方向その發現の樣式はどんなに違つてゐても、兎に角本當の勉強をすることを知らぬ者は學生の屑である。自分は未熟者であるといふ自覺がその人にある限り、又彼が成熟せむとする春の草木のやうな憧憬を持つてゐる限り、勉強の衝動は滾々として彼自身の中より湧いてやむときがないであらう。勉強こそ學生の生活の本質である。この本質が稀薄な者は、假令どんなに優れた素質と才幹とを持つてゐても、彼は結局將來に於いてものになることが出來ないであらう。諸君を待受けてゐる社會は、前に云つたやうに滔々たる流れをなして諸君を漂し去らうとしてゐる。この流れに投じて其處に確かな自分の仕事の基礎を築かうとする未熟者は何を措いても先づ自分の力を養はなければならぬ。この場合に勝敗を決するものは、感情ではなくして底力である。未熟者の甲走れる絶叫と興奮と理想を以てこの大事業に向はうとするのは蟷螂が斧を揮つて龍車に對するよりも更に危い。深く内に養ふことを除いて、大人としての社會生活に對する準備は何處にもないのである。固より内に養ふ努力は卒業後と雖も生涯繼續しなければならぬ。そのとき彼の實生活そのものがこのやうな教養に對する絶好の機會を與へてくれるであらう。併し準備としての教養に專心することを許されるのは人間の一生のうちたゞ諸君の時代にのみ限られてゐる。諸君は決してこの遇ひ難き時代を空過してはいけない。

以上私は諸君に二つの要求を提出した——將來諸君が進出すべき社會に對する注目と情熱とを忘るべからざることと、諸君の本分は勉強

に專心するにあることと。併しこの二つの要求は兩立するか。この二つは生活態度として正面より衝突するやうなことはないか。解釋の如何によつてこの二つの要求に救ふべからざる矛盾が生ずることは、私も亦明かにこれを認める。社會に對する情熱が直ちに實際の社會運動となつて發露するならば、それは諸君のあらゆる精神あらゆる體力あらゆる時間を捧げ盡しても猶足らぬほどの要求を諸君に提出するであらう。問題の性質が片手間を許さぬほどの重大性を持つてゐるからである。それは早かれ遲かれ諸君をその中にはまり込ませずには置かないであらう。そのとき諸君は最早ノートを繰ひろげて試驗を受けてゐる餘裕がないのみならず、凡そ諸君は不拔の根を確かに地中に張る努力の生活から一歩乃至數歩を踏み出すことを强要されるであらう。從つて逆に、諸君が勉强に專心することを本領としてゐる限り、諸君は今直ちにこの意味の社會運動に携らうとする情熱を禁止する必要を感ぜずにはゐられないであらう。この點に於いて前に云つた二つの要求は確かに正面から衝突する。この場合私は諸君に如何なる態度を要求するのであるか。

私の一つの要求は、諸君の本領は勉强にあることを自覺せよといふのである。諸君は未熟者である、成熟を求めつゝある未熟者である、根を張らんとしつゝある早春の草である。故にこの本領に矛盾する一切を拋棄することを私は諸君に要求する。これと矛盾する限り實際的社會運動に深入りすることをも亦極力回避するやうに諸君に忠告する。社會の諸君は竹林の竹の根のやうに互ひに絡み合つてゐる。その一本を拔からうとするものはこれを支持する錯綜する一體の根からこれをひつこぬいて來るだけの力を持つてゐなければならぬ。而も拔かれたあとには猶無限の竹の子を發生せしむべき可能性が殘つてゐるのである。この仕事は諸君のやうな未熟者の力にあまる。それは私達のやうな未熟な成熟者の力にもあまるのみならず、凡そ如何なる個人の力にもあまる仕事である。從つてこの限りなき大事業の團結に加はつてハンブルな手足の役目をつとめるためにさへ、人は相應の力を養つた上でこの竹藪に出て來なければならぬ。諸君は未熟者なるが故に水を運んだり辨當を拵へたりする手傳以外、この開墾事業に一人前の勞働者として參加する資格が、原則としてまだ出來てゐないのである。社會が諸君の分擔を希望してゐるそれ〴〵の重大な方面に於いては、諸君はまだ一人前の腕を持つてゐないのである。故に諸君の現在の義務は專らその腕を養ふところにある。その本領を忘れぬ限りに於いて一人前の勞働者に手傳ふところにある。それ以上に甲高い、黄色い、子供らしい聲を振しぼつて絕叫したり、大人の仕事の邪魔をしたりすることは、諸君の本領以外に屬する。この點に於いては私は無闇に乘出さ

うとする諸君の血氣と妥協しようとは決して思はない。

併し吾々は吾々が將來働きに出ようとする社會との內的接觸を絕つて、果して本當の勉强が出來るか。吾々はこれなしに、勉强しようとする衝動の活氣、充實、緊張を持ち續けて行くことが出來るか。少くとも社會を對象とする學問に於いて、さういふ勉强が本物であることを私は信じ得ない。この情熱を缺くとき、彼はその對象となる事實の意味さへ理解し得ないであらう、この理解を缺いてこの事實を取扱ふ學問の勉强が身につく理由は何處にもないのである。故に社會との內的接觸は彼等の勉强の最も本質的な一部分を形成する。勉强を本領とする學生は勉强を本領とするが故に、現在社會に行はるゝ活事實に溫かにして熱い關心を持ち續けて、その明暗と善惡とに對して深刻な批評を下し得るやうに努力しなければならぬ。この最も重要な源泉を塞いで學生は勉强を專一とせよといふは笑ふに堪へたる殷劣事である。かくて法律の學生は條文に精通し、政治學の學生は行政手續を暗誦し、經濟學の學生は經濟學史發展のシエーマに通曉するも、彼の勉强は彼自身にとつて、又彼を待受くる社會にとつて何の用ぞ。それは戀をも愛をも知らぬ者の倫理學、全然宗教的體驗を缺く者の宗教學と同樣に、最初から智識の殘肴、閑人ノンセンス、求職者の手仕事として輕蔑するところを躊躇すべきではない。諸君の本當の勉强の展望はこの正しき轉變を學び知ることによつて始めて開かれる。萬一諸君の師父がその點に於いて諸君の心を迷はし、勉强を本領とする學生は暫く社會の事業に視聽を塞いでただ學窓の講義のみに耳を傾けよと訓教するならば、諸君は寧ろ笑ひつゝ實行に於いてその說教を否定するがよい。諸君はその本領の中に含まるゝ最も重要な勉强の內容として、常に活社會の現象に注目し、これに重大な利害を感じつゝ、その本領と矛盾せぬ限りはこれに及ぶだけの手を藉さうとする實行的な情熱を燃して行かなければならぬ。學窓の講義をもこの事實に照して消化し味解し修正し、或場合には教授の偏狹によつて叩き込まれようとしてゐる僻說の危險をも、社會的事實の公平な觀察をたよりにして反撥して行かなければならぬ。これは極めて重大な點である。社會に對する愛は諸君の本領とする勉强に熱と力と──從つて學習に際する理解の迅さとを與へるであらう。社會の惡に對して切齒することは、諸君の頭腦の蒸氣汽罐を焚く石炭である。さうしてこの高處を目標とする、全心を打込んだ勉强が、始めて諸君を人らしい人にするのである。社會を横行する私の手先となることを男子一生の恥とする人格的威嚴の自覺と、行路の艱難を凌ぎつゝも猶その威嚴を保持し行く實力を諸君に與へるのである。故に私の上來揭げて來た二つの要求は、生活態度としても實行上決して撞着しない。たゞ諸君は學生の本領に照して時に

血氣を抑へることを必要とするのみである。この抑へられたる血氣をも一つの積極的な力として、その勉強に生命を吹き込んで行くことを要するのみである。一見矛盾する二つの要求は一つに貫らるゝことによつて相互の味を濃くする。さうしてこの二つの力の調和と塩梅は、一に具體的の場合に於ける諸君のタクトに依從するのである。

社會の政治的現象に對する關心の必要は文科理科の諸君にあつては幾分減少する。併し私が法科經濟科の諸君に社會的關心を要求した理由は、その他の諸君に對しても少しも弱められずに通用するであらう。社會に對する愛は人生に對する愛の一つの特殊な場合である。さうしてこの二つの愛ともに、その客觀的價値は眞理に對する愛を含む程度によつて定められるのである。人生に對する愛が凡ての基礎である。自ら人とならうとする努力、自ら人となることによつて一般に人生に奉仕せむとする情熱を離れて、凡ての學問は例外なしに悉く空である。併しこの努力この情熱は眞理の探求若くは眞理の應用を目的とする活動によつて始めて内容を得て來る。眞理の獲得若くは實現を離れては、人となるといふ言葉も人生に奉仕するといふ言葉もすべて無意味である。吾々の眞理を愛する努力は多様の方面をとつて分化するが、そのアルファとオメガとは常に人生の愛である、自ら人となることとこれによつて人生に奉仕することと、二つの意味を一つにした人生の愛によつて潤されぬ限り、凡ての學問は乾いて坼つた沙漠、痩せて收穫のない荒地に過ぎない。さうして認識論や數學のやうな極めて抽象的な學問も人生の愛を離れてその倫理的根據を得ることは出來ないのである。この意味に於いて此等の方面を專門とする學徒にも人生との接觸、人間生活の種々相に對する暖かな關心が要求される。この要求を無視するとき、彼は論理の怪物とはなり得ても、論理を通して人間を磨く道は彼にとつては遮斷されるのである。固より彼は論理を通して人となることは出來る。專門に深入りすることによつて（假令門外漢には極めて迂遠に見える部分的研究によつてさへ）彼が一般に學問に共通な廣みに出で、更に其處から學問と人生とが直接に接觸する人間的教養の中にかつぎ上ることが出來ることは多くの大學者の傳記がこれを證明する。寧ろこの方面に於いては、專門に深入りせずに眞正に人生の滋味に味到することは不可能であるとさへ云ひ得るであらう。併し專門的研究を通して人間となることが出來るためには、最初から彼の研究が人生愛の動機によつて貫かれてゐなければならぬ。故にこの方面に志す諸君も亦讀書と實驗と推論のみが諸君の勉強であるといふ迷信を捨てる必要がある。あらゆる意味に於いて人とならむとする努力、書齋と學校以外に活人生に接觸してこれに對する愛を學び知らむとする情熱これ等の努力と情熱とを反映することによつて、學問

そのものを深刻にすることは、諸君の本領とする勉強の中に本質的に含まれてゐることを忘れてはならぬ。法律專門家、政治專門家、哲學專門家、數學專門家が、專門の骸骨として相對立する世界はあまり索漠である。此等の專門は悉く一つの人生によつて統一されて、其處から絶えざる若やぎの水を汲み、其處に相互の接觸點を發見して來る必要がある。さうしてこの意味に於ける相互の接觸と理解とに絶好の機會を提供して、諸君に共通の源泉を汲むことを教へるものも亦學生時代である。專門相互の封鎖は固陋である。諸君は互に門戸を開いてその接觸の間に人生の勉強を全うすべきである。

最後に學窓に入ると間もなく上級生の流行病に感染して、就職難の聲に威嚇される諸君に一言する。簡素な生活に堪へる覺悟を持つてゐる者にとつては口を糊して生きて行くだけの仕事は屹度與へられる。諸君が何かの仕事をなし得るだけの實力を養つて置きさへすれば、今日の世智辛き時代に於いてもそれは屹度與へられる。さうして諸君がその簡素な生活をしながら貧乏に屈せずに更に自分の實力を養つて行けば諸君が自分を屈するまでもなく社會が仕事を持つて向ふから賴みに來る。それを持つて來ない間はまだ〳〵諸君がそれに價ひするだけの實力を養ひ得てゐないのだと身を責めるがよい。私は私自身の體驗によつてこの事を云ふ權利があると思ふ。たゞ名聲收入等の點に於いて慾張るな。その他の點に於いては運命が諸君自身の實力に相應した途を屹度開いてくれるであらう。故に諸君は卑屈にならずに專ら勉強に――私の云ふ意味の勉強に沒頭すればよいのである。今日の世でも、まだ高處に着眼して氣品を保つて行く者の生存は許されてゐる。若しそれをさへ信ずることが出來ないならば、その人は最初から學校などにはひることを斷念して、早く屈從佃偪の生活に入るべきである。

「勞働者綱領」と「共産黨宣言」

——ラッサアル主義とマルクス主義——

小泉信三

(一)

マルクシズムは、世界大戰の當時及び戰後に於て、或意味での危機に遭遇した。それは獨逸墺太利のマルクス主義者中に、明にマルクスの國家死亡論に反對する者を出すを見るに至つたことである。ハインリヒ・クノウ、オットオ・バウエル、ヒルフアデング、カアル・レンナア等が其重なるものであつて、而して常にマルクスに誤謬なきことを力說し、マルクスの註解者たることを以て其終生の本分とするかの如く見えた、彼の忠實なるカウツキイにして、猶ほ此點に於いてはマルクスに反對し、「斯る狀態(國家なき社會)は何時か到來することがあるかも知れぬ。併し、現在認識し得べき實狀には、吾人が其處に到達することを指示するものは一つもない」と明言するに至つたことを見れば(Die proletarische Revolution usw. 1922)思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

斯くマルクシズムが、——少くも國家論に於て——一種の危機に遭遇して居る反面に於て、特に頻りに人の耳目に觸れるやうになつたのが、ラッサアルの名である。既に戰前に於ても、例へばロオベルト・ミシエルスは、「彼れの最も肝要なる政治的思想方向として、吾人は第一に彼れの國家概念と國民的思想とを擧げんと欲するものであるが、これが宛も今日獨逸社會民主黨に於て急激の進步をなしてゐる所のものである。理論的に死せるラッサアルは、實踐上に於ては、極めて活きて居る」と言つたのであるが、戰後に於ては猶ほ一層然るの觀があつて、「ラッサアルかマルクスか」或は「ラッサアルに還れ」の聲は、或方面に於て頓に喧すしくなつた。Marx-Engels Archiv 第一卷には、卷末に一九一四年以來公表のマルクス、エンゲルス、ラッサアール文獻を擧げてゐる。ラッサアル文獻は固よりマルクス・エンゲルス文獻には逈に及ばぬが、而かも猶ほ著書論文合計百六十餘を數へて居るのである。其中にあつて最も珍重すべきものは、ベルンシユタイン編纂

の著作演說全集十二卷

Ferdinand Lassalle, Gesammelte Reden und Schriften. Vollständige Ausgabe in 12 Bänden. Herausgegeben und eingeleitet v. Ed. Bernstein. Berlin 1919-1920.(以下引用符號、G. W.)

及び、グスタアフ・マイエル校訂の書簡及び遺稿集六卷

Ferdinand Lassalle, Nachgelassene Briefe und Schriften. Herausgegeben von Gustav Mayer in 6 Bänden. Stuttgart-Berlin. 1921-1925(以下引用符號 N. S.)

である。此等の大編纂物は何れも忠實なる學問的勞作の成果であつて、決して時好刊行物を以て見るべからざること勿論であるが、併し一面に於て其出版に多少ラッサアル復活の時勢が反映せられてゐるといふことは、必しも失當でないのである。

(二)

是に由ても窺はれる如く、ラッサアルは可なり多産の著作家であつた。併し此の多數の著作の中に於て、彼れの社會主義思想を窺ふに最も適當なるものはと言へば、彼れが一八六二年に勞働者の集會に向つて試みた講演の後に小冊子として刊行せられた、「勞働者綱領」を擧げることは、略ぼ異論なき所であらう。而して「勞働者綱領」は、ラッサアルの公刊著作中に於て、最も明に「共産黨宣言」の影響の跡を留めてゐるものである。マルクス自身は之を酷評して、共産黨宣言其他の「惡しき通俗化」(schlechte Vulgarisation)といつたことがあり、而してマルクス主義者の批評は大概是に唱和するものである。メエリングが之を「獨逸の狀態の鏡に映じた共産黨宣言」といひ、リヤサノフが共産黨宣言の根本思想の「餘程稀釋し、且つ時の法律狀態に適應せしめたもの」といふ、類がそれである。而かもマルクスの目に映じた、「惡しき通俗化」は必しもラッサアルの疎漏無理解のみから生じたのではない。ラッサアルには自ら別にマルクスと殊なる所信があつて、それが彼れの「宣言」の忠實なる摸寫を作ることを妨げたのである。

「勞働者綱領」は「共産黨宣言」と同じく、歷史は階級鬪爭、若しくは階級支配の歷史であること、而して現在の時代に於ては、プロレタリヤはブルジョワジイの支配を覆へして、全然階級鬪爭の行はれぬ、否な階級別其者の最早存せぬ新社會を建設すべき、歷史的使命を帶びてゐるものだといふことを、其中心思想となすものである。而かも、此の階級別の撤廢せられた曉には、マルクスが、階級的抑壓機關に外ならぬ國家は不用に歸して消滅すると主張するに對して、ラッサアルは、其時に至つて始めて眞正の國家が實現せられるといふやうに說いてゐる。眞正の國家とは「國家の倫理的本質」を本務とする國家、「人間の使命、即ち人間の能くし得る文化を實現すること、……人類の自由への教育と進化と」を目的とする所の國家である。

重要なる共通點を有し乍ら、而かも決して相容れ難き、マルクス、ラッサアル二者の立場は、此の二部の小冊子に於て、最も著しい對照

をなして居る。所謂「ラッサアルかマルクスか」は、畢竟『勞働者綱領』か『共産黨宣言』かを意味するものである。「ラッサアルに還れ」は「宣言」から「綱領」へ還れといふに歸着するものである。

(三)

一八六三年にラッサアルが獨逸勞働者運動を起こした時、當時倫敦及びマンチエスタアにゐたマルクスとエンゲルスとは、是に對して何等の聲援を與へぬ許りでなく、二者相互の間に於て頻りにラッサアルに對する惡評を交換して居たことが、今は其往復書簡 Der Briefwechsel zwischen F. Engels und K. Marx 1844 bis 1883. Herausgegeben von A. Bebel und Ed. Bernstein. IV Bände. Stuttgart. 1913 に現れて居る。後に至つて(一八六八年)マルクスは、ラッサアルの後繼者フオン・シユワイツエルに與へた書簡中に、當時に於ける彼自身の對ラッサアル態度を説明した。其に由れば、マルクスはラッサアルの餘りに現實主義的、機會主義的な運動方針を是認し得なかつたのだと謂つて居る。「……彼れは大なる過を犯した。彼れは目前時々の事情に依て動かされることが餘りに甚しかつたのである。彼れは其出發點たる小問題を――矮小シユルツエ・デリツチ如きに對する其反對を――運動の中心問題として、自助自賴に對する國家的補助を主張した。……聰明なる彼れは、此標語を已むことを得ぬ過渡手段以上のものとは考へて居なかつた。ただ其の宣言は、これは當時實行可能だといふ理由のにのみ之を是認し得たのである。此目的の爲めに彼れは近き將來に其の實現し得べきことを主張しなければならなかつた。其處で『國家』は變じて普魯西國家になつた。斯くして彼れは、普魯西國王、普魯西反動主義者(封建黨)否な僧侶黨にまでも讓歩することを餘儀なくせられたのである。云々」(Neue Zeit 15, I, S. 5-10)

是れは無論事實である。併しマルクス等の對ラッサアル關係の眞相は是れ丈では未だ全部説明せられては居らぬ。理由は猶ほ此以外に、更に淺い――若しくは低い――處と、更に深い――若しくは高い――處とにもあつたのである。淺く若しくは低い理由といふのは、ラッサアルに對するマルクスの私交上に於ける不快の感情であつて、是に對しては前記マルクス・エンゲルス往復書簡集及びラッサアル、マルクス往復書簡集(N. S. Bd. III)が豐富なる證據材料を提供して居る。深く若しくは高い理由といふのは、マルクス・エンゲルスが始めヘエゲル哲學から出發しながら、フオイエルバッハ、佛蘭西社會主義共產主義、英吉利經濟學等の影響を受けて、漸次ヘエゲルから脱却して終に唯物辯證法に到達したに對して、ラッサアルが純粹なるヘエゲル學徒を以て終始したこと是れである。

(四)

ヘエゲルに取つては、世界は絕對者たる理(Logos)理念(Idee)又は

理性(Vernunft)の論理的(辯證法的)自己發展の過程である。而して此の發展が矛盾の止揚、即ち肯定、否定、否定の否定、或は即自、向自、即向自(Ansichsein, Fürsichsein, Anundfürsichsein)の段階に由て行はれるとしたことは、何人も聞き知つてゐる通りである。絶對者たる理念は、辯證法に依て先づ理念の他在(Anderssein)態たる自然に發展し、更に發展して自己に還る。これが即ち精神である。故にヘエゲルに從へば、精神も自然と共に理念の一發展段階に外ならぬものであつて、絶對者は自然たる以前に既に精神であるのである。是に基づいてヘエゲルの體系は三大部門に分たれる。即自の儘なる絶對精神(或は「理念自體」)及び其に存する辯證法的發展の必然性を考察する論理學(同時に形而上學)、其の他在に於ける精神、即ち向自として、與へられたるもの、外的のものとして現るゝ精神を論ずる自然哲學、及び現實的精神を對象とする精神哲學がこれである。

さて精神の發展も亦た三段階に於て行はれる。主觀(個人)的精神客觀(一般)的及び絶對(神)的精神がこれである。而して今日普通に所謂社會學の領域に屬する問題は、右の中の客觀的精神哲學の論ずる所であつて、ヘエゲルは之に法律哲學の名稱を與へた。此の客觀的精神の發展が又三段階に於て行はれる。法(Recht)道德(Moralität)及び兩者の綜合たる團體道德(Sittlichkeit)がそれである。而して團體道德は更に同じく三段階に依て發展する。家族、公民社會(bürgerliche Gesellschaft)及び國家がそれであつて、ヘエゲルに取つては國家は「道德的理念(die sittliche Idee)の實現」であつた。然るに、世界中の國家はたゞ一つではない。國家と國家とは或は相和し或は相戰ふ。然るに國家と國家との關係に就いては、其曲直を裁決する審判者(Prätor)がない。「より高き審判者たるものは、獨り一般的なる、即自且つ向自に有る精神、即ち世界精神のみである。」此審判者の有する法廷は世界史である。即ち世界史(Weltgeschichte)は、諸國民の權利と運命とを決する世界法廷(Weltgericht)である。然らば、世界史は如何なる意味と目的とを有するか。是に答へるものは歷史哲學であるから、ヘエゲルの「法律哲學は歷史哲學に於て完了する」といふべきである。其歷史哲學の緖論の大要は左の如くである。(Kuno Fischer, Hegels Leben, Werke und Lehre. II. Theil S. 742 ff.に據る)

(五)

ヘエゲルは世界史に於て、遂行せらるべき、且つ遂行せられたる合理的なる世界計劃、世界精神の形に於ける神の啓示を見る。世界の哲學は、此意味に於て一個の辯神論(Theodizee)である。故に歷史哲學の答ふべき問題は次の三つである。

(一)世界史の目的及び終極目的は何であるか。

(二)此目的の實現せらるゝ手段は何であるか。及び其の客觀的形態は如何。

(三)世界史の行程如何。

是に對する解答を略言すれば、

（一）世界史の終極目的は、人間の自由である。それも單に狀態としての自由でなくて、己れ自身の知識としての、意識としての自由である。

（二）此目的の依て實現せられ成就せらるゝ手段は、人間の行爲、欲望、動機、激情の働きの全體であり、自由の客觀的形態は國家である。

（三）世界精神の行程は、人類の發展若しくは段階行程であつて、是等の段階たるものは、世界史的諸國民である。

物質の本質が重量なる如く、精神の本質は自由である。物質は其中心を外自（aussersich）に有するが故に、それは又常に外自にあつて外に引かれる。物質にして一度び其中心に到達することを得たならば、それは最早外自にあらずして、依自（bei sich）内自（in sich）及び向自にあり、其場合其は物質たることを已めるであらう。此の依自態、内自態に自由は存し、精神の本質は自由に存する。併し乍ら、單に精神が自由なる丈けでは充分でない。精神は又その自由なることを知らねばならぬ。精神は精神自體に於てある所のものに成らなければならぬ。而して一切の精神の生成は、其行爲に存するのであるから、精神は自體を自體に於てある所のものにしなければならぬ。故に、其自由は、其事業、其行業となり其意識の對象とならなければならぬ。此對象も亦た其事業であつて、精神は其自由を客觀的に形成し、公共の狀態として、即ち國家として之を造上け且つ直觀しなければならぬ。斯り此方法に於てのみ其自由の意識は發生し且つ進歩する。故に曰く、「世界史は自由の意識に於ける進歩である」と。又曰く「東洋人は唯に一人の人の自由なることを、希臘及び羅馬の世界は數人の人の自由なるを知つたこと、然るに吾人は凡ての人其者が、即ち人が人として自由なることを知つて居ることが、又同時に世界史の區分たるものである。」

世界の大なる目的、又人類の終局目的が依て實現せらるゝ一切の手段は、人間の行爲、欲望、利害及び激情を以て成る。人間世界に於ては、如何なる事も行動する個人が其々特殊の目的を以て其に參加し、利害關係を感ずることなしには生起するものではない。利害關係なくしては、何事も起ることなく激情なくしては偉大なる如何なる事も起ることがない。善事は決して善事なるが爲めに起るものではないのである。「此の意欲利害及び行爲の無際限の群集が、世界精神が其目的を遂行し、之を意識にまで高め且つ實現する爲めの道具であり手段である。「終極目的は狀態及び對象としての自由、自由の意識に於ける進歩であり、手段は人間本性に根ざす所の有ゆる利己的動機の大群であつて、此の自由と必然との結合が、世界史の特質を成すものである。自由の理念と人間激情の色樣々の葛藤とは、謂はば前者は世界史なる織物の經、後者は其緯である。

ヘエゲルは所謂英雄の世界史上に於ける役目を論ずる。其に由れ

ば、英雄とは即ち其特殊の目的が同時に時に適へる、世界の大目的たる人々「其自己特殊の目的が世界精神の意志なる實體的なるもの を含める」偉大なる人々を謂ふものであつて、歴史上に於ける偉大なる事業は、此の世界史的人格の激情に依て始めて行はれ得る。即ち世界史的個人は世界精神の道具手段たるものである。

（六）

此歴史哲學は、即ち正しくラッサアル其人の歴史哲學である。然るに、マルクスはヘエゲルから出發し乍らヘエゲルを離れて獨特の唯物辯證法に到達した。彼れは世界史を以て世界精神、若しくは理念の自己發展の過程となすの立場を放棄したのである。屢々引用せらるゝ通り、彼れは自ら資本論第二版の序文に此事を述べて、彼自身の辯證法は「實に原理上ヘエゲルのと異なるのみならず、實に其正反對のものである。ヘエゲルに取つては思惟なるものは――ヘエゲルは其を觀念なる名稱の下に一個自立の主體たらしめてゐる――現實世界の創造主で、現實は單に其外的表現たるに過ぎないが、余にあつては、反對に觀念世界なるものが人間頭腦中に轉置せられ飜譯せられた物質世界に外ならぬのである」といつた。

同じ立場に在るエンゲルスもヘエゲルを評して、ヘエゲルに依て代表せらるゝ歴史哲學は、歴史的に行動する人間の諸動機を歴史的事件の最終原因とはせずして、此等の動機の背後に、探求すべき眞實の動力があることを承認するものではあるが、「併し彼れは此力を歴史其者の中に求めないで、之を外部から、哲學的イデオロギイから歴史へ輸入する」と言つて居る（Feuer bach,（Dietzsche kleine Bibliothek）S. 45）。然るにラッサアルに至つては、一方に於てマルクスの影響は受けながらも、結局歴史的發展の動力を歴史の「外部から、哲學的イデオロギイから歴史へ輸入する」ものであることが、以下彼れの諸書に就て充分明に之を指示することが出來る。故にアルベルト・ランゲが嘗てマルクス、ラッサアル兩者を比較して、二人の相違は、前者がヘエゲルの思辯的形式を守ること忠實なるに對して、後者が一層自由獨立なる態度を以て之に臨んだ所にあるといつたのは、甚だ了解し難い所であつて、正にメエリングの言ふ通り、此判斷は或關係に於ては正に頭足顛倒せるものである。（F. Mehring, Geschichte der deutschen Sozialdemokratee. 5. Aufl. II. Bd. S. 24.）同じメエリングは曰はく、「嚴格に解すれば、彼れは一度も少壯ヘエゲル學徒たりしことなく、常に世界史の推進力としての思辯的概念に安心して信頼せる「舊ヘエゲル學徒であつた」と言つた（S. 245）。舊ヘエゲル學徒云々の當否如何は姑らく措き、彼れをマルクスと比較して、何れが果してヘエゲルにより忠實であつたかに就いては議論の餘地は存せぬやうに思はれる。（因みに記せば、一八五九年にラッサアルが試みた、「ヘエゲルの論理學とロオゼンクランツの論理學、及びヘエゲル體系に於けるヘエゲル歴史哲學の基礎」と題する講演に關聯して、ベルンシュタインは下の如く言つ

て居る。「ラッサアルは其處で全然ヘエゲルの學徒として吾人の前に現れる。果して少壯ヘエゲル學徒か舊ヘエゲル學徒かは、問はずに措きたい。其限界を定めることは容易くないのである。ラッサアルは此場合にも其他でも度々、彼れを正統派ヘエゲル學徒と見えしめる言葉を用ゐて居ることは確かである。此處には單に私に依て既に事の序でに發表せられた、マルクスが一八六一年に彼れを訪問した際に彼れにラッサアルが談話の間に言つた言葉を憶ひ出させたい。それに曰く。『若し君が範疇の永久性を信ぜぬならば、君は神を信じなければならぬ』と。此言葉は恐らく私に、ラッサアルの舊ヘエゲル主義に對する證據として示されるであらうし、又充分斯る響きを持つて居るものである。併し乍ら更に仔細に考察すれば、是は殆ど如何なる哲學者にあつても確定し得べき、自然及び歷史上の生起の因果關係上に於ける合法則性の思想の別の一形態に外ならぬことが發見せらるゝであらう。而して苟も斯る思想を承認せぬものに取つては、彼岸なる、意欲する普遍精神——神を承認する以外に世界の「生起を說明する途がないのである。」(Z. W. Bd. IV. S. 10)

(七)

ラッサアルが始めてヘエゲルを讀んだのは、年僅に十六の時の事であつた。彼れは一八四一年八月、ライプチヒ商業學校を半途にして退學し、ブレスラウの父の許で、中學卒業試驗の準備を整へ、一八四三年の春資格を得て、鄕里の大學に入つた。始めてヘエゲル哲學に親しんだのは、その試驗準備時代の事である。彼れは、先づ最も難解の「精神の現象學」を以て研究を始め、此の大體系の思想を全部我物にする迄は勉強を休めなかつたとマイエルは傳へて居る(N. S. Bd. VI. S. 45)。

一八四四年の春伯林に轉學して、其處から父に與へた書簡の中にラッサアルは己れの精神生活の發達を敍べてゐるが、彼れのいふ所に從へば、彼れの其時に至る迄の發達は之を三期に分つことが出來る。第一期は、出生からライプチヒ遊學若しくは其少し以前迄である。此時代のラッサアルは「愚なる少年」であつた。第二期はライプチヒ滯在時代から「二年半以前」迄である。此時代に於て、彼れは自己の內的空虛を意識し、之を充たさんとする闇氣な憧れに捉へられた。而して二年半以前に於て、彼はいふ、「私は三度び私の皮を剝いだ。」「哲學が私に近づき來つて、私を再び新たに精神の中に生んだ」のである。「此の精神的再生は、私に一切を與へた。私に明澄を與へ、自意識を與へた。人間精神の絕對的威力を、道德、理性其他の客觀的實體を、內容として私に與へた。略言すれば、哲學は私を自ら自體を把握する理性、即ち自意識ある神(即ち自體を神的なるものゝ現象形態として實現として理解する精神)とならしめた。一度び神となつたものは、決して再び愚なる少年となることがない」(N. S. Bd. I. S. 20)

同じ書簡の別の處に於て、彼れは哲學者の經驗の常人の夫れと殊な

る所以を說いて居る。曰く「‥‥哲學者にあつては然らず。彼れは第一年より今日に至る迄の全世界史、及び全民族史の經驗を我が物とする。此の大なる經驗、此の神智の總體が彼れの所得物となるのである。彼れは宛も基督前一千年前より基督後一八四四年迄生活した程の經驗を有する。彼れは、一言以て蔽へば、歷史的生活の過程に於て成熟し、歷史的生活に依て、換言すれば、神其者に依て訓練せられる」と(39)

ヘエゲルの影響と見るべきものは玆に窺はれる。當時ラッサアルが如何にヘエゲルに熱中したかは、彼れが伯林から頻りに其父母に與へた長文の書簡に由て之を窺ふことが出來る。彼れは哲學的素養を缺ける其父母の恐らく迷惑することを顧みずして、殆ど每信或はヘエゲル術語を用ゐて諸般の問題を論じたのである。

（八）

同じ頃（一八四三年夏）、ラッサアルは其のブレスラウの大學生仲間に於て、筆寫に由て發行した「近世哲學雜誌」なるものゝ第一號に、「特にヘエゲル哲學を顧慮して觀たる現代の特徵」(Grundzüge zu einer Charakteristik der Gegenwart mit besonderer Berücksichtigung der Hegelschen Philosophie) と題する論文を寄稿した。此の彼れの處女作論文は久しく埋沒せられてゐたのを、グスタアフ・マイエルが其發見にも成功して、「精神哲學論」なる別の一短篇と共に、之を前記ラッサアル遺稿集第六卷（五五—七四、八二—八八頁）に始めて發表したものであつて、ラッサアル研究者がマイエルに感謝すべき、最も貴重なる材料に屬するものである。

此論文に現れてゐる筆者の歷史哲學は、全然ヘエゲルの其れである。ラッサアルは其處で其師に從つて、「歷史の原理は、必然であり、‥絕對的精神の、神の、即ち種屬(Gattung)の永久不斷の發展である。」「歷史は‥‥自己を啓示する神の存在である。たゞ其場合一事を記憶しなければならぬ。神は完成せるものとしてゞなく、本質的に一の過程として之を把握しなければならぬこと。種屬の神的生活が歷史に於て經過する所の過程として、一言にしていへば、益々新なる進步に急ぎ、且つ益々より高き階段に到達する種屬の精神として之を把握しなければならぬこと、併し乍ら、歷史的過程は自意識の過程であること是である。概念の諸範疇は歷史の諸時期である」といつた。（六三頁）彼れは又、理念が發展して、其向自(他在態)から再び自己に還る、その過程を、或は神話にあるクロノスが自ら生む所の子を食ひ盡すに喩へ、又或は水泳者が波浪の中に突入して、再び浮び、出で又再び水に潛入するにも喩えて居る。(S. 62)

「精神哲學論」の草稿は、一八四四年に起草せられたものと推定せられて居るが、(N. S. Bd. VI S. 76) 此ではラッサアルは精神發展の段階に就いて、ヘエゲルとは稍々違つた段階別を立てようと試みて居る。ヘエゲルは精神發展を主觀客觀及び絕對の三大階段に依るものと

し、此の各段が各三段に分れ、而して客觀精神の發展段階を法、道德(Moralität)團體道德(Sittlichkeit)の三となし、更に團體道德發展の三段を家族、公民社會及び國家としたことは、既記の通りであるが、ラッサアルは、此の三段別に依らず、道德(Moralität)と家族とを省略して、直ちに法律に次ぐものを公民社會とし、其に次ぐものを團體道德即ち眞正國家とし、ヘエゲルが絕對的精神に屬せしめた宗教と藝術とを法律の前に置く、新なる段階別を試みたのであるが、併し歷史を以て精神發展の過程となすヘエゲルの立場に對しては、毫も疑問を抱いてゐないのである(82-4)。

(九)

右の發展段階に擧げられた公民社會は、即ちヘエゲルの所謂私的利害の鬪爭場であり、ラッサアルが、「工業と其の自由競爭、放たれたるFür-sichsein、全員と全員との原子的鬪爭の組織云々」と稱する所のものである(85)。然らば、此の公民社會の次に之に代るべきは、ラッサアルの所見によれば、如何なるものであるか。此問題は、ラッサアルは果して何時如何にして社會主義者となつたかの問題と、同時に答ふべきものである。

一八六〇年二月末、ラッサアルがマルクス・エンゲルスに與へた書簡の一節に、「記錄文書と僕の諸論文とは、僕の一八四〇年以來革命家であり、一八四三年以來斷然たる社會主義者であることを證明する」と書いたことは、屢々人の注意を惹いて居る。併し乍ら、最近に至る迄は、此のラッサアル自身の斷然たる社會主義者云々の言明に對して證據とすべき材料がなかつた。其故、ラッサアル傳の一權威たるオンケンの如きも、此理由に由て、ラッサアルの主張を「餘りに言葉通り」に取つてはならぬと戒め(H. Oncken, Lassalle. III. Aufl. 1920. S. 31)、私も大體オンケンに從つて、ラッサアルを社會主義者たらしめたものは、一八四八年に於けるマルクス等との接觸であつたらうと考へ、且つ斯く記したこともあつたのである(例へば拙稿「ラッサアルとマルクス」)。

然るに、マイエルに依て發表せられたるラッサアルの靑年時代の書簡に就いて見ると、右のラッサアルの言葉は、略ぼ事實通りであることが明かになつた。彼れはマルクスと相識るに先だつて既に社會主義若しくは共產主義の結論に到達してゐたのである。

一八四四年六月ハウプトマンが其名作「織匠」に描いたシュレジエン麻織工の暴動が起つた。四日、ブレスラウから遠からぬペエテルスワルダウの織工が資本家の居宅を襲擊し、翌日更に暴徒は隣村ランゲンビイラウの資本家を襲擊して軍隊と衝突し、六日、增援軍隊の到着するに到つて漸く鎭定に歸したのである。此事件は、ラッサアルがブレスラウから伯林へ轉學した後間もなく起つた事であつた。オンケンは記していふ。「宛もラッサアルがブレスラウから伯林へ移つた時であつた。麻織りの村々には既に民謠「血の裁き」(„Blutgericht")が行はれ、

其後幾許ならずして暴發と鎮定とが之に續いた。此の年少の學生は、そのシユレジエンを去つた時には、確かに斷然たる社會主義者ではなかつたが、社會的困厄の問題は、實際上にも理論上にも最早彼れの思想に疎遠なるものではなくて、一般的反抗氣分に恐らく既により暗黒なる背景を與へてゐたのであらう」と(S. 34)。併し今日では、吾々は彼れ自身の書簡に由て、當時のラッサアルの思想を直接に知ることが出來る。六月十二日伯林から父に與へた書簡の一節に、彼れは此暴動を、「新しき精神の暴風雨」襲來を警告する鷗の一羽だと言つて居る(N. S. Bd. I. S. 101) 而して更に續けて曰はく、「是れは彼の恐しく近づいてゐる、富者に對する貧者の戰爭の發端である。是等の事は、理論上並に實行上吾人の脈管を滿たし流れた共産主義の最初の激動であり痙攣である。是れは胎兒が向自態へ、日光の下へ戰ひ出でんと欲する場合に、母胎內に於てする最初の痙攣的努力である。それは最初の陣痛である。……産婦が陣痛に惱める時に、恐れて堅く其子宮を閉ざす醫師があつたなら、何うであるか。人は斯る分娩を斯の如くにして妨げ得ると信ずるのか。併し、胎兒は其途を開いて出で來るであらう。ただ其際に母體は破壞せられ、外殼は破裂するであらう。而してそれは當然である。何となれば、新しき存有(Wesen)は古き存有の眞理であり、より高き存在であるから。母は新なる存有の源泉となることに依て其頂點に達し、其本分を果したのである。其生活力は新なるものに移し注がれて、彼女自身、即ち源泉は涸れたのである。其は此上に何を欲するか。」

（十）

茲に彼れが公民社會を母胎に、共産主義を生れ出づべきより高き存在に喩へてゐることは明であるが、此點は彼れが更に數月後、即ち九月六日附を以て、同じく父に與へて工業 Industrie の「何處より」Woher と「何處へ」Wohin とを論じた長文の書簡中に、更に詳しく說かれて居る。此書簡は、其頃伯林に開催せられてゐた工業博覽會の事から筆を起して、當年十九歳のラッサアルがその抱懷せる歴史哲學社會理論を殆ど全體に亙つて叙述したものであつて、彼れの思想發達の跡を辿らんとするものの看過すべからざる材料を提供する。(N. S. Bd. I 115-136)「勞働者綱領」は此時より凡そ十八年後に公表せられたものであるが、此書簡に言ふ所と「綱領」の中心思想との間には共通なるものが極めて多い。或意味に於ては、是は「綱領」の第一の草稿であつたと謂つても差支ないのである。ラッサアルは此書簡に於ても、頻りにヘエゲル的語法を連用濫用してゐるので、其論旨の紹介は甚だ困難を免れないが、其中から「勞働者綱領」の讀者に興味ありと信ぜらるゝ部分を摘記すれば、大凡そ次の如きものである。

謂へらく、基督教を世界の其以前の時代から區別するものは、「一切人格の絶對的權利附與の原理」である。此の基督教が宗教の範圍に於て、無差別に有ゆる主體の天國に於ける幸福といふことに於て實現す

る原理を、現實世界に於て、國家に於て實現せんとしたものは、佛蘭西革命であつた。佛蘭西革命は平等と自由とを標語とする。中世に於ては貴族及び僧侶の身分（シュタンド）のみが權利を附與せられ、而して貴族たることは世襲となつたので、權利の附與といふことが出生といふ自然的事實に拘束せらるゝことになつてゐた。それを佛蘭西革命が否定したのである。革命は「抽象的人格の絕對的權利附與」の原則を立てた。最高の現實性と品位と價値とを享有し、國家の公民となるには、人はただ人間であれば足ることになつたのである。此原理を代表する英雄はロベスピエルであり、是れの最も忠實なる表現は、先づ人權宣言、次いで一七九三年の憲法である。併し乍ら、佛蘭西革命が保障する所の自由は單に形式上の自由たるに過ぎぬ。「國家は個人の自由と平等とを單に權利として宣明するに過ぎぬ。併し單に權利として、たゞの形式上の權利として宣明するのであつて、未だ絕對的に遂行せられたる權利として宣言するのではない」「眞に現實の獨立は、ロベスピエルの國家も之を主體に與へることは出來なかつた」のである。然るに、人をして眞正の獨立を得しむるものは財産である。「……自我は自我自ら他に俟つ所なくして、其生存の爲めに必要なる條件、卽ち資産、所有、貨幣を有する場合に於てのみ眞に獨立である。……此等の其生存の條件を自ら自體に於て有せざる限り、個人は、その自由に對し、平等に對し、人格的獨立に對する權利要求が如何に承認せらるゝことを得ても、其に拘ることなく全然不獨立不自由である。」故に此時よりして、人は爭つて財産を求め保障を求める。「それが唯物主義である。」佛蘭西革命の理想主義、絕對的人格的獨立の理念は、其の獨立、其の完全なる自由を遂行し、其理想主義を實現せん爲めに、自ら唯物主義の無精神無理想へ發展するのである。「唯物主義は此の最近時代の一産物である。何となればそれは新たなる理想主義の一産物一段階なるが故に。」今一つの歸結は、自由競爭である。抽象的自由の原理は、恣意（Willkür）の原理である。「國家の道德的總體を、各自その好む所に從ふ個々の個人に分裂せしめて、「國家の自由」でなくて「國家からの自由」Freisein vom Staate を打ち立てる。此の全員對全員の鬪爭は「歷史上に於て其實現と組織とを自由競爭の制度に見出す」のである。人は抽象的自我が其獨立の爲めに要する所のもの、卽ち所有を得んが爲めに、「他人を滅ぼし、許されたる方法を以て他人の胸に匕首を刺す」のである。

（十一）

佛蘭西革命は中世の身分制度に對する否定である。「革命は、主體が其の最高の國家的自由の爲めには何等かの客觀的實體的內容を要する〔具體的にいへば、貴族たらんが爲めには貴族の家に生れなければならぬ〕といふことを否定した。」然るに、「今此否定が否定せられる。」世界は更に再び空虛なる、抽象的主觀性の內容となすべき、客觀的なる實體的なるものを見出さんと憧れる。如何なるものが其であり得る

か。「言ふ迄もなく、兩極端の對抗、即ち中世の身分別と革命の抽象的主觀性とを一のより高き統一に結合し、而して此兩者を、要素として自體の中に持つが如き一の思想、一の概念が發見せらるゝことを要した。併し乍ら、同時に、宛も革命が絕對主義國家に對する對角線的反對であつたやうに、此の新なるより高き概念は、又其自身此の佛蘭西革命の原理其者に對する對角線的反對たることを要した。」而してそれは何であつたかといふと、ラッサアル所有の概念であるといふ。而して歷史上の事實は此の「概念の發展と其歩を同じうする。」即ちロベスピエエルの失脚後一七九五年新憲法が制限選擧法を復活せしめて、一定所得を有するものゝみを選擧權者としたことがそれである。而して此原則は今日迄一度も放棄せられて居らぬ。「此時以來所有と其代表者、即ちブルジョワジイは、佛蘭西に於て、獨り權力ある者であり、程度こそ劣れ、他の諸國に於ても亦た然るものである。」佛蘭西に於ては、國王も貴族も僧侶も權力を有せぬ。權力を有するものは所有、即ち貨幣である。」

次にラッサアルは、肝心の主題たる工業を論ずる。工業は財產を獲得し、從つて獨立を完うする爲めに「適當せる絕對的の手段」である。商業はさうでない、といふのは、商業に於ては、肝要の點は商業の客觀的根基、即ち商品に存するからである。反之、工業に於ては、自由なる主觀性、即ち人格が其中に實現せられる。工業に於ては、事は素材其者よりも寧ろ、「素材を形成し加工する人格」に關する。商業に於ては、價値は物其自身に依て定められるが、工業に於ては、加工の一事が重要の問題であるのである。「其故に、主體が直接其主觀性に依て彼の客觀的內容を得る所の工業は、所有の獲得の適當の方法たるものである。」茲に工業が發達して世界的威力となり、又發達して人の過去に於て想ひ及ばざりし程度に到達するのである。

以上が工業の Wesen である。工業の Wesen は果して如何。

（十二）

ラッサアルの以爲らく、工業原理又は所有原理には二つの要素、若しくは方面が含まれて居る。一は、此原理は主體を客觀的なるものに倚賴せしめるけれども、併し其の客觀的なるものは、主體其自身の勢力圈內に存するといふこと。二は、此原理は、革命の原理と正反對に、人格を非人格的なる外的なるものに、即ち貨幣に倚賴せしめるといふこと是である。此兩方面若しくは兩要素が、工業原理の本質と運命とを構成する。即ち此原理は第一の一面に依て興り、第二の一面に依て滅びる。此第二の一面は、其中に於ける否定であり、其の中に於ける死の萌芽である。ラッサアルは勞働者と資本家との分立對峙を、此の人格と外物若しくは非人格的なるものとの對立の現れと解し、資本家の非資本家壓倒を、人格の物格に依る征服と解する。曰はく、工業は主體と物質とを代表する二個の部分に分たれる。第一は、其の否定的なる、物を形成する主觀的の力と行爲とに由て工業の絕對的手段、材料其者

——主觀性——を其自體に結び、且つ主要する主觀性である。これが勞働者である。」第二は「死物たる客觀的物質、即ち物格の力であつて、それは資本家——に依て代表せられる。」而して自由競爭の制度の下に於て、前者は後者の爲めに敗られる。「此の非資本家者に對する資本家の勝利は、素材即ち貨幣の客觀的物質性の勝利に外ならぬものである。主觀的なる加工行爲に對し、人格主觀性及び其力に對する物格の勝利である。」

此の人格と物格との對抗が、ラッサアルに由れば、共產主義に依て止揚せられる。人格の理念は、其の他在態たる物格から、再び自己に還るのである。人格の理念は一度び其自身に對する絕對的反對に變化しなければならなかつた。「併しそれは此間隔及び此對抗から永久に自己を自己の中に取り戾す。」それが共產主義である。「共產主義に於て、自由なる無限の主觀性は、再びその永久の讓渡すべからざる權利を回復する。共產主義に於て一切の主觀性、人格は無限なるもの、包括するものとして、言明せられ、彼の外的客觀的なるもの、即ち所有は、決して其に、即ち人格に對する一の抗議たり得るどころか、絕對的に此に服從所屬するものと言明せられる。」共產主義に於て主觀性の理念は、主觀性の爲めに、それが主體たり人格たるの故を以て、直ちに客觀性即ち所有の權利を要求するの域に到達する。これが所有に對する一切人の平等の權利又は財貨共有等の命題として表明せられるのである。ラッサアルは猶ほ其の缺點あることは認めながら、カベエの共產主義を以て、當時に於ける[illegible]となる。而して共產主義は、勞命原理と所有國家との對抗の統一たると共に所有國家、工業主義共產の否定、反對たるものである。

ラッサアルは佛蘭西革命の自由概念と彼れの所謂眞實の自由概念とを區別する。佛蘭西革命の自由は、彼れに由れば正しくは恣意と稱すべきものである。眞の自由は恣意ではない。眞の自由のある所、我々は成程全然自主自由であつて、我々の意志を動かす外部の權力といふものはない。我々は自ら己れを決定する。併し乍ら「此の決定する自己は、我々の經驗的なる個々別々の、我々の個人的の好惡ではなくて此自己は更に一般的の自己、即ち概念である。」此意味の自由は、共產主義に於て始めて實現せられる。共產主義は『工業の組織』を要する。共產主義が此の組織の理念、統一的總體の理念を立てることに依て、それは自體に於て an sich (併し又自體に於てのみ) 吾人の哲學の歸結たる客觀的道德の國家概念を有する。」

ラッサアルに由れば、共產主義は工業主義の〔今日の通用語に所謂資本主義に當るものならん〕直接の發展である。故に、工業主義には或意味に於て共產主義は含まれて居る。「……工業共者は、共產主義の最初の、未だ被蔽せられたる共產主義である。」從つて工業の發達は共產主義の到來を必然ならしめる。獨逸に於ける工業の大なる繁榮は、「獨逸が最早危機を距る遠からざることの爭ふ可からざる前觸れであり證據である。勞働者の不穩は、……既に工業が其自體の過程に於て工業

の中に於ける否定的要素を起し始めることを示した。……工業の繁榮は既に近き最も慘憺たる戰爭の徵候である。」

上述の如く、ラッサアルが自ら一八四三年以來斷乎たる社會主義者であつたといつたのは、略ぼ事實であつたと認めて差支ない。而して此の思想の變化は、彼れが始めてヘエゲルに親しんだ時より二三年の間に起つたことである。而して彼れが社會の發展を全然辯證法的に考察したことは、右段引用の材料の充分證示して居る通りである。たゞ彼れが現存社會から之に對する Fürsichsein 若しくは Anundfürsichsein としてより高きものが生れると結論したのは、ヘエゲルの思考方法に據つたのであること勿論であるが、此のより高きものが、何故社會主義若しくは共產主義であつて、其以外のものであつてはならぬか。此に彼れに對する當時の社會主義者の影響を見ることが出來る。唯だ彼れが特に何人に就いて得る所があつたかは、之を明記することが出來ぬ。オンケンはブレスラウ大學のラッサアル所屬の學生團の間に、サンシモン、フリエエ、ルイ・ブランの影響及んでゐたことを指摘して居る(S. 31)。私は此頃のラッサアルの行論の方法に、頗るロレンツ・フオン・シュタインの影響あるものゝ如きを感ずるけれども、遺憾ながら彼れが一讀したと想像せらるる一八四二年刊行の「現時の佛蘭西に於ける社會主義及び共產主義」の初版を參考する邊を得なかつた。

(十三)

次に論ずべきは、マルクスの影響である。

今日所與の材料に據つて判斷する限りに於ては、マルクスとラッサアルとは、一八四八年の革命當時ライン地方に於て始めて相識となつたものであらう。其時に至る迄、兩者の相遭遇する機會はなかつたやうに見受けられるのである。一八一八年出生の、七歲年長のマルクスは、一八三五年に鄉里トリエルからボンに遊學し、翌三六年秋伯林大學に轉じ、一八四二年に此地を去つた。此年はラッサアルが鄉里の父の許で中學卒業の準備を整へてゐた年であつた。既記の如く、彼れも亦た後に伯林に遊學した。併しその一八四四年には、マルクスは既に巴里の客となつてゐたのである。ラッサアルは一八四五年の暮と其翌年と二度、巴里に赴いたが、マルクスは既に四五年の三月巴里退去を命ぜられて居つた。(若しも或は人の言ふ如く、ラッサアルが一八四四年の暮に巴里を訪れたものとすれば、此一項は訂正を要する。併し斯く記す一人たるマイエルも、一方にはラッサアルが一八四四年十二月始めて巴里にハイネを訪ふたと遺稿集第一卷三七頁に記しながら、同じく一三六頁には、「日付なし。恐らく伯林に於て、一八四四―四五年冬」にに執筆した書簡草案を揭げ、又同第三卷一頁には、ラッサアルは一八四五年と其翌年と二度巴里を訪れたと記して居るのである) 途次マルクス客寓のブラッセルを過ぎつても、之と相見する機會がなかつたことは、後にエンゲルスの證言する所である(前揭書第二頁)。遂に一八四八年六月マルクスがエンゲルス、ヲルフ、フライリヒラアト等と共に

キョルンに新莱因新聞を起こすに及んで、これより先き、ハッツフェルト伯爵夫人離婚訴訟事件の渦中に投じて、一八四六年六七月以來遂にデュッセルドルフに居を卜したラッサアルは、同志として其運動に參加したのである。

此時ラッサアルは、刑事裁判事件に累せられた爲め、自由にマルクス等に行動を共にし得る期間は甚だ短く（自八月十一日至十一月廿二日）從つて多く政治的活動の記錄すべきものがなかつたけれども、而かも當時の經驗は、彼れの思想に深く影響する所があつた。オンケンはいふ「…彼れも亦た一八四八年の子であつて、彼れの全生涯は此時代の經驗なくして之を了解することが出來ぬ」と。

（十四）

ラッサアルの思想がマルクスとの接觸に依て如何なる變化を來したかに就いては、幸ひにして今日はそれを知るべき稍ゝ的確の材料がある。彼れが勞働者に向つて試みた「社會發展史」に關する講演の草稿がそれである。（Geschichte der sozialen Entwicklung. N. S. Bd. VI. S. 92–155）

一八四九年の反動襲來して、新莱因新聞も廢刊に歸し、マルクス、エンゲルスは英國に亡命し、其他の同志も四散した後、殆ど獨りラインランドに殘留したラッサアルは、後にその自らマルクスに告げていふ所に由れば、勞働者の爲めに其自宅に於て「警察の有ゆる憤怒と威嚇とあるに拘らず、」久しきに亘つて一七八九年以來に於ける社會發展に關する講演を試みた（N. S. III. B. S. 303）。マイエルに發見せられたのは其草稿であつて、特に注目すべきは、其執筆の年時が一八五〇年と推定せられてゐる一事（S. 91）即ちマルクスとの接觸後久しからずして起草せられたものなるの一事である。

講演の内容は、可なり豐富なる佛蘭西革命史の材料に據つて、殊に父に與へた工業論書簡の思想を更に發展せしめたものである。而して全講演の骨子とも見る可き一節を譯出すれば、左の如くである。

「革命以前に於ては、貴族、出生、大土地所有、世襲的差別（特權）が支配して居つた。一七八九年の革命と共に、權力は國民の手、第三階級（シュタンド）の手に落ちる。併し乍ら、間もなく、第三階級其自身は統一體でなくして有產者と無產者との二階級（クラッセ）を以て組織せられてあつたことが分る。何人の手に公權は移つたか。一七八九年、國會（アナンブレ）及び立法（レクスラチイヴ）會と共に所有の手へ、即ちブルジョワジイの手へである。ブルジョワジイの原理は、大體に於て簡單に左の如く概括せられる。個人の絕對的平等、個人の其中に存する一切の力と能力とを發展せしむるの際限なき自由是である。此原理が出現し、且つ世界を改造する最も主なる形態は、自由競爭の原理である。唯一の猶ほ價値あるものとして殘れる差別の爲め、物的所有の爲めの有ゆる人の有ゆる人に對する戰ひである。——斯く有ゆる法律上の差別が廢止せられ、併し乍ら有產無產の絕大なる差別は殘ることに依つて、各人が有する、此の己れに存する力（資本、所有）

を無制限に發展せしむる個人的自由は、一個の新なる支配、一個の新なる從屬、即ち無産者の有産者への從屬を齎さゞるを得ぬ。——乃ちブルジョワジイは其自身の原理、即ち個人の自由と獨立とを實現する結果に到達せぬ。何となれば、其の(?)支配の下に於ては個人としての各個人に屬すべき自由と獨立とか、更に所有、資本所有なる偶然に倚頼するからである。……資本家の大小の資本、若しくは無資本、これが腕の强弱等と同様なるブルジョワジイの夸の權である」。(152)

ラッサアルは産業自由又は自由競爭に依て實現せられた個人的自由を稱して、「それに對してより強き爪牙が力を與へる、他の一切生物を滅ぼす虎の自由、比較的弱き爪牙を授けられたる凡ての者に取つての滅亡の自由」と云つて居る。併し乍ら、此の生存鬪爭の中から初めて共同連帶友愛の原理が起る。而して彼れは、一八四九年二月九日の普魯西の法律によるギルド制度の部分的恢復を以て、政府が自由競爭の制度の支持すべからざることを容認したものと解して居る。既に政府にして個人的産業自由の支持すべからざることを承認し、此の恐るべき競爭鬪爭の共同利害に依て結ばれたる生産に變形すべきを承認する以上は、産業自由の原理が「全員の人間的共同連帶の原理、社會に依る勞働組織の原理」に依て代らるゝ日は近きにある。此の原理を彼れは「勞働者共産主義」と稱してゐるのである。(S. 115-116)。

此講演草案を取つて、之を前の工業論書簡と比較すれば、其處に種種の變遷の指摘すべきものがある中に、此の六年の間にラッサアル經濟學經濟史に關する智識の豐富を加へたことは、第一に注目に値する。「革命は工業に依て既に完成せられたる顚覆をのみ公宣する」といふ思想は、既に工業論書簡にも見えてゐるが、此處ではラッサアルは、封建制度を崩壞せしめた生産力の發達を叙して、分業、大市場、低廉なる交通機關、若干の資本蓄積其他を說いて居るのは、前に見ざりし所であつて、而して此處に彼れが說く所は、殆ど其儘後に勞働者綱領中に再說せられて居る(107ff)。

「綱領」と本草稿との共通點は、是のみには止まらぬ。猶此以外に支配階級の納稅被免の特權を言ふのがそれである(S. 97)。支配階級の他階級に對する社會的輕蔑を言ふのがそれである。革命前に於て、貴族が富裕なるブルジョワを輕蔑しながら之に寄生せることを言ふのがそれである(S. 106)。又ラッサアルが後に公開答書其他に於て爾かく重要の意義を附與したる彼の賃銀鐵則を、玆に始めて「賃銀は勞働者に對する需要と勞働者の供給との關係に由て定められ、併し乍ら、供給は極めて短き暫時の例外を除く外、需要を超過せざるを得ないのであるから、賃銀は生活維持と繁殖とに必要なるものに引下げられ、勞働者階級が其背後に所有を持ち來たすことを、直ちに不可能ならしめる」なる文言を以て說いてゐることも注目を要する(S. 153)。而して既に共產黨宣言は「勞働者が費さしむる費用は、殆ど僅に其生活維持と其種族の繁殖の爲めに要する生活資料に限られる」といつて居るから、ラッサアルは「鐵則」を或はマルクスに由て學んだのであるかも知れぬ。同時に其

前後に於て彼れが「資本の集中と小所有の沒落」といひ、「近世工業の本質に存する必然的恐慌の爲めに」云々といふも、亦た「宣言」に學び得たるものにあらざるなきかを想像せしめる。

（十五）

併し乍ら、「宣言」の影響の最も重要と認むべきものは、工業論書簡に比較して草稿の行論に階級鬪爭思想がより濃厚に現はれ、從つて、それが彼れの國家觀に多少の變化を來たさしめたことであらう。ラッサアルはヘエゲルに從つて國家を見るに道德的理念の實現を以てして居る。然るに、「共産黨宣言」は近世の國家權力を以てブルジョワジイの共同事務を處理する一委員會に過ぎぬものとして居る。今ラッサアルが、或は「社會に於ける支配階級は、國憲上に於て他の階級に對する共支配を確保する等の爲めに、絕えず、常に國家權力國家形態を利用する」といひ(94)、或は「現實に常に法に實現せられるものは、社會に於ける支配階級の本質である」(S. 96)又或は「國家權力及び憲法は、常に社會に於て支配者たる階級の表現に外ならぬ」(S. 119)といふは、人をして宛然マルクスの口吻を聞くの感あらしむるものである。

併し、ラッサアルは決してヘエゲル國家觀を放棄したのではない。ラッサアルは猶ほ「一般に法及び國家の概念は、外部世界に於ける一般的精神の實現である」といひ、「其概念上法(「國家と法とは可なり同一物である」)は一般的人間精神の實現たるべきものである」と思惟してゐるのである(S. 94, 95)。たゞこれは「概念上然るもの」であつて「現實に於て然るものではない」。一方より見れば、「國家權力は全體の代表者、國民の人格化であり、從つて、それは其特殊利害と私的位置とに依て國家體の健康を傷ける凡ての個々の成員等に反對して、全體の福祉への利害關係と使命とを有するものである」が、又他の一面より見れば、「國家權力其者は、常に直接間接的支配階級の手中に存する」のである(S. 119)。玆に矛盾が存する。これを解決する途は、恐らく現實上の支配階級が國家の本質を正しく理解して居らぬといふところに之を求めるの外あるまい。後に「勞働者綱領」に於て、ラッサアルは、眞正の國家觀は獨り勞働者階級に依てのみ代表せらる、勞働者階級が支配階級となるところに於て始めて眞正の國家觀は實現せられ、而して眞正の國家觀の實現せらるゝところは、即ち階級支配の全く行はれざる處である(「第四階級の支配は凡ての人の支配である」)と謂つたのは即ちそれである。此草稿にも此結論の萠芽とも解すべきものは既に見出される。曰く「……時代が人間精神の眞實の本質に就いて猶ほ謬つた觀念を有するが故に、……又時代は常に此謬つた觀念をのみ法の形式に於て實現するが故に……そこで人間精神に、其本質其自由に矛盾するものが、法及び法規に高められる。法及び法規の內容は、當さに其自己實現であるべき、人間精神及び、其自由に矛盾するものである。法の內容が不法となるのである。現實に常に法に現實せらるゝものは社會に於ける支配階級の本質である」と(S. 96)

即ちラッサアルは國家若しくは法の理念と其現實との矛盾を、人間精神の本質に對する「謬れる觀念」(falsche Vorstellung) に歸したのである。即ちラッサアルの口吻には甚だマルクスの其に類するものあるに拘らず、猶ほ二者の間には越え難き溝渠の横はるものがある。前者は後者の如く、國家を以て階級的抑壓機關に外ならざるものとなすことは、到底之を肯ぜぬのである。これ即ちメエリンクが評して、ラッサアルは「プロレタリヤの階級鬪爭を理解してゐたから、古典哲學の國家崇拜は、彼れにあつては、決してロオドベルトスに於ける如き、形式的凝固には陷らなかつたが、而かも彼れは決して唯心論的思考形式と絶緣しなかつたから、又決して彼の國家崇拜とも絶緣しなかつた」といふ所以である (a. a. O. S. 247)。

(十六)

此草稿起草の推定年より十年餘を經て、ラッサアルの代表的著作「既得權の體系」(Das System der erworbenen Rechte 1861. G. W. IX-XI) が出た。

此書に於て著者が企てる所は、「成法と法律哲學との調和」であるが、其序文のいふ所に從へば、成法學者と法律哲學者との離隔の罪は、多く後者の負ふべきものである。「若し哲學者にしてヘエゲル法律哲學の所有權、家族、契約等の稀薄なる一般的輪廓に甘んじて止まらないで、進んで個々の具體的法律制度の哲學的發展といふ‥‥意味に於ての私法哲學の記述に移つたならば、是等個々の成法制度の特定内容に徴して、所有權、相續權、契約、家族等の抽象的普遍的範疇は全然用を爲さぬこと、羅馬の相續概念はゲルマンの相續概念とは異なり、羅馬の家族概念はゲルマンの家族概念とは異なる等のこと、即ち『歴史的精神の王國』に屬するものとしての法律哲學は、論理的永久的範疇に拘はるべきものではなくて、法律制度は歴史的精神概念の實現に外ならず、樣々の歴史的民族精神及び時代の精神的内容の表現に外ならざるものであるから、又斯るものとしてのみ理解せらるべきものだといふことが、直ちに分明となつたであらう」(W. IX. S. 30)

即ち玆にラッサアルは、或は法律制度の「哲學的發展」といひ、或は法律制度を「歴史的精神概念」「民族精神」「時代精神」の實現と解してゐるのである。その同じ彼れが、ヘエゲルの法律哲學に不滿を感じながら、「ヘエゲルの哲學はヘエゲル自ら承知してゐたよりも遙に正しかつた‥‥、及び思辨的概念は、ヘエゲル自ら識認したよりも猶ほ遙に廣き範圍を、猶ほ遙に強く支配してゐる」といふのは、異しむに足らぬのである。

マルクスはヘエゲル法律哲學の批評的修正の結果として、法律關係並に國家形態は物質的生活關係に根ざすものであつて、所謂人間精神の一般的發展」から生ずるものではないとの結論に到達した(「經濟學批評」序文)。そのマルクスに取つて、上記ラッサアルの所説が承認し難きものであるのは勿論である。彼れはラッサアルから「體系」一部の寄

[illegible]に對しては、[illegible]に比較的[illegible]を[illegible]へたが、一八六一年十二月二日附を以てエンゲルスが「……ラッサアルが今猶は法の理念、絶對法を信じてゐるのは甚しい迷信である。彼れのヘエゲル法律哲學に對する抗議は、大部分當を得てゐるが、併し彼れは未だその新しい精神哲學とよく融合して居らぬ。假に哲學的見地よりしても、過程の單なる瞬間的の結果でなくて、過程其者のみを絶對的なるものと解する處まで行かねばならぬ筈である。而して其場合には、歴史的過程其者以外に、何等の法の理念は生ずることなかるべき筈である」と云つたのに、同感の意を表した。エンゲルスは更に後に「家族の起原」の一節に「信仰ある當ヘエゲル學徒として、ラッサアルは羅馬の法律規定を羅馬人の社會狀態から演繹しないで、意志の思辨的概念から演繹して居る」と言つた。

屢々引用せらるゝ通り、此の大著の中にもラッサアルの社會主義思想を窺はしめる一節がある（第一部第七節脚註）。其處には私人所有權の範圍が文化の發達と共に漸次局限せられ來つたことが說かれてゐる。最初聖物（Sacra）は先づ個人の自由處分權外に置かれたが、猶ほ久しく人間其者が所有權の客體であつた。次で奴隷制度が緩和せられて、體僕制となり隷農制となつた。人間を何等の形に於て所有の客體となすことが少くも法律上廢止せられたのは、佛蘭西革命を俟つてのことであつた。併し今日と雖も、政治的並に經濟的社會的には、此事はまだ廢止せられて居らぬ。今日の歐羅巴は甚だ興味ある二個の所有問題に逢着して居るのである。第一は、政治的には、一[illegible]の公共團體が一家族の所有物たること（[illegible]）を、[illegible]するの問題である。第二は[illegible]個人の勞働搾取の許さるべきか否か、即ち一自己勞働の自由行使と發展とは果して勞働根基（Arbeitsmittel）及び勞働前提（資本）の所有者の排他的私有物たるべきものであらうか。又從つて、生産物の價値と何等かの方法に於て生産物の成立に貢獻した一切勞働（精神勞働を含む）の實質報酬全額との差額に由て形成せらるゝ他の勞働價値（資本配當、資本利潤）に對する所有權が、企業家としての企業家に、其精神的勞働の報酬以外に果して與へらるべきものであらうか」の問題が是である。

然らば、此の所有權の範圍局限の進行は何故に起るか。ラッサアルは是に對して、結局たゞ「人類自由の積極的發展に基づくに外ならぬ」との說明を與へるに過ぎぬ（P. P. O. p. 399）。後にロオドベルトスがラッサアルに向つて、一民族に於ける權利意識變化の事實は何に由て之を知るべきか、又現在及び後代の一時代意識の内容を彼れは果して如何にして確定せんとするかを問ふたに對して、彼れは、「貴下が理性と論理と科學とに依て、貴下自身並に時代に對して證明し得ることは、……即ち時代の欲する所のものである」と答へた。是を評してフオアレンダアが「甚だ非法學的、併し乍ら甚だヘエゲル的」といつたのは、當を得たものである（K. Vorländer, Marx Engels und Lassalle als Philosophen. 1921. S. 75）。

ラッサアルの思想の發展は、上述の如きものであつた。彼れは此思想を以て、一八六二年四月十二日伯林近郊オラニエンブルの手工業者協會に聘せられて、「吾人の棲息する現在の時代の特性と勞働者階級（シュタンド）の理念との間に存する特殊の關係」を「純學問的」に取扱ふ講演を試みた。此講演の後に小册子として發刊せられたものが「勞働者綱領」であることは始めに述べた通りである。

附記。本稿は始め「勞働者綱領」と「共產黨宣言」との比較共著を主題とし以て執筆したものであるが、其「前記」ともいふべき部分に意外に時を費したので、遺憾乍ら今回は此を以て一段落とする。此場合表題は稍々不適當のものとなつたが、必しも全然失當でもないと考へて敢て改めずに置いた。讀者の幸ひに諒せられんことを乞ふ。

農民運動の根本問題と當面の問題

猪俣津南雄

一　緒言

此頃の新聞雜誌は、それほどやかましく農民問題を論議しなくなつた。それは、運動が下火になつたからでなく一頃のやうに珍らしくなくなつたからである。我が農民運動は、此の階級社會においてすでに確乎たる地歩を占め、從つて何人も其の必然と當然とを疑はなくなつたほどに、それほど規模において内容において强度において顯著なる發展を遂げてしまつた。

だが、それと共にまた、我が農民運動が有つ諸問題はそれ自身いよいよ深刻なものとなつて來てゐる。さきには潜在的であつたものが、今や表面に浮びあがつて來た。さきには本能的にのみ摑まれてゐたものが、今や有意的に直視されるに至つた。

農民運動は、農民階級——一層適切には社會層——が、階級としての自己の根本問題を、此の階級社會相應な方法によつて解決せんとする努力である。それは一種の階級鬪爭として現はれ、從つて必然的に、我がブルジョア社會における基本的な階級鬪爭即ちプロレタリアートの鬪爭のうちに捲き込まれて其の一分野となる。そしてかゝる傾向、それが最近の我が農民運動の顯現し來たれる最重要な傾向である。一方でプロレタリアート、他方で農民は、それ〴〵に此の傾向を如何に促進すべきであるか。そこに當面の問題の核心がある。だが、當面の問題は、根本問題の解決に寄與する如き仕方においてのみ解決されねばならぬ。根本問題は何か。

一の階級としての農民の特徴は、その社會的地位が「中途半端な」ことにある。日本社會に資本主義的發展の道がひらかれて以來の我が農民は、原則的には、二つに一つの社會的運命を有つてゐた。都市に出て賃銀勞働者となるか、農村に止まつて賃銀勞働者となるか。農民の多くが前者の、若干が後者の途を選んだ。けれども農民のすべてがプロレタリアには成らなかつた。極めて多くが今尙ほ、プロレタリアへと落される坂の中途にもがいてゐる。種々なる特殊性を有する後進國日本の資本主義は、農業生産をも資本主義化してその生産力を高めると共に農村人口の大多數をプロレタリアに變ずべき固有の歴史的使命

を果たすにさきだつて早くも沒落期資本主義の世界的連鎖の一環となつてしまつた。後れて世に出た日本資本主義は、、、、政府の諸政策の下に、農民が造り出す剩餘價値を横奪してのみ伸びねばならなかつた。資本の利益の大小に從つて侵入の方向を決定する資本主義は、社會的重要性の最大なる農業を、今もつて神代的な技術水準に置く。

落され切らなかつた農民は極度の窮乏に沈んでゐる。

我が農民問題の特殊の內容はそこから生じた。

二 何が根本問題か

わが國五百五十萬の百姓の三分の二は、尙は若干の生產手段——土地をもつてはゐる。だが、その多くは抵當にされて彼等の手から拔け出してゐる。百姓の土地で、一家五口を支えるに足るものは例外的な尠なさである。三百六十萬の百姓の土地は一町歩に足らず、二百五十萬戶の百姓のそれは五段に足らない。そのうへに、一坪の土地も有たない百姓が百六十萬戶ある！かゝる土地分配の狀態は、言ふ迄もなく、土地を所有しながら、鍬一つ動かさぬ地主といふものがあるから生ずる。日本全國の耕地全體の四割は、十五萬——此の少數の地主が取つてゐる。僅かに殘る半分が、四百萬(！)の百姓の手にわかたれてゐる。

「道德」や感傷のすべてを離れ、たゞ赤裸々な生活からの根本問題がそこに湧く。百姓は土地に飢えてゐる。土地私有制の下に生きんとすれば、自らも土地を有たねばならぬ。『神洲』の田畑の半分は、何故に、働く百姓に與へられてゐぬか？すべての土地をすべての百姓に、、に！それは、農民の根本的ブルジョア民主主義的要求である。

だが、如何にして百姓は土地を得べきか？土地が法外な價をもつ資本主義制度のつゞく限り、「落ちて行く」百姓の手に買ふ金のある筈がない。政府が年賦で買はせやうとする「自作農創定」は、地主に地價を支拂ふ以上、小作料より割高な年賦で絞殺しでもしなければ、國家財政の方があぶない。當今の資本は、特に、百姓の窮迫と購買力の激減とによる國內市場の狹隘化に苦んでゐる。しかも地主と資本家の政府は、土地を與へて農民の生活を改善し、消費力を高めることが出來ない。矛盾は激化した。問題は銳化する。

ブルジョア政府ではない。まして地主そのものではない。然らば如何なる階級の政府が、百姓に土地を與へ得るか？ひとりプロレタリアートの政府のみが。——そしてこれこそ、一九一七年以來、もはや理論の域を超えて歷史的事實ではないか。

また、單なる假定として、我が資本家社會において總ての農民に平等に耕地の全體が分配されたとしようか。農家一戶は幾何を得る？僅かに一町一段歩！一町一段の土地は、現在の經濟關係の下においては決して百姓を生かし得ない。問題の眞の解決は、單なる分配の變更よりも、ヨリ多く農業生產力を增すことにかゝつてゐる。そしてそれこそ、資本のために生產せずして社會のために、、、、、、、、、によつてのみ實現され得るのではなかつたか。資本主義はもはや

農業の生産力を増加せしむる能力を缺き、たゞ、、、、のみがこれをなし得ることもまた、すでに吾々の眼前の事實として、世界の農民の前に立證されつゝある。、、、、、、、、、の出現は、多くの論爭を無用ならしめてしまつた。

三　農民の搾取者と支配者

我國の資本主義は、農業生産を袖にした。だが、その吸血の蜘蛛の網を隅なく農村に張り廻してゐる。地主は、農業資本家（企業家）にはなり得なかつた。だが、農業剩餘生産物の直接的な、、、たる彼は、資本主義の發展と共に容易に自らを貨幣資本家または擬制資本家にまで高め得た。かゝる者として彼は今や都市プロレタリアートの搾取者でもある。一方、地主そのものとして彼れは、封建的な諸特權をブルジョア化して持越してゐる。

我國の小作人から地主の取立てゝゐる小作料は、謂はゆる「高利地代」である。もとよりそれは經濟地代を含むが、ヨリ遙かに多くのものを含んでゐる。小作料を取られる小作人は、自己の企業家利潤に當るものはもちろん、手間賃に當るものの多くをさへ取上げられる。その筈ではないか、收穫の四分を殘して六分を渡す慣習は、封建領主の取立てた「年貢」の型の持越しである！　此の高利地代を取立てゝさへ地主は、土地の利廻りの低さを言ふ。その筈ではないか、金高に直した小作料の増加を見越して投機的な地價を算出し、その地價を基準にしての「利廻り」である！　では、何故に小作人は此の法外な小作料を拂はねばならなかつたか？　我が農村には、封建時代からの過剩人口が持越されてゐた（法外に安い勞働力の貯水池）。都市における我が資本主義發展の速度は、その過剩人口を吸收し盡して、農村の勞力缺乏を生ぜしめる程に急速ではなかつた（歐洲大戰時の四五年間を除けば）。土地の借り手は有り餘つてゐた。爭つて借りる者は頭を下げ、頭を下げる者は頭をはられる。

高利地代は、最も端的に、小作人を貧困に突き落す。その根本は、土地分配の不平等にあり、そのまた根本は資本主義的土地所有權そのものにある。しかし所有關係の軛が玆では、生産物の分配に最も露骨に現はれる。二石作つて一石二斗は只だ取られるといふのでは、餘りにも眼に見えた××である。小作料の輕減は、かくして先づ小作人の現實の要求となり、運動となつた。鬪爭の此の段階においては、問題の根本は未だ鬪爭者の意識に上らない。だが、其の根本をすら小作人は早や半睡半醒の眼で見始めてゐはしないか?!

同時に吾々は、小作料輕減のための鬪爭それ自體が有する×××意義を見落すことは出來ない。投機的地價は、此の鬪爭のまへに激減し、地價の低落は更に資本利潤を脅かす。小作爭議は、如何なる價を拂つても抑壓されねばならぬ。抑壓は、、を、、は覺醒を生む。地主に對してのみならず又た支配的ブルジョアジーに對しても。——農民の鬪爭は政治化する。

農民全體に對する直接の支配者は地主である。かゝる支配者として

もまた地主は、封建的特權をブルジョア化して持越してゐる。農村に强く殘存する家長制的イデオロギーは、現代的地主に利用されて紙幣に變ずる。如何に長くそのイデオロギーが農村大衆の眼を覆ふて家長的地主の選擧權獨占を容認せしめて來たことか。一切の村政、一切の『公共事業』の支配、一切の半政治團體の統制における家長的地主の獨占的地位を。——それらは、村有財産の處分を通じ、水利組合や産業組合の利用を通じ、靑年團や處女會や帝國農會や在郷軍人團の利用を通じて、事毎に大束の紙幣と化した。そしてそれは更に、農民の貢納する小作米が姿をかへた紙幣に合流してますます農民を支配した。だが、小作料輕減のための鬪爭ほど急激に農民の眼光を鋭利ならしめたものがあらうか？ それは彼等をして、紙幣の潜行をさへ看破せしめた。それと共に家長制イデオロギーの急速なる崩壞が始まる。農民は今や農村における一切の政治機構に向つて疑惑の視線を放ち始めた。地主の支配が動搖する。

とはいへ、地主の支配は、政治的覇制を確立したブルジョアジーとの同盟によつて强固に維持されてゐる。此の同盟の經濟的基礎は、地主それ自身のブルジョア化であり、地代が既に資本主義の血となり肉となつてゐることである。今日の地主は只の地主でない。彼は同時に株主であり、重役であり、頭取である。大地主ほどさうである。例へば甲州の大地主には『電氣王』があり、新潟の大地主には日本屈指の銀行資本家や石油王がある。更にまた山形や岡山の名にうたはれた大地主等を想へ！ しかるにまた日本の諸財閥の殆どすべてが、大地主リストに名を連ねてゐるのだ。小作爭議の經驗は往々にして大地主が却つて寛容であることを敎へる。そうでもあらう、小作米の一割や二割は、否な小作料そのものが、彼等の全收入のほんの小いさなかけらに過ぎない。

全國三百八十萬の小作人が年々地主に貢ぐ四億の小作料、その一部は直ちに有價證券に化けて資本となり、大部分は一先づ銀行の預金となつて、いづれも永久に農村へ歸らない。預金はやがて、或は銀行により、或は地主その人によつて、各種の資本に轉化される。更にまた、銀行資本家が、土地抵當で地主に貸す。そこでまた小作料が利子と化し、その利子が更に資本に轉形する。かくして地代は、資本主義の血となり肉となり切つてゐる。小作料の減額と地價の下落、——それは單に地主の富の問題でなく、資本主義體系そのものにかゝわる問題である。農民運動は、地主のみならずまた實に資本家階級そのものを向ふに廻す。資本家＝地主の神聖同盟は、農民軍の進出と共にいよいよ誓ひを固くした。搾取の全體系に覇權を確立し得た帝國主義ブルジョアジーは、ますます鐵騎の備へを固めつゝ、すべてを賭して動搖の地主王國を防衞する。——同盟國の保護國化。

黄金の奴隷、ブルジョアジーは、農民の欲する所、社會の要求する所に從つて土地問題を解決することが出來ない。資本家ブルジョアジーは、自己の商品の買手としての農民大衆の繁榮を望んではゐる。だ

が、農民を貧困に沈めてゐるものは、土地所有制であり、その上に立てる地主支配である。農民の貧困は、土地所有制と地主支配との××を××××ことによつてのみ廢絶される。しかし、その敢行は？　それは、——地代がすでに資本主義の血となり肉となつてゐることの故に必然に、擬制的な全資本家的富の激減とに従つて生ずる金融商業産業の全機構×××に導くであらう。背に腹はかへられぬ搾取者の悲哀！　農民の窮乏は之を「與へられた事實」として一切の政策が立てられる。だが、例へばカルテルの生産制限による價格の釣り上げがますく農村の購買力を削るのと同じやうに、農民運動の彈壓はいよいよ、、、を激成する。此の際限もなき矛盾の擴大再生産の螺線狀展開を、その歴史的、、に導いて全民衆を一切の搾取關係から解放し得る者は、鎖の外に何物をも失はぬ戰鬪的社會主義プロレタリアートのみ。これのみが支配的ブルジョアジーを××××××。

地主のブルジョア化は、如何にその程度が進んでも、地主の消滅を意味しない。社會的生産力の發展を抑止する土地所有制は嚴然たる存在として殘る。此の蕃的中世紀から持越された社會的矛盾の徹底的解消は、被搾取農民のブルジョア民主主義的要求、そのための闘爭の發展によらなければ實現されぬ。そこに農民運動の最も深刻な社會的意義がある。此上もなく重要な進歩的役割がある。たゞ、社會的地位が中途半端なことを特徴とする農民階級は、獨力では到底この政治的役割を演じおほせない。すでに資本主義が支配的な生産關係をなす社會において、ブルジョアジーの[illegible]一切の[illegible]た時において、[illegible]と爭ふには農民は[illegible]にも無力である。農民はプロレタリアートと結ばねばならぬ。××××によつて農民のブルジョア民主主義的要求を完全に充たすこと、それがプロレタリアートの歴史的任務の一となる。

種々なる客觀的條件が、資本と闘ふ勞働者と農民との同盟を必然ならしめてゐる。農民は、農村にゐながらも、資本の搾取をひしくと感ずる。肥料の獨占價格、借金の高利、米仲買や爾商人の暴利。それにまた農民の子女の大軍が賃銀勞働者として直接に資本の搾取下に立つ。否な、何百萬といふ百姓それ自身が既にひまくの勞働者稼ぎを餘儀なくされてゐるではないか。彼等は、半プロレタリアである。日本における著しい特徴は、農村勞働と都市勞働との密接な交錯である。例へば都市勞働者の賃銀のよしあしは、直ちに農村の半プロレタリアの賃銀に響いて來る。勞働運動の勃興が、農民のイデオロギーに與へた變革は、農民運動への直接の動機をなした。勞働者と農民とを打つて一丸とする政黨の急速なる成立、——この世界に異例的なる現象は、日本の特殊事情が然らしめた。

意識において常に農民に數歩を先んずる都市プロレタリアとの結合が緊密になり、協同の闘爭が發展すればするほど、農民は「地主の支配」の政治的根源を見究める。ブルジョア政黨の標語が「議會中心主義」であると「、、、、主義」であるとに拘らず、現實の政治は資本

家中心である。いかに地主が資本家を兼ねるにもせよ、地主としての地主の支配——その下に直接に農民が立つ——は、ブルジョア政權に從位し、依存してゐる。我が帝國主義ブルジョアジーは、すでに反動のブルジョアジーとして、農民の急進的民主主義的要求を峻拒する。その點において地主そのものに劣らない。たゞ、自己の市場問題の緩和のため、自己の仇敵プロレタリアートから農民を引離すためにのみ、若干の欺瞞的讓歩をもつて農民に働きかけて行く。そしてたゞ政治的無産階級のみが、此の狡猾なブルジョアジーを、土地問題解決のための決定的闘爭における最惡の敵として農民の前に曝け出す。

今日の貴族及び文武の國家官僚と、彼等の巣窟たる、、的諸制度物は、單純に、地主勢力の政治的表現ではなく、ましてブルジョアジーに對する基本的政治的對立物ではなく、却つてます〳〵ブルジョアジーの帝國主義的支配の、、と化しつゝあるが、而かも尚ほ比較的強く地主的要素を代表してゐる。例へば多額納税議員制は、かつて大地主が得たる政治的特權をブルジョア化して持越してゐる。これらの制度物とその人的要素とは、自身の存在と相容れざるが故に一切の民主主義的傾向に對して最も頑強に抵抗し、且つ家長制イデオロギーの選手として無二の地主擁護者である。直接的に地主の支配と闘爭する農民は、如何なる場合にもプロレタリアートのものであるところの、政治の民主主義化の任務は、我國においては、直接的に地主の支配と闘爭する農民を同盟軍としてのみ遂行されるであらう。

たが、我が帝國主義國家の政治的重心は既にブルジョア議會に移つた。「普選」の實施によつてブルジョアジーはいよ〳〵政黨政治を確立した。そして我が二大ブルジョア政黨においてこそ、金融資本を指導勢力とする資本家＝地主の政治的ブロックは最も明確な形態をとつてゐる。此のブロックに對しては必然的に先づプロレタリアートを指導勢力とする勞働者＝農民の「協同戰線黨」が對置された。そして議會闘爭においてこそ我が農民は、プロレタリアートの指導の下に、ブルジョア國家機關に直面し、自身の解放のための闘爭の意義と方向との眞の所在を學びつゝ、ます〳〵強大なる政治勢力に結成されて行くであらう。かゝる過程は、地主の支配に對する農民の闘爭過程であると同時にまた實に、、主義そのものに對する闘爭過程でなければならぬ。

四　農村半プロレタリアと貧農と中農と

有らゆる機會に反覆強調したやうに、農民の解放は、ブルジョア民主主義的要求の徹底的實現は、農民運動の進歩的役割と歴史的任務との遂行は、農民がプロレタリアートと政治的に結合して其の指導の下に闘爭することなくしては絶對に不可能である。

我が農村には統計上すくなくとも三十七萬人の純然たる農業プロレタリアがある。その他、我が農業の特異性と農村家族制とによつてモディファイされながらも尚ほたしかに農業プロレタリアと認むべきものを加へれば優に二百萬人に達するであらう。此のプロレタリア層に、言ふ

までもなく、農民と都市プロレタリアとの結合において最も重要な役割を演ずべき社會的地位にある。次に、我國の農家五百五十萬戸のうち少くとも四百萬戸は、貧農層に屬する。これは、第一に全く土地を有せざる者、第二に家族の全勞働を適用するには不足なる程度の僅少の土地をしか有たない者を含んでゐる。彼等の多數は小作農である。更に此の貧農層の大半は、戸主もしくは子弟が被傭勞働をも營むところの半プロレタリアで、極貧農に屬する。これらの貧農は、その根本要求を土地問題の徹底的解決に見出すところの急進ブルジョア民主主義者として、本質的に、政治的プロレタリアートの同盟軍である。貧農とプロレタリアとの不一致は、貧農が有する若干の私有財産から生ずる。しかしこの不一致は極めて微少で、階級的な利害共同の前に消滅する。貧農の「獨立」は、全く外見に止つてゐる。

我國の農家のうち中農と見做すべきものは恐らく百萬を超えないであらう。中農は家族の全勞働を適用するに足るだけの土地を所有し、土地からの收入はほゞ一家を養ふに足り、時には若干の剩餘を生ずる。此の剩餘は、少くとも豐年時には、資本に轉化されてしば〱他人の勞働を雇ふに足るだけの額に達する。中農はまたしば〱所有地の一部から僅かな地代を引出してさへもゐる。中農と都市プロレタリアートとの階級的利害の不一致は、主として私有財産制を基礎とした商品經濟の利害關係から生ずる。即ち、穀物の賣手と買手と利害對立——中農本來の政治的立場は、急進的ブルジョア民主主義といふよりは寧ろ自由主義的改良主義に傾いてゐる。

我國において地主層と區別し得るところの富農——兩者の間に明確な限界を置くことは困難だが——は、僅少であつて、恐らく二三十萬戸の間であらうか。富農は、農業資本家として地主の味方であるが、しば〱大地主の壓迫を感じてもゐる。

ブルジョア民主主義を徹底せしめることは、貧農大衆の根本的要求であると同時に、プロレタリアートそれ自身の歴史的任務の一つである。此の要求の實現、此の任務の遂行のために、プロレタリアートと貧農とは强固なる同盟を結ぶことが出來、また結ばねばならぬ。だが、ブルジョア民主主義の徹底化は、決して一擧には實現されないであらう。例へば、政治的機構の民主主義化乃至は中央に惹起された××××から、地方全般における土地問題の徹底的ブルジョア民主主義的解決の完了に至るまでには、必然に、多かれ少なかれ時の間隔が横はるであらう。そして前者から後者への過渡は、プロレタリア×××××なくしては絶對に不可能である。そこに、急進民主主義的貧農と××××プロレタリアートと同盟を結ぶ絶對的な必要が生ずる。後者は、貧農大衆の支持なくして×××××することは不可能であり、前者は、プロレタリア××の力によらずして自己の根本要求を實現することは出來ない。そしてプロレタリア××××は即ち帝國主義×××を意味する。プロレタリアートは、帝國主義×××を根本的な戰略的目標とするのでなければ、ブルジョア民主主義の徹底化をさへ實

現することが出来ない。

けれども、プロレタリアートは、ブルジョア民主主義×××その極限に押進めるまでは、ひとり貧農大衆のみならずまた中農大衆をも含めた全農民と共に進まねばならぬ。そして中農大衆と共に進み得るための前提の一つは、貧農との確乎たる同盟である。中農は、一方では支配的ブルジョアジーと大地主とに對する反抗を餘儀なくされ、且つ土地問題のブルジョア民主主義的解決に利益を見出しながら、他方では自己の小所有者的本能と偏見とのために、プロレタリアートの味方たることを躊躇逡巡し、しばしばブルジョア＝地主陣營への捕虜となる。中農をして積極的にプロレタリアートに敵對せしむることは、貧農大衆の間にさへ動搖を惹起し、プロレタリア×××の任務の遂行にとつて致命的な打撃となる。プロレタリアートは、中農の要求を能ふ限り支持し、若干の讓歩を惜まないことによつてのみ、プロレタリアートは、中農をブルジョア＝地主陣營から引離して自己に追隨せしめ得るであらう。×××プロレタリアートの積極的同盟者たり得ない中農は之れを中立化せしめねばならぬ。だが、中立化せしめるとは、中立してくれと頼むことではない。積極的に働きかけて追隨せしめることである。中農は、プロレタリアートの闘爭が決定的な瞬間に近づく時に最も激しく動搖し、逡巡せんとする。そしてプロレタリア×××によつて農村におけるブルジョア民主主義が徹底せしめられる時まで動搖逡巡の傾向を續け、徹底によつて××××××が確立された時に始めてプロレタリアートの同盟者たらうとする。

××××プロレタリアートは、貧農大衆のブルジョア民主主義的要求を、社會的に正しい要求であると認めて之れを支持するのではない。たゞ、貧農としては誠に無理もない要求であると認めて之れを支持し、且つ其の要求の徹底的實現は、現在の社會的條件の下において、社會的政治的進歩の必然的な一段階であると認めるが故に、その實現を自己の任務の一つとする。その實現は、プロレタリアート自身の政治的實力を異常に強めると共に、その實力は、土地問題のブルジョア民主主義的解決が尙ほ不十分であり、ヨリ高度の解決法のみが眞に農民大衆を滿足せしめ得ることを、事實によつて立證することを可能ならしめる。社會主義プロレタリアートが、農民のブルジョア民主主義的要求を支持するのは、ペテンにかけるためではない。ブルジョア流の味方で農民を「利用」せんがためではない。中農の場合も、貧農に準ずる。

以上に含意されたる如き飛躍の時期において歴史的、、を遂行せしめる力の源泉である所の「勞働者農民×××」から「無産××××」への過渡は、時間的な或る一點を確然たる境界として生ずるのではなく、前者から後者への轉化、生長、發展として生ずる。從つてそこには、件の力の源泉が、兩者の性質を併せ備へる一定期間がある。すでに帝國主義×××が實現されても、プロレタリアートが全農民と共に進むあひだは尙ほ、ブルジョア民主主義×××である。かゝるあひ

だにや、特に貧農とプロレタリアートとの同盟を、特殊の目的のために具體化し強力化するにつれ、××は「無產×××」の性質を帶びて來る。

、、なる歷史的任務の、、を前途に有するところの我が勞働者＝農民の運動は、中農の問題を重要視せねばならぬ。今日までの我が農民組合運動及び無產政黨運動は、はやくも、中農の支持を得ること必ずしも至難でないことを學んでゐる。中農は、都市勞働者との間に若干の利害對立があるとはいへ、獨占價格、重稅、帝國主義國家の、、、戰爭の負擔と脅威等、資本主義的搾取の多くの要素がそれを打消してゐるばかりでなく、農村における「地主の支配」との對立に於いて貧農の味方となり易い。勞働者と貧農との結合を阻害せざる限り、また農民運動の指導權を中農のものたらしめざる限り、更にまた貧農の要求を犧牲にせざる限りにおいて、中農の要求に對して積極的な働きかけを續けなければならぬ。

五　當面の問題

農民運動が、階級意識ある都市プロレタリアと結びついて其の戰鬪的な指導の下に進むことが如何に必要であるかは、農民鬪爭の最も初歩的な段階においてすでに經驗によつて決定的に立證されてしまつた。小作米輕免運動が「立入禁止」や「立毛差押」に對する鬪爭に發展し、鬪爭の大衆的展開と並んで地主＝官憲の暴壓が組織化し計畫化し熾烈化するや否や、「勞働者と共に」の要求は早や最も低意識の農民すらの卒直な要求となつてしまつた。從來、偶發的、非計畫的にしかなされなかつた勞働者の小作爭議應援に、今や組織的、計畫的、常住的な活動にまで之れを高めんがため、適當な機關を創設するの必要に迫られてゐる。かゝる機關は、地方的に可能なる限り、常設的な共同委員會の形態をとるであらう。

だが、かゝる日常鬪爭における結びつきは、結局においてそれが政治的同盟の結成と擴大と強力化とに寄與する如く發展せしめられる時にのみ階級的意義を有ち來たるべきことは、上來展開し來たれる農民運動の根本問題の見地から疑ふ餘地がない。かゝる同盟の眞に強力なる梃であり、挺子であり得るものは、ひとりプロレタリアートの階級的前衞あるのみである。前衞は、最も意識的、獻身的なる優秀分子の結成體として、正しき理論と戰鬪的行動との實踐的結合である。かゝるものとしてのみ前衞は、前運動を指導し得る。前衞の結成と發展とは運動の發展の一定段階における先進分子の意識的努力によつてのみ可能であるが、かゝる努力は、理論的及び實踐的の鬪爭を通じて、結成及び發展のための條件を創設し利用する努力を含まねばならぬ。抽象理論の宣傳、もしくは日常鬪爭のうちに緊密に織り込まれざる何等かの組織によつて、外部から××意識を注入してもつて前衞分子をつくり出さうとする努力は、セクトをつくつて前衞をつくらない。特に農民大衆に對しては「理屈を投げる」ことの不可、農民のための異常なる犧牲的獻身的行動を事實において示すことの絶對的必要は、レー

ニンの反覆強調した所である。かゝる方法と努力とによつてのみ、農村の戰鬪的先進分子そのものを前衞分子にまで高め得るであらう。また、かくしてのみ勞働者＝農民の政治的同盟は、階級的前衞の楔によつて刻々に強く高められて行く。

我國における勞働者＝農民の政治的同盟はすでに大衆的無產政黨の形態において實現し、發展しつゝある。此の政治的團結の「母體」は勞働組合と農民組合とであつた。大衆政黨結成の過程は、「政治鬪爭」の重要性の機械的昂揚と、大衆團體の分裂を是認し促進する對立鬪爭主義の謳歌とを伴つた。農民組合の分裂と、組織運動の不振とは、その犠牲であつた。

農民運動の政治的運動化、農民の鬪爭意識の政治への轉向は、農民運動の根本的要求の一であり、不斷の努力の的でなければならない。また、現に最も緊張せる努力を要求してゐる。だが、かゝる轉向を、「全無產階級的政治鬪爭」意識等、等の抽象理論の宣傳、それを手段とする「意識の轉換」によつて一擧にして實現せんとする試みは、農民組合の日常鬪爭の閑却と阻害とに結果すると同時に、組合の活動分野と政黨のそれとを混同して全運動を混亂に陷らしめた。農民組合は、農民の解放のための鬪爭を組織し發展せしめる鬪爭機關の特殊の一形態として、それ自身の特殊の任務をもつてゐる。それは、農民の日常當面の要求から生ずる最も端緒的な鬪爭を組織し發展せしめることにある。此の、農民運動の組織のうちでも最も端緒的な組織たる農民組合は、それ故にまた最も廣汎な組織でなければならず、最も廣汎なることによつてのみ其の固有の任務を果し得る。かくして、我が農民運動當面の要求の一は、組合それ自身の發展のために、組合それ自身の活動を活潑ならしめることにある。一般的に言つても我が農民の組織運動は、客觀的條件の良好なるに比して著しく後れてゐる。だが、此の組織運動の成功のための當面の第一前提は、分裂の根據なくして分裂したる農民組合を急速に合同せしめ、更に全國的一大農民組合の結成にまで直進することでなければならぬ。

農民組合は、それが端緒的なる組織たることからして當然に、勞働者農民の政黨の一般的指導の下に立つべきである。けれども、農民組合の合同が、大衆政黨の合同に先だつて行はれねばならぬ限り、組合員の政黨加入の個人的自由が條件とされる。此の點からしても、勞働者農民の大衆政黨それ自體の合同が急務となる。だが、現在の諸條件の下にあつては、農民組合の合同こそが急速に政黨をも合同に齎すであらう。

農民組合の活動と鬪爭とは、農民解放のための鬪爭全體のそれ〴〵の發展段階に適應した形態と內容とを有たねばならず、一定の段階においては特に地方的情勢が顧慮されねばならぬ。かくてのみ、運動の初期において陷り易き「公式主義」と劃一主義、乃至は謂ゆる「戰術の硬化」は克服されるであらう。工場と異つて農村にあつては、最も端緒的な鬪爭さへが、しば〳〵政治的性質を帶びて現はれ、かゝる鬪

爭がしばしば組合組織への機機となる。農民組合がさうした機機を提ふべきことは言ふまでもない。しかし、それによつて其處に組合の成立を見た後は、同種の政治的鬪爭は之を政黨の活動分野に移し得る。かくすることは、政黨の發展をかち得る所以であると同時に、組合をして絶えずその獨自の活動の續行と發展とを可能ならしめつゝ、政治鬪爭の學校、國士の貯水池たる至要の役割を果たさしめるであらう。政治に對して敏感であり、政治的、、を組織し利導し得ることは、組織農民中の活動分子の重要資格である。

過去一年間の分裂狀態は、農民大衆をしてその「慘害」を痛感せしめ、合同への要求は今や澎湃として湧起しつゝあゝ。急速なる合同の促進、——それこそ、今や前衞分子が摑かむべき「かの一環」である現情勢の下における農民組合及び無産政黨の合同統一の運動の最先頭に立つことこそは、前衞分子が自らを大衆と結びつけ、合同統一によつて急激に強力に展開するであらう諸戰線に階級の旗幟を高揭するための必然且つ不可缺の準備を意味するであらう。

——締切に迫られて單なる要約に止めるを餘儀なくされた「當面の問題」の一項は、最近の機會において別個に展開するであらう。

アリストテレースの『流通の正義』＝マルクスの其解釋に關する疑（其四・完結）

附　河上博士等譯資本論中或重要なる不正確又は誤謬について

福　田　德　三

（二十三）

第三章　配分の正義

先づ、ア氏の原文を出來るだけ、綿密に譯出して見る。

『不正義者とは、均等の原則を破る者の謂であり、不正の行爲とは、均等を破る行爲の謂である以上、二個の不均等の中間に位するものの存すべきは明かである。其れは即ち均等である。過多若くは過少の存する行爲に於いては（また同時に）、均等の行爲が存すべき筈である。不正義とは、不均等の謂であるならば、正義とは、均等の謂でなければならぬ。此れは議論を須たずして、誰人も認むるところであらう。而して、均等は、同時に、中間的のものであるが故に、正義は、また一の中間的のものであるべきである。

均等と云ふことは、少くとも、其れが二つのもの丶間に存することを意味する。從つて正義は中間的のものであり、また均等のものであると共に、其れは、必然的に相對的のものであつて、或る人々に取つての正しいことであるべきである。

中間としては、過多と過少との二つの物の間に横はる。均等としては少くとも、それが相均からしむべき、二つの物が、存することを前提する。而して最後に、正義である限り、其れは、少くとも、或る種

の人々二人以上の存在を前提してゐる。

從つて、正義（配分の正義）は少くとも、四つの要項あることを、前提するものである。何となれば、此正義の當てはまる當事者は、少くとも二人の人であり、而して、此正義が體現せられて、配分せられる對象は、少くとも二個の物であるから。其れと同じく、正義と同一なる均等は、當該の人々の均等、當該の物々の均等である。蓋し、二つの物の相互の關係は、二つの人の相互の關係である。人々が互に均等でないならば、彼等の受くる分け前も、また均等でないであらう。而して、其れが爲めに、相等しい者たちが、不均等な分け前を得るとか、不均等な者たちが均等な分前を得るとかの爭や苦情が起る。此の道理は、（物の側でなく、物の配分を受ける）人々の功績の上から見ても同樣である。（又譯、配分は、各人の功績に從つて、これを爲すべしとの原則から見ても同樣である）。何となれば、正しき配分とは、何かの意味に於ける功績に從ふべしとは、すべての人の認むるところであるから。

乍去、この功績の標準を、何に求むべきかについては、政體の異るに從つて、異つて解釋されてゐる。民主政國に於ては、自由の身分を以て其標準とし（自由民のみが、すべての財と名譽とを享受すべきものなりとして）、寡頭政國に於いては、富又は高貴なる出自のみが、其標準たるべしと爲し、貴族政國に於いては、（個人的）才能（徳性）のみが、其標準たるべしとしてゐる。

かくて、（配分の）正義は、或る比例に存することを知る。（其比例とは、單位いくつかを含むところの數の一性質ではなく、すべての算し得る大さ一般に具る一性質の謂である）。

比例とは、二つの關係の均等の謂であつて、少くとも、四箇の係數を有つものである。これは proporito discreto については、明白なことであるが、Proportio continuo についても、四箇の係數が入用である。何となれば、其れは、一の係數を二度使用し、これを、二箇の係數として取扱ふものであるから。例へば、線Aの線Bに於けるは、線Bの線Γに於けるに等しと云ふとき、線Bは二回用られるのであつて、係數は明かに四箇であるのである。

これと同樣に、（配分の）正義は、少くとも、四個の要項が前提するものである。一の對偶間の關係は、他の對偶間の關係に均しい。一の對偶は、人と人との間の關係であり、他の對偶は、物と物との間の關係である。何となれば、人と人との間と、物と物との間には、同樣な

差別が存するから。すなはち、A（人）のB（物）に於けるは、Γ（人）のΔ（物）に於けるが如くなりとすれば、其を言ひ換へて、A（人）のΓ（人）に於けるは、B（物）のΔ（物）に於けるが如しと言ひ得るが如くである。』以上一一三一b第六行まで

これにつゞく數節は、難解な此の第三章中にあつても、殊更らに難解なもので、恐らく錯簡、脫漏、又は混入が著しい部分に屬するのであらう。私は、到底原文について、譯筆を下すことが出來ない。又た拉、佛、獨、英多數の譯本を其れ〳〵對校して見たけれども、何れも其れ〳〵の解釋を執つてゐて、これを調和せしめることが出來ない。よつて以下、重にロッス氏の英譯を賴りとし、其譯文を逐字的に譯出して見る。但し式はすべてア氏原文通りにあげる。

『されば、全體は、全體と、同じ比例に於いてある。A（人）＋Γ（物）：B（人）＋Δ（物）かく、配分の結果を對偶することは（而して若しも各項がかく結合せらるるときは）、正しき結果を生ずる。福田訳。ガルヴェの譯は次の如し。『全體が全體に於けるが如く。部分は部分に對する。これらの關係が正しき配分を結び付ける。而して、それは、玆に示めす通りに、これら關係が結び付けられるときに、生ずる』。バルテレミー・サン・イレールの譯は、次の如し。『從つて、要項二個の合計は、他の要項二個の合計と、同一の關係にある。而して分割した二項と、其れ〳〵其れに從ふ二項とを加へれば、一部分と他の部分とから』此の合計が作られる。此の法則に從つて、各項を相互に結付けるときは、其合計は、完全に正義に合するものとなる』。

AをΓと、BをΔと結び合はすとは、配分に於ける正義である。イレールの譯、『配分の正義の典型である。』ガルヴェの譯、『配分の正義の作用である。』ロッス氏の註。『配分の正義の問題は、配分すべき名譽又は報酬を、配分に與るべき人々の功績相互の關係に應じた關係に立つところの諸々の部分に分割すること、これである。即ちA（第一の人）：B（第二の人）：：Γ（第一の部分）：Δ（第二の部分）とすれば、これを言ひ換へて、A：Γ：：B：Δとすることが出來る。而してまた、これを結び合せて、A＋Γ：B＋Δ：：A：Bとすることも出來る。換言すれば、かく立てられた地位は、當事者たちの相對的功績に相應するのである』。

此種の正義は、中間的のものである。而して（これに對應する）不正義は、此の比例を破るものである。何となれば比例的とは中間的のことであり、而して、正義は、比例的のものであるから。ガルヴェの譯、『此の正義は、二つの不正義、換言すれば、二つの非比例的な配分の間に位する中間である。イレールの譯、『此の種類の正義は、二極端の間に於ける一の中間であつて、これなくしては、二極端は、比例に持來され能はぬのである、何となれば、比例とは一の中間の謂であつて、而して、正義は常に、比例的のものであるから』。

（數學者たちは、此種類の比例を、幾何的と名ける。何となれば、全體の全體に於けるは、一の部分が他の部分に於ける如くなりとは、其れが幾何的比例に於てあることを意味するから）。此の比例は、Proportio continuo ではない。何となれば、我々は、一の人と一の物との兩者を言表はすべき單一語を有たぬから。』ガルヴェの譯、『此の比例は、決して、相關的比例ではあり得な

い。何となれば、名譽又は財貨の配分に際しては、配分を受ける人と配分される物とは、數の上に於いて、比例に於ける同一の項を爲すものでないから。』

かく、（配分に於ける）正義は、比例的のものであり、不正義は、非比例的のものである。從つて、一の項は過多に、他の項は過少になり得ることは、實際上見るところである。即ち不正を行ふ人は、財を過多に有ち、不正を行はれた人は、財を過少に有つ。（財の反對に）損害（善き財の反對に、惡しき財）の場合には、其關係は、右の反對となる。何となればより少き損は、より大なる損に對しては、一の（善き）財であり、より小なる損は、より大なる損より希はしいものであり、希はしいものは、財であり、而してより希はしいものは、より大なる財であるが故に。』

以上が、正義の一種（たる配分の正義）である。（以上一一三一b第二十四行まで）

（二十四）

以上、私が辛ふじて譯出した第三章は、極めて難澁なものであつて、其解釋については、古來異說紛々たるのである。また、其の學問上の價値についても、極端から極端までの評價が行はれてゐる。或學者たちは、此配分の正義の一條は、プラトーンの其れとは、到底比較するを得ないもので、學問上さまで重要視すべきものでないと主張し、他の學者たちは、其の正反對に、此一條は、實に深邃な思惟の產物であると稱へてゐる。

經濟學の上に、此一條を活用することを試みたのは、前にも一言して置いた通り、實に、ノイマン教授に始まるのである。ノイマン教授の研究あつて、始めて、紛々たる是非の論は、若干の解決を見たと言ひ得る。少くとも、財政學の上に於いて、殊に租稅負担原則の考究に於いて、ア氏の立論は、極めて深い示唆を與へるものであることは、ノイマンの研究あつて以後、モハヤ疑を容れないものと言つても、大過ないと言ひ得ると、私は思ふ。

バーネット氏は、此の第三章の論旨を要約して、次ぎの如く言つてゐる。『ア氏が先づ取扱ふものは、配分の正義である。彼は中間の原則が此種の正義に適用することを示さんが爲めに、A：B：：Γ：Δ　$\frac{A}{B}=\frac{Γ}{Δ}$ てふ比例を以て、此種の正義を言表す式と爲す。これは、希臘人が『幾何的』比例と名けたところのものである。第二の正義は、普通、匡正の正義 "Corrective Justice" と誤譯されてゐる。此誤譯は、ア氏立論を解釋するに方つて、多くの混亂を惹き起した。此種の正義は

obligationes ex contractu（契約から生ずる諸々の債務）を支配すること obligationes ex delicto（不法行爲から生ずる諸々の債務）を支配すると全く同様なのである。茲に用ひられる語のチオルソウン τὸ ὀρθὸν の眞の意味は、匡正（ἐπανόρθωσις）手段によると否とを問はず『調節する』ことであつて、スコラ學者が、これを譯して、iustitia directiva としたのに遙かにより正確である。元より、法廷の命によつて課せられた損害賠償や刑罰を調節する正義を名けて、匡正の正義 iustitia correctiva と呼び、商品の交換や其れに類する事項を調節する正義をトマソ・ダクヰノに從つて、流通の正義 iustitia commutativa と呼ぶのは、何等妨げないことであらう。しかし、此くすると、此兩者共に（ア氏に從へば）同一の原則、即ち算術的比例の原則の應用にすぎぬ事實を、不明瞭ならしめる嫌あるを免れない。

我々は、Α−Β＝Γ−Δ と云ふ式を、比例とは名けない。しかし、これはプサゴレイオイ學派で認められた μεσότητες（比例）の一であつて、アリストテレースの時代に在つては、其れは、一般に ἀναλογία と呼ばれて居たのである。但し、其れは本來は、幾何的比例のみに限られてゐたのであるけれども。『算術的比例』なる名稱を用ゐて置くことは、我々にとつて便利であらう。（前掲書二〇三頁）

私の此の小い論文に取つて、此第三章が關係を有つのは、一に在バーネット氏の示した通り、幾何的比例と算術的比例との區別に關する點である。而して、其れのみが、マルクスのア氏解釋とも、關聯してゐるのである。更らに、右バーネット氏の言は、後に論及するところの、『流通の正義』別在肯定否定の吟味に、關係を有つものであることを記憶し置かれんことを、茲に讀者に希望して置かねばならぬ。

グラント氏の解説は、バーネット氏の其れよりも、更らに詳細を極めてゐる。今其大要をあげて見よう。

『第三章は、配分の正義を取扱つてゐる。其の要點は、次ぎの如くである。正義は均等を含む、其意は、二つの物が均等であることのみでなく、正義の行はれる二人の人が均等であることこれである。即ち、それは、四項より成る一の幾何的比例である。ΑΒを以て人とし、ΓΔを以つて配分せられる分前とすれば、ΑのΒに於けるが如く、ΓはΔに於けるのでなければならぬ。而して、正しき配分から生ずる結果は、Α＋ΓのΒ＋Δに於けるはΑのΒに對する元來の關係と、同一比に於てあらねばならぬ。換言すれば配分の正義とは、各市民の功績に從つて、國家に於ける財産、名譽其他を配分することに存するものである。ア氏の本文に於いては、明言はしてないけれども、此原則は（一）現

實的には、國家によつて獲される報償のすべての場合に、適用され、（二）理想的には、財産の配分、社會上一切の表彰に對する一の統制原則として、より廣き適用を有つものと見へる。此學說の歴史に關しては我々は、それが既にプラトーンによつて、世界に支配する調和並に比例の大觀念に於いて、描き出されてゐることを見出すのである。『ゴルギアス』五〇七E、並に『法律論』五五七B、參照。

配分並に匡正の正義てふ語が、アリストテレースの『政治學』に見へないことは、（此の區別並びに其れに關聯する論點は、事實に於いて、倫理學よりも、むしろ、より多く政治學に屬するにも拘らず）、注目に價する。乍去、『配分の正義』てふ名稱こそ顯はれて居らぬけれども、其の觀念は、十分に、『政治學』第三篇第九章に說かれてある。（中略）更らにまた、『配分の正義』てふ概念は、プラトーンから一の概念として受取られ、アリストテレースによつて、其『政治學』に於いて、更らに進んで研究せられたものが、ア氏體系の後の發展に於いて、彼の生涯の終期、又はユーデモースによる彼の說の祖述に於いて、一の套語に型化せられたものらしく見へる。（中略）

ア氏の結論（『政治學』第三篇第九章第十五節）は曰く、國家に於ける道德並に善行の共同資財に、最も多く貢獻するものは、他の種類の優越に其の要求を置く人々よりも、より大なる分前を、公共の共有に於いて有する權能を持つものであると。」

（二十五）

第四章　匡正の正義

先づ前例を襲つて、ア氏の原文を譯出する。

『殘る一つは、匡正的の其れであつて、其れは、任意並に非任意兩樣の諸取引と關聯して起るものである。此種の正義は、前述のものとは異る特殊の性質を有つものである。以上既出。本文（其二）九一頁。

前に述べた、公共諸財の配分に關する正義（配分の正義）は、前述の種類の比例（即ち幾何的比例）に從ふものである。（何となれば、一の公共財團の共同資金について、配分を行ふ場合にも、各員が其の共同資金に寄與した割合に應じて、其配分は行はれるものであるから。）而して、此場合に於ける不正義とは、此の比例を破るものを稱して云ふのである。乍去、人と人との間に於ける諸取引（契約）に於ける正義は、同じく均等の一種であり、（其反對に）不正義は、不均等の一種である。しかし、其均等は、前述の比例（即ち幾何的比例）に從ふ

のでなく、算術的比例に從ふものである。此條、ロルフエスに從ふ。但し疑あり。

何となれば、此場合に於いては、當事者の身分の差は何の關係を有たない。即ち善人が惡人を欺くも、惡人が善人を欺くも、一方が他方の財産又は妻女を奪ふ限りは、其間何等の差別は存しないから。法律は、唯其の不正の行爲其ものの本質のみを眼中に置くので、其當事者は全く相均しいものとして、これを取扱ふのである。即ち法律の認むる區別は、單に、誰れが不正を働き、誰が不正を蒙つた、誰が損害を與へ、誰がこれを蒙つたかの一事のみに存するのである。裁判官は其の不正義によつて惹き起された不均等を、均等に導くのみである。例へば、一人が他人に傷を蒙らしめた場合、若くは、一人が他を殺し、他が殺された場合には、其の被害と犯行とは、不均等に配分されたものである。裁判官は、加害者の利益を奪ひ取る刑罰を課するによつて、此の場合、均等を恢復するのである。何となれば、『損益』なる語は、一般に、此くの如き場合について用られるのであるから。但し、其れは或場合については、適當な語でないこともあらう。例へば、他人を毆打する人を稱して、利益を得たりと云ひ、毆打せられた人を稱して、損を蒙つたと云ふが如きは、妥當ではない。しかし、被つた害の大さを評價するに當つては、損得てふ語は、妥當なりと云ひ得る。

過多と過少との中間は、均等である。益と損とは、相互に、反對の意味に於いて、過多であり、過少である。即ち善のより多く、惡のより少いのは、益であり、其反對(善のより少く、惡のより多いの)は、損である。此兩者の中間は、即ち均等であつて、これを、正義と名くるのである。從つて、匡正の正義は、損と益との中間に存すと云ひ得るのである。

(匡正の正義は、均等の設定、換言すれば、一方の益と、他方の損との中間の設定の謂に外ならぬのである。)從つて、人々は、(損益について)爭を生ずるときは、裁判官の許へ赴くのである。裁判官の許へ赴くのは、正義の恢復を求むるからである。何となれば、裁判官は、正義を權化する人格であるから。

而して人々は中間者(不偏不黨)たる裁判官を求める。而して或國國に於いては、彼等は、裁判官を、仲介者(中間を與ふる者)と呼ぶ。それは、人々は、中間的のものを得るは、正義を得る所以であると、前提するからである。かく、裁判官は、中間を與へるものであるから、正義は、また、中間的のものであるべき筈である。

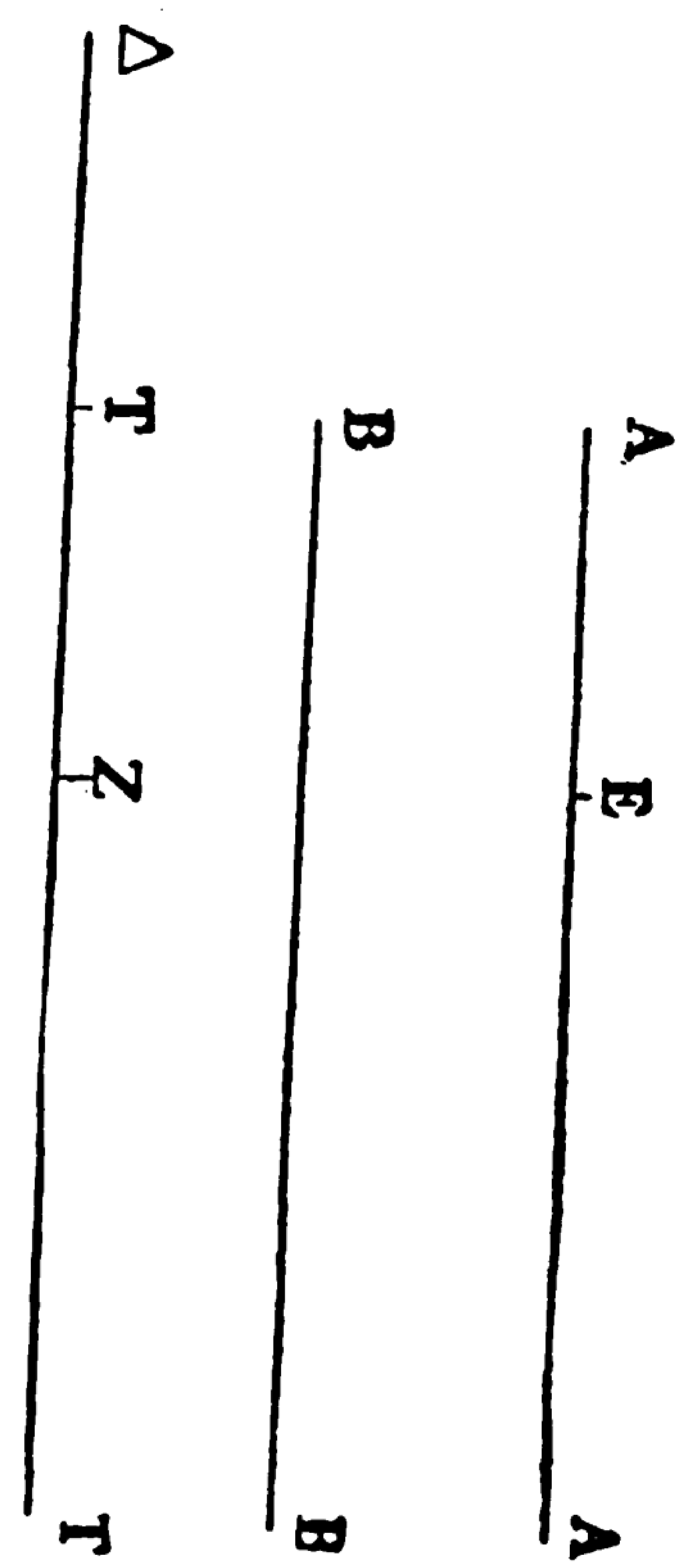
裁判官は、均等を恢復する。これを譬へて云へば、二つの不等分に分割された一つの線について、裁判官は、半分を超過する部分から、其超過分を取り去つて、不足せる他の部分に加ふるが如き、これである。かくて、全體が、二等分せられたとき、人々は、各其の分を有つと云ふ。即ち各人は均しきものを有つの謂である。

均等は、算數的比例に從つて、過長線と過短線との中間的比例數たるものである。

從つて、また、正義を、ヂカイオン δίκαιον といふ。此語は、二等分ヂハ δίχα といふ語から來るのである。ヂカイオンは、ヂハイオン δίχαιον に通ずる。而して、裁判官、ヂカステース δικαστής とは、二等分する人、ヂハステース διχαστής の謂である。

二等分の一方から、或るものを控除し、これを他方に加へるときは、他方は其分の二倍だけ、一方を凌ぐことになる。また、一方から控除したまゝで、これを、他方に加へないならば、他方は、唯其部分一箇だけ、一方を凌ぐのである。前の場合に於いては、附加せられた方は、中間を凌ぐこと、部分一箇であり、而して、中間は、取り去られた方を凌ぐこと、また部分一箇たるべきである。これによつて、我々は、過多を有つものから取り去らねばならぬ如くに、過少を有つものへは附加せねばならぬことを、知るのである。即ち、後者に對しては、中間がこれを凌ぐ分だけを附加せねばならず、前者に對しては、それが、中間を凌ぐ分だけを、取り去らねばならぬのである。

今此理を説明して見よう。



AA BB ΓΓ三線は相等しいものとする。AA線からAEなる部分を取り、ΓΓ線へΓΔなる部分を加へるとする。然るときはΔΓΓ線のEA線を凌ぐことは、ΓΔ ΓZ二箇分であり、BBを凌ぐことは、ΓΔ分である。以上一一三二b第九行に至る。

（此間の一句後章と重複す、省之）

さて、玆に用ゐた損益と云ふ語は、任意的取引から來る語である。何となれば、己れの受く可き分より多くを得ることは、利益と呼ばれ、己れの本來分より少くを得ることは、損失と呼ばれる。例へば、賣買、其他法律が當事者の自由決定を許す事項に於けるが如き、これである。それに反し、各人が、過多にも過少にも受取らず、恰かも、己れに屬すべき分を受くるに止るときは、彼等は、各其分を受けたりと云ひ、其間に、損失も利益も存せざるものと云はれる。

故に、正義とは、或種の利益と、或る種の損失との間の中間である。即ち（損を蒙る者に取つては）不任意的なものである。それは取引の前に於いても、後に於いても、同樣な分け前を有つことをいふのである。以上一一三二ｂ第二十行に至る。

以上を以て、第四章は終つてゐるのである。

（二十六）

フエヒナーは、配分の正義と、匡正の正義との區別を說いていふ。

配分の正義は、人々の間に、財貨を配分することに關するものであるから、其の意味する均等とは、人と人との間に於ける關係に於いてのみ言ひ得るものである。何となれば、諸々の財を、諸々の人に均等するのでなく、財の人に對する關係を均等にするのであるから。（中略）即ち、均等の財が、均等の人々に、不均等の財が、不均等の人々に、分たるゝ謂である。其の均等とは、諸財貨の數量、品質の均等の謂ではなく、關係の均等の謂である。（中略）二つの關係の均等を、數學者は、幾何的アナロジーと名けるところから、此の名稱を敷衍して、配分の正義にも、應用するのである。しかし、此場合、決して、連續比例は存せぬ。何となれば、一の人と一の客體との間には、決して、絕對的な均等は、成り立ち能はぬから。匡正の正義に於ける均等は、これに異る。（一一三一ｂ第十五行）此場合に於いては、變化された狀態を、以前の配分的地位に引戾すことのみに關するのである。人々は、其の價値に於いて、全く同一のものとして止るので、要するところは、單に財貨の轉換これのみである。即ち一方の過多を、他方に移して、均等を持ち來たすに止る。（中路）即ち、其れは、單純に、算術的の加除にのみよるものであつて、財貨の過多と過少、利益と損失とを、均等ならしむるにすぎない。（中略）かくて、生じたる二つの全く均等なる大さの關係を、名けて、算術的アナロジーといふ。これが取りも直さず匡正の正義の持ち來すところである。（一一三二ル第二十九行）と。前掲書二三三—二三五頁。

ウエラーも亦た、粗ぼ同樣なことを言ふ。曰く、配分の正義の掌る市民的利益並に共同財産の個人への配分の場合と、匡正の正義の掌る法律上の除去及障碍の場合と（今日の言葉で云へば、事公法に關する場合と、私法に關する場合と）では、事態が同一でない。元より、此二つの場合に於いて、諸財貨の配分が、均等の法則に從つて行はるべきは、言ふまでもない。乍去、自ら第一の場合に於いては、法律、自ら各人が均しく多く受取るのでなく、各人は、其の功績に應じて受取ることを要求する。從つて此場合に於ける配分は、幾何的比例に從つて行はれる。即ちAの功績のBの其れに於ける如くに、Aの受くる名譽、又は利益は、Bの受くる其れらに對すべきである。自註。これと同一のことは、公的負擔の配分についても、また言はるべきである。即ち、各人は、其の負擔能力に應ずる分け前を、其れ〲に引受くべきである。但し、アリストテレースは、此點に論及してゐない。福田註。此れ即ち、ノイマン教授が、取つて以つて、其の該博な研究の對象とした點である。之れに反し、第二の場合、即ち、一の法律上の非行が惹き起した障碍を匡正する場合、併に諸々の契約の場合には、各人の人格的功績は、考慮に入らない。不正を爲した者は、不法に得た利益に相應するだけの不利益を甘受しなければならない。即ち、彼の利益から、不利を蒙つた人の損失に當る丈けのものを取り去らなければならぬ。これと同樣に、賣買、貸借、雇傭、賃貸借等についても、其問ふところは、唯だ物の價値如何のみである。從つて、これらの場合には、算術的均等の原則が妥當する。即ち、過分に有つ者は、其過多の分を取去られ、兩當事者が均等に歸するようにするのである。交換契約に於いては、此の均等は價値の均等に存する。茲に永き註あり。其事後に論ず（下略）前掲書 六四一―六四二頁

グランドの解説は甚だ詳細を極めてゐる。今其の要旨をあげて見る。第四章は、任意たると、不任意たるとを問はず、人と人との間の一切の取引に適用される匡正の正義を論ず。匡正の正義は、幾何的でなく、算術的比例の一原則の上に立つ。換言すれば、其れは、（當事者の）人格について、何等顧慮するところなく、其關係事例を、不正損益の事例として、取扱ふ。而して、不正の損益を當事者間の均等の中間點まで持ち來す用を爲すものである。正義は中間であり、裁判官は、正義の權化の一種、一の仲介者、又は均等に分割する人である。原告と被告とを、均等に持ち來たす正義の作用は、二つの不均等なる線の均等化を以つて、說明することを得る。乍去、損失、利益てふ名稱は、商業から借り來つた單なる比喩語にすぎない。

匡正の正義と云ふ語（τὸ διορθωτικόν または、τὸ ἐπανορθωτικὸν δίκαιον）其れ自らは、後に、第六節に於いて用られる語では、選を誤つた

用語である。何となれば、其れは、唯だ、補償に對する諸原則を下すに止るか如くに見へて、不當であるから。かくて、其れは、我々の考察を不任意的取引のみに限局し、人と人との一切の取引（不任意たると任意たるとを問はず）に於ける正義の原則たるべきものを說明しないで終る嫌がある。此の第四章に於いては、初めには、任意的諸取引は、匡正の正義に屬すと云ひ置き乍ら、其後に於いて論ずるところは、單に、不任意取引に適用するものに限られてゐると云ふことは、注意に値することである。而して、最後に至つて曰く、こゝに用ゐた語は、任意取引からの比喩語であると。これによれば、任意取引は、全く別種に屬するものゝ如くに見へる。しかし乍ら、賣買、並に、すべての任意取引は、人格に何等の顧慮を拂ふものではなく、而して、其の故に、民法及刑法と共通の或ものを有つと云ひ得よう。ベーコンは、『學問の進步』の第二篇に於いて、以上二種の正義について commutative 及び distributive なる名の下に言及してゐると。前掲書一一二頁

又曰く、『算術的比例』とは、二個の極端項から等距離にある中間項又は均等點を言ひ表はす。即ち、六は、算術的比例に從へば、四と八の間の中間である。倫理學第二篇に於いては、それは、μέσον τοῦ（メソン・トゥ・）πράγματος（プラグマトス）と呼ばれてゐる。其意は、人格に何等の顧慮を拂はずと云ふことである。ソコデ、匡正の正義は、玆では、すべての場合を、非人格的に、單に損益の一事件として取扱ひ、此兩者の間に中間點を見出すものであると言はれる。玆に人格を、顧慮せずと云ふは、各人の道德價値を顧慮せずとの意である。何となれば、第五章第三―四節に於いて、我々は、人々の地位及び事情の考慮が、一の不正行爲から生じた損益の評價を左右すべく入り込むものとせられてゐるを見出すから。前掲書一一三頁。

ヂカイオンと、ヂハイオンとの字義論については、グラント氏は、アリストテレースの說は、誤なりとして云ふ。ヂケー δίκη てふ語の昔しの概念は、判定、調停若くは正義の其れではなく、『示めす』『訓示する』『規制』『方法』等の其れであつたものと見へる。此語は δικ（ヂク） て云ふ語幹から來る。此語幹は、δείκνυμι（デークスミ） と云ふ語に示されてゐる。これに當る拉丁語は、indico,（インヂコ・） index,（インデックス・） judex（ユデックス）（法律を示す人）等である。云々。前掲書一一四頁。

又曰く、すべての種類の商業に於いて、法律は、各人が、其能ふ限り利益を獲ることを許す。然るに、不任意の取引にあつては、法律は、何等の利益を獲得することをも許さないのである。法律は、すべての

ものを、其の水準に引戻す。斯く、法律が、商取引に干渉せぬことは、若しこれを徹底すれば、自由貿易の原則となると。同上頁

（二十七）

第四章の要點について、通行のものとは、著しく趣きを異にした解釋を下してゐるものは、バーネット氏である。今其説の大要をあげて見よう。

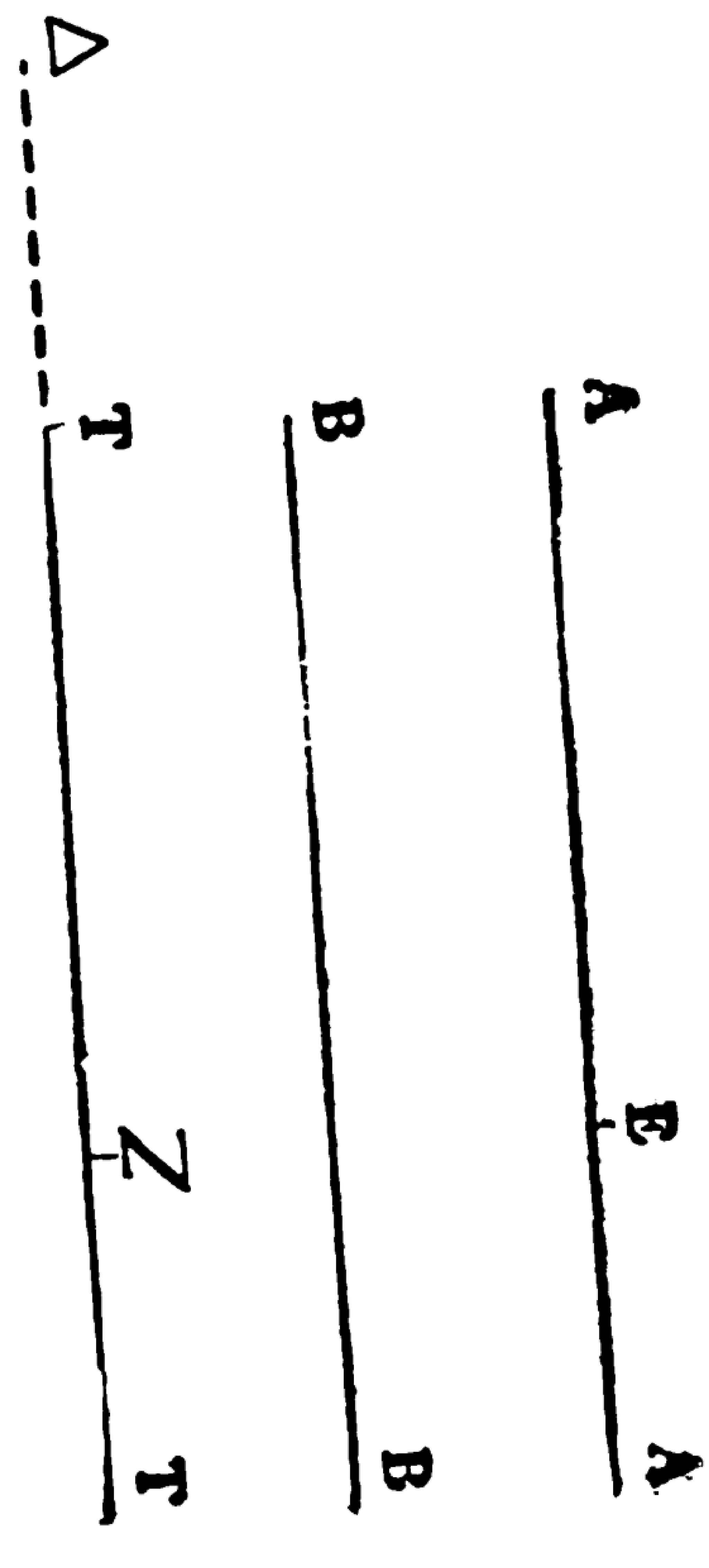
τὸ πάθος καὶ ἡ πρᾶξις（ト・パッス・カイ・エー・プラクシス）とは、逐字的に云へば、『爲されること』と『爲すこと』の謂である。（中略）此句は、プラトーンの法律論八七六以下の極めて明瞭なる句を、甚しく默擔した句であることは、未だ誰人も注意してゐないようである。プラトーンは、其條に於いては、裁判官の裁量の範圍を論じてゐるのである。（中略）其處の例は、人を殺さうとして、傷を蒙らしむる場合である。此場合には、爲した非行 ἀδικία（アヂキア）は、加へられた（蒙つた）傷害 βλάβος（ブラボス）に、遙かに超過するのである。此犯行者は殺人を以て罰せらるべきではない。さりとて、彼は、單なる傷害罪のみを以て問はるべきでもない。彼は、傷害の故を以て罰せらるべきであると共に、また、まさに、追放に値するのである。次には親を傷害する子の場合がある。此場合には、アヂキア ἀδικία（非行）は、アセベイア ἀσέβεια（冒神）を含むのであつて、其刑罰はまさに、死刑たるべきである。要するに、此一節は、二箇所の甚だ難しいものであつて、細心の研究に値するものである。

『爲されること』と、『爲すこと』とは、元より同一事を、反面から見たことである。然るにも拘らず、此兩者は、不均等な部分に分割された一つの線によつて示されてある。通行の解釋では、此の不思議を説くことは不可能である。これを説くには、單に一方から他方へ移された不分劃の一線たるを要するのである。かくして、兩方は不均一となるのである。然るに、此事については、誰も何事も言つてゐない。

（上略）裁判官は、Bの損失を補塡すべく、Aを餘儀なくするのではない。裁判官の爲すところは、Aによつて爲された害が、Bの蒙つた損よりも、大なるときは、Aは、單に、其損を補償するよりも、いゝより以上の大なる刑罰を受くるようにすることである。（中略）正義は均等であり、均等は、過多と過少との中間である。從つて、（裁判官の下す）正しき判決は、犯行者に彼が與へた損害の額だけを課するのではなく、彼が他人に蒙らしめた損害と、彼が犯した非行との間の算術的中間を見出すのであらねばならぬ。即ち、プラトーンがあげた、他人を殺さんとして、其人を傷けた者の場合の例に當るのである。（中略）これを數學的に云へば、次ぎの如くになる。犯した罪と、其罪の爲め

に襃つた損失との割合は如何にあらうとも、正しき判決とは、Aは犯した罪と、其爲めに他人に蒙らしめた損害との間の算術的中間を支拂ひ、Bは其支拂を受くべしとすることこれでなければならぬ。例へば、犯した罪と、蒙つた害（Γ+Δ）=10とせよ。而してC=7 D=3とせよ。nはケルドス κερδος（利益）として評價した不正、Δはゼーミア ζημία（損失）として評價した加害、然るときは、ABてふ當事者は、裁判官の前へA+7 B−3として立つものである。然るときは、（A−7）−（B−3）=（Γ+5）−（Δ−5）と云ふ式によつて、均等が恢復されねばならぬのである。かくて、5は、要せられた ἴσον（=δίκαιον）中間=正義である。犯行と被害の合計量10が、如何に分たるゝとも、Aは、常に算術的中間の二倍を有つのである。（中略）

犯行と被害AAが、如何に分たるゝとも、BB線は、常にAE線と、ΔΓT線との間の算術的中間である。從つて、それは、正義を表はす。ジヤクソンは云ふ。此の例に於いては、ΓΔ=ΓZ=AEであるべきである。然るに、アリストテレースは、其れを明言して居らぬのは、解し難いことであると。しかし、其れは必要のないことである。アリストテレースは、（次ぎの如き）描圖を眼前に置いて居たに相違ない。而して、其描圖に於いては、明かにAE=ΓZと描き出されて居て、其事をわざわざ斷るは餘計なことであつたのであらう。それに反し、ΓΔ=AEBとす



るのは誤りである。何となれば、ア氏の議論では、ΔΓ=EAとするのみであつて、右とは、全く異つて居るから。ア氏は、利益と損失とが均一なるならば、裁判官は、其利益を一方より取つて、他方に返へさねばならぬてふ明白な事實を、明瞭に説示して居らぬ。彼は、（此の明白な場合よりも）むしろ、より興味ある場合、即ち利益と損失とが均一でない場合を考究して居るのである。例へば、合計10なる數を、如何樣に分割するとも、原則は同じであることを示して居るのである。即ち、例へば17−10=10−3、又は16−10=10−4又は15−10=10−5又は14−10=10−6などの式が存し得る。これらすべての場合に於いて、10が正義を言表はすものなることを、ア氏は說いてゐるのである。

損失（ゼーミア）利益（ケルドス）てふ兩語は、最後に至つて、在

意取引ならぬ任意取りに轉置せられてゐる。即ちこれによつて、我々は、此兩種の取引は、共に同一種の正義に屬するものとせられることを推測すべき、強き理由を有つのである。以上前掲書二一九頁から二二二頁までについて摘出す。

右バーネット氏の解説は、一見奇拔に過ぐるが如くである。乍去、アリストテレースの眞意は、むしろ、これによりて、より鮮明に、より妥當に展開せられてゐると思ふ。フェヒナー、ツエラー並にグラント諸氏の解釋は無論一通りの說明を下したものとして誤つては居るまい。しかし、錯簡、誤脫、混入等の爲めに難澁なものとなつてゐるア氏說の眞面目を描出するについては、一通り以上の考慮を要する。バ氏の說くところを以つてしても、全くは疑點を止めざるものではないけれども、それは慥かに、一頭地を拔いた見解を披瀝したと云はねはならぬと思ふ。其點は、後に至つて、更らに再論するであらう。讀者は、以上諸家の解說を吟味した後、高橋氏の論文に往見を試みられたい。私の評言の決して獨斷早計なものでないことは、極めて明瞭となるであらうと思ふから。

(二十八)

以上を以つて、第四章の要領を紹介し終つた。其最後の一節は、『流通の正義』別在肯定否定兩論の吟味に、最も密接な關係を有つものである。しかし、其吟味は、後に至つて、一括して、これを試みる方が、兩者の誤解を容易ならしめ得るに便ならんと思ふが故に、姑くこれをおき、以下、私は、愈々私の本題とするところの『流通の正義』に關するア氏論をのせた最後の章たる第五章について、少し具かに紹介することを努めよう。

第五章　流通の正義

嚴密にア氏の文を移し出す爲めに、節分けにして、譯文をかゝげて見る。

(一) さて、ある人々は、何等の限定なき報復(τὸ ἀντιπεπονθὸς ἁπλῶς)を以て、正義なりとする。例へば、プサゴレオイ學派の如きこれである。何となれば、彼等は正義を以て、單に、隣人に對する報復なりと定義してゐるから。

(二) 乍去、(單純なる) 報復は、配分の正義とも、また、匡正の正義とも、相合致するものではない。

(三) 然るに、人は、ラダマンスオスの正義を、此意味に解釋して、『人が其の爲したことについて惱むのは、正しき正義に合ふことである』といふ。(一日を以て一日を償ひ、一齒を以て一齒を償ふの意)。

(四) 何となれば、多くの場合に於いて、(單なる) 報復と匡正の正

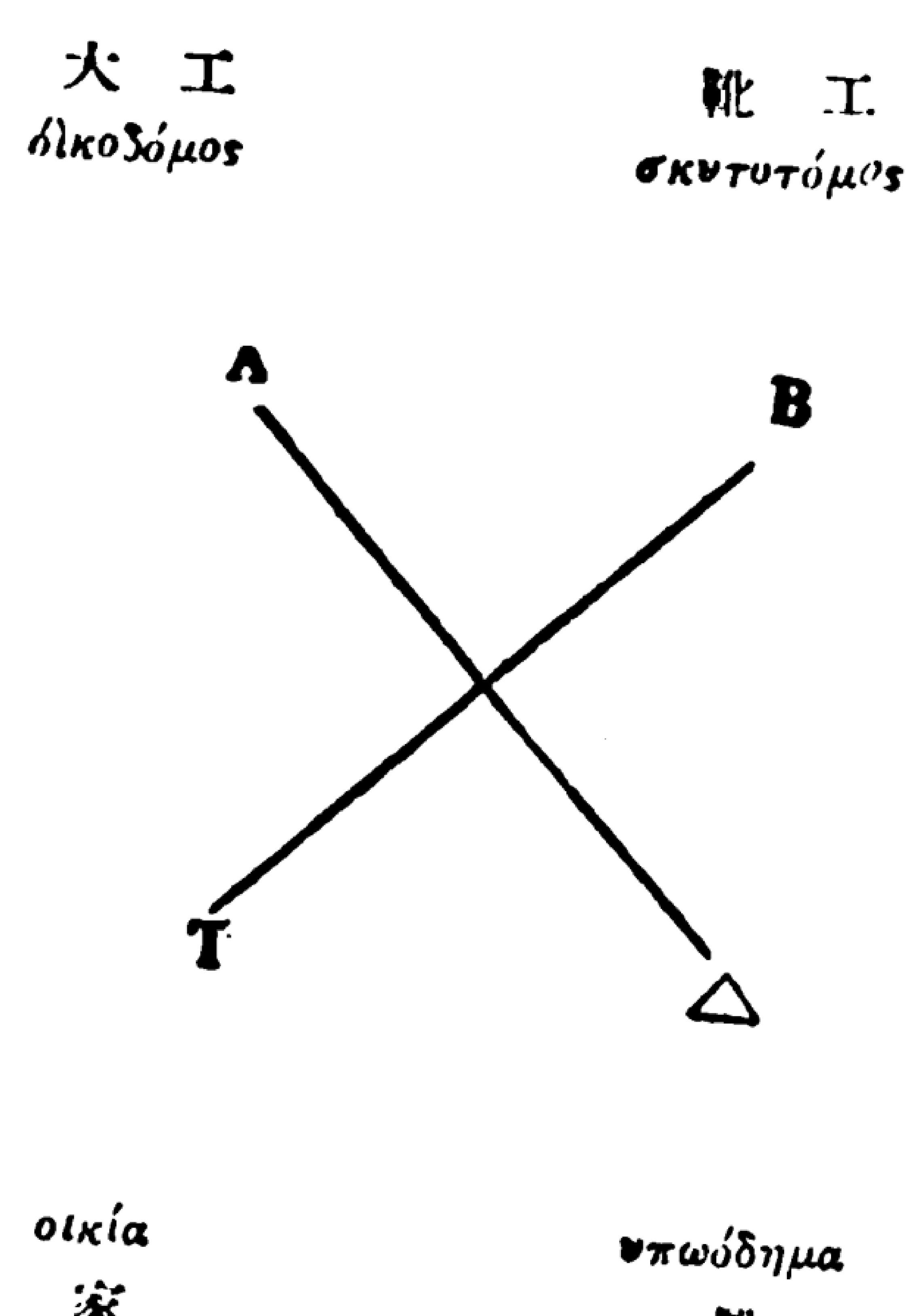
義とは、一致しないものであるから。例へば、(第一の場合)アルホンテス(官吏)が人を傷害した場合、報復として、其のアルホンテスに、傷を蒙らしむべきでない。反對に、或人がアルホンテスを傷害した場合、其犯人には、單に傷を蒙らしめて、報復するに止めず、それに刑罰を附加すべきである。

(五)(第二の場合)更らに、任意の行爲と、不任意の行爲との間には大なる差異が存する。

(六)流通社會にあつては、(ταῖς κοινωνίας ταῖς ἀλλακτικαῖς)(任意的取引にあつてはの意)此の種類の正義、即ち、報復は、人と人とを結び付ける連帶である。――即ち、それは、一の比例に基く報復であつて、(嚴密なる)均等の報酬に基く報復ではない。何となれば、一のポリス(國家・社會)を結束するものは、比例的報酬の原則であるから。人々は、惡に報ゆるに惡を以てするか、善に報ゆるに善を以てすることを欲する。前者を爲し能はざるときは、人々は自己の地位を以て、奴隷に異ならぬものと考へよう。後者を爲し能はざるときは、人々は、相互を結び付くべき流通行爲其ものを營むこと能はずと考へるだらう。

(七)これ故に、人民は、彼等の町々に、ハリス(恩惠)神の殿堂を建てて、奉仕の報復を奬勵するのである。蓋し、ハリス神の特性は、次の一事であるから。我々は、我々に、ハリス(恩惠)を與へたものに報復として奉仕すべく、而して、他人に、恩惠を授くるに於いて、また第一人者たるを勉むべきものであると。

(八)我々は平方形の兩對角の結合によつて、比例的報酬を見出すことが出來る。



Aを大工、Bを靴工、Γを家、Δを靴とせよ。大工は、靴工から其製品を受け、これに換へて、自己の製品を與へねばならぬ。此場合、若し始に、兩者の財の比例的均等が存してゐて、而して、これについて相互交換の行爲が起つたのならば、我々が示した通りの結果は得られるであらう反對。に然らざる場合には、其取引は(始めから)均等でなかつたもので、從つてそれは、有効でない。何となれば、一方の仕事が、他方の仕事に(價値の上に於いて)勝ることあり得るを妨ぐ可き何物も存しないか

ら。從て、兩者は、（先づ初めに）均等に持ち來たされてあらねばならぬのである。

（九）此道理は（獨り大工と靴工とについてのみならず）他の業についても、同じことである。何となれば、一方の與ふるところ、（作り出すところ、爲すところ）が、他方の求むるところ（受くるところ、崇むるところ、爲されるところ）と、まさに同樣で、其分量や種類も同一でなかつたならば、彼等は、滅亡するであらうから。醫者と醫者との間には、流通は起らぬ。醫者と農夫との間には、流通は起る。一般に、流通は、相均しき者の間に起らず、互に相異る者同志の間に行はれる。何となれば、相異る者たちこそ、均等に持ち來たされることを要するものであるから。

（十）これ即ち、交換されるものは、すべて何等かの方法に於いて、通約的（相比較し得べきもの）でなければならぬ所以である。此目的の爲めに貨幣の使用は起つたので、而して貨幣は或意味に於いて、一の仲介者となる。何となれば、貨幣はすべての物を測り、從つてまた、物の過不足を測る――例へば、一戸の家又は一定量の食料に對しては何個の靴が均等であるかを測るが如き、これである。一戸の家（若くは、一定量の食料）に對して、交換せられる靴の箇數は、大工の靴工に對する比例に相應せねばならぬ。若し左樣でないならば、交換も、流通も成立たないであらう。而して、此の比例は、該財が何等かの方法によつて、均等なるにあらざる限り、成立しないであらう。

（十一）即ち、前すでに述べた通り、すべての財貨は、何か或る一物によつて測られるのでなければならぬ。此の評價の單位は、眞實に於いては、需要（χρεία）である。需要は、すべての物を結び付ける。（何となれば、若し人々が、相互に他人の物を要すること、全くこれなく、若しくは、均等に、相互の物を要することがないならば、交換は全く成立たないか、若くは、相互間同等の交換は、成立たないであらうから）。しかし乍ら、貨幣は、（唯だ）便宜上設定せられた、一種の需要代表物であるのである。これ、其れが、ノミスマ νόμισμα（貨幣）と呼ばれる所以である。其意は自然的に存在するものでなく、ノモス νόμος（法律）によつて成立したものといふことで、而して、これを變化せしめ、並に、これを廢止することは、我々の權能内に存することを、言ひ表はしてゐるのである。』

（十二） 福田註。此一節は、甚だ晦澁難解で、古來種々なる解釋が行はれてゐるのである。今、玆には、初めにロッス氏の譯文を出し次にグラント氏の解釋による譯文をあげて見る。

『農夫の靴工に於ける比例に於いて、靴工の仕事の分量が、これと交換する農夫の仕事の分量に相應する樣に、（取引の）條件を、均等に持ち來たすとき、其處に、報復がある。乍去、我々は、此比例を立つる

に方つては、交換がすでに行はれた後について、それを爲してはならぬ（若し左樣すると、一方の極端は、二個の超過分を有することになるから）。我々は、兩當事者が、未だ其れ〳〵自己の製品を所持してゐる時に、其れを行はねばならぬのである。かくして、兩者は、均等者であり、對等者であつて、均等は、兩者の間に成立ち得るのである。Aを農夫とし、Γを其生產する食料とし、Bを靴工とすれば、ΔはΓと均等なる其製品（靴）である。報復が此く行はるゝことが可能でないならば、兩當事者間に、流通の行はるゝことはなかるべきである。』以上ロッス英譯一一三三a三十三行から一一三三b八行まで。

グラントの譯は左の通り。

『諸條件が均等化せられ、靴工の生產が、農夫の其れに對して有つ關係は、農夫自らが靴工に對して有つ關係とに同一とせられるとき、報復は行はれたといふのである。併し乍ら、我々は、交換が取り行はれた後について、兩當事者を、比例のダイアグラムに持ち來たしてはならぬ。左樣するときは、ダイアグラムの一極端は、兩樣の優越を占むることとなるから。我々は、兩當事者が、未だ其れ〳〵自己の製品を保有するときについて、比例のダイヤグラムを描かねばならぬのである。かくしてこそ、兩者は、均等であり、而して、兩者の間に、取引が成立つことが出來るのである。何となれば、かくしてこそ、比例的均等が兩者の間に設定せられ得るのであるから。』以上、グラント前揭書一一〇頁から。

（十三）需要は、一の單位となつて、諸物を結び付けることは、次ぎの事實によつて示されてゐる。若しも、人々が、相互を要せざるとき、換言すれば、何れの人も、他人を要せざるか、若くは、一人が、其の相手方を要せざるときは、交換は行れない。生產者が要するところは、消費者が有たざるところのものであるときは、交換は行はれずとの意。バーネット二二九頁其條の解 其反對に、一方の要するところのものを、他方が有つてゐるときは、交換は行はれる。例へば、穀物輸出の特權を、葡萄酒（の輸入）に對して、交換するが如き、これである。福田註。ロッス氏の此條の譯、甚だ難解、殆んど誤譯に近しと思ふ。今、バ氏によつて、本文の通りに、譯出して見た。

（十四）さり乍ら、將來の交換について、或人が、我物を、現在に於いては要せざる場合ありとせよ。此場合には、貨幣は、其人が、それを要するに至るとき、これを得ることを得せしめる保障となるものである。何となれば、貨幣を其手に有して居りさへすれば、其人は、何物にても、已れの望むところのものを取る可き權能を有つものであるから。元より、貨幣についても、他の貨物と同樣なことが行はれる。

即ち、これに對する需要は、必ずしも、常に同一ではない。（ダラント並にロッス兩氏は、貨幣の價値は、常に同一でないと譯す。私はバーネット氏に從つて、其れを需要とする方が正しいと思ふ。）乍去、貨幣は、他の貨物に比すれば、より固定的なる傾向を有するものである。

（十五）其の故に、すべての貨物は、一定の價格を附與せられてあらねばならぬのである。（即ち、公定價格のことで市場の驅引によらざる價格の意）かくてこそ、交換は常に可能であり、從つてまた、人と人との間に、流通が成立し得るのである。かく、貨幣は、一の尺度として働いて、すべての財を通約的ならしめ、而して、すべての財を均等ならしめるのである。蓋し、交換が行はれなければ、流通は成立たず、均等がなければ、交換は行はれず、通約性が成立たなければ、均等は行はれないからである。さて、眞實に於いて、かく多くの相異る諸物が、通約的となることは、不可能なことである。乍去、需要の立場から見れば、相應に、可能である。（πρὸς δὲ τὴν χρείαν ἐνδέχεται ἱκανῶς）（通約には）單位となるものがなければならぬ。而して、それは、合意によつて定められたものでなければならぬ。（かるが故に、これをノミスマ（貨幣）と名く）何となれば、すべての物は、貨幣を以つて、測られ、これによつて、通約せられるから。Aを一戶の家屋、Bを貨幣十ムナイ、Γを一個の寢床とせよ。今、一戶の家屋が、十ムナイを値し、即ち、これと均等で、AはBの半に當り、寢床ΓはBの十分の一に當るとするときは、寢床何個が、家屋一戶に當るかは、明白である。即ち、其れは、五個である。

（十六）貨幣の存するに至りし以前にも、交換は、此くの如くにして行はれたことは、明瞭である。一戶の家屋に對するものが、五個の寢床であらうとも、又は、五個の寢床に當るだけのものであらうとも、其間些も異るところはないから。』以上一一三三b第二十八行まで

第五章は、猶ほ繼續してゐる。しかし、私の問題とするところに關係ある條は、以上を以て盡きてゐるのである。何となれば、其れだけが、マルクスによつて其の評論の對象とせられたもので、而して、同時に、また、ア氏の流通の正義論の中核を爲すものであるから。

（二十九）

ロッス氏は、第四章の、AとΓと、BとΔとの結合、は正しき配分を示めすとあるを說いていふ。

配分の正義は、配分せらるべき名譽または、報酬を、其れぐ部分に分ち、其各部分相互は、其分け前に與る人々の功績の比例に應ずる樣にすべきである。即ち、A（第一者）：B（第二者）：：Γ（第一部分）：Δ（第二部分）であり、これを、轉置すれば、A：Γ：：B：Δとなり、更ら

に、これを、結合すれば、$A+\Gamma : B+\Delta :: A : B$ となる。換言すれば、かくて立てられた地位は、各當事者の相對的功績に應ずるものであると。

次に、氏は、匡正の正義に進み入つて、說いていふ。匡正の正義の問題は、刑罰其ものとは、何等の關係ないものである。其れは、損害を賠償することによつて、爲された害を匡正するのみである。換言すれば、匡正の正義とは、民事法廷の問題であつて、刑事法廷の問題ではない。各當事者は、法廷に於いては、全く均等の者として取扱はれる（何となれば、法廷は、道德を掌るところでないから）。而して、不正行爲は、其行爲者に與へた利益と、其被害者に加へられた損失とを、均等のものとして計算する。卽ち、不正行爲は、Aを $A+\Gamma$ の地位に、Bを $B-\Gamma$ の地位に持ち來たす。裁判官は、卽ち、此兩者の間に、算術的中間を見出すを職分とする。彼れは、Γを、AからBへ移すことによつて、これを爲す。かくて（Aを　＝Bと取扱つて）、我々は、次の如き算術的『比例』を得るのである。

$$(A+\Gamma)-(A+\Gamma-\Gamma)=(A+\Gamma-\Gamma)-(B-\Gamma)$$

$$(A+\Gamma)-(B-\Gamma+\Gamma)=(B-\Gamma+\Gamma)-(B-\Gamma)$$

以上一一三一b脚註
並に一一三二n脚註

かくて、ロッス氏は、流通の正義の章に入つてから言ふ。『比例的報復』の作用に關するアリストテレースの說明は、甚だ明瞭なものとは云ひ難いが、其眞意は、次ぎの如くであらうと思ふ。AとBとは異なれる業に從事するものとする。而して、通例、其價値の度合は、異つたものであらう。從つて、此兩者の製品は、不均等な價値を有するものであらう。換言すれば、（但し、アリストテレースは、此問題を、明白に、時の問題に還元はしないが）$A=nB$ ならば、Γは（Aが、例へば、一時間に仕上ぐるところの仕事）Δ（Bが一時間に仕上ぐるもの）の n 倍の價値を有するであらう。此場合、公平な交換とはAが $n\Delta$ を得、BがΓを得ることを意味する、言葉を換へて云へば、Aが一時間かゝつて仕上げたものに代へて、Bが n 時間費やして作つたものを得るとき、其交換は公平なのである。一一三三n脚註

交換後の狀態について、比例を立てゝはならぬ、交換前各當事者が未だ已々其の製品を有つてゐる狀態について、其れを立てねばならぬ云々の句を、ロッス氏は解いていふ。此のア氏の一言は多くの困難を惹き起したが、其れは、第九章第一節と照合すれば、說き得るように思ふ。（中略）其れによれば、ア氏の意味は、次ぎの如くであらねばならぬ。交換を行ふに方つて、勝手次第な額を受授し置いて、然る後に其當事者を比例圖に持ち來たす様であつてはならぬ。何となれば、左

價するときは、各人は、他人に與へた已れの品物を、不當に高く評價し、反對に、他人から受取つた品物を、不當に安く評價するであらう。而して、其行ふところの調節は、當事者らの駆引の技術によつて、左右せられるであらう。かくて、一方の得るところは、超過分二個を有つことにならう。何となれば、彼れの得るところは、中間を超ゆる一分であり、其相手方の得るところは、中間より不足なること一分であるから。（一一三二a三二b二を見よ）故に、唯一の公平なる方法は、各當事者が、已れの物と、他人の物とを評價するは、交換を行ふ以前に於いてし、其評價に基いて、可能なる合意に到達すること、これである。一一三三b脚註

今ロッス氏の解説は、甚だ簡單ではあるが、ア氏の眞意を明かにするに、一の助けとなるものである。但し、私は氏の匡正の正義の解釋と、比例的報償についての其れとは、多少無理があるのではないかと思ふ。

（三十）

グラント氏は第五章の要旨を指摘していふ。此一章は、正義に關するプサゴレオイ學派の定義の批評から論を起し、彼等が『正義は報復なり』とする定義の不十分なることを指摘し、續いて、國家に於いて行はるゝ報復の法則に關して、興味ある討論を附加へる。（一一三二b二一―三三）比例的報復、即ち相互の交換は、社會を結び付ける連鎖である。比例の法則は、交換を統制する。而して、最も異様なる産物の價値を定める。貨幣は、價値を測り又た言ひ表はす。而して、單なる物々交換を、商業に轉化せしめると。前掲書一一六頁

グ氏は、更らに各條を、次ぎの如くに註解する。

ピサゴレオイ學派の正義に關する見解の不十分なのは、疑もなく、單に、彼等の不完全なる論理的方法の爲めのみでなく、當時の政治及社會思想の未熟なりしが爲めである。（中略）

ア氏は、地位もまた、財産の一種なりと做すものである。其れは、個人的善悪の問題ではない。官吏が傷害（福田註。多くの英獨佛譯本に此條を單に毆打 beat, schlagen, frapper とするは、誤りと思ふ。これは、『傷害』でなければならぬのである。）せられるときは、（其地位の關係から）一兵卒が其報復として傷害せられるよりも、失ふところは多い。從つて、（單に）報復しただけでは、正義とはならぬと云ふのである。

相互的需要が、社會の基礎たることについては、プラトーンも、其『國家論』三六九bに於いて説いて居る。此原則を認識することは、經濟學の黎明と云つて宜しいだらう。此れからして、アリストテレース

は、幾多の結論を導き出してゐる。即ち、價値、價格、貨幣に關するものこれである。ア氏の此れらの論は、タトヘ其梗概を示したにはすぎぬとも、彼れの名にふさわしいものであり、興味深きものである。但し、價値の法則の、正義の他の種類との關係は、説かれてない。

ア氏は、一平方形の對角の結び付けは、比例的報酬を示めすと云つて居る。對角の結合は、各生産者に與ふるに、他人の生産物を以てする。而して、これによつて、交換が成立つ。しかし、其交換物其れ其れの價値は、先づ設定せられねばならぬ。然らざれば、公平な交換は成立ち得ぬ。此場合を支配する價値の法則は如何なるものであるか。アリストテレースは、第十節に於いて、これを示してゐる。曰く、大工（又は農夫）が、靴工に對する如く、靴何箇が、家一戸又は食物若干量に對してあるのでなければならぬと。言ひ換へれば、製品の價値は、それに費やされた勞働の品質によつて決せられる。玆に、アリストテレースが、農夫の品質と靴工の品質の間に下した種類の比較は、人格的品位に關する或る希臘的概念並に Banausia（バナウシア）（手先勞働・手工業）の嫌忌と關係あるものと見へる。しかし、後節に至つて、經濟學（現代の）により善く合致する一見解が取られて居る――何となれば、其處では、すべての産物は、一の標準によつて測られねばならぬ。而して、此標準は、眞實に於いては、需要（Χρεία（クレイア））なりと明言してあるから。故に、一戸の家屋に對して、何箇の靴が與へらるべきかを定むるものは、需要、換言すれば、市場の駆引 higgling of the market これである。然し、其結果は、大工＋其受取るべき靴の箇數（若くは穀物に於ける其等價）が、靴工＋一戸の家屋 に對する關係は、當初に於いて、大工が、靴工に對してありし關係と等しかるべきである。換言すれば、各生産者は、各其分を得たのであらねばならぬ。――一一八―一一九頁

第九節に於いて、分業、各業の相互依頼關係、需要供給相關の理等は、よく説かれてある。此節に於ける『爲すこと』と『爲されること』（バーネット氏は、此兩語は、今日の語で云へば『需要』、『供給』に當ると云ふ。）Ποιεῖν（ポイエン） と Πάσχειν（パスケン） なる兩語は、恐らく、此章の主題たる報復 ἀντιπεπονθός（アンティペポンソス） と何等かの關係を有つものと思はる。

第十一節は、貨幣について、甚だ勝れた定義を下してゐるが、これは、必ずしも、アリストテレースに始るのではない。プラトーンも、同様に、其『國家論』三七一 B に於いて言つてゐる。本章は、重複によつて紊されてゐる。價値の法則は、第十節と第十二節とに、繰返して説かれてゐる。

第十二節は、甚だ難解な事であるが、それは、商取引に於ける過程を記述したものと思はれる。其れは次ぎの如くであらう。異なつた種類の諸生産者の間に、相互の需要がある。彼等の生産物は均等化せられることを要する。これを爲すには、諸生産物を、反比例の一標準に持ち來たすことを要する。即ち、一農夫の一靴工に於けるが如く、靴は食料品に對立せねばならぬ。例へば、農夫の勞働が、靴工の勞働よりも、五倍丈け善いものならば、靴五足＝穀物一クオーター若くは、靴一足＝十志なるとき、穀物一クオーター＝五十志とされねばならぬ。此の均等化の過程が成立した上にて、――それは、需要又は市場の懸引によつて爲される――始めて、單純なる報復即ち tit for tat が始まる。一の交換が成し終られたる後、換言すれば、一物の價格が、一度、貨幣によつて表現された後は、最早『勞働の品質』如何を論ずべきではない。また、何れの當事者も、『勞働の品質』を言前として、何等の要求をも提出すべきではない。若し、其れを許すなら、其人は、兩個の優越、即ち、彼れ自らの相手方に對する優越(勞働の質の優越)と、彼の生産品の相手方の生産品に對する優越とを、占むることになるであらう。彼は既に價格の上に於いて、優越を占めて、彼の勞働の優れたる品質を認めさせて置き乍ら、猶其上に彼の勞働其ものの優越を認めよと要求するのは、一つものを二度計上せよと云ふことになる。

一物の價値は、それが賣られた後に定めらるべきではないと、云ふことを主張するのは無用である。むしろ、各品物が既に市場によつた後、而して、其れに對して、一定の價格が定められた後に、生産についての考慮は停止すべきである。アリストテレースの此章の言は、明晰でないが、以上解説したところを以つて、其眞意と認むべしと思ふ。

第十五節、貨幣は便宜上設定せられたものであることについては、アリストテレースは、政治學第一篇第九章第二節に、力強く、これを論じてゐる。

第十六節商業の起源は、ア氏の此節の言に基いて、パウルスが詳論してゐる。（以上一二二頁までから抄錄）

(三十一)

以上を以て、ア氏の狹義の正義の三種、配分の正義、匡正の正義並びに、流通の正義に關する發言の全部を紹介し終つた。私は、出來る丈け、細心の注意を以て、一言一句をも洩さぬやう、また、原意に戻らぬよう、各種の譯本や註解を頼りとして、譯筆を下したのであるけれども、度々斷つて置いたように、ニコマホース倫理の第五篇は、

甚だ難解なるを以つて知られて居るものであり、而して、箇所によつては、明かに、錯簡、混亂が存するものであるから、私の譯文は、或は、甚しい誤謬を含んでゐるかも知れないのである。また、諸註釋家に誤ありて、私は、それを知らず、または、氣が付かずして、其儘に、これを傳へてゐるかも圖られないのである。故に私は、綿密に、私の出典をあげて置いた。其れによつて、先覺學者の叱正を得られることあらば、幸此上もない次第である。

さて、私に殘された仕事は、二つある。第一は、ア氏の狹義の正義は、配分、匡正の二つからのみ成り立つものであつて、更らに、第三の正義として、流通の正義なるものを認む可からずとする學者たちの見解の吟味これである。第二は、以上、私が紹介したア氏の說に對するマルクスの解釋並びにこれに對する彼の評論の當否の吟味これである。(而して、其れに關聯して、河上博士等譯本中に於ける或重要なる不正確又は誤謬を示めすことこれである)。

以下、順を追ふて、これらの吟味について、極めて簡單に筆錄しよう。但し、私に殘された仕事に比しては、私に殘された紙數は、今や、極めて僅かなものとなつて仕舞つてゐる。故に、私の吟味は、極めて、簡單に、其の、梗概のみをあぐるに止めなくてはならぬ。

前段拙文(其二)本誌一月號九二頁にあげて置いた通り、ツエラー及ヒルデンブランド兩氏は、グラント氏と同じく、ア氏第四章冒頭の一句『殘る一つは匡正的の其れであつて』云々を以て、流通の正義を、第三種として別在するものと認めない理由として居る。これはさまで重要な議論でないことは、すでに述べた。重要なのは、兩氏が、第二の理由とするところのもの、これである。即ち、ア氏は『匡正の正義』を論ずるに方つて、諸々の任意的取引をあげ、就中、重なる流通行爲として、賣買、貸借、雇傭及賃貸借、等(拙文(其二)九二頁『賣買、賃貸借、使用貸借』とせしは誤り、)を指摘してゐる云々といふ一點これである。バーネット氏もまた、(拙文(其三)の十三)冒頭匡正の正義は、不任意の諸行爲に適用せらるゝのみでなく、同時にまた、任意の諸行爲にも適用することを意味してゐる云々と主張して、粗ぼ、ツエラー、ヒルデンブランド兩氏と同樣の見解を取つてゐるのである。

ところが、これについては、ブフエンドルク(拙文(其三)五五頁)は、夙に、第三種の正義としての、『流通の正義』の別在を、明かに認めて、左の通り言つてゐるのを見出すのである。

"Quae ad omnes homines pertinet particularis justitiae tres facit species."
"Tertia justitiae species ipsi est τὸ ἀντιπεπονθός, retaliatio."
loc. cit. p. 120. Lib. I Cap. VII §12.

『すべての人に關する狹義の正義は、三種より成る』
『第三種の正義は、報復(レタリアチオ)これである』前掲書一二〇頁第一篇第七章第十二節。

而して、此のプフエンドルフ說は、有名な哲學史家のトレンデレンブルヒの承繼するところであつて、更らに、フエヒナー、ブラントル兩氏も、別の立場から、同樣の說を執つてゐるのである。ノイマン教授は、トレンデレンブルヒの解は、ツエラーによつて破られたりとはするけれども、プフエンドルフ其人の說は、遙かに、其れに勝つて正しいものであると主張してゐるのである。前掲論文五三六頁。

今私は、アリストテレース其人の說を商量することによつて、此問題に關する、私の淺薄な見解を述べて見る。但し、大體に於いては、ツエラー、ノイマン、フエヒナー、ブラントル、而して、バーネット

を顧りとするものなるに、言ふまでもない。(グラント氏も、若干參照して。)

先づ、ノイマンは、ツエラー及ヒルデンブランドの此の第二點なるものは、次の考察によつて打破らるべしといふ。

『匡正の正義は、賣買、貸借、雇傭及賃貸借等の任意取引にも適用せられるから、これらについての獨自の正義なるものは認められぬと云ふが、此れらの任意の決定から生ずる諸取引が、侵害されたときは、それは勿論、匡正の正義によつて、支配さるべきである。アリストテレースの意味するところは、それである』と。前掲論文五三四頁。

此點は、バーネット及びグラント兩氏も、また、これを論じて居る。即ち、バーネットは、拙稿(其三)(二十二)第七三頁『非行が一度生ずるときは、其取引(スナラグマ)は、直ちに、不任意的のものに變化する。ア氏の與へた例を見ても、其れは、事前に、取引の諸條件を協定することに關してゐて、事後に、發生非行を是正(匡正)することには、關してゐないのである』といひ、グラントは、同上頁『彼(ア氏)が、此く云ふ意は、此等の諸取引に際して行はれた諸々の不正義行爲の是正(匡正)

は、匡正の正義によつて爲さるべきものなりとするにある。（後段）第五節に於いて、我々が見る通り、賣買は、幾何的比例の原則によつて支配されてあり、若しくは、支配さるべきものである。從つて、其れは、配分の正義の場合に類してゐるのである。（だから）賣買（の行爲）が、匡正の正義の下に持ち來たされるのは、詐僞若くは錯誤が發生した場合にのみ限るのである』といつてをることは、すでに、前段に紹介して置いたところである。

高橋氏は、此肝要の一句を、其何故に、發言せられたかを一向諒解するところなく、唯漫然と譯出してゐる。（三四頁第一行）而して其の前後の連絡如何については、何等商量するところがない。加之、『補正的正義』の外に『矯正的正義』などと云ふ、更らに『第四種の正義』（!?）をさへ濫用してゐる。否『交換的正義』（三七頁）といふもの（第五種の正義!?）さへも捻出してゐる。何が何の事たるや、氏は一向分つて居らぬ明證である。畢竟、其譯出の原本次第、手に任せて、生存活剝した爲めと思はれる。私が、これらを『ヘヘノノモヘジ』と見る。果して獨斷早計なりや、否や？

即ち、グラントによれば

賣買其他の任意取引（不正の行はるゝ場合（不任意取引に變化す））＝匡正の正義、算術的比例
（不正の行はれざる場合、即ち常正の場合）＝配分の正義、幾何的比例

となるのである。

（三十二）

茲に、ア氏第四章の最末句が問題となる。曰く、『故に、正義とは、或種の利益と、或種の損失との間である。即ち、（損を蒙むる者に取つては）不任意的なものである。それは、取引の前に於ても、後に於いても、同様な分け前を有つことを云ふのである』一一三二b第十八―二十行。

今其原文をあげて見る、

ὥστε κάρδους τινὸς καὶ ζημίας μέσον τὸ δίκαιόν ἐστι τῶν παρὰ τὸ ἑκούσιον, τὸ ἴσον ἔχειν καὶ πρότερον καὶ ὕστερον

右の内 τῶν παρὰ τὸ ἑκούσιον てふ句を、バーネットは、τῶν ἐν τοῖς ἀκουσίοις συναλλάγμασιν, in obligationibus ex delicto（不法行爲より起る諸債務に於いて）と解く可しと云つてゐる。二二三頁。而して、氏は附言していふ。任意的取引については、次章に於いて論じてあるが、其理は全く同一であると。同上頁。

即ち、此句によりて、前段の考察は裏書されるのである。何となれば、不法行爲より起る諸債務は、不任意的なものであつて、それについては、匡正の正義が支配し、算術的メソン（中間）を得ることが本旨であることは、ア氏が、斯く明言してゐるに徵して、一點の疑の容る

べきものがないから。

言葉を改めて云へば、不正の行はるゝ場合には、流通行爲は、不任意行爲となり、其諸關係は、明かに、匡正の正義の領域に落ち來ることについては、ア氏の說くところに、何ら疑は存しないのである。故に、これについて、算術的アナロジーのみが適用することも亦明々白々なのである。高橋氏論文（三七頁）には、此種の問題の存在などは、全く、風馬牛に、『既述の如く、分配的正義は、幾何學的比例の原則より出で、補正的正義は、算術的比例の其れより發す。然るに交換的正義は（!?）兩者より生ずるものなり』と、無鐵砲なことが書かれてある。驚くに堪へたことである。

從つて、また、此場合について、流通の正義の別在を否認する論據を見出さうとするのは、決して、妥當なりと云ふべからざるは、一點の疑を容れないのである。かるが故に、ツエラー、ヒルデンブランド諸氏が、ア氏が、匡正の正義を論ずるに方つて、流通行爲をあげてゐる云々と主張するのは、少しも、流通の正義否定の論據たる力を有たぬのではないかと思ふ。何となれば、ア氏は、此條に於いては明かに匡正の正義の支配下に立つものとしての、侵害せられたる、不正行爲の行はれたる流通行爲、即ち、最早任意行爲でなく、不任意行爲としての obligationibus ex delicto に變化し終つたものについて、言つてゐるのであつて、常正の流通行爲、任意取引としての其れ、何等不正行爲の行はれざる其れのことを言つてゐるのでないから。從つて、ツエラー、ヒルデンブランド氏等が『匡正的正義の中には、私經濟的流通の諸關係は、含まれてゐる』云々（拙文、其二の九二頁）と斷言してゐるのは首肯することが、出來ないのである。

然らば、不正行爲の行はれざる常正の流通行爲についてのみ、流通の正義別在の問題が存することは、明かであらう。

さて、此の場合については、商量すべきア氏の發言は、前後數箇條に渉つて存することが見出されるのである。

バーネット氏は、前段にあげて置いた通り、『損失、利益てふ兩語は、最後に至つて、任意取引から、不任意取引に轉置せられてゐる。即ちこれによつて、我々は、此兩種（任意、不任意）の取引は、共に同一種の正義に屬するものとせられることを推測すべき強き理由を有つ』（前段十四頁）といつてゐる。私は、却つて、此條からして、兩種の取引は、異種の正義に屬すと、ア氏が做せるものと推測する方が、其眞意に合するものと思ふものである。何となれば、ア氏は、任意、不任意兩種の取引の間に、大なる差別の存することを明言してゐるから。即ち、

第五章第五節に曰く『更らに、任意の行爲と、不任意の行爲との間には、大なる差異が存する』と。

ア氏は、匡正の正義を名くるに、明かに τὸ δίκαιον τὸ διορθωτικόν 又は、τὸ δίκαιον τὸ ἐπανορθωτικόν なる語を用ゐて居る。然るに、バーネットは、私が前段にあげた通り（前段五頁）『茲に用られる語の『ヂオルソウン』の眞の意味は、匡正（エパノルソーシス）手段によると否とを問はず、『調節する』ことである』と云ひ、更らに（前段十一頁）グラント氏は、匡正の正義と云ふ語（ト・ヂオルソチコン、または、後に、第六節に於いて用らる語では、ト・エパノルソチコン・ヂカイオン）其れ自らは、選を誤つた用語である。何となれば、其れは、唯だ、補償に對する諸原則を下すに止るが如くに見へて、不當であるから、かくて其れは、我々の考察を、不任意的取引のみに限局し、人と人との一切の取引不任意たると、任意たるとを問はず）に於ける正義の原則たるべきものを説明しないで終る嫌がある。此の第四章に於いては、初めには、任意的取引は、匡正の正義に屬すと云ひ乍ら、其後に於いて論ずるところは、單に、不任意取引に適用するものに限られてゐると云ふことは、注意に値することである。而して、最後に至つて曰く、こゝに用ゐた語は、任意取引からの比喩語であると。これによれば、任意取引は、全く別種に屬するものゝ如く見へる。』と。

（三十三）

私は、均しく流通の正義別在否認論者たる、グラントをバーネットに對向せしむることによつて、別在肯定の強き論據を見出し得ると信ずる。

バーネットは、ア氏の明言した『エパノルソーシス』の意を強ゐて調節の意に解すべしと修正の試みを爲し、グラントは、ヂルオソチコンも、エパノルソチコンも、共に、用語の選を誤つたものであるとしてゐる。私を以て見れば、茲に、すでに、無理が潜在してゐる。アリストテレースが明かに用ゐた言葉（此語には錯簡も、誤寫もないことは、諸家の一樣に認めて居るところである）を否認したり、又は、其意味を變更したりして、さて、ア氏は、流通の正義の別在を認めずと主張するのは、即ち、疑もなく、一の無理である。其れは、兩氏が、別在否認論を立つるについて、ア氏の言葉其儘、又は、言葉の正當の意味其儘では、都合が惡いから、此の無理を出立點に於いて敢てしたものではあるまいかと、私は推察せざるを得ぬのである。眞正直に、ア氏の言葉其儘、其言葉の本來に有つ意味其儘として受取るときは、右両

氏の別在否認論が成立たないことも、亦た明かであらうと思ふ。

而して、バーネット氏は、損失、利益の兩語が、最後段に至つて、ア氏によつて、任意取引から、不任意取引に轉置せられてゐることを以つて任意、不任意兩取引は、共に同一種の正義に屬するものとせられることを推測すべき強き理由となして居るのに、同じ否認論者たるグラントは、『最後に至つて曰く、こゝに用ゐた語は、任意取引からの比喩語であると。これによれば、任意取引は、全く別種に屬するものの如く見へる』と。否、其れのみではない。ア氏は、第五章第五節『任意の行爲と、不任意の行爲との間には、大なる差異が存する』と明かに斷言してゐるのである。即ち、バ氏の解は、更らに、第二の無理を重ねるものであつて、此點グラントは、卒直に、ア氏の原意を其儘に傳へてゐるのである。ア氏は、明かに、任意取引は、不任意取引とは、同一の正義の下に立たざることを認めてゐることは、右二箇所の明言によつて、これを否定することは、出來なかるべき筈と、私は思ふものである。

グラントは、ア氏は、『第四章の初めに於いて、任意的諸取引は、匡正の正義に屬すと云ひ置き乍ら』と云ふ。然し其れは、任意取引が、不法行爲によつて、不任意取引に變化された場合のみのことを云ふので、常正の任意取引其ものについて云つてゐるものでないことは、グラント氏自らの解說によつて、私が、前段に示して置いた通りである。グラント氏は、此點、何か勘違をしてゐるものと思ふ。しかし、氏自ら、右句に續けて、『ア氏は、第四章に於いては、(即ち、匡正の正義の支配下に立つものとしては、)單に、不任意取引に適用するものに限られてゐると云ふことは、注意に値することである』と告白してゐる。玆まで、洞察の明を示したグラント氏が、猶否認論を固守することは、私に於いては、殆んど諒解に苦まざるを得ざるところである。私は、グ氏の果して猶生存の人なるや否やを知らない、若し、生存の人たるを知らば、私の此のたど〳〵しい文を、氏に示して、此點について、教を乞ひたいと思ふものである。

最後に、私は、ノイマン教授に倣つて言ひ度い。ア氏が特に、第五章に於いて、單純なる、何等の制約なき報復を正義なりとするプサゴレオイ學派の說を駁して、流通行爲について、詳論し、更らに、其れから導き出して、價値、價格、貨幣に關して、倫理學の議論としては、場所違ひと思はるゝ(前揭諸氏概ね斯く云ふ)經濟理論を、稍々詳かに試みた所以は、彼が流通行爲を以つて、別種の正義の支配の下に立つと認めたものと推定するに、強い根據を與ふるものであると。其は決して、算術的比例と幾何的比例との鵺的中間物として、考察せ

られたのではない。其様な理路の一貫せざることを、ア氏が思惟したりとするは、むしろ、一の冒瀆であらう。

高橋氏は、決して、其の創意から此の鵺論を考へ付いたものではない。多くの不徹底な鵺的頭腦の所有者たる俗解學者から、其説を『アプシュライベン』したに外ならぬと、私は斷ずる。而も、其の『アプシュライベライ』は、俗解學者だけの理解をすら有つことなしに爲されたと、私は思惟する。高橋氏若し然らずと主張せられるならば、私は、これに應酬する勞を厭ふものではないが、其れは元より全く無用の徒勞に屬するであらう。何となれば、論其處に至るとき、高橋氏は、到底何等の理解反省を示しては下さるまいと思ふから。

幸にして、我マルクスは、此點については、『タブラ・ラサ』である。乍去、彼が、先づ、此問題の考察を試みなかつたこと、(或は、考察したかも知れないが、一言も、其事について、記してないこと)は、彼のア氏説解釋の出發點について、尠からぬ疑惑を惹き起さしめることを免れないのである。

(三十四)

ツエラーは、前掲書六四二—三頁『交換取引に於いては、均等は、價値の均等に存す、價値の普遍的尺度は、欲望である、すべての交換は、欲望より起る、而して、欲望を表現するものは、貨幣である』云々と、ア氏の論を要約して示した一項に、長い脚註を附して、トレンデレンブルグの説を駁してゐる。私は、此點に於いて、ツエラーの解を以て、トレンデレンブルグの其れに勝るものなることを認めざるを得ないのである。殊に、氏が、匡正の正義は、算術的比例に支配さるとの原則は、流通諸行爲については、一擲せられたものたるは疑なしと言つてゐるのを見て、會心を禁じ能はぬものである。乍去、同時に、氏が、κοινωνίαι ἀλλακτικαί（任意諸取引）は、報復の原則に基くものではあるか、それは、κατ' ἰσότητα（均等に從つて）でなく、κατ' ἀναλογίαν（アナロギーに從つて）によるべきものであると云ふに止り、それが、同時に κατ' ἀξίαν（功績に從つて）によるものなることについて、一言もしてゐないことを、——而して、氏が其故を以つて流通の正義別在否認論を取ることを——甚た惜むべしと思ふのである。何となれは、流通の正義の別在は、實に、κατ' ἀξίαν（功績に從つて）の原則の適用に發端するものであるから。而して、流通の正義別在否定肯定の問題について、マルクスが、何事をも考へざりしか、若くは、考へたことはあつても、其れについて、何事も言つて居らぬことは、此の『カ・タキシアン』の原則についての、アリストテレースの深い思索を、彼が果して、理解して得たものなるか否かを、私共に疑はしめるのである。

其關係のア氏文は、次ぎの通り、『此の道理は（物の側でなく、物の配分を受ける）人々の功績から見ても同様である。（文譯。配分は、各人

の功績に從つて、これを爲すべしとの原則から見ても、同様である。)何となれば、正しき配分とは、何かの意味に於ける功績に從ふべしとは、すべての人の認むるところであるから』(前段二三頁)ア氏の原文をあぐれば、

ἔτι ἐκ τοῦ κατ᾽ ἀξίαν τοῦτο δῆλον· τὸ γὰρ δίκαιον ἐν ταῖς διανομαῖς ὁμολογοῦσι πάντες κατ᾽ ἀξίαν τινὰ δεῖν εἶναι, τὴν μέντοι ἀξίαν οὐ τὴν αὐτὴν λέγουσι πάντες ὑπάρχειν

一一三一a第二十四—二十六行

フエヒナーは、(前掲書三四頁)此の『カ・タキシアン』を以て、道徳的品位の謂なりとしてゐる。これは、明かに誤りであらう。これは、少くとも、タキトスの『ゲルマニア』志中にある有名の一句、Secundum dignitatem と同様、若くは、更らに、もつと内容の廣い語と解すべきであらう。即ち、すべての『功績』『品位』『優越』を意味するのであつて、從つて人間勞働の品質を當然に含むものである。此く解するとき、アリストテレースの價値論が、また、當然其處に、出立點を置くものなることは、多言を須たないのである。(猶ノイマン氏前掲論文五四二頁を參照されたい。また前段五頁のバーネットの言を玩味されたい。)

『カ・タキアン』を認むれば、流通の正義は、一に全く幾何的比例にのみよつて支配せられることは、バーネット・グラント兩氏の、明快に斷言した通りである。然るに、マルクスは、此の最も重要な點について、甚だ大なる——許し難き——誤解若くは曲解をしてゐるものではないかと、私は疑ふのである。即ち、彼は、私が前段に、長々と、河上、高畠兩譯本から引用した一條に於いては、單なる算術的等價の式を以つて、ア氏の説を言ひ表はしてゐるのである。

バーネットは、明言して云ふ。算術的比例の式は、$a-b=c-d$ であつて、$\frac{a}{b}=\frac{c}{d}$ ではない。此場合にいふ『イソン』は、次の事實から起る。若しも、四個の數量が、『算術的比例』に於いてあるならば、中間數の和は、極端數の和に均しい。即ち、$a+d=b+c$ これである。これに反して、所謂『幾何的比例』とは、$\frac{a}{b}=\frac{a+c}{b+d}$ の式によるものであると。(前掲書二一八頁。)

然るに、マルクスは、

5枚の褥=1軒の家
(κλῖναι πέντε ἀντὶ οἰκίας)は、

5枚の褥=若干の貨幣
(κλίναι πέντε ἀντὶ . . . ὅσου αἱ πέντε κλίναι)

と異るところはない

と、アリストテレースが言つたものとしてゐる。河上博士等譯本八二頁の譯文を、其まゝに引いて置く。

今念の爲め、此條のアリストテレース原文をあげて見る。

ὅτι δοῦτως ἡ ἀλλαγὴ ἦν πρὶν τὸ νομισμα εἶναι, δῆλον διαφέρει γὰρ
οὐδὲν ἢ κλίναι πεντε ἀντὶ οἰκίας, ἢ ὅσου αἱ πεντε κλίναι

一一三四 b
第二十七—八行

（前段所譯第五章第十六節）

『貨幣の存するに至りし以前にも、交換は、此くの如くにして行はれたことは、明瞭である。一戸の家屋に對するものが、五箇の寢床であらうとも。又は、五箇の寢床に當るだけのもので、あらうとも、其間些も異るところはないから。』

讀者は、マルクスの引用と、アリストテレースの眞正の原文と、兩々相對照して、何と感ずるであらうか。其れは私には、實に異樣の印象を惹き起さしめずしては、已む能はざるものである。

アリストテレースは、算術的等價式を少しも用ゐて居らぬは勿論、左樣に解釋すべき疑の餘地を、寸毫も與へては居らぬのである。元より、ア氏の意を、明瞭にする爲め、數式を用ゐることに、何の差支あるわけではない。諸註釋家は、其れ〳〵に、それを試みて居る。而して、私は、其の若干を、出來るだけ綿密に、前段に譯出して置いた。しかし、其の式化は、決して、ア氏の意に悖るものであつてはならぬ。

ア氏は、常正の流通行爲を支配するものは、算術的比例ではなく、幾何的比例であること、殊に、之れは、平方形の兩對角の結合によつて見出さるべきものであることについて、甚だ詳かに說いてゐるのである。然るに、マルクスは、ア氏の此一段を、純然たる算術等價の式を以つて表示してゐるのである。其の不當なることは、言ふまでもないしかし、其點を追窮するのが、私の趣意とするところではない。此くア氏說の最も重きを爲すところについては、全く取り違へた解說を下したマルクスは、果して、眞に、アリストテレースの『流通の正義』論其ものゝを理解してゐたものであるか、否か、私は、甚だ深い疑惑を惹き起さずして措く能はざることを示めす、これが、私の趣意である。

算術的比例によらぬと云ふことを說くのが、ア氏の大眼目である。

然るを、算術等價式を以て、其說を言ひ表はすのは、ア氏說の中核を

マルクスによつては、殆んど全く諒解せられてゐないことを立證する所以ではあるまいかといふのが、私をして、抑も、此の淺薄極る一小論文に筆を染めしめた所以であるのである。然るに、更らに、ア氏の說を熟讀玩味して見て、『カ・タキシアン』の根本見解が、マルクスに全く缺けてゐることを見出した。而して、其の結果、マルクスが、私の引用の一條に於いて、ア氏說として說いてゐるところは、ア氏說其ものゝ眞意を幾多の點に於いて、全く沒却して居るのではないか、幾度か商量し、幾度か厚意的解釋を繰返した後、此點猶は依然として釋け難い疑惑として、殘るに至つたのである。

(三十五)

マルクスはいふ。『アリストテレースは、商品の貨幣形態は、たゞ簡單なる價値形態の、すなはち一商品の價値の任意なる他の一商品における表現の・より發展せる姿であることを、明白に述べる』河上博士等譯本八十二頁と。私は、先づ此の說き出しに躓く。而して、マルクスの解說の餘りに無造作にして、『餘りにナイーヴ』なるに驚く。讀者は、すでに前段の稍々詳しい私の紹介文によつて、粗ぼ、私と同樣の感を抱くを禁じ得られないであらうと思ふ。アリストテレースは、決して、決して、其樣に無造作たことを言つてゐるものではない。

フェヒナーは云つた。『配分の正義に、人々の間に、財貨を配分することに關するものであるから、其の意味する均等とは、人と人との間に於ける關係に於てのみ言ひ得るものである。何となれば、諸々の財を、諸々の人に均等にするのでなく、財の人に對する關係を均等にするのであるから。即ち、均等の財が、均等の人々に、不均等の財が、不均等の人々に、分たるゝ謂である。其の均等とは、諸財貨の數量、品質の均等の謂ではなく、關係の均等の謂である。二つの關係の均等を、數學者は、幾何的アナロジーと名ける』云々。前段九頁。

ツェラーも亦謂ふ。此場合『各人が均しく多く受取るのでなく、各人は、其の功績に應じて(カ・タキシアン)受取ることを要求するに從つて、此場合に於ける配分は、幾何的比例に從つて行はれる。即ちAの功績のBの其れに於ける如くに、Aの受くる名譽又は利益は、Bの受くる其れらに對すべきである。』前段十頁。

私は、今此點を推して論ずる餘白を有せぬことを、甚だ憾まざるを得ない。乍去、讀者は、少くとも、ア氏の解說は、マルクスのような

無造作なものでないことの一端を、十分に看取せられたであらう。

マルクスは、つゞいていふ。『彼は、更らに、かゝる價値表現を含んでゐる價値關係は、そのもの自體において、家は褥に對し質的に平等とされることを・またこれらの感性的に異れる物はかゝる本質上の平等なくしては同一單位にて測りうべき大きさとして互に關係しえないだらうことを・條件づけてゐるといふことを、洞察してゐる。彼はいふ『交換は平等なくして存在しえない、しかし平等は通約性なくしては存しえないと。』河上譯本八十二頁。

此一條は、ア氏文の第五章第十五節のことを言つたものである。私は、再び、私の其條の譯文を引く。『其の故に、すべての貨物は、一定の價格を附與せられてあらねばならぬのである。(卽ち、公定價格のことで、市場の驅引によらざるの意)かくてこそ、交換は常に可能であり、從つてまた、人と人との間に、流通が成立し得るのである。かく、貨幣は、一の尺度として働いて、すべての財を通約的ならしめ、而して、すべての財を均等ならしめるものである。蓋し、交換が行はれなければ、流通は成立たず、均等がなければ、交換は行はれず、通約性が成立たなければ、均等は行はれないからである。前段原稿の九一—二頁

讀者は、兩者を比較して、其含むところに、著しい相違あることを容易に看取されるであらう。況んや、私が前段にあげて置いた諸家の解說を玩味するに於てをや。『家は褥に對し質的に平等とされること』などとは、ア氏說の正反對である。『これらの感性的に(!?)異れる物はかゝる本質上の平等なくしては』とは、まさに、アリストテレースの顏面を痛打する底の暴論ではあるまいか。白が黑とされる云々との河上博士の愛用言は、此くの如き場合の爲めに造られたのではあるまいかとさへ考へられるのである。而して、マルクスは、ア氏は此く『洞察してゐる』といふ。覗き込んだのは、マルクスであるに疑はない覗き込まれたものは、アリストテレースである。『斯く、私は洞察する』と、マルクスが言ふならば、其は、若干の意味を爲す。ア氏が斯く洞察したりとは、誣ふるも亦甚しいものではあるまいか。

マルクスは、此の世にも恐るべき『洞察』の上に立ち上りて、而して、聲高く、ア氏を責めていふ。『しかし、彼はこゝで立ち停つて、價値形態のより以上の分析を抛棄した』と。!? !? 抛棄したのは、ア氏ではない、マルクス其人である。ア氏は、價値形態のより以上の分析は、其の立ち停ると稱せられる箇條よりも、ズツート前に、寧も詳

かに試みてゐることは、私の前段の紹介の示した通りであるのである。

マルクスは、立ち停りはしなかつただらう、其反對に、彼は全然アリストテレースの丹念に歩み來つた長い旅程を飛び越えて仕舞つてゐるのである。否、其様な道程の存することに、注意をすら拂つた跡を示して居らぬのである。

マルクスは、つゞけていふ。『かくも、多種多様なる物が同一單位で測られうるといふことは』、すなはち質的に等しいといふことは、『しかし實際には(!?)不可能である』。かゝる平等の取扱は、物の眞の性質とは何等か無關係のものでしかありえない、從つてたゞ『實際的必要の應急手段』たるにすぎない』かくて、アリストテレースは、彼れのより以上の分析が、どこで挫折したかを、すなはち、價値概念の缺亡を彼自ら吾々に語つてゐる。褥の價値表現において家が褥に對して表はすところの、ある平等なるもの、すなはち共通なる實體は、何であるか? かゝるものは、『實際には在りえない』と、アリストテレースはいふ。何故? けだし、家は、褥と家との双方に存在するところの現實的に平等なる或るものを代表する限りにおいて、褥に對し平等なる或ものを代表する。そして、之れは——人間勞働である』〔河上譯本八一二八三頁〕

(三十六)

此條に當るアリストテレースの原文を、再び私譯によつて引く。『さて、眞實に於いて、かく多く相異る諸物が、通約的となることは、不可能なことである。乍去、需要の立場から見れば、相應に、可能である』〔前段十八頁〕、念の爲め、ア氏の原文をあげる。

τῇ μὲν οὖν ἀληθείᾳ ἀδύνατον τὰ τοσοῦτον διαφέροντα σύμμετρα γενέσθαι, πρὸς δὲ τὴν χρείαν ἐνδέχεται ἱκανῶς.

一一三三b 第十八—二十行

マルクスは、此一條を、全く誤譯してゐる、『實際的必要の應急手段』などとの與太譯は、如何して考へ付いたのであらうか? マルクスの諸書は、他の國語に於いても、其れ相應に誤譯されて居るようであるし、殊更に、我邦に於いては、河上博士を筆頭として、實に大小無數の誤譯者を有して居るのであろうか、マルクス彼れ自ら、『偉大なる研究者』と祟めて、殆んど師事せん計りにして居るア氏文の、而も、マルクス自らの評論に取つて、甚だ輕からざる關係を有つ此一條を、斯くも、無

慘にも誤譯してゐるを見出すことは、笑止此上なきことではあるまいか。しかし、或は思ふ。誤譯は、マルクス其人がしたものではなく、誰人か（多分獨譯本の何れかに於いて）が、此の罪深い誤譯をして置いたのを、マルクスは、其儘、何等の思慮を用ゐることなく、呑吐したのであるかも知れない。

其の何れにしても、此の誤譯は、甚だ verhängnisvoll なものなのである。（忠實篤學なカウツキーが、此の誤りを匡さないのも、亦一の滑稽事たるを免れないが）。何となれば、其れは、『カ・タキシアン』の原則の認容に基くア氏說の最重要點の一に關するものであるから。ア氏は『乍去、需要の立場から見れば、相應に可能である』と云つてゐるのであつて、諸物其ものは、眞實に於いて、通約的となることの不可能なるを明言すると同時に、乍去、需要（χρεία〔フレイア〕）の立場から見れば、それは、相應に（ἱκανῶς〔イカノース〕）可能（ἐνδέχεται〔エンデヘタイ〕）なりと主張してゐるのである。單に、實際的必要の應急手段たるにすぎないなどとの曖昧な出鱈目を吐露してゐるのでは、斷じてないのである。

マルクスは、此の誤譯——河上博士の語を借用すれば、實に珍妙極まるところの——に基いて、さていふ『アリストテレースは・・・どこで挫折したかを・・・自ら吾々に語つてゐる。』と。私は言ふ。マルクスは、其のアリストテレース解釋に於いて、どこで挫折したかを、いとも明白に、自ら吾々に語つてゐるのであると。

"also nur "Nothbehelf für das praktische Bedürfnis"

Volksausgabe S.25

と、マルクスが茲に變造したのは、たとへば、ロルフエス譯本（哲學叢書本）には

"für das Bedürfnis aber ist es ganz gut möglich" S.101.

とあり、ガルヴェ譯本には、

"aber in sofern, als diess zum Gebrauch und dem gesellschaftlichen Leben nöthig ist, findet es allerdings Statt"

S.216 -7.

とあり、チエローの佛譯には、

"Mais on y réussit assez exactement (? suffisament) pour le besoin." p.218.

バルテレミー・サン・イレールの佛譯によれば、

"mais il est certain que pour le besoin qu'on en a, on peut arriver sans trop de peine à les mesurer toutes suffisament p.153.

とあり、更らに、ブラウンの英譯では、

"but it is sufficiently possible as far as demand requires". p.142.

となつて居り、最後に、ロッスの英譯では、

"but with reference to demand they may become so sufficiently" p.1133. b.20.

とされて居る。其何れによつても、『實際的必要の應急手段』などと解せられるべき懸念は、毛頭微塵も存せぬのである。然るに、カウッキーに、わざく、原文にない脚註を、此一句に押入して、『二一ルアリストテレース著『ニコマーコス倫理學』十卷本。第五章、第八節。――カウッキー補註』（河上譯本八三頁）としてゐる。而して、事も大樂に、特に其自序十九頁に『私に於いて、可能なる限り、私は、其他の（英書以外の意）本文中の引用句を、原本と比較した（!?）……たとへば、第二十六頁の（實際は、二十五頁！）アリストテレースからの引用の如き』と云つて居る。原本と比較して置き乍ら、此の重要な誤譯を其儘にして置くとは、カウッキーにも似合はない不忠實、不正確、不綿密である。而も單に拉丁語で書名をあげるだけで何れの版本によつたかを示さず。また少くとも、通例によつて、ベッカー頁を示すべきにこれをしてない。更らに笑止なのは、河上博士たちは、其拉丁書名を日本語には書き出されてはしたが『十卷本』などと可笑しな譯を着けてゐられる。ニコマホース倫理學には、十卷本だの八卷本だのとの種類のないことは、大學豫科生でも知つてゐる。しかし libri decem と云ふ文字の讀み方が、不十分にして、博士たちによつて解せられなかつたのは、カウッキーの不綿密を御追從奉するものとしては、むしろ興味がある。

さて、私に許された紙面は、愈々盡きた。私が、マルクスの解釋について疑を挾む點は、まだく數多くあるのである。否、抑も、アリストテレースの價値論について、マルクスの其れとを對照して一々に吟味すべき重要の仕事には私は一向進み入ることが出來ずにゐるのである。しかし、以上極めて簡單に、而して、重に訓詁的の方面のみをあげただけでも、讀者は、マルクスのアリストテレース解釋の決して吟味なくして、傾聽せらるべきものでないことは、粗ぼ、これを諒せられたであらうと思ふ。況んや、其れに直ちにつゞいて、彼れ自らの『人間勞働』を、受入るべく我々に強ゐることをや。私は、他日、暇を見出すことあらば、更らに、筆を洗つて、稍々具さに、新たなる吟味を、これらの取殘された點について試み度いと念ずるものである。

(三十七)

最後に、河上博士たちの譯本に於ける或重要なる不正確又は誤謬について一言して置かう。

其れは、以上のマルクスからの引用文中、私が前段に指摘した等價式の邦譯これである。マルクス自ら、此等價式について、アリストテレースを全く誤解又は曲解したのであらうと私が考へることは述べた。ところが憐れなるマルクスは、自己の誤謬に更らに加へて、日本に於ける其の最高度の崇拜者たる河上博士たちによつて、更らに、重要なる誤謬を背負はされることになつたのである。マルクスは、

"5 Polster = 1 Haus" unterscheidet sich nicht von:

"5 Polster = so und so viel Geld"

と記してゐる。其れは、アリストテレースの意味を正確に傳へたものでないのみならず、肝腎の彼の幾何的比例の論を全然足下に踏みにじつたものである。恐らく、マルクスは、茲の ὅσου なる語を讀み違へたのであらう。ἴσον と云ふ字は、= といふ符號と同義として用られることは、バーネット氏(一二〇頁)が、ア氏の一一三三a第二十二行を例示して居る通りである。ὅσου は、其れとは違ふ。其れを直ちに = の符號とすることは、當を得ない。此語は、拉丁語の quantus (Stephanus, Lexicon Graeco-Latinum von Epitome Thesauri Graecae Linguae. Genevae. 1776. 603.—Passow, Hwbch. d. griech. Sprache. N. A. Leipzig 1847. S. 1701. "So viel werth ist" に當る語なのである。即ち、私の拙い譯では、『に當るだけのもの』の意である。無論、其れは、此場合では、『に當るだけの貨幣又は貨幣價値』の意である。拉丁譯では、フイルマン、ヂドー版の其れによれば此一條は

Nihil enim interest utrum lecti quinque, an quod tanti sit (quanti lecti quinque, pro domo detur.

となつてゐる。マルクスが、これを、單に、so und so viel Geld としたのは、無論、甚だ不正確である。しかし、彼は、其下に、希臘の原文を入れてゐる。其れによると、彼は『アンチ』なる希臘語を = の符號で譯出し、『五箇の寢床に當るだけのもの(又は價値)』を單に『其れだけの貨幣』と譯出してゐる。希文が添へてなかつたら、無論これは誤譯の疑を惹き起さしむるに十分なる不正確譯であるが、希原文が添へてあるによつて、此點は、書き方の不十分な丈けで、マルクスがア

氏文を讀損ねたものとは云ひ得ないのである。然るに、マルクスが、折角原文までを挿入して、正確を期した其一條を、河上博士たちは、全然讀み損ねて、『若干の貨幣』としてゐる。實に言はゞ株ない不正確又は誤譯である。然るに、博士等は、平氣で——博士の私に惠まれた言を借用すれば、『つらくしくも』——其の希文を、わざ〳〵入れてゐるのである。即ち、博士たちは、「我々は、まさに、此重要なる一行を讀み損ねたり」との證文をかゝげて居られるのである。

『若干の貨幣』などが、如何して、等價式に持ち來され得やうか、博士たちは、一顧半顧も此問題に對して與へられなかつたものと見へる。マルクスの等價式のア氏の意味するところに全く反すること、「アンチ」が＝であつたり、「オソン」が其れであつたりすることの妥當か否かの問題の如きは、かくては、猫に小判となる。

しかるに、玆に甚だ興味あることとは、『私の語學は英獨二語に限られてゐる』と、率直に公言し、而して、其譯文に讀めたか讀めぬか分り兼ぬる希臘文などを、寫出しをして居らぬ高畠氏の譯本には、却て、左の如く、譯出してあることこれである。

5 褥＝1家屋 は、

5 褥＝幾許の貨幣 と

「異なるところなし」

「若干」と「幾許」何れが、マルクスの原意に近いか、而して、更らに溯つては、「オソウ」てふアリストレースの原語に合つてゐるか、其れは私が贅說すべく、餘りに、明白なことであらう。私は、玆に至つて高畠氏の『ペダンテリー』ぬきの率直なる邦譯本が、タトへ幾多の缺點を有してはゐるであらうとも、少くとも、此一點に於いて、甚だ快き印象を與ふるものなるを否定し能はざるものである。而して、其れが、偶々私が甚だ重要視する一條に於いて示されてゐることを、確かに、一の會心事と考ふることを、禁じ能はざるものである。

× × × × ×

今筆を擱くに當り、私は、此文中定召甚だ多くの誤譯や獨斷を犯したものであらうことを、深く懸念せざるを得ぬ。文中屢々斷つて置いた通り、私の商量や吟味は、何れも、極めて幼稚千萬なものである。唯だそれを表はさなければ、終に、自ら改むるに機會を得る能はぬであらう。私は、切に、先覺學者の遠慮なき叱正を希ふものである。又、文中諸學者に對し無禮の言を陳じ、其怒りを招いたことも尠くあるまいと恐れる。切に宥恕を乞ふところである。

（終）

此小論文（三）以下並に本誌二月號の拙文には、誤植が少くない。わざ〳〵書を寄せて教を賜はつた方々には、此の機會に於いて、厚く御禮を申上げる。次號の本誌には、一切の誤謬を一括して正誤表を掲出して貰ふつもりである。

又た細貝正直君（前號正邦とせるは誤り）は、更らに其後二回手書を賜り、私がロシア語の語尾について記したことは、恐らく誤であらうと教へられたことを全部取消し、改て私の說を正しと認むる旨申越され、種々懇なる附言を添られた。同君の篤學、芳情に對しては、言ひ盡されぬ感謝を禁じ能はぬ。元々私のロシア語の智識は極めて微少なものであるから、右の語尾論についても、私には、何の自信もない。しかし、私のロシア友人は、私の考は決して誤つて居らぬと繰返へして居る。今細貝君の再教によつて、前號に於ける私の訂正は、其必要なきこととなつた樣であるけれども、私は其れに安心して、自分の拙い考を固守しようとするものではない。偏に、博雅の君子の高教を待つ次第である。猶上田教授が、其後更らに、此れらの點について種々私を教へて下さつたに對し、厚く御禮申しておく。

追記。重要な正誤を許されたい。拙文（其一）四九頁上九至十行（其二）八九頁七至八行のヘリオドロスなる名を削り、從て（其三）五七頁上挿註『而も』以下を削る。其理由は、右三所に於て、『パラフラシス』の撰者ヘリオドロスとしたのは誤であつたから。此誤は伯林學士院版本ア氏註釋集第十九卷の記載を其儘取つたのである。しかるに本文脫稿後上田（辰）教授は近時其の插架にかゝる一六〇七年刊著者不明の『パラフラシス』最初刊本（希拉對譯）の一讀を、私に許された。ついて見るに其れは伯林版ヘリオドロスの書と、希原文は全く同一である。然れは『パラフラシス』は、決して、紀元第二世紀のアスパシオス註解と、同時代のものでなく、遙か後世（恐らく十三―四世紀）のものである。私は右兩書が伯林本に併載されて居り、殊に後者に缺けた第五篇が前者によつて補はれてゐるにより、兩者を同時代のものと誤信した。其誤信たることは、ユーバーヴェヒ哲學史第二卷第十一版一九二八年刊二八六頁）の記事、パーネット緒論十九頁の其等によつて知つた。且つ、『パラフラシス』の到底アスパシオスに比すべきものでないことも學んだ。これ上掲の正誤を要する所以である。

因に、高橋氏は、私の誤評に對し、三田學會雜誌（三月號一五七頁）に、『余は決して、白頭の豕兒を異として、人に誇らんとするに非ず。河東に至らば、群豕皆白きを知るも、而も但說明の便宜上、之れを引けるに過ぎず』と言つて居られる。私が誤て白しと云へば、氏は聲に應じし其白きは、夙くに知つて居たと云ふ。事實は、河東に至るも、群豕は決して白くはなかつたのである。其滑稽正さに一場の落語に類する唯私は援引の記事は樣々見たが、アルベルトスの稀書（一八六〇年刊ブリューネ『稀覯書錄』一三五頁に、『此書近年甚だ稀、價三百法を超ゆ』とあり）其ものを見るを得ず、況んやこを說明の便宜に當ることをや。氏に望む、願くは、白頭の豕兒たる其稀書の一覽を、私に許すこと、上田教授の『パラフラシス』に於ける如くならんことを。

至囑々々

大衆講座

比例選擧の方法

森口繁治

一

比例選擧とはいかなるものか、又何故それを行はねばならぬか、此問題は現に行はれて居る投票方法の缺點を指摘することに依つて其明確さが强められる。故に先づ簡單に最近に行はれた總選擧の結果に就て其目覺しい二三の事實を指摘して觀る。

東京府第七區では定員三名の所へ六名立候補して居るが、其得票は次の如くであつて、三名共政友會の占むる所となつて居る。

當選　一一八一九票　中村　亨（政新）
　　　一一二九九票　坂本一角（政新）
　　　一〇三四四票　津雲國利（政新）
次點　九九一三票　八並武治（民前）
　　　九〇九五票　荒井惣太郎（民新）
　　　四九〇四票　中溝多摩吉（政新）

即ち政友會は合計三八三六六票を以つて三名を當選せしめ、民政黨は一九〇〇八票を得て一名も當選せしめて居ない。此結果は何人が見ても不合理であらう。同樣の結果は愛媛縣第一區其他所々に見受ける所である。

次に鹿兒島縣第一區では次の如くなつて居る。

當選　一八四七八票　床次竹二郎（民前）
　　　八六五五票　岩切重雄（民前）
　　　八〇七五票　藏園三四郎（民前）
　　　七七〇八票　原　耕（民前）
　　　七四二八票　岩川與助（中立）

次點　六二三八票　森島東四郎（民政）
其他民政　一八〇八二票　勞農　一一〇三票
中立　一一〇三票　政友　九二五票

此場合にも中立岩川與助氏はいかなる色彩の人であるか知らないが、其當選は不合理である。而して此不合理な結果は要するに床次氏の取り過ぎと民政黨の候補者亂立の結果である。

更に東京府第五區は次の如くなつて居る（八丈島を含まず）。

當選　四六九五五票　高木正年（民前）
　　　二〇九五九票　鈴木富士彌（民前）
　　　一七七一五票　牧野賤男（政新）
　　　一四七三一票　斯波貞吉（民前）
　　　一三三八三票　佐藤安之助（政新）
次點　一〇二一七票　加藤勘十（日勞）
　　　七四四一票　畑彌右衛門（政友）
　　　三八六二票　秋和松五郎（勞農）
　　　二九八〇票　三上英雄（政友）
　　　二七一一票　小川濟俊（民衆）
　　　二四一三票　石井　滿（中立）

それで玆ではかう云ふことが考へられる。即ち第一に高木正年氏は非常な高點を以つて當選して居るが、何故にかくの如き高點を得る必要があるか、必要以上の得票は無效投票と同樣の所謂死票である。民政黨は或は適當な候補者ならば今一名立候補せしめても當選の機會があつたかも知れぬと考へられる。第二に無產黨三派の得票の合計は一六七九〇票に達して居る。故に此票を一名の候補者に集中することを得る方法さへ講ぜられて居たならば、此選擧區からは無產黨候補者が一名當選して居た筈である。所が現在の方法では之を一名に集中する方法がないから、此種の所謂對立候補のある場合には當然當選すべきものが當選し得ない結果になるのである。今回の總選擧では既成二大政黨の幹部の或る者は、勿論一名でも多く自黨の議員を選出したい。たが自己の選擧區から自派の他の候補者を一名でも多く立候補せしめると云ふことはそれだけ自己の當選を危くすると云ふことになるから、此矛盾に苦しんだやうである。政友會の一部で近時しきりに小選擧區制採用論が行はれて居るが、其理由の一は正しく玆に存するやうに考へられる。

然るに投票方法が單純な單記投票法、即ち各選擧人が候補者一名をのみ記載して投票する方法を採用し、且つ多數を得た者から當選すると云ふ方法に依つて當選者を定める以上、右の如き種々の不合理な、又は不都合な結果から免かれる方法と云ふものはないものである。

併も此種の方法では各候補者が獨立に投票を得、最多數を得た者から順次當選するのであるから、各候補者は皆獨立に自己のために運動をし、爭つて一票でも多くの投票を自己のために得やうとする結果は不當に選擧運動を猛烈にし、從つて又買收其他不正の競爭を爲す機會

を多くして居るのである。今回の總選擧の結果、一部の人々は、中選擧區では運動に不便である、殊に法定の選擧費用では選擧運動を充分に行ふことを得ない等の理由から、小選擧區制の採用を主張して居るが、かゝる不便或は困難は比例代表法を採用すれば恐らく消滅する筈である。今更ら小選擧區制度の採用でもない。

加之、小選擧區制度は第三黨のない場合ならば其缺陷は比較的少ないが、三黨が相爭ふ場合には、屢々少數を以つて當選する場合がある。簡單な例を擧げると甲（政友）五〇、乙（民政）四〇、丙（無產）三五の場合には勿論甲が當選するが、投票總數は一二五票であるから甲は決して全體の多數を得たものではない。今假に丙を選んだ三十五名の選擧人に甲乙の何れかを擇ましめたとすれば、或は却つて乙を擇むであらうと云ふことが考へられる。併も甲が多數を得たものと考へられ、民政黨に屬する選擧人も、無產黨を擇んだ選擧人も、等しく、此選擧區では甲と云ふ政友會の議員に依つて代表せられると云ふことになる。何と云ふ不合理であらう。但し小選擧區制度の弊害を指摘することが此解說の目的ではないのであるから、此問題は玆では別の問題としたい。

二

現に行はれて居る投票方法に重大なる缺陷があると云ふことは右に示した所に依つて略ぼ明かであらう。併も全國的に觀れば、此種の例はかなり多い。兵庫縣第一區（神戸市）では民政黨は約二萬六千票を以つて一名しか選出して居ないに反し、政友會は約二萬一千四百の少數を以つて却つて二名を選出すると云ふことになり、結果は全く逆になつて居る。何故にかくの如くになるか。それは第一に當選をするに必要な票數に一定の合理的な基礎がなく、單に最多數を得たる者から順次當選とするからである。例へば今此神戸市の實例に觀ると有效投票一〇二、八八〇票中當選者の得票は次の如くになつて居る。

三一〇七六票	野田文一郎（民政）
一四三四六票	砂田重政（政友）
一二三六六票	藤原米造（愛國）
七八二三票	河上丈太郎（日勞）
七四七七票	中井一夫（政友）

そうすると野田氏に投じた選擧人の一票は中井氏に投じた選擧人の一票の四分の一にも滿たぬ力しか有たないことになる。是れは當選を定める投票數に一定の合理的な標準がないからである。故に比例代表法は先づ此不合理な點を改めるのであつて、右の如き不合理なる不特定多數の代りに合理的な一定多數を用ひ、之を標準として各黨の間に議席を分配すると云ふことになる。かゝる標準數を當選標準數又は當選商數と名付ける。

然らばかゝる當選標準數はいかにすれば得られるか、其算出方法には種々あるが、一つの方法は次の如くに考へて行けば容易に得られる。

即ち今假に一區一人制の選擧區があつて、其所で二人の候補者が爭ふと云ふ場合、其中の一人が當選するに必要にして充分なる數は半數より一票だけ多い票數である。例へば其有效投票が百票であつたとき、若し得票が五十票宛たつたとすれば同點になるから、確實に當選する爲めには五十一票を必要とし、又それで充分である。五十二票を得る必要はない。同樣に此選擧區に數名の候補者があつたとしても、其內の一人が五十一票を得れば、其當選は確實である。故に此場合の標準數は $\frac{100}{1+1}+1$ と考へてよい。

二名を選出する場合はどうかと云ふと、今此選擧區で三名が爭つたものと假定すれば、前と同樣其中の二名が他の一名よりも一票宛多かつたならばよいのである。例へば右の例と同樣、投票總數が百票であつた場合は三名中二名が各々三十四票を得、他の一名が三十二票であればよい筈である。而して此場合にも假令三名以上立候補者があつたとしても、其中の二名が三十四票宛を得れば先づ問題はない。故に此場合の標準數は $\frac{100}{2+1}+1$ である。同樣に三名を選出する場合は $\frac{100}{3+1}+1$ を標準數とすればよい。四名の場合は $\frac{100}{4+1}+1$ を標準數とすればよい。

私は、右の說明では解り易いやうに有效投票を百票と考へたが、勿論百票には限らない。例へば定員五名の選擧區に於て、其有效投票總數が四、九四〇票であつたとすると、其標準數は $\frac{4940}{5+1}+1=824$ である。故に一般的に此種の標準數は、有效投票總數を議員定數に一を加へた數で割り、更に之に一を加へたならば得られるのである。前掲神戶市の場合に、此標準數に從ひ、比例代表に依つて議席が分配されて居たと假定すると、有效投票總數は一〇二、八八〇、定員五名であるから、其標準數は一七、一四七票であり、結局民政から三名、政友から一名、他に藤原米造氏が當選する結果になつて居たこと丶考へられる。選擧方法を變更することに依つていかに重要なる變化が起るかを此實例はよく示して居ると思ふ。現に行はれて居る方法の下に於ては民政黨に投票した約三萬の神戶市の有權者は無意味に其投票の力を失はせられたと同樣である。此種の標準數は現に英吉利及び其屬領に於て用ひられて居るものであつて、ドループと云ふ人が發明したから、之をドループ式標準數と名付ける。

或は簡單に次の如くに考へて之を得ることも出來る。例へば今回の總選擧で大阪府第五區では各派に次の如き得票を示して居る。

民政　四〇八一四　　政友　三一八一八

日勞　一一一五六　　實同　九八一一

此場合、各黨の得票總數をそれぐ一分し、二分し、三分して行く。即ち

	民政	政友	日勞	實同
一分	40814 (1)	31818 (2)	11155	9811
二分	20407 (3)	*15909 (4)	5578	4905
三分	13604	10606	....	....

此選擧區では定員四名であるから、右に示すやうに大なる數から(1)(2)

[illegible]きいと減じて行き、一五七〇九票と云ふ當選標準數を得、之を標準數として各派の間に議席を分配する。之をドント法と名付ける。右の例では此方法に從つて居たとすれば、民政二、政友二といふことになる。然るに今回の實際の結果はどうなつて居るかと云ふと次のやうになつて居る。

當選	一五八六六	田中萬逸（民政）
	一五七六二	岩崎幸次郎（政友）
	一三六一六	勝田永吉（民政）
	一二三三二	佐竹庄七（民政）
次點	一一一五六	杉山元治郎（日勞）
	一〇七七三	相島勘次郎（政友）
	九八一一	高松正道（實同）
	五二八三	中村虎次郎（政友）

即ち民政三、政友一の割合になつて居る。是れが比例選擧であつたとすれば、相島氏が當選し、佐竹氏が落選し、當落其地位を顚倒することゝなる。尙此種の方法では日勞、實同の候補者に投じた選擧人は全く代表者を有たない結果になるから、此等の投票をも生かす工夫が必要である。その方法にも色々あるが、後に私のよからうと思ふ方法を述べるから、其ときに其中の一が明かにされるのを以つて滿足して貰い度い。

以上の二方法では、各選擧區から選出すべき議員の數が一定である。[illegible]である。又各選擧區の當選標準數を同一にはしない。然るに當選標準數を全國的に適當であると考へられる數に常に一定して置くことも出來る。此方法を採用すると當選標準數が一定であるから、選擧毎に、投票數を異にするに從ひ、選出される議員數が變動することゝなる。即ち議員定數と云ふものがなくなるのである。例へば今此標準數を六千とし、或る總選擧の際に全國の有效投票の總數が二百萬票であつたとすると、此選擧に於て選出される議員數は三三三名である。所が次の總選擧では棄權者が尠く二百二十萬票だつたとすると、此時には議員數が三六六名に增加する譯である。現に獨逸は此種の方法を採用して居る。而して此種の方法は豫め計算に便利な數を選んで之を標準數として置くことが出來るし、全國一樣に同一標準數を用ふるのであるから、其點から云ふと公平である。併し議員數が選擧毎に變ると云ふこと自體に不便が存する許りでなく、此方法では人口と選擧人との關係を無視して居るから、各地方から選出される議員數は其地方の人口には必ずしも比例しない。即ち議員が其地方的重要さに比例して選出されないと云ふやうな非難を加へることが出來る。

之を何れにせよ、一定の當選標準數を定め、此標準數に比例して各黨派の間に公平に議席を分配すると云ふのが、比例選擧の第一の原理である。

三

比例選擧法が現在の方法と異る第二の點は投票の移讓である。現在の方法では、或る候補者に投ぜられた投票は、其候補者の個人的な得票として單に其個人のためにのみ計算せられ、それが他の候補者のためにも用ひられると云ふことがない。例へば高木正年氏は四六九五五票と云ふ多數を得、又野田文一郎氏は三一〇七六票の多數を得たが其得票は何所迄も高木氏、野田氏の個人的得票であつて、之を同派の又は傾向を同じうする或る派の別の候補者の得票として役立たしめるやう融通されると云ふことがない。故に標準數を超えた所謂過剰投票は全く死票となつて仕舞ふ。所が比例選擧では投票の融通を許すのであつて、一の候補者が既に當選標準數に達し、尚過剰投票のあるときは此必要以上の數は之を他の候補者に移讓し、他の候補者のために役立たしめることが出來るのである。同樣に、到底當選標準數に達せず、結局落選の運命にあることが明かである候補者の得票も、現在の方法のやうにむざ〳〵と無役にはしないのであつて、やはり之を他の候補者に移轉し、別の候補者の當選のために役立たしめることを許すのである。例へば既に掲げた東京府第五區に於て日勞、勞農、民衆の三候補者の間に此種の得票の融通が許されて居たとすれば、其得票合計は一六七九〇票であるから、優に一名は當選して居る。

然るに此移讓を行ふ方法に二種ある。即ち第一は或る候補者の得票を他のいかなる候補者に移轉するかを專ら選擧人自身の意志に從つて定める方法であつて、之を單記移讓式投票法と名付ける。第二は原則として各派の候補者名簿に就て投票せしめ、從つて其投票は通常同一黨派、又は傾向を同ふするが故に共同に名簿を作製した或る派の候補者間に限つて移轉せられることになる。之を名簿式投票法と名付ける。

單記移讓式投票法では、投票を何人に移轉するかは專ら選擧人自身が決定するのであつて、先づ選擧期日前一定の期間内に屆出でた總ての候補者に就き次の如くイロハ順（又はアルファベット順）の投票名簿を作製する。

順位	候補者名
	犬養毅
一	濱口雄幸
二	床次竹二郎
	安部磯雄
三	鈴木文治

各選擧人は投票期日に右の如き投票名簿に就き例へば假に右に示す如く其最も欲する候補者名の上の所に一の記號を附し、次に其候補者が當選し又は到底當選の望なきにいたつたとき、其票を移轉せしめんと欲する候補者に對し二の記號を附し、同樣に三・四・五等の記號を附

して行くのである。ただ各選擧人はどこまで記入すべきかは全然隨意にて自由に決定する所に一任し、例へば一選擧人は政友會候補者を第一順位とし、民政黨候補者を第二順位とし、勞農黨候補者を第三順位とすると云ふやうに、黨派關係を全く無視して順位を附してもよいのである。

次に投票が終つたならば、先づ第一に各投票を各々一の記號の附せられた候補者のために與へられた投票として各候補者のために其得票を計算するのであつて、今假に或る選擧に於て其計算の結果が次の如くになつたとする。

政友會		民政黨	
一、八〇一	A候補者	八二〇	X候補者
三五〇	B候補者	五〇〇	Y候補者
三〇〇	C候補者	二二九	Z候補者

今此選擧區の議員定數が三名であつたとすると、投票總數は四千票になるから、其當選標準數はドループ式算出法に依れば $\frac{4000}{3+1}+1=1001$ である。そこで政友會のA候補者は先づ當選に決定せられ、其過剩投票八〇〇票は順位欄に示された第二順位の候補者のために役立たせる事ともなる。次にZの如き到底當選の望なき候補者の得票も其第二順位の候補者のために役立てるやうに之を處分して行つて、標準數に達した候補者を當選とするのである。例へば右の例でA候補者の過剩投票の八百票がBに移轉されたとすればB候補者が當選し、Zの二二九票がXに移轉されたとすればXも亦當選し、政友會から二名、民政黨から一名議員を選出すると云ふことになるのである。

右の如く單記移讓法では投票を何人に移轉するかを專ら選擧人が自由に決定する所に一任し、例へば一選擧人は政友會候補者を第一順位とし、民政黨候補者を第二順位とし、勞農黨候補者を第三順位とすると云ふやうに、黨派關係を全く無視して順位を附してもよいのである。

然るに名簿式投票法では、原則として、投票の移讓は同一政黨には同様の傾向を有する或る派として候補者名簿を共同にする者のためにのみ許される。即ちその爲めに、先づ選擧期日前一定の期間に於て各政黨政派毎に候補者名簿を提出せしめ、是れに依つて各政黨政派毎に別別の候補者名簿即ち投票名簿を作り、選擧人は原則として此中の或る名簿上の候補者を撰んで投票するのであり、名簿上の或る候補者に對する投票は其黨派の得票と考へられるのである。例へば今其簡單なる一例を示すと次の如くである。

政友會名簿
○ 田中義一
○ 犬養毅
高橋是清

勞農、日勞名簿
○ 松谷與二郎
加藤勘十
秋和松五郎

右の如く政友會候補者に投せられたる票は政友會名簿の得たる投票とし、勞農日勞黨候補者に投せられた投票は此派の得票とし、其得票數に比例して先づ各黨派の間に議席を分配し、然る後、通常同一の名簿上の候補者に就ては其得票の多き者より順次當選せしめると云ふ方法をとるのである。但し此同一名簿上の候補者をいかなる順位で當選

せしめるかに就ては種々の方法があることを承知せられ度い。

併し何れにせよ、此場合にも選擧人としては極めて簡單に候補者名の上に〇印を付ければよいのである。勿論投票の檢査及び計算は多少面倒になることは疑ひないが、それは選擧官の仕事である。併も選擧官に多少多くの犠牲を支拂はせるだけで、吾々の投票が生き、選擧が適に公平に合理的に行はれると云ふことであれば、此多少の犠牲は忍んで貰はねばなるまい。

四

以上が比例選擧の原理の大體である。現在比例選擧の方法としては二百餘種存在すると謂はれて居るが、其いかなるものも結局右に述べた二個の原理即ち不特定多數を一定多數に改めることゝ、投票の移讓を許すと云ふことゝの二原理に歸着する。一部の人々は此原理を明かにせずして比例選擧が少數を當選せしめる方法のやうに考へて居る。そして選擧と云ふものは各政黨が大いに努力し競爭すると云ふ所に意味があるのだから、比例選擧の採用は議會政治を退歩せしめ、政黨の發達を阻害すると云ふやうに論する。併し各政黨が努力せず、大いに爭はずして其候補者を當選せしめ得ると云ふやうな比例選擧の方法は殘念乍ら未だ發明されて居ない。又反對論者は現在のやうな方法であればいかにも多數を得た者が當選して居るやうに考へて居るが、或は取り過ぎる者があつたり、或は候補者を亂立したりする結果、其當選者は必ずしも多數を得て居ない。同一選擧區で一人は三萬票を以つて當選し、一人は七千票を以つて當選して居る事實を無視し、等しく多數を得て居るものと漠然と考へて居るのである。現に行はれて居る投票方法の不完全であることは繰返す迄もなく明かである。

然らば比例選擧を行ふとしていかなる方法が適當であるか。殊に單記移讓法と名簿式投票法とは何れがよいか。余は其何れを採用するとしても、比例選擧の方法として相當改善されたものであるならば、現に行はれて居る方法よりはよいことを信じて疑はぬ。併し余は何れかと謂へば名簿式比例代表法に賛成であり、現行法と縁が遠くない方法として就中丁抹式名簿投票法に類するものに賛成である。かゝる比例選擧を行ふ技術の詳細に就ては玆に述べることは出來ないから私の著書にでもよつて貰ふことゝし、極めて大體であるが、近い將來に於て比例選擧を行ふとすれば採用してはどうかと考へて居る余の腹案の輪廓を示して此解説を終らうと思ふ。敍述に多少不正確な點があるのは解説を容易にせんが爲めと承知せられ度い。

(一)先づ第一に丁抹法と同様全國を約四百の一區一人(例外として二人)制の小區(開票區)に設け、各候補者は必ず其何れかを撰んで立候補の屆出をなすことゝする。又右の外に補充議席を約六十設け、議員總數を約四百六十とする。

(二)次に右の如き小區(開票區)を五つ六つ結合した一單位として選擧區を作ることゝし、各黨派は此選擧區を基礎として、其候補者名

簿を作製する。但し各黨派共、其候補者の立候補した小區（開票區）に於て用ふる候補者名簿の先頭には其區から立候補した候補者名を特書し、他はイロハ順とする。

（三）選擧人は各黨派毎に別の一證を爲す右の如き候補者名簿に就き、或る候補者を擇んで之に投票する。而して其投票は各黨派の得たる票として計算せられる。卽ち名簿式比例代表法である。

（四）投票が終つたならば各黨の得票を各選擧區毎に合計し、各黨に對し、先づ其得票に比例して議席を分配し、次に同一黨派に屬する候補者の當選の順位は、最も多くの指名投票を得たる候補者から順次當選することゝする。

（五）最後に各黨派の得たる票數を全國的に計算し、各黨に對し比例的に分配せらるべき議席數を議席總數（四百六十）に就て算出する。而して既に各選擧區に於て各黨派に分配せられたる議席數の合計と議席總數を基礎とすれば分配せらるべき各黨派の議席數との差は補充議席の中から更に各黨派に分配せられる。此場合には全國の各開票區を比較し、其派に最も多くの投票をなした區から立候補した候補者が順次當選するものとする。

私は大體右の如くに考へて居る。恐らく理論的にはより理想的な方法が考へられると思ふが、實現の可能性から云へば從來の選擧區制度を殆んどその儘に生かして用ふることの出來る方法であるから、先づ此方法を採用するがよからう。そして比例選擧に慣れるがよからう、と思つて居る。加之、此方法によるとすれば小選擧區制度の長所をも加味することが出來るから、現に中選擧區制度に反對し、小選擧區制度に復歸することを希望する人々に依つて唱へられるが如き苦情を聞くことも恐らくはあるまい。

次號は

「家族、私有財産、及び國家の起原」

堺利彦

無產政黨統一促進

無產政黨統一への道

田所輝明

一

無產政黨統一の問題は、組織勞農大衆、そして特に無產政黨の支持者なる小市民をも含む一般未組織大衆の熱望である。從つてそれは勞農、日勞、日農、社民等の各黨指導者に課せられたる當面の階級的任務でなければならぬ。

無產諸黨は依然として分立と抗爭を續けてはゐるが、しかし無產政黨統一問題を重要に論議した昨年末の各黨大會以後の混亂は明かに、統一に向つての混亂であつて、諸黨の步調は大衆の壓力によつて統一へ面して整へられてゐる。昨年末の統一への傾向は、府縣會選擧に於ける對立鬪爭による苦き經驗と、對立鬪爭の理論なる所謂福本主義（宗派的分裂主義）の批判によつて激成されたものであつたが、この傾向は、此度の總選擧に於いて繰り返へされたる對立鬪爭による慘敗と、所謂福本主義の理論的瓦壞と凋落によつて、今や加速度されつゝある。

二

然らば無產政黨の統一は、如何なる力とコースによつて促進さるべきか？

筆者はこのコースを扱ふ前に、一言吾國の前衞的組織に言及しなければならぬ。

若しも前衞的組織にして、全階級的組織（全政黨に普遍する組織）を有し、正しき左翼的理論、從つて正しき左翼戰略と、戰術を有するならば、無產政黨統一の如き階級的事業は、一に前衞的組織の活動に依存するものである。凡ての期待は前衞的組織にかけられねばならぬ。

しかし乍ら、吾國の左翼前衞的組織は、今日、凡ての人々が知るが

如く、分立政黨中の一政黨なる勞農黨及び同系經濟團體の中にのみ結成されてゐる宗派的組織である。從つてその如何なる活動も影響も、高が直接には勞農黨を動かすに足るのみであつて、全政黨を計劃的に動かすことは出來ない。しかもその戰略と戰術は吾國の資本主義を『急激なる沒落過程にあり』、『金融資本と對專制勢力の抱合にあり』といふ、誤れる現段階論と、それに基礎づけられて民主主義のための鬪爭目標を帝國主義ブルジョアジーにあらずして絕對專制勢力なりとなす誤れる政治分析と、大衆黨と前衞黨を取り違へた『統一の前の分離』の主觀的組織理論によりて構成されたものであつて、過去一年に亘り秋の蛙の如く騷叫せる彼等の論說に於いて、また自らが『中間黨』『右翼』と極印して拔へる組合や黨のストライキに於ける對立鬪爭による罷工破り、府縣會選擧に於ける他黨落選第一主義のための對立鬪爭、今回の總選擧に於ける選擧協定破りと選擧、、等々の實踐に見るが如く、それ等は明かに統一への傾向と銳く對立する所の分裂主義の作因である。かゝる總ては如何なる黨に於いても非難さるべきことであるが、特に『左翼』黨に於いては沙汰の限りである。吾々はそこに、その與員たると否を問はず、讃美し支持すべき前衞組織を見ずに、攻擊し打破すべき宗派組織を見る。またそこに、統一獲得のための動力を見ずに、統一妨害のための反動力を見る。

かくて吾々は、無產政黨統一のために前衞組織の活動に何等の期待を持つことが出來ないばかりでなく、この前衞組織を假面する宗派の破壞の必要を思ふ。よつて無產政黨統一は主として大衆の壓力に、各黨の動向と、それが意識的促進の中に動因とコースを發見しなければならぬ。

三

以上の如き見解の上に立つて、さて現在如何なる力が統一を妨害してをるか？

一、左翼的諸團體に於ける宗派的分裂主義の理論と對立鬪爭を不斷に組織する宗派的勢力。

二、中間的諸團體に於ける、中間的地位を固定化せんとする中間派的イデオロギーと政策。

三、右翼的諸團體に於ける、分裂主義の理論と勢力。

四、政府及び既成政黨──支配階級の無產陣營の分裂と對立鬪爭の上に立つて、漁夫らんとする分割支配の政策。

また如何なる條件の上に統一は可能であるか？　それは以上の裏である。

一、勞農黨に於ける宗派的分裂主義の徹底的なる淸算。

二、日勞黨の不斷の前進。

三、社民黨に於ける大衆の壓力による幹部への合同强制。

總選擧に臨む迄の各黨大衆の動向の中に、以上の統一の條件は如何に進みつゝあつたか？

勞農黨は宗派的分裂主義者の指導の下に、昨年末の大會迄、統一に反對し、『統一の前の分離』論を楯にとつて分離對立政策をとつてゐたが、コムインテルンの『福本主義批判のテーゼ』の發表、各方面からの攻擊に面し、特に黨內の反宗派派が雜誌『勞農』に結合して擡頭するに及び一大旋回を行ひ、大會は自己批判もなしに押し切つたが、しかし『共同鬪爭』による統一なる合同方策を決定した。その後、『マルクス主義』、『無產者新聞』に於いても自己清算らしきものが行はれ始め、ために世人をしてこの總選擧を通じて實踐的に清算するが如く思はしめた。けれども一方『勞農』の攻擊により理論的に破產せしめられた宗派的分裂主義者は、宗派的本能を發揮し、窮屈的な對立鬪爭を展開して來た。總選擧に於いては、世の凡ての人々の見るが如く協定破りと、更らに選擧、、を行ふに到り、『無產者新聞』は再び對立煽動新聞に復歸した。宗派に向つて自己清算を期待しても、それが出來ない處に宗派的精神がある。眞の清算は宗派の大衆よりの離隔によつてのみ完成され得る。宗派そのものは、勞農黨の諸機關による機械的指導と××によつて自己清算に反抗しつゝあるとき、大衆は徐々にまた急激に離隔運動を始めつゝある。かくて宗派主義者につきつけてゐる『宗派的分裂主義の自己清算』なる要求の眞意義が現れつゝある。

宗派的分裂主義者の指導下にある勞農黨の『共同鬪爭』は協定蹂躪に見るが如く對立鬪爭である。その統一は、例へば日勞黨の大衆を幹部からもぎとるといふにある。しかしこの目的は、日勞黨大衆の進出にもかゝはらず寸毫も結果されてゐない。

勞農黨宗派主義者のもぎ取りのための對立鬪爭と、社民黨の『大右翼結成』運動の兩日勞黨分裂策の挾擊の中にあつた日勞黨は、宗派主義の攻擊の波にのつて進出し、更らに日本農民黨及び關西民衆黨等との合同公約により、自らを強大にし先づ直接には社民黨の大右翼結成運動の後陣を切斷し、同時にそのことによつて、大右翼結成の相對物なる、勞農黨宗派主義者の日勞もぎとり運動を破り、今や中間派イデオロギーを止揚しつゝ進んでゐる。

右翼生長のよき客觀的條件を有せざる吾國に於ける、社民黨の多かれ少なかれ今日の生長を見たのは、福本主義者の出まかせの『社會的根據論』――宿命論によつて『ファシスト黨』と極印して拱手せざる限りに於いて、正に吾國の左翼が右翼に對して正しき左翼戰術をとらず、誤りの極左戰術――對立主義――をとつた結果である。而して社民黨幹部の現實主義の理論の上に立つ大右翼結成計畫も、日本資本主義の組合主義を助長するに足る物質的基礎の缺除により、大衆は不斷に鬪爭へ激發され、かくて大衆の生長は現實主義を乘りこへて、幹部を合同へ強賴し、大右翼結成を粉碎せしめてゐる。大右翼結成は日農の日勞との合同によつて後陣を最後的に奪はれた

四

以上の如く統一への諸動因は、混亂の外觀にも拘はらず、正しき方

向をとりつゝあつた。さて、總選擧後の諸事相の中に以上の如き諸要因は如何に進み、また統一に對し或は順であり、或は逆なる新傾向が現はれてはゐないか？

一、總投票數九百九十七萬の中、無產諸黨の得票は僅かに四十四萬が、その重要因として對立鬪爭をあげることが出來る。(民政黨は買收の外に政府の干涉に反撥する民衆心理を巧みに利用して得票した)。また四十四萬に對して僅かに八名の當選は、明かに對立鬪爭の結果である。各黨の組織大衆、及び一般未組織大衆は、政黨統一の要求をいよ〳〵熾烈にして來た。これは統一の大なる壓力である。

二、協定のよく行はれた地區、それは主として勞農黨の反宗派的諸支部(例へば××、×××等)であるが、それ等の地區の各黨大衆の間に統一の要求を高めつゝある。

(勞農黨の宗派的分裂主義者は、一方で協定破りをやり乍らも、以上の一、及び二の如き大衆の善良なる統一要求を、とりあげて自己の指導の維持のために利用することを忘れない。即ち諸黨の中央部の反宗派主義の要求と、特殊地方の統一要求を對立せしめて、他黨の幹部と大衆との對立を失敗的にもいゝ外から煽動してゐる)。

三協定が成立せずに對立が行はれた地區、例へば東京第五區に於けるが如く、宗派主義者によつて上から强行された、協定破り、演說會、[illegible]に、[illegible]的に行はれた勞農黨以外の各候補の逆宣傳と當選妨害活動に、各黨の大衆の對立感情が猛烈に激成した。これは統一に逆に働いてゐるが、同時にこの事實は勞農黨大衆の一部を反宗派化せしめつゝある。

四、代議士黨を以つて自他共に許す日農黨の慘敗は、日勞黨との相互同化の作用を促進するであらう。

五、社民黨の當選者が無產黨中の相對多數を占めたことは幹部と一部の大衆をして、同黨が農民勢力を有せざるために、都市に集中して、小市民の投票によつて當選したといふ事實を忘れしめて『現實主義』の勝利を欲はしめるの怖れはある。しかしこの統一への逆の傾向に對して、院內に於ける壓倒的なる既成政黨の勢力との對立によつて必然的なる無產派議員團の結成は、上からではあるが、統一への順なる傾向である。

五、對立抗爭の中にエネルギーを消耗された各黨支持の經濟團體、殊にその極政治主義の宗派的指導のために量を全く失つた勞農黨支持の經濟團體の中には『宗派主義淸算』の運動は全國的規模に於いてなされつゝある。

五

以上の統一への順なる諸力を意識的に促進する處に統一への道がある。宗派的分裂主義の凋落せる、勞農黨の地方支部及び同黨支持團體

（かゝる地區、かゝる團體に於いてのみ眞の共同委員會が成立する）と、諸黨の地方支部及び支持團體の間に、宗派的分裂主義の排除と戰線統一のために共同委員會を組織することが緊急の必要である。それはまた日勞黨の前進と、社民幹部の合同參加への壓力でもある。而して既に進みつゝあるこの運動は、諸黨の反宗派的統一主義者によつてのみ大衆的運動化されるであらう。

無產政黨統一は光に面してゐる。（二月廿八日）

選擧協定の批判より無產政黨の合同へ

薄　茂　人

一

選擧協定の模範的な定型を實現するといふ雄々しい勞農黨幹部諸君の決意のもとに、斷乎として締結された東京府第五區の選擧協定は、協定によつて日勞黨の加藤勘十氏が立候補するや、勞農黨に巢喰ふ分裂主義者の一團は、黨員の黨利己心を煽動し、操縦して協定破りの模範を實演した。

しかしそれは、選擧の結果、協定破りの階級的裏切りの罪惡は、無產大衆によつて、正當にしかも露骨に裁かれたのである。加藤氏の得票は一萬票を突破して當選點に肉迫し得たのに、協定破りの得票は—分裂主義者に利用されたにすぎない候補者の名を指摘するに忍び難い—僅かに三千八百票を掠取したゞけであつたが、その又三千八百の票數が折惡しくも加藤氏の恰度當選票數に不足する結果となり、當選、、を如實に示したなど、無產大衆の裁きはあまりにも皮肉ではあつた。だが、それにも增して皮肉なことは、勞農黨第五區の中堅的組織大衆である蒲田勞友會は、協定防衛のために、最後の五分間まで闘つたが一と度協定が破れてからは黨の旗の下に、血涙をふるつて協定破り候補のために努力したのだが「今や選擧戰は了つた。協定破りは正しく批判されねばならぬ。批判することによつて、無產政黨の合同へ邁進しなければならぬ」との結論に到達するほど深刻な批判を重ね、協定破りの右翼的行爲にあきれて、脫黨の氣勢さへ湧き立つてゐることである。

これが協定破りの[illegible]たる黨支部の幹部諸君―から、[illegible]のにされ、何等關與せしめられないで、不斷に踏みつけにされて來た黨支部の中堅的大衆から有難呼ばはりされたところに、備れにも深刻な皮肉がある。

しかしいづれにするも協定の模範的定型を實現しやうと決意された第五區でさへが協定破りの模範的定型をつくりあげて了つたのだから全國的に選擧協定の實績が、事實上鑑縷の綴り合はせのやうな出來榮えに終つたことは、寧ろ當然の歸結であつたとしなければならぬが、元來選擧協定の具體的な方法としては、第一に選擧鬪爭題目の協定、第二に選擧區協定、第三に選擧區内の地域協定、第四に選擧鬪爭協定即ち協同對策委員會の下に於ける選擧事務、干涉反對、違反摘發等がある。協定の手段としては、頭の協定でなく足の協定、言ひ換へると黨大衆の協力によつて協定を實現せしめねばならぬ。

しかるに協定の方法は、選擧區協定をひたすらなる目標とし、協定の手段は、幹部專制によつて遂行された嫌ひがある。

協定破綻の主なる禍根はここにあつたことは明白である。

二

協定の形勢を紙上に俯瞰する便益のために、協定の成立―もとより不完全協定ではある―した選擧區と對立選擧區を對照しつゝ、各黨の

[illegible]	對立（非協定）	協定區（不完全協定）
東京第四	勞農と民衆	―
第五	勞農と日勞と民衆	―
第六	勞農と日勞と民衆と日農	―
第七	民衆と日農	―
京都第一	勞農と民衆	―
第二	勞農と日農	勞農と日勞と民衆
大阪第一	勞農と民衆	―
第三	民衆と關西民衆、日勞	關西民衆と日勞
第四	勞農と日勞、關西民衆と民衆	日勞と關西民衆
第五	―	日勞と日農
兵庫第一	日勞、勞農と民衆	日勞と勞農
第二	勞農、日勞と民衆	勞農と日勞
第三	―	日勞と勞農
神奈川第一	勞農と民衆	―
第二	民衆と民衆進黨	―
新潟第一	―	勞農と日勞
第二	勞農と日農	―
第三	―	日勞と勞農
群馬第一	日勞勞農、民衆と日農	日勞と勞農と民衆

栃木第二	——	日農と日勞
愛知第二	——	日農と日勞
山梨	勞農農民統一と民衆、日農	——
島根第一	——	日勞と日農
鳥取	勞農と日勞	——
香川第二	勞農と日農、日勞	日農と日勞
福岡第一	勞農と日農	——
第二	勞農、民衆、と民衆と日勞	——
第三	勞農と日農	——
第四	勞農と民衆	——
北海道第一	——	勞農と民衆
第二	勞農と日農	——
第三	——	勞農と民衆
第四	勞農と日農	——
千葉第二	——	勞農と日勞
長野第三	——	勞農と民衆
岐阜第二	——	中部農民と日勞と民衆
青森第二	——	勞農と日勞
宮城第一	——	民衆と勞農
秋田第一	——	勞農と日勞と民衆
第二	——	勞農と日勞と民衆
山形第二	——	日勞と日農
愛媛第二	——	勞農と日勞と平民黨

▲注意、協定區廿五區のうち勞農黨の參加したものは十六區、内勞農黨の讓歩したものは僅かに五區で十一區は自黨候補を立てゝゐる。

協定破綻の經過の代表的な一つとして神奈川縣の情勢を語ると、市民同盟社の主催で協定の下準備會を開き一月廿五日櫻木クラブに勞農、日勞、社民、自治（一區）、勞農、民衆新黨（二區）、勞農（三區）の代表者が、もつともらしい顔付きをして集つたが、そのとき社民黨は逸早くも候補者をあげて譲らず、社民黨を蹴飛ばして翌廿六日又も集つたところ、今度は勞農、自治が自黨候補をあげて頑張るといふわけで協定は灰滅した。そして選擧戰で闘ひ拔いた收穫は、一區で社民、勞農、二區で民衆進黨、社民の候補が、次點を譲り合ひ、枕をならべて討死した四つの首桶であつたのである。

といふわけで、多くの選擧區の協定の經過によると、協定破綻の先驅は、社民—同時に日農も—勞農の騎手によつて遂行された事實は、昭乎として蔽ふ可くもない。

或は協定區にしてもさうだが、滿足に協定の遂行された選擧區は少ない。之れも代表的な一つとして、兵庫縣第一區の情勢について語ると、ここは日勞、勞農の協定區の筈ではあつたが、勞農からの協同提議は一から十迄も蹴飛ばされたのだ。

日勞に言はせると、勞農黨內部の分裂主義者との協同の選擧鬪爭は

抑つて闘爭力を弱める。だから實力で闘つて敗いたればこそ吾等・河上君は當選し得たのだと、當選の旣績を提示しての辯解だから強い。之れを裏書する事實には京都第一區で當選した勞農黨の水谷長三郎氏なども、黨の分裂主義者又はその手先の妨害とサボタージュ卽ちその勢力から忌避されたことによつて當選したものである。

といふわけで、多くの協定區の協定の經過によると、自黨の勢力が微弱で已むなく候補者を擁立し得ないで地盤協定がでつちあげられただけのことで、滿足にいはゆる協定の成立しなかつた事實は、之れ又昭乎として覆ふ可くもない。

從つて、かゝる戰蹟は、次ぎの表のとほりに、無產黨の對立候補者の得票を合すれば、確實にさらに九人迄は綽々として、ブルジョア黨の當選點を突破し得たのに、それを首補としてブルジョア黨陣營の實檢にそなへるの慘敗を招いたのである。

		當選點に對する不足票數	次點下位にある候補者の得票		差引當選點超過票數
東京第四區	民衆	六一三	勞農	二、八四五	二、二三二
第五區	日勞	一、三六二	勞農、民衆	六、五六八	三、二六二
第六區	日勞	四、九七六	勞、民、農	一四、七四四	九、七六八
新潟第二區	日農	三、七八四	勞農	八、八六八	五、〇八四
神奈川第一區	民衆	一、一三三	勞農	六、七六〇	一、六三八
第二區	民衆新黨	四、〇二一	民衆	五、八四一	一、八三〇
大阪第一區	民衆	一、五三四	勞農	三、二六六	一、七四四
第四區	勞農	二、七七九	日勞	五、一九九	二、〇〇〇
兵庫第二區	民衆	三、〇二五	勞農	四、九三七	一、九四二

▲注意、勞農黨は九つのうち、七つ迄が結果に於て他の無產政黨候補をたゝき落したことになつてゐる。

三

なほ私の手元にまとめた統計によれば、無產派諸政黨の總得票は四十九萬五千五百五十二票である—警保局の調査は四十八萬四千余とあるが、無產候補の若干を中立に加算してゐる—中立を含むブルジョア黨に對して五分一厘八毛にすぎない。

それは第一に地域的の見地から言へば、無產政黨の立候補した一道三十一府縣の九〇選擧區の三〇選擧區と一五縣の全縣は無產政黨の選擧闘爭の地盤が確立されてをらないからだ。

第二に勞働者、貧農の階級的構成の觀點から見れば、有權者總數の約三割四分を占める、勞働者、貧農の有權者約四百廿八萬人の、たかだか五、六分くらゐのものを、吾々の陣營に動員し得たにとどまるからだ。

第三に、ブルジョア黨と漸やく政治戰線に對立し始めた無產政黨の陣營は、ブルジョア黨の暴壓、、、買收等の武器の前にさらされて破綻した選擧協定と分立せる黨の散兵を以て對戰したからだ。

即時合同へ！

猪俣津南雄

總選擧戰は了つた。そしてこゝに選擧協定の戰蹟を見た。東京府第五區の無產大衆が、正當にしかも露骨に協定破りを選擧戰を通して批判し得たやうに、無產政黨の黨大衆によつて全國的に選擧協定の戰蹟について、正しく且つ大膽に批判されねばならぬ。選擧協定の批判は、必然に無產政黨合同への飛躍的契機となるであらふから。

現下の具體的狀勢は、無產政黨の合同、並びに其の最も妥當にして不可缺的なる準備段階として急速に實現されんとしつゝある農民組合の合同を、即時に實現せしむる爲に一切の努力を集中すべき一切の理由を具備すると同時に、之をなすべからざる理由の總てを缺いてゐる。（吾々は合同を必要とする一般的理由を改めて數へ立てないであらう、——それは既に余りにも陳腐なるが故に余りにも無意味な論題になつた。）大衆は、勞働大衆なると農民大衆なると、小市民大衆たるとを問はず、大衆團體の分裂の不利と失敗とを、理屈ではなく體驗——而かも最も苦澀なる鬪爭の體驗によつて學び知り、合同の必要を確信して既に各所に自然發生的な行動をとり初めた。それは、階級鬪爭の必然的發展と階級的組織結成への本能的な傾向の發露として、社會的進步に關心を持つ何人をも動かすものがある。それは日本のプロレタリア運動の劃期的な一歩を踏むものとして偉大な行動である。

勞働農民黨は夙に「指導精神にこだはらざる合同」を提議して、合同運動のイニシアテイブをとつた。日本勞農黨はこれとイニシアテイブを爭ひつゝ、全無產政黨合同協議會の開催を提議した。四ヶ月前のこの運動は、一先づ停頓したと云へ、合同への確固たる決意の表示として、動かし難き礎石を据えた。而もそれは最近に於ける兩黨の聲明によつて、いよ〳〵確保されてゐる。

一方、日本農民黨と日本勞農黨との合同は、寧ろ意想外の突發的提議として見られたにも拘らず、既に協議會の組織以上の成熟を遂げてゐる。

だが、合同への運動は、特に無意味なる分裂と對立鬪爭とによつて、特に甚だしき打擊を受けた農民組合に於て最も强烈に進行しつゝある。中部地方に於ける地方的合同の企てを先驅として、日本、全日本兩農民組合の地方支部の多くは、總選擧前後にかけて着々と合同へ

の步みを進めた。かゝる大衆の動きを背景として必然に日本農民組合の幹部會は、萬難を排して農民組合合同の即時實現を達成すべきことを、決議して直ちに行動に移り、今や大阪において三大組合の合同協議會が開催されやうとしてゐる。

各種のプロレタリア雜誌――「社會思想」、「マルクス主義」、「勞農」、等、等の指導的理論は、それぐ＼に異る立場にも拘らず、大衆團體の合同の急務の力說において完全なる一致を見る。無產者新聞は、「合同の大勢すでに決す」と報じた。そして最後に、東朝、東日をはじめ、各新聞もまた、ひろく自由主義的もしくは民主主義的イデオロギーを反映して幾度か無產黨合同の要望をかゝげ、此の運動の進展に深大な期待をかけてゐる。

總選擧の成果は、プロレタリア戰線統一の必要を、數學的な確かさで立證した。無產黨議員團の必然的成立と、その統制委員會の組織とは、「上からの合同」にとつての障碍を取除き始め、「下からの合同」の强力な促迫に響應しつゝある。

「無產者新聞」が說くところの、『共同鬪爭の發展を通じての合同統一』は、それ自身不可なる何物もない。たゞ、昨年以來の具體的情勢の下に進展し來れる合同運動が、特に『共同鬪爭』を通ぜねばならぬ特殊の必要を有たずして却つて過去の誤謬の率直なる承認によつて隔意なき協議に入ることの必要を有つものなる時に、ことさらに共同鬪爭を强調し、「戰鬪的統一」の原理を力說することは、勞働者陣營內部における合同統一の眞の敵をしてそれを合同妨害の口實に利用せしめなければ幸である。

勞働黨農民黨が、最近に發した聲明において、合同せる黨內における社會民主主義者に對する「批判の自由」を要求してゐるのも、當然に與へらるべき相互的自由、從つてもし與へられなければ戰ひ取ることの至當なるその自由を、特に合同に際してその條件たらしめんとすることもまた、同樣のおそれがないでない。むしろ却つて、勞農黨それ自身の合同への熱意を疑はしめるおそれさへがする。だが、それらにも拘らず、廣汎なる大衆の合同の要望は、常に自身の行動をその時々の最も切實なる階級的要求に一致せしめんとする前衞分子の努力を相俟つて、我が無產階級は今や踏み出されんとしてゐる劃期的な一步を踏み誤らねであらう。

吾々は再言する、現下の具體的情勢は合同を促進すべき一切の理由を具備してゐる。即時合同へ！

時評

政局の安定不安定

山川　均

第四十二議會においては、時の政友會内閣は、普選の可否を『民意』に問ふために議會を解散した。そして政友會はこの『民意』から、滿足すべき答を與へられて議會の多數黨となつた。八年後の今日、同じ政友會は、『肥料の分配』等々の政策の可否を、今度は普選による民意に問ふために議會を解散した。『民意』は何と答へたか。政友會も選擧の勝利を主張してゐるし、民政黨も同じく勝利を主張する。しかし一回の勝負に二人の勝利者の出來たことも、或る意味では、まんざら道理のないことでもない。あれほどの世間の不評判と反感とを乘り切つて、一人にもせよ二人にせよ、ともかく反對黨よりも多くの議員を當選させたのだから、政友會が、勝つたと思ふのも無理はない。それと同時に、國家の權力とあらゆる機關とを總動員した勢力と競爭して、大した敗北をしなかつた民政黨としても、勝利を感ずるのは、一應尤もだと云ひ得られる。

總選擧の結果は、政友會二一八名、民政黨二一七名と云ひ、或は政友二一九、民政二一七、政友二一九、民政二一五など〻計算はまちまちであるが、要するにその差は僅かであつて、假りに政府が中立議員の三分の二と實業同志會を手に入れたとしても、辛うじて一名か二名の多數をもつて、僅かに議會を切り拔け得るにすぎぬ。內閣の運命がこの不確實な一名か二名の向背にかゝつてゐることは、たしかに不安にちがひない。しかし民政黨と政友會と所を代へてみたところで、この形勢には少しも變りはない。そこで總選擧後の政情は、極めて不安定だといふので、心配してゐる人がある。

政友會と民政黨との關する限りにおいては、現在の政局は甚しく不安定であるにはちがひない。しかしながら現在の政友會と民政黨とは、

必ずしも異つた社會階級的な政治勢力を代表してゐるものではない。したがつて政權が政友會から民政黨に移り、もしくは民政黨から政友會に移るといふことは、政權が少しでも、異つた社會階級の方へ動くことを意味せねばならぬばかりでなく、政權が少しばかり左の方へ、或は右の方へ移動することでさへもない。そこで現在の支配階級の勢力全體の上からみれば、政權が政友會と民政黨との間を動搖することは、必ずしもその政權の鞏固でないことを物語るものではないのである。

これに反して普選總選擧の結果の上には――舊勢力を代表する既成政黨が、若干の不安をもつてこれに臨んだにもかゝはらず――却つて反對の兆候が現はれてゐる。新議會の構成について、先づ第一に著るしいことは、二大政黨以外の中間的な勢力が漸次に凋落してゆく傾向が、普選總選擧によつても何らの影響を蒙らなかつたばかりでなく、却つて顯著に進行したことである。第四十八議會當時は、政友、政本憲政以外の中間勢力は七十八名であり、第四十九議會は九十二名、第五十議會は八十三名であつて、第五十三議會にはなほ五十三名であつたが、總選擧の結果は僅かに二十二名(無産派を除く)に激減した。革新黨は一部の『マルクス主義者』からは、、政治に對して、政治的自由のために勇敢に闘爭する重要な要素と認められ、ほんの先頃までプロレタリアの頼母しい道づれと認められたほどの政黨であるが、實業同志會すらも、政民兩黨にくらぶれば、或る點で、より進歩的より自由主義的だと云ひ得られる。いま普通選擧の實施に、二大政黨の既得の勢力以外に九百萬の新有權者を加へたるにもかゝはらず、これらの勢力は增大されないで、却つて激減したのである。これは新たに政治勢力として登場した新しい社會層が、割合に進歩的なこれらの黨派を支持することを欲しなかつたこと、これらの社會層の勢力は、依然として二大政黨に吸ひこまれてしまつたことを意味してゐる。かようて在來の有權者に約三倍する新勢力が新たに加はつたにもかゝはらず、少なくとも第一回の普選の結果に現はれたところでは、それはブルジョアジーの內部における政治勢力の分化を生じないで、却つて二大勢力への集中作用を促進したのである。

いま一つの著しい事實は、農業議員の減少であつた。第一回の選擧では、農業議員は四三%を占め、第四回には五〇%を超えたが爾來漸減し、第十五回の選擧には僅かに一七%となつた。普通選擧はこの傾向を變へなかつたばかりでなく、さらに一二%に減少した。農業人口は依然として壓倒的な多數を占めてをり、地主は數において、依然として有力な階級ではあるが、その政治上の利害は、いよ／＼ます／＼地主以外の要素によつて代表せられるようになつてゐる。地主はもはや獨立した政治勢力をなすものではなく、帝國主義ブルジョアの指導に隷屬し、帝國主義ブルジョアを中心として結成され、また結成されつゝある政治勢力の一要素に變化し、また變化しつゝある。

しかしながらこの勢力は、一つの中心ではなくて、二つの中心に集

積されつゝある。總選擧は、そのいづれにも決定的の勝利を與へないで、謂ゆる不安定な政情を現出した。そこでこの二大勢力の鬪する限りにおいては、即ち帝國主義ブルジョアの二つのグループの、どちらが直接に政府に坐るかといふ問題の範圍內では、ブルジョア內部の政爭は一そう激烈になる。政權を維持し、もしくは政權にありつくためには、あらゆる手段と方法とが用ひられ、二大政黨間の政爭は、一そうの醜惡と露骨さを加へるにちがひない。そしてかような政爭の激烈化は、ブルジョア勢力の二大政黨への集中を、さらに促進することにもなる。現に最近には、後藤子の政友會入りが傳へられてゐる。この風評が事實であるか否かは別として、政友會にしても民政黨にしてもその勢力を擴大する必要から、現在は政黨の外に立つてゐる要素を――政黨運動の落伍者や舊官僚の殘滓にいたるまで――これを自己の勢力に取り込まうとするにちがひない。貴族院の政黨化も、勢ひ促進される。樞密院の如き、いはゆる前時代の遺制も、政黨の勢力が一そう浸潤することによつて、一そうその內容が變質する。舊軍閥的勢力の如きものも、一そう完全に、政黨の勢力のうちに解消する。地方政治もいよ／＼政黨化する。

二大政黨間の勢力競爭が、さし當り最も使用價値の大きな、中立議員に對する猛烈な爭奪戰となつて現はれてゐることは、少しも不思議でない。

『山梨大將の例の事件以來、議員身賣りの相場は五千圓と相場が決まつてゐると早合點してはいけない、昨今の中立議員の相場は十倍二十倍と暴騰して、流石積極好きな政友會もあきれ返つて二の句がつげないでゐるといふ有樣……』。

或る新聞にはかう書いてある。『變節代議士價十萬金』、『新議員の相場一人十萬圓』、等々。もちろん中立議員の値段が、今後いつまでもこのような高値を保つといふわけではない。臨時議會の召集を前にして、一名、二名、ないしは數名の中立議員の向背が、政權の所在を決定しようといふ際どい今日、中立議員の相場は戰時的例外的な價格を呈してゐるのであつて、いづれは暴落を免れないではあらうが、中間浮動の要素に對するかような爭奪の競爭は、決して瞬間的な現象ではなくして、勢力の相伯仲した二大政黨對立の形勢のつゞく限りは、今後は持久的に行はれるにちがひない。そしてその結果は、たゞ單に、二大政黨のどちらに政權を與へるかを決定する作用として働らくばかりでなく、やがてはブルジョア政治勢力全體の發展の上から見れば、かような競爭はまた、一切の利用し得られる要素と勢力とを、帝國主義ブルジョアを中心とする强大な力に結晶する作用の促進となつても働らくものである。ブルジョアジーの內部における勢力の對立、ブルジョアジーの內部における異つた利害の間の政權の爭奪とその激烈化は、或る狀況と條件の下においては、ブルジョア政治勢力の分解し自壞する作用であるが、わが國の現在の場合には、その主たる特質は、ブルジョア政治勢力の分解ではなくて寧ろその結成にあると見なけれ

ばならぬ。ことに對立した二大政黨は、今後いかに變化するかは別問題として、現在のところでは、決してブルジョアジーの內部における異つた層を代表するものではない。たとへば政友會が工業資本と地主を代表し、民政黨が金融資本を代表してゐるかと云へば、必ずしもそうではない。從つて政權が、この二大對立政黨の間に『安定』してをらぬといふことは、直ちにブルジョアジーの政治勢力が安定を失つてゐることを意味するものではない。

政友會は三井黨であつて、憲政會は三菱黨と見做されてゐる。二大政黨の對立が、いよ〳〵ます〳〵、精密に、二大財閥の對立と一致するにいたつてゐることは爭はれぬ。けれどもこの政爭において、三井と三菱とが、丸裸で取つ組み合ふわけではない。この二人の紳士は、丸裸の代りに、紳士にふさはしい服裝をつけてゐる。なほその上に、厚い外套にくるまつてゐる。かうして身仕度の出來上つた紳士は、たゞに眞つ裸の三井でなく、たゞに眞つ裸の三菱ではなくて、圓滿な紳士、ミスター・ブルジョアジーである。政友會にしても民政黨にしても、その主要な利害を擁護するためには、ブルジョアジーのあらゆる層の支持を得なければならぬ。たゞにブルジョアの諸層ばかりでなく、小ブルジョアと中間的な社會層と、さらに進んでは勞働者と農民をも獲得しなければならぬ。それ故にその政策は、あらゆる種類の魚——淡水魚と鹹水魚、鯨から目高にいたるまで——の喰ひ附きそうな御馳走を、雜然として並らべることにつとめてある。これらの御馳走の矛盾と不消化、時としては明白な喰ひ合せの危險のあることさへも、彼らは一向平氣である。彼らはその主要な利害の周圍に、利用し得られるあらゆる勢力を結晶せしめるためには、政策上のあらゆる妥協に躊躇せぬ。そこで政友會にしても民政黨にしても、大財閥の、、、、、、、、して、もろ〳〵のブルジョア、、、、、、、、、、、、み上げる役目を果してゐる。若し政友會と民政黨との對立の代りに、たとへば政友會に對して革新黨、ないしは民政黨に對して實業同志會が、相伯仲する對立政黨に發達してゐたのだと假定すれば、ブルジョア政治勢力の內部的な對立は、幾らか橫斷的な性質を帶びることゝなり、政情の不安定は、それだけ深刻な性質を持つことゝなる。ブルジョア政治勢力が現に縱斷的に對立してゐることは、或る程度までは、橫斷的な對立を阻止する作用ともなつてゐる。

かうしてブルジョア政黨は、從來の有權者三百萬の舊地盤から、一千萬の新地盤の上に見事に乘り移つた。かうして舊議會と殆んど何らの違ひのない議會が、三倍に擴大せられた新基礎の上に再建されたのである。

無産政黨の成功と失敗

こゝまでは、萬事は帝國主義ブルジョアの政治的發展のために、たゞすら〳〵と、圓滿に、好都合に取り運ばれた。普通選擧は、たゞ彼

らの政治勢力の擴大結成のためにのみ準備せられたもの丶如くである。いな實際にも、彼らは彼らのために、普通選擧の膳立てをしたものにはちがひない。けれども彼らはその手料理の羹を呑みこんだ時、必然にも、一片の不消化物を嚥み下した。いふまでもなく、それは新興階級の政治勢力であつた。

この不消化物は、形においては極く小さなものである。しかし小さくとも、それは硝子のかけらであつて、健啖なブルジョアジーの胃の腑といへども、これを消化することは出來ぬ。もしこの小さなかけらが、たとへば盲腸にでも這入つたなら、巨人の如きブルジョア政黨はその痛みのために、持つてゐる大切な政權を取り落すかも知れぬ。現にこの不消化物は、ブルジョア議會の盲腸に引つ懸らうとしてゐるではないか。

總選擧の結果は、政友會と民政黨との開きは極めて僅かであらうとは、多くの人々の豫期したところであつた。しかし何人も、それが一名二名といふ際どい差異を現はすことを豫期したものはない。その上に、實業同志會、革新黨、中立候補の不成績は、初めて議會に頭を現はした八名の無産政黨議員に、キャスチング・ボートを握られるといふ奇異なる形勢をもたらした。もし新議會における既成政黨の勢力分野が、これと異つたものであつたなら、僅々八名の無産議員は、議場に於ける發言の機會を得ることさへも、至難であつたにちがひない。しるかに實際には、初めて議會に代表せられた新興階級の勢力が、少なくとも或る程度まで、新議會を左右することゝなつた。

しかしながら議會における勢力分野に特殊な結合が生み出した無産議員の役割の重要を、普選によつて新議會に代表せられた新興階級の勢力そのもの丶大きさ、その謂ゆる『進出』そのものと同一視することはできぬ。

第一回の普通選擧において、約六百七十萬人の新有權者が實際に投票した。この六百七十萬人のうち、六百二十五萬人まではブルジョア政黨に投票し、僅かに四十五萬人が、無産政黨に投票した。そしてこの四十五萬票の得票によつて、八名の議員を議會に送り出した。これが選擧に現はれた單純な事實であつた。これは新興勢力の政治首途にとつて、一たい成功であらうか、又は失敗であらうか。これは或る意味では成功と云はれ、或る意味では、失敗ともいふことができる。一般大衆の階級的政治的意識の水準を低く見積り、從來の無産者運動一般の影響を狹く見積り、その大衆化の必要を主張してゐるもの丶立場から見れば、今日なほ勢力が微弱であり、なほその上に四分五裂してゐる無産政黨の現狀をもつてして、しかも一種の制限選擧と極度の暴壓の下において、四十五萬票を得たことは、寧ろ大なる收穫であつて、それが滿足すべき結果でないにもせよ、少なくとも吾々の豫期に甚しく反したものではない。けれども實際の形勢と條件とについて、異つた評價をしてゐた人々にとつては、必ずしもさうではない。なかんづく、一般大衆の意識の水準を誇張して考へ、大衆の政治的進出の前を

吹いて自ら踊つてゐた人々にとつては、これは意外な結果であり、むしろ慘めな結果でなければならぬ。

無產候補者の獲得した四十五萬票が、どのような社會層から投ぜられたかは明かでない。けれども大體において、都會は農村よりも成績の良かつたこと、概して社會的に知名な人の成績の良かつたことなどから考へても、これらの投票の大部分が、どのような社會層を代表してゐるかは、ほゞ想像することができる。勞働者と農民とが有力に組織せられてゐる場合を除いては、これらの得票の主要部分は、小市民やインテリゲンチャの投票から成り立つてゐるものと思はれる。これは無產政黨に取つての、最も重要な社會的要素の間では、その一小部分においてこそ、政治的意識が尖銳化してゐるにもかゝはらず、一般には、即ち大衆的には、なほ極めて意識の水準は低いといふことを意味してゐる。ことに農民の場合には、投票は殆んど原則として賣買せられたといふことは、すべての報告者の觀察が一致してゐるところであつて、或る新聞は『今度の總選擧に棄權率の少なかつたのは、買收が徹底したゝめであるといふ悲むべき斷案は、一度地方の選擧事情を實見した者の異口同音に下すところである』と報じてゐる。

『……農民の事大思想は、彼らを支配してゐる永い間の封建的勢力がこの性格を作りあげたのであるが、その結果、選擧に際して官權、金權の干渉、あるひは有力者の壓迫は、十分に奏効したものといはれてゐる、即ち無產候補の運動に對する官憲の嚴重なる取締、例へば演說會の臨監振りなどは、確かに農民の無產黨に對する恐怖心を起させ、また既成勢力の常用手段たる「階級運動は危險なり」との逆宣傳等は、甚大なる影響を與へたものといはれてゐる……』

『農民は……無產派の說明する經濟的關係、即ち地主、金持と小農との利害相反する點がのみこめず、ばく然たる既成政黨の農村振興論に却つて耳を傾ける傾向がある、これはもちろん無產派運動者の所論が、農民の尺度に對して高踏的であつたり、的外づれであつたりした誤りがあつたことも認めらるゝが、自己の經濟的社會的地位に對する覺醒の度が不足してゐることが、主要な原因であるといつてゐる――』(同上)。

かような觀察は、ほとんど全ての觀察者の一致するところであつて、要するに農民大衆の階級的政治的意識の未發達といふことに歸着する。現に或る地方の選擧應援から歸つた人の言ふところでは、無產政黨のポスターの意匠に對してさへも、組合外の一般農民は恐怖心を抱いたといふことである。爭ふことのできない事實であつて、その構成要素に殆んど農民を有しない社會民衆黨が、最も多くの當選者を出したこと、その主要部分が農民組合から成る勞農黨が、四十名の立候補によつて僅かに二名の當選者を出したことなどは、いづれもこの事實を物語つてゐる。昨年の府縣會選擧において、勞農黨が第一位の成功を得たのは、農民組合のためであつた。しかるに現在の農民組合の分布では、中選擧區の場合には役立たない。

『……かくて無產黨は農村において敗北した、この敗北によつて、既成政治家をして、日本における無產政黨の將來恐るゝに足らずといはしめた、卽ち今回の選擧で、現在の無產政黨は、農民の輿望を負ふことの出來ない事實を證明した、都市の知識階級工業勞働者の支持は數において質において銳くても、全國的に政治を左右する巨大な力とはなり得ない、といふのである……』(同上)

無產政黨が、特に農村において敗れたことは、これは四名の縣會議員を出した香川において、(それは例外的な暴壓と鬪つたとはいふものの)勞農黨が非常な差をもつて敗れたのも、この證左の一つである。無產階級運動における『勞働者と農民の同盟』の重要は、少なくとも理論の上では充分に認められてゐるかのようである。けれどもこの同盟者たる現實の農民は、なほ極めて低い意識の水準にあるところの農民なのである。この要素を度外視しては、『勞働者と農民との同盟』も單なる空言として存するにすぎぬ。

大衆の階級的政治的意識をいかに評價するかといふことは、無產者運動が遊戲でない限りは、なかんづくインテリゲンチャの智的自慰でない限りは、その戰術と運動方法とを定める上に、極めて重要な要素である。そして總選擧の結果は、一般大衆の意識の水準は當然にも極めて低いといふことを——必ずしも總選擧を待つて初めて知るに當らぬ事實を——念のために、明白に立證したのである。

では、無產政黨が、八名の議員を議會に送つたことは、成功であらうか失敗であらうか。これについても、兩樣の答が與へられる。だいたいにおいて、無產政黨は十名內外の當選者を出し得たなら、成功と見做してよいといふのが多くの人々の豫想であつた。八名の當選者は、必ずしも失敗とは云はれない。たゞ然しながらこの豫想は、無產政黨の現在の實力、なかんづくその財力の上から見て、九十人に近い候補者を立てることはとうてい不可能であるといふ豫想の下においてゞあつた。しかるに實際には、無產政黨は八十餘名の立候補をすることができた。無產政黨に現に八十餘名の立候補をする實力、なかんづく財力があるとしたならば、八名の當選率は——いかに當選第一主義でないにもせよ——何人もその失敗たることを否まぬにちがひない。假りにブルジョア政黨並みの當選率を豫想するならば(これは勿論、望まれぬが)、優に五十名以上の當選者を見なければならぬ。無產政黨の當選率が異常に低くかつたのは、實力以上の立候補が行はれたか、さもなくば勢力の配置に誤があつたにちがひない。

立候補に對する當選率はしばらくおき、無產政黨が現に獲得した四十五萬票に對しても、八名の當選は決して成功とは云はれない。この場合も、既成政黨と同一の當選率を豫想すれば、四十五萬票によつて二十二三名の議員を送り得ることゝなる。もちろん無產政黨の場合にはその影響力の擴大のために、餘力のある限りは棄石的の立候補をしなければならぬ。これは勢ひ當選率を低下する。かゝる必要にもとづく當選率の低下は、決して無產政黨の失敗と見做すべきものではない。

けれども實際には、無産政黨の當選率の低かつたことは、かゝる必要にのみもとづいたものではない。現にいづれの無産政黨の立候補もない多くの選擧區が明いてをり、これらの選擧區では、大衆は既成政黨のいづれかに投票することをよぎなくされてゐるにも拘らず、多くの選擧區では、對立候補の亂立せられたことが、爭ふことのできない證據である。もし選擧協定が完全に守られたなら、なほ五名の當選者を出し得たことは疑ひがない。或る地方では、黨本部の分裂主義的指導を無視して、完全に共同の闘爭の行れたところがある。これに反して多くの選擧區では、選擧協定がたゞ單に消極的に實行せられなかつたばかりでなく、積極的計畫的に破壞されたところがある。たゞに協定が破られたばかりでなく、現に東京の第五區の如きでは、對立候補者に對する當選、、の運動が、計畫的に行はれた實證さへもあるのである。

選擧の結果は新興勢力にとつて、畢竟、成功だつたのか、失敗だつたのか。もし吾々が、この實踐のうちから學ぶべきものを學ぶなら、それはたしかに成功であつた。これに反して若し吾々が、そのうちから何事をも學ばぬなら、無産政黨が八名の代りに十八名の議員を新議會に送つてゐても、依然として失敗たることを免れない。

無産政黨の獲得した四十五萬の投票は、決して大きいとは云はれない。けれどもこの四十五萬票は、極度の暴壓に抗して獲得されたものであつて、無産政黨の上に下された干渉と、、とが甚しければ甚しかつたほど、この四十五萬票によつて代表せられる經濟的要求の階級意識と政治的自覺の水準の進んでゐることを意味してゐる。これは新興勢力にとつては、光輝ある四十五萬票であり、舊勢力にとつては、畏怖すべき四十五萬票である。無産政黨は、すでにこの社會的勢力の上に立つてゐる。これは新興政治勢力にとつて、決して悲観すべき前途ではない。

けれども四十五萬の投票は、ブルジョア政治勢力の現在の均衡狀態に、殆んど何らの變化をも與へることはできぬ。これがためには無産政黨は、さらに意識の水準の低い厖大な大衆の支持を獲得しなければならぬ。しかるに無産政黨がこれらの大衆の支持を獲得する方法は、政友會や民政黨の場合とは大に異つてゐる。これらの既成政黨が大衆の投票を掻き集める方法は、その政策の獻立表のうちに、大衆の味覺に訴へるような——或は大衆の幻覺に訴へるやうな——若干の妥協的ないしは讓歩的な政策を陳列することである。けれども尙は久しい間議會における少數黨、ないしは反對黨として行動しなければならぬことの明らかな無産政黨に取つては、單なる政策の陳列によりて、大衆の幻覺に訴へることはできぬ。無産政黨の場合には、大衆の支持を獲得するといふことは、單なる投票の獲得ではなくて、眞實に大衆を獲得することを意味してゐる。かような大衆の獲得は、大衆を日常の闘爭に動員することによつてのみ行はれるものである。しかし日常の闘爭は、それが大衆の現實當面の利害と不滿と要求とを代表してゐれば

こそ、初めて『日常闘爭』であり、また大衆的な日常闘爭に發展し得るものである。であるから無産政黨の大衆獲得は、いかにそれが幼稚にして初歩的なものであらうとも、大衆の間におのづからに醱酵しつつある、なほ漠然とした不滿と要求とを捉らへてこれを組織し、定形を與へることに發足しなければならぬ。ところがわが國における『××的』インテリゲンチャは、現に在るが如き意識の幼稚な大衆、即ち現實な大衆に對しては、極度の嫌悪を抱いてゐるやうである。苟も在るがまゝなるかやうな現實な大衆を顧みることは、謂ゆる『大衆獲得萬能』主義として輕蔑せられてゐる。大衆獲得は『萬能』ではないかも知れない。けれども大衆を獲得する能力のない『××家』は、たしかに無能のそしりを免れぬ。

無産政黨がこの困難な任務に就くためには、戰線の統一を差し迫つた必要とする。無産政黨合同の必要は、少なくとも原則としては、もはや今日は何人にも異論はない。昨日まで、合同は『ブルジョア新聞の勸告』だと放言してゐたやからさへも、今日はこの『ブルジョア新聞の勸告』に從はざるを得なくなつてきた。かやうに無産政黨の合同に對しては、少なくとも、何人も積極的にこれに反對するものはない。たゞ今日は、過去における分裂主義的理論とその實践との結果がこれを妨げてゐるのである。けれども最近にいたるまでは、分裂主義の理論と實践に對して不安と疑惑を抱きつゝも、なほ自信を得なかつた黨員大衆は、今日は戰線の統一と合同とについて、確信を持つてきた。そして到るところで、分裂主義の惰性に對して公然の闘爭を始めてゐる。

選擧戰を直ちに日常闘爭に轉換せしめることは、いづれの黨においても重要視せられてゐる。この闘爭は一面には、黨の組織運動となり、一面には、合同實現の作用となる。なかんづく、總選擧のうちから、有力にして大規模な參政權運動——徹底普選獲得の大衆的運動——が展開せらるべきである。

組合運動もまた、政治運動の見地からも重要視しなければならぬ。勞働者と農民とを、最も現實な、具體的な、初歩的な利害と要求とによつて、最も廣汎に動員し組織するものは組合運動だからである。現に組合運動の訓練のないところでは、無産政黨は、ブルジョア候補者の一票五十錢一圓の彈丸にさへも對抗することができなかつた。組合の經濟闘爭を初歩的自然生長的な闘爭として閑却し、これを閑却することによつて政治闘爭への進出が行はれるかの如くに考へた理論と實践との結果は、選擧戰においても充分に所證せられた筈である。組合主義を『止揚』して一度び政治闘爭へと全面的に進出した後に、いざ選擧戰となつてみて、組合の動員力が全く皆無となつてゐたことに心附くなどは、いさゝか悲慘と云はねばならぬ。組合は無産政黨のための學なる道具ではない。けれども無産政黨は、組合運動によつて、大衆のうちから政治勢力を蒸溜し出さねばならぬ。

實際においても、總選擧後の無産政黨は、大體において、かやうな

方向を指して動いてゐる。これは新興勢力が、總選擧の成功と失敗とのうちから學んだ教訓なのである。

怪文書と怪聲明

息が詰まるほど陰鬱な、重苦しい、陰性的な選擧戰の三十日間を通じて、これは又、一時に吹き出させるような二つのエピソードがあつた。いふまでもなく謂ゆる怪文書と怪聲明とであつた。

すべての猫が鰹節にかぢり附くように、どの政黨の內閣も、政權にかぢり附く。いかなる內閣もこの鰹節を放さぬためには、露骨にか內密にか、上手にか下手にか、官權を利用して選擧に干渉する。これは總選擧においては政府黨が勝つものといふ、政治上の常識を生じたことが證據だてゝゐる。あらゆる手段によつて生き延びようとするのは獨り政友會內閣のみの持前ではなくて、今日こそ反對黨內閣の選擧干涉の非を鳴らしてゐる民政黨の內閣といへども、苦しくなれば何をする事やら分らない。ことに新興階級の政治的進出を抑へようとする願望と必要とにいたつては、政友會も民政黨も、完全に一致する。現に政友會と共に、普選の實施を回避するために、あらゆる妥協を試みた相棒は、民政黨であつた。現に普通選擧を、無產大衆にとつて、殆んど有名無實に近いものたらしめた協力者は、民政黨であつた。現に新興階級の擡頭を彈壓するために、あらゆる暴壓的な法律を制定した共犯者は、民政黨ではなかつたか。

そこで政友會の內閣が、政權維持に夢中になり、いかなる陰險な方な手段に訴へても、選擧に必勝を得ようとして血眼になり、なほその上に多少の狂態を演じたくらゐのことは、少なくとも民政黨に對しては、何ら羞かしがる必要はない。たゞ今度の總選擧における政友會の場合には、あまりに逆上したゝめに、多少の滑稽味を加へたといふだけのことである。

政友會內閣は成立と同時に、思ひ切つた地方官の更迭を行つた。しかしいよいよ解散を見越してから、これではまだ足りないとあつて、さらに地方官を更迭して陣立てをとゝのへた。議會が解散になると、政府は地方官を呼びよせて、謂ゆる選擧の『秘策』といふものを授けた。この秘密の祭物に、何が書いてあつたかは、永久の謎であつた。ところが選擧戰の最中に、新手の戶別訪問や買收方法の秘傳を敎へた謂ゆる『怪文書』なるものが曝露された。疑惑の眼は、もちろん政友會の上に集まつた。そこで止むなく政府がその眞相を自白したところによると、これが地方官に授けた選擧『秘策』の一ページだといふのである。政府の云ふところでは、この『秘策』は、この種の脫法行爲を防遏するために授づけたのだと云ふことである。しかしこの『秘策』によつて、脫法行爲がどれだけ防遏し得たかは分らない。これに反して、すべての人々の知つてゐることは、この怪文書によつて敎へられてゐる新手の脫法が、今度の總選擧に、洽ねく行はれたといふ事

である。

この怪文書の正體が漸やく明らかになると、今度はいよ〱有權者が投票場に出掛けるところを目がけて、鈴木内相の怪聲明が投げつけられた。この聲明書によると、先づ第一に、『解散前における政友會一九〇、民政黨二一九といふが如きは、たれが考へても、まことに不自然の狀態』だといふことである。これは誰が考へた理屈かしらぬが、確かに面白い理屈である。誰れが考へても不自然と思はれるのは、政友會が一九〇名で民政黨が二一九名だといふことよりも、それにも拘らず、なほかつ政友會内閣が平氣で存在して居つたといふことである。尤も『政黨員數の多寡をもつて直ちに内閣が生れる』わけでないのなら、政友會内閣の下に、民政黨が議會の多數を占めてゐたところで、穴勝ちこれを不自然の狀態として、氣にかける必要もない。

聲明書によると、第二には、政黨員數の多少でもつて内閣が代はるのは、それは外國の『議會中心政治』であつて、民政黨はその政綱の中に、議會中心政治の徹底を要望してゐるが、これは『我國體とは相容れざる『極めて穩ならざる思想であり』『神聖なる我帝國憲法の大精神を蹂躙するもの』である。

第三には、棄權は立憲國民の罪惡である、一回必ず投票せよ、と書いてある。

そこで當然に、どの政黨に投票すべきかといふ問題が起つてくる。いふまでもなく、憲法を蹂躙せぬ方の政黨へ投票しなければならぬ、うかつに國體と相容れない政黨に投票して、治安維持法にでも引つ掛つたら大變だ！　この答はあまりに明白であるためか、それとも餘韻を殘こすためか、ともかく聲明書には省略されてゐる。

この聲明書は、一部の識者によつて眞面目に受取られ、民政黨の謂ゆる議會中心政治と日本憲法との關係を、正直に說明した人もある。議會政治といふことは、一般國民にとつては、もはや政治上の常識となつてゐる。しかるに日本の國體は、議會政治と相容れないものだといふことになれば、一般國民の國體に對する考へは、勢ひ、一大動搖をするわけである。いかに奇怪な怪聲明書も、まさかこれほどの怪目的を包藏したものでもなかつたらう。そこで問題は、民政黨の議會中心政治と憲法や國體との關係にあるのではなくて、民政黨反憲法的反國體的だと聲明することゝ、二月二十日との關係にあるのである。この奇怪な聲明書を讀んで、何人も受けた第一印象は、總選擧の形勢がいよ〱以つて、與黨に不利なんだな、といふことであつた。そこで政府は、取つておきの最後の秘策を取り出したものと思はれる。ブルジョア政黨は、その咬へてゐる鰹節を維持するためには、選擧の『秘策』から『國體』までをその武器とすることに躊躇せぬ。

そこで國民は、この勸告に、どのように答へたか。それは總選擧の結果が物語つてゐる。

臨時議會と無産政黨の
キヤスチング・ヴオート

政府は、折角國民にふるまふために膳立てをした御自慢の政策料理の献立について、『民意』を問ふために議會を解散した。總選擧の結果はどうだつたか。政府の言ひ分をそのまゝ信ずると、總選擧の結果は與黨の勝利であつた。そこで勝利の榮冠をいたゞいて選擧戰から出て來た政府は、早速、臨時議會を召集する。そしてこの新議會に御自慢の重要政策を提出する。これこそ誰が考へても、『自然の狀態』のように思はれる。ところが政府は、御大禮費豫算以外、重要政策は一切、臨時議會には提出せず、反對黨内閣の使ひふるした前年度豫算を蹈襲するといふのである。地租委讓は、一たいどうなつたのか。八千萬圓の鐵道新設は、一たいどこへ往つたのか。自作農創設はどこへけし飛んだか。尤も政友會政府の謂ゆる重要政策なるものが、白日の下に議會に姿を現はさぬことは、國民にとつては仕合せにはちがひない。せいぜい左書きの驛名を右書きに改めたくらゐの功績を殘して退場した方が罪業が輕くてよいかも知らぬ。それと同時に、既成ブルジョア政黨の謂ゆる重要政策なるものが、彼ら自身にとつても、いかに重要ならざるものであるかゞ、遺憾なく告白される。いふまでもなく、今日の政友會政府にとつては、政策なんごは固より問題ではない。命あつての物種だから。

かように政府は、一方では中立議員の抱込みによつて僅かな多數を得る必死の努力をし、他方では臨時議會を單なる御大禮費議會にすることによつて、在野黨の追撃を免れて一命を取留めようと藻搔いてゐる。

民政黨は、議會再解散の恫喝に内々心膽を寒からしめつゝも、まさかといふ賴みの綱をたよりに勇氣を取直ほし、ともかく不信任案の提出までは進みそうに思はれる。

そこで現在の勢力分野に激變のないかぎり、八名の無産議員が新議會の死活を左右することゝなる。無産政黨の握るキヤスチング・ヴオートが如何なる急所を狙つて投げられるかは、臨時議會の興味の中心だと云つてよい。無産議員によつて議員團の組織を見ることは、すでに既定の事柄であつて、更に議院外においても、院内行動を統制する機關が造られるにちがひない。もし院外院内において、無産諸黨の間に完全な一致が保たれるならば、議會における極めてデリケートな勢力關係を利用して、豫想意外の効果が收められるにちがひない。

しかしながら無産政黨の進路は、極めて直截單純である。田中内閣が總選擧に當つて新興勢力の上に加へた不法な干渉と極度の暴壓とは新議會において、それに値ひする答を與へられなければならぬ。無産政黨のみは、議會の再解散を怖れない。たゞに怖れぬばかりで

なく、當然にこれを要求する。現在の議會が、いかにして選出せられたかといふことは、當然に解散の要求に導びくからである。けれども解散の結果は、恐らく政友會を徹底的に敗北せしめるばかりでなく、無産政黨に著るしい進出の機會を與へることゝなる。そこで不信任案が通過すれば、恐らくは再度の解散を見ないで、内閣は瓦解するものと思はれる。無産政黨は、政友會の政府以上に、民政黨の政府を歡迎すべき何らの理由もない。けれどもそれ故に、政友會内閣の存在を許すべき理由は、なほ更らない。無産政黨は、獨自の不信任案を提出することができないか、またはこれに敗れる場合には、民政黨の不信任案に投票することを、少しも躊躇すべき理由はない。

臨時議會は御大禮費議會たる關係からも、從つて會期の短い關係からも、無産黨議員の活動の範圍も限られてゐる。しかしながら議院の外においては、すべての無産政黨の完全な協力によつて、無産大衆の政治的要求――なかんづく『徹底普選』の要求――をかゝげた有力な運動が組織せられねばならぬ。僞瞞的な普選によつて成立した最初の議會は、新興階級が反動的帝國主義ブルジョアに向つて要求する參政權獲得の運動、ブルジョア既成政黨の指導と影響から全く獨立した徹底普選獲得運動の、新たな出發點としなければならぬ。

新刊紹介

◆**フレップ・トリップ**（南國的詩人がはじめて北海道樺太の煙霞にあこがれて旅した折りの、明るく、撥溂たる散文詩的旅行記）（北原白秋著・定價貳圓五拾錢・東京市小石川區表町一〇九・アルス）

◆**土にあえぐ**（犬田卯著・定價壹圓八拾錢・東京市神田區淡路町二ノ三 平凡社）

◆**候蟲時鳥**（水守龜之助著・定價壹圓・東京市牛込區矢來町六六・人文會出版部）

◆**地租委讓 教育費國庫負擔と研究**（松田雪堂著・定價六拾錢・東京市牛込區矢來町六六・人文會出版部）

◆**詩集冬ノ扉**（月原橙一郎著・定價壹圓・東京府下高田町雜司ヶ谷鶴原六一・大地舍）

經濟時評

舵を失つた金融統制

阿部賢一

大きな蛇が獲物を呑んだ。呑みはしたがその獲物が大きすぎるので、呑込みも出來ず、さりとて吐出しも出來ず、此の處四苦八苦の體である——。

三四の大銀行は昨年のパニックの嵐が吹き寄せた預金をば腹裂けるまで吸呑した。ところが時節柄これを消化することも出來ず、さりとて吐出して終ふことも出來ず、預金の美味故に苦んでゐる——。この預金の集中を中心として、若くは之に絡んで金持苦勞の論議が醸されるのである。

×

日頃は預金の爭奪に餘念のない、そして預金利子の協定などは事實上一片の反古としか考へてゐない大金融系統者がある。その思ふ壺に「目には見えない」經濟攝理の手の働きが丁度うまくはまつて、弱者は競爭場裡から刻々驅逐せられる。あの瓦落の大正九年この方年々幾十もの銀行が破産したり合併せられたりした。大正十五年にはずつと増し、翌年の昭和二年即ち昨年は一擧百三十六行を倒した。それで過去八ヶ年の間に六百三十六銀行が合併のために消滅してゐる。その資本金六億九千三百萬圓である。元々我國では銀行の數が多過ぎた。小金を資本に銀行を起し預金者を喰物にして自己の投機的事業を經營しようと云ふ放漫悪德なものが尠なくなかつたが、之等のものは一雨毎に崩れる。しかしその反面には一雨毎に地固まつて來る。大銀行の勢力は年と共に加はり、預金は從つて集中する。これは資本主義經濟の發達に伴ふところの必然の過程だ

特に去年のパニックはこの勢を無條件的にまた劃期的に促進したのである。記憶にも明であるやうに日銀損失國庫補償によるところの七

億圓の特別融通が人事のやうにサッサと議會を通過した。この特別融資が今日迄のところ二億圓足らずであるが五月八日の貸出締切期限迄にはかなり殖へて五億圓を越すであらうと玄人連は見込んでゐる。ところでかく日銀を休銀救濟者とした結果特別融通や非常貸は年來大に増加して去年の五月中旬には十二億五千萬圓を突破した。それが、その後漸次返濟せられて昨今なほ七億三四千萬圓が殘つてゐる。そして之に今後貸出す分を加へその中少なからざる部分が固定する處あるものであつて日銀の機能喪失とか日銀の動脈硬化とかの論議の源は云ふまでもなく此處にある。

而して更に以上の特別融通を背景として大銀行が苦しんでゐるのは銀行自身の持つてゐる預金の洪水である。日銀に於ける民間預金は昨今なほ二億八千萬圓もあるが、その中二三銀行の和議が成立すると貸出が増加し、それと共に預金も増加するであらうし、然も之がいつでも流通界に流れ出して通貨膨脹を生じ得るものである。而してこの預金の主である銀行界では前に説いたやうな大銀行は預金に腹が膨れ、徒らに遊資を抱いて途方にくれてゐる。二月にはコールが四厘に下つたこともあると云ふ有様である。今東京手形交換所組合銀行の預金高を見るに去年のパニック前の三月十九日に十六億三千六百七十萬圓のものが今年二月四日では十六億九千三百二十萬圓となつてゐる。然もその中多くの銀行では預金は却つて減じてゐるのであるが、唯だ第一、三菱、三井及び安田の四大銀行だけは大に増してゐる。數字を上げて云へば八億五千三百萬圓のものが十億六千八百萬圓になつてゐるので、僅か一年たらずの間に二億一千五百萬圓を加ふるに至つたのである。これこそパニックの嵐が掃き寄せたところの預金であつた。

×

つまり去年のパニックは一年後の今日に及んで二つの問題を直接に産み出してゐるのである。一つは日本銀行本來の機能硬化の問題であり他は大銀行を中心とする金融緩漫の問題である。前者は特別融通によるところの貸出、特にそれが固定貸を背景としての日銀預金の増加（及び政府預金を加へて官民預金合計八億）が將來兌換劵膨脹を招來するであらうと云ふ慮を伴ふてゐる。即ち日銀が不完全乍ら持つところの通貨伸縮性が特別融通法によつて攪亂せられるとなすのである。而して之に對して後者は金融市場に於ける遊資の緩漫であつて、その原因は云ふまでもなく一方特別融通法によつて日銀が當面の恐慌不安鎭靜の必要から資金を製造したことゝ、他方年來の不景氣が資金の需要をなほ冬眠狀態に置いてあるからであるが、特にそれが大銀行を中心として顯はれてゐることは前に云つた通りである。

かやうに觀察すると今日謂ふ所の日銀の機能の喪失と金融市場の遊資横溢とは偶々去年のパニックを機會として問題化して來たものであるが、事の起りの近因について云へば自から特種のものとして考へねばならない。一は通貨の人工的製造の產物であるとも云へるであらうし、他は企業集中、信用集中と云ふ資本主義經濟の一進化過程の現

躍的表現であるとも觀得るであらう。性質はかやうに異なつてはゐるが、この當面の二金融問題は端なくも、我國の金融界が如何に統制を缺いでゐるかを明白に曝露してゐるものと云はねばならぬ。

凡そ我國現今の經濟狀態で略ぼ必要とせられる通貨の分量は精確ならずとも想像がつき、かねて通貨制度は資金の繁閑によつて不完全ながら相適應して伸縮することになつてゐる。必要以上の通貨はそれが縮小せられざる限り通貨膨脹を來す虞があり物價騰貴の因をなすものと云はねばなるまい。而して日銀はいや〳〵ながらでも自衞上通貨膨脹の必要の破目に陷つてゐるものと云へよう。而してかくの如き原因よりしての通貨膨脹は好ましきものではないのであるが、それをまつ迄もなく既に有力銀行間には需要なき遊資を抱いて悶々の情である。

然らば如何して日銀の機能喪失を回復しようとしてゐるのか。また遊資の横溢に對する金融市場の苦悶を如何に解釋してゐるのであるか。今のところは舵なくして大海に乘り出してゐるやうに金融界は統制なくして五里霧中である。

×

日銀の通貨統制力の回復と金融市場の金融統制との二鳥を一つの矢で以て射落そうと云ふ甚だ都合のよい提議を出したものがある。それは例の大銀行を中心として金融業者間に起つた金輸解禁論である。云ふところに依れば今日の遊資横溢はやゝもすれば利子の下落を來し不健全な方面に投資を促すことになり、やがて物價騰貴を來すことになるであらう。あまつさへ何の特別融通の關係によつて日銀の方では通貨膨脹が起り中間景氣が出て、やがて物價騰貴の勢を一層盛んならしめるであらう。そうなると國民の生活は脅せられるし、輸出は更に困難を加へるに相違ない。だから今の時に於て金輸禁止を解放すれば、この虞れは立消へとなるであらうから、即時之を斷行すべしと云ふのである。

一時姿を隱した金解禁論がまた出た譯である。云ひ出したものが大金融業者なので眉唾ものゝやうにも觀えた。差し當り日銀の通貨統制力と云ふ基本的機能を金解禁の方法を以て回復しようと云ふ議論には異論がある。日銀の固定貨が今後何年かの間執拗に付きまとふ限り日銀の機能は梗塞せられるのは已むを得ない。從つてたとへ金解禁を斷行したところがこの方面に効果はなからうと云ふのである。

から觀るのにも一理がある。固定貨は現今日銀の通貨統制力を極端にまで閉塞してゐる事は事實である。そして金解禁が從前の通貨統制力を持つてゐない事も明白である。又英蘭銀行などに比較して日銀の通貨統制力が遙かに劣つてゐる事も人の知る通りである。併しながら今日の經濟狀勢で以て金解禁は絕對に日銀の通貨統制に對して無效力であらうか、如何かはなほ疑問であらうと思ふ。固定貨に終る範圍を除いて、たとへ其の統制力は縮限されても多少の影響力はないであらうか。更にまた金解禁後に於て金の移動が自由になつた場合に於て始

めて、日銀の割引政策が、善かれ悪かれ、一種の統制的影響を通貨の伸縮に及ぼすことゝなるのではなからうか。とにかく固定貸の故を以て日銀の通貨統制力は全然その機能を失つたと云へないやうに、金解禁が日銀の通貨統制力に全然無關係であるとは云へなからうかと思ふ。

最近の報道によれば大藏省や日銀當局やは特別融通の貸出期限五月八日後は之を打切る事、日銀及び預金部保有の公債を賣出す事、休銀以外の開業銀行に對して貸出利子の引上やその他の方法を以て資金の回收を計り、之によつて通貨の膨脹を防止し、かねて金融統制の方にもその作用を及ぼさうと企てゝゐる。又公債の公募も六年振りに復活し、更に短期公債を長期のものに乘換へようと云ふ計畫にも着手したさうである。率直に云へば狼狽氣味である。のみならずそれだけでは無論通貨及び金融統制に十分の效果を擧げる事は出來まい。固定貸がある限りは日銀の統制力の自由性はそれだけ自縛だ。而して金解禁がこの固定貸を大に緩和し、日銀本來の統制力を全部回復する能力などがある譯ではないが、されはとて、金解禁を以て日銀の通貨金融統制に全然無關係であらうとも云へなからうと思ふ。

×

併し之は之として大銀行が抱き込んだ遊資を何とか處分したいのは銀行としては山々である。外國の有價證券にでも投資したからう。遊資を捌くために金解禁は何よりも有效である。利子の低下を欲せずして算盤を立てようと思へば目下之に優る方法がない。彼等が通貨統制を傘に自己懷中の金融統制を計らうとするのはあまり見え透いてはゐる。また金融統制などゝ云へば甚だ結構な言葉であるが、之が大銀行の算盤本位の金融統制であつては困る。元々わが國は利子が高いのだ。利子の高いことが有力な一原因となつて事業界が苦しんでゐる。資利子が高いので中小商工業者は〻迫つて魚跳ると云ふ有樣である。資本を普遍的に撒布して利子を出來るだけ安くするのが民衆本位の金融統制でなければならぬ。この見地から觀て最近わが國の利子が漸次低下しつゝあることは決して悲觀すべき事でなくて却つて望むべき事であるには相違なからう。のみならず更に一事の考ふべき事がある。善きにつけ惡きにつけて、今日の金融緩漫はパニツクの産物である。また特別融通によつて生じた遊資の增加は、何も天から降り地から湧いたものではなく、國民が結局に於て損失を背負ふと云ふ約束の下に日銀をして人爲的に製造せしめたものでもある。故に全體として遊資そのものは國民全體が振出した手形のやうなものだ。であるから之から生ずるところの利益は一部少數の金融業者の利己的處分によつて左右せらるべきものではなく、それが存在する限り、國民一般の利用に供せらるべきものとも云へるのである。

併し坊主が憎いとて袈裟まで憎いとは云へまいし、坊主の言ひ草が得手勝手だとしても、それが隱さゞるに勝れば少し立入つて考慮を拂つてもよからう。今わが國の現實の經濟狀態に即して云ふならばその

浮薄な點、その薄弱な點、その見得坊な點、だらしのない點などは之を斷然とかなぐり捨てなければならないのである。何故にそうであるかは此處で論ずるまでもなく、過去わが國經濟の幾多の蹉跌が之を十二分に裏書してゐる筈である。利子の低きは望むべしとするも、低能率と無統制の經濟組織内に於て溺るゝ者藁をも掴むの譬で一時の遊資を當に調子に乘つてゐては、また後になつて早速行詰つてパニックの二代目を繰返す處なきではない。過去に於て嘗め盡した經驗を生かして行かなければならないのは此の際である。利子の高低だけを見て國際經濟の動きを考へないのは短見だ。然も今日の資金の饒多に見えるのは何も實質的に我國に資本が増殖されたのではなくて、云はゞ國民の振出した約束手形であり、國民の責任を以てする信用の膨脹にすぎない。預金の集中と云つても、無いものが有になつた譯ではなく、散在してゐたものが集中したと云ふだけに外ならぬ。故に之を以てそのまゝ、資本の實質的増殖であると早飲み込して喜んではまだ早くはないかと思ふ。

物はすべて比較だ。矛盾だらけの現代經濟組織内で總ての人々によく、總ての階級によい政策の有などは無い。たゞ比較的に[illegible]強き足取を以て進み得る過程を辿るの外はないのである。而してこの見地からしても一定期を豫告して金解禁を斷行すべく其のつもりで一切の經濟的用意をなすべきである。もうこれ以上足元の危ない中風症的經濟狀態を永續きさす必要はあるまい。

金解禁の問題となると議論が蒸返しにするから、こゝには觸れない。たゞ通貨及び金融統制上から、輸出入の貿易上から、またわが國民經濟の健全なる進歩の上から、つまり事の利害得失の兩端をたゝいて觀察して、此の際金解禁を斷行し、相率ゐて積極的にその用意をなすべき時機であると思ふ。

×

通貨統制と金融統制とが何れも箍が緩み、機能が廢れて不安の空氣を漂せてゐる。晴れもせず、降りもせず、暗雲重々、その鬱陶しさに經濟界一般は大洋の眞中で羅針盤を失ひ、その日〳〵の風向相手に漂流しつゝある。右顧左眄。危なかしい事且つだらしのない事夥しい。このまゝではますます進退兩難に陷るであらう。

普選議會に直面せる無産黨財政策

言論の力がどの程度まで第一次普選の成績を決定するに與つたであらうか。果して人々が云ひ觸らしてゐる樣な力があつたか、どうか。實は甚だ疑はしいと思ふ。官權の彈壓や干涉や、將來の因襲や因縁や、たゞしは情實や買收や、之等のものは表立たないだけ底力があつたや

うにも見える。

併しそれにも拘はらず民衆の眼醒めが蔽はんとしても蔽ふべからざる程度に明白になりつゝあることは之を見逃すことは出來なかつた。例へば事經濟や財政の問題に觸れて來る場合に於て今迄政治家だとか何だとか云はれた人々が口を開けば、國利民福であるとか、民力休養であるとか、富國强兵であるとか……等、等と、さも解つたらしく述べ立てゝ來たお託宣が、もう今迄のやうに民衆の耳をさへ引かなくなつた事は何を物語つてゐるのであらう。美辭麗句を列べ立てゝもそれが二階から目藥とあつては、いくら民衆でももう其手にはかゝらなくなる。幾多か欺かれ、幾多か裏切られたことを觀破して來た民衆の眼はますく冴えて來たのである。

早い話が手から口への生活を營んでゐる民衆が最も痛切に要求することは何物を措いても先づ生活の安定であらう。然も今度の普選戰のプラットフォームにこの生活の安定を眞先にかゝげたのは無産四黨と革新黨に外ならなかつた。生活の安定してゐる政民兩黨は昔乍らの二階から目藥主義を性懲りもなく掲げたものである。その上面白い事は選擧の濟んだ昨今、政府と與黨の若い連中が、何とかもつと民衆の要求に近づかねばならぬと感付いて、生活の安定とか相續税の累進加重などと云ふやうな多少の新味を加へて古ぼけた看板を塗り變へやうと目論んだが、老人連から、そんな實行も出來ぬ事はよせ、と叱られてお流れとなつたと云ふ話である。かやうに生活の安定と云ふ國民生活の第一歩、經濟政策の基本的要求さへが、まだ高閣に束ねられてゐる狀態である。かゝる際に於てまだ無力であるとは云はれ乍ら無産諸黨があれだけ戰ひ、あれだけの成績――普選及び次點次々點を入れて考へて――を擧げたことは國民が今日眞に何を要求し、明日何を要求するであらうかを明確に指示するものと考へねばなるまい。

ともあれ八名の無産黨――程度や傾向の別はあらうが――出たことは尠なくとも普選でなければ一寸見られない現象である。第一次普選の齎んだ寵兒だ。この兒は少數黨ではあるが議會のキャスティングヴォートを握らうとしてゐる。政民兩黨は二大政黨を驕りながらも心中この決勝權の存在に脅かされてゐることは想像外である。政民兩派が相互に五萬圓だとか十萬圓だとかを出して議員の崩し合をしたり、中立議員の抱き込に餘念のないとき、この八名の異形なる新人者は巍然として自己の使命に驀進せんとしてゐる。楔はすでに帝國議會の中に公々然と天下晴れて打込まれた。この形勢にすでに株式市場はやゝ氣迷ふてゐる。敏感なものである。それは兎も角として、よし當來の臨時議會は御大禮豫算を中心とした議案の協賛に終る事となつても、帝國議會そのものゝ内に一新機運の動きかけてゐる事を看過することは出來ない。――而して今その一片としての財政方面にかゝはる一二の點を拾つて見よう。

×

手ッ取り早く云へば斯うならう。民衆の生活を保證し且つ之を向上

せしむる爲に諸々の方法を講じ、そして其の費用をば有産階級から出させよう、と云ふのが無産諸黨の財政策の基調をなしてゐる。言葉を換へて云へば從來の有産階級本位の財政を建て變へて民衆本位、つまり無産の大衆本位にしようと云ふのである。更には搾取から出來上る富を、有閑徒食階級の富を、無駄と浪費と惡德とのために用ひられる富をば民衆の手に還元して、同胞多衆の生活の保證と向上に向けやうと云ふことになる。そしてこの目的をば議會の財政立法によつて達しようと云ふのがその眼目である。

而して之等の財政立法たるべき內容は無産政黨の各々によつて表現も形式も、無論のこと、同一ではない。のみならずその各々についてどれだけの計數的根據があるかは立入つて私は知らない。無論これは現存の各政黨おしなべてそうであつて無産政黨のみの事ではない。この財政々策の計數的根據その事だけについて云へば實業同志會の夫れは一番研究的であると云はねばなるまい。それはそれとして兎に角その數的背景をば先づ措いて、新聞紙上に於て私共の目に觸れた無産黨の財政々策の大綱だけでも、他の二大政黨の夫れに比較して考察するとき、深き興味を覺ゆるに十分である。

いま財政手段によつて無産黨が達成しようと云ふものを次に少しく擧げて見よう。(主として産業勞働調査所編輯、同人社發行の無産者政治必携及び國民新聞昭和三年二月十二日附錄選擧號に依つて)

勞働農民黨の政策の中直接に財政に關係するもので重要なのは經費の方面ではまづ次のものがある。機密費の廢止、失業保險と疾病保險及び下級俸給者並に遺族の生活保障保險、肥料及其種子の國營並に無料貸與、兵士の待遇改善、戰爭や徵兵による家族の窮乏の國家による生活保證、義務教育機關の增設完備、その年限延長、その費用の國庫負擔、刑務所に於ける待遇改善……等である。而して收入方面に於ては財産税、不在地主税等の創設、並に之等諸税及び所得税、地租、相續税、營業收益税免税點の引上げ高率累進賦課。その他無産階級の負擔となる惡税廢止、生活必需品の消費税及び關税の廢止……等がその重なものである。無論之等の個々のものについて的確な數的根據があるに相違ない。がそれを措いてもその財政策の基調を知るに十分であらう。

次に日本勞農黨の財政々策について云へば經費に直接關係するものは軍備縮小による經費の減少と兵卒の待遇改善、戰死廢兵徵兵による本人並に家族の窮乏に對する國家扶養の實施、機密費の撤廢、寃罪並に不當拘留に對する國家の賠償及び無産者訴訟費用の國庫支辨制度の確立、福利費社會事業費の撤廢、鐵道土木事業費の黨略化反對、貧窮者救濟法の制定、失業者家賃の國庫負擔、無産兒童の給食と學用品の無料給與、診療機關の公有化……等である。而して收入方面では生活必需品の消費税及び關税の撤廢、財産税、所得税、相續税の高率累進賦課、民衆負擔税の廢止……富豪脫税の嚴罰、營業收益税の改廢……等は之に屬する。

日本農民黨の財政々策と目すべきものは次の如きものに表はれてゐるであらう。經費の方面では軍備の縮小による給費の節減と兵卒の待遇改善、戰死廢兵徴兵に依る本人並に家族の窮乏に對する國家扶養の實施、寃罪並に不當拘留に對する國家の賠償及び無産者訴訟費用の國庫支辨制度の確立、診療機關の公有化‥‥等である。而して收入方面に於ては財産税所得税及び相續税の高率累進賦課、義務教育費の全額國庫負擔と地租の地方委讓‥‥等が重なるものである。

最後に社會民衆黨の財政々策として觀察せられるものは次の如くである。まづ經費方面に關係あるものを拾つて行けば斯うい ふものがある。選擧費用の國庫負擔、軍備の縮小、兵卒の給與增額、在營兵の家族に扶養料を給與する事、勤勞階級の爲の支出の增大、資本家擁護の補助金奬勵金の廢止、軍事費の極限、大藏省預金部資金を勤勞階級のために運用せしめる事、更に諸々の重要産業の公營、義務教育費の全額公費制(地方財政に關係するものではあるが中等教育公費制、農民學校、勞働學校の公費制の確立がある)、小學校教員俸給の增額。以上の外更に諸々の社會施設の擴張に關係する費用‥‥等である。之等のものに對して財産税、土地增價税、兵役免除税等を設定すること、資本利子税及び相續税に高率累進税を賦課すること、特別不勞利得税を設置すること、砂糖消費税の廢止、木材トタン板材料その他生活必需品の關税廢止‥‥等より來る收入の增減がある。

恐らく盡してはゐなからうが、吾々の眼に觸れた範圍に於て、無産諸黨が議會を通じてその實現を期そうとする財政策の主要點は大體に於て以上の如くである。之等の個々のものについて批判し研究する事は必要ではあるがこゝには試みないであらう。以上擧げたゞけでも無産黨の財政思想の傾向を知ることは十分に出來るのである。云ふ迄もなく、たとへ普選議會の時代が來たからとて、無産黨の財政策がそう簡單に片付いて終ふと考へる人もなからう。否、却つて有産無産の諸政黨間の財政鬪爭がますく尖銳化して來るであらうと思ふ。之を歷史に徴して云へば曾てはロベスピールはフヰジオクラツの土地單税論を佛國大革命後に於て實行して失敗した。近くはレニンの共産主義的財政策は謂ゆる新經濟策によつて展開をなした。而して之等のものに比較して云へば我國無産黨の財政々策は大に實行的である事を認めねばならない。だがその一つでもの實現を期そうとせば相當苛烈な鬪爭を經なければなるまい。

從來とて恩情の豐かな、社會政策の好きな政府や政黨やは、色々の點に於て中等階級や無産階級やの爲だと稱して財政方面にも文字通り微力を盡さぬではなかつたのである。こゝ數年來の出來事を擧げても やれ通行税は廢止した。木綿織物税も廢止した。所得税の免税點も千二百圓まで引上げた。何だ彼だと云へば、それもないではない。併し乍らそれは自から進んで出したと云ふよりも民衆の聲に迎合したか、若くは政府政黨の自家防衛の程度に外ならなかつたのである。無組織

の民衆の要求に讓つたに過ぎなかつたのである。而してこの事は國民から徴收する租稅ばかりではなく、國費を以てする方面に於ても少しも變りはない。蓋し眞に民衆の生命に觸れた施設はまだ我國に於てはないと云つて差支へがないのである。歷代の內閣が之であつた。本年一月二十五日とかに東京銀行クラブ新年宴會で山本達雄男と井上日銀總裁とが端なくも立合討論(?)をやつたことは廣く人々に知られてゐるがその節井上總裁が云ふには、自分の經驗によれば過去十何年かの間、眞に節約を旨とした內閣は一つもなかつた、と云ふ意味の事を喝破してゐる。癪に觸つたことに案外正論が出る。政府の裏をも覗き得る地位の井上氏がこう云ふのだから本當に相違ない。そして、其の斷定即ち歷代の內閣は大の浪費家であつただから恐らく民衆本位の施設も出來なかつたと云ふ事實は、表から財政を硏究する者によつても夙に認められてゐたところである。そう云ふところへ大なる批判者として、また强き建設者として無產諸黨の財政論が議會に乘り出したことは、我國の財政を根本的に改造する一の契機をなすであらう。

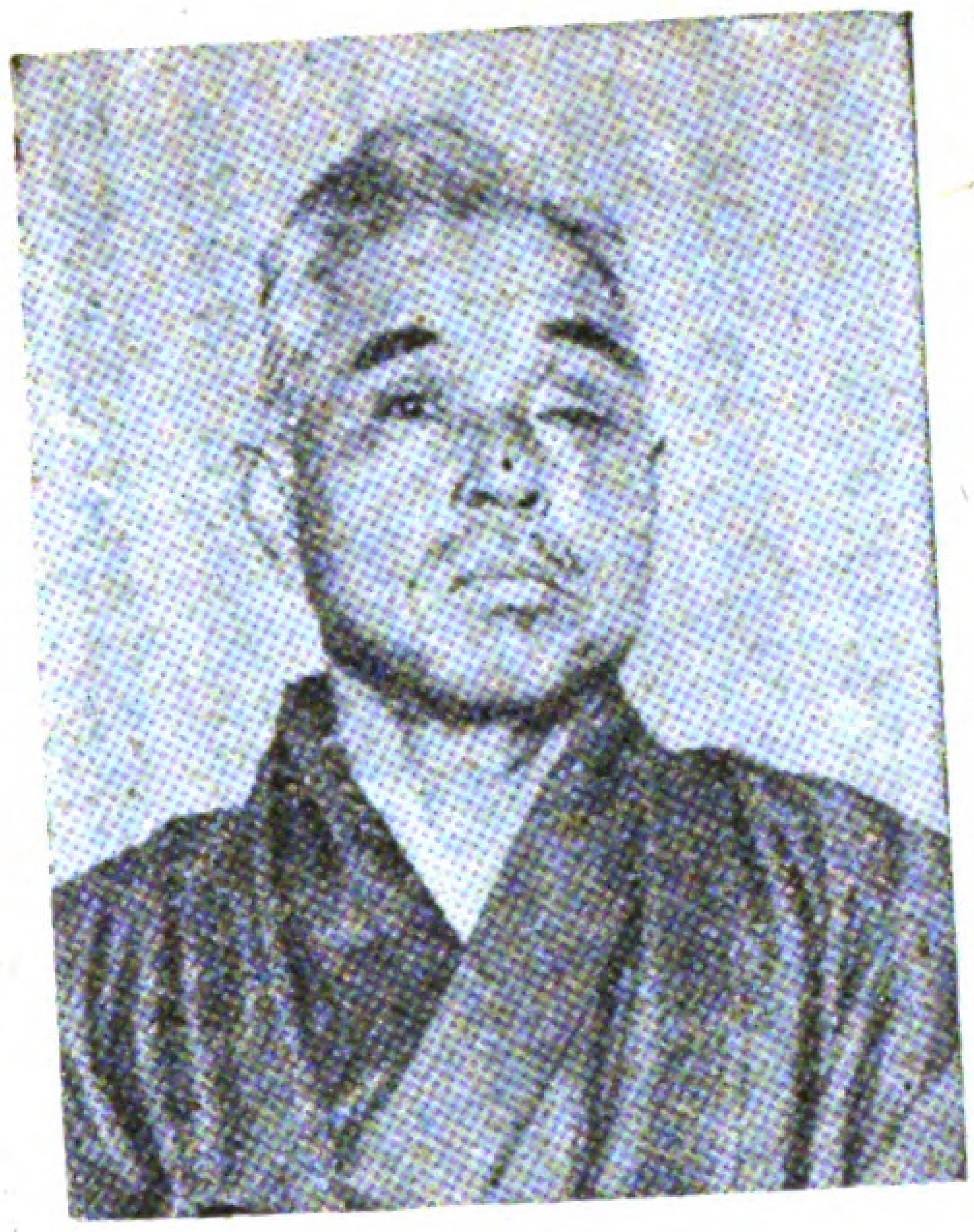
また最近ロシアから歸つた後藤新平氏はロシア印象として二つの事を新聞記者達に話したと傳へられてゐる。一つはロシアの政治家は自から持すること極めて薄く專心國庫に鞅掌してゐると云ふことであり、今一つはロシアの政治が科學的に行はれてゐると云ふことであつた。人によつて言を棄てず。また國によつて事を棄てず。我國の謂ゆる政治家達は反省すべきであらうと思ふ。また我國政治をして名實共に非科學的。無能率的ならしめてゐる政治界のバチルスを一掃するの必要もあらうと思ふ。古くは佛國の一政治家云ふ――我によき政治を與へよ。然らばよき財政を作らん――と。現今我が民衆の手に政治を奪還して、眞に民衆本位の財政を樹立しようと思へば、先づよき政治を求めねばならぬ。

――議會に突進する無產諸黨の責務また大なるものがある。

無產派議員の議會陣

議會內に於ける無產政黨の取るべき態度

安部磯雄



無產黨の合同問題は幾度か唱へられて幾度か失敗したのであるが、今度いよ〱八名の無產黨議員を出すことになつたのであるから臨時議會開會の前後に於て此問題は當然再び無產黨の間に提出さるべきものと考へられて居る。然し此問題が議會の開會を前にして一氣呵成に決せらるべきものであるか否かは一の疑問である。合同其ものに就て私は何等反對すべき理由を有しないけれども、合同の時機に就ては相當の考慮を拂ふ必要があると信ずる。現在の如く無產黨が分裂するに至つたのには幾多の思想問題や感情問題が含まれて居る。此等の障礙を除去するには相當の時日を要するのではないかと考へられる。私は過去に於ける合同論に對して餘り多くの望をかけなかつた。何となれば眞の合同は無產政黨が若干の代議士を議會に送つた時初めて其第一步を踏み出すべきものと考へたからである。少數の無產黨議員の間に融和が出來さへすれば、それが動機となつて無產黨の間に合同の行はれる可能性を增進することになる。これが合同の時機に對する私の意見であつた。今や其時機が到來したのであるから、私は合同促進のためには出來得るだけ努力したいと考へる。然し私の希望して居るのは精神的融合であつて、形式的合同ではない。

私が知りたいのは無產黨議員が何處まで互讓の精神を發揮し得るかといふことである。換言すればどの程度まで過去の感情を放棄し

て無產大衆のために融合し得るかといふことである。私は熱烈に無產政黨の合同を希望するが故に、其目的に達するまでには出來得るだけ愼重の態度を採りたいと思ふ。合同其ものは決して急ぐ必要はないのであるから、合同の重要條件たる精神的融合に努力することが目下の急務であると信ずる。總選擧前に於ける地盤の協定すら出來ない樣な狀態に在る無產黨に急遽合同を要求することは無理な注文であると言はなければならぬ。假に來るべき臨時議會が再び解散されたとする。其時に於て各無產黨が尙從前の如く同士討を爲すようなことがあれば、これ明に合同の不可能なることを證明するものではないか。これに反して各無產黨が充分に互讓の精神を發揮し、完全に地盤の協定を爲すことが出來れば、よし各黨は分立して居ても其實は合同に等しきものである。故に私共は合同を唱へるよりも先づ精神的融和といふことに努力して見たいと思ふ。

無產黨が政友會及び民政黨に對して如何なる態度を取るかといふことにつき私の考へて居るのは大略次の如くである。無產黨は既成二大政黨とは根本的に其主義を異にするものであるから、決して彼等と妥協苟合するが如きことはない。私共は常に既成政黨の打破を叫んで居る位であるから、私共は一日も速に無產黨が議會の過半數を占むるに至らんことを希望して居る。然しこれは未來に於ける希望であつて、現在の無產黨は僅に八名の議員を有する一小團體に過ぎないことを記憶しなければならぬ。但し二大政黨の間に介在してキヤスティングヴオートを所有して居る無產黨としては決して自ら侮る譯もないのである。私は二大政黨に對する無產黨の位地が恰も二大野球團に對する審判者の如きではないかといふことを感ずる。無產黨は二大政黨の何れをも贔屓して居ないから、全く公平の位地に在ると言へる。審判者は仕合の進行中常に公平無私なる判決を下せば宜いのである。政友會にしろ民政黨にしろ無產黨に對して切崩や抱込といふが如き卑劣手段を試みてはならない。審判者を買收といふが如きは全くフエヤープレーの精神に反するもので、運動精神を汚辱するものである。審判者は神聖なる者でなくてはならぬ。審判者としての無產黨の誇りは實に此點に在る。利權や名譽で無產黨を動かすことが出來ると信ずるものがあるならば、それは大なる見當違ひである。二大政黨にして無產黨の贊成を得る必要があるならば、正しき政治を行ふ外其途はあるまい。私共は二大政黨が行はんとする各政策に對して一々是非の判斷を下さんとするのであるから、二大政黨は一々無產政黨に對して諒解運動を試みるよりも、先づ自黨の政策が民衆本位のものであるか否かを考ふれば宜いのである。

政友會も民政黨も無產黨の本質を誤解して居るらしい。過去に於ける政黨は利權や名譽や情實等のために動かされたものと見へて、此度も亦政友會や民政黨が中立議員の爭奪に狂奔して居るようである。然し無產黨に對してさへ同一の運動を試みるに至つては餘りに

非常識の行動ではないかと思ふ。無産黨の使命は此等の情實運動を排斥して明るい政治を行ふといふ點に在る。政友會でも民政黨でも正しき政治を行ひさへすれば私共は進んで彼等の政策に賛成する。裏面運動の如きは私共の反感を招きこそすれ、何等の價値もないのである。

　私共が議會に要求すべきことは一々此處に述べることが出來ない程に澤山であるが、私は單に審判者としての無産黨の立場から見た目前の事實につき讀者諸君に訴へて見たいと思ふ。現在の政治が如何にフエヤープレイの精神に缺けて居るかは次の如き事實によりて證明されて居る。衆議院議長選擧に就ても政友民政兩黨の間に競爭があると新聞紙に報ぜられて居るが、これも確に奇怪な事實であると言はねばならぬ。議長は就任と共に黨籍を脱せねばならぬ規則があるから、今日の如く兩黨の力相伯仲して居る際に於て一人の黨員を失ふことは大なる損失であるに拘はらず、兩黨は尙ほ自黨から議長を出すことに腐心して居るようである。議長は審判者の如き位地に在るのだから、公平無私の人たるべきは言ふまでもない。議長をして黨籍を脱せしむるに至つたのも全くこれがためであつたと考へる。然るに議長の椅子に關して尙ほ爭奪戰が豫想されて居るのを見れば、現在に於ても議長は尙ほ公平無私であり得ないものと推測しなければならぬ。

　選擧を有利に導かんがため知事や警察部長の交迭を行ふことは歴代の內閣が多少に拘はらず實行した所のことであるが、これは明に運動精神に反することで、こんな不法不德のことはない。既成政黨は單に運動精神の違反者であるのみでなく、政務官と事務官との區別の破壞者である。選擧は運動競技と同じく公平無私なる審判者の下に行はるべき筈であるに拘はらず、歴代の內閣が其權力を濫用して不公平なる選擧を行つたことは實に醜態此上もなきことであると言はねばならぬ。故に既成政黨にして眞に政治の改善を希望するならば先づ此不公平なる行爲を徹底的に改むべきである。然らざれば彼等は到底審判者たる無産黨の同情を得ることは出來ないだらうと考へられる。

勞働農民黨の旗の下に

水谷長三郎



一　選擧戰を顧みて

普選第一步の總選擧の結果は、資本家地主の議員四百五十八名に對して、無產政黨側から出した議員は、各派を合して、僅かに八名を數ふるに過ぎなかつた。だが、この新たなる選擧戰に於ける經驗は、すべての無產政黨と、無產大衆とを訓練し、その政治意識を高める上に於いて、實に著るしき效果があつた。この大衆の發展に對する充分なる認識なくして、單に表面に現はれたる議員の當選數にのみ囚はれてゐては、總選擧の戰績を正しく批判することは出來ぬ。

今回の選擧戰を通じて、大衆の面前に、最も生々と曝露されたるものは、現行選擧法の階級的缺陷と、我等の政治戰線に於けるところの、甚だしき不統一とである。

普選法と稱しながらも、現行選擧法が、幾多の制限を設けて、無產階級の政治的進出を阻止せんとしてゐることは、今更ら多言を要しない程明白な事實である。單にその一例を擧げて見ても、性、年齡、居住に於ける不當なる制限等は、凡ての婦人と青年や、或は失業又は半失業の狀態に置かれ、求職のために常に轉々と流浪生活を余儀なくされをる、多くの勞働者や俸給生活者に對し、選擧權、被選擧權を與へざるのみか、これ等謂ふ所の無資格者の選擧運動に携はることさへも絕對に禁止してゐる。その結果、勞働組合、農民組合、無產青年同盟、無產婦人同盟等、各種の無產團體に屬するところの、自覺あり訓練ある多くの婦人活動分子や、理想に燃へ、信念に燃ゆるところの、多くの青年鬪士達は、誰れもが直接に選擧戰に加はることが出來ないのみか、單なる推薦演說すらも自由になすことが出來ないのだ。また、彼の鈴木內相をしてさへも、悲鳴を上げしむるほど、煩瑣極まる幾多の罰則は、田中反動內閣の手に依つて、支配階級の意のまゝに、我等の選擧運動彈壓のために利用されたのである。斯くて、無產政黨の選擧運動には、續々と選擧違反事件が、、される。

普選法に於ける、かくの如き階級的僞瞞的正體は、今回の選擧戰を通じて、最も赤裸々に、大衆の面前に曝け出された。かくてこそ、大衆の間には、我等の呼び掛けに應じて、『選

擧法の徹底的改正』と、『政治的自由』とに對する要求が、燎原の火の如くに燃え上つたのだ。

今回の選擧戰に於て、無産政黨側は、八十四名の候補者を立てゝ、漸く八名の當選者を出したに過ぎなかつた。即ち、その當選率は、十名強に對して一名の割合である。これを資本家地主側に於けるところの、二名弱に對して一名の割合に比較すれば、その成績は甚だしく劣つてゐる。勿論、この不成績には、多くの原因があるだらう。その最も大なるものは、上述の如き選擧法の階級的缺陷と政府の極端な彈壓とである。だが、見逃してはならぬ、今一つの大なる原因こそは、現在の無産階級の政治戰線に於ける甚だしき不統一にあることを、誰れが否認し得やう。試みに、兩者の間に於ける、總得票數に對する當選率を見るがいゝ。資本家地主側に於ては、得票數約二萬に對して一名の當選者を出してゐるのに、無産政黨側に於ては、約八萬票に對して一名の割合にしかなつてゐないではないか。

假りに今回の選擧戰に於いて、すべての無産政黨の合同が實現してをり、その全勢力を集中して、統一的方針と指導との下に戰つてゐたとするならば、資本家地主側の候補者や、政府の、、に對しても、遙かに有效に戰ふことが出來たであらうし、又候補者の對立を避け、巧妙に配置して、得票を有效に利用したならば、必ず今日以上の好成績を上げ得たであらう。

昨年の府縣會選擧戰に於ける苦き經驗は、今回の總選擧に當つて、無産政黨各派の間に不完全ながらも選擧協定を結ばしめるに至つたのであるが、更らに今回の生々しい經驗は、今や各無産政黨の一般黨員の間より、無産政黨合同への、熱烈なる大衆的要求となつて現れつゝある。されば、この喜ぶべき氣運を促進し、我が勞働農民黨の旗の下に、全國に於ける、總ての無産政黨の無條件合同をば、無産階級政治戰線の統一のために、一層奮闘すべきであらう。

二　議會で何を要求するか

今回の總選擧に當り、我が黨では、大山執行委員長を始め、有力な多くの指導者が枕をならべて討死した。之れは、我が國無産階級のために、洵に遺憾の極みである。此の私が我が黨が議會に有する、唯一名の代表者の、その一人であると思へば、余りにもその責任の重且つ大なることを痛感する。だが、我が勞働農民黨は——而して、無産階級の眞の代表たるすべての無産政黨は——資本家地主黨の如くに、たゞ議會の中のみで戰ふ政黨では斷じてない。それは、無産階級の强固なる大衆的組織によつて、資本家地主の政治勢力に向つて、日常不斷に闘ふ所の政黨である。されば勞働農民黨の代議士としての私に課せられたる任務は、常に無産階級の要求を忠實に代表し、その、、なる支持を背景とし、强固なる組織を以て戰ひつゝある、我が黨の議會外に於ける大衆的闘爭と相俟ち、相呼應して、その大衆の要求を現在の議會に叩き付けることであり、また今一つは、議會に於ける、資本家地主黨の行動を嚴重に看視し、彼等の正體を大衆に向つて曝露することである。かか

る議會外に於ける大衆的闘爭なくしては、我等少數の無産政黨議員の力のみによつては、如何に微弱な我等の要求と雖も、絶對に貫徹さすことは不可能である。固より我等の任務は重大ではあるが、だが、それは、黨の闘爭の一部分、黨の闘爭の一方面を、どこまでも分擔するに過ぎないのだ。

私は、我が國最初の無産政黨の議員として、その重大なる責任を果さんがために、どこまでも我が勞働農民黨の旗の下に、その嚴重なる規律と指導とに絶對に服從して、身命を賭して戰ふであらう。

然らば私は今、今日の議會に向つて、如何なるスローガンを持つて戰はんとするか? それは云ふまでもなく、今回の選擧戰に於て、我が黨が民衆に呼びかけて掲げたところのスローガンに外ならぬ。即ち

一、田中反動内閣を倒せ!
二、帝國主義戰爭絶對反對!
三、勞働者に仕事と食を與へよ!
四、働く農民に土地を保證せよ!
五、、、は大資本家と大地主に出させろ!

さうして、私達が、無産階級當面の最も切實なる具體的要求として、資本家地主の議會に突き付けんとするものは、我が黨の左の諸政策である。

一、選擧法の徹底的改正
二、八時間勞働制
三、失業手當法
四、健康保險法の徹底的改正
五、耕作權の確立
六、居住權の確立
七、俸給生活者の組合及び政黨加入の自由
八、罷業權、團結權、團體協約權の確認
九、治安維持法、其他無産階級運動抑壓諸法令の廢止

三 議員行動の規律

無産政黨議員は、各派を合するも、僅かに八名にしか達せず、資本家地主の議員に比すれば殆んど物の數ではない。彼等は必ず絶對多數を恃んで、極力我等に壓迫を加へ、或は懷柔を試みるであらう。我等少數の無産政黨議員は、彼等の壓迫と懷柔とに對抗し、然も其の強大なる勢力に向つて徹底的に戰はんがためには、常に所屬政黨の規律と統制とに絶對に服從して行動すると共に、他面、無産政黨各派議員の間に於て、互に緊密なる關係を結び、相協力して共動の行動をとらなければならぬ。そのためには無産政黨議員團の組織が絶對に必要である。

最近、社會民衆黨の提唱によつて、日本勞農黨及び我が黨の三政黨の間に、議員團組織のために協議會が開催され、この會議に對して、日勞及び我が黨よりは、議員團の組織と共に、一歩を進めて、議員の議會内の行動を統制せんがために、共同統制委員會の組織をも提議する筈であるが、我等は單に議會内の闘爭を有效ならしめるためのみならず、無産政黨の合同を促進する上からも、誠意を以て、どこまでもこれを實現せしむべく努力しなければならぬ。

今や一切の既成政黨は、完全に資本家地主の代表者となり切つてゐる。彼等の間の對立

は、表面如何に激烈と見えても、それは要するに、彼等の階級內の對立に過ぎぬ。無產階級に對する場合、直ちに彼等は內部の對立を忘れ、一致して我等を彈壓するのである。我等は彼等の內部の對立に卷き込まれ、彼等に利用さるゝが如きことがあつてはならぬ。我等は如何なる場合といへども、絕對に一致しない階級的利害を代表するところの、一切の既成政黨と妥協し、提携してはならぬ。萬一不幸にして、無產政黨議員の中に、彼等の懷柔に陷り、無產階級を裏切るやうな卑劣漢の現れた場合には、どこまでもこれを糺彈し、無產階級の陣營より、徹底的に葬り去るであらう。

——一九二八、三、五——



たゞ一と筋の鬪爭の路を

淺原健三

［序］此の拙稿は、私が當選後、選擧區に於ける感謝演說會での演說の草稿である。今、これで貴重な『改造』の紙面を塞がして貰ふのは、匆忙の間、新に起稿する暇がないのと、一つには、無產黨の議員たる私は、今、何を選擧區の有權者諸君と約束したか、また福岡縣第二區の有權者諸君は「如何なる候補者」を「我等の代議士」として選ぶ諸君であるかを、全國の讀者諸君に判つて貰らためにも、恰度都合が良いと思ふので、此の草稿を改造記者の膝下に呈する次第である。

一片の演說草稿、餘りに通俗的で、平板である。が、開き直つた論說よりも、此の方が、私の身上でもあり、また讀者諸君が無產黨議員の實體及び選擧民の實狀を覗ひ知られる好資料となるかもしれぬ。

有權者諸君の私に投げ與へられた一票は、私の過去の社會的、政治的活動に對する報償ではない。一に私の將來の政治的活動に對する依托の一票であり、鞭撻の一擊であると信ずる。私は諸君の此の鞭撻を受け、諸君の依托信任に背かないために、粉骨碎心、無產階級政治運動の眞大道を眞一文字に驀進せんことを誓ふものである。

若し、次の總選擧に於て、今度福岡縣第二區の有權者諸君から與へられた二萬三千十七票が、一票でも缺けるならば、それは任期中に於ける私の努力の不足、私の怠惰、卑怯に對する選擧民諸君の不信任の表現であり、意

目の譲であると思ふ。私は何ものよりも、此の大衆諸君の鞭を怖れつゝ、戒心しつゝ、私の大任を果さんことを努める。これを今、更めて、諸君の前に誓ふ。

私は今、諸君——勞働者諸君、坑夫諸君、小賣商人諸君、農民諸君の代議士である。私は今日から「諸君のもの」である。諸君の指揮命令のまゝに動く、諸君の手足である。私は民憲黨員であるから、民憲黨中央機關の指揮命令によつて動くが、同時に、大衆諸君の直接の指揮に從ふて進退すべきであると信ずる。從つて私は、今迄の代議士諸君の様に、議會報告演説を二年に一度か、三年に一度開いて事後承諾を求めるやうな、或は自家廣告でお茶を濁すやうな眞似はしない。事前に、議會毎に、或は重大なる政治運動の前に、私のとるべき態度に就いて、諸君と御相談を遂げ、諸君の意思要求を直接に聽き、それによつて私の政治的活動の方針を定めたいと思ふ。

故に、私の今後の方針、態度は、一に諸君の意思、要求によつて定まるのである。

が、今、代議士として、最初に諸君の面前に立つ時、私は、私の代議士としての議院の内外に於ける基本的の用意、根本的の態度に就いての私の覺悟を述べて、諸君の御批評を受くべきである。

第一、私は議院に臨むとき、如何なる人間であるべきか、またありたいか。私が議院ドアーを排して一歩を踏み込んだ時、その私は勞働者の代表、貧乏人の味方、無產階級の代言人と云つたやうなものであつてはならぬ。代理人、代表者ではなくて、勞働者それ自身、貧乏人それ自身であらねばならぬ。ブルジョア的雰圍氣の充滿せるあの議院に、『勞働者がやつて來た』といふ色調を、ハッキリと浮び出させねばならぬ。それで、ブルジョア議員諸君は、『俺達の敵が來た』と意識せられるであらう。然り、その「敵」が、とうとう『俺達の私宅に乘り込んで來た』といふ感じを、より鮮明にし、より深刻にすることが、

貴々たる代議士[illegible]に、[illegible]衆議院議員の住宅ではあるまいか。議場に於て、控室に於て、廊下に於て然り、街頭、車中に於ても亦然り。

第二に、私は代議士の型に私を鋳め込まうとする力と爭つて、代議士らしい代議士にならないと、覺悟する。

從來の多くの代議士諸君は、「俺は偉らいんだ」「俺は政治家だ」と、民衆の上に君臨した。あの高慢ちきな、あの王者的態度、唾棄すべきである。偉らそうな代議士顏、それが、何より嫌らひである。が、それは、彼等自身の不心得からのみ產み出されるものではない。社會が「代議士様」に仕立てるのだ。私が立候補する前には、私を、「例の」字附きで、淺原健三と呼び棄て、我々を「淺原一派」扱ひしてゐた新聞紙は、立候補すると「淺原君」と書き、當選すると「淺原氏」と書く。これが、社會の代議士をフンゾリ返らせる因である。

社會が如何に扱はうとも、私は、今までの、

裸一貫の淺原でありたい。諸君から、「健三」と呼ばれ、「健ちやん」と呼びかけられる、たゞの淺原健三でありたい。

さう取扱はれるために、私は一切の稱號を退け、一切の名譽職、又は榮譽を表象する一切のものを受けない。私が燕尾服に包まれる時がありとすれば、それは、私が死骸となつた時である。

第四に、私は、所謂政治家らしい、一切の小刀細工、權謀術數を弄しない。四百六十六人の代議士中、無產黨の議員僅かに八名。數できまる衆議院で、何の仕事が出來るものではない。今、我々が、院内で、何か、仕事らしい仕事をしようと思ふならば、それは我々の墮落の第一歩である。大衆は、たつた八名の代議士が、ブルジョア議員の間を泳ぎ廻つて、それで、勞働者に有利な法律が作られ、無產階級に都合のよい稅制が作られ得るものとは思つてゐない筈である。私は一切の小刀細工、政治家らしい懸引を退けて、たゞ眞直に純眞無垢の、生一本の勞働者としてブルジョア議員に突撃することのみを念とする。

總選擧の結果、我々がキャステング・ヴォートを握るが如き地位に置かれたことは、我々のために喜ばしいことではない。此の地位は我々にとつて危險極る地位である。ブルジョア政黨と惡因緣を結ぶ危機である。政友も民政も、我々が若しキャスティング・ヴォートを握るならば、我々をチヤホヤし、我々に秋波を送り、我々と妥協すべく各種の術策を弄するであらう。勿論、我々は、そんな甘手に乘るものではないが、その秋波、その妥協顏がたまらなく厭やである。

我々はブルジョア政黨から、眞向から彈壓の巨彈を浴びせかけられて、血みどろになつて抗爭することをこそ望め、斷じて、彼等の握手の手を求むるものではない。

キャスティング・ヴォートを利用して、ここに一と仕事しようなんて、ケチな根性を私は棄てる。此のヴォートを以て無產階級の利益を僅かでも伸張しようなどゝ思ふならば、無產政黨の百年を誤るものである。私はこのヴォートを無產階級の不信、彈劾のツブテとして、ブルジョア政黨に叩きつけたいと思ふ。

第五に、私は一切の妥協を排し、鬪爭兒として任期を一貫する覺悟である。ブルジョア政黨たる政友、民政との一切の妥協を排するのみでなく、實業同志會、革新俱樂部とも、どこまでも他人でありたい。所謂團體交涉權を獲得するためにさへも、妥協苟合はやらぬ。交涉團體の組織は、純然たる事務的のものであり、ブルジョア議會の作つた議事進行の便宜に作ふ慣行であるから、政治的團體でなく、從つて、實同、革新、中立と提携して交涉團體を組織しても、所謂妥協ではなく、政治的意義はないかもしれぬ。然し、單に事務上の便宜のためにさへも、私は彼等と聯契することを好まない。故に、私は先づ、斯る少數黨抑壓の爲めの制度慣行そのものを打破することに、努める。それが出來なかつたら、時に交涉團體を利用することがあるかもしれぬが、それは、飽くまでも、事務的の協力であつて、斷じて政治的協同接近ではない。それ

と同時に、我々はブルジョア政黨の議場かけ引きの間隙に乘じて、我等の發言の機會を獲得するに力むべきである。

終始一貫、鬪爭兒として立つとは云へ、私は暴力暴言によつて鬪爭するものではない。暴力暴言は反動的ブルジョア議員に行使させて置けばよい。暴力暴行によらず、術策を弄せず、私は、堂々と、眞正面から、あらゆる手段を以て、彼等に抗爭し、血みどろの鬪爭をなす覺悟である。

「鬪爭によつて解放へ」、一たゞ一と筋の鬪爭の路を」。これ私の信條である。

第六、私は選擧運動中、我々の政策に就いて諸君の贊同を求めた。これが、實行を誓つた。私は、無產階級の現實直近の政治的要求を現在の政治に實現するための積極的努力を怠るものではない。然し、今の我々の實力を以てしては、建設的に我々の政策を實現することは不可能である。若し、それを重要視して、僅かでも、一步でも進まうとするならば、ブルジョア議員と妥協の端を拓くものである。彼等との妥協によつて作られる如何なる法律も豫算も、それはマヤカシものである。一時の氣休めのための、無產階級の魔醉劑に過ぎない。無產大衆を殺すところの藉假頭に過ぎない。一時の氣休めのために、ニセ物、藉假頭を掴むよりも、寧ろ我々は餓死を選ぶべきである。

今、我々の努むべきことは、ブルジョア的政治勢力の無產階級に對する反動的攻勢、彈壓に對して、勇敢に抗爭することである。各種の無產階級の解放を抑壓する惡法令の撤廢、將來頻々として現はるべき彈壓法令を粉碎すべく、あらゆる手段を以て抗爭することである。

無產大衆を籠絡せんための改良主義的法令施設が、今後續出する傾向がある。我々は細心の注意を以て、彼等の欺瞞策を看破し、勇敢にこれを暴露しなければならぬ。あらゆる改良主義と鬪ふこと、これ我等最大の任務。と共に、院の內外に於けるブルジョア政治のカラクリを、今までよりも、詳細に、明白に、大衆の面前に暴露し得るために、[illegible]耳、寸隙を與へないことを心掛ける。

破壞的指導といふをやめよ。無產階級の政治を建設する前には、先づ、ブルジョア政治を、、すべきである。

第七。無產階級議員の活動の天地は、院內でなくて、寧ろ院外である。

院內の椅子にヘバリ附いて、區々たる懸引や討論に終始するならば、ブルジョア議員と何の選ぶところはない。我々の仕事場は、議場でなくて街頭である。

院內にかくれて街頭に現はるゝを忘れるならば、無產階級議員の任務は果されぬ。議會主義者は院內に蟄居して能事盡せりと思ふかもしれぬ。然し、私は、、、、、ではない。

我々の政治運動は大衆的、、、、政治運動であらねばならぬ。大衆的なるためには、大衆と共に街頭に居らねばならぬ。今までの、ブルジョア的政治運動に於てさへも、街頭の、院外の大衆運動によらないで、如何なる進步的改革も爲されたことは無い。無產階級の政

治運動に於ては殊に然り。

街頭不斷の日常的政治闘爭。これ我等最大の任務である。院內に於ける我々、私は、院外に於ける大衆的政治運動の一尖端に過ぎない。議員たる地位は、大衆的政治運動に於ける各無産政黨間の連絡係り、或は時に便宜上の前衞部隊たるべき地位に過ぎない。

街頭政治家！　煽動政治家！　ブルジョア共に勝手に惡罵させて置くがよい。

第八。私は私の任期の永かれとは祈らない。なるべく短かからんことを望む。私は解散を恐れてはならぬ。又、恐れもせぬ。大に歡迎する。

解散を回避するとき、私は墮落する。私は絶えず、解散への道を進んで、なるべく私の任期を短縮しようと力める。

選擧運動は我々貧乏人にとつては大負擔である。苦しい。然し、選擧運動を通じて、我々は一步前進することが出來る。殊に、今の、日本の政治狀勢に於て然りである。

總選擧毎に無産黨議員の數を增加し得るからではない。議員數の增減は問題ではない。それは議會主義者の願望であり得ても、私の關心事ではない。解散、又解散。これによつて、大衆を政治戰線に動員し得るからである。無産大衆の政治意識を一步前進せしめ得るからである。日本の政治運動を、より大衆化し得るからである。

第九。私は、一切の行きがかり、一切の感情を棄てゝ、無産政黨の共同戰線に就く。單に院內に於ける各無産政黨の協同のみではない。年來の宿題たる大衆的全國的單一政黨の完成に力める。

我が民衆黨は既往三年、地方的無産政黨として存在した。地方政黨の短所缺陷を意識しつゝ存續した。全國的無産勢力の分裂の時代には、地方的分裂も亦同樣に已むを得なかつた。地方政黨が全國的の分裂を攻擊する資格がないやうに、全國的と稱する現在の分裂政黨も地方政黨を論難する資格がなかつた。

我々は、地方的存在ではあつたが、大衆的に、階級的に民衆黨を大成し得たことを誇とする。今、新に機運の動きつゝある時、我が民衆黨の任務は、大衆的、階級的、全國的、單一政黨の完成への努力であらねばならぬ。

勞農黨は、日本無産運動の左翼的行動に關する名譽を荷ふと共に、宗派的分裂主義、概念的書記政治を勇敢に自己清算し、日勞黨は勞農黨の自己清算に協力すると共に一步前進しなければならぬ。勞農、日勞の合同は、全無産階級の直近目下の任務である。が、合同に怠慢であつてはならぬやうに、焦躁にして、過誤を犯してもならぬ。若し假すに時が必要であるならば、少くとも、合同を前提とする、半永久的、一般的共同戰線に就くことは、無條件に決行さるべきである。私はこれを望み、微力ながら、促進に力める。民衆黨が此の共同戰線に就き、合同に參ずるは、勿論のこと。

同時に、我々は、社會民衆黨へ、一步も、二步も接近しなければならぬ。そして、單一的、全國政黨への步みを、不斷に、執拗に續くべきである。左右兩翼の對立は、大衆を分

裂せしむる點で、永久に過誤である。

以上。甚だ粗末、平凡であつたが、私が今の所懷は、ほゞ言ひ盡したと思ふ。それに對して、諸君は、今、拍手、短言を以て贊意を表せられた。私は、諸君の贊同を得たと信じ、以上をモツトーとして、私の任務を果す。若し私の言明と今後の行動とに矛盾があり、或は之れを裏切るものがあつたならば、諸君が、無遠慮なる叱責、痛烈なる彈劾の鞭を加へられんことを冀ふものである。

〔附言〕以上の私の言明を、第二區の大衆諸君は拍手と歡聲を以て迎へてくれた。が、親切なる聽衆の或る者は、あとで「少し言ひ過ぎた」。「少し强過ぎる」と忠告してくれた。或は聽衆諸君の一部は、さう感じたかもしれぬ。此の實狀、これが、最初の普選に無產黨議員を第一位と第二位で、同一區から二人當選せしめた福岡縣第二區の有權者大衆の實狀である。



民衆の當面の要求に卽して

鈴木文治

一

われ〱無產黨議員は、今更言ふまでもなく、勤勞無產階級の代表として、その支持のもとに最初の普選議會へ送り出されたものである。從つてわれ〱の議院內外に於ける行動の規準はまた、勤勞民衆が當面要求しつつあるところのものによつて定まらざるを得ない。民衆の要求をはなれてわれ〱の行動は成り立たず、民衆の期待に背いて無產黨議員の存在の意義は皆無とならう。要するに、民衆の當面の要求に卽して進むこと、それがわれ〱の行動を決定する根本原則に相違ないのである。

しかし、問題はそれだけで濟むほどしかく簡單ではあり得ない。同じく民衆の要求といふも、何が眞の要求であり、何がさうでないかを判別するに當つて問題は複雜化する。さらにまた表面に現はれた雜多な要求を如何に消化し、整理するかによつて、問題は一層複雜になる。例へばひとしく無產黨と言ひながら、勞農黨と日勞黨と日農黨と社民黨とによつて、物の觀方に若干の開きがあり、從つて具體的な方法手段に於ても可成りの差違を生じてゐる、われ〱は決してかゝる狀態を以

て妥當なりと信ずるものではないか。既にかくなる上は、それに應じた適宜の手段が講ぜられなければならない。少くとも無產黨各派の間に、議會內に於て、民衆の當面の要求に卽した一致點を見出し、同時にこれに基いて敏速に行動するだけの、周到なる用意が必要であることは、何人といへども拒み得ない事實である。

だが、しかし、かゝる議會內の協同動作を直ちに黨そのものの行動にまで推し進めるとか、否とかの論は、いさゝか問題の範圍をはみ出てゐる觀がある。われ〳〵は無論さういふ議會內の提携が、合同の機運を醸成してゆくであらうといふ、希望に似た豫測をもあながち否定するものでは決してなく、むしろ期待するところの一人であるが、それだからと言つて無理矢理合同を強ふる樣な、希望と事實をごつちやにした議論にくみすることは絕對にできない。かういふと、ある論者は必ず「大衆は合同を要求してゐる」と反駁するだらう。なるほど一般民衆は、現在の如き無產黨の分派狀態を良しとせず、多少の疑ひを持つてゐることも事實である。むしろ、われ〳〵は「大衆が合同を要求してゐる」からこそ、議會內の提携を直ちに合同にまで無理矢理持つてゆかうといふ機械的な觀念論を一蹴せざるを得ないのである。民衆の要求してゐる合同は、眞實の、合同してまた再び分裂する樣なことのない、合同して却つて仕事が澁らなくなる樣なことのない、指導精神や政策が實際的に合致したところの、最も鞏固な合同であつて、アヤフヤな便宜主義的なものでは決してない筈である。民衆の要求してゐる此合同を實現せんとするならば、談必ずしも容易ではないと思ふ。

二

議會內に於ける無產黨議員の策戰として、大體二つの場合が考へられる。卽ち、議場を主としてわれ〳〵の主張の宣傳場又は既成政治の曝露場として利用し、實際政策の實現を從とするか、若くは、政策の可及的實現を主として、宣傳乃至曝露を從とするかである。

前者を取るか、後者を取るかによつて、われ〳〵の具體的行動には非常な差違を生ぜざるを得ないと信ずる。

前者、後者、果して何れを取るのが正しいか、いな民衆の要求に卽してゐるかは、容易に斷定し得ることではない。問題を複雜化せしむる因子としてさきに無產黨の分立を擧げたが、われ〳〵は更にもう一つの因子として、今回の普選が無產黨の議會へ乘り出した最初の一步であり、しかも、獲ち得た頭數は僅かに八名であつたことを考へざるを得ない。無論この八名は、我が國現今の政情から見て、實質的には成功だつたといへるが、それ〳〵二百以上の頭腦を擁する既成二大政黨と比較しては、少くとも議院內の勢力關係に於て、大人と小供の比を免れないであらう。この著しい勢力の不均衡は、無論將來は失はれるであらうが、現在に於ては厳然として常にわれ〳〵の前に橫たはる障害であつて、この障害に對して、如何に處し、如何に打ち克つてゆくかが、一層重大な問題の要點となつてくる

のである。

すなはち、議場を宣傳乃至暴露場として利用するか、政策の可及的な實現場として活用するか、の見解の分れも、恐らくはその一つの根據をこの點に置くであらう。しかしながら、議院内部に於ける種々の規則や習慣に關しては全然ヅブの素人であるわれ〳〵にとつて、議場内に於ける八名を基礎とした種々の策戰乃至驅引の可能性は、純然たる未知數として殘つてゐる。八名でも、旨くやれるかも知れないし、やれないかも知れないのである。從つてこの點に關する明確な斷定は目下のところ到底爲し得ないのであつて、われ〳〵はしばらくこれを問題の埒外に置くことにするの外はない。然らば、議會内に於ける策戰の二つの場合の分れるところは、結局次の一點に歸する。即ち、大雜把に言つて、前衛黨としての立場を取るか、大衆黨としての立場を取るかである。

いふ迄もなく、議場を宣傳乃至暴露場として利用するのが前衛黨としての態度であり、實際政策の可及的な實現場として活用するのが大衆黨としての態度である。これは同時に、世界各國に於ける共產黨と、社會民衆黨乃至勞働黨との差違でもある。スターリンの政黨論は前者を示し、マクドナルドのそれは後者を指示してゐる。ロシアのボルシエヴイキの採つた行動は明らかに前者であり、イギリスの勞働黨が辿りつゝある途は明らかに後者である。わが社會民衆黨は今更ら言ふ迄もなく、後者即ち大衆黨としての立場を取るのである。

我が國の現狀に於て、前者と後者とその何れが正しいか、何れがよく民衆の要求に即してゐるかは、結局民衆自身の判斷に俟つほかない。こゝでは單に、わが社會民衆黨が何故後者の立場を採るかを簡單に說明して置きたいと思ふ。

三

私は本誌前號に於て「普選第一の議會に何を要求するか」との問に對し、先づ勤勞無產者の生活安定を要求すべきだと答へておいた。といふ意味に於て、我々は其の大部分を占める「働くもの」の生活が、目下非常に安定を缺いて居り、この不安定の狀態から脫することは、全民衆の一致した最も強い當面の要求であるといふに外ならない。生活の安定を直接目的とした過重な負擔の除去と徹底した社會施設、生活解放の自主的手段として必要な團結權の確認等のことは、直ちに爲すべき焦眉の急務である。

即ち、結論はこゝから生み出される。民衆が當面要求してゐるもの、從つて民衆がわれわれ無產政黨の議員に期待してゐるところのものは、決して單なる理論の宣傳、既成政治の暴露ではない。議政壇場に於てたゞ徒らに咆哮し、怒號し、大向ふをうならせることではない。さういふことに浮身をやつしてゐる間に、既成政黨はどん〳〵旨い汁を吸ふだらう。一般民衆、少くともわれ〳〵を選出してくれた五十萬近くの民衆は、決してかういふことを期待してゐる筈はない。一つでもよい、いゝ、生活のうだつが上る樣な政策の實現を期待し

てゐるに違ひないのである。

われ〱は、いやしくも大衆黨である以上は、この點に周到な注意を拂はねばならない。勿論無產黨議員は僅かに八名の少數であつて、その故に、夫々二百以上の頭數を擁する既成二大政黨に對抗して何程の實果も收め得ないことは分り切つてゐる。これは既に一般民衆もよく知つて居り、あらかじめ承認してゐることである。この缺點を補ふために、院外に於ける民衆の大々的な支持、應援、鞭撻等のことも既に用意されてある。それだけに、われ〱院內に在るものの行動は、絕對に線香花火的であつては何にもならない。われわれが民衆の選ばれたる代表である限り、かゝる民衆運動の實質的効果へ、具體的收穫へ向つて突進しなければならない筈である。



社會民衆黨は、四個の無產政黨中に在つても、特に勤勞無產階級の政黨として生れ、今日に至つてゐる。議會政治を萬能であるとは信じないが、それを利用して政策の實現を圖るべきことは、常にかたく主張してゐる。勞働者農民のみならず、俸給生活者や小賣商人、自由職業者等をも含めた勤勞民衆が一丸となつて進む道は、民主主義獲得による議會政治の徹底的活用以外にはあり得ない。かういふ主張のもとに、わが社會民衆黨の四名は、民衆の代辯者として選ばれてゐる。

從つてわれ〱は今後飽くまでもこの立場で進まなければならない。もし一歩を過るならば、民衆の期待はわれ〱から離れるだらう。今回の總選擧で無產黨のかち得た票數が五十萬近くであつたといふものの、一千萬の全有權者數に比すれば僅かなものである。われ〱の力はなほ微弱であり、しかも多くの開拓の餘地を殘してゐる。この際、われ〱の態度は飽くまでも實質的であるべきである。わが社會民衆黨はあくまで大衆黨として、全勤勞無產階級の政黨として、民衆の當面の要求に卽して、その期待をはなれずに、進んでゆく積りである。(一二九八、三、五)

脈絡ある一個の戰列

龜井貫一郎

無產階級が如何なる歷史的任務を有するかといふ事は、今日に於てもはや論ずる迄も無いことであり、私も敢て之に特別の意見があるといふ譯でもありませんが、只從來私の柄

から戰線の後方に在て勞働教育運動、農民教育運動、政治教育運動に一生を捧げる積りでありましたところを、即ち經濟鬪爭でも、政治鬪爭でも、戰は戰ながらも、嚴格に言へば助鐵砲であり又あることを分としたのでありましたが、此度び福岡縣第二區の候補たる可き指令を受けまして、組織早々の社會民衆黨支部の力を以て如何にして眞に階級的なる戰を戰ひ得べきかといふ問題に就ては實に重大な責任を感じた次第でありました。ところが當落に別問題として二三の小問題の例外の他に此點に於て遺憾なき統制を期し得た點は心から欣快に思ひます。

第一に日勞黨、勞農黨、水平社同人の熱烈にして絕對的なる共同戰線の下に戰へたことであります。吾々は一個の彈丸となつて、筑豐炭山を轉戰致しました。合同問題の成行は如何にもあれ、吾々は既に心から合體してゐました。理論鬪爭に於ける各黨の立場は如何にもあれ、吾々は特權階級の專制を覆さんとする目前の戰に全力を擧げて結盟しました。

極めて大衆的な基礎の上にありますが、之に從て感せられたことは無產各黨はその理論的立場を別とし——此點に於ては充分內部鬪爭によつて清算さるべきものは清算さるべきでありますが——夫々の社會的任務を持つて居るのではないかといふことであります。各黨の存在の意味は一國支配階級の、、に對する其國の被壓迫階級一團としての抗爭の左右兩翼を形成するものではないかといふことであります。其國の運動・般として見たる場合に於ては、意識的たると無意識的たるとに論無く、此の二個の陣營は自ら脈絡ある一個の戰列を構成するものであり、其の戰鬪隊形は自ら且つ隨時に其時の又其國の支配階級又資本階級の攻勢又は戰術に相應して變化するものではなからうかといふことであります。尖銳分子たると大衆分子たること、前衛黨と中堅黨たることの意義は、極めて今回の戰に於て有意義に發揮せられたことと信じます之が斯の如き政治的鬪爭のみに然る可きものなりや否やは實踐と理論から規定さる可き一の問題と考へられます。

第二は大衆との階級的握手に近くましい[illegible]完全に遂行されたことでした。選擧區に於ける農民、坑夫、職工、小資商人、知識勞働者諸君からの激勵の手紙は柳行李を一杯にしました。往きには行李一つで行つた身が、歸りには人から今一つ行李を借りて歸らねばなりませんでした。持つて行つた選擧費にはかねて御熟意に願つて居る神奈川縣の農民諸君や研究會の勞働者諸君からの血の出るやうな金を含んで居ましたが、選擧區に於て又枚擧に堪へない小口の寄附を得ました。一坑夫の方は私に財布ごとあけて運動費を寄付して戴きました。數へて見れば三圓三十一錢ありました。一農民の方は私の金の工面が後れて推薦狀が發送されなかつた事情を知らずに催促がてらに牛を曳いて其村から程遠き若松の市の演說會場に私を訪ねられました。斯の如きことは枚擧に堪へぬ程であります。かかる激勵の下に私は只感激の裡に三旬を戰ひ續けました。北九州に澎湃たる民衆の潮は終に私とい

ふ木片を繼の上に打ち上げたのでした。理論的把握に基く階級的自覺、組織的、大衆的、自主的闘爭は必ずや近く北九州に展開さるることを確信せざるを得ません。

扨て民衆は今やその挺子を議會に入れました。闘爭は議會にも展開されます。だが然し議會内部に於ける闘爭のみによつて民衆が其の歷史的任務を遂行し得るとは今日考ふる人はないでありませう。從つて社會民衆黨の一員としての一般的任務は、大衆によりて其の公僕に指命せられたる今日と雖も昨日と何等異るところはないと考へます。無產階級が政治的進出を遂げつつある今日、無產政黨は曾つて蠟山教授が指摘せられたる如く今迄理論闘爭によつて掘り下げたるものの上に無產政黨の政策を建設して行く可きものであらうと思ひます。それは夢の如き設計圖ではない。議會といふ特定的な範圍で展開されるブルジヨア・イデオロギーとの戰を中心とする闘爭一般から實踐と共に建設されて行く可きものであります。「吾人は決してマルクシズムを完全だとも不可侵だとも思はない。寧ろ吾人はマルクシズムは此の科學の礎石を置いたもので、社會主義者は其の上にあらゆる方面に向つて建設を續けて行かなければならないものと心得て居る。（中略）即ち吾人はロシアの社會主義者が獨創的にマルクシズムを再建設して行くことを以て特別に必要なことであると信ずる。蓋しマルクス理論は單に一般的綱領を示して居るのであつて、其の細目は英國に於ては佛國に於けると異つた形に於て、佛國に於てはドイツに於けると異つた形に於て、ドイツに於てはロシアに於けると異つた形に於て適用されねばならないものであるからである。』（レーニン）

無論吾々は『人民の權利の伸長、民主主義の確得、プロレタリアートの政治的權力の增大』を實現しなければならない、だが然し勞農提携、土地問題、農業、、の本質等等に關して明確なる認識と基定をなすに非れば畢竟議會闘爭は余りに無意義なる機會主義に墮するであらう。議會闘爭は全部でない。だとしても一部と雖も吾人は完全に戰はねばならない。即ち科學的社會主義の礎石の上に獨創的に日本に於ける細目を決定して行かねばならない。從つて勿論直譯であつてはならない。生活と實踐のその中から萌え出づる要求を理論づけ、理論を實踐と生活によつて裏づけなから、此の大なる任務こそ之れより將に始まる可きものであると考へられます。

だが然し日本の既成政黨は余りに出鱈目です。政黨が政策によつて分れるものでなく、階級的なものであるとせられた今日ですら英國の保守黨、自由黨は其の立場の理論づけを行つて既成内部の對立關係を明白しようとしてゐます。昨年の秋に手に入れた英國保守黨議員四名の合著に係る一著に於てすら保守黨の立場をシンボリズム、エンピリシズム、コンテイニユイテイ、リアリズムに置いて自由主義と社會主義とに對立せしめんとして居ります。此度びの政戰に於いて聞いた既成政黨の方々の演說のどの一つにも斯の如き努力の

一片すら現はれて居りません。只、、と煽動だけでした。考へは違つても誠意があれば、吾々は戰ひながらも敵の武者振りを賞めても見度いやうな氣も持つたでせう。然し民政黨の或る部長の如きは雄辯で鳴る方でありながら勞働者の多い都市に行けば『民政黨は無産政黨と隣り同志だ』と言ひ、農村に入ると『無産政黨は過激派だ』と言はれて居りました。吾々は過激派でもいゝ、が斯の如き不誠意を民衆は決して感じないものでないといふことを、吾々は選擧の結果によつて知ることを得たのは眞に愉快に堪へません。政友會、民政黨には相互に何等の對立關係の無い特權階級政黨たることは論ずる迄もないことであるが、それにしても彼等の間に何等の對立關係を理論的に規定しようといふ努力すらない。民衆は此の點を既成政黨に愛想づかしして居ることを既成政黨は知らないのである。彼等にして斯の如くんば、我國無産階級の進出はロシアよりもドイツよりもイギリスよりも速であらう。だが彼等が本統に勉强を始めてせめて英國の保守黨や自由黨位に勞働問題でも企業管理問題でも、失業問題でも、社會保險問題でも、保健問題でも考へて來る迄に此の昂りつゝある民衆の浪が本統に無産階級解放の理論を把握し、階級的なる自覺を遂げなければ、その時にこそ無産政黨の第一の難關は來るでありませう。吾々は之に備へて戰ひ取つた戰線の結成に眞面目なる思慮を費さねばなりますまい。



臨時議會に對する私の態度

山本宣治

一

今度の總選擧によつて、普通選擧とは、勞農大衆の、、、、、、、、口と耳とを封じ、政府も野黨も、、をこしらへることに狂奔し、且つ勞農政黨のみのビラやポスターを制限し沒收しその候補者や運動員を檢束拘留することであると云ふことが、公然と立證された。普通選擧とは、人民の各階級及び層に對して公平に參政權を與へ、その權利を自由に行使せしめることによつて、議會内に各階級及び層の代表者を參加せしめて『國家』の政治を公然と議せしめることに、その眞實の意義があるのだと考へてゐた勞農大衆は、この事實の前に今更乍ら驚いてゐる。だが、こ

れはあへて驚くに足らぬ。今日、政權を握り人民を支配してゐるものは、人民の九割を占めてゐる勞農大衆ではなく、少數の資本家階級と地主との同盟であるからだ。有產者社會に於いては、何時の時代に於いても少數有產者が權力を握つてゐることには變りはないが、彼等は多くの場合、我々は資本家と地主の利益をのみ擁護してゐる者だとは云はず、且つさう見せずに、表面公平なつら構へをして『國民』の利益、『人民』の幸福を云々することによつて、彼等が持つ政治權力の階級性を、、、してゐるのである。だが、無產大衆がスバラシイ勢を以つて政治的鬪爭に進出して來た今度と云ふ今度こそは、最早や、從來の如く假面の影にかくれて、、、するだけでは自己階級の支配的地位の安全を保つことが出來なくなつたので、今日までの假面をばかなぐり捨てゝ、民衆の前に公然とその反動的正體を現したゞけのことである。

二

選擧干渉が猛烈に行はれた事實は過去に於いてもあるにはある。だが、比類極まりなき今度の大干渉は、今日以前のそれと本質的な差違を持つてゐる。今日以前の選擧干渉は、有產者階級內の一つの黨派の他の黨派に對する干渉壓迫であつて、政權と利權を廻る仲間爭ひに過ぎなかつた。然るに、今度の大干渉はさうではない。それは、勞農大衆の政治的擡頭を抑壓するがための資本家地主の、、、彈壓なのである。今次の總選擧に於いて彈壓が獨り勞農政黨——特に勞農黨と日勞黨とに集中された事實を見よ！　凡ゆる社會運動、勞働者運動が、平常の數倍に價する苛酷なる暴壓を以つて迎へられた事實を見よ！　これを有產者階級による無產者階級迫害の、、、彈壓と云はずして何ぞ！　總べての勞農大衆は、過去に於ける選擧干渉と、今次の總選擧に於ける大干渉とのかゝる本質的相違點をば、明確に自覺しなければならない。

かくして、勞農大衆の、を以つて購はれた『普選』は、資本家と地主の代理人によつて完全に蹂躙された。その結果、全投票數の九割六分までが、資本家と地主の政黨に、、されて仕舞つた。

人民の各階級及び層の獨立的判斷と自由なる行動によつて選擧が行はれてこそ、普選が生きるのであり、且つ議會は凡ゆる階級の代表者によつて構成し得られる。だが、比類なき反動的暴壓によつて、勞農大衆の獨立的判斷と言論・行動の自由とを束縛し、事實上勞農大衆のそれ自身としての選擧への參加を、、して出來上つた現議會は、それが如何に普選の形式を踏んでゐやうとも、又たとへ若干の勞農政黨の代議士が選出されてゐやうとも、それは依然として資本家地主の代表によつて獨占せられたる議會である。

私の臨時議會に臨む根本的見地は、現議會そのものに對する如上の見解に基いて決定される。從つて議會內での私の行動は、總べてこの見地に立つべきであると決意してゐる。

三

臨時議會が開催せられるや、民政黨は政友會內閣に對する彈劾案か不信任案を提出するらしい形勢である。現內閣を信任せざることは我々も同一である。しかし我々にとつて政友會內閣を信任しないと云ふことは、直ちに民政黨內閣を信任すると云ふ意味ではない。政友會も民政黨も、民衆にとつては同じ穴の貉である。內閣が、政友會から民政黨の手に移つたからと云つて、勞農大衆の政治的自由が確保されるわけではない。それは只、資本家と地主の無產大衆支配の執行人と道具立てが代ることを意味するに過ぎない。我々は、勞農大衆の政治的自由が確保するまで、凡ての有產者黨派の內閣には反對だ。

民政黨の不信任案乃至は彈劾案に對して、田中內閣は如何なる態度に出づるであらうか？若し臨時議會までに、醜惡なる、、政策によつてしても、尙且つ與黨の頭數を過半數にまで揃へることが出來なければ、或ひはおとなしく內閣を投げ出すかも知れない。或ひは又、自惚とお調子にのつて、議會を解散するかも知れない。

若し、かような形勢から萬一議會が解散されゝば我々無產者階級にとつては漁夫の利である。勿論我々は漁夫の利をのみ待つて寢て暮さうとするものではなく、そのために大いに戰はなければならない。制限選擧に等しい結果をもたらした現議會の解散には、我々は當然大賛成であるからである。そして思慮ある凡ての勞農大衆も解散を切實に要求してゐる。

だが民政黨は解散を極度に恐れてゐる。彼等が不信任案を提出するとしても、選擧干涉をやつた政府を否定するがためではなくして、利權のともなふ政權が欲しいからである。だから彼等は、臨時議會までに民政黨議員の頭數を過半數にまで揃へるか、乃至は民政黨へ賛成する議員團を與黨よりも多く得るかに成功すれば、そして政權をゆづり受けることが出來さへすれば、不信任案の提出なんか問題でなくなる。更に又、政府がどうでもからでも解散を賭してゞも爭ふと云へば、妥協の要望に出づるかも知れない。

だが、問題はこゝでも又、、だ。ところで面白いことは、政友會が始めから調和し得べからざる敵として露骨に對立してゐる無產派議員に對して、民政黨は色目をつかつてゐることである。この事は民政黨が勞農大衆の利害を代表してゐる黨派であると云ふ意味からではない。現議會に於ける與黨との勢力關係から割り出されたところの、前述せるが如き自黨の利益擁護の戰術なのである。彼等は云ふ、無產政黨は政友會內閣に反對であるから我黨と同一步調を取るであらう……と。冗談ではない！我々は政友會に反對すると共に君達にも反對なのであることは前述した通りである。そこで彼等は、勞農政黨議員の買收の手段を考へてゐるらしい。新聞紙は早くも議長問題で安部磯雄君が話題に上つてゐることを報導した。或はこつそりと、勞働省設立の相談なんかも彼等仲間のうちになされてゐるかも知れない。

我々無產黨派の議員は、しかし彼等のかゝ

る政策をコッピドクやつけなければならない。この事實こそ、利權を廻る彼等の醜悪政治の正體なのであつて、民衆を愚弄し、民衆を欺瞞するところの常套的手段であるからだ。無産黨議員の中から勞働大臣が出でも議長が振り當てられても、無産大衆の生活は斷じてよくならないのである。反對に、無産大衆の中に社會民主々義的イデオロギーを傳播し、無産大衆の眞實なる成長を阻害することに役立つであらう。

しかし乍ら我々は、無産大衆が今日ひしひしと要求して止まぬ政治的自由獲得の旗の下に、ブルジョアと地主との議會に於いて、ブルジョアと地主の代表の眞ッ只中で、何者にも拘束されることなき議會の演臺を占領することによつて、厚顔無智なるブルジョア黨派の假面をヒンムイて大衆に呼びかくるために、若し必要にして可能ならば、革新黨の議員は勿論、民政黨の有志議員を利用することを忘れてはならない。

しかしこれは、あくまでも、現議會は、總べて、、、、である資本家と地主との代表によつて構成せられてゐると云ふこと、正にこの事をば充分に認識しての上に於いてである。

四

臨時議會に於いて無産者黨派は如何なる要求を提出すべきか？失業保險法の要求、健康保險法改正の要求、耕作權確認の要求等々、無産大衆の要求は無限である。だが私の考へるところによれば、臨時議會に於ける無産黨派の議員の活動は、無産大衆の言論集會結社出版の自由、普選法の徹底的改正の要求を掲げることによつて、現内閣、現議會の不信任を突きつけることに集中されなければならないと信じてゐる。この事は、現議會の性質——民衆の政治的自由を極度に彈壓することによつて資本家と地主との代表で占領したところの、實際上制限議會に等しいと云ふ性質——に基いて決定され、而して今日民衆の眞の要求がこゝにあると信ずるからである。社會的政策とさへ云へば、健康保險法の如き欺瞞法を作り、稅制整理の如き民衆負擔の增大を計るブルジョア黨派とその政府だ。農村問題とさへ云へば、自作農創定維持や地租委讓の如き反動的意圖をふくむ計畫をする彼等だ。この彼等によつて占領された現議會に於いて何事か望まんやである。總べての要求は、民衆の政治的自由獲得闘爭の發展に應じて、民衆の力の結成に應じて、支配階級から戰ひ取り得るであらう。政治は力だ。そして民衆の力は闘爭の中からのみ發展する。議會内に於ける我々の活動も、總べてこの民衆の力を發展させるがための活動に集中され統一されなければならない。これが我々無産派議員に負はされた任務である。

政治的自由の要求を掲げて戰ふことに對しては、民衆黨の諸君も、日勞黨の諸君も賛成の筈だ。二月二十八日の大阪朝日に於いて、民衆黨の西尾君は、『言論集會結社の自由』を叫んでゐられる。『徹底普選の獲得』は日勞黨の從來からの要求だ。そして今日、無産派大

家も、各勞農政黨所屬の大衆も、今次の總選擧を經驗することによつて、こぞつて、政治的自由の要求を叫んでゐる。

かゝる客觀的條件の存在は、議會に席を占めた我々無產各派議員八名の協同動作の可能の基礎をなすものである。この條件を生かし、この條件によつて協同し、この條件を更に發展せしめること、このことが、今日分裂しつゝある各勞農政黨の大同團結を將來するであらう。最も共同し易い境遇に置かれてゐる我々議員團は、ブルジョアと地主の目の前で、最も見事に共同闘爭の威力を示さなければならない。

附記、こゝに書いた意見は、私個人の意見であつて、私の所屬する勞農黨の承認を經たものではない。從つて、黨本部の對議會策が決定されゝば、私の意見は修正さるゝこともあるかも知れぬ。

觀念的より現實的へ

西尾末廣



觀念的より、現實的へ

昨年の本誌二月號に於て私は『觀念的少數派運動より現實的大衆運動へ』の題下に、我が國社會運動の傾向に就て、大要次の樣に述べて置いたのであつた。

一、日本の勞働組合運動は、その準備時代(大正元年——七年)に於ては、指導者が、當時の社會事情と勞働者の自覺の程度を充分に考慮し、これに適應せる運動方針を採用した爲めに、順調なる發達を遂げ得た。

二、世界大戰爭の影響により、急激に增加し都市に集中した勞働者は、平和克復と共に、工場の外に無慈悲に投げ出された。この產業界、勞働界の急激なる變動は、必然的に活潑なる組合運動を起さしめ、大正八、九、十の三年間に二百〇八個の組合が簇生するの活況を呈した。がこれに伴つて起つたインテリゲンチヤの、無批判にして模倣的な觀念的思想運動の爲めに、引き摺り廻され、幾多の混亂を現出したこの飛躍時代(大正八年——十一年)の運動は、社會の實情の觀察を等閑にし、抽象的、概念的理論に囚れて居たため稍失敗であつた。

三、事實と一致しない理論は永く大衆の支持を受ける事は出來ない。現實を無視した運動はいつしか行き詰らざるを得ない。この行詰りを打開するために、大正十二年度總同盟

大會は『少數派的運動より大衆的運動へ』の闘時代的方向轉換の宣言を滿場一致で決議したのであつた。而して、この方向轉換の宣言を實際の行動に移すに當つて、觀念的な迷蒙を脫し切れなかつた評議會一派は總同盟より分離し、この二大勢力の對立は勞働農民黨をも分裂せしめ、ひいてこのドサクサ紛れに、日勞黨てふ中間派を結成なさしめたのであつた。この分裂に大く分裂といふ悲しむべき現象を呈したのは、吾が國の社會運動が、まだ觀念的な迷盲を十分に脫し切れず、換言せば既に現實的になり得た者と、未だ觀念的迷蒙を脫し切れない者との混亂期にあるからである。

私はこの時期、(大正十二年以後……)を、『觀念的より現實的へ』の時代とし、この傾向は尚今後も續くものであるが、この頑苦しくも悩ましき對立闘爭も、一部少數の理論家の理論闘爭に依つてゞは無く、現實に虐げられてゐる勞働階級の伸びあがらんとする、現實闘爭の經驗によつて漸次解決さるべきものである。之れを要するに、昭和時代の無產階級運動は、大正時代に殘された『觀念的より現實的へ』の事業を完成し、これに伴つて無產階級の統一が漸次實現されるであらう。と結んで置いたのであつた。

戰績を顧みて總清算をせよ

爾來一ヶ年余の悪戰苦闘によつて、吾が無產階級は何を經驗し得たであらうか。この經驗によつて如何程まで現實的になり得たであらうか。それは又同時に如何に戰線統一に向つて進展したであらうかと同異語である。

普通選擧に依る第一次の總選擧を終へた此の機會に於て、無產階級の戰士を以つて自ら任ずる者は過去を反省し、清算し、以つて尊き經驗を今後に生かさねばならぬ。此の意味に於て勞農黨並に日勞黨の諸君に特に此際猛省を促し度いのである。

日本勞働組合評議會は、その創立の宣言に於て『總同盟は既に崩壞した』と豪語してゐるが、その崩壞した筈の總同盟は、堅實に益益發展しつゝあるに較べて、評議會自身が反つて崩壞に瀕しつゝあるではないか、少くとも勞働組合としての評議會式戰術は全然失敗してゐるではないか。更らに評議會の指導下にある勞農黨の今回の政治闘爭の大失敗は、單に『官憲の壓迫』といふ逃口實によつて誤魔化し去るべきものではあるまい。自己の社會的認識並に戰術上に重大なる錯誤があるのではあるまいか。

日勞黨は勞農黨に對して、宗派的分裂主義の刻印をべた〱に押しつけてゐるが、自分自らは、總同盟と日本農民組合とを陰謀的に分裂せしめ、その破片の寄せ集めの上に基礎を据ゑたのではなかつたか。總同盟、社會民衆黨が余りに右傾したからとて分裂しながら、今回日農黨一派と合同を策するのは如何なる論理に基いての行動なるか。この終始一貫せぬ、その場、その場の政策をとる極めて曖昧な態度こそ、經濟闘爭に於ても、政治行動に於ても今日の如き不振を來した重大なる原因ではあるまいか。

我が社會民衆黨とその支持團體の全ては、

雇用、觀念的觀念的なインテリゲンチヤに非難されるにも拘らず勤勞大衆の信頼厚く、經濟鬪爭に於ても資本の攻勢の前によく堅壘を守り、堅實な發達を遂げつゝある。また、社會民衆黨も今回の政戰に於て、絕對的には兎も角も、相對的には相當の成功を收め得たのである。勞農黨が四十二名に二名、日勞黨が十七名に一名と較べて、十八名立候補して四名當選せしめた許りではなく、當選區が、關東。關西、九州と地域的にも、更らに人的關係に於ても、眞に無產政黨らしく、他黨に較べて僅かに成功してゐるのである。

この嚴として存する事實の前には、最早、勞農日勞の諸君と雖も、嘗て我等に投げつけた、『ダラ幹』『フワッショ』『非似無產政黨』『プチブルジョア黨』等の漫罵を繰り返す事は出來ないであらふ。然り彼等は、一ケ年間の實戰の經驗によつて、漸次その非を悟り最近に於ては吾人の立場に接近しつゝあるのである。即ち彼れ等も亦、現實鬪爭の經驗によつて『觀念的より現實的へ』と進化成長し來り、その爲めに、各無產黨間の對立鬪爭も緩和され、今回は院内クラブを組織するまでになつて來たのである。私はこの喜ばしい傾向を、も一層助長し、これを合同にまで發展せしめる爲めに、此の機會に於て、各無產政黨が、殊に勞農、日勞兩黨が、大膽に率直に誤れる過去の總淸算をなし、政略や小股掬ひを止めて、誠意を披瀝して努力されんことを切望するものである。

院内の行動は暴露政策か現實政策か

次に、吾等八人の無產黨議員は院内に於て如何に行動すべきであらうか、此の問題は、今や政治に關心を有する全ての者の興味の中心となつてゐるが、それ丈けに議員の責任や重大である。僅かの隙でもあらば、と豺狼の牙を研いてゐる既成政黨の間を切り抜けて、過大な期待を吾等に掛けて、拳を握り、片唾をのんで注視してゐる勤勞大衆の希望に如何にして添ふべきであらうか。

この一般戰略、戰術は、勿論黨の最高機關に於て決定さるべきものであつて、輕々しく意見を述べる事は出來ないが、巷間傳へらるる一二の說に就て私見を述べて見度いのである。

一、一切の既成政黨は我等の敵であるが故に、先づ政友內閣を打倒し、更らに後繼民政內閣にも直ちに不信任案をたゝきつけよ。

との說を爲す者があるが私は之れに對して反對である。斯かる論法は、雇主は我等の搾取者であるが故に何時でも、何回でもストライキを起せ。といふ單純素朴なる概念論と同樣にとるに足らざる愚論であつて、斯やうな論法で進むなどは無產政黨は、第二黨になるまでは政治的利益を獲得する事は出來ない事となるのである。

二、民政黨は政友會よりも進步的であるからこれを扶けて、民政黨によつて吾等の政策を實現せよ。

この考へ方は第一に政友と民政との差を過大に觀てゐる點に於て誤つて居り、固定的な

考へ方に於て更らにその誤りを大きくしてゐるのである。今日の既成政黨はその基礎を共にブルジョア階級に置いてゐるのであり。與に政權饑餓である。彼れ等は自黨の政權を維持する爲めには、時に相當思ひ切つた超階級的政策を實行し兼ねないのである。

それ故に私は、既成政黨打破の一本調子でのみ進むことに反對すると同時に政民兩黨に優劣、好惡の差を附して政策を決定せんとする態度にも贊成出來ないのである。

私は先づ第一に、政民兩黨と同等のレベルに置き、之れに絶對反對の立場に立ちながら而かもキャスチングボートに依りて、出來得る限り、勤勞大衆の政治的要求の貫徹に向つて積極的に猛進しなければならぬと考へるものである。換言せば勤勞大衆の要求を具體的に掲げてその實現に猛進し、民政觸るれば民政を斬り、政友觸るれば政友を斬る、といふ態度で進み度いと思ふものである。

單純素朴な暴露政策は、右の政策實現を根本目的として、これを補助する意味に於て、これと共に併用してこそ意義があるのであつて、單なる獨立した暴露政策は大衆の希望に添ふものでないと信ずるものである。

終りに一言附け加へて置き度い事は、無産政黨が何よりも先づ第一に爲さねばならぬ任務は、經濟鬪爭を自由に鬪ふために、勞働組合、小作人組合等の團結權獲得と。政治鬪爭を自由に且つ活潑に鬪ふために、普選法の改正と、言論、集會の自由獲得等である。而して、あらゆる機會に於て、如何に微細な問題にもせよ、苟しくも、勤勞大衆の利害に關する限り、勤勞大衆の力を力として奮鬪する覺悟である。

選擧演說會場に於ける。勤勞大衆のあの緊張した顏と、あの渾然一致した雰圍氣を想起し、責任のいよ〱益々重きを思ひつゝ擱筆する。

東京の宿にて三月七日



私の信念

河上丈太郎

當選直後の私の感じは當選の喜悦でもなく當選の快感でもなく只責任の重苦しい重大さであつた。笑ふよりも考へさせられてゐました。

丁度其時京大教授河上肇博士より一通の書簡を受取りました。此書簡は私が數多く受取つ

た書簡の中で最も貴いものでありました。私は私信を公にする非禮を省みず其全文を掲げて私の感激を示し度いのです。

拝啓大兄の御當選に心からの祝意を表します。

御發熱の由新聞紙上にて拝見、切に御自愛を祈りをります。

日勞黨からは大兄のみ御當選の事ですから如何にも責任が重大で今後御苦闘を要する場合が絶えずおありの事と存じその點から云へば御氣の毒に感ぜぬでもありませぬが、しかし、まことに意義ある犠牲で、大兄の御本望でもあろうと存じてをります。私は大兄が全無産階級のため常に全身の勇氣と絶對の忠實とを證明されんことを切にく祈り居ります。謹で祝意を述べ且つ切に今後の御奮闘を祈ります。

敬具

二月二十四日　　河上肇

河上丈太郎様　侍史

私は同博士には一度しか御面會しないにも拘らずかゝる書簡を御寄せ下さるのは、私を激勵せられた事と信じて博士の云はるゝ全無産階級のため、全身の勇氣と絶對の忠實とを自己の信念として戰つて行き度いと思ふのであります。我日本勞農黨としては三月二日の擴大中央委員會に於て院内に於ける活動として左の如く定められた。

一　議員の職分

(イ)歳費は原則として其半額を黨に納付すべきものとす。

(ロ)議員はパスを利用し組織宣傳部の尖頭に立つて全國的に活動すべきものとす。

二　院内に於ける活動

(イ)無産政黨の議員團を組織すべきこと。

(ロ)在來の慣習たる交渉團體の悪慣習を打破すべきこと。

(ハ)一般豫算案に對しては豫算返上論を以て臨むべきこと。

(ニ)田中反動内閣不信任案には階級的立場を明示して賛成すべき事。

(ホ)左の法律案を提出する事によつて我日勞黨の運動の趣旨を院内に反映せしむる事

A　徹底普通選擧法案
B　完全勞働組合法案
C　完全小作法案
D　失業保險法案
E　健康保險法案
F　資本課税案

以上

私の院内に於ける活動も黨の此決議のもとに自己の微力を傾倒して最善の努力を盡し度いと希ふものであります。

上田敏全集

豫告 豫約募集

上田敏全集刊行者の言葉

久しく待たれたものは竟に燦然たる光芒を放ちつつ現前した。凡そ我邦現代の文運の盛大を語るもの、故柳村上田敏博士の名を逸することの不可能なるは藝苑に遊ぶほどのものは黄口の乳臭兒も尚且つこれを認める。博士は實に一世に先つ篤實なる學人であつたと同時に、學藝を謂ふ所の象牙塔裡の幽閉から解放しこれを街頭に立たしめ以て萬人をして直ちにこれと握手し得るに與つて力ある勇敢なる戰士であつた。即ちその生涯を擧げて「人生のための藝術」の博大なる理解者、指導者、鞭韃者として終始一貫された。博士一たび易簀さるるや藝苑頓に寂寥の感があつたことは吾人の未だ記憶に新なるところ。博士亡き後藝苑またこの種强大なる迫力の所有たる指導人、温藉博雅の情緒人を缺いた。蓋し故博士は學藝の凡ゆる分科に渉りての徹底せる理解者であり、これが大綜合への倦むなき示唆者であつたが故である。その痛惜すべき短生涯に遺されたる遺作十指を屈してなほ足らず、洵、「藝は永く生は短し」の言の如くいづれも學藝萬般に渉つての指導標たらざるは無き金

玉の文字のみである。而もこれを市に覓むるも極ね得易からぬ希覯の書に屬する。今や、故博士十三回の年忌を機として先輩知友の示教を仰いで、故人が自ら親しくその呼吸と血液を灑ぎ殘した後進遺弟の人々によつて、筐底深く藏して未だ刊刻に附せられたること無き多くの貴重至珍の未完、未定の遺稿類と、散逸し盡して求め得易からぬ夥しき作品を、多大の犧牲と努力を拂つて蒐集されたるもの全八卷に集大成さる。これ實に時劫を超えて聳立する學藝の一大金字塔に非らずして何ぞ。本全集は夙に出づべくして未だ出でざりしもの、而してこの出版の重任を本社に托されたるは本社の欣幸とするところである。我社は採算の如きを度外して優れたる内容と相俟ち、外裝また善美を盡して柳村先生の支持者に贈ることを誓言する。

編輯顧問

上田萬年　桑木嚴翼
佐々木信綱　新村出
永井荷風　平田禿木
與謝野寛

編輯委員

石田憲次　乙骨三郎
小牧健夫　吹田順助
竹友藻風　茅野蕭々
富田砕花　成瀬無極
日夏耿之介　山内義雄

裝幀

藤島武二

（内容要目次頁にあり）

上田敏全集（全八卷）
內容要目

第一卷　詩集
『海潮音』
『牧羊神』
その他の詩篇

第二卷　散文詩、小品、小說及戲曲
ダンテ『神曲』（未定稿）
『みをつくし』
『心』
『渦卷』
その他アラルコン、ステイヴンスン、ゾレアム、ストリントベリイ、ゴオルスウオズイ、ゴオルキイ、モウパツサン、クロオデル、グウルモン、ベルトラン等の作品十數篇。

第三卷　評傳及評論
『耶蘇』
『詩聖ダンテ』
『文藝論集』（民俗傳說に關するものを除く）

第四卷　評論
『最近海外文學』
『最近海外文學續編』
『文藝講話』
『思想問題』
『獨語と對話』

第五卷　評論
『十九世紀文藝史』
『現代の藝術』
その他たとへば「藝苑」「藝文」「萬年艸」等に載錄されたる諸評論、タルドの「穴居の民」、メリデイスの「喜劇論」、シイモンズの「イプセン論」等數十篇。

第六卷　研究、考證及校註
民俗傳說に關するもの
伊曾保物語考
菩薩物語由來
七賢人物語考
仙女の說
サロメ
袈裟傳說
公教史談
『聖教日課』
『小唄』
その他

第七卷　講義及書史
英文學史（英文）
——Notes on the History of English Literature
沙翁書史
沙翁戲曲史
その他

第八卷　雜篇
講演及談話筆記數十項
解說、序、跋及書簡
學生時代作品その他
傳記及著作年譜

五月二十日締切の豫定にて一册四圓

發行所　**改造社**
振替東京八四〇二番

猪俣津南雄著

帝國主義研究

（四六判 並製） 定價壹圓 送料十八錢

最新刊

本著收むる處の帝國主義理論は、既成帝國主義理論の單なる模倣的記述ではない。巍然たるマルキシズムの觀點に立ち、獨創的の見解を吐露し、具體にして的確、平明にして緻密なる著者の論法は、帝國主義理論に關する幾多群盲者流の謬論を一蹴して、不拔たる統一的體系の下にその科學的基礎を把握し得た。見よ！ 資本主義現段階の分析究明に於て、その堂々たる筆陣は天下無敵である。今こそ日本無産階級運動の新方向を闡明する指導原理は、灼燿として高く輝く。左翼論壇の一曉將たる著者の明哲なる論理が、一切の被壓迫民衆の内部に如何に執拗に浸潤し、透徹し行くかを思ふべきである。

（内容一斑）

資本主義崩壞の理論的根據。　帝國主義の必然性。
資本主義日本の帝國主義。　日本帝國主義の新段階の問題。
泥沼に陷沒した「プチ・帝國主義」者　同　上（續稿）。

發兌　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

諷刺戯作

著作先生『夢中夢』

尾崎紅葉 遺稿



午後一時

「御免下さいまし御免下さいまし
「ハイ……コレ墨や……オ、湯に行つたツけナ……
主人の午琴のこりおし氣に机をはなれかきかけの文章を呪文のやうに唱へノソ〳〵立て玄關の障子をサラリと引あくればこはそもいかにわかき女の五六十人一隊をくんで格子ぎはまで犇と責よせたりこれや錦帶羅裙の唐樣ならで孫武のために隊長をうしなひたる呉宮の敗卒かと見れば身に寸鐵もなくたゞおそろしき眉の斧殺氣ふくむ目ばかり淺黃紫黒さま〴〵のお高僧頭巾黒縮緬の羽織あるは綸子の洋服木履駒下駄ふみならしワヤ〳〵とひしめく〳〵を頭にたつたる十七八の美婦人靜かに〳〵とをししづめわざと頭巾をいたゞかずシヲールの上へ投げかけたるは禮を爲さん爲なるべし
「卒爾ながら戯作堂とおつしやるはこなたでございますか
「ハイ戯作堂は手前で
「ソンナラ御主人はあなたで居らつしやいますか

「ハイ職作堂主人午琴は私で
「アノ午琴先生はあなたで
「いかにもエヘン
と答ふるとひとしく一隊の女軍は鯨波をあげ格子きはまでひし〳〵とをしよせ柳眉をさかだて朱脣をいがめおのれ讐敵とよばゝりリウエンジと叫ぶ午琴は更に其意を不得かの大將に打むかひ
「事のよしはつばらにしらねど世間への手前もありますチトしづかに願ひます
「イエ靜かには出來ません
「エ
「サア皆さんと
相岡の一言それと女隊の銘々はわれ先にと格子をくゞり矢庭に入九人午琴の手をとり胸倉とり土間下へ引づりおとせば また五六人折かさなりて身動させず鼻をつまみ、内股をつねる頰へくひつき洋書の角で頭をコツ〳〵〳〵
「アレ山田さんソリヤ私の手よアイタ………
「オヤ失敬……片岡さんモツトひどくおぶちなさいヨ………シツペンがよくつてよ醬油をおつけなさいヨ
「市川さんアレ午琴とキツスしてヨオホヽヽヽアレイター〳〵
「アラキツスぢやないのヨ
「イタ〳〵ヒーヒーイター
「可愛相になきますヨドウしたの 丸山さんが頰へたへ喰へついたヨ……きびがいゝヨ
「ワたしやサツキキツスのやうに見へたのは脣へくひついてふりまはしたの午琴の口はくさいことよ
「イタ〳〵……無念々々〳〵
「アラ大山さんが股をつめてオヤわたしもつめろう
「引かくのがよいのヨ
「大川さんどうしてアラ髭の毛をぬいたの
大將と見えし婦人が目くばせをすれば傍にひかへし洋裝の少女三オンス入の瓶を懷中より取出しキイ〳〵聲をふりたて
「皆さんあぶなふございますヨサアすこしおどきなさい
折重りて折檻せし女隊はサツと引くと見へしが少女は手早く瓶をかざし午琴の頭から液藥をサツとふりかける
「キヤツ…アイタ……ヒ――……何奴だおのれ……
と立上らんと身をおこせばソレと一同格子をけやぶり算を亂して逃行くを追はんとすれど頭のいたみに目を眩まし ヨロめきながらあなたをねめ

「エ、無念……
 と言ひながら面部へ流れる鮮血に手をふれ
「アッと驚き倒るゝ拍子に小瓶のかけで掌をきりこみ
「アッ
 折からいきせき女房のお錢湯屋から戻る門の口夫の面見て仰天喫驚
「ヤア顔は……あなた
「アーッアーッ醫者……醫者を……よべ
「マアどうも皮がむけて燒どですか……大變なマアどふしよう
「ハーいごけねへ……苦しい苦しい……醫者を……醫者苦しい
 妻は魂身に添はず石鹸の箱を懐に近處の醫者へ走りゆく

××××××

「御免下さい
「ハイ
 と女房の氣轉くたつを午琴はおしとゞめ
「コレ迂濶にでるな……御免下さいは注意せんといけんまた硫酸の濃
佛だゾ
「ハイ……ソンナラこゝから返事をいたしましやう
「ソレがいゝ〱
「御免下さい〱
「ソレ〱硫酸の瓶だ
「どなたで御ざいます
「先生は御在宅で御座いますか萬年筆屋で御ざいます
「オ、書店の主人だらう大丈夫〱こちらへと申しない
 女房はやがて出むかへ
「オヤよくいらしやい……サアこちらへ在宅です
 書肆の主人は午琴の書齋へ通れば綿布の夜具蒲團の中から赤むけの
顔を出して片いきでゐる様子
「コリヤどうなさいました……お顔はまア……サテこそ
「エ……何がサテコソで御座います
「エ、まことにとんでもない事でしかしお命に別條がござりませんで結構
な事でございます……流石は先生の筆力いや眞に大したもので小說冥
加にかなつた事で實は先生の今度のお怪我はお目出たいので……御愁
傷申すよりもむしろ御祝ひ申します
「抑々師が失火を賀した文は見たが人の怪我をいはふとはまだ聞かな
い何か御主人ふかい意味でもありますかな
「先生こまりますぜしらをきつて……サスガは大家……京傳このかた
の珍事ですナ實に御目でたう

「マアあなたどふした事でございませう本屋さん平常は平常けふはけふいつも〳〵御戯言ばつかりおつしやちやこまりますヨ洒落も時によりますヨ

「コレはしたり、奥さんまで御一處にしらをきつて困りますナ

「私の方こそこまりますよ

折から表の方に郵便——

女房はたつて端書を持つてくるを午琴先生とりあげて

「ム……謹賀錦繍佳慶……二白不日御怪我弘の祝筵に侍し萬々御祝申可く候時候から御養生專一に存じ奉り候　梅のや初音拜……

……

「コリヤ何んだ

「マアけふはどふしたつて云ふでせうきつねにでもつまゝれはしませんか

「ハこれおやあなた方は全く御存んじなんですか

「何事ですか

「マアどふしたんでせう

「先生世情のあらを穿鑿したり、人物を批評して心の奥まで見通す御眼力がありながら御自分の事は少し不穿鑿過ますナ

「何事ですか

「マアこれを御らんなさい

と懐をかいさぐりてとりいだす一葉の讀賣新聞日附は昨日雑報の部に朱でまるをつけてある見出しを見れば

○古今二人の小説家　其むかし山東庵京傳が五郎強勢談といふ艸冊子を著し夜鷹の内幕を發きければ夜發は大にいかりある夜京傳のかへりを待うけからき目見せければ京傳大におそれ人をもつて夜發にわび金五兩の散財にて事濟みたりとかそれこれと一對の好話この滑稽嘲誠を以て才筆の譽たかき戯作堂午琴氏が近著にして通三丁目萬巻書屋出板の近世娘鑑は大に女書生の内幕を發き花顔紅を潮せしむるの一大快書なる事は已に具眼の知る處なり聞く處に依れば昨日午後九時いづれの女生徒ともしらず四五十人一隊をなし牛込なる戯作堂を攻襲して午琴氏を散々に打擲しかねて西洋婦女のダイナマイトときゝ及ぶ硫酸瓶をもつて同氏の頭上を打据へ面部腹部等まで負傷せしめて一同立さりたり折よく妻君歸り合せ早速隣家を呼び療治をうけしといふかなりなる重傷なれども午琴氏は更にやめるの色なく訪問し友だちに全快次第怪我弘めの祝宴を張るよし物がたられしといふ

「ヤアもう新聞へ出たかヱお雪

「ソんなら女生徒はあだをしにきたのでございますか

——(著作先生「参中歌」)——

「ムムそれとは夢想せんだつた……ハアさうか御主人早速に御見舞イ
ヤ御飛ひ下すつて有がたうぞんじます
「イヤ實に結構な事で
「[illegible]どうだ昨日はおまへなんといつた生まれもつかない片輪となつた
……愛想のつきた顔だと申してぢやないか
「でもあなた
「イヤサ申したでないか其時おれが何んと申した
「これも不運だ天災だとおもつてかならず見捨てくれるナ……
「叱何を馬鹿をいふ……おまへも著作家の妻……世間の事はすこ
しは心得ておらう獨逸なぞでは面上に瘡のあとの多いのが好男子じや
瘡のない男は玉に瑕のあるのだといつたらおまへはなんといつた
「瘡こんの多いのがられ口がよければきられ與三郎なぞはデル　シオ
ン　マンだなぞとひやかしておれのきづは半面すきまなしでまるで西
班牙の地圖を下げたやうだなぞと嘲弄して今さら其一言がはづかしか
らう
「ソリヤあなた原因がこうとわかりやあんなにも申す筈ではございま
せんけれどあのときあなたにこんな恨をうける覺へでも御座いますか
と申したら別に心あたりはないがマア戀の恨み位があたらずといへど
も不遠だなぞと人に看病をさせながらおのろけなさるからそれで私
も
「イヤ其いひわけはくらい／＼業平のやうな美男子でもおれの前には
比較が出きぬこの瘡は黄金の看板同様だロードの爵をもらつた著作家
も今さら羨やむに足りんナア御主人さうぢやありませんか道にさうだ
……女房持へ……
「とんだ松王ですナハ、、、、
三人「ハ、、、、オホ、、、、
「御主人一盃つけやうマアゆつくりしたまひ
「いつもの處にしますか
「エ、祝盃だ……西洋料理がいゝ……御主人はビーフステーキがきら
いム、、、よろしい早くよ
女房もいそ／＼苦樂を共にする夫の喜び　これがうれしうなふこなん
とせう黄道吉日の高砂の夜宴のうれしさもかへがたなふ諸しを出いて
から亭主のきづが赤むけの顔がかへつて紅瑪瑙のやうに見へて紅は糊
神滿足の義あり一層愉快につけやうか指輪につけやうかどや一盃つけ
やうと亭主の仰せ機嫌損じて離縁されては覆水盆にかへらぬ無縁の幽
靈と勝手の口より走りゆく
「ア、様子がしれて何が渺くなりました……御主人早速に眼の毒な
してもようござんせ

「左様さ……充分ですナ……どうも大した損ですネいたみませうしかしまア飛んだ災難でございましたネ定めて御驚きでございましたらう

「イヤ今お話し申すと一場の話柄ですが實際は驚きましたヨソレ格別のわぶれていませうナニシロ四五十人の少女が雲霞の如く〳〵ワッとせめかけたといふものだからこれでも日頃腕自慢で眞楊流の一手位は心得ている男だがいざ鎌倉となると父の誹を讀んだばかりの兵家は實際家には閉口々々

「たとへ何百人きたつてたかが娘子束髪を手へからめて細首の大根引でも

「安ものの雛ぢやなし歪たれなきやシヤモさへしまるもんじやない……しかしおかしかつたのはきのふ朝の事サ墨が十間へいつて見たらたゝきの處へヘヤピンやら花簪やら婦人矯助の寫眞毛糸の頭巾なんぞ算を亂して落ちていたのはまるで戰場といふ趣サ往々鬼哭人陰　則聞……アの時は僕もヒー――泣いたよ

兩人「ハ、、、、

裏の方に雪駄の音格子の外から呼吸ぎれの調子高

「旦那旦那

「誰だ文吉か……何の用だ

「娘鑑が七百部……蔵にあり丈たつたいま出てしまひ……しまひまして……注文……が大變……大變ありまアす直に再版にとりかゝりませんといけませんテ…番頭さんが旦那様に直に……ア、苦しい……私はこれから支店の方へ參ります……旦那直に

評判の二人は言句も不出万に見あはす顔とかほ背は片頬に笑をふくめば午琴はわらつても皮がつればイイタイハ、、、イタイハ、、、

午後二時

通三町目萬卷書屋の店頭は人の山人の波わきかへる混雜鉾を嚙へで番頭の板助常夜燈の下禿をまたしてといふ姿にて注文書をよみながら

「三百部かへ……いけない百部に負けて下さい、こゝに六百部きやないのだから

雜闘する人の頭から頭丈わり出し

「ソレジヤ君困らアネ……平常君との交際に免じて其處をひとつ……是非ネ周旋して

「其りや出來る事なら君の事だから

店頭の人數をわり巡査一名

「オイ〳〵どうしたのか……往來がふさがるぢやないかエ、……鐵道馬車の邪魔になる

「ヘイ……恐入ります……薩に困るナ……オイ充棟閣の使ひ車を引張てソンナ處にマゴ〳〵していちや困るよ十三堂さんチット催促して下さい……困るナ
「板助さんどうしたんだオイ板助さん早く百部よこしてくれ
「アイヨ今上るよ……教造ヤ……製本屋へ早くいつて萬公どふしたのだ活版やは
「アイ御免ヨ〳〵外のトンガラガンとどんがらがんが違ふんだ御免ヨ〳〵利七さんすこし御めん
一製本が出來たのか
「あたりきしりきた人力引だおめへの處へやるものが御免ヨ御免ヨ〳〵今年や本屋のあたり年ドンガラガン
と小僧の教造は娘鑑を二百部ほど包にして背負ひながら絹のハンケチで額ぎわの汗をふき〳〵閾をまたがんとする後より四五人の男が包に手をかけ
一板助さんこの方はわたしらが約束だよ
一首がしまるよ〳〵アイテ、、、
板「そんな事をしずと待つて下さい
「さつきから三時間立つゞけだい柳なら今ごろ芽をふいてらアどふでもこれはもらふや充棟閣が百部に甲子堂が百部持つてゆくよ
「これサいけない〳〵今すこし待つた[illegible]……刷込どうしたまだ表紙はできねへのか……ナンデー泣つらをして……サウ押しちやいけません……いけません親さんけふはいけないあしたきておくれ……どうしたんだい
傳馬町の横町へ來ると春陽堂の番頭と絲竹堂の小僧が製本をよこせ〳〵つていふから……こりや外の注文だつていつたら二人掛りで顔をぶちやがつて包物のさらつていきアがつた
「チョツ手前が間抜だからヨ……せうがたへナ……もう一度製本屋へいつてこい……車のつてこい……いきはとられるものか一走りかけていつてこい……還り丈のるのだ贅澤なことをいふな

××××××

南傳馬町の横町から荷車に娘鑑の印刷したまゝ二三千部つんで本屋の丁稚萬助前にたち二人の車力がおしてくる
「ウンサカ「ヱンサカ
待構へて居た七八人の男わや〳〵と車端に詰より一人の男は[illegible]に手をかけ
「この車まつた〳〵……若衆すこし待つてくれ
一萬助さん……コレ萬助さんすこしまちねへ

萬「いけないヨ……遅くならアね……まだ製本しないのだヨ

「製本しないの結構

「早く引ておくれヨ車やさん

「萬助さんそんな意氣のわりい事をいゝなさんな

といひながら印刷物にかけてある風呂敷つゝみを取除けんと手をかければ萬助水洟すゝりあげておこり出し

「いゝかげんにおしな……車さん引ておくれヨ……ヤアイ——とけど〳〵……この車がとめられるならとめて見ろ

「銀さん一厘やつゝけちまをふ

「よからう

と四五人印刷物をとりにかゝる車力の猿臂猶豫せず鐵拳をふりかざして一人の男の肩先を二ツ三ツつゞけ打

「アイテ……何をしやがる

「ヤイこいつら亂暴をしやがるな……萬助どん交番へ……ヤイこいつら

「ソレ逃ろ〳〵……完全堂さんソレ矢立が落ちるヤ向ふから巡査が來た

殿作堂牛琴先生は横町の角に茫然と佇みこの有様を一部始終見めてホク〳〵と獨り笑み

「有難いな……寵に名譽だ……印刷したばかりのを持つていつてどふするつもりだ……オヤ〳〵巡査が來た萬助とかいふ小僧め青い顏をしてゐるオヤ〳〵むかふから巡査が來たゾ道の兩側へ五六間置にならんだハテナ、、の御通りかしらん…………

「コリヤ〳〵其處に居つてはならん……邪魔になる……少し側の方へ

「少々伺ひます……今日は何處の方へ、、、、、になります

「ウ、非常な僥倖チヤテ……古今無二な事だ

「ヘ、御通り筋はこれからどの方角で

「萬巻書屋までチヤ……モウくる〳〵

「ヘ、モウ、、が見へますかな……騎兵の馬の音がしますか馬車が來りますか

●一輛の黒塗馬車金泊に、の御紋つき二頭の鹿毛に口あはかませて威裝の御者意氣揚々

「ヘエイ〳〵

牛琴は何人が先驅やらんと恐る〳〵窓の内をうかゞへば十八九の令孃束髮に雲を鉄からしうつくしくも冠子をいたゞきたる洋裝の御いでたち頗る美人に御座せども威風凛々として愛敬なく車の過る折に不思見合す顏と牛琴先生が金牌つきの顏を見そなはしいやしみのわらひを帶びると見しが煙雲過眼の御面ざし汽車にのつて花島を通るやうな心

地して桃やら櫻やら更にこれとも合點ゆかず何處やら見參らせしかど
もあり、、、の馬車に乗りたまふほどの大宮人知人にあるはづはたし
としばらく思案の胸の中何かはしらずヤアとさけべば傍の巡査は一
尺ばかり飛しさり佩刀のツカに手をかけ
「いかゞいたした………コリヤ
「サテは今のは……硫酸……瓶だ〳〵……ア御免下さい〳〵だ……ソ
ウと知つたらおのれピストルでたつた一發
「コリヤピストルをいかゞいたした…
「チエー無念
といひながら懐中より鞘拔き鏡とり出しつく〴〵と顔打ながめ
「一文字屋が百兩にかはないだくづだ……思へば……
と餘念なみだの恨みなき牛琴車の跡を見送りて歯がみをなして手にも
つ鏡地上にハたと投つくれば犬の鼻づらへコ チリ
「ウワ……ン
またもやあなたは人波うち數名の巡査は劍をならして奔走する牛琴
もわれにかへりて人數をかきのけ
「モウお通りですか……あなた帽子をおとりなさい
「ベラモウメ、、さまのお通りじやあるめへし
「へー、、の御通りじやないのですか

「あたりめへヨ[illegible]さまの御通りだ
誰も了らず人の山に[illegible]つて五尺幅の道を[illegible]中に印刷ものをつ
み載せて第一の車の先驅するは小僧の發賣部二に[illegible]部三に[illegible]の
汗は地に滴たり砂の上をコロリ〳〵ヘンサ エンヤラ ホイトコ、
ソコダ ウ、トコダ、
見物にまじる書生體の男つれにむかひ
「非常たもんだノー……巡査の警固とはどふじやらう
「實に未曾有た事だ何で巡査などをつけるのかナたれも娘鑑にダイナ
マイトを打かける奴もなからふ
「ハ、、、、、勿論ソンナ事ハナイガ……印刷したまゝのをも
つてかへる途中で諸方の書肆が要撃して奪ひ去るものだから本店では
大困却じやさうじや……店前へ注文するものが山の如くつめかけ
て催促する……製本は間に合んよつて印刷したまゝ寄越くさうだ
それでも需用が多いから注文した支部數をよこさんさうじやソコデみ
な途中で奪ひとるさうじや今朝もこゝで其騒動があつたよ
「非常じやねへ……牛琴は硫酸をぶつかけられたさうだの
「オ、諸新聞に出とる……名誉な事だ
「オ、金公見やお通りだ
「御祭りの……いゝ手古舞を見たぜ

「ウ、新橋のか……新橋なら心當りがあるんだチョイツ人相書をいつて見や
「スグ本氣になりやがらア
「ウソか……ナンのつまらねへ
「娘義太夫さまの御通りだといふぢやねへか……巡査がいるだけで お通りらしくも御祭りらしくもねへじやねへか
「甚太がこの頃いそがしがつてる本だナ……い丶手間になるつテ
「活板のか………三日ね丶へといつてたつけ……日に三圓だとヨ
ソレヂ蕎麥が出る酒が出る………まだ手がまはらねへトヨ
「どこの活板屋もあの本ばかりださうだ……職人がたりねへのでさがしているさうだ
「コンナ時にや活板屋になりてへな……寺古屋の千代松見たやうで手からつらから眞黒にして色氣のねへ風體だがサウも ふかるならわるくねへナ
「製本屋も大して忙しさうだ職人がなし一日一夜に十本づ丶針をつかふさうだ方々でさうだから針の相場が上りつたの方々 仕立屋が店をしめて製本やへ通ふとヨ……おらん隣の御金坊ノウ
「ウ丶アリヤ製本の内職をしているじやねへか
「サウ ヨアイツナンザアこの頃本屋へとまりきりでやつてらア………手に針を通さなきやい丶かと心配でならねへ
「此頃マチをはる職人が大層拂底だといふのはみんな製本の方へ轉がへしたんださうだ豪せいな景氣だな……其草さう紙をこしらへた奴はなんていふ奴だ學者でもな豪勢なもんだ……儲けたらうな畜生め
……何處の奴だ………い丶男か
「牛込邊の奴だそうだ………男はよくねへト高島屋の澤三郎といふ顔だ相だ………ソレ此間の新富でした
「ウ丶硝石精にて面部をやき………高島屋アー
「ヘン喰はず貧樂が聞き呆れらア

××××××

午後三時

「休刊……不都合な……どんな事情があるのだらふ………變だ
「大相紙が上りました相で………上もの紙で新聞の價が十錢位いたすやうになりましたツテ……それだもんですから………困つた處が見る人がありませんから
「紙が騰貴……ハテナ
「そればかりでなく一昨夜から印刷の職人がのこらず逃亡いたしたさ

うで
「ムーフ
「それやこれで當分休刊と云ふ社告を小紙へ印刷して配達する筈です
けれど其れでいつもの新聞位な價では出來んさうで……外の活版屋
でも刷りませんさうで
「何事か……事情を話していつたか
「アノ先日御買ひなすつた娘鑑が賣れるのでよございませう
「ハ、アー——……ナツ……非常な勢力だナ
「アナタもチット小説でも遊ばせな……著作の方には地震のられひが
御座いますまいオホ、、、、
「失禮な事いふな地震はなくても諸新聞で雷のやうにやかましく批
評されるワいづれも購買となれば樂なものはたいテ
「デモあたた娘鑑のやうな馬鹿氣たものをかいてそれで紙の相場が
狂ふ位ですものナンノ雑作もありやいたしません……一トツおかきな
さいヨ
「馬鹿申すなと
いひながら火鉢の前に座るやがて細君はコヒーをいれる仕度して
「朝も八時出勤なんぞテ疑ない思ひも不致もようしう御ざいますし…
…交際費は張りますし……出張でも命ぜられて遠國でも參るやうな事と

がいつなん時あるからしれやいたしませんし
旦那はリッチモンドをふかしながら娘鑑の讀かけをつゞけて默讀
してゐる
「こんな不便利な處へ高い店賃を出している位なら小梅か飛鳥山の方
へでも別莊をかまへて……それにあなた小説家なぞは新富なんぞへも
招待される相で
旦那は天を仰いで高わらひし
「馬鹿を申すな……それは新聞屋だは
「勿論新聞社へは補助にいらつしるのサ……それがないのならせめて
名前だけでも
「馬鹿申すな……おまへの望みはおれが小説家になるのではあるまい
新富の金主をして越後屋へ株金を出して小間物屋の店を出せといふの
だらう……イヤ高島嘉右衛門もおれにや遠く不及だハ、、、
「オホ、、、いかな事でも商人になるのはいやな事でサアネ、しか
しあなたがあんなに名がられたらさだめしさだめてうれしからふと思
ひますヨ
「モウつまらん事をいふな……内の新聞が來たけれりや仕方ない……
隣のをかりてくれ
「内げかりだぁ御座いません大新聞小新聞とも一枚のこらず前キの語り

で休稼して御座いますヨ

一エ、Pen is mighter than Sword いくら申しても商賣違ひおやためじや……すこし辛抱せ〱今に投筆事我軒といふ時が來るワ……其時は牛琴の女房をして亭主をうらましてくれるワ……観兵式の立扮を見たがエ、……ソリヤ今断いてをる初駿に跨つて……金のエボレツトをつけた軍禮服で勲章が六ツ……佩刀をならして愉快なもんじやをれがサアベルを抜いて軍を指揮して見ロ……號令をかけて見ろ……宮様の遊物まで輝いて狂ふは……小說家何んだ……つまらぬたわ語をかいて……そんな事ばかり考へて居るもんだから體格が悪い事……干物のやうにやせて……筆より外にもつまいが僥倖にしておのれが著作が好評を博した處がそれまで……國家の益にはならん……虚名を賣るなどは大丈夫のせん事だ……我國の形勢を見ろ……筆を弄して居る時節か……貴様なぞも心掛かかんじんじや編もの丶稽古なぞは無益な事だ雑嚢の用に供するヅックの織方でも勉強しておけ……牛琴なぞはよせ……看病婦の稽古せ　……エ一體貴さまは軍人の妻に似ないで……因循で……小說なぞを好んでかれこれ批評がましい事をもうして

「小說のわたくしの話もうるさいでせうがあなたの孫子の講義も恐れますヨ……小說家は國家に益がないとおつしやいますが一國の文明を計るのに武の力ばかりで參りますか

「英國の隆盛をいたしたのは何の力かシヤーキスピアの隠木かマコーレイの文章か……獨逸の今日あるは

「それはあなたいけませんヨあなたの議論はいつも我田へ水を引くからわたしのやうに軍人の妻で居てそれで公平な目をもつて文學の事を

「何が公平か人としておのれの田へ水をひかんものがあるか……もしあらば賣國臣も則ちこれだ軍事でいへば敵へうら切するやつがこれで軍法に照らせば

「あなたはたゞ武張つてばかりいて美術の考へないからいけませんヨ心に寛きないから困りますヨ

「武人たるものが心に寛いだ處があつてもエ、か……おれが藩に居つて教育された頃はめしをくふにも箸の咬まらん內にくふてしまわにやならん……軍事に心がけておる……勇士は轡の音に目をさます

「それでもあなたゆうべの三ツ半を御存じないくせに

「エ、うそを申せ……知つて居たワ……寒いからねていて仕度をしながら逃道の地理と荷物の出し方を思案して居つたしかし地の理は人の和にしかずじや傳やや來やも今來るか〱とまつてをつた

　南むきの窓の外から

一御新造さんあなたへ新聞が參りましたか

××××××××

歌人は居ながら名所を知る譬の僞ひろなか田毎更科の月をも詠じ吉野嵐山の櫻を寢ころんで吟ずるなどまことに自在なる事なりけり今は立ながら名所古跡を目のあたりに見る藝娼妓俳優はおろか古今英傑にさへ對面の叶ふ寫眞屋の店さきに年の頃二十五六の男の半面やけたゞれたるやうな寫眞 大判中判は金縁額の額にいれて小判は一枚三錢づゝの通り相場 東京のいづこにても福助の寫眞は三文の價もなくてかゝるあやしき男の面影のみ需用の夥しきぞ不思議なる日本橋通りの寫眞屋に黒山のやうな人だかり

「モシ小判で全身のはありませんか

「モットよろしいがございましたが只今みんなになりまして中判のよろしいのはいかゞで御ざいます

「中判はいけないの寫眞帖へいれるのですから

「この小判はいかゞで御座いますごく新らしい形で

「そりやあります……半身なら十枚ばかりもつてゐるの

「コリヤ其大判はいくらじや

「ヘイ額ぐるみで御座いますか

「ウ、額とも

「ヘイ九十錢で……中判の方は七十錢で

「隨分高いノ……石版はないか……

「石版はまだ四五日かゝります……コレデ石版が出來て參りますとまたよろしう御座います

と挨拶しながら額仕立の大判と中判を男の前へ出し以前の娘にむかひ

「お孃さま福助のではいかゞでございます

「オホヽヽヽイヤーナ福助なんぞの寫眞をかひにきたんじやありませんヨ……チョイト石版が出來るのオヤ嬉しい

「午琴先生の石版が出來ると西鄕のが賣れなくなります

「オイ／＼午琴の寫眞を見せてくれ……遊ぶ種類をのこらず……ム、小判だ／＼

店先を通りすぎる午琴先生この光景をチラと見て客の中へわりこみ店の有樣をなをくわしく見れば十八九のお孃さま風の少女侍女をめしつれ女房を相手にそれこれととりちらして見てゐるかのお孃さまはついこの間まで大の福助びゐきで狂言毎にこの店へつめかけ一役毎におもとめになる大の御客筋けふも成駒屋の寫眞かと思へば中村屋の午琴が寫眞を手にとりつく／＼打ながめてのお物語り午琴は聞くに身も世もあられぬ恐悦……思はずしらずひとり言

「オヽしげ〴〵とながめているわ……ム、あどけないかほをしてナニ……正の物に御目にかゝりたい……さうか〴〵……ハ、女房を濡衣に見立てゐるやうすじやな……ソレその勝頼イヤ仁吉はこゝにいる……こゝにいるとイツソ名のつて出やうか……いや〳〵さうしたらあの娘の思ひます道理だ……つれなくするのがあの子の操だ……オヤまだナニかいつてをるワ……顔の疵がないといひ……エ、おほこた事をいふな……女房がべんこするはこの疵が直打だと……ヘン自分の店の縮の神だと思つて……ア、しかし文學の力は非常なものだ今まで俳優風情の寫眞をまもり袋へいれていたものがそんな世間しらずの娘までが容貌といつたら二目と見られぬおのれの寫眞を補助同様に大騒ぎをやるといふのはおれの著作の好評な事から其作をしたふ處で其作者を追想するそこでどをいふ人か見たいといふ念が出て……名譽な事た

といふ後の方よりどや〳〵と足音して七八人のわかもの徽章のない近衛の帽をかぶり手織木綿の綿入を尻はしよりて官服のヅボンに長あしだ革韈を提ぐるやら毛布のつゝみやらおもひ〳〵の立たるは除隊にあひし兵卒のこれも故郷へ錦なり

「山里スイ山里……女郎の寫眞なんぞかつていつて内のお鉄に發見されんな

「馬鹿いへ……オイ錦繪はもふこの位でよからふ東京の名處の寫眞でも買ふていかふ

「名所なんぞつまらん……役者がエ、

「役者の寫眞なんぞ土産にかふてゆくのは自分の男をわるく見せるわ同様じやそりや策の拙なるものだ

「村中……アの小説家の寫眞がエ、……アノ娘鑑の……間でもアレが非常な評判だつていふから

「アノ背戸畠のきのふかふた寫眞か

「オ、

「アレナラお鉄に見せても大丈夫だ……アレがいゝあれがいゝハ、、ハ、

「オイコリヤ其寫眞を五枚ほどくれ……貴様何枚かふ……ナニ十枚

「エイこの寫眞でこれは吉原の……

「女郎の寫眞ではないワ

「貴様の鼻の下が長いからさう見られるのぢや

又も入來る一隊の客は半白の西洋人妻の手をたづさへ十六九の娘と妹と覺しき夫人先にたち通辯一人店口にたゝづみ

「仁吉の寫眞を三十枚ほどくれ……大判を

午後四時

新聞メール横濱ガゼットは娘鑑の世評を聞きこみ逸早くこれを英文に譯して紙上に掲載し日毎に一欄を埋めて續物のよびものとなりければ日本居留地にも午琴先生の名譽は高くなりて故郷の朋友親族なこれを郵送せしものありしより娘鑑英米の紳士貴女に膾炙せられてこの物語の一章なりとも心得ぬもの流行に後るゝとまで持囃され其地より西洋字新聞の需用俄に夥しく其の報酬としてメールより午琴のもとへ三千弗を贈りガゼットより二千弗に賞揚の書翰をそへておこせり英國ラウトレヅン會社にて新聞を轉載して一部の小説となし出板する……文學上の諸雜誌はこれを批評する……其喧傳ますます熾になりてまづ手初めに佛文に譯して獨文となり伊太利語となり漸く西亞文となれりかゝりければ其出板所は利を射ることきはめておびたゞしく報酬を送ること一萬四萬あるは三萬……各數部の娘鑑を添へて千里の波濤をこへて日沒國から日出國へ輸入すれば午琴は其見本を書籍館に献納せりされば上野の書籍館は未明より讀者は門前につめかけ時間をのばすやら役員を増加するやらそれがためか上野行の鐵道線路は近々に入かへをせねばならぬとは思はぬ處にさしひゞきのあるものなり

午琴先生は朋友やら學者やら一日に百二百の來客面談をかふの儀僕を申すのといれかはり立かはりの出入雜沓にいれて出す茶ばかり數十斤のたほれかゝる些細なる事はなにとも思はねども其人數に應接しては氣根がたまらぬ一人十言づゝ對話をしても二百人なら二千言この二千言を十行二十字にかきちらしなばまた一部の小説が出來るそのやうにやすく口外すべき錦腸にあらずこれは一策案せざるべからずされば日頃女房の望み折こそ來たれと留守居に一名の學僕（尤もこれも尋常の學僕にあらずしてかつて大學院を卒業して某新聞の主筆となり盛名一時を鳴かしたる學士某のなれる果なり午琴の筆勢を欽慕して數月前より先生の門にいらん事を切に乞ふてやまず自から甘じて學僕となり午琴の筆意を學はん爲めに尺蠖のしばし屈するものなりけりこれや鬼一法眼が奴となりし御曹子の心ばへとひとしくて共に今古文武二道の美事といふべし）を置きある日細君を携へて伊香保に閑日月を樂み贅澤三昧仕つくしての二階ずまひある日の那學士僕のもとより書狀到來しければ開緘して見るに在英京龍動なる親友の書面をこゝまで送り來せしなり

「盈や青梅さんからの手紙だ

「オヤさうでございますか……いつもより大分早く參りましたね

「サウサすこし早いやうだが何の急用かしらん……

「ナンダまたペンでわからん字を書いて來たぞ不相變金釘の折れた……まるで黒檀の鉋屑だ

「ナニ〳〵御打揃ひ……

其後はます〳〵御清適恐悦に奉存候偖先頃御依頼申上候品々早速御刷成下誠に難有先月十日落手仕候この度の書翰は幸福なる愉快なる感覺をもつてしたゝめ申候先年御話し相成候娘鑑いよ〳〵御出板御當地にても好評の由何より大慶の至に奉存候扨當地へは先々月あたり横濱ガゼット參り右紙上にて私も拜見仕候近頃は諸方の書肆にも美本製にて發賣致居一册二弗のが最美本にて六ペンスのもの有之候諸方の會社より出板致候事ゆへ六ペンスのものにも數十通有之候就中○○會社の出板は新聞の轉載にては御座なくチャーレスデツケンと申す當地第一の小説家が自身元本即ち日本文の娘鑑を見て翻譯致候ものゆへ尤も評判よろしくまた評判だけ面白く御座候

女房の墨は婦人丈に感情も鋭敏にして喜び涙にくれて手紙のうへへポタリと一滴。午琴は見やりていぶかりながら

「墨何を泣く……どふしたのだ

「エヽ……アナタコ……これがうれしくたうて

と片手に涙をふきながら夫の顏を打見やれば同じ思ひかことたるかこれも眼の底にせきかねたる涙ほた〳〵と膝に落つれば

「ごらん遊ばせな……あな……あたたも泣いていらつしやるくせに

「おれは泣きはせん……歡極まつて悲生ずだ……ありがたいありがたい

と夫婦手をとり身をよせかけあたりをはゞかる忍び泣逆言狀か語をきでも讀んだらハテどふするきか馬鹿々々しい

「早くもつと先をお讀みなさいヨ

「ウ、讀むよ……ム、面白く御座候ト

この他佛文、獨文、魯西亞文の翻譯數本有之いづれも評判よろしく伊太利文のは殊の外の出來にて評判よろしく候かやうなる次第に御座候ゆへ獨人魯人等に初めて對面致し候時はみた娘鑑の批評をものがたり大に交際の一助と相成申候と當地のもの等は申居候扨これまでの事實は疾に貴君も御承知の事と存候さまで新奇の話にも無之候得共以下の件には尤も新奇なるものとしてまた貴君の爲めには連城の玉ダイヤモンドにもかへ難き價値あるものに候得ば私は自負の心をもつて認め申候

「ソラこれから連城の玉……ソウ安くは見せられない

「アレヂラサズと早く御聞かせなさい……胸がどき〳〵いたしますヨ

「おれに脈が激動するやうだ……針技の主々々々々
「前陳の通り……英國は申に不及佛獨伊等迄で翻譯致し諸國人
が一樣に其妙味を解するやうに相成候へば人情として耽讀の心を起
さゞるはなくこれを哲學的に分析致し申候得ば
「コリヤいかん青梅の哲學ときたら事だ
「ソコノ事はおよしなさいヨ……氣障な青梅さんだよ大事の處で哲
學なんぞッテ……オヤ括弧の中へまたなんだか横文字でかいています
ネ
「從つて其原書を讀まんとするの意志を生じ申候 これを讀まんには
日本語をしらざるべからず學ばざるべからずされば從來日本國語を
卑み居候學士會院のやからまでみな之を學び之を讀まん熱心甚
しく候 皇國の言語をして當地あたりへ流行せしむるの端緒に至り
しは偏に娘鑑の功に因る事に御座候 右の次第につき私の朋友にて
學士會にをるもの小生を延て日本語の教師とせん事を熱望仕候
小生も多忙の身の上に御座候得ば一たんは辭たい 仕り候得共これ
も間接に日本の爲また直接に拙作の小說をして弘く其趣をしらし
めんが爲と存じ
「ア、流石は日本人……それでこそ親友……コッチに居る時分から非
凡な處があると おもつたよ

「……たる事をおきまし一時日本に於て一大……仕候……は
本言語會合の名づけ申候處、入會するものは學士のみにとゞまら
ず諸士學の學生及教育ある婦人續々申込み來る土曜日には七八百名
も有之由都市物語られ申候實に今般……
「あとは哲學の議論だからよしますといい……ア、口が渋くなった
……緊茶を一トつくれ……これどふしたこれ緊茶や
「アイ……タ……タ
と返事はなくて兩手を下腹にしめつけ眉を捻りつゝからだを屈へす
りつけく歯がみをなして苦痛のありさま……作琴はびつくり後方
へまはりて抱起し
「コレどふした……どこがいたい……ナニく
と口のあたりへ耳の根をすりつくれば
「藥を……寶丹を
といふこへかれ野にすだく虫よりも細きにいきの根をとめては一大
事と妻の間を隊にてさゝへ手を打ては
「ヘーイとこたへて宿の下女座敷口へ腰をかゞめ
「御用でございます
「ア、……チョイ……そこにある寶丹を……湯を……湯は湯袋の中に
ある

「紙袋へお湯をいれさすか

「チエ、それ寶丹をその中に……それだ〳〵湯を……

「おや奥さま目をおまはしなすつて、マア大變……旦那——

「旦那はいらない湯をくれ〳〵

まづ寶丹の力に命はとりとめ胸の痛も漸く收まりし樣子宿のあるじと下女は御大事と捨せりふして出てゆく

「床へ横になつてるがいゝ……ア、胸騷ぎしたなんで癪なんぞを起したのだ……エ、今までそんな事はなかつたから實に驚いた

「ア、……あんまりうれしくつて……エ、うれしいと思つたら下つ腹の中がかきまわされるやうでくるしくつて

「ウ、おまへが癪でも起さんと おれも目をまはす處だつた……しかしさう神經質でもこまるなうれしいたらなき……目をまはし……氣分はいゝか

「イエもうたしかでございます

「あしたはあるけるか……こゝを出立するのだ、午頃から……

「エ、もう歸京するのですか

「しあさつては新富の開場だ令夫人同道の一條だ

「オヤさうでございましたね……初日は出揃ひませんから、 おもしろく御座いませんヨきつと

「たゞの狂言とは違ふワ……初日に見るのがこッちの務めなんだ……出揃つたらまた其時ゆくサ……鑑定をするのだから おれは見物人じやない役者の張る仕事だ……脚本中の人物の衣裝から持道具まで小說にかいてある通り長谷川が骨を折つて踏査したといふけれどもまだおれの氣に合はん處があるなら忠告してくれよしあしともおれの助言通りにするといふからつて來たのだから まんざら見ぬふりも出來ん

「この間あつらへた服は間にあひませうか

「ウ、內からの手紙にきのふよこしたとかいてある……

「オヤさうで御座いますか……ア、安心した……どんなだとかいて御座います

「目を驚かす計りとしてある……大臣方の貴婦人でもあの位な服はあつらへんと越後屋で申したさうだ

「きはづかしいございますね……始めてきるのですから

「襟かざりの玉なあり非常な高價なもんだ……横濱の新聞社からつかひものによこした

「珊瑚珠のいゝのでもくれゝばいゝのに氣のきかない

「馬鹿な、珊瑚珠なんぞが比較になるものか

「服のきかたはあなたごぞんじですか

「エ、……しらんでもなし……しらんでもあり

「アラそれじゃ眠りますねへ
「ナニおれは知らんでも文村（學士）がよく心得ている鹿鳴館の案内といはれる男だ……萬事あれにまかしておくがいゝ
「いよ〳〵當日は四頭馬車で喝采の聲の中を五千圓の洋服をきて……文學士を陪乘させてア、實に夢じゃありませんか
「夢ならまだ〳〵さめるには間があればいゝ

午後五時

午琴先生は大學西學部の學生より招待をうけ午後一時より紅葉館へ赴きたれとも知らず交際のための杯、以後お見しりをかれての徵など杯に名刺を添へて一名每に知音の酒のみ過して熟醉前後も知らず馬車で送られて歸宅したまゝ燕尾服のまゝ手枕して妻君が心付のかいまきに夢淺かなるまろび寢其夜はあけて太陽の光りは軒端の簾それもこれも白河の夜船「ドック」へ這入つた身動もせず其日の十二時までたゞ一睡女房はあはたゞしく枕上にかけより夜具の上からゆすぶりながら
「モシあなた……御客さまが……あなた
「いづれ……別のものを……腹稿があ……り
「モシあなた……寢ぼけてはいけませんよ、モシ〳〵
「ウ、……ナンダ……やかまし〳〵騒々しい
「騒々しいじゃ御座いません……お客樣です
「客なら謝絶しろ……留守だと申せ
「内にゐる時は御在宅て御座いますよ……早く起て御面會なさいヨ
「在宅としつてをるなら……主人は小說にあてられてふせつてをるといへ……ア、ねむい
「いへそれ處ではございません……サアまた寢てはいけませんヨサア……大變な御客ですヨ……大臣方ですヨ
「エ、大臣ない〳〵すてをけ〳〵
「千歲一遇といふ御客さまですヨ
「めづらしい客とはシヤキスペアか羅貫中か……羅貫中なら飯田町中坂下をおしへてやれ
「もしあなた……
「ナンダうるさい
「うるさいじゃありません……文部大臣がいらつしつたのです
ときいて午琴はエレキを感ぜし蛙の如くハッと飛をき
「何……文部大臣……こちらへ御通し申せ……寢床を片つけんか……早く〳〵
とさしづして臺所へはせこみ顔をあらひ衣服を正し座敷へいづれば文部

部大臣は秘書官をしたがへて悠然と座をかまへお座すれば牛琴不思かしらをさげ

「ハッ私が戯作堂牛琴で……見苦しい茅屋へよくこそ御來駕賞に恐縮の至りにぞんじます

「ハア御高名は承り及びました……今度の著作賞に感服の外はなしで……

秘書官は髯を捻りながら膝をし進めて

「其の事でけふわざ／＼大臣が御出になつたので

「ハアッこれは實に汗顔な次第で……あのやうないたづら書が僥倖にして時好に投じたのが私の好運なので

「イヤどうして大した傑作です……今日大臣がわざ／＼御出になる筈ではなかつたが……君を……イヤ先生を文部へ召出して大臣が面謁する事であつたのだが……其事を大臣に上申した處が

「ナッ………

「大臣のいはれるにはかゝる大家を徴すなぞといつては恐れ多い

「これはどうも怪しからん痛みいります……これ澄や御茶を……ナッ

「よしめした處が其節を辭ふして出頭する理はない……病なぞをかまへて

「これはどうも恐入つた事で

「といふ事で、御自身御出になつたので……用むきといふは……先生仕官する御志はござらんか……文部へ

「ハイ實に有がたふ存じます

「祿仕すると節が汚れるかネ

「イエ、けしからん

「ソレは支那風の思想じやありませんか……大臣の鑑定で登用するのだからかならず小給なぞの憂はない

「ハイ有がたう存じますが……どうも民間に居りますのが勝手で……それに病身で……脳病で……スコシ肺のきみもあり

「脳病……ナッ著作家には避くべからず病氣……いや仕官が望みにならば強てとは申さん……官にあらうが民間にあらふがひとしく日本國の徒となる事だから

「御厚志を無にするやうで恐入ますが

大臣は顔を和らげたまひ

「イヤナニ氣の毒がる事は決してありません……ソンナラ阿部中さん、カの事を

「ハッ……先生君へ子爵を給はる有がたく御受をなさい

「ハッ……御秘蔵の重寳を私へ……誠に恐れいりますが私性來不調法

で……茶事などは頭に心をかけませんこのほへ…それは甚だ一層客に何様を
貽るやうなもので やはり晴の方がよろしいと思ふは必常で買を貰とも
思ひませぬ……勿体ない次第ゆへひらに御辭退いたします
「茶事を心得居らんとてさし支はない筈……奇異な事をおつしやる
の……歐洲諸國には著作などのすぐれたをなしたものには官から給は
る禮はいくらもある事日本でも前例がない……大臣は御存じの通り我
國の文運をすゝむるに汲々たる譯だからこの度手本を出して見せる…
…社會の學士をして文學に熱心させん爲にするのだから……篤に其卒
先者となる名譽な事を辭退する事はいらん お受をなさい
「篤に有がたい事で……拙作記念の爲め子孫にまで傳へます……定めて
見事な品で御ざりませう……さやうな重寶を御秘藏では大臣には定め
て茶事は一流の風儀を極めていらつしやる事で御座いませう
大臣は不審の眉をひそめ秘書官に目まぜして小聲に
「阿部中さん……精神が錯亂してをる樣子だナ……腦病でもをこつた
のではないか
「さやう奇怪な事を申しまする……先生
「ハイ
「いづれ召出しがありませう……其節は御出頭を
「承知いたしました……もうおたちでございますか
と今はやうやく〳〵おこし[illegible]にはかに大臣を一揖して[illegible]
たまひ後につきそひ立いでんとする秘書官の袖をとらへ
「大臣の御秘藏のひ。。。。ひしやくとは茶の湯の事で御ざりませうな
「エ、……ししやく……茶の湯……ハア、、、、ひしやくハ、、、、、ウ
、、、、ハ、、、、、
馬車にのりうつらんとする大臣は今秘書官の威儀をも失なふそり反つ
て高わらひするをいぶかし氣に見たまへば、阿部中は腹の中をかきま
はされるおかしさをこらへ
「子爵とは公侯伯子男の子爵です……先生の著作をして華族に列せ
しめるのです
「ヤアッ……子爵……子爵……華族……ム……
といふまに秘書官は馬車にとびのり大臣にむかひ
「小說家と哲學家はなるほど愚なものです
「ナニ
馬車の音ガラ〳〵
すれ違ひ樣に、一頭立の馬車一箇の紳士をのせて一散にかけ來りし
が今琴の門にとゞまりて紳士は衣服を正し格子戸あけて
「頼まう―
「どうれ

と妻のお墨はうやうやしく手をつかへ

「誰方さまで

「先生は御在宅ですか

「ハイ宿に在ります

「チョット御面會を願ひに上りました……よろしく

挨拶いて紳士は一葉の名刺をとりいだし

お墨は名刺をうけとりて午學の書齋に持ゆけば

「誰だ……ナニ大日本演劇改良會々長……柴井改良…………

××××××

「是非とも願ひたいわけで……至急を要するので………

「ナルホド……私も一番發して立案して見ませう……しかしそふ大げさにかきおろしをした處が興行しやうといふ座がありませんね

「劇場の方は資本も大概集まつて居ますが……尤も建築にも二三年を要しませうから其れは間にあひかねます……新富をかりきつて一興行やるつもりです

「マ、それもようございましやう……それじや時代ものを

「まづ世話よりは其方がよろしいかと思ひます しかし其は先生の御了簡次第で……どちらとも

「ナル……ナニか名案を出しませう……改良の正本を出して味噌をつけるやからが多ふございますから改良の改良たる處を一トツ

「何分どうか……報酬の處は

「報酬……原稿料ですか……其邊は豫め申にくいです百圓だすから百圓のものをかけついつても其りやかける事じやありません相場のきまつてをる品物の注文をうけるやうには參りません……全體現今の小說などに可讀のがないといふのはそもそくそこですな……儲け主義でかいちやだめな事です……其作は佳なりといへども其眼の界には銅臭があることを發見されます……イヤ小說に臭があると申すと些たおかしい燒刃の匂よりももつと妙なものですが……それはありますネ……たとへば故事を挿みますネ……其時代が違ふとか……服裝が相違して居るとか……素人にお氣のつくやうな處に杜撰な事がある……これは其作者の無學者の證據などといふに其罪は蹟しかねる一編の立意やら全體の文章から推察して見てもこれ位な人がこれ位な事をしなければならぬとおもふ事を誤まつてをる……これは全く面倒臭いが先に立ち參考書も見ず調べもしないからだ其面倒臭いといふのはそもそくいかなる事の原因から起きるか……これはしたり演劇改良會の會頭ともいはれる人物が目今駄小說の弊害を……子爵戲作堂午學がのべてゐるを欠伸とはそも何事ぞや……情ないネ

「イヤイヤ……どう致して卓識名説参考ともなるべき老大家などゝは
けしからぬ……そは筋目違へ十分服膺して後學の爲にもせんと思ふて
おる位……筆記生を同伴してこんのを悔んでおる位……どうしてく
欠伸などゝは
「其位力をいれて傍聽してくれんでは話しがひかない 其面倒臭さいと
いふのはそも〳〵いかなる原因からおこるかといへば著者自身が其道
に熱心せんからである……自身が熱心なら十分精密に手を盡せる丈
手をつくして疏漏のないやう杜撰のないやうにと心配するのが當然の
事で……當然處か自分の氣がすまぬものだ……著作に名をかつて阿堵
物これ貪るやからづれこの精神がない……十行二十字萬遍なく字を
ならべて本屋をごまかし原稿料さへうけとればもう縁はないうれると
られないはわれに關せず……本屋の損で事がたりる……それ故にいふ
銅臭を帯ぶるものだ……こんなものを板行する本屋も本屋かひ手もか
ひ手サ……まづ我朝の歴史に徴しても現今ほど小説の多分出板にな
つた時はあるまい小説の目録をもつても十巻や二十巻の本は出來る蓋
し盛なりといふべしだ……イヤ衰へたりといふべしだ需用あつて供給
が生ずる理で看客に離婁の明をそなへたものがない……情ない事だ
……何故に朝廷でもつて駄小説をあらはすものを厳刑に處する法令を
發布せんか……實に文學上の一大魔といふべきは現今の小説だ……オ
ヤ其作者はどこへいつた……コ[illegible]……さゝさ
から便所へ出になつてる
「へゝ……感心な……小説の趣向でも案じている事と見へて大分長い
な

午後六時

午琴先生が椽大の筆端に洛陽の紙價は高き卑しきぶしなべしふりか
なの拾ひ讀みするやからまで近世娘鑑をよまぬ口はなしかたらぬ口はなし
毎夜引つゞいての講談に伯圓伯痴は大入の札をかけ春木座を始めとし
て四方の緞帳芝居も立錐の地なしかの小説の主眼とする處はいかなる
事柄なるやこゝにしるよしなけれども午琴先生が女生徒の爲めに而部
をやかれたるを見ればいづれにしても其淑徳を害する如き校中醜行を
發きたるものなるべし
世間の女生徒の父兄親族たる人はこの小説を一讀して胸に涌出る感
情はそもいかなるものやらん雛人形を雛人にして來年の桃さきいづる
頃まで櫃の奥へしまひ僅々は玉のやうな無瑕の箱にはまわたをあて
吉野紙あてゝ龍脳ひとつ懷におしいれて虫つかぬ用心するも難有たる
人が其娘を教育するに師かわりたることなし朱に染る白歯の娘が三人
よればかしましきまして百人二百人露はねおとす選擧されあは依お

轉婆じけ浮氣おしやべり數々の互にすれる木賊畠かまをいれんも今ははや斧を用ゆる悔あらん女生徒といふものはかふしたものかと窮弊の母親は學校を御殿奉公と心得たる今後悔の臍をかみかくては末々心元なしとたれいひ合さねど一人二人と退校させさしも女子教育の輿論となりしきのふに引かへ女學校の閉校日を逐ふて夥しく花を隔てゝ閉へし咿唔の聲もけふは寂然として靜かなれば胡蝶は翼をつらねて運動場の春をわがもの顏に遊ぶめり

眉雪老僧時輟箒落花深處說南朝 これは軍詩にかなしき吉野の奥に武夫の涙の種それとかはりて今爰處は人里はなれし山の手に數年開きし女學校門の扉は半開きてわづかに入口の下駄段を見るとこれにボタン〆の半靴一足棲皮を引づる雨下駄かたく下の段にかさなりおりて塵や泥の一點もなきは下僕の潔癖を見るといふにはあらずそもいかんしてか

門に近き教場の硝子窓の開きたるより好心に中の樣子をうかゞへば墨ぬりのデスク塗板の前に四五十積かさねて部屋をとり廻したる廊下をしきる硝子障子に白墨の樂書ならぎへて鹿の子まだらに塵はふりつゝ池の薄氷處々裂けて空氣の流通自在なり

しばらくありて運動場の方より白髮まぢりの老人小倉の服の紺しらみたるをきて竹の皮草履を引づり緣のとれた帽子を冠りて竹箒をつきながら門口までころばひいで堀の中の櫻の散るを心なくながめてひとり語

「エヽヨク散りやがるな……今朝はいた許りだのに……まるで雪だ…………いめーましい

と箒おつとり無殘に花を掃く折から門の扉の開きたるより淺黃頭巾がスツトいで

「小使……小使

老父はよばれて面をあげ

「どなたです

「わたしだよ……蓮葉だよ

「オヤ蓮葉さんですか……よくまア……どちらへ

「ナニ歌の先生の方まで來たから學校の樣子はどんなかとおもつてネ……通つて見たの……オヤおまへ……無風流なそんなに花を掃て……勿體ないねへ

老父はふりかゝる花を掃ひながら

「よく散るな……あなた無風流だとおつしやつたつて掃く身になつて御覽遊ばせ……掃かずに風流なら私もその風流の方がよつぽどいゝんですけれども庭をきたなくしておくと校長さんにしかられますから

「校長さんは時々お出になるかへ

「一週間に二度位お出になります
「ソウカイ
といひながら教場をのぞきこみ
「ガランドウだね……大そうきれいにかたづいている……試験休みのやうだね
「試験休みならよろしう御座いますが……もうつぶれたも同然で私しもこれからどうしてよろしうございますやら實に心細うございます
「ホンニねへ……いつもたら賑かでいゝけれども篤にこんな樣子になつた處を見るとむかしのことを思ひ出すねへ
「この頃は何處の學校へいらつしやいます
「この頃は何處の學校ものこらず閉校だしネ
「きのふあたりの話しではまだ二つ三つあるさうでしたがもうのこらず閉校になりましたかへ……ヤレ〳〵
「わたしもねへ學問したいけれどもゆく處がなしそれに内でやかましくいつて學校のガの字もいへやしないそれにごらんよ
といひながら頭巾の上を撫でゝ片頬に笑み
「これだもの……島田にいつてるくらいだしネ
「オヤなるほど氣がつきませんでした……島田に……束髪はおやめなすつて……あなた、其方が餘ほどお似合なさいます
「ホヽヽヽそれでもわたしが始めて此處にいつた時にはよく似合ふとおまへいつたじやないか
「オットこれは……年をとりますと忘れつぽくなりますハヽヽヽ
「教場へ這入て見たいが……いゝかい……きれいにしてあるのを土足でよごすのは氣の毒だねへ
「エヽナーニ、よろしうございます
老人は箒をすてゝ案内すれば娘もつゞいて教場へ入りこみそこらあたりを珍らしいそうにながめ
「澤木さんのこぼしたインキのあとがまだあるね
「へヽヽヽこの時にはよはりましたね
「塗板へたれか樂書をしてあるね……なに秦のみかどの世にあらばまづ焚くべきものは娘鑑にこそ恨らくはホヽヽヽ誰がかいたのだへ
「二三日まへ無田垣さんと澤木さんがいらしつて
「まだかいてあるね、午琴可誅……午琴大にくい〳〵
二人はつれ立ちて廊下をまはり二階の音樂室にいればかつて松風の音をふき起して里雀を驚かしつるオルガン。ピアノはいつからうつされて見るべきものはなにもなし娘は手袋にて目をおしのごひ
「實に物淋しくなつたね……こんなになるといふのも異端娘鑑のやうなものが出板になつたからだ……午琴が女生徒になんの恨があつて

ありもしない事を書ちらして……一篇につくりものとさへいふ小說を
信用して父さんも母さんも事實をたゞさず退校させる事もないはつ…
…校長も校長だ……師範學校へ入學するより外に道はないけれど……
それも內でゆるしてくれず密に午琴の小說こそ恨みだ……あれの爲め
に子供をもらつたとか……人を種にして榮利を謀る
「實ににくい奴です私が縁離れをしたのも元はといふと娘鑑から皆
さんが一同退校したから
娘は耳を側てゝ二階下の人聲を聞く樣子始めのほどは何ともしらずだ
ん〳〵高くなりて老耳にも入りしと覺しく
「誰れかきましたかしらん
「とうさんのやうだね……おまへをよんでる樣子……校長の樣だ
「エ、校長……ハテナ……應接處で談話かします
娘の耳へふとはいりしは
「午琴……著作……別莊
「などの名詞ばかりこれのみにては文章をなさず文章をなさぬ對話や
あるべき動詞もあらん形容詞もあらん副詞はいかに接續詞も
「ハテナ
と不思議の感投詞をいだして再び耳を傾くれば
「是非……代價の點は……取こはして別になどいよく〳〵わからぬ話の

概樣老父に噺やけば老父はひとりうなづきて語せぬやうに相手をゝだ
る娘は手摺の傍に腰をかゞめ下の樣子を伺ひける
三十分も過ぎし頃老父は後をみかへり〳〵合圖ふしに語せぬやうに
再びのぼり來りて
「午琴〳〵
「ナニゴキン〳〵……なんだへ
「別莊にする……けふ見聞にきやがつた
「なんだかわからんねへ
老父は胸をさすりて息をつき
「この學校も雖ものぐるみ午琴がかひうけて別莊にする……著作する
場處にはいゝたんぞつて汗をふきやがれアン畜生
「マア靜かにおしよ……それぢやあのなんだネ校長はこの學校を午琴
に賣るのだネ
「ヘイさうですとも金をとつて
「午琴はかつて別莊にするのだね
「ヘイさうですとも……くやしいぢやありませんか……實に
「ウ、イ、よわたしが買ふ
と娘は緋縮緬の上に白すきやをかされたやうに面をあかめ眞白なる
富士額のあたりへ靑筋の龍のやうに筋をあらはしいきせはしくなりて

二階をかけ下りんとすれば學僕の老父はあはてゝ袂をとらへこれ〳〵間じくいきせはしなく

「もしあなた……どふなさる……まアどふも

「いけないよ……お放しいヨ

「どふなさる

「知れた事だね……校長に面談するのサ……この建物はあんな奴の手にわたすものか……お放しよ

「いけません……それはよろしく御座いません

「エ、お放してば

と袂をとつてぐつとひけば老父はよろめきながら娘の腰に手をかける娘は梯子をかけをりるはづみをうたれて學僕は二階からコロリコロり〳〵床の上へドタン

應接處から校長はこの物音に驚きて一散にとび來り

「イヤ教助か

梯子を下る娘と顔を見合せ

「イヤ蓮葉さん

「校長

「ナンですか

「精神の……腐敗した校長

「ナンですか

「卑劣な校長

「ナンですか

「この學校は私が買ひます

「ナンですか

校長は泰然として梯子の傍に佇み娘の顔を上眼に睨め襟をそべりたる學僕を下眼にながめたゞ呆れはてゝ言句もなし娘はせき來る涙をしやくりあげ〳〵胸はわきかへる思に言をなさずたゞいつとなく眼ににじむ涙はかさをましてめぐむあし水ぬらすやうに睫毛を一筋づゝにうるはしていつしかはふり落るは頰を傳はり白蓮のしぶきのあとの如く

「校長……ザ……ザ殘念といふ事……事を……御存じあり…ありませんか…くやしい…といふ…考へはないのですか

「前後がさらにわからんで……ナニカ殘念ですか…教助が何か失禮な事でも

腰の痛に得起きぬ學僕の教助は白髪首をそと持あげてうらめし相に校長のかほを見上て

「御戯言を……校長さん

娘はもつたる前巾にて目を拭ひ……思ひ出したやうに袂からハンケチをとり出して二三度上ぬぐひをして

「罷は校長に……あり……ます

「これは怪しからん

「何が怪しからんです……校長のふるまひがけしからんです

「これはまた怪しからん事を

「けしからんかけしかるかよく考へて御覧なさい この學校の閉校したのは誰の爲です

「生徒が一同退校したから

「その……その……退校し……したのは……たれの

「女子が學問がいやになつて……因循になつて……束髪を島田に

「校……校長……學問かいやになつたとは何の證跡があつて

「則ち退校したの

「ありもせん女生徒の秘事をあばき小説をあらはしたは何ものです……

……午琴といふ……くつひめ書生が

今まで應接處の中に默り外の様子をたちきゝて立てよいやらわる

いやら身の置處にくるしみし午琴先生は いま不思も娘の口よりわが名をよばれて戸を細目にあけてソツトのぞき

「見たやうな娘……ハテナ……オヽ硫酸瓶の副將軍エー桑原々々々々々

午後七時

店口僅かに二間與へ通行の出入口に南京繻の帳を障子に用ひ光には金色の佛像難波の堀江よりあがりたる 香爐數通の勾玉番斧一揃に神代の古色を競ひ茶器あまたあれども利休の一服中々に覓つかたくかけまはしたる幅物は 和漢を不論すゝ色の紙に筆あとの贋なるを選ぶ大幅に七絶の醉書は蘇東坡。金岡の馬。紫石の山水。抱一の細幀。其舟の眞跡 凡ふるきものあらぬはなし 掛絖の火鉢のむかひに物知り顔に座をかまへたるはこの骨董舗のあるじ 許古堂奇助 店口に腰をかけたる二人の男 一人は唐棧の羽織とサラサと麝香木綿の風呂しき包を背負ひたるは 堀出しものを賣ふ商賈の人と見ゆ 他の一人は白髪まじりの分別男古物が好とて召しものまで餘程の年數ものサテカウ凝らねば滋味はわからぬで 兒洲の茶碗にのどをうるはし見かけていた幅ものゝ品評鑑定便覧を虎の卷として印章をくらべ符切を合するが如し 故に眞蹟なりと自分極めの折紙をつけたがり知つたかぶりが損毛のもと 奸商にそでないものをおしつけられて 許多の秘藏品はあれども贋物といふもの何ひとつなくたゞこの男は贋物を秘藏してゐるとい ふ事は贋物なりといつも道具屋の陰言者古堂奇助はかの鑑定家に打むかひ

「世の流行とはいひながら近頃は妙なものに價値が出ましたヨ

「へゝイ

「和漢古今の書畫の鑑定にかけたら黒人もへこむといふ旦那でも鑑定

しかなるといふ顔附かおりやす

といひながら今一人の男にむかひ

「偽物サ……原稿ヨ

この男は高聲にわらひながら

「コリヤ尤だ……アの鑑定じや先生もへこみだらう

「怪しからん事だ……わしに鑑定がしかねる……怪しからん後學の爲に拜見しよう

「イヤ頗る俗にわたつたものですからお目にかけたらおわらひ草だ……物は俗だが價値は頗る風流なものと同格だからおかしい 小倉の色紙ト

「ナニ小倉の色紙と……俗なもので……見ぬ内から頗る鑑定に苦しむわ何だへ

「ハヽヽヽ奇助さん、この間もわしのもつてるのと同なじやつを横山町の隱居さんが持つてるのサ

「ム、

「處が隱居さんは隱居さんで偽物の氣でいる二三日前にわしのと較べて見ると妙だネ……半行ほど棒が引てあるその棒が先のは直でわたしのすこし筆の方へ曲つている處が先の棒は墨がすこし濃すぎるといふ誂サ……ナニ全文の字の墨とくらべて見ると……サア隱居さん氣をもみ出して第一を叱つけるイヤもう騒さ

「ハヽヽヽ隱居さんも隱居で偽物を秘藏するのだから

「ナニ横山町の丸三の隱居か……アイツよせばいゝに古物がつてアレラがほんとの道具屋忠義といふのだまだ〳〵修行がたりない

「旦那のやうに目の高い方ばかりじや道具屋のかけ引が出來ますへ、、、

「世の中はそれで持つたものかサ……時にその小倉色紙と同格の幅といふのを見たいネ

「イエ幅ではございません………

「額か

「イ、エ……實に不思議なもんでございます

「年をとると氣がせはしない枕詞はしよつて本物を早く……

「偖その本物はこれでございます

と傍の桐の手箱の中からとり出す杉の紙挾み主人はうや〳〵しく眞田紐をとき一葉の罫紙の反古鑑定家は早くも例のきいた風知つた振に

「ハア、山陽の……外史の下書かい

「處が妙でございますもつとゲット當世のもので

といひながらかの紙を翁に手渡すをズイト見まはし

「ヘヽ……柱に戲作家用紙とある

文献を口の内で讀みくだし俄かに眉根をひそめたるは楷の引てある、
處にぶつかりしか……字體を判じかねたのか
「ヘエ……これが定家の色紙と同格
「先そんなもので……ナント不思議じや御座いませんか
「不思議〳〵大不思議……この戲作堂……戲作堂といふのは娘鑑をかいた
「左樣で評判の小說家……その原稿が一枚小判五十枚はどふです
「ナニ五十枚……ムナー……何處にありがた味があるのかサ
「これりや幅ものといふ代物でもなし……全體金目ばかりで高のつかないもんですが流行は恐ろしいもんで子昂の眞筆もよりつく事じやありません
「弘法の樣大日ほど有がたい連中があると見へる
「ある處じや御ざいません……今じや五十枚出してお手ばなすものはありやしません……ソコデ今お閑でもございましやうがこの原稿の値物が三葉も四葉もあるのでございます
「ハーテネ……そんなら午琴の扁額か大幅なぞはすばらしいもんだらう……
「噓が何にも書のいゝといふではなし まづ學識のあるといふ處でかいてもらふにしろ故人でないから有難かない この原稿はソレでも文學が

蘭國に盛になつた以來の奇書の原稿といふので午琴が當人でさへまたと書けないといふのがまづ一トツ珍重の種で……それに娘鑑の出來のいゝ其小說の原稿といふのがまた一トツ
「願くばこの原稿をのこらずあつめて紙帳を張らして寢て見たいな……
……どんな夢を見る事だらうハ、、、イヤ……また長話をして用事が足りなくなるといけんそんなら御暇
「まアよろしう御座います
「アイまた二三日の中……例の幅は其節間違ひなく
「それは慥に……左樣ならば
鑑定の翁は店を出て行く 一人の男はおもひ出したやうに 懐から一枚の引札を取り出し 膝の上で二三度皺をのし
「思ひ出したがかふいふ趣向がある……見たまい
「ウ、ナール玉石を辨じやうといふのだ……コリや至極た鑑定家は誰だ
……戲作堂午琴……コリヤ豪たもんだネ……中村樓……會主の賓人は太したもんだらう
「是非出席するだらう……わつしあ家にあるやつをかつぎ出してチットト儲けにやならない
「午前十時からか……會費はいたいネ

×××××××

むかふ両國の娛樂極樂殿宮の賦に下には十丈の帳をたつべく表二階に數十人を座せしむべしとものしたるもさほど豚士の贅澤とも思はれず誹點會懇親會名弘め淺ひ花會と會といふ會之に於てし川水に洒紙の絕へた事のない江東の中村樓今朝は九時頃より表二階の混雜いはん方もなし入口には筆太に娘鑑原稿質儐辯剔會としるしたる紙札をさらし入來る客は千差萬別數千といふ數をしらずかくあらんと豫知したるか表二階の欄干をとりはづして川へつき出し新に棧敷やうのものをつくり正午頃にはこれまで立錐の地もなく大勢つめかけて入口の混雜目もあてられず道理なるかな古今を通じ萬國を經ても未曾有の一大奇書と評判高き娘鑑の原稿合せこれを見ざるものは筆とるもの丶恥生の耻辱と遠國より籠食齎糧して來るもあり馬車人力をかつて集るもあり中村樓大なりといへどもかく大勢をいるべき處なければ人數をわかちて三部となし後れ馳の客をば歐遊館にわかちこれを歐遊支會と名けなほあまれる數千人は井生村につめ込めてこれを井生村第三支會と名けたり

時は早や二時をすぎても來客車輪の音をたゝざれば今ははやこれまでなりと本會二支會とも堅く扉をさして入場を留めければ遲參の人數は門前に雲の如く聚しかさなり手を拍ち鯨波をあげ折々は人山崩れをうち門を打やぶりて込入ればかねてやとひおきたる巡査數十人力をつくして防禦にすれども大勢の內に[illegible]座に巡査數十名の即死ありて來客の殺傷は計るもくだ[illegible]の川太ためにに赤しといふ後の物語りなりこの報早くも聞へて警兵一大隊巡査一隊各々抜刀にて門口をかためたるにより來客も今は早力なしとて午後四時頃には全く引とりてやゝ靜穩となれり

家の內には原稿合せ漸く發會の樣子にて呼出しとなづくるわかき男緞綾のフロツクに威儀とりつくらひ八字の髯をかいなで〳〵座敷の中央に一段小高き大卓子にかゝりて聲とり繕ひ高聲に

「緒言

と呼ばはりたり

程もなく滿座の內より

「是に

「ハイ

「われこそ

など〳〵返詞して人をかきわけ〳〵三方よりいでくる客あり一樣に呼出しに目禮して互ひに睨めあひ腹の內には贈物もといふ思入れなりかの呼出しは三種の原稿をうけとりてしづ〳〵上段に歩み寄る……この上段の間には子爵殿作家年琴先生裁判官の卓子に緞チンの敷ものかけて其身は腰かけ椅子に泰然ともたれて傍に鉢かれし髯をかきな

でゝいたまふ今呼出しの掲げたる三葉の原稿を卓子の上にあげかたみがはりに見くらべて莞爾と笑みたる様子なり

満座は水を打ちたるやうに静まりかへりて煙草の音もやみ……たゞころしたる息の折々嵐のやうに聞ゆるばかり其時呼出しは再び卓子の正面に現はれ

「サテ只今緒言の原稿を召出しましたら同じ緒言が三枚あらはれました……先生は娘鑑は只一トツの原稿より外に書いた覚がないと仰せられますされば其原稿の一部分なる緒言の第一のページはまた只一枚より外にある筈はありません三枚の中いづれか二枚は贋物でござります

この時満場俄かに湧くが如し

「扨其處で先生が判断を爲さるのでございますこの判断は決して一點の疑をも容るゝことの出來んもんでもしこれを疑ふたならば天下に疑のないものは只の一トつもありませんしかしながらこゝに一言申して置きたい事は二枚の贋物が現らはれますさういたす時は其持主の落膽はいかばかりか誰一人として自分の所持の原稿を贋物とおもつておる方がありませう畢竟正物とおもへばこそ高價を抛つてお求めなすつたのであります故に其方々は其迄の運とあきらめてかならず先生の鑑定を恨みたまはざらんは勿論贋物と銘がついたものを誹謗せんやうのない事を望みます……正銘の原稿には折紙の代りに先生が戯作堂といふ古篆の印章をおされますこの段お心得までに申して置ます……扨いよ〳〵只今玉石を辨じます

と午琴の鑑定了りたる三葉の紙を持ち來りてもとの座にかへり印章ある紙を右手にさしあげて

「眞物は文野多十郎君所有

文野多十郎といふ三十恰好の男喜色満面に溢るゝ計り手足も震へて

「コレハ實に有難うぞんじました……實にこれは……鑑定料は何ほど

「鑑定料は階子下に第一國立銀行の役員が出張しておるからそれへいつて

「ヘイ……ヘイ……

と引さがり人の頭を蹴倒しすやうに二階を下る

あとの兩人は互に顔を見合たりしが一人の男はにはかに目をうるまして原稿をながめはら〳〵と涙を落し

「へ、情ない……情ない……贋物とは何事だ女房の意見について……かはなけりや……公債を賣はらつて金子を調へ……血の出る錢でかつたのも贋物と相場がつきや落し紙ともなりりしない……それもあるかねで道樂にするなら兎も角も……今日これを鑑定してもらつて……百圓にも賣渡しわしも商賣でも始め……女房にも樂をさせ……エヽそれ

も水の泡……女房に合す顏がない……コリヤどうせう……
今一人の男は肩肱いからして眉眸をつりあげ
「コリヤ怪しからん……どこを證據として眞僞を辨じたのか
「ソレソノヤウな故障が起るから私が豫め
「イカン〳〵吾輩の原稿の僞の僞たる所以を承りたい……其をきかんでは一寸もこゝはのきますまい
「僞の僞たる所以といつても肝心の書者が自分の筆跡と見とめたものならあなたは何も口を開く事は出來ん筈です

午後八時

太陽は全く西に落ちて、涼しき風は打水よりおこり柳の枝は空に舞ひあがりて出かけたまゝの月を手招く竹造りの緣臺に竹簾をしきてグラスの盃にブランデイの瓶。桃のむいたを盛りあげたる南京皿などを處せく置ならべて右の端には午琴先生團扇をもつて蚊をはらひながら薄ぐらき空の明星をみつめて深き思案の樣子なり左のはしには午琴先生の令夫人これも團扇をもつて夫の背中をあふぎコツプの酒をすかし見て瓶をとつてつぎたしながら
「今日も四人ほどフロックを着た方が參りました
午琴はこの言葉に切角組立てし空中樓閣を一棟ほど打こはされてスツトお房を見むき
「ナニ……四人皆弟子入か……
「ハイ……一番早く參つた人は今日で丁度四日續けて參るので御座いますョ……今日も不在で御座いますと申したら私の顏を恨めし相にながめまして諸葛亮でさへ玄德が三度尋ねたら三度目にあつたといふ例もあるのにこの炎天を冒して四度も參るにいつも〳〵御留守をつかふのはあんまりだと申して……
「ハア四度來るのか……熱心な事だ……小說に師なしといふ事は心得て居らうに……別に師弟の約束をした處が敎へべき事もなし銘々が自得せねばならん
「イエこの間もけふも申しましたが何も入門した處が決して先生の御厄介にはなりません……たゞ御雅號の一字をゆるして下されば本望だと申しました
「それだから猶おれには解せんョ……號の一字位をもらふ爲に師弟の約を結んで首の上らんやうにする事もないぢやないかノウ
「さうでございます……けれどもヤツパリ戯作堂の弟子となつて措けば自分が著作の校閲をしてもらつたり序でもかいてもらつて猪頭をかけて犬肉を賣らうといふ腹なんで御ざいませう
「ハヽヽ、馬肉でさへ人が買んやうになつたもの犬鍋では誰も相手に

なり手がないからよ
「アツまだ申すのをわすれておりましたがけふ校正をしてくれと申して草稿が五六十册來て居ります
「サウ請とつては困るよ……おれの書齋を見るがいゝまるで紙屑屋の店頭といふものだ……困るよさうはなか〱身體が續かん……これから斷てくれ
「ハイ思ひきつて心を鬼にして斷りますが義理になりますからツイツイ
「それでも借金のことはりよりは遙かましだらう
「今は古の方がよろしからふかと思ひます
「増長した事をいふな
表の方俄に騒がしく十人餘りの小供の聲
「オイ君ヤラないか
「ウヽやらう〱半分にわかれてうたをよ
「この人數を半分にして……君二列にならぶのがいゝよ僕に號令かけさしてくれたまひ……僕がかけるよ〱……イヽカイ〱……ナラヘー……オイ…………番號
「鼻水君……君はいけないネ……ナニカたべてるナ……山下君何だいビスケツト…ビスケツトそんなものをたべながら失敬だナ……僕にもートツくれたまひ
「ヤアおかしいナ〱隊長たるものが士卒の兵糧もらつてらア
「イヽヂヤないか〱……サア二列だよ……大竹君鼻くそなんぞほじくるのはあとにしたまひ
「失敬な鼻糞じやありません□……鼻ン中がむづ〱するからかいてるんだい
「それだつて列をなしていながら困るぢやないか
「列をなしたつて痒いものはしかたがない
「ヤア〱今端の方の二人がむかふ逃げていつたねアリヤ誰だへ
「山村君と大内君だ猫を逐かけてつたんだい
「困るな藤田君……オイ……線香花火なんぞをあげちやいけないネ……コツヤ早く號令をかけなくつちやいけない……二列に右へ……オイ
年嵩らしき小供小倉の洋服をつけ小學と打出したるおなじメツキの記章をうつたるカツプを後下りに頂き西洋紙に赤インキの日の丸をなすりつけたる旗を手にして後むきに進みながら
「一…二…一、二……一、二
やゝありて前半の小兒は一齊調子を高めて……うたふといはんよりはがなるといふが似合しかるべきが
猿のつけたる冠は

見る目もいとゞ見苦しや
玉を飾りし冠の
見ぐるしき理はなけれども
分を知らざる畜生の
人をまなぶぞ笑止なる
猿よ猫は山へゆけ
冠かけて山へゆけ
錦染なす木の葉こそ
猫のあたまを飾るべき
木の葉ぞよけん木の葉よき
冠すてよとく捨てよ
棲家となせし梢には
玉を飾れる實を結ぶ
むれて遊びし汀には
銀刻む月やどる

と繰返し〳〵うたひつゝ午琴の門を往來して果は一同門口をたたきたて囃したてさけびるくひてやまざれば今庭口に涼みたる主人は怒氣たえ難く矢庭に木戸を蹴開けきておめきさけんで躍いづれば一隊の子供は蜘の子をちらす如く左往右往に散亂しながら午琴が左をおひかくれば右にのがれし四五人は恐れながらも强情にわなゝく聲を張あげて

分をわすれし畜生の見苦しき理はないけれども
ワイ〳〵猿のつけたる　冠チヽイー

とよばはりながら十餘人の子供は影も形も見へず午琴先生は小猿をおひまはして奔命につかれ力なく木戸をくゞりながら

「オイ盥や盥や水をくれ

夫の安否いかゞと枝折戸の前をうろ〳〵せし女房コップに冷水をもりて門まで來り夫に飲ませして顔を月あかりにすかし見

「大相お顔色がわるう御座います……マア何處の小供だか貴にわる徒をいたします……アナタまた小供を相手になさる事もないじやございませんか

諂しながら午琴の手を引きしづ〳〵と涼臺まで案内して

「もうおひやはよろしう御座いますか

午琴は胸を推なで迫さうに腰をかけてホット一息

「ハーアツ

女房は夫の傍へより深ひ慰めるやうに語を和げ

「あなたもう御構ひなさるな……コッチが相手になるから子供がおもしろんがつてやるので御座います

「ウ、……猿のつけたる冠は……見る目もいとゞ見苦しや

「だがなんで小供たちはあんないたづらをするのかしら おとゝひの晩あたりからナンダカ歌をうたつて表の門をわれるやうにたゝき……どういふ譯か

「木の葉ぞよけん木の葉よき……ウム……冠すてよとくすてよ……何者かしらん……ハテナ惡い事をする……卑劣な奴もあるものだ

又もや表の方騒がしく岸に打寄する波の返しては寄せくる勢は前にも二倍したとおぼしき人數援軍には日曝殘菓の慰をかくる酒屋の熊横町の赤などよぶ犬までが猜猜と嘶きて《我と思はんものは》と名乘りかくるが如し 小兒は手に手に青竹棒きれ傘の柄ビンロウ樹の杖など思ひ〳〵の武器を携へ 鯨波をつくるやうにまた沐猴冠をうたふ

午琴は中にありて 早くも敵のおしよせたりと推せしかども心に計る事やありけむ孔明彈琴の構へにてブランデーをのみながら敢て騒げる樣子もなく 何やらん女房の耳に接吻するよと見へしが根のゆるき束髮をうなづかして 勝手口より出てゆく

表の方は《猿よ爾は山へゆけ》など十人十色に前後をうたひ戸をたたきて節をなしあるひはわつひあるひはのゝしり……小賢しきやからは塀の下より庭の樣子を伺ひ 節穴にナイフをさしこみくりぬき細工さま〴〵のわるあがき興に入つたる最中

「君大變〳〵……ヒヤーイ……

「アーレ……御免なさいヨ

とかけはしる足音せはしなくしばらくして庭の口に子供のなき叫ぶ聲……勝手から女房は手から顏に入來る

「あなた照藏が連れて參りましたよ

「ウ、ヨシ〳〵

庭の口から照藏の聲

「旦那さまソチラへ引張つて參りますか

「ウ、こゝへ……これあまり手ひどい事をするな……怪我でもさしちやならんから

「怪我も糸瓜もあるもんですか……こいつらア わるいたづらをしやアがる……サアあるけ〳〵

とのゝしりながら照藏といふ車夫十二三と十許の子供を兩手に首筋をとつて午琴先生の前へ引据る

年嵩の子供はオロ〳〵聲にて《ゴメンナサイ〳〵》とつぶやき四邊を見まはし午琴の顏を恐めしげに上眼に見て語を出さず最後に年若の小供は更に臆する色なくズボンの隔子に兩手をさしいれ何事の質問にも相當の答辯せん樣子あり 午琴先生は椽臺に腰かけ直し煙草管に煙をつめながら年長の小兒にむかひ

「おまいの家はどこだい……エ……ごめんなさい……何もあやまる事はない——何處の學校へゆくの
「ゴメンナサイまし……誠に御めんなさへまし
「困るな……
　枝折戸口に寄かゝり臥藏はしきりにもどかしがり
「コンナ奴が先棒になつて惡いたづらをしやアがるンダ……家をいはねへと張たほしてもいはせるぞ
「御免……御免下さい……ワア……
「どふも非常な泣虫だ……こつちのはなか〳〵英雄乎としている……おまへ何處の學校へゆくの
「鳳雛小學へ……名は大木才一といひます
「さうかいきのふの晩もおとゝひの晩もこゝの前へ歌をうたひに來たかい
「エ、來ました……大勢で……
「アノ歌をだれに敎はつたのだい
「學校で……先生から
「キット先生から敎はつたのだネ……きつとだネ……鳳雛學校の先生はみんなわたしのおとも達で始終この家へ遊びにくるからその時きいて見る……もし嘘だつたらおまへは先生にしかられて……先生からおまへのおとつさんが呼出されておまへは退校されてしまふヨ……公立の學校を一度退校されるともうどこの學校へも這入る事が出來ないそればかりぢやない親父にしかられる事それは大變だ……そんなわるいいたづらをして退校されたものは敎育してやらぬ乞食にでもなつてしまへといはれる
　貧しくても小供は小供學校の先生と言を設けしかば先生の朋友。退校。親父の小言。などゝいろ〳〵いひ立られて今は定めたる心もくづれ出し
「學校の先生知つてるの……なんていふ人
「ナンテ人といつて校長をはじめみんな私のもとのお友達サ
「サウ……先生が敎へたんじやない、
「それじや誰から敎はつたの
「昇山さんから…………
「昇山さんといふのは何處の人
「矢張り學校の……其人はまたどつか外の大人から聞いたんだつて
「ウーム……その歌を敎はつてそれからまたこゝの前へ來て歌へとか敎はつたのかい
「エ、この家の前で歌はなくつちやいけないッテ……モウ僕の學校のものはみんな知つてらア

——明治二十一年作——

（完）

露西亞漫談

後藤新平

私は客臘二十二日モスコーに到着後、三十一日間に亘りて新しきソビエット政府の新施設を視察し、又漁業權問題につき協商したりして寧日なかつた。私の滯在は三十一日間ではあつたが、普通人の視察行程に比較して三倍分、即ち九十日間分の努力を傾けたと稱するも過言ではない。其間一寸レニングラードを訪ふたのみで總ての時間をモスコーに滯留したのである。幸に同國政府の好意よりスターリン、チチエリンその他の主要人物と會談し、また中央における諸施設についても遺憾なく觀察することの出來たことは私の愉悦に堪へざるところである。殊に到着早々の時期はクリスマスの時に當りて總ての役人が公けの休暇を取るやうなときであつたにも拘らず、政府者にありてはその休暇さへとらずにすべてのプランを作製して私等一行をして少時も空費せしめず、あまつさへ、國賓として至れり盡せりの接遇をし、視察上幾多の便宜を供與したことは謝するに辭ない位である。今觀察せる特異の三四につき茲に陳述するであらう。

新經濟政策と外資問題

今、私の知り得たる限りに於ては、新經濟政策は資本主義に降伏せりとの世評は其當を得たものでなく、現在に於て新經濟策は成功の過程を辿りつつありと見る事が至當であらうと信ずる。勿論忌憚なく云へば、現在に於て物資が潤澤生活が全く滿足す可き狀態にありとは言ひ難いであらう。然し同國が數年前まで、大戰爭、革命內亂、封鎖、飢饉、凡そ人生にありとあらゆる大厄難を嘗め盡し、新經濟政策採用の直前に於ては生產力戰前の二十パーセントにも滿たずして、民に生色無き情勢であつた事を想ふならば、此の最近四五年の間に產業がどれほど長足の進步を以て恢復され、現在では產額戰前を通して先づ戰前の程度に達したといふ事は顯著なる成功である。此の成績を擧げ得た半面にどれほどの困難と戰つたか、そして列强の經濟封鎖と飢饉との間に敢然としてこれほどの事績を擧げ得たのであるからその主義上の如何は別問題として、とにかく尊敬に値すべきものであると思ふも

のである。

同國の前途には猶ほいろ〳〵の難關が横はつているであらう。例へば都會と農村との調和問題、年々百萬を越える失業者問題、戰前に比して其の額未だ遙に低き國際貿易振興問題、其の他數へ來れば幾多のものがあるであらう。然しさう言へば何れの國か難問を有せざるものがあらう。如上の問題は困難であらうが切り拔け難きものではあるまい。それには同國の有する二つの強味がある。第一は同國當局者の身自ら奉ずる事薄く、獻身的努力を以て殆んど夜の眼も寢ずに只管國務に沒頭して居る眞劍の態度である。第二は行政の科學的な點にある。彼等の奉ずる根本の主義は之を別として、個々の行政に於て科學的基礎の上に計畫を樹て實行を進めて行く事に努めて居るのは他國の行政家に對して有益なる參考資料とならう。

私がソビエツト・ロシアで尤も興味深く視察したゴスプラン（國家計畫局）は尤も科學的組織力を傾けたものであるが、これは後章に詳しく說くこととする。然らば露西亜は今後自力を以つてこの國難を打開し、現在の政策を變更せずして勞農百年の礎柱を樹て得るやと云へば、私は必ずそれは遣り遂げると思ふ。勿論露西亜は現在に於て財政が困難であり、また財源の捻出に於ても相當苦心があらふと思ふが、第一にソビエット幹部が何れも國難を突破した人々たちだけに信念と勇氣と實行の點に於て他國政治家の模する能はざる性格をもち且つ訓練を經へ、尚一般民衆も自分の國が難局にあるといふ深い考慮と覺悟があるから諸外國人の想像以上の偉大なる力を此局面に發揮するであらふことを思ふものである。現在獨逸に六億七千萬馬克の外債の外に近く七億萬馬克の借款も出來ることとなつてゐる。これは皆無抵當であることは勿論だ。此點では我日本なぞは到底獨逸の模倣さへ出來ぬ。英吉利にせよ、米國にせよ彼等は資本に於て世界を兩斷し得る實力を有しながら獨逸の此友誼的行爲に對し忸怩として辭づることはないか。露西亜は數年前に於ては西伯利その他に於て我日本の資力提供を熱望し、相提携してその開拓に當らんとするの意志はあつたが、今日では此點が當時に比しそれほど緊密に考へられておるかは問題である。私は今回は水田問題その他には少しも觸るるところがなかつた。しかし好意ある、屈辱的ならざる條件の外資借款については相當ソビエット政治家達により考へられておることであらう。しかし日露の親善をかくの如く物的を基調として進めることは私の欲しないところである。要は國際正義、東洋の平和を基幹として一切侵略政策を離れたるものであつて欲しい。勿論今回のことは私の私人的關渉であつたから別に具體的政策を以つて交渉を進めた譯ではなかつた。そして一國の政治はその歷史、環境、國民性に對應してそれぞれ特異の形態を以つて進展すべきものなるによりたとへ、露西亜が經濟組織、政治組織に於て我國と相容れぬものがあつたにせよそれは深く問題とせぬがよい。そして新經濟策が成功せりとてその價値直ちに他國に移植し得べき筋のものでないことも明かな事實である。我國でも「赤化來」とか、

「赤化宣傳」とかいつて勞農のなすことを一々恐怖し、嫌忌するもの多いが、我國民性はマルクス主義やレーニン主義の研究や宣傳によりてすぐに動搖するが如き弱き根底のものにもあらざるべく、又ソビエツト政府に於ても其國の政治事情をそれ〴〵尊重しをれば支那にてよく問題になるやうに、ソウ〳〵他國の領土で陰謀を企てられるものにあらざるべく、又勞農の大官も私に親しく語つて「別に支那といはず、日本や朝鮮に於ても我共産主義を宣傳することが如きは斷じてしない」と明言していた。私の考を以つてしても實際に於て本國政府が左樣に關與しおれるものでないことを信ずるものである。寧ろ誇大的にいつでも宣傳せられをることが多くはないかと思ふ。今や勞農政府は列國との修交につき最大の關心を有ちつつあるのときだからそうしたことを政府で遣る筈はない。最近勞農政府の外交の標語は「平和」の二字ではないか。この二字に對しても政府者の强行的宣傳はあり得ないことだと認める。ただ共産派の人物が個々に政府を離れてそう云ふ運動をしたことは或はないとも限らぬ、此點私は保證は出來ない。私はいろ〳〵の偏見を棄てて日露支三國が地理的關係に立脚して提携することを切望するものである。

ゴスプランに對する感想

最近四五年間に於ける産業の進展は驚くべきもので、現在では戰前の程度に回復せることは先に述べた通りである。將來に於ても此歩武を以つて發展するならば、同國の前途に横はるすべての難問題の解決は或時期を以つて綺麗に排拭することが可能であらふ。この躍進にはそれ〴〵重要なる因素の存在することゝ思ふが第一にレニンの計劃にかゝるゴスプラン（國家計劃局）の科學的施設が露國をして今日に至らしめしを思ふものである。露西亞革命はレニンを筆頭としてトロツキー、ブハリン、ジノビエフ、スターリン、等經濟學者としても重要な地位を占むる人も多かつたが爲めに、すべての施設が列國の現在機構に對して組織的、科學的であるといひ得る所が多い。このゴスプランは彼の有名な農村電化を始めとして幾多露西亞の前途に對して光明を投げかけた政策を案出した。勿論ゴスプランは執行機關でなく、諮問機關である。勞農政府が百年の基礎をなす目標及事業に對して攻究する機關である。私が大正九年を以つて發表した「大調査機關」と同じく權力のない機關ではあるが、私がその設立に奔走しているときは然しそうした機關に執行權の伴ふのものを欲せなかつた。今こゝに私の計劃とこのゴスプランとを比較せば頗る面白い對象になると思ふ。私の天下に發表せるものは第一に天下の人材を擧げて産業參謀本部を組織し、科學的研究を盛んにし、天然調査、富源踏究を盛んにし日本の日本たらしめ、世界の日本たらしめ、日本の世界たらしむべき企劃で一見、帝國主義の變形の如き觀あるも、決してそうではない、一面に學術的の最高指導權を獲得すると共に、他面外國に於ける「政

洩省」の如き機關として我國百年の大計の爲めに努力し、かねて國際經濟戰の恆久優位者たらしむるにあつた。隨つてその首班には總理大臣を以つて充つるが內容には海外調査と國內調査とに分ち、社會、經濟、科學各方面の權威者を羅致するにあつた。そしてその調査立案の取捨は各省に一任し、調査部は(1)原料問題(2)動力問題（石炭石油水力）(3)、食料及生活必需品の生產、及分配問題(4)、人口問題（移民、殖民等）(5)外國貿易の統一(6)、勞働問題、體育及體力問題並社會政策(7)、實業界殊に勞働者の「エヂユケーシヨン、カンペーン」(8)、危險思想各種の社會思想國家觀念並に之に對する國家の對策(9)、國際的經濟、產業、工業及勞働通信(10)、商業會議所の連絡及協力、科學的試驗研究所の連絡及協力(11)、金融問題、經濟的動員原則の問題(12)、船舶問題並道路、運輸交通問題等にあつたのである。そして其經費は五ケ年を一期として、繼續費として要求し一年間僅々五百萬五ケ年で貳千五百萬圓であつた。翻つて勞農に於けるゴスプランの機制を見るに、現在では人民委員會の部屬としカリニン氏の統制の下に「改造部」と「總務會議」とがある。改造部は燃料課、水力（灌漑）課、電化課、建設課、建設整理課、區劃整理課、會議事務課に分れ、總務會議は世界經濟部、統計課、豫算財政課、內國貿易課、外國貿易課に分ち、生產部は工業、運輸農業に分ち、更に學術顧問部、調査成績委員會、土地測量課、稅率課、出版、法律課、その他がある。現在では約五百人の部員があり、局長は電氣技師である。これ等の機關によりて勞農露西亞の進むべき方向の調査を嚴密にし、一面には現制度に於て弊害あるものをドシ〳〵改革し以つて國礎を千年百年に安泰ならしめんと欲するのである。先に述べたるが如きこのゴスプランには權力なく、執行力なきものであればここによりて調査されたるものは立派な案として、それに施行に干する意見等を加へて各省に配付するのである。各省に於ては更にその採擇を省議にて決行してから實行するやうになつている。この機關のためにどれほど露西亞の前途が科學的に、組織的に根强くなつたか、そして同國の將來がどれほど光明づけられたかは讀者の既に承知のことゝ思ふが、彼の農村電化のみによりてもどれほど能率を擧げ得たかゞわかる。一國の經綸は單にその日暮しの役人どもでは出來ない。學術でも各方面の蘊奧を極めた人や、いろいろ實行の衝に當つた人が專心苦慮して成れるものでなくては百年の大計を見ることは至難である。この計劃と私の計劃とはすべての方面に於て一致し、そして成案を得たのは私の方が一足先きであつたのである。今ゴスプランの組織を彼地にて一瞥し、そしてその成績が勞農露西亞の前途に樹てた拔群のものあるを思ふと私として多大の感慨に堪えなかつたのである。我國でそうした計畫のもとに國事を進めなくては前途憂心すべきものが必ず到來すると思ふ。

スターリン觀及共產黨員觀

共產黨員は六十萬人內外であり、それに露西亞の人口は一億四千萬

にも遇するのである。私はこの現象を面白く觀察する所があつたが、何にしろ共産黨員は昔の封建時代の武士階級の如きものである。たゞ彼等黨員の節制は比較的よく行はれ、黨員として利權、權利を要求する所なくして義務を盡す觀念に徹底せるかの觀がある。私はこの所が面白い所であると思ふ。そして大臣連も自ら奉ずること薄く死を賭して國務に獻身的努力することが特色中の特色である。たとへば大臣の俸給にせよ二百五十圓である。尤も交際費は他に少量はあるのだが世界中尤も低給であることは云ふまでもない。唯だ私が觀察したうちで「宗教政策」と、「婚姻及男女間の道德」については判斷がつきかねるものであつたが、他は概してそれぞれの理念の下に進展しつつあることを思はせた。而して共產黨員をつくる爲に少年（ピオネル）を訓練陶冶して國士としての特殊的教養を與へつつあることには少からず感ぜしめる所があつた。これ等の少年は何れも嚴格なる品格の試驗を受けて少年團員となるものであつて他日レニン、スターリン、トロツキー等革命の將士の沒後、國家を擔當して行けるだけの教養をなすのが任務であらうと推察せしめた。それから私はスターリンとも三回ほど逢つた。彼は私との最初の會見劈頭に於て「私は外交官でないから、秘密はないから……」といつた。彼の政治家としての機略あることはこの一言の解剖にて判明するが、彼は勞農最重要の地位にあるだけ才幹の見るべきものがある。先づ我大久保利通公に髣髴せる保守的色彩の下にレニン歿後の共產勞農を統御して行くだけの風格と力量があるやうに見えた。そして最初會見するときチチエリン、カラハンをも交へて四人會同のつもりであつたが、彼スターリンは「あなた及あなたの尤も信用さるる通譯のみにてゆつくり逢ひたい」と云つて遂に唯の二人で會見したのであつた。彼に比すれば左翼の巨頭トロツキーは西郷南洲翁にも比すべき地位で、そしてその性格も政策も南洲翁に酷似し、そして當時の南洲翁の失脚をそのまま露西亞に現前せしかの思ひがある。それは維新とか革命とかの荒療治がすみ、文治派の擡頭するときは保守派が勢力を得る、トロツキーはカーメネフ等と共に新經濟政策の施行に斷乎反對して除名された。私は彼トロツキーの失脚をかくの如く觀察して意味深く考へ且つそうした感想で彼のトルキスタン落ちを見たのであつた。又玆に勞農政治家の清貧を語るべき一插話は私と關係深きヨツフエ氏が待命療養中政府より給與さるゝ額が月々二百圓內外である爲め海外で療養することも出來ず遂に悲慘な最後を遂げたことである。この事については氏の遺書中に詳論してあると聞いたが、建國の元勳に治療費さへ不足勝ちである。又、トロツキー氏は流刑中は何等政府より支給さるるところがないと聞いた。

私はこの機會に於てソビエット政治家に就て一言するであらう。政府當局者は未だ春秋に富む人々が多いが一概に年の割に老けておるかの感じをさせた。尤もこれ等の人々は年壯にして偉大なる抱負の下に困難に當つたのであるからそう云ふ現象は當然だと思ふが、何にせよすべての人が身體上に、そして思想上に非常な無理をなし、一身の健

康の如きは獄中になかつた故であらう。レニンの如きも四十八歳にして斃れたのであるから現在の當路者は何れもそれを中心とした年輩であり、そして夜も晝も見さかひなく働く。チチエリンの如きは活動家中の活動家である。スターリン、ルイコフ皆然りであるが、商務大臣のミコヤンは年歯未だ三十五ときいておる。この人は顔色が青く一見神經衰弱症を思はせるほどである。私はこの人とも話した「先輩は皆牢獄と追放と放浪の生活とでいつでも困難と壓迫のみを受けてゐたから皆早世した、我々も行くさきさう長くは生きられない」と彼は述懐してゐた。斯樣の人のみが中心となつてゐるのであるから、忍耐、克己の觀念と實踐とは自ら他と異るものがある。かかる人々のみが國務をとつてゐる隣國を有する我々は大に考慮するところがなければならぬ。それから新經濟政策施行以來一般にソビエット政治家が理論よりも寧ろ實際的に進む傾向が著しくなつたことである。一つの指導理論に囚はれておれば實際の政治といふものが二の次になる。これは彼等が貴重なる經驗の結果茲に至りしもので我國でも此點を特に考慮する必要があるではなからうか。

歌人としての九條武子夫人

佐佐木信綱

一

僅に三十日以前には親しく言問ひかはした人を、今は故人として語らねばならぬのは、傷ましい極みである。

九條武子夫人は、多角的に各種の方面に才能のすぐれてゐた人であつて、宗教界に、婦人界に、社會奉仕の事業に、その足跡を殘して居る。文藝界に於いても、戯曲洛北の秋は帝國劇場に於いて上演せられ、佛教音樂の歌詠を作り、また新興の舞踊に歌詞を與へたりした。

こゝには歌人としての夫人に就いて、いさゝか記すこととする。

二

古來女流の歌人は多い。記紀時代には、仁德天皇の皇后の烈しくして熱情の籠つた御歌を始として、三形采女の流麗な長篇があり、萬葉には、才氣のほとばしるばかりの額田王、熱烈にして巧なる安倍女郎、哀愁の心の切なる茅上郎女、風流の才媛大伴坂上郎女等がある。

更に平安朝に下つて、小野小町、伊勢、和泉式部等の、或は美しく華やかに、或は切にして燃ゆるが如き諸作を留め、院政時代から鎌倉時代にかけて、平家と運命を共にした建禮門院右京太夫、また式子内親王、俊成女、おくれては永福門院等のすぐれた歌人を出してゐる。更に降つて江戸時代に入つては、賀茂眞淵の縣門に、倭文子、よの子、筑波子のいはゆる三才女があり、縣門と相對峙した香川景樹の桂園には、柳原安子がある。幕末には、京洛に太田垣蓮月、筑紫に野村望東尼があり、共に尼ではあるが、蓮月は淸くみやびやかに、望東は強く雄々しい詠を爲してゐる。明治になつては、從來の傳統を代表するものに稅所刀自があり、新興の歌風を語るものに與謝野夫人があつて、いづれもわが國の歌史の上に重きを爲してゐる。

以上は女流歌人中のおもなる人々を擧げたのであつて、九條夫人をこれらの人々の間に加へるには、いまだしいと感ぜられもするが、しかもその特殊の境遇と環境とから生れた歌に就いては、後の文學史家をして傳ふる所あらしめるであらうとおもふ。

三

特殊の境遇は、しばしばすぐれた歌人を作るものである。上に擧げた女流の作家中に見ても、これを求めることが出來る。

夫と契んだ中臣宅守が、罪を得て、越前國に流される運命に會したのは、狹野茅上娘子である。

　君が行く道の長手を繰り疊ね燒き亡ぼさむ天の火もがも

　これは、宅守が流されて行かむとする道の長きを思ひ傷んで詠んだ歌で、歌もまた火のやうな熱が籠つてゐる。

　歸りける人來れりと言ひしかばほとほと死にき君かと思ひて

君が歸るを待ちつつたやすく人に欺かれて、しかも失望に終つた或日の情景が躍如として、讀む者をして涙を催さしめる。

　吾が背子が歸り來まさむ時のため命殘さむ忘れたまふな

いつまでもと君を待つてゐる心がよく窺はれる。史に傳ふる所によると、宅守は後に罪を赦されて京に還つたが、茅上娘子は、果して命を全うして再會の歡に浴したかどうかを傳へない。

驕る平家は久しからず、一門を擧つて西海に落ちて行つた中に、建禮門院右京大夫が、命をかけて契つた平資盛も加はつてゐた。

　波風のあらき騷ぎにただよひてさこそは安き空なかるらめ

波の上に漂へる夫を思ひやつては、その心もその歌も共によるべき歎きに流浪してゐる。

　かばかりの思ひに堪へてつれもなく猶ながらふる玉の緒も憂し

思ふ人は遂に歸らず、むなしく底の藻屑にと聞くに、かねて思ひしことながら、ひたすらはかなき命のみを留めてゐる歎の深さは、千尋の海も猶淺しといへよう。

九條夫人が十年獨居して遠人を懷つた作には、沈痛極まりなきものがある。金鈴一巻は、その消息を語つてゐる。

四

夫人は大谷家の出である。十年獨居の日は、多く京都なる西本願寺に過された。その本願寺に於ける生活を歌つたものには、

　緋の房の襖はかたく閉ざされて今日も寂しく物おもへとや

大廣間の襖にはうるはしい緋の房がついてゐる。しかし夫人は、その閉ざされた日の寂しさを歌つてゐる。

　くれて行く雨の書院にひとりゐて聞くもかなしき鶯のこゑ

書院のうちには人げがなくて、ただ鶯のみ訪づれてゐる。

　高廊下階段のぼる三尺のわがふり袖のおもたかりしも

追憶は華やかなりし少女の時代に遊んでゐる。しかも寂寥の來ることは甚だ速かであつた。

時としては、生母圓明院のをらるる東山の山莊に過した。ここもなほ寂しき國であつた。

　ゆふがすみ西の山の端つつむ頃ひとりの吾は悲しかりけり

夕陽は、この麗人を照してゐる。しかも麗人は悲しみに傷んでゐる。

　昼しろき秋の夜なるを今のこゑ梟のごとし寂しき夜かな

寂しき西大谷の廟のほとりの麗人の生活は、静けさを極めたものであつた。

かくて四季の風物を詠じた作にも、野景の歌は少くて、ともすれば独居の寂しさが先立つてゐる。

　元旦の光みちたる鴻の間に君なき春を久しとぞ思ふ

鴻の間は本願寺の一室である。

　見渡せば西も東も霞むなり君はかへらず又春や来し
　遠つ人たよりはあらず正月もなかばとなればものはかなかり

天地は春であつても、夫人には春はまだ来なかつたのである。

　三夜荘父がいまし春の日は花もわが身も幸おほかりし

父君明如上人の逝去の作。伏見桃山なる景勝の地に建てられた別荘は、歌に緒に、夫人が幼い頃の美くしい夢をはぐくんだのであつた。

夏の歌には、

　初夏は春よりもなほ独居のほとほとつらく胸にせまりく
　ほととぎす吾にひとりの君ありといふことさへも忘れて聞きぬ

秋の歌には、

　空高う月ののぼるも知らざりき物もひしづみ幾時か過ぎし
　月夜かなおもひはてなきこの身にはあまりかなしくよき月夜かな
　へだたりて同じ月見る君とわれ人間の身はいとかひもなし

嫦娥の月は、未だたやすく夫人の上に照らなかつたのであるが、その想華はやうやうに沈潜して、

　あふぎ見れば月は澄みたり忘れなむ涙すとても何のかひぞも

の如き観境にまで臨んでゐる。

　夜の雨にまじる虫の音わが胸に白刃のごとくいたしつめたし

秋の夜の雨のおと、草むらの虫のねは、詩人思索のおもひをいだく、うつくしい胸に、冷たう響いたのである。

　霧ひらけば寂光院のものがたり涙ぐましも秋の夜にして

夫人の境遇に居て、平家物語に出でたる建礼門院の御上を思ふ、はじめて、涙ぐましもの句が適切なるを覚える。

冬の歌にはまして寂しいものが多い、

　絵ぶすまの呉春の人に冬の日がうすらうすらとさすもわびしき

呉春の筆になる名画も、年を経、手ずれて色うすれたに、うすらうすらさす冬の日のわびしさ。

　ふる雪に今日のゆふべのとく暮れてかなしき空をひとりながむる
　君なくてうつろの身なり春くとも年はゆくとも要なしわれに

寂しさに泣き、寂しさに生く。寂しさの中に徒らに年は暮れ年は来るのである。

夫人の歌に怨恨、疑惑の相の多いのも、また止むを得ぬ所であらう。

　かりそめの別れと聞きておとなしうなづきし子は若かりしかな

遠く海外にてのかりそめの別れ、遂に十年の別れとならうとは、誰か

しも思ひかけよう。

いくとせを我にはうとき人ながら秋風吹けば戀しかりける
凡界のかなしさ故に見るを得ず聲もとどかぬ二千里の外
十年をわびて人まつひとり居にざれどといはんすべも忘れし
月すみに追ひのけられてそれのみか忘られはてし我にやはあらぬ
わが胸にかへらぬ人かあまりにもはかなし聲もまぼろしもなき
家を捨て我をもすてむ御心か吾のみ捨てむおんたくみかや

烈しい戀の心に悶えては、これらの作がつぎ〳〵に生れたのである。

うらみごときこえむ時を待つ身にはこの玉の緒もたふとかりけり

さきに引いた茅上娘子の又の會ひの爲に命殘さむと歌つたのに比ぶべき作ながら、これは怨言を述べむ爲に命を惜しんでゐる。

たたけどもたたけどもわが心知らずびあの鐵壁は氷のごとし

憂を晴らすべき音樂も、ただに心をいたましむるのみ。

うたがひはかくて深くもなるものかあまりに人を思ひせまりて
をのこそいとはしきものそれよりもいとはしきものは女なりけれ

疑惑の相は、遂に身を心を愛したのである。

たま〳〵都門を出て、宇治に遊び、

水色の瀬の日傘し宇治川のつつみをあゆむ二人のをんな

と輕き心になりもするが、また宇治の姫君の物語を思ひやつては、わが身の上に引きくらべて、

宇治川の河音聞きつつ暁きけむいにしへびとに似たる寂寞か
そのかみの大姫君もわがごときうれひにひたりながめし夕日

と、深き物思ひから離れることが出來なかつた。

また海に遊びても、

茫然と囚はれ人は海にゆく海は悲しきものがたりいふ
紺碧の波の底よりうき出でしわれとし思ひ春の海みる

の如き、沈んだ作を殘してゐる。

思ひあまりては心に惑ふところが多い。

罪業の闇とこしへに深うして聖者も我をすてたまふかや
さとされて牢獄のうちに入りし子は十年にしてうたおひを知る
胸の火か魔の火か知らずわれゆかむその火の光いざなふ方に

迷ひつつ、疑ひつつ、黒闇のうちにさまよへる歳月を經た。しかしこの辛き試練の後に、理智の光は輝き、あきらめの清い寂光の都は來た。この自省を重ねてここに到つた點に、夫人の力があつた。

いとほしと悲しとかつはおもへどもつよきしもとにわが心うつ
黒髪のその一すぢのふるへだにいかで見すべき見すべしやわれ

みづから責め、みづから教へて至つた國は、さすがに明るかつた。

八重のさうび眞紅に咲けば君あらぬ部屋もほのぼの明けゆく心地
錠口の杉戸のひまゆあけぼのの光にほひて初春はこし
ひとたびの答こそげに尊とけれ生死の道はいと輕きもの
生るるも死するも所詮ひとりぞとしかおもひ入れば如何もあらず

他力の信は遂に夫人を救つたのである。しかも世人は、夫人の上に就いていろ／＼に口さがなかつた。

書く人もいふ人もはた狩はあらずものがたりめくわが宿世ゆゑ

わづらはし明日の人はあざみ行きぬ夕べの人はたたへて過ぎぬ

人の世の毀誉と褒貶と、畢竟水の上に文字を書く戯れに過ぎない。わが心こそ唯一の尊き寶ではある。夫人は今やしかとこの寶を掴んだ。

ある時はまた、女らしき心にひたつて、

もとゆひのしまらぬ朝は日ひと日わが髪さへもそむくかと思ふ

ものうさに二日こもりてつくろはず我が黒髪も悲しかりけり

するすると衣桁の衣のおちて又もとの沈默にかへる春の夜

と歌ひつつ、なほ底を流るる寂しさに離れ難い。時としては京阪情調の歌も見出される。

木屋町の夏のゆふぐれうすもののたもとにえりに吹きし夕風

京言葉ふさはし今宵宵宮の祇園ばやしのながれくる町

廣重の水と町とをおもほゆる道頓堀のある夕べかな

眞宗婦人會長として、ここかしこの旅に自然に觸れては、

あなたふと一萬尺の連峯にけふの日しづみたそがれゆくも

まなかひに金色の雲かがよひぬ忘られがたき夕べなりけり

と、莊嚴なる高嶺に對ひ、うるはしき夕雲の光を仰ぎて、新しき信仰を叫び、

わがこゝろのいとうつくしう聞ゆなり川ふところの秋風の原

げに金鈴をまろばすが如くなりし夫人の聲音も思ひ出でられる。この玉の聲に救はれし法の子の數やいくばくであらう。

たふとしや千草もわれも光あり山に入らむず夕日のまへに

輝ける夕陽を浴びて立てる夫人の姿は、此世からなる極樂淨土であつた。しかもみづから省みては、法徳のひたすら足らざらむことを憂へてゐる。

この身これ尊くあるか否あらずぬかづく人を尊しと思ふ

あさましくはた尊しといふべきか千の瞳のわれによる時

大自然と合致し、或は達觀せる作には、

あな尊とこの夜の月の美しさややに天に近づくここち

何事も人間の子のまよひかや月は久遠のつめたき光

千萬の寶はむなしたふときはおやよりつづくただこの身のみ

金鈴一卷は、この千萬のといふ歌を最後として閉ぢられてゐる。あだかも、迷ひ迷つた末に行き着くべき光明の地を見出したかのやうに、靜かに卷き收めてゐる。

いま金鈴の作を觀了つて、更に次の無憂華に移らう。

大正九年、夫君英京より歸られてから、東京に移つて築地別院に住んだ。築地河岸の流れは、京の水とはかはりて濁つてはゐるが、逝く水の停まらぬ世の姿を寫して、強く人の心を打つ。朝夕に近くひゞく讀經の聲は、夫人の心境を一轉せしめた。

幼くより培はれた宗教の心と、渦卷くばかりの東京の世相とは、遂に

に社會事業の方面に夫人をして起たしむるに至つた。環境は歌心を一轉せしめた。しかも金鈴以後の作は、震災に際して身を以て逸れた時に可惜しくも失はれた。無憂華に收められた作は、その後に詠み出だされたものである

今この書に就いて觀もて行かう。

おほいなるものの力にひかれゆく吾が足あとのおぼつかなしや

卷頭の色紙なるこの歌は、佛のみ心のままに、人を救ひ法をも說くおのが力のおぼつかなさを省みてゐる。これ無憂華全卷に通ずる心もちである。

あはれわれ生々世々の惑を知らず慈眼のまへに何を甘ゆる

みづから責める言葉は、やがて人を教ふる言葉である。

人はわびし身をかくすべきすべ知らず蟲は木の葉の色ごろも着る

安心を知らざる人はあはれむべきである。

まぼろしの柱ありけり女あまた命をかけてやすらひよれり

幻の柱をたよりとするもの、これ世の人皆の相であらう。ただ作者は、その柱に懸けられた鏡によつて、自己を見てゐる。

わが名をばよびて人らゆくよばるるをいとふならねど何か寂しき

あひあはぬ身と心もてさびしくもわれまたいひぬ道理めくことと

これらの歌にもみづから深く内に省みてゐることが知られる。

とりずまに波はあらへり人の子は又こりずまに足あとをつく

道を說くもの絕えざれども、人はなほ罪業を重ねてゆく。遂に救はれざる世界であらうか。法を說くものの常に襲はるる悩みである。

ゐややかにめぐまるるもの皆受けむ新らしき朝は天足らしたり

つまさきに蹴りし小石の音いたみ心うたれてかへりこしはや

今日も亦しろき紙なり無為なりと短かく書きてとづるわが日記

かなしくも心のおもりかけて見むはかりの錘は何もてかつくる

まづしさも富も忘れて人は皆ねむれり深夜のしづけさ安さ

天地のなしのままなる光のもとに、やすらかに息づき、しかもなほ事に觸れて自責の念のいたましきものがあるのを見る。かくして說法者としての信念は築かれゆくのであつた。

この集にもまた女らしい歌が見出される。

おもはゆみ撫子の花をかがみよりかたへにやりて愛すくあした

黒髪ははちらはしげに見ゆばかり瑠璃紺青の朝顔の花

世の人は美しき人と見てゐる夫人の姿をも、その心に就いて常に内省を重ねてゐたやうに、容姿をもみづからは花に比して恥ぢてゐる。

たちあがる裾にふとしもすべり落ちしはさみの鈴のよき音のさえ

日常の瑣事に、やさしい歌心が動いてゐる。

自然にふれての作には、

かたことと戸のそとにきて裏山の薄にはしる夜の秋風

長き夏の西をおほひしとちの葉のやがての別れそれだにさびて

陽をうけてひら〳〵舞へる赤き葉の見る間落ちずて風と遊べり

追風に白帆は去るか花びらのちる思ひより心かろらに

自然現象のこまかい所を見、しかも其處に心があるやうに歌ふのが特色である。

旅中の作としては、南方支那に遊びて、

　聲かくれどゑみて答へず曲廊にさざ波はよすゆるらゆるらと
　かたへには清水流れてほそき道を竹林くぐり靈隱に出づ
　黍の葉のすがすがしもよゆけどゆけど蘇堤は長し橋いくつ越え
　野の川に家鴨追ふ子が藍色の衣あかるしも日のさしてあれば

歌に繪にふさはしい江南の春は、除蓮記が店に扇子をあがなうても、西施が彈琴のあとを訪うても、數々の作がある。北海道をおとづれては、

　夕べせまる防雪林のうすやみにましろく高き山うどの花
　あかしやの並木のそよぎ初秋の灯のまたたきも澄める町なり
　野葡萄の垂り房みのるひろき丘に人に飼はれてあそべる狐
　飼はれつつかなしき性はおどおどと栖む穴をほれりみづから

區劃整然たる札幌の街のあかしや並木、大沼のほとりなる養狐場、いたるところに歌を得た。また十和田湖に遊びては、奥入瀬の森に溪流のささやきを聽きつつ、

　あまりにも森はしづけし人間のあやまちて入りし境かと思ふ
　ひえびえと森のにほひのよどみおもく仰ぎ見れば空はただに高しも
　つひに斧の音きかであれこの森になほ千年の安けさよあれ
　何といふ足れる姿ぞ山も湖もはた生ふる木もおのづからゆゑ

これらの作を見ても、自然に對する深き愛の籠つてゐることが切に感ぜられる。

五

現代の歌壇の傾向を見るに、或は萬葉の歌風の一部なる自然の叙述にかたよりて十人一様の作をなし、或は口語を用ゐ形式を破るに急にして、眞に胸のおくがより涙と共にわき出で、愛と共に生れ出る抒情詠歎の作をかへりみない風がある。歌は本來十人十様のものであるべく、その個性があらはれ、環境から成つた作によつて、作者の眞の面目をうかゞひ得るものである。さる意味に於いて、上に拔抄せる夫人の作のあるものは、前に記せる古來の女歌人の作と伍して、恥しからぬものがある。

夫人はすべての方面に絶えず自らを築きあげて行く人であつた。作歌に就いても努力精進してをられた。將來皆社會の種々相にふれて、更に一轉化し、再轉化することであらうと思はれるに、今や俄に泉界に去られたのはまことに殘り惜しい。

昨日、夫人の母刀自の在京せられるのを訪ふべく、下落合の家を訪うた。庭の松にさす日は春めいて、小鳥はうらゝかに歌つて居り、室内のソフアーには、その愛玩した人形の二つ三つが、ありし日の如くにほほゑんでをつた。しかも夫人の聲も聞えず、姿も見えない。この一月十二日に拙へ來られた詠草の中なる、

　こし方もゆく末も見ず玉ゆらのわれと思ふに生きの尊とさ

の歌が、涙と共に浮び來たことであつた。(三、二、二〇)

小賣組合の裏切者

前田繁一

（一）

最近豆腐屋が組合規約を破つて豆腐を安く賣つたとか、ソバ屋が組合を脱退したいと申出たとか、云ふ噂を聞いた。左樣か思ふと自轉車屋が「自轉車屋は儲け過ぎる。如何なる高級車と雖も諸材料から組立料まで加へて七十圓足らずで濟むんだ。それを百三十圓以上で賣つて居るのだ」と云つて、小賣商組合に對し反旗をひるがへし、暴利主義の自轉車商賣を改革すると云ふ旗印で、薄利多賣主義を宣傳するものも最近に現はれた。珍らしい現象であり面白い現象である。小賣業者に取つては大なる脅威であり、消費者に取つては一つの福音である。而して又小賣業者に對しても消費者に對しても、自覺を促す所の一個の警鐘であると云へば云へよう。

（二）

元來同業組合設立の趣旨は、同業者相警めて粗製品の濫造を防止し、粗惡品の高價販賣に依つて同業者に及ぼす迷惑を排除し、以て相互の信用並に利益を保護し助長するに在る。とは云へ此の趣旨を忘却し、品質の改良や粗惡品の排除は單なる組合の裝飾的な規約として輕視し、只管販賣價格の協定と高價維持に依る自己の所得の增大を計る事が組合設立の唯一の目的なりと心得て居るものが多い。殊に小賣同業組合に此の不心得の存在が多い樣である。之れ等の組合は卸値が下落しても小賣値を容易に下げないが、萬一卸値が少しでも上れば直ちに小賣値を上げる。

（三）

東京市内の物品販賣業を數へて見ると七萬一千七百三十二店舗の多きに達する。從つて之れを市民に割當ると一店舗當りの市民が戶數が僅かに六戶、人員で二十八人に過ぎない。此の内主なるものを拾つて見ても

販賣物品別	店舗數	一店舗當り市民世帯數	一店舗當り市民數
小間物、西洋雑貨、履物、雨具等	六、〇五三	七一	三三〇
菓子、パン	五、九三七	七二	三三六
酒類、調味料、清涼飲料水等	五、二一四	八二・四	三八三
魚、海草類	三、八五一	一一一・六	五一八
蔬菜、果實	三、五八五	一一九・九	五五七
燃料	三、〇九三	一三九	六四五
鳥獸肉類	一、〇三二	四一六・五	一、九三四

と云ふ事になつて居る。この大部分が小賣業である事は何人も想像出來よう。小賣業者が多過ぎる。餘りにも同業者が多過ぎる。

（四）

商工省が調査した東京市の物價に據ると、木炭の櫟丸黑角俵正味五貫目が秋葉原レール渡で一圓五十錢のものが、消費者の臺所で二圓二十錢に賣られ、小賣商の利益が三十七錢と云ふ事になつて居る。又卸賣りが一圓の牛肉も小賣では二圓五錢になつて居り、一圓で卸される鷄が二圓七十八錢でなければ消費者は之れを口にする事が出來ない。卸賣値が一圓の鯖でも小賣では一圓二十五錢となり、卸値が僅か一圓の醤油が三圓四錢で小賣りされ

るなんかは、たれが昨年十二月末に於ける事實だと思ふ事が出來よう。

（五）

歐洲戰時に農商務省が小賣値段の協定廢止を力說し、聲を枯らして商人の自由競爭を奬勵しても何等效果を見なかつた樣に、一般國民の收入が豐富で購買力が旺盛であり、商品は羽根が生へた樣に賣れるし資金の調達にも餘り苦心を要せず、從つて商品の賣り急ぎを必要としない好景氣時代は勿論、或る程度までの不景氣時代に於ても此の價格協定は期せずして嚴守される。然し今日の如く不景氣は益々深刻化し、國民の收入は減り購買力が減じ一方問屋や卸賣屋が資金の手詰りから從來の樣に小賣業者に對する代金の取り立てを寬大にして居られなくなり、小賣業者は購買力の減退の爲に商品が賣れない上に、問屋や卸賣屋の仕入代金の取立が酷しくなり、加ふるに昨春の金融恐慌以來資金の偏在益々甚だしく、資金の調達がいやが上に困難となつた現在では、今更組合規約などは構（かま）つては居られなくなる。薄利であらうが少しでも早く手持品を賣らねば利益も擧らず、利益を擧げねば生計も營めず賣つて金にせねば問屋や卸賣屋の支拂は勿論、新規の品の仕入れにも事を欠く。況んや前述の樣に同業者が餘りにも多い。購買力の減少した僅かの消費者を自分の方へ引付け、少しでも早く品物を金に變へようが爲には他の同業者よりも安く手放さねばならぬ。斯うなると好景氣時代飛ぶ樣に樂に賣れた時分や、左程金融に困らなかつた時分にこそ利益增大機關として有難かつた組合も、今では逆に營業妨害機關ともなり足手まといともなる。其處で協定價格違反者が出來、組合脫退者が出來、裏切り者も出來る譯である。

（六）

小賣業者に組合規約違反者が出來たり脫退者が出來ると同時に、消費者側には最近相當變つた現象を見る樣になつた。即ち消費經濟が喧しく云はれ、過多に介する仲間商人を排して直接魚市場や青物市場などに買出しに行く者が最近殖えたのがそれである。この一事を見ても一般の消費者が、減少した購買力を如何に有效に使用せんかに苦心するに至つたかを語るものと云へよう。歡迎すべき事だ。

春五題

吉井勇

かにかくに祇園は戀し寢るときも枕のしたを水のながるる

一　祇園の夜

私が京を訪れたのは、明治四十年の八月の末、九州の旅の歸り途に、與謝野寛、木下杢太郎、北原白秋、平野萬里の諸君と一緒に行つたのが最初であつた。が、その時は九州も天草の果まで往つた、一月近い長旅のために、すつかり疲れ切つてゐたので、受けた印象も甚薄い。茶屋の名を書いた軒行燈が仄黄いろく點つた、先斗町の通りが氣味の悪いほど狹くつて長かつたことや、川端の或る茶屋の二階で始めて見せて貰つた舞姫が案外美しくなかつたことや、大原へ往く道すがら妙に旅の寂しさを覺えたことや、そんなことが斷片的に思ひ出されて來るだけで、さう云つた京の印象よりも、二六新聞に連載したその時の紀行「五足の靴」にも書いたやうに、歸京の汽車中で偶然米原から乘り合はせた、美しい三人姉妹の方に、どの位強く心を惹かれたか分らなかつた。

「星が飛んだね。」

如何云ふ意味だか忘れたが、隣席に座してゐた木下杢太郎が私に向つて、揶揄するやうな調子でかう云つたのを覺えてゐる。

私が二度目に京を訪れたのは、それから三年ばかり經つてからで、たしか明治四十三年の五月の始めのことだつたと思ふ。その頃出てゐた文藝雜誌「趣味」の五月號に、二十枚ばかりの戯曲「偶像」を書いて、始めて原稿料といふものを手にした私は、それは僅かに金十圓ではあつたけれども、何か後で思ひ出となるやうなことに使ひたかつた。で、いろいろ考へた末、それだけ持つて京都へ往くことに極めて、手提袋をひとつぶら下げただけで家を出た。が、汽車の時間にはまだ大分間があつたので、その時分みんなが毎日のやうに往つてゐた永代橋畔の「都川」と云ふ鳥屋へ寄ると、そこには小山内薫、荒畑寒村、安成貞雄の諸君がゐて、拳銃を肴に酒を飲むと云つたやうなことがあつた果、小山内氏と私とは到頭某所に泊らなければならないやう

なことになつてしまつた。かくして私が二度目に京を訪れた時には、私の嚢中は殆んど空しかつたと云つてもいいのである。

それで先づ私が飄然と訪れたのは、その當時京都の高等學校の獨逸語の先生をしてゐた茅野蕭々君の家であつた。が、私は茅野君の家には殆んど泊らずに、鈴木鼓村、岡本橋仙などの諸君とともに、祇園や宇治のあたりで酒ばかり飲んで三春行樂の時を過した。都踊はもうなかつたけれども、鴨川踊の提灯が、加茂川の水に艶めかしい灯影を映してゐて、先斗町の茶屋茶屋の前には踊見の人波が流れてゐた。しかし闌を過ぎた京の春は、何處かに身に染みるやうな寂しさがあつた。殊に或る夜祇園の或る家に泊つて、直ぐ枕の下を流れてゐるのではないかと思はれるばかり近い、白川のせせらぎの音を聴きながら、何時までも眠り付くことが出來なかつた時なぞは、堪へられないほどの寂しさを感じて、幾度深い吐息を洩らしたか知れなかつた。蘭燈の仄暗い灯影に見た、あちら向きにすやすやと寢入つてゐる舞姫の京風の髷も、その夜は涙を誘ふもののやうに、いぢらしく哀れに私の目に映つた。

「人の命てほんまに果敢ないもんどすなあ。あてえそれを思ふと、もうお花に往く氣も何もないやうになつてしまふのどつせ。いつふつと死ぬやら分らへんと思ふと、あてえもうほんまに心細うてならんのどつせ。」

この夜もまだ宵のくちに、舞姫の口から聴いたそんな言葉を、白川のせせらぎはまた繰り返して、囁いてゐるやうに思へるのであつた。

おあさ

一力のおあさに聴きしはなしよな身につまさるる戀がたりよな

私が三度目に京を訪れたのは、これから二三年經つてからの、都踊のある時分のことであつた。その時私はもう小説「祇園」の作者として、京で人氣を擅にしてゐた長田幹彦君と一緒に出懸けて往つたの、だが、何と云つても二人とも若い盛りのことだつたから、京阪何日の旅の間、殆んど夜晝の別ちなく、紅燈緑酒の巾で暮らしてしまつた。

それは丁度河合、小織、英等の新劇團が京都で開演してゐる時だつたので、長田君と私とは青年會館で催された、その劇團のための講演會に、出なければならないことになつてしまつたのだが、それがそもそも私の處女講演なのであつた。が、私は演壇に立つても、別に喋べる種がなかつたので、その前晩食を共にしてゐた時に、松居松葉（その時分はまだ松翁ではなかつた）氏から直接聴いた、「茶を作る家」が愛蘭劇の飜案であると云ふ種明しをしてお茶を濁した。多少人が悪いやうな氣がしないでもなかつたが、飜案とも何とも斷つておく、自分の創作の如くにしてあることに、年少客氣に富んだ私は、許し難き正義感を覺えたのらしい。しかし今日ではつまらない悪戯をしたものだと思つて、松翁氏に對しても詫びたいやうな氣持になつてゐる。

長田君と私とが祇園の一力（萬亭）に往つたのは、その講演會の歸

りであつた。長田君はその前にかなり長く京都に滯留してゐたので、既にもうこの家にも、幾度か遊びに來てゐたものらしく、馴染のある仲居もあつて、

「長田はん、どないおしやした。久しうお見えになりまへんな。」

などと云はれたりしてゐたが、私はこの忠臣藏以來有名な茶屋の朱い暖簾を潜るのは、その晩がそもそも始めてだつたので、いくらか寂しい旅情を感じながら、薄暗い廣間の隅にぼんやり座つて、ちびりちびり嘗めるやうに、杯の酒を啜つてゐるより外仕方がなかつた。が、そのうちだんだんそこにある、黒光りのしてゐる柱や、煤け古びた紙襖や、仄黄いろい蠟燭の灯明りに、落付いた親しみが感じられて來ると、やつと私の心は春の夜の祇園らしい艶めいた空氣の中に溶け込んで往つた。

「姐はん、大けに……。」

さう云つて一人々々、或ひは二人位一緒になつて、舞妓達がこの廣間に入つて來るのを、私は唯夢のやうに眺めてゐたが、そのうちだんだん目が酔に潤んで來ると、頭に挿した花櫛の銀房やだらりの帶の金絲の縫が、この世のものではないやうな美しい幻を、まざまざとそこに描き出す。さうなるともうぺちやくちやと囀るやうに喋る舞妓達の京言葉もうるさくなく、かへつて微妙な音樂でも聽いてゐるやうに思はれて來るのである。

その晩は長田君と私とは、到頭そこに泊るやうなことになつてしまつたのだが、その時私に頗る悲しい經驗談を聞かせて呉れたのが、まだやつと二十になつた位の、眉を剃つた痕の青々とした、若い仲居のおあさだつた。それはどんな話だつたか、今ではもうすつかり忘れてしまつたが、けれども、一力と云ふときつとあのおあさの色つぽい目付が思ひ出される。殊にその後私が岡田八千代さんや田村俊子さんと大阪に往つた時、當地の富田屋の稻荷祭に招かれて往つて、不圖そこでやつぱり仲居をしてゐるおあさに出會つたが、それから間もなく死んだと云ふことを聽いてからは、もうこの世では會へないと思ふと、一層しみじみとその人のことが思はれるのだつた。

幟の音

たそがれの角座の幟はたはたと音を紅燈の街にさそへり

目を覺まして見ると、障子に當つてゐる明るい日射で、午をもう大分過ぎてゐると云ふことが分つた。隣りの寢床に私と二人枕を並べて寢てゐた喜多村緑郎君は、もう樂屋入りの時間が來たものと見えて、一人でこつそり起き上がつて、着物を着換へかけてゐたが、私が目を覺ましたのを見ると、

「ああ、僕はお先きへ失敬しますよ。今度は序幕にしつかまつてゐるんだから……。」

と云つて、そのまま消えるやうに出て往つてしまつた。私も起きて

歸らうと思つたが、何しろ昨夜はもう空が白んで來る時分まで飲んでゐたので、まだ醉つてゐるやうにふらふらして、とても頭が上がらなかつた。で、私は起きかけたのを思ひ直して、じつと目を閉ぢてうつらうつらしながら、昨夜からのことを思ひ返した。

さうすると私の目には、昨夜初めてその家で會つた、魁偉な顔付をした上島鳳山君の淋漓たる醉態が浮んで來た。

「さうだ。鳳山君は如何したらう。」

昨日は突然喜多村君を、角座の樂屋に訪れて、打ち出してからこの家へ來たのだが、ここで私は上島鳳山、岡本大更の二人の日本畫家に紹介はされた。大更君にはその前一度富田屋の稲荷祭の時に、ちよつと顔を合はせたこともあつたが、しかしかうして一緒に酒を飲んだりするのはこの晩始めてで、まづ初對面と云つてもよかつた。豪放な鳳山君と磊落な大更君との對照が、私にはちよつと面白かつた。鳳山君は仕事をするために寶塚に一月ばかり往つてゐたのだが、毎日酒ばかり飲んでゐて、到頭一枚も描かなかつたと云ふことで、その夜は寶塚からの歸り途だつたらしい。

「はつはつはつは、よいしよ。」

氣合でも懸けるやうな調子で、杯をこつちへ投げて寄越したりするのに、何處か寛濶なところがあつて、私は始めて會つたにもかかはらず、ひどく鳳山君が好きになつた。それで昨夜はいつもよりも愉快な氣持で、幾枚もの半折に寄せ書をしたりして、徹宵痛飲をしたのだつたが、今また目を覺まして見ると鳳山君のゐないことが、私には何となく寂しく思へた。

「はつはつはつは、よいしよ。」

そんな聲が耳の傍で聽こえるやうな氣がして、不圖目を開けて座敷の中を見廻したが、無論そこには鳳山君の姿はなかつた。唯昨夜も曉近くなつてから鳳山君が、潑剌とした醉筆を揮つて、私のために描いて呉れた「鬼の念佛の畫」が、昨夜の遊びの名殘りのやうに長押のところからぶら下げてあつた。その畫の怪奇な鬼の顔を、じつと見詰めてゐるうちに、私はまたうとうとと眠くなつて目を閉つたが、その次に目を覺ました時は、もう何時の間にか黄昏れてしまつて、座敷には電燈が點されてゐた。

やつと起きて外へ出ると、宗右衛門町の人通りは、宵のくちだけに賑やかだつた。が、私は外へ出ることは出たけれども、別に何處へ往くと云ふ目的もないので、唯ぶらぶらと項垂れがちに、灯點し頃の街を歩いて往つたが、そのうち何時の間にか橋を渡つて道頓堀の劇場の前へ出たと見えて、はたはたと風に吹かれて鳴つてゐる幟の音が、耳についた。

「ああ、さうだ。芝居でも見るとしやう。」

さう思つて顔を上げると、それは丁度喜多村君の出てゐる角座の前で、春らしい櫻の花の装飾りが、眩しく私の目に映つた。

私は暫くそこに立つて繪看板を眺めてゐたが、到頭劇場には入らず

に、また宗右衛門町の方へ引き返して往つた。

銀座回顧

うらわかき都びとのみ知ると云ふ銀座通りの朝のかなしみ

銀座と云ふと私の目に先づ浮んで來るのは、まだ日吉町にあつた時分のカフエプランタンの樂書である。それはもう天井と云はず壁と云はず、べた一面に書き散らしたもので、畫や詩や歌や俳句の外に、警句めいた辛辣な文字などが、誰が書いたともなく書いてあつた。がその中でも最も異彩を放つてゐたのは、今アメリカで映畫俳優として世界的名聲を博してゐる上山草人君の自畫像で、ロンチヤニー式怪貌が巨眼を瞠つて、天井の丁度眞ん中のところから、このカフエに集つて來る多くの人達を睥睨してゐた。

このカフエプランタンは、洋畫家の松山省三君の經營にかゝるものだつたから、自然ここに集つて來るものは、藝術にたづさはる人達がその大部分を占めてゐた。プランタン――即ち「春」と云ふことであるだけに、このカフエの中の空氣は、そんな樂書が一面にしてあつたりするにもかかはらず、何處となく華やかな陽氣さがあつて、夜ももう十二時近くなると、狹斜の巷が近いだけに、美しい女達の姿も見られた。このカフエを舞臺とした艶かしい噂が世間の人の口にのぼるやうなこともあつた。

私もその時分毎晩のやうに、そのプランタンに出掛けて行つては、盛んに飲んだものだつたが、その頃ここに來る酒徒の中には、中沢臨川、押川春浪、小山内薫などの諸君がゐて、殆んど夜毎に痛飲をした。その中でも押川春浪君の如きは、殆んど一つ椅子に腰懸けたきり身動きもしずに、唯一人何ごとかを慷慨しながら、三日三晩一睡もしずに飲みつゞけたと云ふ、逸話的の事實がある。

カフエライオンが出來たのは、プランタンよりも半年ほど遲かつたやうに記憶するが、私はやつぱりそこにも開業の當日から出掛けて往つた。何ガロンかの麥酒が賣れた時毎に、正面にある壁の扉がおのづから開いて、獅子の首が現はれると同時に、猛然として咆哮する――と云つたやうな仕懸けがあつたりして、プランタンとはまた異つた味のあるカフエだつたが、その後何時の間にか正面の扉から獅子が首を出さないやうになつた。銀座と云ふと私は、プランタンの樂書を思ひ出すやうに、ライオンの獅子の咆哮する聲を想ひ起す。

しかし私に取つて最も忘れることが出來ないのは、小山内氏その外二三の人達の中に二人ばかりの女が加はつて、或る晩春のもの悩ましいやうな夜を、プランタンで明かした時のことである。卓子を寄せ集めて、その上にごろ寢をするものもあれば、長椅子の上に醉ひ倒れてしまつたものもあると云ふ、狼藉を極めた一夜だつたが、それでも中に女が交つてゐるだけに、何となく京の雜魚寢を思はせるやうな艶めかしさがあつて、酒に醉つてゐるためばかりでなく、妙に胸のときめ

くのを覺えた。

「あたしもうこれからうんとお酒を飲んでやるの。だつてあたし何だか醉つ拂つてでもゐなけりあ、とても苦しくつて堪らないんですもの。ねえ、關はないでせう、お酒を飲んだつて……。」

さう云ふ女の棄鉢な言葉に、私は何と云つて返事をしたか、今はもうまるで覺えてはゐないけれど、しかし唯ひとつその時女の目に、涙があつたことだけは、今でもはつきり覺えてゐる。女と云ふのは後に桃中軒雲右衛門の妾となつて、旅先で果敢なくこの世を去つた、盲目を千鳥と云つた女である。眞山青果氏の戯曲「桃中軒雲右衛門」の中にも、まざまざと千鳥と云ふ名前で書かれてある。

私はその翌朝、唯一人昨夜聽いた女の言葉を考へながら、春寒い銀座通りの舗石の上を歩いて往つた。

五

醉中夢

櫻ありき櫻のごときひとありき醉へばよく見る春のまぼろし

「まあ、どうえ。きつい氣どすえなあ。ほんまにあんたいけずどつせ。ほんならあてえとう往にまつさ。」

何だか分らないがそんな京言葉が耳に入つて來ると同時に、四邊がぼおつと明るくなつて、振り向きもしずに遠ざかつて往く舞妓の美しい後ろ姿か、朧ろげながら目に映つた。だらりの帶には大きく孔雀の模樣があつて、じいつと見てゐると今にも羽を擴げさうな氣がする。

「誰だらう。誰と今まで何の話をしてゐたのだらう。」

さう思つて考へて見たけれども、如何しても私には、それが誰だか分らなかつた。と、そのうちその舞妓の姿は、だんだん蝶のやうに小さくなつて、遠くの薄明りの中に消えてしまつたと思ふと、今度は急に四邊一面、爛漫と咲いた櫻の花ばかりとなつてしまつた。

「ねえ、如何です。すつかり春になつちまつたぢやありませんか。かうなるとひとつお花見に出駈けたうがすな。長屋中齒を喰ひしばる花見かなぢやあ、如何も始まりませんからね。」

さう云ふ鼻にかかつた聲は、たしかにあの狂人になつた落語家の蝶花樓馬樂に違ひないんのだが、しかしそこには姿が見えずに、唯聲ばかりが聽こえて來るのである。

「變だなあ。如何したんだらう。」

さう思つて四邊を見廻はしてゐると、それまで美しく咲いてゐた櫻の花は、風もないのに散りはじめて、見る間に花片が雪のやうに積つたかと思ふと、そこらは急に暗くなつた……。

私は醉ふとよくこんな夢とも幻ともつかないやうなものを見ることがある。が、時によると私は、こんなものを見ない代りに、前に置いてある杯が、何時の間にか髑髏となり、ぽかんと穴のあいた眼窩から、すうつと一本の莖が延びたかと思ふと、その尖が膨らんで、眞白な百合の花のふわりと開くのを見ることがある。

更に角醉ふと云ふこと位寂しいことはこの世の中にはないと思ふ。

漱石の思ひ出（七）

夏目鏡子述
松岡譲筆録

三十　木曜會

此頃からの漱石は、面會日を作らなければ、のべつ幕なしに訪問客があつて、自分の仕事がおち〳〵出來ないとこぼす位謂はゞ世間的にもなり又有名にもなつて來ましたとですから、今迄の書齋だけの人だつた時と違つて、自然身邊の話も何かと人樣に知れてゐると思ひます。で私もその積りでかいつまんでお話しすることに致しませう。

三十九年も押しつまつてから家主の齋藤さんが仙臺の方から東京へ轉任されることになつたので、長らく住み慣れた家を明け渡さなければならなくなりました。外の事情と違つてこればかりはどうもやむを得ません。そこで家をさがし始めたのですけれども、さてとなると中々適當の家もなく、其上其頃は非常に貸家の拂底してゐた時なので困りました。夏目は丁度十二月の學期試驗のある時なので、試驗の答案調べにかゝつてゝ手が離されませんし、仕方がないので私が周旋屋へ賴んだり、御用聞きに賴んだり、それから自分で方々へ出て歩るいて尋ねまはりました。それでも幾日かかゝつて漸々の思ひで、本郷西片町十番地ろの七號、阿部伯爵のお邸の前を小石川の方へ下る坂道の上の方に家を見付けて、ともかく急場の間に合はせにそこへ引き移ることに致しました。その家賃が二十七圓でした。

いよ〳〵暮も押しつまつた十二月二十八日が移轉です。小宮さん鈴木さん野村さん皆川さん野間さん野上さんなんぞと、お手傳の頭數は中中大變です。そこへ前々から話をしてゝ下すつた菅虎雄さんが馬車のことで來て下さいます。何でも二臺で二度往復するのだから安い、五圓だから、僅か五圓なんだからといふやうな話で、私もつり込まれてそれに應じて五圓で五圓でと言つて居りますと、側で夏目が二人の珍妙な問答を聞いてゐて餘程可笑しかつたと見えて、

「何だ、五圓五圓と、いやに五圓を鼻にかけてるぢやないか。」

つて大層笑つて居りました。

其うちに夏目は一荷物送り出すと、一足先きに本箱を買ふといつて、五十圓ばかり金を懷にして出かけます。あとはてんでにこわれ

ものなどを運んで下すつたのですが、小宮さんはたしかランプを持つて行かれたやうでしたし、鈴木さんは猫を運ぶ役でありました。紙屑籠の中ににやん／＼泣く猫を押し込んで、風呂敷で包んで抱いて行つたのですが、猫はびつくりしてしきりに泣きたてる。あばれたてる。しかし途中出してやるわけにもゆかないので其儘にして行くと、とうとう小便をひつかけられるといふ騒ぎ。猫は新らしい家に連れ込まれて紙屑籠から放免になると、しばらくの間にやん／＼泣いて居たが、其うちいつしか姿を見せなくなりました。どうしたのだらうといつて居りますと、元の家が戀しくてそこへ戻つてゐたといふことがわかりましたが、三日ばかりして又かへつて參りました。

其日一番後に私が殘つて、さてこれから俥にのつて少しばかり大切なものなど持つて出かけやうといふところへ、皆川正禧さんがかけ込んで來られて、何か持つものはないかといふお話。さう／＼ボン／＼時計があつたつけといふわけで、それを持つて行つて頂くことに致しました。皆川さんがそれを包んでかゝへられるとカチ／＼と音がします。私は思はず泥棒がボン／＼時計を盗んで背負つて行くと、背中で不意に十二時が打つてびつくりしたといふお話を思ひ出して可笑しくなりました。この柱時計はいまだに家の茶の間に、まるで古物の見物のやうな體裁でぶら下がつて居りますが、始め里の伸夫が三圓出して買つて來てくれたもので、もう數へて見ると二十六年にもなります。いまだにちつとも狂はないのは驚いた頑健なものです。

其時夏目が買つて來た本箱は、硝子戸付きの大小二つで、兩方で三十七八圓だつたと覺えて居ります。これもいまだに書齋にあります。翌る日鈴木さんと小宮さんとが障子を張りかへに來て、一日かゝつて全部はりかへて下さいました。そこで御禮にお小使を五圓宛あげたものですが、それが例になつて、お小使がなくなると、奥さん障子を張りませうか、先生障子をはらして下さいといつたわけでしたが、さう／＼一年中障子ばかりも張つては居られません。そこで今度は奥さん僕に二圓下さいませんかといふおねだりです。何にするのと尋ねますと、下駄を買ふのだとの事。當時二圓の下駄を學生が穿くのは贅澤過ぎるとあつて、夏目に、なんだ、學生の分際で、十五錢の麻裏草履で澤山だなどゝやられてゐたものですが、そんなといつかなこのお殿様が聞くものでなく、當時小宮さんの二圓の下駄といふのは、私どものところでは有名な話でございました。

さて西片町でも面會日の木曜日は賑はひました。これをいつしか木曜會などゝよぶやうになつたのは此頃からでありませう。これは今の早稻田南町に越してからも續き、亡くなつてからも、今迄書齋に集まつたものが此儘散り散りばら／＼になつて了ふのは惜しいとあつて、毎月命日の九日に漱室へ集まつて談笑することになり、今に至る迄百數十回を重ねて居りますが、この九日會なども見やうによつては、一種の木曜會の續きと見て差支ないでありませう。

其頃高濱虛子さんが國民新聞の文藝欄の選者をして居られ、篠原溫亭さんがそこの記者でお二人ともよくお見えになりましたが、其外集まられた方々には、鈴木三重吉、野上豐一郎、森田草平、瀧田樗蔭、野村傳四、皆川正禧、野間眞綱、松根東洋城、阪本四方太、寺田寅彦、中川芳太郎こんな方々が重だつたと覺えて居ります。

私の妹婿の鈴木禎次さんが洋行から歸つて來て、名古屋の高等工業學校の教授になられたのは此頃でしたでせう。ところがこの西片町の家といふのが鈴木のお父さんの居られる家とすぐ目と鼻の間なので、名古屋から上京して來るとは、夜などよくぶらりと訪ねて來たものです。さうして机の上のノオトの細い字を見て驚きながら尋ねるのです。

「どうしてそんな小い字を書くんです。」

「こりや八百圓の元手だ。」

片方はすまし込んで答へてゐます。

「今その元手が種切れになるとこなんで、大急ぎで製造中なのさ。」

その頃大學からは一年八百圓しか貰つて居ないのでした。丁度『文學評論』の草稿を書いて居た時だつたと思ひます。

其の鈴木が名古屋へ赴任した早々、これは一圓五十錢の名古屋瀬戸の火鉢だが中々いゝ工合だとあつて、大きな火鉢を一つ送つてくれました。夏目は大にそれが氣に入つて書齋で愛用してゐたものですが、それから後にはずつと上等のゝを買つて、それを茶の間へ下げました。一度火を入れ過ぎてふちをかきましたが、いまだに使つてゐるところを見ると、これも丈夫なものではありませんか。

三十一　朝日入社

この年の三月初めのことだつたと覺えて居りますが、大學の大塚博士から、英文學の講座を擔任して教授になつてはどうかといふお話がありました。その頃の教師から得る定收入といふものは、先程申したとほり大學が年八百圓、一高が年七百圓、それに明治大學の方が漸く月三十圓位の見當でしたが、專任教授になると月百五十圓呉れるとかいふ話でした。しかし家では月どうしても二百圓はかゝる。幸ひ原稿料が入つたり小說の印稅が入つたりするやうになつたので家計も立つて行くのであるが、教授になつた、その代りには內職はまかりならぬとあつては、第一あがきがつかない。それにいつまで教師になつてゐても仕方がない、さういふ肚もあつて迷つてゐたところへ、折よく『朝日新聞社』の方から、うちの新聞へ入つて小說を書く氣はないかといふ話を持ち込まれたのです。渡りに舟のわけなのですが、こゝは謂はば一生の道の岐れ目なのですから、夏目も大事を取つて愼重に考へたやうです。大學は元々好かないので、此先ともに長く居りたくはない。けれども教授となれば、假令收入は少くとも、一箇獨立の地位安全な人間で、滅多に他から動かされることもない。又かうやつてずつと

末長く勤めて居れば、恩給もつけば月給も上がる。さういふとも家族のものゝ爲めには考へなければならない。そこへ行くと新聞社は結局一つの商賣だ。いつ何時どういふ變動がないとも限らない。主筆が呑み込んで居ても、社主の氣がどうだかわからない。いろ／＼考へた揚句、ともかく大學で教はつて識つてるからとあつて使者に立つて來られた今の能樂批評の坂本雪鳥さん、其頃の白仁三郎さんに自分の希望を腹藏なく申上げて、『朝日』の方へ傳へて貰らつたやうです。主筆が池邊三山居士で、夏目は池邊さんを非常に信頼して居りましたので、一二度話をした後はともかく入社の決心をしたやうでありました。

その時の條件が、月給二百圓、恩給は今迄社に其規則がないといふので、其代り賞與を少しづゝ餘分に出さうといふやうなことでした。夏目の責任と申しますか義務と申しますか、ともかく『朝日』へ盡くすべきことは、毎年長篇一篇、其外新聞にのせて差支のない文章をのせる、他へは殆んど書かないといつたやうなことだつたかと覺えて居りますが、つまりはどちらも信じあつた紳士協定といつたやうなものでございましたやうです。

丁度この四月は、洋行期間二ヶ年の義務年限四ヶ年を果たしたところなので、ともかくこれで漸く義務を果たしたとかいつて、晴々した氣持で大學の玄關を出て來たさうですが、すぐに辭職の手續きを取つて、愈々朝日入社といふことになりました。そこで年來の垢を洗ひ落す積りでもあつたでせうし、又大阪本社の方々にも會ふ必要があつたのでせう、三月の末にひとり關西へ旅立ちました。

京都では學長の狩野亨吉博士のところへ御厄介になつて、折ふし落ちあつた菅さんと三人で、ゆる／＼方々を見物して歩るいたやうです。それから大阪へ行つて、村山社長始め鳥居素川さんなんぞの幹部と初めてお會ひしたやうでした。

この關西旅行の留守中、女ばかりで私達が淋しいだらうといふわけで、鈴木さん野上さん小宮さんのお三人が交る交る宿まりに來て下さいました。さうして夕方になると、もう京都から歸へる頃だがなあと停車場まで迎へに出て、今日もだめだ、今日もだめだといつたわけで、おそくなつて歸へつて來るのです。

かういふ或る日のことでした。鈴木さんと小宮さんとがよつて、

「野上の奴、あの若い女を、自分の妹だ妹だと言つてるが、本當に妹かしら。」

「先生に妹が京人形を買つて來てくれといつてゐたとか頼んでゐたよ。」

といふ話です。そこへ噂の主の野上さんが入つて來られました。

「君あれは本當に君の妹かい。」

「だつて顔立ちが似てるだらう。」

と問はれる方はすましたものです。

「ちやそんならそれで、此方にも積りがあるから。」

とか何とかおどかし文句を二人がならべるのですが、どうも頻にか

かつて仕方がなかつたと見え、とゞ様子を見に行かうといふことになつて、貴様行つて見て來いといふわけで、小宮さんが翌日あちらに出かけます。

さて使者の役目を仰せつかつて屋方に乗り込んで見は見たものゝ、その頃はうぶな學生さんのことですから、たゞ一圖にきまりが惡く、ぼうと顔が眞赤にほてつて來て、問題の婦人はすぐと前に鎮座ましますのだけれども、とても顔を立てなほして眺めるどころの話ぢやない。まるで見に行つたのか見られに行つたのかさつぱりわからないで、庭先ばかり見てかへつたといふわけ。歸へつて來ると鈴木さんが、

「おい、どんな顔をしてゐた？　野上に似てゐたかい。」

と勢込んで尋ねます。片方はしよげかへつて、

「何でも顔のところが三角でぜムの廣告見たいな形をして居つた。」

とばかりで、それ以上何も答へることが出來ません。

「だから貴様はだめだといふんだ。」

そんなら自分で行つて見屆けて來たらよささうなもんですが、そこは鈴木さんで、かういつて大名威張りをして居ました。

一體野上さんの所謂妹さん問題は、若い人達ばかりの間だつたものですから、隨分騒がれたものです。最初寺田さんが原町に下宿してられた頃、すぐ隣りの部屋かに一高の學生が居る、そこへ姿を見たことはないけれども、若い女持の洋傘や沓をもつて訪ねて來るものがある、一高の生徒の分際で若い女と交際したりして怪しからんなどゝ氣にしてられたものですが、それがどうやらこれらしいといふのですから、中々因縁も深いわけです。

さうかうしてゐるうちに、毎晩毎晩遊びに出てゐる時はかへらず、ひよつくり十二日の正午頃に歸へつて參りました。いろ／＼お土産物などを買つて來て、大層上機嫌でありました。例へば鈴木さんには盃、野上さんの所謂妹さんには頼まれた京人形など、其外いろいろお土産を買つて參りました。

後で野上さんが言ひにくさうに實は細君だと白狀してられたことがありますが、今から考へて見ると何だか可愛らしい氣がして罪のない話ではありませんか。それが今のやへ子さんであるのは申す迄もありません。

はつきりした記憶はありませんが此の留守の前後だつたとおぼえて居ります。大學で講義した『文學論』を纏めて大倉書店から出版するといふので、自分ではそれにかゝずらつてゐる暇もない。中川芳太郎さんを煩はして校正やら何やら一切合財おまかせして居たやうでしたが、かへつて來て本になつてゐるのを見ると、どうしたものか大變誤植などが多い。自分の豫期に反したものでありませうか、こんな間違ゐだらけな不滿足な本は、自分の名によつて世間へ出すことはならない、つまり學者的良心が許さない。早速みんな集めて來て、庭先きで燒いて了ふといつた見幕でしたが、いかんせん其時にはすでに市へ出た後なのでどうすることも出來ませんやうでした。後でそれでは氣が

すまなかつたと見えて、正誤表を出して方々へ配つたり致しました。『文學評論』の出版について講義の整理を同じく此頃瀧田樗蔭さんと森田草平さんとがまかされて始められたやうです。何でも金尾文淵堂から出版することに大體きまつてたやうでした。お二人がおひきうけになつたのも、勿論夏目のだから進んでやらうといふ外に、いくらかそれによつて生活の足し前にしやう、又此方でもさういふ風にして上げやうといふ双方の諒解があつたのでありませう。ところがそのうちに瀧田さんは中央公論の方で忙しくなり、森田さんは森田さんで所謂煤烟事件でこれ又尻が落ちつかず、そのうちにいつしか草稿が見えなくなつたなどゝいふ騒ぎがあつて、これの出版はずつと後へ延びて、發行所も春陽堂になつて出たかと思つて居ります。

話は何もこれの續きではありませんが、序だから夏目が人樣の世話をして、かなり面倒を見ては、後で何だか裏切られたやうな氣持にされたことが時々あつたことを申上げませう。勿論全部が全部ではなく、裏切られた方がむしろ例外だつたかも知れませんが、とにかくさういふ目にあつたことも二度や三度のことではありませんでした。一體に夏目は涙もろい質で、人の氣の毒な話などにはすぐに同情して了ふ方でしたし、又頼まれゝば慾得を離れてかなり骨折つて何かと面倒を見る質の人でした。晩年にはそんな事も億劫になつたのか、滅多に自分で進んで勞をとるといふやうなこともしませんでしたし、又他人なんか頼りにならないものだと口癖に申しても居りましたが、其頃は頼まれゝばいやとは言はないで損ばかりしてゐたものです。

それからずつと後のことではありますが、或時何かの拍子で丁度そんな場合にのぞんでゐたものですから、私が、

「それ程にすることもないぢやありませんか。どうせ人に親切を盡くしても、此方の心は通はないで結局はつまらない目に會ふ位が關の山ですから。」

といつも裏切られることの多いのを申しますと、夏目は、

「親切を盡くさうといふ此方にまで不親切な心を起こさせるのは、つまり先方が悪いんだね。」

としんみり申して居た事がございます。後では冷い、理智的な、物を離れて眺めてだけ居る人のやうにとられもしたやうですが元來隨分と情深い情味の厚い人だつたやうに思はれます。それに何よりも人との關係で氣のつくのは、恐ろしく几帳面なことでございました。だから約束なんかは本當に堅いものでした。

朝日入社もきまり、學校も一切やめて自分の書齋に落ちつくやうになつたこの四月のある木曜會のことでした。鈴木さんの發案で、中川さん小宮さんが助手格で、御三人で台所を借りて料理をするといふ騒ぎ。御客はといへば夏目を始め始終木曜會に集まられる方々。何が出來るかと見てゐると、そのうちに出來上がつたのか、幾かさねかの御重詰。みんな頬冠りをしろ鉢卷をしろとあつて、御座敷の中で花見氣

分といふわけ。夏目や虚子さんや遐亭さん四方太さんなぞ、みんな變な顔を見合はせてにやり〳〵しながら、鉢卷をしたり頬冠りをしたりしてゐます。自分でしないものは鈴木さんがかぶせるのですが、すると阪本四方太さんが大して面白くもないといつた顔をして、これは何てこつてすといつて冠せる後からすぐに鉢卷を放り出す。鈴木さん甚だ御機嫌斜で、あんな變な奴はない、だから女が惚れないんだなんて大變な見幕です。飲めや歌へでとんだ御座敷の花見の宴をやつたわけですが、此頃は鈴木さん得意の絶頂の頃で、小宮さんと二人が甚だ肝膽相照らして居られて、二人で三味線入りの心中をしやうなど〳〵共鳴して居られた頃です。

此頃森田さんは丸山福山町の昔一葉女史の居たといふ家に住んで居られて、お子さんの病氣が重いといつて心配してられたので、私どもが始終面倒を見て頂いてゐた尼子さんを頼んで上げましたが、其うちとう〳〵亡くなられました。其お惡い頃は、大抵日に一度位づゝは家に來て、今日はどうだとか容態を仰言つては心配してゐられたものです、

其頃『漱石山房』といふ大きな石印をどなたかにほつて頂いて、それが珍らしいのか得意なのか無闇と捺して居りましたが、小宮さんあたりに來て頂いて、藏書に一々捺して貰つたり、それから森田さんや松根さんなどは大きな字を書かせては、それにこの大きな印を捺させたりしてらつしやいました。夏目が短册以外――短册は俳句をやつて居りましたので、前々からちよい〳〵書いて居りましたやうですが、――半折や何かに字を書いたり、それが面白いと見えて、ちよい〳〵手習ひを始め出したりしたのは此頃からでありましたでせう。しかし道具が揃つて居るわけではないので、毛氈なんぞ勿論その頃は持つて居りませんので、森田さんのところにある其頃書いた大字の横額などには、疊の目が鮮かに出來てゐて、べたりとこの二寸五分四方もあらうかと思はれる『漱石山房』が横柄に据はつて居るのです。松根さんも隨分下手な字くばりの惡い此頃の書をお持ちのやうです。

『虞美人草』を書き始めたのは、たしか五月末頃からだつたでせう。新聞に出始めたのは六月に入つてからで、それから十月初め迄續いて出ましたが、何しろ始めての長篇ではあり、重い責任をもつて新聞に入つて書く最初のものであり、殊に暑さに向つての勞作のとでしたから、隨分骨も折れたやうでした。これを書いてる間、始終少し興奮して居まして、さうして例の胃弱で相當弱つても居りました。がとにかく一生懸命で、外のことは一切手につかないといつた工合にこの作に打ち込んでこつて居つたやうですが、さてこれ程の苦勞をして出來上がつて見ると、どうもねれてゐない、垢ぬけがしてゐない、さうして匠氣があるなどとか申して、自分では不滿がつて居りました。この氣持は後々になるにつれて一層募つて來た樣子で、この作を英語に飜譯したいからとアメリカあたりに居る方が言つて來られた時も、外にもつと適當のものがあるだらうからと即座にお斷りしたり、芝居にした

いと方々から言つて來るのを無下に却けたり、人がほめるものがあれば、擽いやうないやな顏をするといふ風でありました。けれども當時は中々評判の高いものでして、夏の始め頃には『三越』で『虞美人草』の浴衣を染めて賣り出しまして、私のところへも二反ばかり吳れますし、池ノ端の玉寶堂あたりでは、『虞美人草の花模樣の中に小い養殖眞珠をはめたのを名前程のとはなく貧弱のものではありましたが、『虞美人草の指輪』だといつて賣り出しますし、讀者からは手紙が來ますといつたわけでした。手紙や端書なんぞも澤山あつたでせうが、中にこんなのがありました。

「多大の興味をもつて拜見いたして居りました虞美人草がもはやおしまいとは情なくなります。小夜子と糸子は滿足のうちに一生を送るでせうし、小野さんはこの畫のやうな眞似をして（繪端書には兩方から手が一つづゝ出て、すかしになつてゐる鰻を攫まうとしてゐる）そして逃がさぬところ中々うまくやりました。小野さんはうまくやりましたが、つまらないのは藤尾さんばかり、かの女は宗近君を弄んだのではない。始めから小野さんを愛してゐたのに兩方から投げ出されては可愛想です。姉さんのやうに思つてゐる藤尾さんを、どうかうまく救つてやつて下さい。御願ひです。」

三十二　長男生る

六月五日に始めて男の兒を得まして、純一と名づけました。これ迄四人生まれて、四人共女の兒でしたのが、こん度初めて男なので夏目も大層喜んで、後で長女に聞きますと、學校から歸へつて來ると男の子だ男の子だと喜んでゐたさうです。小宮さんと鈴木さんとが大きな鯛を祝つて下すつたのを覺えて居ります。

こん度のお產は始めから難產らしく思はれ、三月頃から息苦しくて步行も自由ならず、全く病人で居りましたのですが、それといふのも男の子だつたせいもありませうが、位置が惡いのでした。で早くから看護婦を雇つていろ／＼世話して貰らつて、萬一に備へて居もし、又再々產婆に胎兒の位置をなほして貰らつたのでしたが、いよ／＼といふ時になつてやはり思つたとほりの難產。そこへ長々で私の體は弱つてゐる、心臟の脈搏は結滯するといふわけで、とても產婆の手ではおへない、醫者を呼ばうと騷いで居りましたが、いゝ案配に醫者が產室の敷居をまたぐと同時に無事に男の子が呱々の聲を上げて、先づ一安心といつたわけでした。夏目の四十一才の時のことです

七月頃のことでありましたでせう。朝日新聞社の方で賞與として五十圓か月給の外に吳れました。賞與五十圓といふのはどう考へて見ても理窟には合はない、第一最初入社當時の約束の時も、少くとも賞與は半期半期月給の三月分以上はといふやうな話だつたのに、これは又以外にどうしたことかと、敢て金が欲しいといふのではないが、當初の約束に違うではないか、今から約束を違へるやうでは、末が思ひや

られるといふわけで、最初仲に立たれた坂元雪鳥さんのところへ言つてやつて、朝日の幹部に尋ねるやうにといふことでしたが、入社後六ケ月以内のものには賞與のない規定のところを、池邊さんから特別にしるしばかりながらこれ丈寄こされたものだと事情がわかり、かへつて厚意を謝してゐたやうなことがありました。かういふところは几帳面で、金のことだからといつて潔白さうにずる〳〵にしておくといふやうなことはなく、その代り事の仔細がわかれば釋然となるといつた工合で、實以つてさば〳〵したものでした。

　此頃だつたでせうか、又泥棒に入られましたのは。一體私たちが呑氣者揃ひで間がぬけてゐるのか、それとも何となく泥棒の方が虫が好いて入り易いとでもいつたものか、どこへ行つても泥棒の御見舞をうけますが、こん度の泥棒は全くのコソ泥で、別段風流な逸話奇譚も殘さず、ごくあつさりと夏目の書齋に入つて、懷中時計（それもニツケルの）だとか小刀だとか鋏だとかいふものをもつてかへりました。庭から入つたのでせうが、あんまり泥棒にやられたといふ程の損害もうけずにすみました。

　泥棒序にこん度は内から出た泥棒のことを申しませう。やはり此の頃のことではありましたが、或はこれより前かも知れませんが、或る朝早く一人の女中が、二階に上がつたり下りたりして、奥様、泥棒が入りました、泥棒が入りましたとあわてゝ騒ぎ立てます。入つて了つたものは仕方がない、さういつた氣持で此方は泥棒に入られるのは慣れつこになつてゐますから落ちついたものですが、あんまりやかましいので二階へ上がつて見ると、窓の桟が折れてゐて、窓際に泥がいつぱい積み上げてあります。が見たところ泥足のついてる氣勢もなければ、第一どこから入つたといふそれらしい見當もつきません。たゞ泥が積んであるだけで、いかにも變な樣子です。そこで呑氣な私も、こりや變だと感付きました。さういへば此間からちよい〳〵小金がなくなつたりしたことがあるが、この女中が怪しいとにらみまして、さあらぬ態で玄關脇の簞笥などを入れておく部屋に入つて、抽斗をぬいて見ますと、外から入つた泥棒なら抽斗をぬいたまゝにしておくでせうのに、これはきちんとしまつてゐて、中がすつかりひつくりかへしてあります。益々變だとは思ひましたが、さて何と何とが無いといふことも其場ではわかりませんでした。

　それから御飯をすませると直きに、其女中を巣鴨の方へ使にやりました。出がけに女中部屋で、此間伯母さんからこさへて貰らつた新らしい着物を着て行かうかどうしやうかと、口に出しては思ひ迷つてゐたさうですが、外の女中にいひつけて監視させてあるので、ともかく着のみ着のまゝで出かけました。出かけた後で行李をさがしますと、私の妹の外出着をあづかつてゐたのが、一番行李の底にキチンと風呂敷にくるまつたまゝ入つてゐるのを初めとして、いろ〳〵なものが出て參ゐります。伯母さんから貰らつたといふのは、私の妹の着物

をいふのです。それから怖くなつて私の用簞笥などをさがして見ると、指輪がない何がないといふわけで、大分無いものがあるのがわかりました。

夏目は非常に怒りまして、さういふ不埒な奴は警察へ渡して了へと申しますのですが、年もまだ十八かそこいらですし、氣の毒だと思つて漸々なだめて、すぐに親元を呼びにやりますと、本人が圖々しく姉と一緒に來まして、さうしていふとには、奥様わたくし泥棒なんか致しません。誰か私を憎んでる人が取つて入れておいたんでせうと空々しく毒付くのには呆れかへつて了ゐました。後で聞いて見ると、親達も承知で方々渡り歩かせては時計だ指輪だと稼いでゐたものらしいのでしたが、警官が來られた頃には、とうに啖呵をきつてどこかへ行つて了つた後でした。其朝未明にお隣りで泥棒が入つたとかで騒いでるのを聞きつけ、泥をもつて來てうまく私たちを欺さうと細工をしたのだとは後でわかりました。ともかく私たちと泥棒とは余程因緣が深いと見えて、越す先々でやられるには呆れます。これから間もなく早稲田へ移るのですが、こゝでもたしか二度ばかり入られたものです。

三十三　最後の轉居

九月初めに長らく荷にしてゐた最初の新聞小說『虞美人草』を書きあげてほつとしたところへ、こゝの家主が、最初入る時には二十七圓の家賃で入つたのを、いつの間にか三十圓に上げ、それでも足りないで入つて十ヶ月もたゝないのにこん度は三十五圓に上げると言つて來たので、別に入りたくて入つた家ではなし、初めから腰掛けの積りのところへ、いつまでハイ／＼言ひなり放題に家賃を上げられてゐたんでは際限もなし、學校へ行く必要もなくなつた以上、強いて本郷の近くである必要もなくなつたので、思ひ切つて引越さうといふことになつて、丁度小說を書き上げて手もすいてゐたとこで、毎日散歩の積りで鈴木さん小宮さんあたりを相手にして、どこかしことなくぶらついて家を搜しまはりました。さうしてとう／＼今私たちの居るこの早稲田南町七番地の家をさがし當てたのです。ともかく三百五十坪程の地面の眞中に古いながらに手頃な家があつて、庭は造つてはないけれども、かなり廣いし、これといふ庭樹があるわけではないが、相當大きな樹木などもあります。それに書齋に當てるに工合のいゝ西洋式とも日本式とも支那式ともつかない珍妙な部屋が、玄關を入つて右手にある。こゝならといふとこで、差配をしてゐるすぐ前の中山さんといふお醫者さんに尋ねると、月四十圓といふこと。しかし先方でも此方の名札を見て、長く居て下さるなら三十五圓にしませうと言つてくれるので、此方も實は懷加減からいふと三十圓しか出せないところだが、折角だから私も五圓奮發しませうといふことになつて、そこへきめて參りました。さうして此方の家主の手前、九月中にはきつと引越して見せやうといふ望みが、とう／＼かなつたわけです。

又引越しの時には、菅さんが前回どほり馬力の世話をして下さり、

鈴木さんが猫を紙屑籠に入れて持つて行つて下さいました。こん度は前よりずつと遠いので、大分手數がかゝり、着物にいつぱい猫の小便をひつかけられたりして、ぶつ〳〵言つて居られました。

たしかその引越しが九月二十九日で、それが何でも丑の年の丑の日に當つてゐたのかも知れません。熊本に居ても東京に居ても、いゝかげん一つ所に落ち着くとはそれ引越しといふことになつてゐたのが、それからといふものずつとこゝに居ついて、とう〳〵こゝで永眠致しますし、それで亡くなつた翌々年には、記念と思ひまして土地ぐるみ持主から讓つて頂き、今に至る迄二十何年早稻田の住人になつて居るのであります。

と申しますと大變此土地此の家が氣に入つたかのやうに響きますが、夏目にしましても私にしましてもそれ程氣に入つたといふわけではなく、越した當座こそ狹い所から、急に少しばかりのんびりしたところに來ましたので、夏目なども伽藍のやうだなどゝ言つてゐたものですが段々子供たちが大きくなるに從つて、家が目に見えて狹くもなり、其上裏側の隣りに貧民長屋があつて、そこで朝から晩迄夫婦喧嘩があるとやら何とやら好もしくないことが多いのです。垣を結へばその垣をぬいて焚きつけにする、垣から一段低い家の台所を見下ろして何のかんのといふものもあるといふわけで、あんまり氣持のいゝ住家ではなかつたのです。そこでいゝ加減落ち着きたい位に思つた私が、

「貴夫、こゝを買ひませうか。」

と何かの拍子に話を向けますと、

「いゝや、こゝはいやだ。」

と夏目が申したこともあります。さうかと思へば、又感ずるところもあつたと見えて、

「しかしかういふところも世の中にはあることを子供に知らせる爲めには、これもいゝ場所だね。」

などゝ、つく〴〵申して居たこともあります。さうしてゐるうちに又夏目がいやになつて、どこかへ越さうかと云ひ出す頃には、私が又この荷物の始末をしなければならないことを思ふと尻込みするといふわけで、幾度かお互に切り出して見ては、いつもそのまゝずる〳〵になつて了つたのです。ところが亡くなつてからこゝを買ひ取りますと、じきに長屋が取り拂はれてきれいになりました。生きてゐるうちにかうなつたら喜んでくれたことだらうなどゝ思はれてなりません。

さて本郷から早稻田へ移りましたが、相變らず鈴木さん森田さん野上さん小宮さん等といふ人達はよくお見えになります。殊に木曜會にでもなると皆さん勢揃ひして押しかけてらしつて、何を話してらつしやるのか知りませんが、いつでも夜の十二時が打つてもまだお歸りにならうといふ氣勢もありません。夏目もそれにおつきあひをして面白くしやべつてゐる樣子ですが、流石に十二時を過ぎると、默つてゐたり、朝迄も話し込まれさうな勢なので、やむを得ず私が出て行つてあら

十二時とつくに過ぎたのだからい〻加減お歸へりなさいと、追つ立てを喰らはします。それから漸々尻を上げて歸へるといふ譯なんです。

四人さんが同じ方向におかへりになるので、さて家を出てから電車はなしぶら〱歩るいて、本郷臺の下小石川の柳町あたり迄行きつくと、やれ〱といふわけで一ト息ついて、そこへらのおでん屋に入つて、い〻加減空き腹になつてるところへおでんだ燗酒だと送り込む。時には食べ過ぎて、みんなの財布をた〻いても拂ひが足りず、近所の森田さんが家へ走つて一圓五十錢持つて來て漸く拂つたなど〻いふこともあつて、そこで又元氣を出して、すぐ近くの空橋のところ迄小宮さんを送つて、それから鈴木さんと野上さんとは巣鴨へ歸へるのださうです。漸く家について、やれ〱と思ふと一番鷄が鳴くといふのが例になつてゐたさうで、そんなわけで金曜日の大學の講義は申合せたやうにお休みといふことだつたさうです。それを夏目が聞きまして、

「飛んだ道樂者だな。」

など〻笑つてゐたことがありました。

こ〻のおでん屋のかみさんが一寸渋皮のむけた女だつたとかで、鈴木さんが、こんなのに手をつけちゃいけない、跡にどんな怖いのがついてないものでもないからと、いつぱし先輩がつて言ひ言ひされたものださうですが、皆さん其日の話をあれこれ〱とそこで繰りかへしながら、親分が親分がと夏目の噂に花を咲かされる、それをそのかみさんが聞いてゐて、

「貴方々二口目には親分親分と親分のお話をなさいますが、どんなお方が親分なんですか。」

といふ話に

「い〻親分があるんだよ」

といつたわけで、上機嫌のものであつたといふお話です。

何しろ其頃の私の家と來ては、子供が五人で、赤ん坊が居るといふわけで、女中の一人が風邪を引く、一人が親の病氣でかへるなど〻、手が狂ひだしたら最後始末がつきません。さういふ時には野上さん小宮さんなどいふ御連中が、床を敷いて下さるやら、御飯がないとあつて鮨を取りに走り使ひをして下さるやら、隨分親切にして下すつたものです。それから子供なんぞもよく遊ばして貰らつて、上の方の子供などは、小宮さんあたりからよくせがんではお話しを聞いてゐました。側で聞いてるとどうやら口から出まかせらしいのですが、それが面白いと見えて子供たちは喜んで居ります。出まかせにしろそれを見て夏目はつく〲感心して、とても俺にはあ〻は出來ないなど〻言つてゐたことがありました。

ところが鈴木さんと來ては、今こそ大の子煩惱でしかも小供の雜誌迄やつてゐられますが、其頃は子供が大のおきらひだものです。其頃のことでしたでせう、野村傳四さんが結婚された其の御祝儀の内宴だとか何とかいつて、茶の間の爐裡で皆さん車座になつて酒を呑んでゐられると、子供がやかましい。そこで鈴木さんが子供なんかこんな時

にはみんな節句の抽斗に入れて錠を卸ろしておけばいゝとか何とか一ぱい元氣でやつたのを、一番上の筆子などはそれが余程こたへたと見えて、いまだに覺えてゐて、長く子供たちに怨まれてゐたものです。

野村さんの新婚に何をお祝ひしたらいゝか、そんなことを夏目が申して居りましたので、

「何をといつてもありふれたものばかりでつまらないから、一そのこと貴方俳句をお書きなさい、それを袱紗に染めさせませうから。」

と申しますと、

「お前にしては珍らしくいゝ考が出たな。」

とか何とかひやかしながら、それにきめました。其時の句が、

二人して雛にかしづく樂しさよ　漱石

ともう一句あつたのですが、それは忘れて了ゐました。都合三枚染めて、二枚を上げて、一枚私自身使つてゐたのでしたが、それもいつの間にやら姿を隱くして了ゐました。

三十四　坑夫

其年、つまり四十年の暮のことでありました。紹介者もなしに突然一人の若者が訪ねて參りまして、自分は坑夫をして、隨分いろんな面白い話がある、苦勞もして來た、その材料を供給するから、それを是非小說に書いてくれないかといつて參りました。年は十九か二十歲で、きりつとした丸顔の男でしたが、今迄一度も會つたことも聞いたこともなし、藪から棒にいきなり飛び込んで來たので氣味惡がつてゐましたが、是非書いてくれといふので、相手は書生つぽう見たいで邪氣も無ささうですので、氣をゆるしてともかく話をさせて材料を取るといふことになりました。それからは木曜會によく來たりしてましたが、其際氣の毒だからといふので、書生見たいにして家においてやることに致しました。どつか變な男でありましたが、それでも子供の相手になつて、作文や習字などに甲だの乙だのと點をつけたりして居りました。

後で考へて見ればいろ／＼不審の節も出て來るのですが、其時は夏目も私も一切その男のいふことを眞に受けて聞いてゐたものです。殊に人一倍同情深い夏目は、その男が身の上話をして、自分が親類に養子にやられて、そこの娘の婿になる筈だつたのが、別に養女として貰はれてる娘の方と戀に落ちて、どうしてもそこへ居られなくなつて、それから家を出て放浪し始めた、又その相手の女は女子高等師範に居るから、どうかその女に會つてくれないかといふわけで、それから夏目が女子高等師範に手紙を書いて、いつ幾日に來て下さいといつてやつて、二人で待つてゐましたが、來もしなければ音沙汰もない。そんな面倒迄見たのですが、さて同情して家に書生同樣おいては見たものの、坑夫をやつたことがあるの、蕎麥屋の出前持ちをしたことがあるのと申しますけれども、根が勉強するではなし、一向落ちつきのない男で、どう見ても取柄がなささうです。さうしてゐるうちに夏目の『坑夫』

といふ小説か朝日に出ます。

或る時その坑夫の書生さんがこんな事を私に申します。自分が大層困つてゐた時に厄介になり、さうしてそこで病氣になつたりして二十圓ばかり借りたのが、高利なものだから今六十圓程になつてゐる。一度その小母さんとやらに會つて見てくれないかといふ頼み。會つて段々話をして見ると、双方の話がとんちんかんで一向辻褄が合ひません。かけた金をかへしてくれと催促すれば、今に夏目さんに小説を書いて見て貰らうから、さうしたらそれを金に代へてとか何とかいつてゐるといふ小母さんの話。さうかと思ふと、私と其の女の人と長々と話をしてゐたものですから、立ち聞きもしてゐた樣子でしたが、歸へつて了ふとのつそりやつて來て、あの小母さんどう言つてゐましたと聞くあたり、前に話が仕組んであつて、それをうまい工合に言つてくれたかどうかと尋ねてゐるとしか思はれません。その女の人には小金を包んでかへしましたが、段々變たなといふ氣が募つて參ゐりますばかり。

すると或時夏目が外へ出まして、亡くなられた沼波瓊音さんに會ひますと、其頃沼波さんは萬朝報に居られたのですが、此間ある若い坑夫といふ若い書生みたいな男が新聞社に來ての話に、夏目漱石といふ男は怪しからない奴だ。私に身の上話をしろといふのですると、その材料でもつてれいれいしく新聞に小説を書いてどつさり金を取つて居る癖に、自分には一文も呉れない。全く卑劣な奴だから、うんと惡く書いてやつてくれないかといふ頼み。其時沼波さんはさういふ個人一身上の話は書けないと斷はつたが、氣をつけないといけませんよとの話に、夏目もびつくり致しまして、歸へつて來て早速本人に尋ねますと、斷じてそんなことはないと白ばくれて居ります。しかし夏目もかなり色をなして、

「君もそんなに金が欲しいのならば、これだけの材料を提供しますから、いくらいくら下さいといつたらいゝぢやないか。自分も紳士だから、さうならさうでちやんと約束通りしもしやう。尤もそれ程迄にして書きたいとも思はないが……」

といふやうなことを申しますが、男の方ではかうなつてもやはり不得要領で、強情なひねこびれた、それでゐて煮え切らない態度で居ります。夏目も業を煮やします、私も面白くなく思つて居りますと、どう考へたものか翌日になると今迄歸へるところも無かつた筈のが急に歸へりたいからと申します。いゝ案配だと思つてそれ切り縁を切つたわけです。

後で伺ひますと、其足ですぐ萬朝報の沼波さんを尋ねて、此間のことは書かなくてもいゝと言つて行つたさうです。それから又新渡戸さんのところへか、やつぱり私のところへ來たやうなことを言つて行つたとかいふことが何かの新聞に書いてあつた事がありました。

其後二三度訪ねて來て、夏目に會ひたいと申して居りましたが、夏目はいやだと言つて會ひもせず、私がその都度三圓ばかりづゝ包んでやると、そのまゝおとなしく歸へつたものです。



字で書いた漫畫

牧逸馬

1

あめりか街上風景。

ＨＯＢＯなる一個の非職業的職業に從事してゐる尊敬すべき二紳士が、町角の煙草屋の前で日向ぼつこをしながら、ひねもす何ごとか議論し合つてゐる。

忙しい都會の執務時間にあつて、それはいかにもひねもすといつた長閑な圖。

このエッチ・オウ・ビイ・オウ――ホボ。

主として、呑氣で喧嘩ずきな愛蘭人が專門とする一種の哲學的浮浪人。樂天家、饒舌家、慷慨家、資本主義を呪ふ者、呪はないまでも、はじめから降參してゐるもの、家系を重んずる人、おもんじない人、固い洋襟とかたい仕事の嫌ひな者――等すべてこれに屬す。

仕事――しやべるほか何もしない。

特徴は。

第一。鼻が赤い。

第二。すでに紳士だから世のつねの紳士のごとく、いかに身に粗服をまとふとも靴の先だけは木賃宿の寢布で拭いて光らせてゐる。

第三。四季を通じて山高帽使用のこと。

第四。噛みつく犬と噛みつかない犬とを一瞥して見わける技能。

それも田舍まはりのホボとなると、自然を愛好したり、農繁期に麥をむしつたり、裏口から覗いて一食にありついて、その代りに薪を割つたり、毛布一つで農村勞働者に「自覺」と「團結」を促して歩いたり、鷄を盜んだり山火事を起したり、貨物列車にぶら下つて旅行したり、これを要するに大して惡いことはしないが、それでは都會のホボは何かよくないことをするのかといふと、これもべつに害毒を流すといふわけではなく、先づせいぜい惡事を働いたところで、通行人からマッチを借り、ついでに煙草も貰ひ、そしてもし相手が東洋人だつた

ら、ちよつとその機會を利用して人種的態度を示すくらゐだ。

かへつて、あめりか都市の添景人物として、なくてはならないのがこのホボ。

で、ふたりのホボが、街角の煙草屋の前で、往來を見ながら議論してゐる。

A『おい、ジミイ、煙草はもうそれ一本しかないんだぜ。そんなに一人で喫はずに、いゝかげんにこつちへも廻せよ。』

B『よし！ そんなら賭けをして、勝つたはうがしまひまで喫むことにしやう――ほら、あそこに二人電車を待つてる女がゐるだらう？ あのなかの茶色の外套を着たはうが先きに電車に乘るか、それとも黑いはうがさきか、ひとつ賭けしやうぢやないか――おれは茶色だ！』

A『するとおれは黑をとるわけだな。』

そのうちに電車が來て、黑の外套を着た女が素早く乘つてしまふと、遙かむかうの煙草屋のまへでは、一本の煙草が他へ移つて、Aの燒けるまで心ゆくばかり吸はれるといふわけ。

何を決めるにも賭けだが、これは何もホボにかぎつたことはない。あめりか人は、幌馬車時代の冒險心がのこつてゐるものか、天下國家の大事でも、日常の些事でも、I'll bet you bet your life, I'll tell you でなくては氣がすまないとみえて――。

共和黨と民主黨とどつちから大統領が出るかと言つては、社交倶樂部では、百弗千弗の賭け。安アパアトメントの裏二階では一弗二弗。黑ん坊のボウイ仲間では五仙十仙の賭け。

あした雨か晴れかといふんで、夫婦のあひだに、妻君は活動、夫は葉卷の賭け。

二羽並んで止まつてゐる雀のうち、どつちが先きに飛び立つかとあつて、子供同士が二片の賭け。

デンプシイとタニイ、ベイブの安打數、市長の選擧、軍縮會議の成否はもとより、生れる子が男か女か、今度とほる自働車は偶數か奇數か、お前とおれとどつちがさきに死ぬか、葬式が見えるか見えないか――人間萬事があめりかでは賭け・賭け・賭け。

2

人物。

アプトン・シンクレアが十年一日のやうに揶揄しておかない「疲れたる事業家」の典型。經驗と決斷を示す白毛まじりの髮。企業と大く計かれた赤ら顏。しぢう第五街仕立ての流行服を着てゐるんだが、いまは「事務所」から「郊外の家庭」へ歸つて來たところだから、上着をぬいで、黑繻子に銀糸で縫ひをしたスモウキング・ガウンを羽織つてゐる。年齡五十二。道樂として金儲け、ゴルフ、ボウカア、金儲け。

おとなしくアプトン・シンクレアにからかはれつゞけてゐる「主婦」でない主婦の若い美夫人。午後のお茶と社交界の接見日とカントリイ

倶樂部と「獸脂巴の典禮」との自動車遊乘りとによつて、もう今年ぢう一日のあきもなく日程が出來上つてゐる。頭髮の色と眸子の所在は毎日踊つて、年齢區々。趣味として買物、慈善事業、詩人畫家の招待、オペラ。

場所、

邸宅と呼ばれなければ承知しない彼等の家、それも交友のヴァン・アスタア夫人が「發見」してから、近所に土地家屋賣買事務所が出來て地代が暴騰したといふ郊外の一區域。夫人の言によれば「晝夜、おどろくべき日光の照つてゐる」ところ。

そこのパアラアで夫君が疲れ切つて煙草をふかしてゐると、夫人が忍んで來て、いきなり太い首つ玉へかぢりつく。

『何だ、蜂蜜ぢやないか。びつくりしたよ。』

『あら、さうお！　すみませんでしたわね。けど、「あたしのフランク」はけふ何うかしてるの？　すこうし鬱いでやしないこと、？』

『うん。いや、なに――何でもないんだ。「小さなお姫さま」が心配することぢやあないんだよ。』

『だつて、あなたがさう屈託顏をしてゐらつしやると「小さなお姫さま」だつて氣になるわ。』

『いゝんだよ。君はたゞ小鳥のやうに飛びまわつて、お金を濫費さへしてゐたら、何も文句はないぢやないか。』

『あら、するぶんね！　何がそんなに「あたしのフランク」を怒らせたんでせう？』

『君の知つたこつちやない。事務のことだ。』

『事務のことだつてあたしにもわかるわ。お話しごらんなさいな。かう見えたつてあたしにだつていゝ智慧が浮ばないともかぎらないことよ。』

『莫迦な！　事務所の苦勞はおれひとりに任しておくがいゝ。』

『だつてさうはいかないわ。夫婦ですもの、――そんな水くさい――』

『おや、言ふかね、帳簿が合はないんだ。』

『えゝ？　何が合はないんですつて？』

『帳簿々々！　帳簿が合はないんだ。』

『まあ！　何て大きなお聲をなさるんでせう！　それが合はないと困るの？』

『困るとも！　帳簿が合はなきやお前、何かそこに不正が行はれてる證據ぢやないか。』

『あら、困るわねえ合はない帳簿なんて。高價いもの、それ？』

『何が？』

『帳簿よ。』

『帳簿はそんなに高かないさ。』

『あら！　馬鹿ねえ「うちのフランク」は。高價いもんでなかつたら、そんな合はない帳簿なんか捨てちまつて、新らしいのを買つたら何う？　わけないぢやありませんか。』

で、もしこれが漫畫なら、こゝで主人公は椅子から辷りおちて、さしづめその頭から無數の星が飛び出てゐやうといふところ。

大戰以前には、それでもあめりかには、腕一本の男がお金を作る機會がまだまだ轉がつてゐたので、男たちは金儲けに夢中になつた結果「疲れたる企業家」はみな晩婚で、從つて妻君には子供みたいに年のちがふのが多い。だから、「男の事業」「女のおしやれ」と社會的に劃然と區別がついてゐて、女は男の世界とその事業には無智であつていゝどころか、その方が可愛いことになつてゐるんだが、そのため男が實社會の渦に揉まれて狂奔してゐる間に、女はひまにまかせて本を讀んだり音樂を聞いたりするものだから、いやに文學好きになつたり、情緒的に高くとまつたりして男が急に下らない動物に見えて、佛蘭西の公爵やルウマニアの詩人やロシアの青年音樂家が「高踏的に浅黒いタイプ」として女たちにもてゝ來たわけ。あめりかの人はこのところこれら國外からの智的浸入者に對して共同戰線を張らうとしてゐるかたち。あめりかに離婚沙汰の多いのは、この「小さなお姫さま」が「あたしのフランク」に幻滅を感じ出し、フランクはまた「お姫さま」を持て餘まして來たところに大きな原因が存する。その間にあつて活躍して來たのが、アドロフ・マンヂウ扮するところの好色有閑紳士、故ルデイ・バレンチノの再演の「シイク型」だ。ところが最近にいたつて「小さなお姫さま」もその地位に飽き足らなくなり、自分も早くから夫君の「事業」に首を突つ込んで、ともに苦勞しやうといふ傾向。そこで流行り出したのが早婚の「友達結婚」。しかし、これで離婚の率が減るかどうかは、ちよつと判斷をゆるすまい。

3

紐育太平洋ジヤズマニア帝國の印象。

兩側の高層建築物は雲へ突入して、道路は人造グランド・キヤニオン。

晝でも暗いので街燈がかんかんついて、夜も晝のやうだ。

W・J・Zの放送。

アロウ・カラア。

車道は、自動車がぎつしりつまつて流れるやうに動いてゐるが、歩道には人つ子ひとり影を見せない。

すると！

ある街角へ來かゝつた時だつた。向うからひとりの男が、その無人の境の往來を歩いて來るのを見て、自動車の窓から聲あり。

「あらつ！　人が歩いてるわ。」

同じく聲。

「どうしたんだらう。へんなやつだね。」

「えゝ。よほどの變りものなのね、きつと。」

さて――その唯一の通行人は「擧動不審」とあつて拘引され、審問の結果「交通妨害」のかどで見事に處罰されました。

あめりか當代人氣作家ジヨウジ・エイドの作風にしたがへば、こゝにはどうしても彼のいはゆる俚諺なるものが必要だ。曰く。

みだりに足を使ふことは文明への冒瀆である。

4

さうかと思ふと、評判のいゝエヴアスピイド・タキシの廣告文に、
「食後の「御散歩」にはぜひ本タキシの御利用を！

5

もう一つ自動車の漫畫。
市伽古Ｇ街、一車庫のサインに所見。
『自動車預ります。それからフオウドも。』

6

當世めりけん女學生氣質。

「伯母リジイ」といふともうちやあんと決つてゐる。

まづ外觀から申さうなら、案山子のやうに瘦せて鼻眼鏡をかけ、その鼻眼鏡に黑いひもをくつつけて耳へ垂らし、首にはレエス。鯨骨のコルセツト。長い大きな洋袴。黑い靴下。ボンネツト。携帶品としては聖書。晴天にも洋傘。日曜日には、猫が走つても犬が吠えても、顏をしかめて「ＯＨ！ ＭＹ！」

生れはボストン。女學校評議員。教會傳道委員長。州政府清潔明朗實行委員。ボウランド孤兒救濟會長。その他、短いスカアトを禁ずる運動、等々の提唱者。

このリジイ伯母さんには、必ず大學へ通つてゐる若い姪があつて、伯母さんは、一年に二三度は寄宿舍に女學生の姪を襲擊することになつてゐる。だから、昔はよく女學生が電報——例の黃色いウエスタアン・ユニオン會社組織の紙片——を手にして、校庭の隅でしよげ返つてゐたりすると、同室の仲間なんかゞ訊いたものだ。

「あら、ノウマさん、また田舍から伯母さんがいらつしやるの？」

と、ノウマは泣き笑ひの顏を上げて、かすかに頷首いたりするのが定則になつてゐたが、ところがこの頃は！

姬のノウマ、伯母リジイの來襲を少しも恐れない。「アスユク」の電報をうけとるが早いか、彼女は寄宿舍ちうをかけまはつて、伯母さんをして眉をひそめしむるに足るあらゆる品物を借りて來て、それをずらりと爐棚や机の上に立てかけておく。おまけにあわてゝ部屋を掃除するかと思ひのほか、みんなの手を借りて一層ちらかし、珈琲茶碗に靴下留が這入つてゐたり、讚美歌の上に煙草の吸殼をおいたり——そしていよいよ伯母さん到着の時刻になると、ジヤズのレコオドをかけて「甘い接吻ほどあとが苦いよ、Ｏ！ ＢＯＹ！」

のみならずノウマ自身は、一ばん短い着物を着て[illegible]。映畫の

妖婦を氣どつて腰にしなをつくりながら、喫めない煙草をふかしてゐるところへ伯母さん入御。

伯母、呆れて無言。部屋ぢうをぢろぢろ見廻す。と、つかつかと壁棚の桃の前に行き、まづ藏書をしらべにかゝる。

ノウマの借りあつめて來た本は。

エリナア・グリン著「戀の一週間」

アリス・コリンズ著「戀の三週間」

ノウスウエル博士著「これだけは心得おくべし――結婚前の處女のために」

「性の神秘」

「蜜月旅行記」

「近代舞踏十二課」

このとき、ノウマの聲は落ちついてゐた。

『伯母さん、あたしずゐぶん骨を折つて手に入れたのよ。だつて發賣禁止の本が多いんですもの。』

リジイ伯母さんは口がきけなかつた。彼女が自分の激情を發表し得る唯一の方法は、持つてゐる洋傘の先で、いゝとんと床を突くことだけだつた。同時に蓄音機は大聲を發して「甘い接吻ほどあとが苦いよ、O! BOY!」

見るとノウマは、男のやうに足をひろげてどつかりと椅子に腰を落したが、それは何も伯母さんが觀察したやうな近代的無作法のあらはれではなく、じつはノウマは、はじめての喫煙に眼がくらくらして來たに過ぎない。

伯母リジイがぷんぷんして早速歸り支度をはじめたとき、部屋のあちこちから友達の眼がのぞいて、そして、一様に笑ひを堪えてゐた。

「可哀さうなノウマ!」

7

何もかも大きく法螺を吹つかけなければ氣のすまないあめりか人、つひ度がすぎて、

『ロッキイといふ山があるでせう。あれは私の先祖が築いたんです。』

だまつて聞いてゐた英吉利人が、この時にやりとして、

『はゝあ、さうですか。いや、大したもんですな。ところで、死海といふ海があるでせう?あれは私の先祖が殺したんですがね。』

8

お母さんがよく拵へて下すつたあの甘しいプデイング――That nice pudding mother used to make――といふ言葉を夫の口から聞くことは、あめりかの新婦人が、ひとしく胸を痛めることになつてゐる。夫の方から言へば、これがまた何よりの嫌がらせ文句だ。

あの、新婚の夢がさめて、お互ひが白つちやけた眼で觀察し出す一時的倦怠の時代に、夫が、妻の荒模になる戰鬪の幕で、デザアトのプ

チインヷをまづさうに口へ運びながら、ふと遠慮めいた眼を遠くへ走らせて實感深く呟くのが、この「お母さんがよくこしらへて下すつたあの甘しいプデイング——あれはかうぢやなかつた。もつとかう、何處となく違つてゐたよ」のいひぐさにきまつてゐる。

之にはどのお細君さんも口惜しがらせられると見えて、そこで始まる。

『えゝ、どうせあなたのお母さんのやうにはいきませんわ。けれど、どんな風にちがふんでせう？　參考のために仰言つて下さいな。』

『どうつて——旨く言ひ難しさ。あゝ、あのよくお母さんが拵へて下すつたおいしいプデイング！』

悲觀の涙にくれた夫人は、あゝでもないかうでもないと、お料理の本を引つくりかへした末、これならばといふ自信をもつて、またプデイングを食膳へ上すと、夫がかならず横を向いて、

良人『お母さんがよく拵へて下すつたあの甘しいプデイング——あれはかうぢやなかつた。』

いよいよ柳眉を逆立てた夫人は夫の留守にそつと彼の生家へ立ち寄つて、母なる人に懇請し、かれのいはゆる「あのおいしいプデイング」なるものを拵へてもらつて、そばに立つてその製法を實地に見學してみたが、自分のやり方と何らの變りなく、その出來上つたところも變哲のない世の普通のプデイングに過ぎない。が、それを持つて來て、こつそりその日の夕飯後に供すると、良人、二口三くち食べたかと思ふと、たちまち不味さうに匙を捨てゝ、

『AH！——お母さんがよく拵へて下すつたあのおいしいプデイング！　あいつはどことなく違つてゐたよ。』

妻『まあ——！』

このとほり、歷史のない亞米利加には、そのかはりに「お母さんのプデイング」によつて、若いお細君さんは紅涙をしぼらせられなければならないことになつてゐる。

9

とにかく、あめりかの空氣は明るい魔術だ。一種の同化力をもつてゐる。子供にすぐ反應する。行つて一月も經たない子供が、暗唱する時にもう日本人のやうに手を上げずに、すぐ教師の椅子へ向つて來る。それはいゝが、一ばん始末のわるいのが、ちよいと膝だけ亞米利加化しかゝつた歐洲移民の若い連中だ。きざな服裝にてにをはを忘れた英語を操つて得々としてゐる。或るとき僕が、日本人のH君と公園のベンチに腰をかけて、何か日本語で話し込んでゐたら、こんなのが十四五人集つて來て、

『おい、支那人、あめりかにゐる間は英語で話せよ。』

こゝにおいてかM大學辯論科首席のH君、齒切れのいゝ英語で一場の訓戒を試みて、やつらをあつと言はしたのだが、そのときは僕も愉快だつた。この民族的な痛快感といふものは一種壯烈な氣分である。が、外來移民の子孫と黑人と猶太人の問題をどう處置するか——これが今後のあめりかにおける見物だ。

東洋美術論

野口米次郎

ある人は東洋美術を因襲的形式から說かうとする、またある人はそれを超絕的精神から說かうとする……私はそのどちらをも輕視しない、如何となれば美術に限らずどんなものでも、形のない所に精神の宿る理由はないと信ずるからである。私は東洋美術の上で、これまで藝術の因襲主義を敵視したことはなかつた。古い狩野派の因襲主義は多くの場合に不合理であつた、また時には殆ど無稽にも近いものであつた。然し若し橋本雅邦がそれを自己獨特の錬金術的魔法にかけてこゝに珍らしい美の表現と鑄かへたとしたならば、たれも因襲主義にむきに反對することが出來ないであらう。實際雅邦は因襲主義を敵視しなかつたことをどんなに喜んだであらうと私は想像する、また彼は因襲主義を離れて追憶の眼でそれを見直し係戀の情に堪へなかつたであらうと想像する。私は今特別に雅邦の名前を出して語つたが、もとよりそれは雅邦に限らない昔から今日に至るまで日本の立派な畫家はみな因襲主義を精神主義に一變させてゐる。彼等は表面的な形を幻と化し立直して、そのなかから氣高い灰色の鳳凰を飛ばしてゐる。この鳳凰が私共の東洋美術家の最初でしかも最後の目的であらねばならない。南齊の謝赫は六法を說いて云ふ、『氣韻生動、骨法用筆、應レ物寫レ形、隨レ類傅レ彩、經營位置、傳摸移寫。』黃左田もかう書いてゐる、『六法之難、氣韻爲レ最、意居二筆先一、妙在二畫外一、如二音接一絃、如二烟成一靄、天風冷冷、水波淡淡、體レ物周流、無レ小無レ大、讀二萬卷書一、庶二幾心會一。』これに類似する支那人の畫論をあげて來ると殆ど盡きる所を知らないが、要するに如何に表面的な屍灰のなかから精神的の鳳凰を生み出すかを美術の目的としたものである……若し美術の目的などといふ言葉を使ふやうでは眞實の美術を知らないものだといふ人があらば、私はそれが美術の本體だといひ替へる。

然し因襲的外形の手法を精神的に躍動させて暗示的ならしめるといふことは至難のことである、藝術家に大手腕がなくては出來ないことはいふまでもない。大手腕の藝術家は個性の卓越した人々であらねばならぬことはいふまでもないが、少くも東洋に於てはそれ等の人々を個性の點から論ずることは彼等に對する正しい行爲でないやうな氣が

する……如何となれば彼等は剛健確實な普遍性の上に立つたからである。日本で雪舟探幽、光悦光琳永徳山樂、乃至近代に至つて芳崖雅邦の藝術はみな東洋人の先天的に持つて生れた普遍性の表現であると云へる。彼等の藝術的思想或は概念は、もとより批評の餘地があるものにしても極めて高尚なものと云はねばならない。私は今彼等の藝術と西洋人のそれと比較することは避ける……なぜならば彼等は西洋の美術家とは隨分相違した態度の人々であるからである。

若し私が東洋の美術家は個性の表現を目的としないといつたならば、人は私を非難するであらうか……實際に於て私は彼等が個性の表現を輕蔑さへしたといふことを立證することが出來るやうな氣がする。若し人々が彼等の藝術に東洋の哲學を讀むことが出來るならば、それが個性を忘れ或は少くも離れて普遍性の茫漠たる領土に入つたものであることを私共は知るであらう。私は禪宗の教理なるものが何であるかは知らないが、東洋の藝術家の大なるものはみなその影響を多大に蒙つてゐると漠然と私は考へることがある。禪の悟入は生活の上でも私共に所謂無我の境に到達することを敎へると云はれてゐるが、私共東洋の大藝術家はみなその無我の境に入つて自己の存在を藝術的に立證した人々である。私は近頃雅邦のことを書いたものを讀んで、彼が機會のある毎に『心持ちの藝術』といふことを語つたことを知つた……この心持といふことで彼は何を意味したであらうか。彼は必ずしもこの言葉をただ精神的にのみ了解して居らなかつたに相違ない。私は『心持ちの藝術』はその藝術上果して[illegible]觀的のものか或はまた主觀客觀の二つが結びついたものかを[illegible]たい、考へてみても決して無駄のことでないと私は思ふ。私が若しこの質問を雅邦にかけても、或は如何なる日本の偉大な美術家にかけても、私ははきつと滿足な返答を與へられないであらうに相違ない。私共日本の美術家は偉い人であればあるほど言葉の少い人間であつた。彼等の多くのものは『沈默は雄辯なり』の信者であつた。彼等は無言を完全な返答なりと思つた禪の悟入者であつた……言葉で語つた所でそれは無駄だと考へた打切棒の人々であつた。私は今東洋美術家の所謂心持ちの藝術といふことを説明してみたい。

東洋の大美術は主觀に捕へられることを嫌つた……なぜならば私共が主觀に捕へられると、眞實な自然の理解を妨げられ完全に自然と合一することが出來ないからである。然し私共は主觀に捕へられては悪いが主觀を全然忘れてはいけない。詰り私共は不卽不離に主觀を眺めねばならない……若し私共が無主觀的であるならば私共の態度は必ずや明瞭でないであらう。然らば如何なるものが東洋藝術の眞生命であるかといふに、それは主觀藝術に捕へられずに描いた客觀的描寫に外ならない、そしてそれを「心持ちの藝術」といふのであらう。これを碎いていふと、畫家が主觀に捕へられない態度で物象を眺めそれを畫布の上に表現するとその作品に心持ちが出て來るといふことである。『心持ちの藝術』とは則ち氣韻の藝術といふ意味である。張浦山の畫

論にある言葉に、『氣韻有下發二于墨一者上、有下發二于筆一者上、有下發二于意一者上、有下發二于無意一者上、發二于無意一者爲レ上、發二于意一者次レ之、發二于筆一者又次レ之、發二于墨一者下矣。』と『心持の藝術』とは無意に發する藝術の意味である。無意に發した藝術で始めて描からとする題材と完全に結合した結果になり得るのである。偉大な過去の東洋藝術家は自然と一つになるといふ點から自己の藝術解放を行つた……藝術解放といふと何だか六ヶ敷く聞えるが、詰り藝術の自由を尊重したといふ意味に外ならない。若し藝術に自由の生命が與はれて居らないならば、その藝術は死んだ藝術に過ぎない。私共はそれから『成長するといふ感』を與へられない。藝術もすべての生物と同様に人に生きた感を與へないものは駄目だ……ここに一つの菊花の繪があるならば、それは根を地中に持つて花を咲いてゐる感を與へる繪でなければならない、ここに山の繪があるならば、それは千古を貫く大地のリズムに動いて空中高く聳えるの感を人に與へねばならない。若し月の繪が天空を航行する形のない團扇のやうな月であつたならば、それは眞鍮の月の繪でない。私共詩人は詩に『自然自らをして語らしめる』といふ言葉を金科玉條の一つとしてゐるが、畫家も畫布の上に自然に自らを語らしめねばならない。自然に自らを語らしめるやうな繪畫を作るには、畫家は『意無きに發する藝術』雅邦の言葉に依ると『心持ちの藝術』の秘密を握らねばならない。

繪畫に強烈な個性の光りを投込むといふことは畢竟自然に對する冒瀆に外ならないと私は考へることがある。私は常に浮世繪を禮讃して北齋の藝術價値を高く買つてゐるものであるが、彼は自然を冒瀆してゐると感ずることがある……北齋の版畫富嶽三十六景のなかに『尾州不二見原』で桶屋が仕事をしてゐる大きな桶のなかから、又『遠州山中』で大工が大きな材木を鋸で挽いてゐるがその材木の突支棒の間から富士山をのぞかせてゐる。私はかういふ繪に筆者北齋の機知縱横を認めるが自然を何だか冒瀆してゐるやうに感ぜざるを得ない……北齋の意が働き過ぎてゐるだけでもそれ等は最善の藝術でないと云ふことが出來る。美術家は自然を改造するといふ言葉があつて構圖上の設計を尊重する批評家もあるが、北齋の前記の作品の如きは雅邦の『心持ちの藝術』でない、『自然自らをして語らしめる』といふ藝術から離れてゐるやうに感ぜられる。少くも北齋はそれ等の作品の上では謙讓な東洋藝術家でなかつたと云へる。東洋の大藝術家は內氣な謙讓家であつた、また彼等の藝術的誇りもその謙讓な態度から生れた……光悅宗達乾山はいふまでもなく、永德や山樂の如く壯嚴な襖繪を作つた畫家でも自然崇仰の態度は極めて奧ゆかしい謙讓なものであつた。實際に於ての謙讓心が無いと藝術的無我境には到底入ることが出來なかつた。無我の境は清澄明麗な湖水の水の如きもので私共は粗野不純の氣を落とすことが許されない。私共は謙讓の態度で人間天賦の力を充實させて自然の神殿へ入らねばならない……この態度がないと神殿の扉は直ぐ私共の面前でぽつたり閉づるであらう。東洋の藝術家は總て

や鑿や繪の上の藝術家たる以前に、生活の上に於て眞實の人間であらねばならない。私共はよく神聖な祈禱的行爲といふ言葉を使ふが、この祈禱的行爲から出た藝術でないと眞實の藝術でない。祈禱的行爲とは神樣の面前に於ての行爲のことで他人の賞讃や結果を考へてその行爲を意味しない。故に私は重ねていふが、眞實の藝術は意なきに發した藝術云ひ替へると『祈禱的行爲の藝術』のことで、かういふ藝術は藝術そのものが自らを樂んでゐる態度が作品に暗示されてゐる。事實古來から最大美術は決して人の注文や金錢のために描いたものでない……詰り神樣に祈禱を捧げる積りで美術家が自分だけに見せるために描いたものである。美術家が自分だけに見せるため製作してゐる時、彼等は實に自ら人生の最大勝利者であるといふ感が深いであらう……若し私が本阿彌光悅が日本最大美術家であつたといふならば、彼は人生の最大勝利者であつたといふ意味である。私は彼の遺作を見て神聖な藝術の心の聲を聞くことを喜ぶ。もとより私は光悅をのみ最大美術家であるといふものでないが、彼の如き神品的人格者は他に幾人あるかを私は知らない。私が東洋の大美術を眺めて喜ぶといふ意味は、そこに私が神の聲を聞いて無我の境地に入る一大媒介となつて與れるといふ意味である。勿論偉大なる人格者は藝術家のなかにのみあるのでない……歷史を飾つてゐる戰場の勇者乃至は高德の僧侶にしても、偉大な人格者の心をたたくと神聖な神樣の聲が徐ろに響いて來るのを感ずる。

北齋廣重の風景畫は人類自然の心置きない言葉の響應を詩人的に解へた顯著な風土的繪畫である。西洋の繪畫でいふと十七世紀の和蘭風景畫のやうにその鄕土に對する熱烈な愛着心と先天的自負とを作品に反映させたものが即ちわが浮世繪師の風景畫だ……私に彼等の風景畫のことをここで語らして貰ひたい。私がそれを論ずるのが私の目的ではないが、後で語らうとすることと對照上私は數言を費さねばならない。北齋の數多き名繪畫のなかで水の氣高い純白の英雄的表情を『美濃の養老の瀧』で見ねばならない。瀧の水が太く垂直に上から落ちて珠玉を岩石にあたつて散亂させてゐるが、それに醉した菅笠の旅人のため畫面が人情化して風土的繪畫となつてゐる。又『和州吉野義經馬洗の瀧』を見ると力のある青黒い水は二三度迂回して谷へ落ちてゐる。ここに代赭色の一匹の馬をせつせと洗つてゐる男がゐて、黄色の草原の間に代赭色の岩が見えるがかういふ故國の地面の色彩を見て日本人でたれかそれを喜ばないで居られやう。『富嶽三十六景』中の逸品はどうしても『神奈川沖浪の裏』だ……大きな波が高く孕み低く窪み、まるで恐ろしい大蛇の腹のやうに生臭い呼吸を上下してゐる。かういふ恐ろしい間を平氣で漁船が浮いてゐる。私共はこの圖を一寸見ただけでもびしよ濡れになる水のなかへ溺れ込むやうな感じを持つであらう。私は更にかういつたことがある。『恐ろしい自然の聲を聞くだけでは、この作品を完全に了解したものでない……北齋は其外にもつと大きなものを描いてゐる。諸君は狂氣の波の背後に小人島の山のやう

な富士山を見るであらう。あゝ、何たる沈默がその山を廻つて這つてゐるであらう。諸君はこの沈默を驚くべき波の聲と對照させねばならない。これぞ正に沈默と聲との二聲曲だ。北齋は確にこの繪の然製を背景の小さな富士山に置いたであらう。若しそれ廣重の風土藝術を鑑賞しようとするならば、私は彼の繪畫藝術の總勘定として晩年の傑作、『金澤八勝の夜景』『木曾路の山川』並に『阿波鳴門』をあげるであらう。私はこれ等の三枚續を眺めていつも藝術の單純性が成功する場合位澄み渡る詩的音樂を奏するものはないと感ぜざるを得ない。殊に『阿波鳴門』の圓い波紋は私共の人生を彩色する悲劇喜劇の表徴でさへあるやうに私は感ずることがある。然しだ、所謂浮世繪師の風景畫は自然の斷片的表說に過ぎない、そこには大きな想像力の動きがない、宇宙の充實した方則を暗示しないと私は思はざるを得ない。諸君にして雪舟派乃至は狩野派或は大雅堂や蕪村の自然描寫へ行くならば、必ずや諸君は自然現象の全眺望を暗示されると思ふに相違ない。それ等の作品を見ると諸君は何の破綻もなく自然の大音樂は徐ろに響き、私共がその音樂を聞く時直に私共人生の悠久たる生命といつたやうなものを感ずるに至るであらう。

勿論それは最善の作品の上にいふことで、日本畫家の自然の肉筆描寫が悉く價値あるものであるといふのでない。私の信ずる最良な自然描寫は外形を超絕した心の作品、雅邦の言葉に依ると『心持ちの藝術』が生みだす作品、支那人の所謂氣運生動の作品であらねばならない。夏文彦は、『氣運生動、出二於天成一、人莫レ窺レ巧者、謂二之神品一、筆墨超絕、傳染得レ宜、意趣有レ餘者、謂二之妙品一、得二形似一而不レ失二規矩一者、謂二之能品一。』と書いてゐるが、私の信ずる最大東洋藝術はこの神品をいふのである。又鄒一桂といふ人は繪畫は六氣を嫌ふといふことを論じていつてゐる、『一曰俗氣、如二村女塗一レ脂、二曰匠氣、工而無レ韻、三曰火氣有二筆仗一而鋒芒太露、四曰草粗率過甚、絕少二文雅一、五曰閨閣氣、描條軟弱、全無二骨力一、六曰蹴里氣、無知妄作、惡不レ可レ耐。』私の信ずる最大東洋藝術は即ちこれ等の六氣が全然ないものをいふのである。西洋の美術評論にも『音律的生氣』とか『すべての物象に流れる生命の波動』とか、或はまた『生命のある現象の外的動きと內的音律の融合』とかいふ言葉を使つてゐるがこれも『氣運生動』を說くに外ならない。眞實の藝術の歸着點は古今を問はず東西の區別なくみな一つであると私は信じてゐる。然し東洋の藝術ではこの氣運を偶然に顯はれるものとして、西洋の藝術に於けるやうに最初から原理として主張して居らないの感がある。又西洋の藝術は私共の浮世繪のやうに人對自然の關係を表現したものが大部分であつて、東洋の純正藝術に於てのやうに人間と自然とが打つて一丸となつた無我の詩境の消息を傳へるものは少い。東洋藝術では作者が自然に捧げる尊敬心の態度如何でその作品の價値が定まると云へる。

私共の東洋では人間は自然の一部であるとされてゐる、自然の生氣がかたまつて人間になつたとされてゐる、人間は春吹く風や、散じて

は地上に落ちる雨や又變じて空中に飛ぶ雲や霞とも同一性のものだとされてゐる。既に自然と同一性のものであるから私共人間のそれに對する理解は正しくそれとの融合は至つて容易だといふ譯になつて來る。私は『森林』と題する一つの詩に、

「君は單に樹木たるのみにあらず、
われは人間の耳語と影とを君に發見するなり。
ああ、われをして世界と生の悲哀より遠ざからしめ
失ひし歌を再び取返へさしめよ。
君の心にわが靈を發見することは歡喜の極みなり。
森林よ、君はわが胸に面して立つ、
わが心に君自身の歌あり、
いな、君の深き影あることを發見すべし。
わが想像と樹木との同盟は尊し
わが藝術の創造始めて完成せん。
森林よ、われを嘆美せよ、
われ君を嘆美すべし。」

また私の『美の證跡』といふ詩に、

『花が獨りの藝術に落ちる瞬間あり、
そは詩人が技巧に落ちる時なり
（花は美の金線に舞ふ舞ひ手、
詩人は銀の樂器「人生」に歌ふ歌ひ手。）
虚僞、臆測、汝は兀鷹なり、何が故に花や詩人を亂さんとするか。
花として存在し、詩人として存在するは一つの偶然なり。
同じ力の表現なれど、
進化の糸の撚法異なれるのみ。
われはそれ等の形式を見ず
ただ如何なる美の證跡あるやを知らんとするなり。
美の想像凝つては詩人となり又花となる、
詩人たるは即ち花たることなり、
舞ひ手たるは畢竟歌ひ手をして歌はせる爲めなり』

これ等の詩は人間が自然の現象と同一性であることを歌つたものだが、古來から東洋の美術家は私と同じ態度で水の飛躍を描いた、花の天へのぼる姿を描いた……自然の變轉極まりなき流動的な至上な高の生氣を表徵する龍は東洋畫家の大きな試金石であつた。私はこの表徵の歷史的起原は知らないが、風雨を飛はす雲や雷を從へて大空を往く龍は自然の靈氣を最も大きく具體化したものであることはいふまでもない。日本の美術家でも殊に狩野派の人々は寺院の天井に八方睨

みの龍やその他種々の龍の掛物を描いてゐる。然し彼等がその題目を取扱つて十中八九まで失敗してゐることを見ると、如何にそれが容易ならざる畫題であるかが知れる……もとよりその筈だ、若し畫家に自然の偉力を理解しそれに對する信念が薄いとどうして彼が立派な龍を描きあげることが出來よう。龍とはどんなものか……恐らく誰も實見したことはあるまい。然し龍から千變萬化して盡きることを知らない自然力をだれも想像することが出來る。龍は東洋人の藝術的想像が生みだした自然の一大表徴である、最も流動的な想像の怪物である。私共はその他の自然現象を取扱ふ場合にいつも部分的であり斷片的であるけれども、龍となると私共が自然に對する理解いな禮讚の感激を全的に一度にどつと注がねばならない。單に大きな眼や角を持つた一怪物を描いたとてどうしてそれが龍になり得ることが出來やう。私共は龍はかういふものだといふ實際を知らないが、龍はこんなものであらうと想像は出來る……然し人間の想像は物質的存在以上に現實である場合がある。

支那の老子は水は自然の現象のなかで一番弱く柔かでしかも一番強く固いものだと說いてゐる。水には舌がないが岸石にあたつて聲を發し、また努力せずして巧妙に如何なるものにも接觸透徹し行く……この宇宙間何物の存在にも入つてゆくといふ點から、私共東洋人は永遠無終の靈を水で代表させ、流動的自然の表徴としてゐる。巨勢金岡の『那智の瀧』は日本で水を取扱つた風景畫中最も古い作品の一つであらう。この作品から宗教的印象の何物かもつと明瞭にいふと永遠無終の感を受けるには、必ずしもこの作品に關する特殊の知識を必要としない。樹木が茂る斷巖絶壁から下へと落ちる細い清い數條の水を見よ、また黃金の圓を描いて空へのぼる太陽の姿を見よ……だれもこの繪を見てここに漲る藝術的威嚴に打たれざるを得ないであらう。そしてその藝術的威嚴は私共に自然は永久に亡びないといふ消息を傳へるであらう。私は東洋の詩人や哲學者が瀑を眺めながら無我の詩境に入らんとしてゐる圖をしばしば見てゐる。宋時代の名家に李龍眠といふ人が居つた。彼は一壺の酒を携へて山間に水の落ちる所へ出掛け横臥して終日を暮らしたさうである。後世この有樣を描いた繪畫がいくつも殘つてゐる。私は故末松男爵の所藏にかかる大雅と同時代の名家皆川淇園の作『李白瀑を見るの圖』を見たことがある。北齋の大判竪繪の版畫に同題目を取扱つた一枚がある……二人の從者を伴つた老詩人李白は今絶壁の上に立つて天を破つて落ちる瀑布を眺めてゐる。淇園でも北齋でも李白は支那のどこの瀑を眺めたかを知らなかつたであらうが、私共はそれを詮議立てする必要がない。ただそれ等の繪畫が自然と人生を一つと見る東洋思想の表現であることを知ればいいのである。

かういふ東洋思想は西洋で一般に理解されて居らない。私は前記の畫題があるだけでも東洋の藝術は偉大であるといひたい。西洋の藝術にも偉大な點があることはいふまでもないが、自然の理解といふ上か

ら見ると私共は遙に西洋人に優れてゐるやうに感ずる。老子は無我を信じ受動的態度に鑑賞の力が潜むと説いた。所で西洋人でそれに近い信念の詩人といつたらウオヅウオスであらう。彼は西洋に稀れた孤獨靜坐の詩人で、湖畔の地ライダル山の一角から自然に合一して靈的世界を擴大ならしめた人だ。自然と人間の本然性を同一視して人間の喜悅と哀愁とを自然のうちに聞いた人だ。彼は宇宙の限定された永遠性を完全に理解して、自然を單に人間生活の背景と眺めずに私共はその一部であると信じた。この態度は正に私共東洋の藝術家の態度であると思はざるを得ない……然らば彼はどこからこの態度を學んだであらうか。この研究を私はここで論ずるのでないから、ただ彼が宇宙心に自己を認識した珍らしい西洋の詩人であるといふに止めたい。私共東洋人は幾千年前の昔から自然と合一して人間の靈的生活が完成するといふ眞理を知つてゐるが、西洋ではウオヅウオスを得て始めてこれに目覺めたといふに於ては東洋が西洋に教へるものがまだまだ多いと感ぜざるを得ない。『われはわが墓石を無言で笑ひ、母體を出づる子供の如く、墓地を去る幽靈の如く、霧と雨のなかから大空へと登る』とシエリーは歌つた。これは月を侶伴に四海を彷徨の靈地と考へる私共東洋人を喜ばせるに相違ない一詩篇であるが、シエリーの態度が餘りに感激的であることは面白くないやうな氣がする……私共は自然を靜寂の態度で眺めたい。私共に感激の情調がないではないが、その感激が靜止した場合に始めて私共は自然を凝視する喜びを得ると信ずるのである。最近の英國人でメレデスの如きは可なり東洋思想に接近したものを持つて居つた……ビンヨン君は彼に東洋の國の婦人さへあるといつたことがある。ビンヨン君は「彼の詩を讀むと日本の禪僧の精神生活に接するやうな氣がする。メレデスの思想が禪僧の思想であるといふのではない、ただ彼の詩に現はれる禁慾主義が禪僧に類似する結果を生んでゐるといふに止まる」と言ひ添へてゐる。實際に於てメレデスは沈默のうちに思想を燒く生命の一護符であつた、彼の祈禱は靜く日光のやうに信念の胸を擁護した、彼は思想の路を歩いて平和のうちに培養された禁慾の花瓣を集めた、彼は醜陋な人生を歌つた反省と反省の間を彷徨つた……この藝術的禁慾主義は何を私共に教へるであらうか。彼は自然の考察は決して感傷的な放縱な行爲であつてはならない、人間は自然を取つて以て個性を强める訓練とせねばならないことを教へるであらう。もとよりこの態度は尊敬に價するに相違ないが、古來から私共が遵奉して來た對自然の思想とは多少異つてゐるやうな氣がする。私共は自然を靜觀凝視することは自己認識を遂行する道であるとしてゐる、人間は非人間的な自然界へ入つて始めてその主義を忘れることが出來るとしてゐる、又宇宙に對し人間が如何なる存在であるかを發見するとしてゐる……そして私共が自然と紙一枚となつた時無我の法悅に入り、この法悅境の消息を繪畫で傳へたものが即ち東洋美術の偉大なものであると私は信じてゐる。

『自然は高く翺翔して夢幻の深淵に入る。この場合自然は沈默である

……否な沈默の聲を發する。東洋藝術では靜寂を傳へる所のものを最も高尚としてゐる。故に東洋藝術の最大審美は沈默の一字に歸することが出來る。沈默に觸れて人生は眞實の喜悅を感ずる……如何にその喜悅が力強い戰慄であるであらう。私共は自己を忘却して漸次に理想とでもいふことの出來る或物を摑むことが出來るのである。』これは私の書いた言葉の一節であるが、偉大なる東洋藝術の如何なる作品を見てもそこに『沈默から溢れる喜悅』を感ぜざるを得ない……實際それを人に感じさせる程度に依つて藝術の價値は定まる。偉大なる東洋藝術には靜寂のうちに微動する蓬萊の島の消息が追憶的の幽かな聲で傳へられるが故に、若し人がそれを理想的作品であるといひたくば、私は喜んでその言葉を許し何等の反對を語らないであらう。然し如何にそれが理想的に人に見えるにしても、作者自身では現實的態度で描いたものと信じたに相違ない。彼等は赤裸の眼で實際の現象を見たが、これを單に見たままに表現しなかつた。彼等は物象の魂を描いた。そしてそれが即ち彼等自らの態度であつた、解放であつた。彼等は外面的物象の現實から放たれた時眞實の人間であると感じたであらう。そしてまた彼等は夢のやうな非現實のなかに一層現實的な精神の存在があることを知つたであらう。

如何なる國の藝術でも偉大なる場合はそれは諧調の表現であることはいふまでもない。私共の五官は纖捷である、私共は洸然な空間と時のなかから永劫の諧調が響くのを聞く……これを聞くことの出來る人が即ち眞實の美術家だ又詩人だ。私共は偉大な過去の繪畫を見たり又詩を讀んだりして、そこに永遠の時が空間の鼓動に觸れて踊つてゐることを知るであらう。そして私共は藝術の偉大なるものである丈けそれ丈け現實的で、その現實的であるのは自然の情調的鼓動を表現してゐるからであることを知らねばならない。私は秘密といふ言葉を喜ばないが、若し自然の諧調を感じて美の最高領土へ飛躍することが秘密なくして出來ないならば、わが東洋の大藝術家は秘密を握つてゐる人々である。偉大な藝術は單純であらねばならぬ。殊に東洋の大藝術は單純のなかの最も單純なものである。この幻想は複雜でない………複雜のなかから生れた單純の藝術で始めて大藝術といへる。私はこのことを考へると直ぐ黑田侯爵家の大聖院の襖繪雲谷等顏の『梅と鵜』の圖を念頭に浮べる……燦然たる黃金の襖四枚を斜に貫く梅の枝は禪僧の如く瘦せては居れど、豪宕不拔の氣は全畫面を支配し盡してゐる。私はこの作品位充實した餘白の襖を見たことがない……畫面の餘白は恰も秋寒料峭の空のやうに少しの弛みを見せない。實にこれは最大單純性を暗示する偉大な東洋の繪畫だ、そして私はその筆者が所謂氣韻生動の魔法を使つて、藝術より更に老いたるもの人生より更に大きな或物又幽靈とか奧妙とかいふ文字で說明されない或物を顯はしてゐると感服せざるを得ない。私は等顏の襖を思ふと共に秋元子爵所藏の雪村筆『浪岸の圖』双幅を思ふことがある……ここに簡單な一抹の墨と數條の筆で雪村は岩を作り樹木を作り波を作つてゐる。彼

は現實的詳細をすつかり洗ひ落して自然の斷片二三を選擇したに過ぎないが、その斷片から私共は大自然の全的鼓動に觸れその呼吸を感ぜざるを得ない『我を忘れて畫中にあり』といふ言葉があるが實にこの作品の如きものに對してのみ使用すべきものであらう。かういふものを見ると東洋藝術の墨繪の妙は到底西洋繪畫の及ぶ所でないと思はざるを得ない……實際に大藝術家であれば自然の衝動を傳へるに簡單な墨で十分だ、夢のやうな恍惚感を人に與へるに三四錢で買へる毛筆で澤山だ。東洋藝術で私共に靜寂の法悅を與へないならばそれは偉大なものでない。偉大な藝術家は私共が『豫期してゐるが何物だか知らない』といふやうなものを與へて、私共を驚かし喜ばせる人間だ。私共がその作品に觸れて感ずる驚異の心持ちこそ實に至純なものである。私共はその時必ずや洗禮を受けて人生が新たになるの感なきを得ないであらう。

私は時に過去の偉大な東洋藝術家の宗教觀を考へてみることがある……もとより私はその何れよりも宗教觀を聞かされたことがないが、彼等が宗教觀を取扱つた場合にも藝術的態度を忘れなかつたことは嬉しいと私は思つてゐる。眞實に宗教的たることと眞實に藝術的たることは決して爭ふものでない。『何のなにがしは藝術家であると同時に宗教家だ』といへる、又『彼は藝術家であつたから宗教家たることも出來た』といふことが出來ると私は思ふ。若し宗教は悲哀が語る柔和な喜悅の言葉であるならば、藝術は喜悅が傳へる柔和な悲哀の消息であるといへる。私共人生の煩瑣な喜悅に悲しいものだ、そしてこの悲しい喜悅は私共を眞實の法悅境へ誘つて行く。この時私共は一卷の經典を讀まなくても宗教家である、又繪の筆を握つたことがなくても藝術家である。過去の偉大な東洋の美術家は眞實の宗教家であつた、彼等は藝術に精進したといふことが則ち信仰の光明を放つことになつて了つた。……如何に彼等が喜悅の情で墨を磨り筆を握つたであらうと想像すると、私はその作品が宗教的悲しい寂光で包まれてゐることを感ぜざるを得ない。

ヨッフェ氏の遺書

和田軌一郎

嘗つて勞農代表として來朝し、我が政府をして恐怖せしめたアドルフ・ヨッフェ氏が、昨年十一月十六日にモスコウで突然無殘なるピストル自殺をとげたことは、世人は猶ほ記憶新たであらう。彼は春秋に富み享年僅に四十四であつた。彼は自己のこの行爲を説明するため、身邊の卓上にトロツキー氏に宛てて一書を遺した。しかし、この遺書は不幸にしてT・N・Y・(國家保安部)の當局者に沒收され、ついにトロツキー氏には渡らなかつた。だが、かゝることを豫期したかその遺書のコツピーを氏は、所謂、反幹部派の腹心の同志に托して置いた。それからコツピーは轉々と數人の同志の手を經て、ついに國外に持ち出され、現在ロシア以外の國々に公表されつゝある。最近モスコウの友人からこの印刷物が僕に送られて來たのを機會として、こゝに飜譯して發表する。しかし、重要ならざる小部分は省略して置く。

遺書は一讀、人をして泣かしむる言々句々血涙の結晶である。このようなことは政治運動の裡面に、いつも存在する悲劇とは言へ、餘りに傷ましき極みではないか。

僕は滯露中、コロンタイ女史を中心とした勞働反對、又、反幹部派等の勇敢なる闘士の悲慘なる事實を幾度か見てゐる。しかし、それらは常に暗から暗と秘密に葬られ去つた。現在トロツキー、ジノキエフ氏等の數十名は都を追はれ佗しい僻村で流謫生活の苦痛をなめてゐると聞く。もとより彼等は黨規を破棄した罪の報酬であり、自業自得であらうが、過去約三十年生命を賭して、革命運動に沒頭し來た生涯を憶へば僕は立場を異にするが、一掬の同情の涙を禁じ得ない。

× × ×

トロツキーへ

親愛なるレオン・ダヸドヰツチ、

政治家といふものは、適當な時期に身を退くべきものだといふことを、私は一生涯を通じて常に念頭に置いてゐた。それは恰かも、俳優が舞臺を退く時と同じである、遲すぎるよりも寧ろ早すぎる方がいゝのだ、と。人間の生命といふものは、何か無限の物の爲に生かされて居る間だけ、又その程度に於てのみ、意義があるものだといふ思想を私が初めて抱いたのは、もう三十年以上も以前のことだ。我々に取つて人類は無限のものである。その他のものは限度がある。それ故に、それ以外の物に仕へるのは無意義である。假りに人類にはそれ以上の目的があるとしたところで、その目的は非常に遠い未來にあるものだから、我々に取つては人類その物が絶對的無限と考へられるであらう。私が人生に意義を認めてゐたのはこの點に於てのみである。そして今、自分の過去をふり返つて見るに、そのうちの二十七ケ年は我が黨の間で過されたのであるが、自分の意識的生涯の全部を通じて、

自分はこの思想を守つて來たと云ふ權利が私にはあると思はれる。私はかういふ人生の意義に從つて生活して來た。人類の善のために働らき戰つて來た。我が生涯の一日として無意義ではなかつたと云ふ權利を自分は持つてゐると思ふ。しかし乍ら今、私の生命が意義を失ふ時が來たやうな氣がする。從つて、それを終らせるために、私は人生を去らねばならぬと感ずる。

こゝ數年間といふもの、我が黨の首腦者達は、反幹部派の共產黨員には仕事を與へぬといふ一般政策に從つて、私が自分の能力の最善を盡して役に立ち得るやうな性質や方面の仕事は、政治的なものでも政府の仕事でも、何一つさせてくれない。貴下も御存知の如く、過去一年の間政治局は、私をば一の反幹部派黨員として、あらゆる政治的の仕事から完全に遮斷して了つた。

私の健康はだん〳〵增惡した。九月の二十日頃だつたか、どういふ理由だか知らないが、中央委員會の醫術部は私を召喚して專門醫の診斷を受けさせた。醫師等は私に向つて明らか樣に、私の健康が自分の思つてゐるよりも惡いこと、この上一日も用もなくモスコウに止まつてゐてはならぬこと、療治を一刻も遲延してはならぬこと、直ちに外國へ行つて適當な療養所に入るべきこと、等を告げた。

『外國へ行つたら果して恢復するだらうか。自分の仕事を止めないでロシアに居て療治するわけにはいくまいか？』と私が直截に訊ねると、醫師や助手達――中央委員會の開業醫であるコムレード、アブロッソフに、もう一人の勞農政府醫員と、それからクレムリン病院の主事等――は、唯口を揃へて、ロシアの療養所ではいかにしても私を治療し得ないから、西歐へ行つて療治を受けるより仕方がないと答へた。

中央委員會の醫術部は（最初に自分から療法を提示して置きながら）その後約二ケ月の間、私の海外滯留に對してもこの儘こゝにゐて療治を受けることについても、何等の手段も講じなかつた。反對に、それまでいつでも處方によつて私に醫藥をよこしてゐたクレムリン藥局は、それを禁じられて了つた。實際私は、之まで常に受けてゐた藥品の無料交付を受けられなくされたのだ。餘儀なく私は、必要な藥品を斷つ事情が伴ふことになつた。之は恰かも、當局者が反對派に對して、『反對派の腹部を突く』政策を實行し始めた時に起つたものと思はれる。

私に働らく丈けの健康が殘つてゐる間は、そんなことは殆んど念頭にも置かなかつたのだが、私の病勢が次第に募つたものだから、私の妻は、中央委員會の衞生部へ行つてセマシュコ博士に面談した。博士は『古き傷兵を救へ』といふ彼の信條を實現するために、常に公然と非常手段を取つてゐた人だ。然るに事はいつまでも延期されて、結局妻の得たものとしては、醫師會の決議の拔粹に過ぎなかつた。この拔粹の中に私の痼疾のことが出てゐた。それに依ると、私を海外に送つて『フリードランダー教授の療養所の如き療養所に』入れることを醫師會は主張してゐるのだ。

一方私は、九日前に全く病床の人となつた。それは（かうした場合にいつでも起ることだが）私の痼疾が非常に惡くなつた爲めだ。殊に最も恐ろしいことは、私の宿痾である polyneuritis（多發神經炎）が又もや起つて、絕對に堪え難い苦痛を負はせ、步行さへ妨げ

るからである。

九日の間私は何の療治をも受けなかつた。そして海外旅行の問題は又暫沙汰なしだ。中央委員會からは唯一人の醫者と雖も診察に來ない。呼ばれて病床へ來たダギデンコ教授とレキーン博士とは、何の役にも立たないと分つてゐる處方を一寸書いて、『どうしようもない』ことを自白し、外國旅行が是非必要であると云つた。レキーン博士が妻に告げた處によると、醫術部が事を延引さしてゐるのは確かに、私と一緒に妻も行きたがつてゐると思ひ、それでは『費用が掛り過ぎる』からだといふのだ。それに對し私の妻は、成程夫の病狀は無慘なものであるが、自分にしろ又その他の何人にしろ、決して同行したいとは云はぬ、と答へた。そこでレキーン博士は、さういふ條件でならば、事柄は直ぐ決定するだらうと確言した。博士は今日も私に、醫師の力ではどうにも仕ようがない、直ぐに外國へ行くより他に道は全くないことを繰返して云つた。すると晩になつて中央委員會の醫師であるコムレード・ボチヨムキンが私の妻に、中央委員の衛生部は、私を外國へやらないでロシアで療治することに決定したと告げた。その理由は、專門醫の主張によれば、少期間の海外滞在は却つて有害だから長期に亘つて海外で治療を受ける必要があるといふのだが、中央委員會は私の療養に對しては最大限一千弗を出し得るのみで、それ以上は絶對に不可能だからだといふのである。ところで最近私は或る外國から、私の努を紀念するために二萬弗を寄附したいと申出を受取つた。しかし、(それには政治局の認可を得なければならないのだから)共產黨及び革命の歴史が我が國に於ていかに變造されてゐるかといふことを知つてゐる自分は、そのやうな變造を手傳ふことが私に出來るとは思へなかつた。政務局の檢閲は凡て、何れの黨派についても、その人物行動の眞の評價を許さないだらう——革命當時の有力な指導者等のことでも、現在要職についてゐる人達のことでも。從つて私は、中央委員會から金錢を受くる以外には療病の方法を見出し得ないのだ。ところでその委員會は、私が革命の爲に盡して來た二十七年間のあらゆる努力に關らず、私の生命及び健康を一千弗より高く値踏することが出來ないといふのだ。

それだから私は私の生命に終りを告げるべき時が來たと云ふのだ。我黨一般の意見が自殺に反對であることは私も知つてゐる。が併し、私の立場を理解してくれる人は誰でも、私の自殺を非難しないと信ずる。若しも私が丈夫であつたら、私は黨內に生じたこの立場と闘ふために、自分の力と精力とを用ひたであらう。しかし現在のやうな病狀では、その成員中より退くことを黨派から默許されてゐるやうな立場にゐるに堪えない——たとへ自分は、早晚何らかの危機が來て、黨をかかる恥づべき狀態に導いた人達が黨から去らねばならなくなる日が來ることを絶對的に信じてゐるとしても。この意味に於て私の死は、いかにしてもこの不面目な狀態から拔け出ることが出來ないやうな立場に導いた人達に對する抗議である。

大きな物と小さな物を比較することが許されるなら、私は敢て云はう。貴下やジノヰエフが除名された非常に重要な史的大事件(この除名が當然の結果として、我々の歴史にテルミドル時代を齎らした)と、黨內重要な地

位にあつて二十七年間革命の仕事に盡した後で、頭に彈丸を打ち込むより他に何ともしようがないといふ立場に迄私を追ひ込んだといふ事實と——この二つの事實は或る同一事を例證してゐる——即ち我黨の現在の政體を示してゐる。

親愛なるレオン・ダギドキツチ、我々は十年間の共同事業と、個人的友情とによつて結び合はされてゐる。私はその特權を利用して今訣別の時に際し、貴下の缺點と思はれるものを告げたい。

貴下が示した道の正しかつたことを、私は一度も疑つたことはない。そして知つての通り『永久革命』以來三十年餘り、私は貴下と一緒だつた。しかし私は常に思つてゐた。貴下には不屈性がない、レーニンのやうな強硬性がない。彼の如く、一旦出來した以上は止むを得なければ唯つた一人になつても自己の事業に踏み止まり、たゞ將來の多數を確信し自己の道の正しかつたことは凡て將來に於て認められるものと確信するといふ決意に缺けてゐる。一九〇五年以來、貴下は政治的にいつでも正しかつた。一九〇五年に正路に立つてゐたのは自分でなくつて貴下であるとレーニンが云ふのを、私が自分の耳で聞いたといふことは、貴下に幾度も云つたことだ。人は死に面して嘘を吐くものではない。そして私は今、之を貴下にくり返して云ふ。

しかし貴下は、協定とか妥協とかを重んじ過ぎるために、よく自分の正しい立場を捨てたものだ。あれはよくない。繰り返していふ政治上では貴下はいつでも正しかつた。しかも現在は、今まで中で一番正しい所にゐる。いつか黨はこのことを認めるだらう。そして歷史もそれを認めざるを得ないだらう。

更に、たとへ今或る人達が貴下を見棄てるにしても、又、殊に我々の欲するほど速かに多くの人が戻つて來ないにしても、心配しなくつてもいゝ。貴下は正しいのだ。しかし乍ら、貴下の眞理が勝利を得るや否やが、嚴しい頑固さと、最も假借なき強剛さとに正しく懸つてゐることは、それがいつでもイリイツチの勝利の秘訣であつたのと全く同じだ。

（終り）

西尾末廣と淺原健三

赤松克麿

○

普選第一戰によつて選ばれた無產黨代議士八名の中、純粹な勞働組合運動者を擧ぐれば鈴木文治、西尾末廣の兩君である。淺原健三君も勞働組合運動者としての輝かしい經歷を持つては居るが、彼は廣い意味に於ける社會運動者といふ方が妥當であつて、鈴木西尾君等のやうに典型的なる勞働組合運動者の軌道を歩んでは居ない。しかし勞働階級出身を求むれば、西尾、淺原の兩君だけである。ところで淺原君は苦惱な筋肉勞働の生活體驗を持つては居るが、中學を半途退學して居り、また苦學しながらも日本大學に學んだこともあつて、半知識階級的經歷を有して居る。そこになると西尾君は小學卒業以外には何等の學歷を持たないところの純然たる勞働階級出身である。此の西尾君が我國の代表的工業都市である大阪の勞働階級から推されて、普選第一戰に見事勝利の榮冠を獲たことは、勞働組合並に勞働階級のために萬丈の氣を吐くものであつて、彼が無產黨代議士中に於ても特異の色彩を發揮する所以である。

西尾君は今日我國勞働運動界の右翼陣營に於ける錚々たる闘將であるが、彼の非凡な手腕力量に就いては既に定評がある。ところで彼の性格の基調をなすものは何かといふに、客觀的狀勢に對して常に現實的な判斷を誤まらない實際主義である。彼は四國の高松市に、近い瀬戶內海の小島に生れたのであるが、十五歲のとき、大阪に飛び出して職工生活に入つて今日に及んだ。だから彼の性格には、大阪人といふ色合ひが強く現はれて居る。大阪人といへば、一面に於て狡猾な功利主義者を思ひ出すが、彼の運動方針には、空想を好まないそして常に現實的立場を離れない大阪人特有の實利主義が強く流れて居る。それかといつて、左翼派が惡口をいふように、彼が資本家と結托するやうなことは斷じてなく、階級的な戰鬪的な立場を踏み外したことは嘗つて一度もない。彼は大正十三年に、國際勞働會議の隨員として渡歐した序に、モスコーにも立寄つて共產黨の幹部とも會談したが、彼の現實主義的な所信は少しも變らなかつた。彼は理論を無視するのではなく、むしろ勞働者出身のリーダーとしては理論を好む方であるが、彼の理論は現實に卽した理論であつて、理論を現實に強制しやうとする行き方にはいつも反對して居る。今度、大阪から二名の社會民衆黨代議士が當選して、他の無產政黨の候補者は敗戰を見たが、それは最も多數の近代的無產階級を有する代表的工業都市に於て、彼の平常主張した現實的指導理論が實踐の上に勝利を示したものといふことが出來る。

○

西尾君は、西日本の生んだ最大の勞働運動リーダーであるが、彼の特徵は、德望を以て大衆を敬服せしむるのではなくて、明敏な判

斷力と縱横な才氣とによつて、自在に仕事を片づけて行くことにある。時には彼の手腕があまり細かに切れすぎて、西尾は技巧を弄しすぎるといふ非難も聞く位だ。すべて局に當つてドン／＼仕事を捌いて行く者に對しては專制的であるとか傲慢であるとかいつたやうな非難が起るのを當とするが、西尾君もその例に洩れない。しかし西尾君のやうな才能あるリーダーに對しては、その邊の所は寛大に考へてやる必要があると思ふ。尤も彼は未だ當年三十七歳の青年であるから、まだ圓熟の域に達しないものが隨分殘つては居る。唯だ彼に望む所は、機略縱横の特徴ばかり發達させないで、一面に於て、春風四邊を包むやうな人德を積むことに心掛ける必要がある。「西尾は仕事師だ」といつたやうな批評は、もとより當らない批評ではあるが、彼が今後無産黨政治家として大成して行く上に、常に以て反省の資とすべき批評である。

無産黨政治家として、彼は最も伸びる素質を惠まれた一人であるであらう。彼は今日まで勞働組合政治家として戰つて來たのであるが、今後は、視野が全面的に擴大した無産黨政治家の闘爭過程に入つたのであるから、大いに其の教養を高めねばならぬ譯だが、彼の聰明なる彈力性は、恐らく新しい環境に最も好く適應して行くであらう。彼は正さしく普選の初頭に選ばれたプロレタリアの旗手である。

○

西尾君が大阪人の特性を持つて居るならば淺原君は如何にも九州人らしい風格を持つた闘士である。西尾君が細心で健實であるのに比して、淺原君は豪放であり壯快である。かうした彼等の性格の相異は、職業心理の相異からも來て居る。西尾君は旋盤工であるが、淺原君は父の事業の失敗のために、十三歳のとき中學を半途退學して炭坑のカンテラ磨きになつた。それから「ボタさがし」や「棹取り夫」となつて轉々と炭坑を歩いた。十六歳のとき彼は上京して苦學時代に入つた。彼の少年時代に於ける炭坑生活の因縁は、彼の性格に荒つ削りの陰影を投じ、後年彼が北九州の勞働階級の信望を集める一要素を作つたのである。

歐洲大戰後、黎明の新氣運が我國の社會運動に動いて來たとき、彼は八幡製鐵所の職工を中心に日本勞友會（大正八年）を組織し、翌年には製鐵所の大罷業を起して、天下を震駭さした。このときから北九州の社會運動の上に、彼の名は強く輝き始めた。封建主義的な殺伐な雰圍氣の中にあつて、彼が社會運動の操志を堅く持して下らないとき、彼に對する迫害は暴戾を極めるものが少くなかつた。國粹會は幾度か彼の生命を覗ひ、そして幾度か彼を傷つけた。然るに彼が毅然として新興階級の旗を下ろさなかつたことは、當時、全無產階級運動者の間の讃嘆の對象となつたのであるが、今回の總選擧に於て、彼が最高點を以て當選したことは、彼の血のにじむやうな過去の苦闘に對する當然の酬ひでなければならぬ。

彼は豪壯な雄辯を持ち、颯爽たる風格を備へて居るから、無産黨代議士として申分のない貫祿を持つて居るが、彼の特徴は、情熱の發するまゝに突撃する邁進性にあつて、一定の方針を着實に踏みしめて行く方ではない。そこに彼の行動として、多少危つかしく思はれる節が無いでもない。此の點は、彼の將來の大成のために、自重を望んで止まぬ。

熊野越

齋藤茂吉

雉子の聲おぼつかなくもかくろひぬ打ひらきたる谷のうねりに

紀伊のくに大雲取の峰ごえに一足ごとにわが汗はおつ

いましめて吾等のこゆる山路は日にこがれたる草ぞみだるる

やま越えむねがひをもちてとめどなく汗はしたたる我が額より

紀のうみよりただに起れる眼下の幾山脈はうごくがごとし

谷底をしましまし歩みて居りにけり嚏をぞせしのちはさぶしも

くたびれていこへるひまに脚絆よりとりし山蛭ひとつ殺しぬ

かかなべし旅といはなくに紀の國のさびしき山に汗をおとせり

峠路のながれがもとの午餉梅干のたねを谿間に棄てつ

山なかのほそき流に飯のつぶながれ行きけりかすかなるもの

この山はいよよさびしくなるらむか焚火をしたる跡さへもなし

暗谷にありし泉にかがまりて汗にぬれたる眼鏡をあらふ

夏ふけし大雲取を越えながら手拭の汗幾しぼりしつ

雲取を越えて來ぬれば山蛭の口處あはれむ三人よりつつ

山つみの目に見えぬ神にまもられて吾ら夕餉の飴くひにけり

峠より相むかひける山峽にしろき川原はつかに見えつ

目のわるき遍路がならす鈴の音は一山かげになりてきこえず

茶屋のあと幾つもありてのぼり來しこの山道はいよいよ寂し

しづかなる眠よりさめ三人くふ朝がれひには味噌汁は無し

あまつ日に面をこがし紀の國の山をぞ越ゆる北にむかひて

驢馬と其他

與謝野　寛

主死にて物食はねどもいななかず黙して土に
見入りたる驢馬

鞭打てば足ずりしつつ客を見て人の如くに涙
する驢馬

この驢馬はみづからを知る良き馬のむれには
行かず茅原に立つ

驢馬の身も日の落ちゆくは悲しくて歎けば咳
の如き聲出づ

鴉にも歸る巢のあり人の身の捨てられたるは
臥す方も無し

天地は大いなれども唯ひとり我を生みしをあ
やまちとする

何も無し親子も妻も我も無しこの言葉さへや
がて消えゆく

寂しさを越えたる今は何も無し善し惡しも無
し唯だうつろのみ

よしと見て我が爲しつるはことごとく空しき
ものになりはてしかな

白けたる世界となりぬみづからの無能のはて
を見盡せる時

無能にて命のかぎりあらんこと愧かしけれど
死ぬべくも無し

我が心つめたく融けて大空のみどりのなかに
まじる夕ぐれ

勇氣ある人は藥を假りて死ぬ臆したる身は飢
ゑながら死ぬ

比ぶればひとり甲斐なき我身なり子にも妻に
も師にも友にも

老いぬれば愛する子にも疎まれて醜れる空の
持つ色も無し

拍子木を夜更けて聞けば涙おつ我にも有りし
故里の音

世の耻を負ひつつ行けば我をして行き倒れし
む武藏野の泥

庭の木に巣を造したる鳥ありぬ我より先に冬
を知りけん

死ぬまでに一たび行きて農人の厄介が食ふ飯
を乞はばや

どの子をも膝に抱かんと思へども脊長のびたり心もて抱く

なにごとも灰にたとへて思ふ人ただつくづくと大空を見る

善し悪しの外を唯だ吹くそよ風に灰より軽きこころ流るる

惜しと見し我身を今は唯だ惜む無能ながらに死なぬ卑怯よ

鴉らも食らはざるべしあさましく心に癩を病める我が肉

煙草のみ吹かして坐しぬ何事も煙と同じものにぞありける

悪人が悪を為すにも力あり我は水母のただよへるのみ

値なき己がいのちと知れる身は歌ひとつにも命をば賭く

紙にさへ書かで信ぜしことながら破れはてけり人の約束

足早に鏡の室より出で去りぬ薔薇のみ映れ我れならずして

山に來て金線草を摘む金線草の唯だ一つにてうら寒きかな

候調十二章（附小詩十篇）

深尾須磨子

小詩

―歸郷―

1

あはれ、
あしずりの岬かや。
あはれ、
神ゐます島根かや。

2

朝もやの破れに煙突が三本。
故郷は今難波船神戸丸。
山はどこ。
家はどこ。
あの人はどこ。

「只今！」
裂けるわたしの焦躁は血の色。

3

歸つて見ると、
家には不思議なものが棲んでゐます。
家中はむつつりとしてゐます。
ぽちの額には皺が三本よつてゐます。

わたしの物はみんな失くなつてゐます。
迎へ給へ。

4

雪の素絹もよし。
風の爆竹もよし。
君が口づけは更によし。
迎へ給へ。

5

おののくおよび、朱の紐。
開く三年の玉手箱。
一人は白い灰になり、
一人は酒の樽になり、
一人は文の反古になり、
一人はろしあぶりになり、
ええ、何としよう、しよんがえな
ままよ、眞赤なわらひにしよ。

6

とめてこし、
ままごとの、
かたほとり、
あともなく、
なわすれの、
はなさかり。

7

鼻に花を挿そ。
その奥さんがわたしの生れがはりだらうと、
その赤坊の名が須磨子だらうと、
その心臓の形がSの字形だらうと、——

鼻に花を挿そ。

8

失せ物は、
しやんぜりぜえのともし火か。
せいろん島のみ佛か。
心いらへず。
ただ土を嚙む。
砂を嚙む。

9

こは今散りがての
くれなゐなればめで給へ。
こはつゆみじろがぬ
寂しさなればめで給へ。
こはないるの岸の
みをしへたればめで給へ。
こはしないの山の
いましめなればめで給へ。
こははるけき旅の
家づとなればめで給へ。

10

ざれ歌と、
しれ人と、
めしひの犬と。
あくがれの、
いや果の、
小徑なれども。

候調

―笛吹き女―

1

笛を吹き候。
笛吹きて悔ゆるのに候。
笛吹きて祈るのに候。
笛吹きて生くるのに候。

2

尺ばかりなる篠竹の、
あな手作りのおぼつかな、
ただかりそめのすさびにも、
笛吹く子にて候ひしが。

3

笛を吹き候。
笛はしろがね、
早瀬のままに冴ゆる初鮎、
音はむらさきの秘めごとに候。

4

笛を吹き候。
笛は貝、
笛は神、
まづをろがまではものまうされぬ。――

5

笛吹けば、
小犬立止り候ひぬ。
雀をどり候ひぬ。
蛙耳を傾け候ひぬ。

6

笛を吹き候ひしが、
もの賣り人の聲の聞えしかば、
はたとばかりに吹き止め候。
やがてまた吹き出づるのに候が。

7

ひゆひゆらひゆひゆひゆらと、
吹くは孤獨の笛に候。
あはれいつよりか、
ぴえろは涙を笛となしけむ。

8

寂しとや。
哀しとや。
むなしとや。

9

されどなほ笛吹くことの殘り候に。
哭き給へ。
ただ哭き給へ。
哭きつかれては笛吹き給へ。
望みは一管の笛にのみやどり候。

10

人のおもひを吹きすましては、
いよよおどけし世のふりの、
名もうつそみもなくてものかは。
笛のはしため笛を吹き候。

11

笛吹かばや。
春にて候ものを。
笛吹きて雲の懸橋を渡らばや。
笛吹きて天の戸をおどろかさばや。

12

りらのかほりを音にこめて。
今宵まゐるは異國ぶりの牧歌調に候。
酔ひ給へ。
異國ぶりの月もおかしきに。

花鎮

室生犀星

——（花鎮）——

曲亭馬琴の「歳時記」に據ると「花鎮祭」といふのがある。解説には（三月晦日（公事根源）是は大神狹井の二ノ祭を云と「神祇令」にのせたり」春花の飛かふころは疫神分散して、人をなやます、故にかれをしづめんが爲此祭はあるとかや、神祇官にて行はる。）とあるが、花散るころの憔悴的な氣分が此數行に沁み出てゐる。路傍の童子等が樣々な花を弄んで遊んでゐるのを見ても、何か春花の巷に行き逢ふたやうに賑やかな春を感じるものである。

猶歳時記によると花季を分けてゐる。「花ぐもり」「花鎮」「花雲」「花下」「花瀧」「花浪」「花の鈴」「花笑」「花の顔」「花の姿」「花の肌」「花の粧」「花の暦」「花ぶさ」「徧」「花の輪」「花の宿」「花の窓」「花の扉」「花の戸」「花こゝろ」「花衣」「花の袖」「花の袂」「花筐」「花籠」「花皿」「花活」「花筒」「花瓶」「花車」「花見車」「花笠」「花莚」「花の盃」「花空穂」「花筏」「花の隨身」「花造」「花むすび」「花實」「花軍」「花莚」「花の綸」「花の都」「花をふらす」「花の節」「花の紋」「花香」「花々し」「花鳥」「花散る」「花の主」「花あるじ」「花守」「花園」「花圃」「花嫁」「花聟」「花の森」「花の山」「花の雨」「花まつり」その他數え立てゝならどれだけあるか知れない。

東洋人は花の匂ひにしても淡泊なものを好んでゐることは、傳統が證明もし詩文がこれを歌ふてゐることでもわかる。西行や芭蕉それから花の匂ひを厭ふ香道の諸禮式、茶人に於ける淡泊主義、枯淡趣味がこれを歷史的に物語つてゐる。一つは我々東洋人の肉體にはさういふ烈しい匂ひが向かないからであり微妙と閑さをよろこぶ東洋の諸精神が、陶器や服裝の上にまで及んでゐることを見ても解るのである。實際我々の身邊に強い匂ひを見出すことは稀である。童女童子の折から「あつさり」主義をかつぐことを、その父や母から訓育されてゐるからだ。かういふ傳統さは諸々の文學の上からも世界に示してもいいものであらう。

西洋人の花に對する感覺の中には、何時も烈しい色彩的な感覺的發達と、強度の匂ひを愛敬する永い傳統とを持つてゐる。彼らの肉體的な組織や生活樣式の諸器物にまで共等の要素があり、從つて匂ひと色に對する感じ方は我々と全然違ふと言つてよい。彼らは幽さのしをりを知らず又知らうとしない。「梅の花」を愛する我々民族の習慣は「ばら」の花を愛する民族と同一な趣味の上に立つてゐるものではない。彼らはその「ばら」の花をも東洋流に遠くから嗅ぐやうな高雅な氣持をもたず、鼻の先で味ふやうに嗅ぐ風習を持つてゐるのでも分る。彼らは匂ひや色を嗅ぐといふよりも、それを食ふ感じに近いやうである。

それ故「花まつり」の西洋風な習慣と、日本に於る遊山とは同一の騷ぎであることは一致してゐるが、概して日本風なものは物靜かで花下に想ひを練るといふ方に近く、西洋では全くの「祭」でなければならぬやうである。支那の「牡丹」も強烈な色と匂ひとを民族的に說明してゐるが、いかにも悠々たる春花の祭であると言つてよい。自分は大輪の「牡丹」の花の前にゐて、しづかに大國民の樹姿をもの語る彼らを想像することは、何か胸の開けるやうな想ひがするやうである。

彌撒の朝

吉田絃二郎

朱欒の葉がかゞやき、無花果の嫩葉が淡い陰を作つた井戸のまはりには三四十個の小ひさな鈴を首のまはりに懸けた牛や、花賣り女たちが集まつてゐた。牛がうごくたんびに鈴の音がかすかに響いた。

露を帶びた柳の並木の枝をあるかなしかの朝風が吹いてゐた。もうそこいらからは浦上のクロス（天主教信徒）たちの故郷である。小高い丘一つ越えて彌撒（みさ）の鐘が鳴つて來た。丘には麥がかゞやき、紅い椿の花のなかには繃眼兒（めじろ）が囀つてゐた。

美しい小川に沿ふて二三丁歩いて、やがて町はづれの家並をすこしばかりたどつたところで急に視野が開けた。段々畑の丸い形の丘を背景に巍々と突つ立つた釣合のいゝ簡素（シンプリシティ）そのものゝやうな浦上の天主堂が青空の下に見出された。わたくしたちが子供のころ浦上の草深い荒地のなかに六七尺の高さに積まれた煉瓦があつた。貧しい信徒たちは零細な金を集めては年々煉瓦を買つて來た。そして一年一尺くらゐの割合で煉瓦は草の中に積みかさねられてゐた。貧しい農夫や漁夫たちの三十年來の一燈の結晶が今わたくしの眼の前の丘の上にそゝり立つてゐるのであつた。高い窓の色硝子に朝の日の光りが美しく照りかへしてゐた。すこし時間が遅れたために、朝の彌撒をすませた人たちはすでに坂を下つてかへつて行つた。わたくしはちよつと失望したが、跫音を偸みつゝ白い大理石の圓柱の間を禮拜堂のなかへはいつて行つた。そこにはまだ三百人ばかりの男女が祈つてゐた。幾十本の圓柱が美しく並んでゐた。高い丸天井の左右には花やかな明り窓がとられてあつた。床（ゆか）は舞踏室のそれのやうにすべ〳〵と拭きこまれて光つてゐた。そこには頭から深く全身眞つ白な巾（きれ）を冠つて俯向きながら祈つてゐる女たちが尊いほどの慶しさをこめて坐つてゐた。正面の聖母の御像の前には黑衣の老僧がひざまづいてゐた。かれは中世紀ころから幾百年の間そこに、そのまゝの姿で眠つてゐるかのごとく尊く靜かであつた。蠟燭の灯がゆれてゐた。女たちは小ひさな祈禱書を膝の上にひろげては默禱をつゞけてゐた。一度若い女の白い手の珠數が床の上にすべり落ちてかすかな音を立てた以外は、廣い禮拜堂中が死靜そのものであつた。若い女の呼吸一つきこえては來なかつた。一人の老婆は祈りをすまして立ち上つた。かの女は壁の龕のなかの聖像の前にひざまづいて、聖水盤の水に指を浸してから十字を切つた。默々として天主堂を出て行つた。わたくしは窓にちかくひざまづいてゐる一人の若い女を見た。白い頭巾につつまれた女の白い横顔はギリシャ風な彫刻のやうに鑿つた美しさを持つてゐた。高窓の色硝子を通つて來る朝の日の光りが美しい女をつゝむかのやうに虹のごとき光輪を作り上げてゐた。珠數の端に結ばれた銀の十字架が女のふくよかな胸の上にゆらめいてゐた。

一人の若い女は默々として立ち上つて行つてカアテンの前にひざまづいた。カアテンのうしろには聽聞僧が坐つてゐた。女は囁きながら懺悔をした。カアテンの裾の隙から若い女の花やかな袖の友禪模樣が覗いてゐた。

聖母の前の燭はゆらぎ、香煙は立ちのぼつた。そこには中世紀の修道院の死のやうな寂いわびしい空氣のみが漂ふてゐた。男も女も唯默々としてぬかづき、默々として十字を切つた。そして默々として禮拜堂を出て行つた。

わたくしは禮拜堂を出た。入り口の傍の揭示板には「香燒島マリナ山口しを、硫黃島トマス岸正治、右婚約す。異議ある者は云々：：」といふやうな記事がかゝげられてあつた。かれらの祖先が火に焙られ、或ひは首切られて尊い殉教者の血に染めた浦上の切支丹刑場の跡には麥の葉が柔かな春の風に吹かれてゐた。どこからともなくのどかな雲雀の聲が聞えて來た。

空はいかにも南國らしい明るさをこめて海のごとくかゞやいてゐた。

戰ひ敗れて

新聞紙の默殺

菊池寛

自分は、立候補の野心は、なかつた。社會民衆黨から再三薦められたので出る氣になつたのである。

自分が、社會民衆黨の候補者として適任であるかないかは、自分には責任がない。それは、社會民衆黨の方で負つてくれるだらう。たゞ、自分としては社會民衆黨の主義政策には、贊成であることを云つて置けばよい。立候補しなければ、社會民衆黨の某々候補者を援助したいと思つてゐたのである。

自分は立候補に際して、相當自信があつた。少くとも有權者の中には、四千や五千の文藝愛好者はあるだらうと。また、七割五分の有權者は、悉く勤勞無産階級である以上、その中一割位は、勤勞無産階級中心の政治を標榜する社會民衆黨を援助してくれるだらうと。

だが、結果は文藝愛好者もそれほど多くなく、七割五分の新有權者の多くが、結局舊有權者の延長であることが分つた。

敗因としては、第一が立ち遲れである。言論文書で、一歩一歩掻き蒐めた票數だけに、今五日乃至は十日も早く立てば、恐らくは當選圏内に達し得ただらうと思ふ。演説會の人氣が、白熱した頃は、もう二三日しか余日がなかつた。何分七日から、始めた演説會である。

第二の敗因は、各新聞紙政治面の僕に對する默殺である。各新聞紙とも、東京第一區の豫想は四五回掲載してゐるのである。しかも、各紙とも僕を默殺したのである。川手忠義、鈴木梅四郎、中村愛作、茂木久平、から云ふ人達の名前は、必ず言及するが、僕の名前などは全然問題にしないのである。また無産政黨の豫想も各紙とも數回掲出してゐるが、僕の名前などは一度だつて出してくれないのである。戰蹟の上から云つて、僕とは互角であつた赤松君、藤森君、片山君、宮崎君などの名前は掲げても、僕の名前は出さないのである。「當選圏に近きもの」の中に出して呉れないのはともかく、「努力次第にて當選の見込あるもの」と云つたものゝ中にも出して呉れないのである。政治部の諸君などは、僕などは千票も取れないものと見てゐたらしい。僕に對する反感で僕を默殺したのでなければ、僕に對する觀測を誤つてゐたのであらう。普選と云ふものゝ性質を、僕が少くとも有名であることを考へたら、もう少し僕について有利な觀測を下してくれてもい

人等である。

かうした豫想記事に於ける數段が、いかに僕を傷けたかは恐らく想像以上である。僕及び應援の人々の意氣を沮喪せしめたばかりでなく、僕に投票しようとする人も、僕の絶對的絶望を信じて、中止した人が、幾人あつた分らないであらう。傳へきく所に依ると、岡本綺堂氏は「菊池君は、とても當選しさうもないが、まあ菊池君に入れる外はない」と云つて入れてくれたさうである。岡本綺堂氏ほど、なじみのない人は「菊池はとても、ダメらしいから」と云ふので、幾人他に轉じてゐるか分らないと思ふ。

政治部の諸君にとつては、僕があれほどの票數を得るが如き全然夢想もしなかつたらしい。廿一日の開票日の某大新聞紙は、その開票記事の中に「東京第一區は菊池寛、三木武吉、横山勝太郎の如き名將が、ツバ迫合ひをなせし激戰地とて」と書いてあつた。開票日になつて、俄然僕を三木、横山と同列に祭り上げてくれてゐるのである。好意はたいへん有がたいが、開票日になつて、名將扱ひされたとて、僕の得票は一票半票も増減しないのである。各新聞紙が、僕の勢力を如實に觀測してくれ、「菊池寛氏また侮りがたし」と云つたやうな豫想でもしてくれたら、僕も元氣を以て絶えず奮鬪することが出來たし、僕に好意を持ちながら、僕を絶望と見て、他に轉ずるやうな多くの有權者をつなぎ止めることが出來たと思ふのである。

それはともかく、既成政黨の地盤鐵の如く堅牢なる第一區で素人として何の背景も地盤もなく、たゞ一己の文藝の力を信じて、戰つたし、しかも他の候補者より十日間以上の立ち後れに拘はらず六千に近き得票を得たことは、僕としては失敗と云ふべくあまりに大なる成績かも知れない。

しかも、僕の得た投票は、最も高級なる智識人の投票で、文化的に云へば一票他の數票に比敵するものだと思ふので、その點でも大に得意に思つてゐる。

また新渡戸博士、大山博士、太田正孝博士、小野清一郎博士、那須皓博士、本位田博士等が、僕のために應援演說をして下さつたことは、僕としては一期の面目で、僕の得票の過半はこれらの人々の好意の賜物に違ない。

金權に汚辱された普選

高橋龜吉

一

普選第一回の總選擧の結果は、地方農村地盤からは、遂に一名の無産代表者をも出し得なかつたと云ふ不成績に終つた。組織的地盤の無

い都會からは數名の無産代議士を出しながら、組織的地盤を——而かも可なり強固な——有する地方農村からは、一人の無産代議士をも出し得なかつたと云ふことは、一見、いかにも奇怪事である。官憲の壓迫があつたといふこと、農村大衆の教育程度が都會に比し低いと云ふこと、農村大衆の政治訓練が不足であつたこと、等々の理由は確かにその原因の一つであつた。だが、地方農村から、遂に一人の無産代表者をも出し得なかつた根本原因は、要するに、ブルジョアー代議士候補が、「、、」に由つて、貧窮せる農村大衆を誘惑陷落せしめた事に在る。、、、、、、、、、、、を腐敗せしめたことに在る。

一體に、ブルジョアー候補者の「買收」戰は公然として行はれた。一票、、、、、、、、、、、宛かも米相場のそれの如く農村大衆の間に語り傳へられて、毫も之を怪まない程に、「買收」は公々然として大ピラに行はれた。飢へたる者は、腐敗した肉たると否とを問はない。生活の窮迫した農村大衆は、一票二圓乃至五圓の誘惑の魔手が、いかに民衆の魂を腐らし、民衆の政治的貞操を蹂躙するかを問ふの餘裕を持たないのである。斯樣にして農村大衆は、「買收」せられて行つた。斯樣にしてブルジョアー候補者は、素朴な農民大衆の魂までも腐らして、金權政治の、、を續けた！

二

就中、買收戰の旺んであつたのは、私の立候補した山梨縣に於てゞあつた。山梨縣の選擧界が、所謂「甲州財閥」の金力に由り、いかに腐敗陷落せしめられてゐるかは、天下公知の事實である。例へば、去る二月十四日の東京日々新聞は、山梨縣の選擧界を評して次の如く述べてゐる。

『世は普選といふに、變化もなく新味もなく、長夜の眠りから醒めざるものに山梨縣がある。……恐らく今度は、既成政黨の各候補者は十五萬二十萬の大金をなげうたねばなるまいとの噂。まづ金のかゝることでは全國指折りの選擧區であらう。この地方では、選擧に買收はつきものとさへ考へられてゐるやうである。……人は誰でも、金さへ光つてゐれば必ず當選すると安心がついてゐるから、表だつた運動は大して必要がないことになる……』

又、今度の總選擧に既成政黨候補者が、法定費用以上を使用して、買收を行つたことが「公然の事實」であることは、二月二十六日の山梨日々新聞が『一票五圓が下落して二圓となつたことも、一圓札で配布したことも、事務所に公定運動員でなく、得體の知れないものが多數出入したことも公然の事實であり、……不思議な事は最近縣下に一圓紙幣の流通してゐることである。郵便局に行つても五圓のうちには一圓紙幣が三枚は必ず加はつて來る、選擧前には無かつた現象である……』と公々然と記述してゐることに由つても明かである。更に、之を具體的に表現してゐるものとして面白い現象は、無効投票に

現はれた次の如き事例である。例へば、無効投票の中には、實に、左の如く、歴然と「買收」が公行せられてゐることを誰にも肯かしめてゐるのである。

「領收證一金二圓也右選擧費用として正に受取候也〇〇候補殿」と云ふのがある。「ブローカーがブローカーを賣る鹿の市」と云ふのがある。又、二月二十四日の山梨日々新聞は、「無効投票紙は曰く」と題して、買收公行の事實を痛論してゐるが、その一つには次のやうに記されてゐる。「南都留から出て來た「もゝしきや古き軒端のしのぶにも尙ほ餘りある金の世の中」と云ふ投票紙は「一體僕達ばかりこんな風に虐遇するのは間違つてゐる。僕は賣らなければ投票しない墮落した選擧民が癪にさはつてならなかつた。それでこゝに仲間入りすることになつたのだが、僕の郡には未だ「夕鍋質錄」と云ふのや「阿那美津用質」など憤慨したものがあつたが、これは有効紙として、、、になつたが、あれだとて當然こゝに來なければ（筆記註、無効にならなければ）ならなかつたものだ」

讀者は、右の記事を一讀せらるるに當り、政友會公認候補者には〇〇會社重役の田邊七六（夕鍋質錄とあるのとゴロの似てゐるに注意せられよ）及び二千萬圓の大金持ちの穴水要七（阿那美津用質とゴロの一つであることに注意せられよ）と云ふ名前のあることを忘れてはならない。

三

甲州財閥が、金の誘惑に由つて、いかに山梨縣人をスポイルしてゐるか、いかに山梨縣民を腐敗さしてゐるかは又、次の如き挿話によつても之を知ることが出來る。即ち、昨年の秋、山梨縣下の谷村學校に於て、級長の選擧を行ふ際、小學生徒の間に、一錢二錢のお小遣を餌にして、級長投票の買收が行はれたと云ふことである、親達の選擧買收の公行を見習つた子供達が、いかなることを眞似てゐるかを見よ！此の親にして此の子あり！　山梨には又、選擧買收の方法に關し、一の符牒言葉が誰にも分る程に公然な言語化されてゐる。即ち、投票買收の方法が、鍬か雪駄か烟管かと問ふのである。鍬とは前金を受取つて買收に應ずることである。鍬には先に金のあることから來た符牒である。而して、雪駄とは投票の後で、金を受取る約束にて買收に應ずることである。そのわけは說明を要せないであらう。又、烟管とは、投票の前に半金を受取り、投票後に半金を受取る約束にて買收に應ずることである。選擧に買收は必ず付きものであると云ふブルジョアー代議士候補のバチルスが、いかに山梨縣民の良心を痲痺さし、恥づべきことを恥しとも思はで、公々然と、投票の買收が、右の如き符牒に由つて取引せられてゐるのだ！

斯樣なわけで、死んだ望月小太郎氏の如きは、選擧に臨むや、他から買收せられて金は受取つても構はぬがしかし、投票に際しては望月

小太郎と書いて呉れと公然と言つて歩いたそうである。しかし、今度の選擧に於ては、斯様のことを無産政黨が云はうものなら直ぐと中止を喰はされた。買收するやうな奴の金は、そのまゝ猫バヽ、をきめこしまつて、投票だけは正しく書けと云ふことすら封ぜられてゐた。だ、が、選擧買收の弊害を打破する方法は、金はもらつても、投票だけは正しき人に入れさすと云ふ、毒を以て毒を制する非常手段にて、「買收無効」を策する外に方法なしと考へてる人々が、隨分、識者の間に在る。例へば、山梨日々新聞の如きは、二月二十日の總選擧日に次の如く民衆に訴へてゐる。曰く、『自己の信ずるまゝに勇敢に投票せよ。壓迫や迫害を恐れず、情實に動かされず、若し約束したなら約束してもいゝ、只貴重なる權利である、普選最初の選擧を公正ならしむべく、筆を執る刹那本然の良心に還れ、然して自己の信ずる者に投票せよ！』明かに買收されて金は受取つても構はぬ、然し投票する時は、それとは無關係に、自己の信ずる人に投票せよと、婉曲に述べてゐる。

だが、其處に行くと、農村大衆は尙ほ素朴である。彼等は「買收」せられる。だが「買收」せられたら、その人に投票するだけの「義理」を重んずるだけの人間味が未だある。彼等の或者の如きは、甲候補からも乙候補からも、二重にも三重にも買收金を受取る程の横着物がある。だが、尙ほ、その中で一番多額を呉れた者に投票する丈けの「義理」を知つてゐる!? 併しながら、いまや、自覺せる民衆は、プルジョアー候補者の買收運動に抑ゆべからざる公憤を迸らしつゝある。

、、、、、、にアイツをつかしたる彼等は、『買收金だけは、やると云ふなら取つて了へ、しかし投票はするな！』と云ふ、毒を以て毒を制する外に策なしと云ふ非常手段を叫びつゝある。

そも〳〵、純眞なるべき農村大衆の心に、腐敗のバチルスを散布したものは誰だ！ 甲州財閥の金權そのものではないか。買收せられるの罪を犯しながら、尙ほ買收した候補者に投票する「義理」を有する人々に向つて、『斯くの如き腐つた金は呉れるなら受取つても構はぬ、投票だけは正しく書け』と。世の識者をして叫ばざるを得ざらしめつゝある者は誰ぞ！ 、、、、、、、の無能そのものではないか！ 國を毒する者は一體誰れだ!?

四

以上に由つて誰にも分る通り、既成政黨の候補者が、法定以上の選擧費を使ひ、買收が公行せられたと云ふことは、宛も太陽が天にあることの明かなる事實なるが如く、山梨縣民七十萬人が明かに認めてゐる事實である。にも拘らず、之を取締るべき責任者は、之を放置して、白晝公然と之をなすがまゝに委したのであつた。否、之を取締らうともしないのである。

若しも官憲にして、此の「買收」と云ふ破廉恥罪を取締る誠意が有る程でもあつたならば、之を檢擧することは掌中のモノを探すよりも樂な仕事である。何となれば、如何なる村に於ても、誰れかが選擧ブローカ

ーであり、誰れが「買收」の手先きであるかは、「公知」のことであるからだ。而して、彼等「選擧ブローカー」が投票を買收する方法は、候補者の名刺の裏面に「清き一票を〇〇候補者に投じます」と書いて記名捺印さし、之を證據にして候補者（選擧事務長）から、買收費を受取り、此間に、差額を占めるのである。即ち、候補者から一票につき五圓を受取れば、それが有權者の手に渡る時には或は三圓となり、二圓となつて、その差額だけが選擧ブローカーの利得となるのである。斯様なわけであるから、投票の買收を取締るに誠意さへあれば、その證據を擧げることも亦、容易であるわけだ。

にも拘らず、此の「買收の公行」が全く取締られてゐない。自由主義者の間には、言論の自由さへ得れず、それで、腐敗せる金權政治を覆し得るかの夢を見てゐる。だが、以上に由つて分る通り、言論の自由だけでは駄目だ！ 金權で以てその日の生活も困る民衆を買收すると云ふことが、公然と行はれてゐる限り、議會は永久に金權者流の獨占である。普選は實に名のみである！

「買收」を根絶せよ！ それ以外に「普選」の實現は不可能だ！ しかし、官憲は誠意を以て之を取締らうとしないこと、已述の通りだ！ 我等は最後の武器に由つて、此の金權の「買收」を根絶せしめる外はない。即ち、、、、、、、、へることだ！ 民衆の力を以て、民衆の裁判を以て、彼等ブルジョアー代議士の「買收」を判決することだ。彼等が破廉恥罪を犯して代議士になつたことを宣告することだ！

私はこゝに斷言する。尠くとも、、、、、、、、、、、、、、、、、代議士は、、、、、、、、、、、、、を賣して恥ずべき選擧違反を犯してゐる。彼等は法網をクラマシ得るかも知れぬ。だが、山梨縣民七十萬人の眼をクラマスことは出來ぬ。若し私の此の斷言を虛僞なりと云ふなら、私の此の斷言に對し正式の告訴をして見よ！ 彼等にはその勇氣があるまい。藪蛇に終るからである。最後に云ふ、買收の公行せられる限り、民衆は普選に由る政治に責任を負ふわけに行かない。

戰ひの跡を顧みて

加藤勘十

一

今度の總選擧は二つの意義を有する點において全民衆の興味を湧き立たせたのである。その一つは、ブルジョア勢力の間に於ける田中政友會內閣に對する信認、不信認の問題、今一つは初めて選擧戰野に乘り出したプロレタリアが現實的政治的勢力として幾莫の進出を爲し得るかてふ問題である。

選擧の結果として吾々の視野に展望されるものは、政友會、民政黨

の互ひに勝利を呼號せる第一等爭ひの姿、政治的に不純の存在物である中立と稱する勢力の衰退、實業同志會、革新黨の著しき勢力の失墜、並びに無産階級の進出せる勇姿である。

　ブルジョア諸勢力の消長は吾々に興味ある示唆を與へてゐる。又其處に吾々の闘爭の對照を發見することが出來る。商工資本を存在の根據とせる實業同志會、プチ・ブルジョアジーを獨立の社會的存在として其の上に依存せる革新黨、この二つの黨派は政友會、民政黨に比較すれば其の政策の點に於いて遙かに進步的であり、其の操守の點に於いて純潔である。若し進步的政策と操守の純潔と云ふ點に於いて勝敗が決せられるならば、この二つの黨派は當然に政友會、民政黨の保守的反動的の醜惡なる勢力に對比して著しく優位を占めなければならない筈である。しかも事實は正に逆である。其處に吾々はハキツリと商工資本が金融資本の敵にあらざること、プチ・ブルジョアジーが獨立の階級的社會層としての存在が可能でないことの事實を見得るのである。

　政友會、民政黨の勝利は政友會、民政黨の政策、操守の勝利ではなくして、明かに、、、支配力をもつてゐる金融資本の勝利である。金融資本は資本主義經濟組織の最高段階である。日本のあらゆる經濟現象は完全に金融資本の支配統制下になる。この、、、支配力を有つ金融資本の政治的代辯機關が即ち政友會、民政黨である。されば、政友會、民政黨の勝利は歷史的必然の勝利であつて、次の段階への轉落の第一步でもある。が、とにかく現段階に於いて金融資本の支配統制、即ち政友會、民政黨の政治的支配的勢力の把握は一點の疑ひを容れない。

二

　從つて、吾々の闘爭は當然にこの、、、支配力を有つ金融資本の代辯者である政友會、民政黨に對するものでなければならない筈である。無産各黨が選擧に臨む態度において選擧協定を行つたのは、決して單に當選者をより多く出したいと云ふような當選第一義の當爲主義のためではなく――當選者が少ないよりは多い方がよいには違ひなからうが――實に强大な、、、支配力を有つ金融資本の暴壓に如何にしたならば有力に闘爭し得るかと云ふ意識の下に立つてである。果して然らば、吾々の闘爭はこの意識の下に諸般の事情を考慮して協定された協定事項を遵守して金融資本の、、、支配力に對して有力に組織化されたであらうか。私は闘爭過程に馳驅した一兵卒として、私の對立候補者の運動の過程において、協定の精神が蹂躙せられ、甚しきは闘爭の目標が、、、にあるのではないかと思はれるまでに攪亂されてゐる事實を觀て、悲しくもあさましさを感ぜざるを得なかつた。このことは恐らく候補者自身の與り知る處でなからうし、又勞農黨全體としても固より與り知る處でなからうと思ふが故に、勞農黨に對し、候補者自身に對してもこれを攻めようとするのではないが、少くとも其

の運動の一端か其の外廓かに、意識的か一時的昂奮かは知らないが、ともかく、戰ひの目標——金融資本の代辯者政友會、民政黨——を見失つて闘爭の、、、、向けられた人々のあつたことだけは否定のできない事實である。それ等の證據物件は吾々の手許に保存してあるから、若し私の言葉にマサカと疑念をもたれる諸君があるならば、私は何時でもそれをお目にかけることができる。

私は元來、縱へ私が協定協議會の協定の結果として先きに立候補し、秋和君が色々の事情から協定を破壞した勞農黨一部の人々に擁立されて後から立候補されたにもせよ、同一地區から對立候補として候補者たることに限りなき苦痛と寂しさと恥しさとを感じてゐた。せめては、協定破壞の問題に私自身一言も觸れないこと、、秋和君と共に勿論當選は問題でないが相當の處まで戰ひ抜くことが出來るならば、どんなにか無産階級のために氣を吐くことができるだらうかと、そのことをのみ念じてゐた。然るに、投票前日の十八九日頃になつてからの各方面の情報は、私のせめてもの念願を打ち破るような事柄のみであつた。十九日には遂に立會小學校の演說會場において組織的の、、、——私の演說中——をマザマザと見せつけられて、私はそのアサマシキ行ひに悲しくなつた。私は別に怒る氣にはなれない。が、私の同志諸君、就中今度初めて政治的行動に手を取り合つて協動した總聯合關係の諸君は、その卑劣な行動に對して非常な憤りを發しられた。

私はさきに神戸、八山、尼崎の各造船所のストライキの時、專制暴君の如き狂暴極る資本家を對手に闘つてゐるとき、宗派的分裂主義者のストライキ破り的の策動を見せつけられた。そのときは私は心から憤りを發した。いまだにその時のことを想ふと血が沸きたぎるのを覺ゆるほどに憤りを感じた。それは直接の利害が目のあたり數千の勞働者、數萬の勞働者の家族の生活に及ぶからである。然るに今度の、、、の行爲に對しては間接的には階級運動全般に影響する處あるにせよ、——この點について精密な批判が加へられなければならないと思ふが——直接には私一人に止ることであるが故に、私は多數の同志諸君の憤激の中に、怒ることができないで悲しくなつたのである。されど、直接このアサマシキ、、、の役目を演じてゐる諸君は昂憤のうちにあらうが、これ等の諸君をして斯る行爲に出でせしめた宗派的分裂主義そのものに對しては、斷乎として闘爭せんとする決意に昨日も今日も變りある譯ではない。

三

私は選擧協定が成功すれば、千百の議論をさしおいて、戰線統一の具體的進行が確實にされるてふことを協議會の席上に繰り返し述べた。勞農黨の代表者も異議はなかつた。協議會に於て選擧協定に關する最高の權限を有たせたのは、細迫、難波代等勞農黨代表者の發意に基いてである。それがオゾクも勞農黨の一部の人々によつて破られ

たのみならず選擧戰の最前線に進出したときには、、さへ行はれた。今また何をか言はんやである。一切の批判は公正なる批判者に任せんのみである。

吾々は同志と倶に首尾一貫して階級的良心の命ずる儘に、鬪爭の目標を見誤ることなく攻撃の焦點を金融資本の代辯者政友會、民政黨におき、全力を竭して鬪ひ得たことを、吾々は心からの喜びとするものである。

吾々が乏しき作らに心からの愉快さをもつて鬪ひ續け得られたのは、組合同盟、總聯合所屬佐原地方所在の各組合、乘合自動車從業員組合、市電自治會現實派有志、遞友同志會早川支部、東京工務組合池貝工場有志、其他二三共組合（特に名を秘す）有志等々の組織に屬する同志諸君の協力及び一般大衆の、、支配力に對する反抗としての私に對する同情の賜物である。

組織勞働者を中心とした同志諸君の協力、大衆諸君の同情と理解。これのみが私の鬪ひの源泉であり動力であつた。この同志の協力と大衆の同情と理解とは物質的資源となつて現はれた。私の選擧費用の總額は河野君の精算書に依れば、總額四千五百七拾五圓二十七錢であつて、其の內譯は

家屋費	四四九、五〇
人夫費	四三三、二七
通信費（封筒書キ代及同入レ代）	三五四、五六
舟車馬賃	六一一、六五
內譯　電車賃	五一六、七〇
自働車賃（トラック共）	八一、一〇
自轉車賃	一三、八五
印刷費	一四六三、〇一
廣告費（新聞折込み費）	二三六、九〇
筆墨紙費	五一、八九
休泊費	一六、〇〇
飲食物費	三二〇、五六
雜費	三四五、九二
小計	四二八三、二七
評價（自働車、二臺、サイドカー、自轉車、立看板）	二九二、〇〇
合計	四五七五、二七

である。この費用の中には私の交通費も含まれてゐる。この多額——私に取つては非常な多額——の運動費が殆んど全部寄附——內二七圓だけは本誌三月號の原稿料——金で支辨されたことを感謝せずにはゐられない。寄附金の內、組合關係の分は遠くは小坂の農民組合、磐城の鑛夫組合支部等に及び全部で千三百餘圓（勞力犧牲は全く別で）を算へてゐる。個人關係としては最高八百圓（名古屋の鈴木氏扱）から、血の出るやうな一失業者の一圓、九州の地底に働いてゐる同志の三十錢の切手と、更に市民諸君からの五圓拾圓と云ふ寄附が著しく多かつたことは、如何に市民層の間に新興無產階級の政治的進出に對して共鳴と同情とを、喚起したかを測り得られると思ふ。吾々は吾

部の政治的進出に市民層（小商工階級、俸給生活者、下級官吏等等）の協力を得なければならないし、又、市民層の諸君も無産階級の政治的結成力に協力することなしには到底、金融資本の飽くなき搾取慾に對抗することは不可能である。それは如實に冒頭に述べた如く革新黨の戰績が物語る處である。無産階級と小市民層の政治的結合協力が必然の勢ひであり且つ可能なことは今回の選擧——當に私の場合の例ばかりでなく全國的に其事例が示された——に遺憾なく表現されたのである。

無産階級の政治的進出——小市民層との協力——によつて金融資本の、支配に抗爭せよ、これは選擧が濟んで後の日常鬪爭のスローガンでなければならぬ。同時に、階級の戰線を分裂せしめ、分裂を合理化せんとする勞農黨内に巣喰ふ宗派的分裂主義者を戰線から沒せしめよ。

（三、七）

○

因襲の壓力に抗して

——選擧戰雜記——

赤松克麿

私が宮城縣から候補に立つに至つたことは、決して計畫的のものではなく、全く突然の事情に依るのであつた。議會解散の十日ばかり前、宮城縣に於ける社會民衆黨の中心人物である師義三君が上京して、だしぬけに宮城支部の意志として、第一候補吉野作造氏、第二候補赤松克麿氏を推すことに決定したといふ譯である。私は直ちに師君と鈴木文治氏と一所に、吉野氏に馳せ參じて、四人が首を集めて凝議した結果、御鉢は私に廻つて、三人の宮城縣人が宮城縣人ならざる私に向つて奮起を促すことになり、私も遂に意を決して、馬を宮城野原頭に進めることになつたのである。かつて學生時代に一度しか訪れたことのない仙台地方へ、突如として私は所謂輸入候補として乘り込んだのである。信頼すべき多少の同志が其處に居るとはいへ、因襲の壓力の強くかぶさつた東北日本を舞臺として、無名の一青年が鹿を追ふことは、可成りの冒險的征途でもあつた。しかし勝敗は時の運、私が同志と共に新興階級の主義主張を掲げて渾身の戰ひをするならば、いづれにしても何等かの貢獻を致すであらうと思ひ、上野驛頭で同志の擧ぐる萬歳の喚聲に送られるときは、何んとなく意氣昂然たるものがあつた。

○

私が仙台に着いたとき、同地方の社會民衆黨支部と勞働農民黨支部との間に完全に選擧協定が成立して、兩黨勢力が一致して私を推すこ

とになり、私は同選擧區に於ける唯一の無產黨候補として出陣することになつた。ところで此の選擧區には、實業同志會も革新黨もなく、代表的既成政黨たる政友會と民政黨と政友系中立ばかりであるから、有產政黨と無產政黨との階級的政治鬪爭をハッキリと太い線で印象づけるには都合の好い條件が備つてゐた。

しかしながら此の地方を蔽ふところの因襲的勢力はなか〳〵牢乎たるものがあつた。前商工大臣藤澤幾之輔、前海軍參與官菅原傳といつたやうな長老的人物に對しては、殆んど偶像崇拜的な敬意が捧げられて居り、內ケ崎作三郎氏に對しても根強い鄉土的地盤が築かれて居り、中島鵬六といふやうな中央政界では院外團の壯士と同格視される人物に對してすらも、鄉土の因緣關係からして、意外に強い支持勢力が張られて居た。また今回新らたに出馬した前社會局部長の守屋榮夫といふ役人上りの候補は、挨拶狀と一所に自分が高等官一等になるまでの位階勳等年俸等の發達史のやうな履歷をクド〳〵しく書き並べ、自分が如何に偉い人物であるかを純朴な地方有權者に吹聽して、それが非常に効目があつたといふ有樣である。

○

社會運動界に於ては多少名を知られて居る私も、宮城縣に於ては、遠田郡宮城郡に於ける少數の新興階級を除いては、全く見ず知らずの一介の青年である。そしてまた無產政黨なる存在が一般に解かつて居ないし、解かつて居ても、危險な社會主義者の集團位に片づけて居る人が多い。しかも私の運動費は約四千五百圓、他の候補者の十分の一乃至二十分の一と來て居るので、文字通りの理想選擧である。買收をやらないことは云ふまでもないが、運動費の少いためにポスター戰にも壓倒され、自動車を利用することが少いために唯一の武器たる言論戰に於てさへも十分の能率を擧げることが困難であつた。

だが、かくの如き不利な條件の下に起された我々の戰ひも、日を重ねるに從つて、隱々として一種の威力が次第に加はりつゝあることを感じた。我々の獻身的苦鬪に對して、各方面から意外に心強い反響が起きて來た。その理由は何んであるかといふに、

第一、我々の言論戰には、既成政黨のそれに見ることの出來ない特異の精彩があつた。政友會候補も民政黨候補も、相互に、他黨の末梢的政策に對する攻擊、自黨の末梢的政策に對する自讃、他黨の行動に對する揚足取り的中傷等に浮身をやつして居るのに比して、我々の言論戰は一個の社會觀の上に立脚した。無產階級の生活權獲得を指標として、現代資本主義機構の解剖既成政黨に對する本質的批判を下すことが、我々の論陣の基調であつた。既成政黨の演說を聞いて一種の淸新な感興を涌かしたやうに覺える。そして我々の方の辯士は、多く青年である。技巧に於ける圓熟は缺くが、潑溂たる新銳の氣、燃ゆるが如き熱情は、強く聽衆の胸に訴へるものがあつた。

我々の言論戰の中途に於て、一大威力を加へたものは東北大學の少

[illegible]の推選であつた。鈴木義男、河野又介、堀稔夫の諸氏は、我等の親しい學友であるばかりでなく、思想傾向からいつても、新興階級の支持者であるので、私のために極力應援して呉れることになつた。理路の透徹したそして情熱に溢れた彼等の應援が、一般聽衆に對して無産政黨の歴史的使命を理解さすために、いかに甚大なる啓蒙的效果を生じたかは想像以上であると思はれるが、大學教授である彼等が無産黨候補のために應援したといふ一事ですらが、無産政黨を危險視して寄りつかなかつた此の地方の民衆に對して、無産政黨の社會的信用を高めるに至つたことは確かである。

○

第二、言論戰と共に、我々が一般民衆にセンセーションを起した原因は、我々の闘爭的態度であると信ずる。我々の陣營に屬する多くの青年闘士は、有産政黨の面々が自働車を利用するところを、大概徒歩で行き、しかも吹雪の中を道路とも田圃とも見わけのつかないところを何里も歩いて、村落から村落へ遊説した。有産政黨の連中が贅澤な辨當を食つて居るときは、うどんかけやそばかけを一二杯平げて行手を急いだ。宿泊にしても、有産政黨の連中が最上の旅館に投じて、温かい蒲團にくるまつて居るとき、我黨の青年は、同志の農家に泊つて、一人前の夜具に二人もくりこんで寒さを凌ぐやうな有様であつた。しかして我黨の[illegible]の行動は、[illegible]であり、[illegible]であり、積極的であつた。我々の[illegible]した從來の[illegible]に見られない[illegible]しい態度振りは、地方大衆の心を強く打つたのである。唯だ資金が豐富であると否とによつて運動方法が異るといふ以外に、理想を有つた既成政黨と新しい理想に燃える無産政黨の運動方法に於て、おのづから眞劍味の異るものがあることは明かである。最後の投票日に、政友會の立會人が、我黨の立會人に向つて「無産黨の連中が凄い元氣で、地盤を荒らしに來るのには弱つたよ」としみ〴〵語つたといふが、彼等が我々の決死的進出力に脅威を感じたのは事實である。

○

言論戰に於て我々は確かに壓倒的優勢を示した。我々の演説會が政友會や民政黨の演説會とかち合つたときには、彼等のそれは流會になつてしまつた。各地の政黨演説會が始つて以來のレコード破りの盛況を見たものが數十個所あつた。演説會場に於ける寄附金も五百圓位集つた。私の演説會に於ける緊張した雰圍氣に觸れた者は、必ず私が當選するだらうと云つた。しかし言論戰に於ける優勢は、そのまゝ正直に投票には反映しなかつた。その原因の一つは、露骨なる買收の魔手が動いたことであり、その二つは、我々の主張には一應共鳴したけれども、それが唐突であつたために、まだ成熟の過程を經ない結果として、投票するところまでには至らないことであり、その三つは、我々の共鳴者は滿二十五才以下の青年に多いことである。

買收の盛んなことには全く驚いてしまつた。自覺した無産黨員及び農民組合以外の者で買收の魔手に犯されない農民が幾人あるだらう。面白いことは、買收に應ずる風をしながら、金だけ取つて、私に投票した民衆黨員が大分居る。深田群の某村落は民衆黨の强固な地盤であつて、私に投票した者が大多數であつたが、彼等は殆んど、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、受取りながら、知らん顔をして私に入れるだけの訓練を持つて居た。買收の盛んな地方では、唯だ買收されるなと簡單に警告するよりは、金は幾ら取つて構はぬが、それは不淨の金であつて、そんな金に何も義理を立てる必要はないから、投票だけは良心の命ずるまゝにせよ、と宣傳する方が實際的のやうである。或る既成候補の運動員は、私が少しも買收しないで選擧をやるといつたら、恰も奇蹟のやうに感じたらしかつたが、そのときは私も少し淋しい氣がした。

○

官憲の壓迫は、他の地方に比較すれば、私の處は少い方だつたと思はれる。勞農黨の諸君も穩當な運動方法を取つて呉れたので、壓迫の口實を與へることはなかつた。唯だ二月十二日の夜仙臺東一館で起つた大混亂は、既成政黨の逆宣傳に利用されて、可成りの打擊を蒙つた。同夜の內閣打倒大演說會の閉會の辭をやつた柚井事務長が臨監警部から中止されるや、事務長は屈せず繼續しやうとしたので、警部は檢束を命じた。熱狂した聽衆は承知せず、電燈は消され、警官隊と聽衆との大亂鬪が始まり、警官は拔劍して向つて來るといふ大騷ぎである。しかし此の混亂もホンの偶發的のものであつて、大した犧牲者も出さずに濟んだのであるが、既成政黨派では、これを誇大に吹聽して逆宣傳を始め、殊に政友會の御用紙は、連日此の事件を誇張して書き、そして政友會の某候補の如きは、その新聞を增刷して、加美郡といふ僻陬地方の農民に戶別配布をしたりなどした。「赤松を議會に出せば日本に暴動を起すだらう」と誠しやかに說いて廻る馬鹿者も居つた。此の逆宣傳がまだ無産政黨の何者たるかを知らない民衆殊に農村に對して可成り應へたと思はれる。

○

開票の結果、私の得票數は六〇七六票であつた。我黨の方では失敗だと云つて居るが、既成政黨や一般市民は、無産黨は意想外に能く取つたといふ。さまぐな不利な條件の下に立つた私が、あの因襲の壓力の强い地方に於て、僅か二十日間の言論戰によつて、六千票を獲得したことは、一面から見れば、無産政黨の侮り難き進出力を示したとも云へないことはない。注意すべきことは、私に對する投票は、多く知識階級の投票であつた。民衆黨及び勞農黨に屬する農民を除けば、農民大衆は殆んど既成政黨又は中立候補に投票したと思はれる。選擧中又は選擧後、私を激勵鞭撻して呉れた人々は、殆んど思想的自覺を

持つた知識階級であつた。因襲的色彩の強い地方に於て、情實因縁に拘束されず、物質的誘惑にも溺されず、官權にも屈しないで、良心的に動くものは、先づ知識階級でなければならぬ。私に集つた六千票といふものは、實に貴い階級的良心の結晶である。此の六千票は、今後、時の動きに從つて段々伸びて行く。また我々は伸びて行くやうに努力しなければならぬ。重苦しい雰圍の下にも、清新な新芽が萌えつつあることを見れば、敗れたりといへども我々の政戰が決して徒爾でなかつたことを思ふのである。(三月五日)

感謝に代へて

岡崎憲

私共無產政黨の候補者は、自分の利慾や名譽のために、立つたのでないこと丈けは、初めから解り切つてゐる。選擧費用一切を選擧人が負擔するといふ理想を實現するまでの犧牲であり、我れより後ちに來るものの爲めであることも明かである。だから、この過渡期に於ては、運動費を工面し得るもの、又はより多く他人から物資的援助を受け得るものが立つことになるわけである。して見れば、當落は實に問題外であつたのである。おこがましい言ひ分だが、大衆を教育し訓練して後ち大衆を獲得するのであつたから、問題はどの程度に大衆を獲得し得るかといふにあつたのである。

政治的訓練を經てゐた都市は比較的やすやすと無產黨代議士をあげ得たが、政治的教育さへなし得なかつた郡部は何れも失敗に歸してゐる。我神奈川縣第一區、即ち橫濱市に於ても、既成勢力の金城湯池と誇つてゐた市街地は反て容易に攻め入り獲得することが出來たが、郊外は難攻不落であつたのである。

× × ×

當選擧區に於ても、各無產政黨が選擧協定をなし遂げ得なかつたことを遺憾とする。これは第三者が我々の得票の結果より見て、單に選擧協定の不成功を遺憾とすると別な意味に於てゞある。

中央に於ける選擧協定が成らずして、地方は地方に移されたとき、他の無產政黨は計劃的に立候補を進めてゐなかつた爲め、最初の協議會は空虛なものであつた。私共は協定の誠意と純眞とをつかむことが出來なくて、終に名乘りをあげて了つたのである。そして、既成政黨の金城鐵壁を前にして、一日も空しうすることが出來なかつたのである。今にして、大山郁夫氏並びに加藤勘十氏の場合を思ひ合せば、寧ろ先見の明あつたと言へるであらう。

選擧協定破りの濡衣をおはされたが、ブルジョア政黨を、あれ程までに膨脹せしめた私の得票は、この汚名を雪いで餘りあるであらう。

私は同志神道寛次氏の私の一票を含む六千七百四十一票に對し、心から敬意を表するものである。

× × ×

私共の最も感激に堪へなかつたことはおかみさん連の應援であつた。又或る町端れのそばやのおかみさんは七十五票をかき集めてくれた。大の男が選擧違反におびえてゐた時、或るおかみさんは選擧違反も糞もあるものかツて違反を覺悟して、百十五票をかき集めてゝれた。

あなたが立候補されてから、家の嬶が新聞を讀み出しましたといふ手紙を私は貰つてゐる。婦選獲得同盟とやらから、應援辯士を送るといふ話であつたが、遂に一人の辯士も來てくれなかつたに比し、どんなにこれらのおかみさん連に感謝をさゝげるであらう。この婦人達の爲めにも、先づ婦人參政權の獲得を叫ばねばならないだらう。

それから、モウ一つ、その日、最終の政見發表演說會場から、吐き出された大衆のあとに、いつも二三人の老翁に會ふことであつた。而しかも、これ等の老翁が生れて初めて行使する一票を私に投じてくれたことであつた。私は之れを聽いて淚がこぼれた。

之れと反對に、憤激に堪へないことも、多くあつたが、思ひ出す氣にもなれない。これ等は寧ろ選擧戰のエピソートとして考ふべきであらう。たゞ、私のポスター百六十幾枚を或る地域に貼つた時、その日の夜に一齊に一枚殘らず姿を消して了つたことであつた。これは計畫的に行はれたものであつて、或るものは自轉車隊を組織して行つたものもあつた。これ等はやつたものも、やらせたものも、餘りに無智なのに驚かされるのである。

× × ×

要するに、名は最初の普選であつても、實は制限選擧の延長に過ぎない。有らゆる金權の壓迫、巧妙なる權力の干涉、或は奇怪なる脫法行爲等等從來と少しも變りはない。即ち古い戰術がそのまゝ効を奏してゐるのである。新らしく橫濱市に合併された或る町村では買收をほとんど公然の事實として口走つてゐるものもある。或は、、、の人が戶別訪問して來たといふこともある。

私共はかういふ事實を見せつけられても、彼等をひッくゝつて、つき出す勇氣はないが、少しも失望はせぬ。私に投じられた投票紙上の字體と、私に與へられた手紙とにより、如何に資本階級と、組織と未組織とを問はず勞働階級の新人との支持を受けてゐるかを知つてゐる。加ふるに、年々新らしく、繰り込まるゝところの新有權者に對して更らに絕大なる信賴をおくものである。そして私共はこの機會に於て、尙一層普選の徹底と政治的訓練とにつき進むであらうことを聲明したい。

敗戰雜感

杉山元治郎

今回の總選擧に際し私の立候補した大阪府の第五區は南北凡そ四十里能勢妙見の奧丹波境から金剛山の麓紀町に伸び、東西廣い處は約十里もある廣汎な地域である、此處に農民組合員約二千戸を有し、昨秋の府縣會議員の選擧には日本勞農黨、勞動農民黨、日本農民黨合せて得票は約五千あつたのである。故に少し力を入れるならば全く見苦しい敗北を取らぬであらうが、勝算も亦確實でない、其で或人は當選第一主義から神戸の樣な市部から出てはと云ふてくれた人もあつたが、農民組合の組合長が市部から立つことは意義はなさない、例へ落選でも郡部に廻ることが至當だとの意見が多かつた、且つ私は大阪府の出身である大阪府第五區の如き將來有望の地盤を打捨ることは如何にも欲しいので、いよ〳〵地盤開拓の意味で立つたのである。

選擧半頃より景氣が良い、各地の演説會が滿員の盛況である、最高點の噂が高くなつて來た、初めには當選を第二とし日勞黨の地盤開拓のためであつたが、斯く景氣がよくなつてくると慾目が出來て來て或は當選出來るかとも考へた。自分で其位だから運動員の人々が當選確實と信じたのも無理はない、其も其筈[illegible]は第四位、三島は第三位、北河内は第二位、中河内は第三位、南河内は第四位になつて居り、人氣の良かつたも當然である、今一つの人氣の良かつた理由は新聞の應援もあるが、我々に投票してくれる有權者達は人一倍宣傳力があつた所爲であらうと信ずる。

正々堂々理想的選擧を行ふて、所謂散票を集めつゝ一萬一千百五十六票を勝ち得たことは『敗けたりと雖も我れ勝れり』の感を強くすることが出來た、我が第五區の當選者は勿論落選者も選擧違反を出し、當選者四人共運動員は買收被疑で收容されてゐる、是だけ云へば賢明なる讀者諸君は察せられるであらう、火のない所に煙の出る筈がなく、買收が例へ候補者本人に累を及ぼさずとも其は上手に法網を潛つたと云ふに過ぎないのである、買收の手の伸びる所何ぞ本人知らざるの理あらんやである、買收によつて集めた數萬票より私の樣な聖い一萬票は遙かに貴いことを信ずるものである。

若し選擧法が改正される樣な曉は、買收の如き行爲は例へ本人に關係があらうがなからうが失格すると云ふ嚴罰にせねば容易に絶止することは困難であらう、一度失格するならば少なくとも一二期立候補することの出來ない樣にもせねばならぬ。

其と同時に私に投票して下さつた聖浄な有權者は今一つ監視員となつて買收は勿論、あらゆる既成政黨の違反を摘發し、敵をして斯る行爲をなす餘地なからしむる樣に勤めて貰ひたいことである、然すると

投票して下さつた一票は落選して死票となることなく、必ずや活きた票となつて有効に働いたと信ずるのである。

ポスター戰になると無産者は到底勝てない、今度の選擧で斷然と其が證據立てられた、私の區の或候補者の如きは二十五萬枚も刷つたと云ふことである。其位ならば一軒に三枚位宛配布すれば良いのである、現に十九日に大きなポスターを戸毎に配つてゐた候補者もある、斯うなつては論の外である、故に無産者はポスターで競爭しやうなどゝは間違である。

若しポスターに就ての改正が行はれるならば一定の掲示場を作り、其處に抽籤にて順次位置を定めて張出す樣にすれば、下らぬ費用も亦人夫賃も省け公正を期することが出來るのである、ポスターの多少と掲圖の巧拙は候補者の價値を計る尺度にならない、故にポスターの如きは選擧公設掲示場にのみ張るだけで充分である。

序に演説會であるが、今日の樣に各候補者が思ひ〳〵にやられては有權者は演説聞きに忙はしい、是れも各町村が主催者となつて立合演説をすることである、我々は應援辯士に投票するのでないから、主義政見と如何に之を發表し得るや否や立合演説を聞くならば立所に判明し、時間を空費する必要もなく、候補者自身も僅かの費用で立つことが出來るのである、然うしたならば人の前に出てもの云へぬ樣な議員が姿を消す樣になるのである。

次に費用の問題であるが、新聞紙の報ずる所によると一人平均五萬圓を要したであらうと、法定額は一萬圓内外であるに拘らず此の言葉を聞くは聊か不思議の樣であるが、今日の選擧法は費用の制限があつても有名無實である、第三者運動として何程でも使ひ得る樣になつてゐるのである、是れなども斯く制限を定めた以上第三者たると何れたるとを問はず凡て加算して制限外に出る者はドシ〳〵失格さゝねばならぬ、斯樣なことを許してあるから前述の樣な狂氣の沙汰の樣なポスター戰まで演出され、且つは買收行爲なども行はれるのである、我々無産候補が一通りの印刷物、ポスターを出し、盛に演説會をなして制限額の約半分で仕上げてゐることを思はゞ費用は増額する必要更になきのみならず、凡ての費用を制限額にまでする事が寧ろ急務である。

選擧取締に就ては各地とも無産黨に取つては隨分酷な遣口と云はれる樣であつたが、私の方は別段之と云ふ程のこともなかつた、之は官權の高等政策であつたかも知れぬ、第五區は民政黨の地盤で現に政友一人、民政三人出してゐる、其で民政の二人は確實で、後の一人を民政と政友と私が爭ふと云ふ狀態になつてゐたのである、兎も角民政黨の一人蹴り落すことは大變な仕事である、無産黨の一人位多くなることは大したことではないと高をくゝつて、寧ろ民政黨に鋒尖を向けた結果壓迫がなかつたのであらうと信ずる。

さればとて壓迫は絶無と云ふわけでない、下らぬことで警察へ呼出されたり、私の方へ嚴重に申渡されてゐることが、政友候補に見逃さ

れたり、最後の三日間は注意、中止が多くなつて言論が封鎖されたりしたが、他の地方の樣に動くなかつたのは要するに前記の理由によることと信ずる。

　兎も角十九日を以つて戰の幕を閉ぢた、後は運命の神のみ是を支配する、運動員の人々が當選間違なしと喜んで各自の投票所に歸つた、二十一日の新聞を見ると棄權率が府縣會議員の時と違ふて非常に少なく一割九分である、約三割と見て十一萬六千の內有効投票八萬位故一萬取れば當選と勘定してゐたのである、是が九萬四千票も入つたのでハテ豫算が違ふたと胸を打ち、之れでは危險だと感じたのである。

　又他の新聞には當選確實と書いてある人々の中に自分の名が見出されない、然るに恐るべき未知數と書いてある、いよ／＼以つて良くないわいと察せられた、此樣な場合にはシヤツのボタンが落ちたのすら何かの前兆でないかと氣にもなつた、自分自身で詰らぬことを氣にする凡夫だと笑ひつゝ各開票所の通知を待つ。

　散票であるから一向に數が増さない、百七十二ケ村中演說に行かなかつた三ケ村だけ〇があつたが、後は多少入つてゐる、是れには各候補者が惱いてゐる、此散票こそ後に必ず子を產む擴張力のある票である、午後三時頃になつても第七位であるからいよ／＼斷念した、併し農民組合のある北河內郡はまだであるから大丈夫と囑してくれてゐる人も、半ば心配顏、だん／＼七位から六位になり、五位になつたが、夕方六時頃いよ／＼次點で落選と定つた

　運動員の人々が男泣きに泣いてゐる餘り落膽してゐるのに、此處にオメ／＼何時まで一緒に居るのも氣の毒と思ひ二階へ上り床に就てゐた。見舞の人々が引切りなしに來てくれる、十二時頃には事務所も流石に靜寂に歸つた、三旬の政戰を思ひ、覺悟はしつゝも落選の悲哀を見せつけられると一時に疲れが出て來る樣な感じがする、安藤事務長も平生一杯の酒をも飲まぬに、此樣な晩は酒でも飲まんと居れぬと云ふて出掛け、夜中何處を何う步いて來たか解らないと翌日九時頃ボカンと歸つて來た。

　家內は二十日頃から風邪の氣味であつた、三旬の台所受持のため非常に疲勞してゐた所へ、落選での落膽と三つが重つて二十四日頃から四十度以上の發熱、雜鬧せる大阪の市も夜の二時過ぎには萬籟寂として靜かである、病人の氷を取替るために一人靜かに氷を破つてゐると、うたゝ人世の有爲轉變を感ぜられる、二十九日になつて熱も少し下つたので一ケ月餘締切つて來た西宮の家に歸りたいと云ふ、連れて自動車に乘せやうとすれば嘔吐を催し到底駄目である、それで親類へ預けることにした。

　家內を看護してゐる內に自分が流感に傳染したか三十九度の發熱、今は夫婦枕を並べて寢てゐる狀態である、幸に家內の熱も下るし、自分の熱も下つて來た、病氣がよくなれば捲土重來の勢を以つて農民組合のために働き、平生からよく知り拔くことである。何れは[illegible]

戰を必ずやる積りである、今度は必勝を期さねばならぬから萬全を盡す計劃である、腕を撫して來るべき時を待たう。（三月三日病褥中にて）

敗れたけれども

片山哲

1

ある農村で私の政見發表演說會が終つた時、若い無產農民の一靑年が私の傍へ馳けて來て、私の耳元で、一段と語調を低くめて、戰慄し乍らも、しかも力強く囁いた。

『私は必らず先生に投票致します。無產農民の一人として當然、先生に投票すべき任務を痛感致します。しかし先生――選擧の結果この村で幾票入つたかといふことが判明し、もしこの村から、一票しか先生に投票がなかつたならば、無產黨に投票した奴は誰だといふ事になつて、既成政黨の嫌疑が、ソリヤ嚴ひしいのです。全く一票を投ずるのも生命がけです……』

生命がけの投票！　選擧干涉は單に官憲の社會常識乃至は社會意識の缺陷に隨伴する專賣特許とのみ目すべきではなく、既成政黨の特權陣營からも、叙上の會話の內容が示す如き、、た干涉が敢行されてゐるのだ。

生命がけの投票！　しかもそれが選擧後にたゝるとは。そしてこれが普選の第一頁に深刻に記載さるべき文字かと思ふと、未來の民衆に對し、甚だ相すまぬ次第である。

2

選擧費用の苦面――追想するだに不愉快である。既成政黨の金權萬能人よ。普選といふからに、民衆が晴れ〲した氣分で政治に參與するを、ドウして、ソンナに意識的に計畫的に阻止すべく選擧費用を多額に見込んだのか。

私は、五千圓の金を親しき若干の友人の貯金通帳から借り出してホツト一息ついた。そして小田原電鐵を唯一無二の交通機關として沿線の農村を步き廻つた。五千圓を超過した部分は、われ〱の運動に心からなる誠意と熱意を有せらるゝ同志、有志の寄附で、ヤツト充當した。殊に感銘措く能はざるは、一九二三年式の中古るのオート・バイの寄附であり、組合員諸氏の獻身的支持であつた。

3

政治意識――政治的教養の程度の低度なることは言語に絶する。既往の政治は、如何に大衆と離隔遮斷されてあつたか、如何に空中に舞ひ

上がつてゐたかと如實に痛感せしめられた。代議士の任務を地方利害の代表者であると自信してゐる人達の多いのには、聊か拍子抜けした。殊に所謂地方の顏役なる人達の見解に就いては、只アキル、計りである。

『片山哲を神奈川縣から選出すれば、神奈川縣に何程の利益ありや』

といつたやうな衆議院と縣會とを混同して考へてゐるやうな宣傳を飛ばして見たり、依然として、代議士は代辯者、小使にあらずして、權威あるものといつたやうな因襲的觀念がコビリついてゐる。そして、所謂、顏役なるものは、自らの社會的立場を全然顧慮せず、相も變らずお祭りの御輿をカツギ廻はる氣持である。アヽ、頭の禿げかゝつた所謂顏役なるものには、全く助からぬかうした輩に限つて、唐突な逆宣傳をカツ飛ばす。

『片山哲は社會主義者片山潜の弟である。アンナものを代議士にしてタマルかい』といつたやうな虚僞の事實をサモ誠しやかに吹き廻はる。又『片山哲は輸入候補だからイカヌ』とか、いつたやうな宣傳、誠に誠に桁はずれも甚だしい。かやうな低級な逆宣傳も、私の選擧運動を災した有力な原因であつた。

かやうな與太者に依つて、運用されて來た既成政黨なるが故に、從來の選擧が如何に與太裡に行はれ、如何に、大衆の政治的躍進を阻碍してゐたかを充分に熟知し得ると思ふ。

4

新議會は、常に滿員であつた。しかも參集する傍聽者は廿五才以下の青年が壓倒的の多數を占してゐた事實は最も注目に値する。政治の本來道に就いて、青年の關心が如何に熱烈であるかを示す一例證であるのみならず、青年大衆が如何にわれ〱の新らしき行方に就いて留意しつゝあるかを示す貴重なる證左である。近き將來において朽つべきオイボレの腦味噌よりも、遙かに透徹なる頭腦を現代の青年大衆は所有してゐる。徴兵の義務を負ひ、民法上の契約の當事者たりうる青年に選擧權を拒否するの珍現象を普選の初頭に體驗しなければならぬとは、誠に苦盃を味つたわけである。

『言論を尊重する若き青年大衆に選擧權を與へよ！ 高齢の方よ、死の刹那まで、重大なる選擧權の行使は、老人虐待である。貴下の選擧權を冀くば若き青年をして行使せしめ貴下自らは、安らかに餘生を樂しまれん事を！』と叫びたくなつた事屢し一再に止まらなかつた。

アノ熱意あふるゝ青年大衆に選擧權が附與されてゐたならば、壓倒的票數を獲得し得たものを、今次の總選擧に際し、無產大衆の政治的進路の障碍物として、年齢の制限を指摘する所以、實にこゝにあり、われわれは如何に年齢の制限に災せられたかは、意想外であつた。

5

第三者の文書推薦なるものは、情實投票の誘因であつた。聊か奇嬌の言葉のやうであるかも知れんが、事實彼等既成政黨は、所謂社會的地位名望を利用し、推薦狀をば、情實關係を辿つて發送する其の結果は情實關係を激發激生せしめる。だから、情實關係―情實投票を激生せしむる第三者の推薦狀は禁止して欲しいものである。更にポスターに就いては指定掲示場以外に貼付せぬことにしなければドレ丈け個々の寸法を制限しても、數百枚並べて貼付すれば、結局制限も無意味となるのみならず、不經濟千萬である。ムシロ、絶對に禁止して欲しい位である。

6

費用のかゝらぬ選擧―これがわれ〳〵の願である。しかるに既成政黨のこの點に關する考慮は誠に淺薄短見を極めてゐる。費用の制限―一見甚だ尤もな言ひ分であるが、制限の根據は―その標準は―漠として捕捉出來ないぢやないか。ムシロ、積極的に費用のかゝらぬ措置を講ぜなければ嘘だ。差し當り演説會の公營の實施を必要とする。殊に候補者の政見政策の發表に際しては町村役場が積極的に便宜を與へるやうにしなければイカヌ。消極的方策をすてゝ、積極的方法を採用しろと力説する所以、實にこゝにある。

7

買收と戸別訪問とを嚴禁して、小刀細工の典型たる内務省令の撤廢を要求する。現在の法規は既成政黨が法を潜くる爲に設けられてあるといつて過言ではない。只潜り損ねてヒツカカルのが買收と戸別訪問とである。

無産派には金がないから「買收しろ」といつたところで出來ない。從つて選擧違反といつたところでビラ、ポスター等の事務的違反である。これに反し既成政黨の違反の内容は殆んど買收と戸別訪問なるにおいては、選擧運動を冒瀆するもの實に既成政黨なりと斷ぜざるを得ない。無産派の議員にして、初めて選擧界の革清を可能ならしむるを得べしと斷ぜざるを得ざるに到つては、これ普選の生める一個の大きな政治的皮肉である。

8

中選擧區制であつたことも、われ〳〵の打撃の一つであつた。中選擧區でもまだ〳〵地方的特殊利益觀念に左右されて、國策に就いての觀念が稀薄である。のみならず、舞臺が狹いだけに、矢張り情實選擧に墮する。しかず、斷然、大選擧區制を採用し、更に比例代表法を施行すべきだ。中選擧區でも比例代表法は行はれぬ事はないでもないが、比例代表主義徹底の爲に、大選擧區制を採用すべきである。

若し、今回の總選擧に比例代表法が施行されてあつたならば、無産派は、優に廿名の代議士を議會へ送り得た事と思ふ。

殊に比例代表法を施行することに依つて、既成政黨のあの無恥汚なる權謀術策を減少させ金力と權力との聯繫を避け、他面一政黨における信望ある幹部の落選を防止し得ると思ふ。

9

今回の總選擧でわが黨候補者の惱んだのは中立候補の出現である。候補者がその政策の具現性實現性を眞劍に考へるなら、必らずやその政黨的黨派的立場を明白ならしめなければならぬ現狀である。しかるに今回の中立候補なるものは、殆んど既成政黨系であつて第三者が見て、その候補者の過去の經歴を眺めれば、當選の際に、何づれに走るべき筋合のものであるかゞ直ちに判明する。それが圖々しても中立の假面を裝ふて選擧場裡に出現するからタマつたものではない。更に中立候補自體のは、當選の安全を期すること、當選後の買收を豫想してゐる心的事實から推しても極力排斥すべきである。殊に、今回中立と銘打つてあらはれた候補者の政見なるものは、無産派の言論と一脈相通ずるものがあるにおいては、われ／＼は益々怪しからぬ事と思ふ。更に、既成政黨か中立候補の當選を俟つて、買收の術策を發するに到つては、選擧界を腐敗せしむる癌は假裝中立候補者なりと云ふべきである。中立候補の如きは、この際法律に依つて禁止したらよいと思ふ。

（完）

雪中の奮戰

須貝快天

敗軍の將は兵を談ぜずですが、餘りの慘敗さに其原因の重なるものを摘載して世人の參考に供します。余が今回の立候補は相當の確信あつたものです。そは一片の理論でなく實に二十年前より地主對小作人の越後しかも他國に比類なき下越の大地に蟠居する大地主は宛然として、、、の構を擁にした暴君の如く其配下には支配人番頭世話人等、之れ又、幕府時代に極惡無道たる酷吏等が下民に對するが如く一片の血も涙もなく横暴搾取を以て己の役目と心得、我儘勝手に小作人を苦めて私腹を肥すを當然の役德として居た。見よ彼等は時に主家破産の場合に却つて第二の地主となり富豪となりつゝあるは、いかに彼等が常に地主と小作人間にありて豺狼の慾を逞ふし、不當の私腹を肥したるかを物語るものである。故に下越に於ける小作人は習ひ性となり横暴搾取に報ゆるに泣く子と地頭に勝たれぬと觀念し、農奴的卑屈根性のドン底に沈淪し僅かに生存を續け來つたので、世人が越後と云へば三助米搗、瞽女、女工、女郎、嗚呼！女郎、婦女の生命たる貞操を犠牲にし醜業婦よと罵られ朝に源氏を送り夕に平氏を迎へ一根の細腕は

千人に枕し一寸の朱唇萬客を甞むるは蓋し本意たらんやである。斯の如き三助米搗脊女女工女郎それは誰の子女であらうぞ、朝に星を戴き夕に月を踏むは愚か腰の半まで深田に沒して汗みどろの過勞に加へて夜間は子女の事、家庭の事に忙殺せられて勞苦艱難に泣くものは越後の婦女子である。さうした平素に對して何の慰めもなく僅かに饑餓を凌ぐに止まる浅ましき農家生活の辛苦は越後ならでは見ることの出來ぬ悽慘さである。斯くしても猶ほ年貢肥料教育生活はひし〳〵と一家を襲ひ遂に三助米搗脊女女工女郎となりて他國に流轉するので、誰が好んで郷里を離れ、暖かき父母の膝下を去らんやである。越後の人も人間並である。恥も外聞も知つて居る。けれど働けど働けど徐々加はる悲慘の苦境は一家浮沈の淵に臨み生きんが爲めの前には、貞操も外聞も捨てねばならぬ事を餘儀なくせらるゝのである。

私が青年に郷里を去り二十年餘に歸郷して其實生活を見、餘りに農奴的な無慘さと一面には王侯も啻ならぬ豪奢横暴と、惡支配惡番頭等の奸惡無情に憤然として起てよ起てよと警鐘を亂打せしは實に明治三十九年であつた。然れども因襲の久しき社會一般殊に官權地主有識者然かも當面の小作人すら狂氣と罵るものさへあつたが、私は國家の自由問題なりとし深く決するところあつて毀譽褒貶の外に立ち二十年間惡戰苦闘を續け爲めに或は鐵窓下に月を眺めし事も一再ならず、家計は傾きて生活さへ苦しかりし事もあつたが、幸に今日に至りて多少世人より農業中心農村國家小作主義を認めらるに至つた。今回の普選第一戰に立つたのも組合員の數から見れば決して無理な事と思はなかつたが、意外の慘敗は不穩ばかりでなく左の事情が大きな原因をなしたと思ふ。

一　選擧取締の嚴酷であつた事、我第二區は政友の高橋光威、加藤知正、民政の佐藤、石塚、勞農の稻村と私の六名で私は一月二十五日第一に名乗を揚げて廿八日から言論戰を開始し既成政黨は未た戰備の整はざるに各地の轉戰は頗る優勢を思はしめ世人一般其當選を疑はなかつたが二月十日過ぎより突如として黒雲四方に起り全軍を奪ふて各事務所は恰かも夜襲を受けた如く、三百近き幹部員は片端より違反行爲として連日連夜續々と連行せられ、余も亦三回訊問せらるゝ羽目を見た。その二三の内容を申せば、演説ビラが幾分三寸長いとか、食ひ残りのパンを車夫に與へたとかの爲めに候補者が取調を受けたなど實に馬鹿〳〵しいものであつた。

我選擧戰に對する武器も戰術も言論であつて是れを奪はるゝ事は戰術の總べてを消滅せしむる事となり爲めに唯一の言論戰は殆んど三分の一に終り中蒲原郡の如き得票豫定の半に達せざるは只二回の演説に終つたに基因する更に西蒲原郡の如き一回もなす能はざるの無慘さであつた。演説を聽かんとして交通不便の山間より水村より寒風飛雪を侵して來れる切角の民衆は閉會又は中止の爲めに其内容を知らずして主催者と候補者の無責任を難じ同情の應援も反感となり惡聲を發し來ては罵詈する者さへあり實に同志は血を吐くの思ひで暗涙を呑んだ

二　布施氏の立候補は實に意外の意外であつて同志を二分するの止むなきと、力を既成政黨にそゝがずして布施氏と爭ふの止むなきに至れるが第二因である。

三　第二區は福島縣山形縣に連なる四郡にして積雪丈余車馬の便なく爲めに運動意の如くならず、一票の價一日の傭賃廿圓なりしなどもその一因である。かく運動費の不足なりしと、既成政黨が非常手段によりて、、、、、を行ひ一夜にして俄然たる變動を見るに至つた。

併し農村問題は私の畢生の叫びである故に益々英氣を養ひ捲土重來を期する覺悟である。落選と聞き英氣頓に加はり四五年若返つた氣分である。

私の敗因

松谷與二郎

敗將兵を語らずといふ。しかし東京府下に於て無念の敗北を取つた私共が、無産階級の前衞として捲土重來、將來大いに戰はなければならぬ事を思ふ時、敗將は大いに兵を語らざるを得ない。

二月二十一日、泣いても笑つても、總ては此の一日に於て定つて了ふのであつた。演説會を開く事八十四回、金を費ふ事八千圓、而してその總決算が何票といふ結果が數字の上に現はれやうといふのであるから、愉快は愉快でも或る悲痛な條件をも具へた愉快ではある。私は此朝三人子供を連れて突然家を出て鶴見の花月園に行き、子供と一緒になつて馬に乘つたり、汽車に乘つたりして戯れ遊んだ。これは決して英雄の閑日月を氣取つた譯ではなく、選擧事務所に居て、刻一刻に來る開票所からの報告に氣を揉むのは益なき精神の浪費だと思つたからだつた。斯く半日を此處で過してやがて午後の一時も過ぎたかと思ふ頃朝日新聞の記者君が訪ねて來て、「當選ですよ。お目出度う」と云ふ。それを聞くと子供達は一齊に手を擧げて「萬歳々々」と叫んだ。それを隙さず同社の寫眞師がパチリとカメラに收めた。その時記者君は紙片に書いた當選者の氏名を見せて呉れたが、私が第五位で、政友會の中島守利君が落選した事になつてゐる。しかも開票は未だ七分位だと云ふ。それを聞くと、急に私は自分の落選を直覺した。そして何とも云へぬ寂しい氣持に取籠められた。その後の四五時間を散歩や食事に費して、漸く夕方の六時に家に歸ると、家の中は選擧事務員や町内の人や、其他の人でいつぱいで、電話係りは電話機に噛り附くやうにして報告を取つてゐる。けれども駄目だ。並居る人々の面には憂色が充ち滿ちてゐた。電話係りはたゞもう機械的に報告を聞いてゐるだけで勝敗の數は既に定つてゐるのだつた。

困つた事には、これより先ラヂオや號外で私の當選が豫報されてゐたとかで、諸方からビールや肴を當選祝ひにとどしどし舞ひ込んで來る

事であつた。しかしそれらは當選祝ひの資格は失つたが、代つて、諸員慰勞の料となつた。そして私共はこれらのビールの栓を抜き、選擧始つて以來初めての酒といふものにありついた。といふのは、何を云ふにも無産黨の選擧運動の事であるから、握り飯に香の物か、良くてコマギレ肉の汁が附く位のもので、他の選擧事務所のやうに酒のさの字も嗅ぐ事が出來なかつたのである。それが始めて酒にあり付いたといふのが、時もあらうに、落選が確立されたその當夜であつたとは、何といふ皮肉であらう。

人々は深き憂愁の中に、血を啜るが如くにしてビールの杯を傾けた。默々として誰しも多くは言はなかつたが、酒が進むにつれて、憂愁は次第に赤熱して、悲憤の色を帶びて來ると、流涕淋漓として泣く者、卓を叩いて怒る者、座は忽ち鼎の沸くが如くになつた。

私は此の光景を、衷心から涙と感謝なしには見る事が出來なかつた。いま斯うして泣く者も怒る者も、皆私の爲に泣き、私の爲めに怒つて呉れるのではないか、そして此の人達は皆直情徑行の人々である、既成政黨に見るが如き虚僞や打算は、我々同志の間には毛頭ない。その怒るところ、その悲しむところ、みんなそれ／＼の心のありのまゝの姿なのである。更に一つ此の人達の泣かざるを得なかつた事は、斯くまでわれ／＼が無産階級の不幸を目擊し、無産階級の幸福の爲めに戰はうと、あれだけ赤誠を披瀝してゐるにも拘はらず、無産階級の人々が見す／＼その敵である所の既成政黨に多くの投票を與へたといふのが情ないといふことであつた。

しかしこれらの人々が斯くも慨惜悲憤するのは無理もない事であつた。何故かといふと、これらの人々は、何等の打算なしに、全くの手前辨當で働いて呉れた人々であつて、此の一ヶ月に於ける奮闘は實に目覺しいものがあつた。選擧委員中のある人は最も重要なる任務にある關係から寢床に在る妻を顧る暇もなく、或人は發熱四十度にも屈せず演壇に立つたりしたものである。又雨雪を冒してポスター貼りやビラ撒きをやつて、下着のシャツまでビショ濡れになつて歸つて來る者や、また婦人辯士にして風雪と戰ひつゝ遠い道を徒歩で二三ヶ所の會場をかけ持ちをして平氣だつた人もある。

選擧後いろ／＼の人々から御見舞の言葉を頂戴したが、それらの人人は口を揃へて、此の惜敗に對して殘念がつて呉れられた。即ち一萬三千票といふ全國落選者中の最高點である以上、たとへ戰に敗れても名譽である。此次は大丈夫だ」といふのである。成程然う云へば然うだと、私は思つてゐる。第一既成政黨が金城湯池と仰いでゐる地盤といふが如きものは、私には藥にしたくも無い。しかも始めての事ではあるし、且つわれ／＼の主張は土地の代表といふよりも無産階級といふ階級の代表であるから、土地の緣故といふものがない。隨つて此の一萬三千といふ得票は誠に身に餘る光榮で確かに成功と云はなければならない。而してまた各所で開いた演説會の空氣から云つても、私共は甚だ望み多きを感じたものであつた。即ち何の演説會も割れん

ばかりの人氣で、演說會後も騷然々々と云つて、たかく〳〵演說會半分の後を追つて來て自働車の運轉すら出來ない有樣であつた。斯うして何の演說會に於ても殆んど例外なしに成功し且つ疑ひもなく旣成政黨の候補者の演說會に勝つてゐたにも拘らず、結果に於て敗北した。これは果して何故であらう？ 私は一言簡單に答へたい。即ち金で負けたのである、と。

旣成政黨の連中が、その實際に使用した軍費は、如何に少く見積つても、私の、倍たる、、圓以下の人は一人もあるまいと思はれる。私の出た東京第六區は全國で最大な選擧區で、有權者總數二十二萬餘であるから、これに手紙一本宛出すとしても、切手代でも六千六百圓かかるのに、旣成政黨の人達は、少くとも二三回、多きは五六回、甚しいのになると、年始狀まで出して選擧民の御機嫌を取つてゐる。左れば此の一事のみを見ても、新選擧法の法定費用の規定の如きは一篇の空文に終つてゐる次第で、選擧の墮落を防がん爲めの此の規定が空文に終つた以上は、選擧界は依然として黃金萬能の結果となるのである。斯うなると、折角正義の旗を押し立てゝ、理想選擧一本槍で戰はふとする無產政黨は、到底金力では及ばないので勢ひ苦境に陷らざるを得ぬ。然らば如此き法定費用超過の違反行爲が何故に看過されるかといふと、先づこれをやるのは、、候補であつて、、候補に對しては迂闊な事は出來ないから官憲は之を默視する。更に在野黨候補に於て現はれたる場合にも、既に與黨を默認してゐる關係上、逆捻ぢを食はされる事があるから、これも知らぬ顏で見逃すといふ事になるのである。

法定費用の超過といふ事は、やがて買收行爲を想像する事が出來るが、此の買收行爲が實際に於て如何に猛烈に行はれてゐたかは想像以上である。しかもそれが婉曲に行はれてゐるのもあるが、極めて露骨なるものもあるに至つては全く驚かざるを得ない。一二の例を擧げて見れば、某地[illegible]の住宅に米を一升宛配つた者もあれば、一圓紙幣を紙に包んで配つた者もある。又此の配るべき紙幣を作る爲めに何千圓といふ金を一圓紙幣に兩替したといふ事實もある。此の一方に於て、一工場、一町內といふ團體的買收が盛んに行はれた事も見逃せない事實である。

普選が行はれゝば、範圍が廣くなるから買收行爲はなくなるだらうといふ說と、却つて多く行はれるやうになるだらうとの二つの說があつたが、今次の選擧に於て、後說の方が事實として示された事は、私が改めて東京府第六區の實例を引くまでもなく、今や世間周知の事實である。如此きは何といふ社會的悲劇であらうか？ 民衆は、他日政黨的罪惡に依つてその買收金の何倍といふ金を回收され、取立てられる事も知らないで、一圓やそこいらの金で我が節操を賣るといふが如きは餘りに傷ましき事實ではないか。しかしながら私は絕望はしない。必ず時代の進步、民衆の覺醒と共に、此の弊風は早晩打破されるに違ひないと信する。たゞその日の來らん事の一日も早きを望んで、

敗將兵を談つて今後に期せんとするのである。

併しながら、私は必ずしも軍費足らずの一事を以て、敗北の責を回避せんとするものではない。固より私の不德が事茲へ至らしめた事は云ふまでもない事である。私にもつと德があり、聲望があつたならば、今度の敗北はなかつた事と思ふ。

その他には官憲の壓迫といふ事もあつた。けれども結果は、官憲の豫期したとは反對に演說會はそれが爲めに却つて氣勢を添へる事となつた。此點民衆の意氣を多しとせざるを得ない。

最後に一言したいのは、無産黨の慘敗――、就中私の落選に憤慨して自殺した人のあることである。私は此の一事を以て小民衆の私共に對する一個の意志表示と觀じ、其處に自ら大いなる責任の加はれる事を知るのである。謹んで此の方の靈に感謝と哀悼の意を捧げると共に、敗將の餘りに多く語り過ぎるを恐れて、茲に擱筆する次第である。

病に倒れて

宮崎龍介

僕は我國の政治史上に新紀元を劃すべき普選に際して、東京府第四區（本所、深川）から立候補した。

初陣に臨んだ僕は、――

勤勞無産大衆の政治的自覺を代表する新信念者の投票によつて勝つか？

保守的反動的傳統勢力に投票を奪はれて破れるか？

二つに一つの決戰を覺悟した。そして勝負は勤勞無産階級同志諸君の最後の一票に委ねて、たゞ勇敢に戰ひぬく決意をして戰線に立つた。

政戰中途にして病に倒れ、美事に戰に破れて、徒らに既成政黨者流に名をなさしめたのであるが、それでも、戰跡を顧りみて敗軍の將、大いに談ずる事としようか。

×

本所、深川、には黨の地盤と云ふ程のものは殆んどなく、總同盟系の極く僅かな組合員の他には何の手蔓りも無かつた

「保證金を沒收されるなよ！」と彌次られながら、僕は犧牲候補の覺悟をきめたのである。

一月二十一日、議會解散！　の號外の鈴の音を聽いた時、解散が豫期より早くあつたので先づ面喰つた。

泥繩的ではあつたが、二十四日夜、本所の開風堂で、安部先生に御出席を願ひ江東支部發會式を兼ね宣傳演說會をやつて、先づ指りを入れて見たところが、聽衆が堂に溢れすばらしい人氣であつた。開會が

宣せられた時、會衆の口から「[illegible]萬歳！」が連呼された有様を見て、僕は此の調子なら案外有望だ、猛烈にやつて「保證金を沒收されるなよ」と[illegible]つた連中の鼻を明かしてやれと、こんな謀叛心を起してみた。

最初、閻魔堂で發會式をやらうとした時にある人が、「此の閻魔堂は××候補が此の前の總選擧の時に、事務所として建てたのだが、落選したから閻魔樣へ寄附をしたのだ。そんな所で發會式をやつて縁起が惡いぞ」と忠告してくれた。だが僕は、「たいした惡事もして居ないから、閻魔さんの罰も受けまい。閻魔さんと協力して地獄へ行くやつの舌でも拔いてやろう」とたかをくゝつて居たのだが、今から思ふと閻魔さんのいやちこなごりやくで落選したのかも知れぬ。そのうち閻魔さんの前に落選報告演說會でもやつて大いに熱をあげてやらうよ。

×

實戰に立つとして、さて困つたのは選擧費の事だ。立入禁止札の金二千圓にはことに弱つた。でも幸ひ、それは同鄉の先輩K氏の盡力でどうにかまにあつた。しかし運動費は、あり金をかきあつめて千圓程出來たばかりで、あとの工面がつかない。

無産黨の唯一の戰術は言論戰で猪突的に押して行くのであり、加ふるに第四區は未曾有の候補者亂立狀態であるから、敵に會場を占領されないうちにと、二月一日を期して[illegible]ランを作り、僕は日本勞農黨の××氏のトラックに乘つて[illegible]につた。だが、此のプランの立てかたは今になつて考へると失敗だつた。何となれば七日に本所區内の宣傳を終へて、愈々深川へうつらうとした時、僕は病に倒れて、深川の演說會へは一度も顏出しが出來なくなつたからである。

それは明白に投票の結果にも現はれ、深川は僅か千票餘りしか取れなかつた。此れもたしかに敗北の一因であつた。

×

戰に入つて數日過ぎた或夜の十二時頃、けたたましく電話のベルが鳴つた。

事務長の家から「今主人が警察につれて行かれました。どうしたものでしようか？」と不安な訴へがあつたので、僕も突然の事で驚いて心あたりの各方面へ電話をかけて見た。ところが全部の運動員が引ぱられてゐるらしい情報を得て愈々干渉が始まつたと直感した。僕はその夜警察へ電話を以て色々談判したが一向要領を得ないでその夜をあかした。

翌日警察に行つて取調べた結果、事件の内容はわかつた。警察の云ふ所によると、「組合員のN君は、運動員の届出をしないで、人夫を雇つてビラを撒かせたから、無届運動と認める」とのことであり、その人は

夫も組合員だから從屬關係にあるものと認められて、檢束された者は、組合の重な人々十數名に及んで居たのであつた。

だが、事情は全く警察の認定を裏切つてゐる。

N君は、運動員屆出を事務長を通じて警察へ提出したが、履歷が書添えて無いとの理由でそれは事務長の手元まで突返された。N君は、そのことを知らずに運動に取りかゝつたのである。履歷の有無で屆出が完備しないものと認められるとすればそれこそ實に不當である。衆議院議員選擧法施行令第五十四條の選擧運動員選任の屆出には履歷を書けとは規定してゐない。僕等は今でもN君等の行爲が法に絕對にふれて居ないことを確信してゐる。強ひて文句をつけるなら仕末書位いで澤山だ。それを違反として告發したのは、明白に、、の一手段と云へよう。おまけに組合員を從屬關係にあるなどゝ云ふ當局の見解に至つては沙汰の限りである。

その頃、既に總本部で內務省、警視廳で檢閱ずみとなつてゐるポスターを、第四區內の警察署では掲示を禁示した。おまけに後で警察每に認定を異にして、ポスターを張らす所と、禁示を喰はす所とを出すに至つてはその不統一振り、その狼狽ぶりは寧ろ滑稽であつた。

だが、何はともあれ無產黨の陣營には豫期した壓迫が下されたのだ！ 我々同志は事々に彈壓を憤らずには居られなかつた。

×

僕は政見發表中隨分支那問題を論じて見たが、選擧民諸君も大に共鳴されたようだつた。

僕が病床に臥した後、支那國民黨の同志、陳××氏はわざく應援演說に來られた。

陳氏が壇上に立たんとした時に「外國人の選擧運動は法規に無い」との理由で官憲から禁止された。で、陳氏は「既成政黨の某候補には、外國人が應援してゐる前例があるではないか」と非常に憤慨して交渉した末、やつと、無言で壇上で挨拶する位ゐは良いとのことになつて、緘口令を喰つた陳氏は悄々、それでも情熱に目を輝かしながら萬雷の如き拍手に迎へられて登壇した。

陳氏を先導した一人の同志は、

「中華民國の無產民衆を代表する國民黨の陳××氏を紹介します。だが、今度の七面倒な選擧法には、外國人が應援演說をしてよいとの規定が無いと云ふわけで、陳氏は演說を致すことを許されないので、私がその意見を代讀します。」

と紹介の辭を述べると嵐の如き拍手が起つた。

……親愛なる日本の同志諸君が、普選の實施に際して、その代表者を議會に送らるゝ機會を持たれたことを私は支那の無產者に代つて御祝申上げる。私は今單に宮崎氏ばかりを應援に來たのではない。支那に於ける國民黨と、日本に於ける社會民衆黨とは共に東洋の無產大衆、被壓迫民衆を解放すべき、、、、、をもつて居るのであるから私

は敢て此の壇上に立つた。支那全土にたいて、日貨排斥！　打倒帝國主義！　そして、、、、、、、、！　の聲が高い、支那の民衆は、日本の既成政黨の帝國主義的な對支政策には絶對に反對してゐるが、然し日本の國民に對して排撃を加へようするのではない。支那の民衆は日本に眞に民衆自身の意志を代表する政府が出來る日を待ち望んでゐる。その時こそ日本と支那との民衆相互の利害がピツタリと一致して兩者親善の實があがる時である……」

此の時全會衆は期せずして、「日本、支那萬歳！」を熱狂的に叫んだ。

×

こんなやうにして僕が倒れた後も、連日連夜の演說會は悉く盛況をきわめた。

當選確實！　こんな情報が僕の病床に來たのも此頃だつた。だが、投票日の二十日が次第に迫つて來る、十七、十八日頃になると、

「××一派が△△市場を中心として買收を初めたぞ！」

「△△候補が、、、、方面に肉彈の魔の手をのばしたぞ！」

「○○派の運動員は、一票×圓で潜航艇をやり出したぞ！」

此んな、いまいましい情報が盛んに傳はつて來た。そして僕は、ブル政黨の最後の武器が活動を初めたことを知つた。「摘發だ！」「證據を！」僕はひとり反射的にかう叫んだ。然し既成政黨の行動は頗る巧妙に働らいた。

開票の日、午前中は僕の方も非常に具合が良かつた。本所の第一、第二投票所が開票された頃までは、第三位で當選出來さうだと報知をうけた程だつたが、深川の開票が初まる頃から形勢は逆轉して來た。そして、美事に落選したのだ。地盤なく！　軍資金乏しく！　加ふるに戰の途中病に倒れて！　落選は當然の結果であつたかも知れない。

今夕刊を讀んでゐると、第四區で、O候補が戸別訪問、K候補が買收とそれぞれの嫌疑でその運動員が檢擧されたと報導されてゐるけれども此の様な事は、たまたま表面に現れた一事件であつて、いづれの場所に於ても黄金の波は渦卷き、違反行爲が暗中盛んに行はれたことは既に公知の事實なのだ。

言論戰に於て、自然的共鳴を得たところの無産派各候補が、全國的に最后に至つて惜敗してゐるのは、皆これがためだ！

×

だが、徒手空拳で勇敢に戰ひぬいた我陣營に三千六百票を投ぜられたことは感謝にたへない。あと五百票で當選したのにと、くやしがつた同志もあつたが、此の三千六百票！　こそは、あらゆる壓迫と干渉を脱し、又誘惑と情實とを排して投ぜられた。眞の清き意志と力との結晶た。

僕は、どこまでも、あらゆる障害を飛び越へ、社會民衆黨の旗の下

に、既成政黨の陣營へ肉迫してゆく決意を勤勞無產階級同志諸君の前に誓ふであらう。

權力と黃金と陰謀と情實とを唯一の地盤とし、城廓としてゐる既成政黨の鐵壁にも龜裂は既に生じた。それは三千六百の投票が明白に立證してゐる。

勤勞無產大衆が、その兩足にしばり付けられてゐる、、、、、、み切つて、民衆政治を樹立する日は、只我々の勇敢なる進軍によつてのみ戰ひとられるのだ。

三千六百の江東の同志諸君！　さらに全日本の勤勞無產階級同志諸君よ！　如何に、黃金と、權力と、情實と、陰謀と、さらに彈壓と干涉とを以て、我々に迫るものがあらうとも、只、我々は正々堂々と戰ひぬくのみだ。

既成政黨者流の絕對的信條は、既に動搖しつゝある。見よ！　新しき日本！　民衆の爲の日本！　は、我々の目前に展開しつゝあるではないか。(三、三、四、)

初陣の政戰敗北の記

中澤辨次郎

一　惜敗した戰跡の展望

私の選擧區は岐阜縣第二區であつた。大垣市外七郡に渡る所であるが、無產政黨の農村地盤としては全國でも有數と目されて居た。が亦それ丈け既成政黨に對しては强大なる敵をなして居た。其處から普選第一次の總選擧に打つて出て、物の見事に敗戰して終つた。

かねて豫期して居た事ではあつたが內部から一人の裏切り者に出られた爲に最初の出足を挫かれて終ひ、出馬の幸先に於ける氣勢を殺がれること甚しいものであつた。だが敵も味方も此の地盤からは一人の無產階級代表が進出するであらうことを既定の事實の如く認めて居た所である丈けに、愈々落選と決定した時には誰れしも案外の感を抱かぬものはなかつた。──けれども私自らは最初から然かく御目出度く考へて居なかつた丈けに落選に對する當然の感しか湧いて來なかつた。──今飜つて總選擧直前の政情を顧るに、總選擧氣分の追到するに伴れて、何何にせば無產代表の進出を防ぎ得るかと言ふことが、既成各黨の念頭にブラ下つて居た問題であつた。のみならず此の區は事が順調に運ぶ限り斷じて同志討ちを演じさせて其の間既成政黨自ら漁夫の利を占め得るの餘地はない所であつた。何んとなれば中部日本農民組合並に其の支持政黨である民衆黨中部同盟が壓倒的多數を占めて居た爲め、其の他に日本農民黨系と勞農黨系の勢力が多少介在しては居るが、兩者合せても僅々四五百票を出でない少數であつたか

らである。

然るにソレでは既成各黨に對して餘りにも勝手が惡る過ぎた。のみならず客觀的に見ても私の組合に機會さへあるならば、「お山の大將一をキメ込まうとして居る一個の人物があることが彼等の眼にも早くから映じて居た。此處に目を付けたのが某政黨の黑幕であつた。此の者に安價の野心を焚き付けて內部戰線にヒヾを容れ、そうして力の分散を計らうとすることを考へついた。其處で之れ等の仕事の大部分を急進中央に於いて仕組み、全く御本尊の關與を許るさない間に一定のトリックを作つて終つた。縣內の他團體推薦と云ふ形式は此のトリックの尖端が現實に現れた丈けに過ぎない。恐らく此の間の消息は中央に於いて合同問題の交渉と云ふ機緣から端しなくも輕卒に公認と發表した、日勞黨に於いても事情に伏在する裡面の詳細を御存知ない所であつたらう。

滑稽なことには日頃犬猿の如く反目して居る他の某既成政黨も出し拔かれた形ちではあるが、目的と而も方法までも軌を一にした最後的名案であつたので、從來その當人を自黨系の人物として許るして居たのであるが、他黨の此のトリックは默認せざるを得ない關係に置かれた事であつた。御當人は固より何れでもよかつたのだ。之れに依つて立候補の名乘りを上げられゝばそれ丈けで或る程度の野心の滿足と兩黨に對する特別の使命が果されるからである。たゞ問題は斯う云ふ不自然なトリックが――對內的に少しも組合の了解を得ないで――何處まで成功し何れ丈け農民を迷はして來るかであつた。それにも拘らずとして斯う云ふ人爲的政治の下に出來上つたのが、既成政黨の一局に於ける對立候補であつた。同一組合內から二人の候補が出て、一方は自分の組合から滿場一致の推薦を受けて出馬し、他方は他組合から推薦されて立候補して居る。如何にも奇妙な對立ではあるまいか。理義は自ら明白である。輿論は寄るべき所にしか寄らない。終に他組合の推薦を受けた者は、階級道德の高調されるに從つて次第に尾を捲かねばならぬ自然的作用が起つた。けれども本來意識的に、、作用を爲す可き役割を擔當して居たものであつた丈け、辭退期限の最大限度まで踏み止まつて私の進路を碍むであらうと豫測した。豫測は過たず、二月十二日の午後十一時五十五分即ちアト今五分で二千圓の供託金がフイになると言ふ直前まで、頑張つてソレでも終に豫定の如く辭退するに到つた。

斯樣な紛糾を孕むで生れたのが形式的に表面選擧協定が成立したと發せられたのである。なる程對立候補として出た一方が、辭退期限の最後に辭退した爲め對立候補丈けはなくなつた。が辭退した御本人と就中その推薦者等が辭退後如何なるものに好意を寄せて居たかを探知すれば、此の協定の性質の何物であつたかが分明するであらう。……と同時に此の對立形勢の持續中、既成各黨が如何なる宣傳をなして農民を五里霧中に彷徨せしめたか。……斯う云つた丈けでも此の對立關係を人爲的に發生せしめた者並に此の關係の發生することを好むだ者の心裡が明瞭に解かるではないか。

二　既成各黨の選擧前奏曲

既成各黨の目には餘りにも組織農民の健全分子が活躍する有樣は、過大に映じて居たらしい。其處で彼等は總選擧對策の前奏曲として次の樣な行動を取り、農民の甘心を買ふ可く鋭意して居た。丁度腕の喜三郎君が信ずるやうに選擧第一主義に即して日常の政治行動（？）を割り出した。之れが爲め某黨の或る者の如きは、暇にアカシて選擧對策を練り、「日常耕作」と云ふ旗印を掲げて地盤開拓に馳つた。「一本のハガキを頂けば何事を措いても飛んで行く」と云ふ約束を聽衆に與へて猛烈なる活動を續けて居た。之れに示唆されて各黨共に、贊同、政友も何れ劣らず、何々後援會、何々政治教育協會、何々自治協會、何々地方改良協會等の主催者を表面に設け、其の實特定人が一派の失費をたして、食事付き無料講演會の押賣りが――脫法的に――盛んに行はれた。更らに竿頭一歩を進めた者は、重箱又は折詰それに添ゆるに正宗若くは麥酒等の景物を餌にした何々支部若くは何々俱樂部等の名を借る發會式が盛んに擧げられた。甚しき政黨になると黨員一名募集した者に二圓三圓の報酬が施行れ終にはそれを目當ての黨員募集業迄が出現した。一人三錢の十姉妹買收に一人一圓宛が拂はれたり、藁三束に對し一圓宛の買取り手付金が置いて行かれて、何時まで立つても引き取り人が來なかつたり、十錢持つて一升罎下げて行けば酒が一杯必ずツメて買へたり、無產農民に對しては洵に天の甘露に値ひする取引が各所で行はれ初めた。多數無智の農民が、普選時代に於ける既成各黨の斯くの如き後退振りに對して驚異の眼を瞠き乍ら甘まい汁に法悅しその政治的意識に多大の錯誤觀――普選は金權政黨が農民に媚びて金品を供給するものかの如き――を抱くに至つた者がある程、普選を冒瀆する輩が活動し初めた。而かも彼等は此の行爲を名付けて曰く、「之れコソ我々の農民に對する不斷の政治的耕作である」と、斯う云ふ不斷の肥培耕耘に對してさへ、尙ほ且つ彼等は安心することが出來なかつたものと見え、第一項に述べたやうな非常手段を取るに至つた。

三　敗戰して反つて自信湧く

岐阜縣第二區は既述の如く無產政黨の農村地盤として決して香川や新潟のそれに劣る所ではない。のみならず香川や新潟のやうに最後まで各無產政黨の協定が成立しないで、醜い同志討ちの對立鬪爭が續行された所ではなかつた――例へそれは表面の形式的であつたにせよ――從つて外觀的には兎も角、他の農村地盤に比して優勝の地であつた。それにも拘らず私は無慘にも敗北した。一時非常なる優勢を傳へられ、形式的協定が成立した吉田の如き、未だ何等の選擧運動に着手して居ないにも拘らず、既に當選圈内に入つたと稱せられた者が僅々五千二百七十四票を得た丈けで落選するに至つた。その原因に就いては尙ほ多くの理由がある。その第一に算へあげねばならぬものは、候補者自身を初めとして選擧事務長以下全部の選擧運動員が、餘りにも初心で

あつて、既成各黨の如き假令ども政界の古武士、千軍萬馬の將を向ふに廻して戰ふ可く餘りにお人好しであつたと云ふことに歸着すゝ。先方の陣形を見てそれに千變萬化の戰術を巡らす手段が講じ得られなかつたと云ふこと、換言すれば選擧運動らしい運動が殆んどなされなかつた。無産階級の唯一の武器である言論戰さへも時日が切迫して居た爲に滿足に行へなかつたのだ。——出足の阻まれた好機が至大に關係して居るのは固よりだ——此の事情の下に於いて敗北は當然と謂はねばならぬ。

既に戰塵も收まつた今日、靜かにその戰跡を展望して後來の戒めとして置かう。古戰場不破の關と關ケ原を挾むだ西濃一市七郡、有權者七萬一千五百有餘票、定員三名に、最後まで爭鬪した候補者七名、—此の中に打つて出た私が同縣下の最年少者であつたとか——之れが私の戰場に振り當てられた陣形であつた。北西南に渡つて山がL字形に選擧區を圍み、東南に開けた平野の眞只中には揖斐、長良、木曾の三大河川が縱貫して汽車にも電車にも見離された海拔以下數尺の低地が悉く堤防を以つて一村毎に區劃されて居る。斯うした村々が全選擧區の大半を占めて居ると言つた丈けでも無産階級が活動するには餘りにも地の利を得て居ないのみならず其の戰線は南北に長くして約三十數里に及び、約半數丈餘に達する揖斐本巢の山間部には約三千の投票が、無産政黨の鋤の力の屆かぬ所に隠れて居る。そうして其處に棲む多くの炭焼き大衆が投票所まで出て來るには數里を歩まねばならぬ。一蹴しなければ投票權を行使出來ないと云ふことになつて居る。此階級に向つて投票權を行使させるには一日の日當に値する支給をしなさねば悉く棄權するそうである——今回の投票には珍らしく棄權する者が尠なかつたのは何を物語るか——從つて既成各黨の慣行は投票日當が一定されて居るとか、然かも此の山間部落は警察官を見出すのに金の草鞋でも履かなければならない所であるそうな……。

其の他の平原地方と雖も伊吹颪の吹き荒む所、其處に春光あふれかに揺らいで農民の振り撒く人糞肥料よりも更らに鼻持ちのならない買收が紛々として村々を襲ふ。選界には之れを當然とされて居る選擧區である。此の眞只中に乘り出して、既に立ち遅れて居る上に、何の思にも付かない協定問題で出足を挫かれて居る。勝敗の理數は既に戰はずして分明してゐるではないか。たゞ當方を力量以上に買ひ被つて戰いて居るのは我々の内部的情勢を客觀的に過信して居る既成各黨の諸公のみだ。此の情勢裡に於いて僅かに頼みとする所は日頃訓練してある組織農民の政治的良心！　たゞそれ丈けである。戰はされば此の組織農民の投票が宙に迷ふ。のみならずそれ等の精鋭分子は他組合が某なる者を推したと言ふので却つて勇氣となり、制せども聞かぬ自尊心を持ち必勝を掛けて私に出馬の勸說である。此處に於いて私の心は例へ敗けてもよいといふ氣持ちになつた。此の晴れ切つた選擧區に斯うした純眞なる精鋭分子が巍然として健在する限り、此の分子を健全に守り育てるのも我々に殘されたる大なる仕事である。現に人や叫の[illegible]

擧を機緣として純眞なる未組織大衆に政治的自覺の呼び懸けを行ひ、一人でも我々の陣營に收容することが出來るならば望外の幸ひである。斯う腹が決定たので斷然去る二月二日立候補を決意し、そうして實際運動に着手したのは八日後の二月十日――前記の協定問題で手間取つた爲め――運動資金僅かに三千圓を以つてポスター一千八百枚、引札四萬枚、推薦狀の發送が二月十六日より着手して十八日に渡る三日間、演說會を開くこと漸く五十回、斯くの如く選擧運動と云ふには餘りにも微弱な運動の繼續であつたが、それでも此の十日間に渡る運動中、何處へ行つても何故早く來ないか、推薦狀は何うしたと叱り付けられる程催促された。――之れ等の民衆に私に對する多少の關心があつたことは之れでも解かる――そうして私の顏を出した演說會場からは未組織農民の投票が七十票八十票と目に見えてメキ〱出て居る。其の他大垣市の如き僅かに一回三十分間の演說で下級勞働者（仲仕の）と官公吏智識階級との投票が四十票も出て來たことを開票後に知つて、今更ら言論戰の偉大なる効力に驚くのみだ。――所が惜しい事に完全に顏を出した演說會場は總回數五十回の內僅かに二十七回――此の程度の運動であつたにも拘らず、五千二百七十四票を得て、而も既成政黨の心膽を極度に寒からしめ、其の陣形を全線に渡つて參度まで立て換へさせ、之れが爲め、其の戰費の如きも追加亦追加、噂さに依れば某候補の如き、、、を要し、少なきも、、圓を費消せざるを得なかつた程戰ひ抜かせたことが解かつた。鑑みて敗戰したとは言ひ、決して惜しくはない。此の程度の運動にして尚ほ且つ斯くの如くである。之れに一段の時日と一糸亂れざる組織が最初からあつたなら、僅かに既成政黨の牙城を粉碎して餘りある勢ひと力があつたと思ふ。殊に興味あることは、前內務次官川上孝哉君の出生した村、此の村丈けは川上君が金城鐵壁と觀じて他候補者への投票なしと信じ切つて居た所から他の立候補へは十票二十票であつたが私への投票は百五十九票出て居るではないか。贊同川瀨君の居村からも六十票と云ふ投票が私に出て居る。之れ等の事實に徵して未來の勝利は完全に我々無產階級の手にあると云ふ自信が強められた。

四　總選擧を終つて感じたこと

普選第一次の總選擧に於いて農民を地盤とした無產候補が期せずして枕を並べて討死した。此の事實を見て農民の政治的無自覺を說く者が多いが、私は必ずしもそう許りとは思はない。現に私共の選擧區に於いては、上層機構に巢食ふてゐた幹部の一人があれ程迄共に裏切行爲を示し、計劃的に意識的に既成政黨の爲に或る種の働き懸けをやつて居たのにも拘らず、私の勢力範圍內の組織農民は殆んど一人も私へ裏切つては居なかつた。と云ふよりも一旦地主との爭議對策上組合を脫會した者さへも擧つて私へ投票して居て吳れた。たゞ問題は短時日と交通機關との關係で組織農民以外の階級に我々が働き懸け得られなかつたから、其の方面の得票が既成政黨に攫らはれた丈けである。た

から私は自分の方から手を離さずして農民が我々を裏切つた等とは言ひ度くないと思ふ。之れ等の事情から鑑みて、若し組合農民に買票奴ありとするならば、それは組織の上部構造に巣喰ふ所謂ダラ幹と云ふ一部分の者丈けであつて、多くの純眞なる組織農民は決して腐敗して居ないと謂へる。勿論之れは各組合幹部級の指導方針にも依ることであらうが……。が然し氣の毒でならなかつたことは、農民の多くが、餘りにも生活に困窮して居ることであつた。二十錢三十錢の選擧辨當にさへ心から滿足の色を現して居る本能的顔色は涙なしには見て居られない。一日土方人足に出る手間を割いて選擧人夫に奉仕して呉れると云ふその心意氣には自づと候補者の頭が下がる。だがそれにしても無用のポスター戰を挑む階級は何奴であるか、一日一圓二十錢の薄給を與へて五百枚千枚と貼ることを強ひ、最初隔日、期日切迫と共に毎日無用の貼り換へを行はしめ、村々を醜いポスターで埋めて終はふとして居たではないか。

今度の選擧で私共が痛切に感じたことは、ポスター戰の馬鹿々々しさであつた。金がないから言ふのではないが、アノ亂雜極まつたポスターの惡どい貼り方は候補者の名譽の爲にも村の風致上からも、亦徒らなる選擧犯罪の防止策上からも相當取り締つて欲しいと思つた。改正案は斯うである。一町一ヶ字一候補一枚と決定し、全部の候補者用ポスターの貼り出し得る掲示板を町村にて建設するか、亦は村役場の掲示板に候補者氏名全部を掲示する程度に止めること、斯うすれば選[illegible]定員[illegible]感ずることは、未だ[illegible]が多過ぎると云ふことだ。ポスターを制限することに依つて恐らく費用は半減して差支へないであらう。一體一回の選擧に一萬圓内外の費用を要するが如く法定して置くことが選擧界を腐敗に導く動因である。宜しく選擧は金がなくても行はれるものであると言ふ信念を強く選擧人に植ゑ付けることが大切だ。選擧に金が掛かるから議員が下らぬ誘惑に引つ懸かり易い。政治を公明にしやうとすれば、千二千の金で選擧が濟まされるやうにしなければならぬと思つた。

更らに亦今度の選擧で私共が意外に感じたことは、プチブルジョアとして殆んど問題にして居ない自由職業者である醫師や官吏の一部や小學校長等が、案外の好意を寄せ、進んでは推薦演説にまで飛躍して呉れた者のあつたことだ。意外であつたのは大垣市や關ヶ原町に於ける紡績工の未組織勞働者が民政黨に走つて居たことだ。選擧終了後初めて御立ちになつて居たんですかとソレはホンタウの心から惜しがつて呉れた紡績工を列車中で發見したが、後の祭りであつた。新聞にさへも餘り目を通して居ない之れ等の人達に私共から呼び懸けなかつたのが、手落であると自らを責めるより外はない。因に岐阜縣下は一般に官憲の壓迫は無かつた。壓迫しなくとも政友會は大勝し得る確信があつたらしい。候補者の人物比較をして素人目にも一見さう映る。結果においてやはり政友五、民政三、勞農一―無産派敗北となつて居る

戰に勝つて得票に敗る

須永　好

普選に依り十二萬七千の有權者を有する群馬縣第一區は、二市六郡より成り舊來の政治勢力は定員五名の代議士を民政が三、政友が二出して居る、從來政爭の烈しい處で、その內でも、新田、新田邑樂の所謂東毛三郡は政友會の武藤金吉氏あり、新黨政會の飯塚春太郎氏あり、政友本黨の[illegible]作利藏氏あつて何れも其の派の巨頭であり大正十三年の總選擧の時は武藤、飯塚の兩雄に對して[illegible]作派では武藤七郎氏を押立て全國でも有數の激戰が行はれた。それだけに既成政黨各派の勢力は町村自治體には勿論、消防組、在郷軍人會、青年會から學校の同窓會に到るまで侵入して拔くべからざるものがある。

普選最初の試である昨年の縣會議員選擧に當つて無產黨から六名の候補者が立ち約四千票の投票を得る事が出來たとはいへ何れも敗戰に終つたのである。

當區の無產政黨の勢力を縣議戰の成績に付いて見れば、

郡市別	所屬政黨	候補者名	得票數
新田郡	日本勞農黨	須永　好	二、二〇〇
佐波郡	日本勞農黨	菊地重作	三二五
前橋市	日本勞農黨	堀川秀吉	三三五
利根郡	社會民衆黨	金谷高三郎	三一六
山田郡	日本農民黨	坂本利一	七六九
山田郡	社會民衆黨	篠塚調智	一〇〇

で新田郡以外には地盤と云ふ可き程の處なく、然も無產政黨運動の中心は農民組合であつて其の活動も小作爭議を通して知らるゝ程度のものである。

無產政黨各派の勢力は縣會の得票が示す如くであるが、其の他に勞働農民黨の支部も二つ程あり何れも所屬を別にしては居るが日本勞農黨の勢力が最も大きく代表的であり各派の對立的關爭は行はれた事なく、何時も共同戰線が張られて居る。昨秋の縣會に車税撤廢運動を行つて以來は共同戰線の機關として、共同委員會が設けられ其の下に今日に到るまで活動が續けられて居る程である。

日本勞農黨は縣會議員選擧に三人の候補者を立て皆落選はしたが、縣議戰は、次の總選擧の準備であると意氣込み專ら黨勢擴張に努め數十回の演說會を開いて次に備へて居た。

休會明けには當然解散であらうと豫想して居た衆議院が一月二十一日豫想通り解散された時、吾々は勢多郡南橘村で黨勢擴張の演說會を開いて居たが演說會が終つて同志と前橋に歸へつて來た時、始めて新聞のニュースでそれを知たのである。

豫想して居た出來事に豫想通り出逢つたのではあるが、皆々之を見合せなければならなかつたと云ふのは、今の今まで氣焔をあげて居たとはいへ、供託金のあてもなければ、中選擧に鹿を逐ふに充分な組織があると云ふわけでもないからである。

然し何とかして一戰まみえずに引込むわけにも行かず、早速電報で支部研究會の役員會を召集し翌日は朝から對策を練つた、相變らず候補者を立て大いに戰ふ可しと元氣な決議は出來てもさあ具體案となると首をひねる外なかつた。

二十四日縣下無産四黨共同委員會で候補者推薦會を催し、第一區で日本勞働黨の私を、第二區では日本農民黨の大澤忠七氏を推薦してくれたが、先立つもののない以上何とも致し方なく、結局第二區の方では大澤氏の辭退に依り同じく日本農民黨の畑桃作氏が代り第一區でも日本農民黨の坂本利一氏が兼てからの計畫に依り公認されたくとも立候補することとなつた。

然し、第一區の情勢は前述の通り日勞黨に絶對的勢力がある以上、無産四黨共同推薦會の結果が無視されるに默す可き筈もなく二十六日更に第一區内無産團體協議會を伊勢崎に開き飽く迄私を推薦することにしてしまつた。

「熟慮の上」と男らしくもなく、卑怯な回答は自分ながら快とはしないが、こゝまで來ても決心の出來ないのは何としても勇氣や果斷で出來ないものであるからである。

二十七日二十八日。評議は一已の[illegible]に一[illegible]立候補すると申立て、知己朋友からは一ファンキセヨー」と[illegible]して來たが何とも云へない氣分で過したが、二十九日、小學校の小使さんから一千圓の寄附を叩きつけられて始めてあう千圓の都合もつき、三十日立候補の屆出をなすことが出來た。

屆出の用意出來たと云ふや自動車の寄附者が出來、乘つた車もない自動車に納まつて、供託局から縣廳へと、金さへあればすらすらと手續は進み、其日の中に事務長を屆出で、事務所も二ヶ所出來選擧委員の屆出も十七名も出來、米の持寄り金の持ち寄りで運動はどしどし進んだ。

當區に於ける各派の陣立は定員五名の處政友は前代議士二名を公認し萬全を期して動かず、民政は優勢な地盤丈に三名の公認に更に二名の非公認が立ち亂立の形となり、實業同志會が一名補陣を張り普選準備會一名を立て無産派が私に坂本利一氏と二名立ち更に政友から屆出期日も迫つて一名の非公認を立て十二名入り亂れての戰となつた。

戰の上から見るなれば各候補何のひずみもなくあらゆる手段を盡して戰ひ續けた。金のない私も決して戰に於ては負けて居なかつた。

戰が始まつて以後、金の事は心配するなと金もない同志が勵ましてはくれるが尙心配せざるを得なかつたが、無産黨への同情は格別と見え事務長から毎夜報告してくれるところに據ると、五圓十圓の寄附が或は無名氏から或は女や小供から、どしどし集つて更に心配ない

と云ふ事であつた。

今になつて精算して見れば四百五十人もの人から三千二百八十三圓○五錢の寄附が集つて居るのだから感泣せざるを得ない。

兎に角かくの如くして立候補してからは何の不足もなく手足の様に働いてくれる同志と思ふ存分活躍することが出來た。二月の七日には七個所に事務所が設けられ、立看板は百個、選擧委員は五十人、ポスターは四萬枚が貼りたてられ、演説會は各事務所に辯士班が組織されて候補者の都合に構はず毎日五六ケ所宛も催され、既成政黨を壓して運動は進められた。左に運動の大要を示せば

ポスター
　小ポスター　六萬枚
　大ポスター　一萬五千枚
　演説會ポスター　七千枚
チラシビラ　三十萬枚
推薦狀
　開封で一回發送
立看板
　百個
新聞廣告
　ナシ
演説會
　二百七十二回(内候補者ノ出席百十七回)

費用の大要

支出總額。	五千百六十圓貳拾參錢
内譯、報酬	參百貳拾四圓九拾錢
家屋費	四百五拾圓參拾錢
通信費	七拾圓六拾七錢
船車馬賃	九百七拾貳圓參拾七錢
印刷費	壹千六百七拾圓五拾五錢
廣告費	八拾貳圓五拾參錢
筆墨費	七拾參圓五拾六錢
休泊費	八拾圓四拾八錢
飲食物費	七百四拾圓八錢
雜費	六百九拾六圓七拾九錢

である。

かくの如くして戰には決して他のどの候補者にも負けて居なかつた、演説會に於ける回數は勿論聽衆動員數四萬八千八百七十五人も他の候補に對し壓倒的勢力であり、ポスターに於ても金額に亘り決して他のどの候補にも負けて居なかつた。唯推薦狀に於ては他の候補が二回三回と發送したのに比べて一回丈であり、然も安價なハトロン封であつた事丈は見劣りがして居た。

官憲の壓迫や資本家地主の妨害、金の無い事等が敗戰の理由にならな

いでもないが、無産政黨の候補者である以上それは當然でありさうでなければならない事でもあり、それが敗戰の理由であるとしても之を取り除く事も出來ない相談である。そこで何故に得票に敗れたかと云ふならば、先民衆に政治教育が足りなかつたと云ふ事が最大の理由であるといはねばならぬ。

言論で戰ふと云ひ乍らも決して得票の上に言論の力は現れて來ない。演説會に非常な人氣のあつた處でも得票が多いわけでなく、演説會等一向もしない候補の得票が多かつたりするのである。既成政黨の人が地方の民衆の間に社會主義恐怖の風があるのを利用して無産政黨は危險なものである等と說いて功を奏したり、又既成政黨の候補者が極端な喜せを云ふのに乘せられたりするのも皆政治教育の足りない爲であると云ふ外ない。

然し今回の選擧を通して見るに「一度だまされて見よう」と云ふ氣分で投票する程に政治家を信用して居ないがそのもう一度を既成政黨の上に與へたものが選擧後の十日か十五日の成績からさへ再び駄目だなと云ひ出して居る樣に思はれる。

無産政黨の今後民衆から容れられる方法は唯今回當選した議員諸君が充分節操を守ることである。

吾々が敗戰者が眞に願ふことは之れである。

北海道血戰記

山本懸藏

同志諸君の萬歳に送られて、汽車は上野を立つた。三十日朝仙臺着。仙臺の同志は身を切る樣な寒さに——驛頭にあつた。我が黨より立候補なき地、仙臺の同志は、たんだか物たらぬ所がある樣であつた。

盛岡十時通過——同志の見送りを受けた。此の所雪既に數尺、いまさら乍ら、我れ尙北に行く任務の重きをしみじみと感じた。

青森の同志は萬歳を以て我れをむかへた。

午後五時半いよいよ北海道の地に。——十時函館につく。同志の出むかひに——一夜宿る。卅一日朝時四十分小樽に向ふ。早、この地は我れ等の戰場だ。同志の面々には戰闘の氣みなぎる。われ、又、全身只戰闘の血にもゆる。

(一九二八・一月卅一日)

汽車は北に走る。

午後六時卅二分、倶知安通過。同志は四五尺の雪の中を、三里餘の

頭を出張して、我等を倶知安驛に見送る。――同志の中には六十餘才の老農民、十二三才の少年もあり――唯一路戰地ふかきを訴る。

小樽八時四十一分着。――勞農黨幹部及び組合幹部代表者數十名プラットホームに我等をむかへた。先づ鈴木源重氏（ヒゲの源重さん）堺一雄氏（勞農黨小樽市議）等を初めとし、私はそれ等の人にまもられて、ホーム外に出た。――戰地だ――中心だ――北海道の一角に、此の雪の世界に、戰の風雲は捲き起された。

勞農黨支部旗及び無産者團體の旗を先頭に、「われ等の山縣來る」の丈餘のキレで作つた一人もちの横はたや、大小數十本の漫畫入りポスターは林立された。

一千餘の勞働者は、我等がホーム外に出るや、「山縣萬歲」をとなへて――しばらく止まず。取りしまりの、もう手のつけ樣なく、只そのまゝであつた。

萬歲の聲一たび止むや、組合鈴木氏、山縣歡迎の辭、――「我等北海道の勞働者は、山縣をむかへて死を以て戰ふのである。」とむすぶ。――再び萬歲

後、山本雪のつむ小高き處に立ち、勞働者、農民、一般無産階級のため、病をおし、死を以て戰ふことを宣し、戰地に乘り込むの辭にかへた。この間三十分。ついで山縣を先頭に、赤旗にてまもり、大デモンストレーションになつた。

赤旗の歌――小樽の鐵路を、しづかに行く――雪の都――時ならぬ行列――市民は街頭に――右折――左折――稻穗町に入る。行列はやんだ。本日夜の、解散の辭をのぶ。――堺一雄氏立つて、北海道勞働者の覺悟はよいか、と結び――再び山縣立つて同志を激勵した。――此の時十時すぎ。山縣は宿舍にいる。――血氣の士――勞働者の行列は、またあともどりした。組合本部に向ふのだと云ふ。

（二月一日朝）

先づ、一戰の準備は出來た。なんと云ふても御役所相手だ。なにやかやと、めんどうなこと許りで、めんくらつて了ふ。かんしようかある。だがひるまない。皆がよく働いて呉れる。事務所も適當な所が借り入れられた。

（二月三日）

北海道第一區は激戰だ。政友三、民政四、中立三、勞農一、我れ等の敵は十人だ。――苦戰――今日までの運動では、問題にならぬ程壓迫されてゐる。

我等は四日より、言論の火蓋を切つた。四日夜小樽で四ケ所、五日札幌で夜演三ケ所。勞働者は何處でも我等の言葉を理解する。どの演說會も滿員だ。

五日夜札幌中央寺でも聽衆多く、場内立錐の餘地なし。我れ、健康保險の問題に論をすゝめるや、官憲は中止、檢束を命じた――聽衆

は總立ちとなり「勞働者と思つてバカにするな。當選らかその考へなら、、ぞこと叫ぶ。──入口は警察によつてピタリと閉された。──「山懸をはなて！〳〵！」と云ふ。──憤懣つひに我を放つ。

六日は小樽市及び郡のかけもち。本日（七日）は瀧川及び空知方面だ。

雪の野、北海道の天地と、馬橇は、トロイカは走る。──勇を鼓して、雪の北海道に進んだが、一月二十日までねて居た病後のからだ──俺はからだが、可成り無理だ。歩行困難だ。馬橇が惜に身にこたえる。

だが、勞働者として生れ、勞働者として育つた我れは、病氣や寢床の上で死にたくない。──勞働者、農民、無產階級の要望の下に吹雪と氷の中で戰つて死ぬこそ、我れ等の本望である。──俺は、からだの續く限り戰ふ。

雪の戰は──だが、實に愉快だ。

（二月七日午前十一時）

八日、余市二箇所。小學校、劇場とも滿員。諸の聽衆で、そのまゝ殘つてもう一度聞かうと云ふものもあつたさうだ。

この日、北海道──日本海特有の大吹雪──一寸先きも見えない。俺は、無產階級運動の眞の味を味つた。俺は馬力をかけて話した。おれの言葉が、ヒシ〳〵と聽衆の中にシミ込んで行くのを、本當に見た。

た。

原始的な、漁師の──農民の──勞働者の──面を見て、こんな純朴な人々を、彼等がゴマカシ、オドシテ來たことを思ふ時、俺は、全身から力がこみ上げて來る。

同日、札幌四ヶ所

九日、札幌及び郡部、三ヶ所

十日、篠路。農村での演說會だ。此の地方始めての演說會であつたが、小作人で一杯。中には三四里もの遠くから辨當持ちでやつて來たものもあつたと云ふ。惡稅の撤廢と、耕作權の確立が、如何に農民の切實な要求であるかは、此處でも見られた。

十一日、岩内、小澤

十二日、國富、狩太

吹雪だ。大雪だ。汽車は止る。だが無產階級の要求は止らない。馬橇で、トロイカで、敵の本陣に進むのだ。

（二月十二日）

十二日、國富。こゝは小鑛山町だ。無產者階級のない所だが、資本家と國家との關係、國家の機構を、段々說明して行くと、聽衆は熱中して來た。とう〳〵中途で、勞農黨萬歲を叫び出し、おれは面喰つた。

十三日、小樽、三ヶ所

十四日、黒松内、[illegible]、

十五日、倶知安、千五百名。午后六時の開會が、四時で締切り。官憲は、恐れて、下駄箱の人數しか入れぬと云つたが、聽衆は「何を云つてるんだい。」とネジ込んで來た。

倶知安初まつての大集會だと云ふ。こゝでも、辨當もちで遠くから農民が押しよせた。氣の毒にも、五里先きから馬橇で一緒に分乘して來た三十人の一團は、時間が遲れて、とうとう入れなかつた。

農民——北海道の農民は、かうまで、しぼり盡され、おさへつけられてゐるのである。俺はからだのことなど云つてゐられない。戰ふのだ。

一農民と、市内有志とから、玉子二百づゝ貰つた。玉子で命をつないで、戰へ、と云ふのだ。

（二月十六日）

苦戰——壓迫——反對派の買收。

本日（十九日）札幌方面、小樽方面兩方にて演說會及び町民大會。

——勞働者大會を合せるなら、實に二十數回である。

おれは闘つた。——うれしく最後の日を迎へた。——今はからだ全體が痛いので、伸ばすことも、どうすることも出來ぬ。——だが、今夜の演說會が——最後だ。二十日の朝の運動はもう準備が出來た。

落選しても、負けたではない。——戰はこれからだ。

勞働者の貧困と、農民の窮乏と、無產階級の壓迫と、ある限り、我等の戰は永久に續く——戰はこれからだ。最後の苦戰を突破しやう。

（二月十九日）

南信血戰記

藤森成吉

1 如何にして起つたか

戰ひの記述に入るに先立ち、如何にして私が起つに至つたかを簡單に書きたい。何となれば、これは單に個人の立候補乃至進退の問題にとどまらず、文藝家と直接政治運動の問題に關係し、且つ此の程度の理解は現日本のすべての人々に持つて貰ひたい爲めだ。

一月廿八日、いよいよ立つに際して、私は一の聲明書を各方面へ送つた。此の宣言は一般には公にされなかつた。茲にそれを抜く。

「先日來、小生の立候補に對する態度が外面的に御了解に苦しむ點があつたらう事を憾り、昨二十七日遂に立つに至つた事情を一言述べて、竝及び小生の態度を明かにします。

昨年秋、初めて地方支部聯合から立候補の勸誘を蒙つて以來、小生は

一貫あくまでも辭退をつづけて來ました。その理由は、第一、氣質から自ら候補に立つ如きを甚しく嫌ふ爲め、第二、時間と身體の餘裕の無い爲め等です。更に詳しく云へば、小生は無産階級解放運動に於いて、藝術（乃至文藝）の分野に徹底せん事を欲したのです。現在のところ、未だ勞農黨はかかる解放運動の全分野を包含する迄には至つてゐません。從つて、小生は專ら文藝運動を通じて政治行動をおこなひ、又勞農黨との充分な聯絡接觸を持たん事を欲し、又やつて來ました。此の道こそ、現在の組織戰線に於ける最善の方法であり（文學運動を徹底すれば、乃至マルキシストとして徹底すれば、直接政治行動に行くべきだなどとは、小生は決して考へません、）聰明妥當な態度である事を確信します。勿論、もし餘力さへあれば、直接政治行動の多くを受け持つ事も何ぞ辭せん！が、現在小生の全力は文藝運動にすら充分ならず、著るしく身體をいためてゐるを奈何。

此の意味に於いて、小生は信念的に候補を拒否しつづけて來ました。親近者及び記者諸君から（起否を）問はれるたび、小生は正直に此の事を語り、且つ常に御ねがひするに、黨支部當面の運動の（見す見すの）妨害とならざらん爲めしばらく世間的に不明瞭にされん事を以てしました。これたまたま、小生が殆んど（立つべく）決意した如く傳へられた原因です。が、議會が解散されるや否や、すでにかくの如き外面的行動を保つ事の不可能なるを思ひ、ただちに黨本部支部、一二新聞社等へ診斷書を添へて、改めて明白な辭意を申し送りました。

ところが、すでに運動は非常な進展と見てゐ、（單に黨員諸君のみならず南信大衆黨その他諸團體及び個人の熱烈な御應援あるが爲め、）黨支部も本部も絕對に承知してくれません。そして保證金の問題も解決し、最早小生の意志如何に係らずどこまでも運動を進めるとされるに至つて、小生も決意し、文藝運動に對する充分な諒解のもとに遂に立候補を承諾しました。

すでに斯くして立つた以上は、身體の許す限りに於いて飽くまで此の政戰に闘ひ、黨の精神と地盤を信州に確立する覺悟です。以上、簡單に小生の心事及び態度を述べて、現在及び今後の外部的疑惑なからん事を期します。」

これ以上、ここに詳說する必要はない。

2 如何に戰つたか？

かくて私は斷然として起つた。男子起たずんば止む、起つ以上は徹底的にやるの決心だッた。（黨支部諸君は、身體が惡ければ演說なぞ一回もしなくてもいい、名前だけ出す事を承知してくれれば結構だ、とまで云つてくれた。然し勿論、どうして同志諸君だけ働かせてなぞゐられやう！）同時に、全然政治的鬪士として戰ふ決心だつた。

そして決心どほりやッた。「身體の許す限り」と云ひながら、戰のあひだは殆んどそんな事は忘れた。同志諸君と共に、私は全力を擧げた。私の仕事は主として演說だつた。その演說を、四日夜、上諏訪の第一回を皮切りに、十九日夜上諏訪最終の演說會まで、五十回近くやつた。かかる演說の洪水は私に取つては初めての経驗だ。無論、回數から云へばこれは決して多いとは云へまい。然も此の回數は、交通の不便その他の事情によつてあの土地で可能な最大限度だつたのだ。時にはゴム長靴で何里でも雪の山道を行く。そして何晩も、十二時頃まで

夕飯も食はずに戻るのだ。丁度今年は、信州の極寒期はやや晩く運動期中に來た。何十年來と云ふ大雪も降つた。途中倒れるかと氣づかひながら、又同志達に氣づかはれながら、遂に最後まで元氣で私は闘つた。聲量すら失はなかつた。その主な原因は諸君の熱心さのお蔭だ。

第二に、私は完全に政治家として戰つた。決して半ば文藝家の、半ば政治家のそれではなかつた。二十日間ばかり（演説の前後を通じて）、私はブン藝のブの字も口にしなかつた。ただ政治經濟の問題ばかりを論じた。

私はまづ、既成政黨の從來一貫した欺瞞的行動及び政策を曝露し、排撃した。最も標的としたものは、政友會にあつては地租委讓案と自作農創定案の二大政策、民政黨にあつては義務教育費國庫支辨案だ。それら、所謂大政黨の根本的政策が、如何に民衆の爲めを標榜しつつ、實は相變らず民衆に對する欺瞞と愚弄に滿ちたものであるかを解剖するのは、小兒の腕をねぢるより容易い。何となれば、彼等の主張するところは、あまりにも子供だましに等しいからだ。

敵黨の欺瞞政策の面皮を引つ剝ぐにとどまらず、更に私は、積極的にわが黨（勞働農民黨）の政策を説明し主張した。選擧法の徹底的改正、税制の根本的改革、言論集會出版結社の自由等々の一般的政策のみならず、地方的問題をも取りあげた。たとへば養蠶家救濟問題の如き（此の分野に於いても、同時に政府の低資融通の如き奸譎策を遠慮なく曝露した。）

恐らくは、今まで單に（或は主として）文藝家としてのみ私を知つてゐた地方の或る人々は、以上のやうな私の言論と態度に、一驚を喫したかも知れない。然もこれこそ「民衆政治」の爲めに、又眞の文藝家の名譽の爲めに、私達が斷乎として取るべき態度だと信じる。

3　如何に實質的に壓倒したか

戰ひの結果はどうだつたか？　敢て云ふ、實質的には、私及びわが黨の絶對勝利だつたと。——本質的に見る時、すでに既成政黨が眞に地方大衆に訴える何物を持つてゐやう？　政策か？　自信か？……

絶無！　如何に不完全な普選と雖も、彼等が民衆に示すに足るものは最早欺瞞以外の何物でもあり得ない。わが黨は、かかる欺瞞と金權と官權以外のあらゆる物を持つ。就中熱意と論士の壓倒的多數（然かもこれ、既成政黨のそれらと正反對の、全くの無報酬奉仕に支辨の人々だ）に於いて、私達はすばらしい勝利を贏ち得た。

事實に見よ。私達の演説會は、どこの町に於いても村に於いても、他黨とは比較にならない大聽衆を集め得た。無數の官憲の干渉的な「中止！」にも係はらず、幾つかの演説會場では會後「勞農黨萬歲！」延いて私の「萬歲！」までが叫ばれた。散會が宣せられても、多くの聽衆は容易に去らうとしなかつた。就中最終の上諏訪の演説會を擧げやう。その晩、小川平吉派では、町の唯一の劇場と、もとの郡役所樓上との二大會場を借り切つた。十日以前からの此の借り占めに會つ

て、わが黨では辛ふじて一軒の活動常設館を會場とした。わが黨從來の演説會の盛況に見て、到底その一小館では聽衆を收容し切れまいと慮つて、外にもう一つの小公會堂を交渉したが、管理者たる一區長はどこかへ姿を匿して遂に借りられなかつた。さてその結果はどうか？　小川派の第一會場（もと郡役所樓上）では、聽衆わづか三十人ばかりを集め得たに過ぎない。で、わづか開會二三十分で閉ぢて、その聽衆を全部第二會場の劇場へ送つた。然もその客を加へて、第二會場は遂に百五六十人に終つた。あまりに廣い劇場の中のあまりに尠い客！　――ガランとして、聽き手は氣恥かしくて困つたと云はれた。

これに對して、わが黨の會場には八百の聽衆が文字どほり溢れた。その小屋の經營者たる活動寫眞事務長は、「まだ小屋を毀してくれるな」と悲鳴を擧げる騷ぎだつた。四方の窓や扉を開け放して、そとにも黑い頭が鈴成りになつた。それでも聽けずに歸つたものが幾らあるか知れない。演説は、その聽衆の喚聲のなかに進行した、演壇に立つや否や中止に次ぐ中止。然も中止されても、あとからあとから辯士が出た。最後に私が立つて演説を終るや、暴風のやうな拍手と喚聲が湧き起つた。それがいつまでもやまない爲め、黨員に突き飛ばされて私は二度までも演壇へ起つて御辭儀した。演説會のアンコールは、私に取つて空前の經驗だつた。たとへ私の生れた町と云ふ條件があるにしろ、此の白熱度は何を語るか？

言論戰に次いでわが黨の勝利を示すものは、青壯年團の支持應援だ。即ち前任兩三區（諏訪、上條、下諏訪二町）の三區は、殆んどすべて私及びわが黨を支持してくれた、あたかも選擧の最中、三區聯合青年會は上諏訪に研究會をひらき、緊急動議によつて途中臨時總會に變更して、廢娼を支持する一致の決議をおこなつた。改めてその決議文を作成する爲め暫時休憩した時、既成政黨に籠絡された數人の青年會員は、慌てて總會變更に異議を唱へ、ついに會場を混亂に陷れて、辛ふじて決議文を讀む事が出來た。

聯合青年會は、決議に次いで各候補者の立會演説會を開催した。すべての候補に出席を求めた。無論わが黨は喜んで承知した。ところが、その間際になつて、警察は内務省？の命令に依る旨を以て中止を要求して來た。理由は、立會演説會の如きは徒らに喧嘩を惹起するの恐れあるを以て云々だ。凡そ普選戰の最大武器は、言論乃至文章にある事は云ふまでもない。又かくの如き（特に無産黨に取つて）公明な武器が他にあらうか。就中立會演説の如き、その選擧民に對する利便親切の點から云つて、青年會等の催し物としてはむしろ當局が双手を擧げて獎勵すべきものではないか？　然も名を、理由にもならない「喧嘩」に借りて禁止しやうとするに至つては、當局の恐るるところが何處にあるかはあまりにも明白だ。

聯合青年會は、敢然として此の禁止通告を蹴飛ばした。そして豫定どほり、三部八ケ所に於いて三日に亙る立會演説をひらいた。八ケ所にしたのは會場の都合の爲めだ。即ち、あまり聽衆が多い爲め、諏訪

では上諏訪と茅野の二會場へ第二會場（上諏訪）を臨時增設し、伊那町でも臨時第二會場、下伊那の飯田町に至つては第三會場まで作つたのだ。然も、それでも全部の群集を收容し切れなかつたほどの盛況だつた。

さらば、それら民衆の要求に各候補者が應じたか？　前述のやうに青年會は全七人に依賴した。が、全會場へ出席した者は、僅に私と戶田由美氏（民政黨）だけだつた。小川平吉氏の如きは上諏訪の第一會場だけ、大金持伊原五郎兵衞、山田繁太郎（共に政友）兩氏の如きは、ただの一回も顏を出さずに終つた。然も小川伊原兩氏共當選、山田氏の如きは一萬一千の投票を掻き集めてゐる。此の缺席によつて、あれほど卑怯、無見識、乃至横着の評判を贏ち得た人々が。――これ所謂普選の痛切な暴露に非ずして何ぞ？

次に壯年團の活動に移らう。壯年團とは、青年會を出たところの二十五歲以上の壯年によつて作られてゐるところの團體だ。それは上諏訪その他各町村別に存在し、更に諏訪壯年團の名のもとに大同團結をしてゐる。それがいづれの政黨、いづれの候補者を支持するかは、當時衆人の注目點だつた。團員諸君が概ね選擧權を持つてゐるだけ、それほど此の團體の行動は重要視されたのだ。ところが、彼等は揃つて私支持の決議をしてくれた。まづ上諏訪壯年團が。つづいて諏訪壯年團が。

然も、彼等の活動は決議にとどまらなかつた。引きつづいて新聞廣告に、推薦ビラに、又演說會に、あらゆる應援運動をしてくれた。然し、ここにも又既成政黨の若干の手先きが入り込んでゐた。その少數無恥の連中の裏切り的行爲（決議に反する）に對しては、壯年團幹部諸君は除名決議までもしてくれた。

青壯年團の應援に次いで擧げたいのは新聞の應援だ。地方新聞紙及び東京各新聞の通信記者諸君が、一部不明瞭な機關紙を除き、すべて非常な好意を示してくれた。中央の新聞紙に於いて、就中東京朝日の示された好意がどんなに大きな力を持つたかは、改めて云ふを要しない。

第四には、すばらしい一般的應援だ。新しく組織された擁護後援會を通じて、おどろくべき應援隊や寄附が現れた。單に應援辯士諸氏の名前を擧げただけでも、かかる盛んな場所が他に多くあつたであらうか？　福田博士、大塚金之助氏、那須博士、森戶辰男氏、三木淸氏、中村彌三次氏、川崎なつ子氏、吉江喬松氏、平林初之輔氏、木村毅氏、高田保氏その他雲の如き人々が第三區へ集中してくれた。末弘博士、吉野博士、三宅博士、北澤新次郎氏達は、わざわざ長文のメッセエジを送られた。所謂無名の應援は全國から來た。更に事務所（就中上諏訪のそれ）へは、少年隊や女子隊までも手傳ひに來た。多い日は、一日七八十人もの人で身動きも出來ないばかりだつた。

これら應援隊に加へて、黨員及び運動員諸君の活動ぶりは物凄い位だつた。その懸命、その敏活、――一度諏訪の事務所を訪れた者で、

彼等の組織的運動に參加しない者は、なかつた。事務所の薄い夜具にくるまつて泊る人々は、毎晩早くとも寢るのは午前二時、起きるのは七時だつた。一日一郡だけでも何隊かの遊說隊が、大雪のなかをどんな山の中までも出かけた。信州に於ける唯一の無產候補として、全信州の戰士(就中勞農黨闘士)の力が第三區に集中されたのだ。その壯觀は容易に想見されるであらう。

更にここに付け加へたいのは、前衞藝術家同盟の活躍ぶりだ。同盟員たる私の爲めに、ほとんど全同盟の力が動員された。即ち後援會を通して、演說に通信に聯絡に人夫的奔勞に、どんな仕事をもすぐ引き受け、すぐ果した。これら同志達はみんな一個の技術家、即ち文學者、美術家、又役者の人々だ。その人達の、貧窮のなかにありながら無報酬で骨身を惜しまないところの、すべてを自分の事としておこなふところの組織と熱意とには、觸れる人々悉くが目を瞠つた。すでに恐ろしい團體が生れてゐる事を、恐ろしい時代が來てゐる事を、此の同志諸君は身を以て實證してくれたのだ。

4 何故敗れたか?

以上數項の列擧によつて、如何に私及びわが黨に對してすばらしい支持と應援が存し、從つて戰闘に於ける實質的勝利があつたかを、讀者は充分知られ、或は想像されたであらう。然も此の助力、此の奮闘にも係はらず、なぜ票數のうへで私及びわが黨が慘敗したか? これは實に興味ある一問題だ。而して、この原因を究明する事は、將來の闘爭の爲めに、全無產階級解放運動の爲めに、是非とも爲さねばならない重要事だ。然もかかる探求に際しては、あくまで冷靜な、あくまで正直な、即ちあくまで科學的な又充分な批判と解剖を必要とする。此の目的の爲めに、此の貴い經驗をあくまでも生かし得る爲めに、以下(枚數の爲め簡略にしか書けなくとも)出來得る限りの客觀的科學的檢討を試みるであらう。

第一に私達の戰ひを苦戰たらしめ、延いて敗因たらしめたものは、現行制限選擧法(敢て斯く呼ぶ)の規定の爲めだ。就中年齡の制限だ。これに對するわが黨の要求——即ち、滿十八歲以上の男女にすべて選擧權を與へよ!——を暫く措き、假りに二十歲以上の青年男女にさへも權利が與へられてゐたら、わが黨の——從つて私の——勝利は絕對確實だつたらう。これが負け惜しみでも誇張でもない事は、すでに前段の青年會の活動について知られる讀者の、容易に首肯されるところであらう。これら清新潑溂たる、最も拘束尠く、從つて最も妥協なき、最も進步的最も勇敢なる若き人々の總意が殘らず反映されさへしたら、既成政黨の如きはわが敵ではない。(その證據にはわが黨員を見る。殊に地方に於いて、彼等の大部分は選擧權のない青年ばかりだ。)ここにこそ、然しながら既成政黨及び特權階級の功妙極まる狡猾が潛んでゐるのだ。彼等の恐怖を實現せしむる爲めに、まづ選擧法を改正せよ! これが私の今度最も痛感した一つだ。

第二の原因は信州の特殊事情にあつた。

由來、文化の進んだ國として信州は一般に喧傳してゐる。然も、實際高級な知識乃至知識慾を持つてゐる者は、全體から云へば極少數の知識階級に過ぎない。それも青年が多數を占めてゐるのだ。これに加ふる所も大きな弱味は、あそこに一の有力な組合も存しない事だ。わづか二三十人位の組合員を持つ農民組合が二つか三つ、又何の力もない勞働組合が二三あるに過ぎない。農民組合が出來てゐないについては事情がある。卽ち、隣國の甲州又は越後と異つて、あそこには所謂大地主と稱せられるべき者が殆んどない。從つて自作農の數が多く、それらは又各戸によつて一種の企業的生活をさへ營んでゐるのだ。

かかる經濟事情、又生活狀態から生ずるところの基調的意識は、必然小ブルジョアのそれだ。それは、全く私達が豫想しなかつた程度にまで固定してゐる。私が初めて上伊那で演說した時、早速幹部諸君から注意を受けた。曰く、私が「諸君貧乏な民衆……」と云ふのはいけない、「貧乏な」と云ひたければ、「私達貧乏な民衆」と云つてくれ、でなければ、聽衆が侮辱されたやうな感じで逆効果を起すから、と云ふのだ。何たるおどろくべき注意よ！　私はむしろ敬意のつもりで呼んでゐたのに。――更に、「無產階級」と云へば他人のやうに聞き流される事を恐れて、特に民衆と云ふ言葉さへ用意してゐたのに。無論、その後私は此の注意を忠實に守つた！

かくの如き意識！　かくの如き聽衆！　それが如何に私達に取つて苦手な收獲物であるかは多言を要しまい。かかる特殊な意識は、一方如何に地方的特殊封建意識を殘存し、個人的好尚が地方的特質に臨いかも、亦喋々を要しないであらう。

ここに於いて次に（第三に）來るものは買收だ。此の生活と傳習に乘じて、否、時には關りなくも農民や小商人の貧困にすらも乘じて、買收の魔手が縱橫に手をひろげたのだ。現行普選法に於いては、買收を嚴禁してある。然も他のあらゆる違反はかなり規定とほり（むしろ規定を超えてまで）罰しつつ、此の肝腎な一點（買收）に關しては、皮肉にも（同時に當然に）最もルウズな監視が置かれたのだ。假りに擧げやうとしたところで、既成政黨及びその運動員の巧妙な熟練は、安安とその網の目を潜つて餘りあるのだ。

今まで、選擧ごとに買收の聲を聞きながら、然も實際にその餌に當るまでは、かくも此の魔手が（殊に地方選擧區にあつて）偉大な勢力を振はうとは夢想もしなかつた。何と云ふ恐るべき、又彼らの買收の聲ぞ！　わづか、、、、、、、、、、、の金によつて、安々と選擧民は買收されるのだ。なほ山の中の農民達は、一日又は半日の仕事を休んで投票に行く爲めには手間賃を貰ふのが當然だ、と考へてゐるのだ。その貧乏と無知よ！　然も此の、自らの手で自らの首を締めるやうな無知こそ、支配階級及び既成政黨が長年月を費して教育し來つたところのものでなくて何ぞ！　、、、、、、、、、は、此の點に於いても決二重に私達を敗北させずには措かないのだ。

既成政黨の買收は、彼の彼等の見くびつてゐた私への一般的信望が白熱化し、おそるべき勢力が醸し出された事を知つた投票間際に於いて、その恐怖と狼狽の最後の三日間に於いて、實に選擧民一人に對する、、、、、の價を呼んだとまで云はれる。おどろくべき「潜航艇戰」乃至「實彈戰」の結果、政友會の其候補者は、、、圓近くの選擧費用を使つたと噂される。それに對して私の費用は？まだハツキリ計算を見てはゐないが、恐らく三四千圓に過ぎないであらう。何と云ふ對照ぞ！

買收については、まだ書きたい事があるが書き切れない。次に（第四に）官權の壓迫を擧げやう。前にも少し觸れたやうな、わが辯護士の「注意」や「中止」又あらゆる機會を覘つての干渉と壓迫については、もう書く紙數がない。で、遺憾ながら割愛するとして、以上に於いてだけでも、すでに聡明な讀者は私達の敗因がどこにあつたかを充分知られたであらう。これを約言すれば（第一）民衆の無自覺と（第二）官憲の壓迫だ。

5　何故本質的成功と呼ぶ

然も此の苦戰と不自由のなかにあつて戰ひ取り得たる七千票よ！必勝を期した味方の人々は、此の結果に對して殆んど顏色を失つた。然し、既成政黨方面では、同じ得票が驚嘆の的となつた。そして、「こんな調子では、今後わが黨の政策や方針を樹てなほす必要がある」とまで云つたと傳へられてゐる。

ただ、此の得票が、信州人達の眼識をそのまま代へば「まるで透きとほるやうな、玉のやうな七千票だ」と云ふ一點に關しては、敵も味方も一人の異論もない。單に透きとほるばかりか、その中には火の如く燃える多くの投票のある事を、私はいろいろの事實によつて確信する者だ。前述の特殊狀勢によつて日常闘爭の困難な、從つて殆んど何等黨の根をおろし得なかつた信州の土地に、今度こそ（此の機會を充分掴んだ事によつて）確實な根が張られた。黨の地盤は、一ケ月前の私の聲明書とほり「確立」されたのだ。今や一大轉換期がそこの民衆のあひだに、又黨の運動に劃された。黨員同志諸君によつて、將來の進展はまさに期して待つべきものがあるであらう。これをしも血戰、又本質的成功と呼ばずして何ぞ！　1929・3

附記　後援會を組織して徹底的に助力された岩波茂雄、藤森良藏、今井登志喜氏達に、茲に感謝する。

既成政黨の變り種

野村胡堂

鶴見祐輔（中立）

◇鶴見祐輔は永久に若い——岳父後藤新平氏が永久に若い樣に——。併し政治家は、妙にヒネこびて、物欲ばかり旺んになるより、何時までも若くて、空想的で、感激的であつた方がいいのかも知れない。

◇若いといふ事は、やがて稚氣があると言ふ意味にも通用する。不惑を越えた彼の演說が、相變らず美辭麗句の驚嘆すべき行列であるのもその爲なら、「南洋游記」「三都物語」を經て、近頃やりはじめた大衆文藝物に至るまで、彼の書くものの總てが、時の流れを超越せる、文章道の萬年青年であるのも亦その爲である。

◇その若々しさが又、不思議に面白いから妙ではないか。演說は聽衆を感激させ、文章は讀者を魅了すれば、それで充分ではないかと、鶴見宗の若い人達は言ふだらう、大に可し。誰もそれだから鶴見が悪いとも、怪しからんとも言つては居ない。反對に、岳父後藤新平氏がありし如く、曾てルーズベルトや ウヰルソンがありし如く、彼の若さ——換言すれば彼の稚氣が　反つて彼を大にし、彼の周圍に、青年子女の輪を無限に密にしつつある事も無條件に承認しやうではないか。

◇曾て私が鶴見は私の同窓の先輩だ、と言つたのを、某氏は聞きとがめて、「へエ、鶴見さんはそんな年を取つてるんですか」と言つた事がある。恐らく鶴見を三十才臺の青年と見、私を五十才以上の老人とでも思つたものであらう。腹は立たないが、傍に鶴見が居たら、オゴラせずにはすませないところであつた。事程左樣に鶴見は若い、氣分も、顏も、樣子も。

◇鶴見の同窓で、共に學生時代に[illegible]で鳴らしたものに、青木得三と前田多門とがある、鶴見よりも派手な青木が、稅務官で地味に納まり、鶴見よりも堅實らしい前田多門は、市の助役から浪人になつて、近頃は恐ろしくノウノウして居る。代議士といふのは、大した出世かどうかは知らないが、兎に角鶴見が一足お先きに失敬して、派手な政

治の樞軸に立つたのは見物だ。恐らく、生まれながらの將來に於て、何んか、アッと言はせる事を仕出かさずには濟まない。あの辯舌と、頭腦と、機才とを、發言權さへ自由でない、中立の洞ケ峠に置くのは惜しい。

◇彼の學生時代、時の一高校長、新渡戸稻造博士を中心に、學生の修養團體があつた。その音頭を取つたのが鶴見や前田で、その緣故で新渡戸博士に愛せられ、後藤新平氏に接近して、遂にその愛孃を贏ち獲ることになつたのである。新渡戸博士が一高校長になつた爲に、後藤子の身邊、幾多の秀才を加へた事を思ふと、物の機緣ほどいしくも不思議なものはない。

◇それから鐵道省へ、國際聯盟事務局へ、國際的遊說の旅へ、彼の經歴は事新しくいふまでも無いだらう。ニューヨーク滯在中、故國の政情危しと聞いて、飛行機で桑港へ飛ばす筈だつたが、計畫だけで果さず。その乘る筈であつた飛行機が、ロッキー山通過の際墜落して、危く命拾ひをしたなどは、華やかなことの好きな鶴見には、至極いい教訓であつたのかも知れない。彼もやがて四十四だ相だ。もう錆も澁も浮いて、ちつとは地味に振舞つてもいい年頃だ。

◇鶴見と後藤の類似點は、二三にして止らない。その誇大的で、派手で、多分の稚氣を有するところ、知らない者は本當の親子と言つても信ずるだらう。違つて居る點を言へば、鶴見の方はズウ〳〵辯でなく、年が若い丈けに新知識をフンだんに持つて居るが、その代り、親爺さん程、清濁併せ飲むと言つた太つ腹なところが無い。

◇少し贔屓目ではあるだらうが、何んと言つても彼は、普選によつて送り出された、新時代の政治家の典型的な一人だ。彼の演說會が青年と婦人で一パイだつたといふのも無理は無い。彼の周圍には、舊式政治家の乾兒の代りに、大衆の若い崇拜者が一杯集つて居る。彼を輕視した舊式政治家も、今度といふ今度は、彼の稚氣と機智の前に、畏敬の眼を見張らずには居られなかつたらう。言ひ落した事が一つ、世間ではあまり知らないやうだが、鶴見はなか〳〵よく劍術を使へる筈だ、風流才子並に扱ふと當が違ふ。

中島彌團次（民政）

◇强い武者修業見たいな名前の男が、お膝元の第二區から我も人も許した鳩山一郎を拔いて、最高點で飛出したのには、驚かない人が少なかつたらう。鶴見の中立、田子の政友に對して、民政の新顏最高點を物色すると、この邊が一番興味の深いところであらう。

◇中島彌團次は戸籍上の名前で、世間は大概彌團次だけで通つて居る。尤も故鄕の土佐へ行くと、ヤダンだけで埒があく相だ、仲間ではない、特別な人の親しみの名前だ、ロダン、セダン、九段、みんな親しみの名前だ。怒つてはいけない、政治家のニック・ネームは出世の象徵だ、親分の濱口總裁は、ライオンとさへ言はれるではないか。

◇中島の濱口崇拜は、隨分若い時からであつたらしい。大學へ入つた頃、隨從に往訪つたせみもあつたらしいが、何でもいいから傍いてく

れと、濱口邸の玄關へ坐りこんだものだ相な、その頃、濱口は、まだ專賣局長の微少な時代で、おまけに名うての貧乏と來て居る。書生などを置ける身分でないと再三斷つたが、イッカな挺でも動かず、そのまゝズルリペッタリ、水も汲めば雜巾がけもする、お取次もやれば、子供の守も引受ける、マメで謙遜だから、そのまゝ置いて、大學を出ると專賣局で使ひ、とうとう濱口の秘書までこぎ上げさしてしまつた。

◇專賣局に居る頃、淸浦内閣やら、原内閣やらの攻撃演說をやつて、大分問題になりかけたが、濱口の息がかゝつて居たせゐか首にもならず、その後大藏大臣秘書となり、濱口と共に野に下つて、今では總裁秘書といふ仕事をして居る。

◇專賣局時代の巡業講演で叩き上げた相で、演說は非常と形容詞のつく程度にウマい、張のある土佐辯で、濱口そつくりといふ味がある。尤も中島の濱口崇拜は、迷信に近い方で、演說ばかりではなく、近頃は歩き方まで眞似て居る相だ。追々聲も顏も似て來るだらうと、これは新櫻田町雀の百囀り、そうなつては聊か助からない。

◇宴會の席で、定九郎、與一兵衞、お輕、勘平の四人一役を演じて、アッと言はしたといふ說もあるが、それは信じられない。ボーッとして居るくせに、機智のあることは事實で、土佐人だけに妙に調子のいいところがある。夫人が美しくて賢こいのも有名、選擧區が選擧區だから、故中原博士夫人の後繼者になるだらうと、これも例の百囀りの口だ、どうも新櫻田町はうるさい。

田子一民（政友）

◇田子一民は生ける立志傳だ。彼は天涯無緣の孤兒として育ち、盛岡の活版屋、九皐堂の文選小僧をやり乍ら、中學の課程を卒へ、縣の貸費生として法科大學を卒業した。これは田子自身が得意に辯ずる自傳の一節だから、發表しても決して田子を辱しめるものではない。

◇孤兒や苦學生に秀才は乏しいものだ。生活と學業と二つの事柄に仕へることは一つの石で二羽の雀を捕るよりも困難だからである。ところが、不思議にも、田子一民は比ひ稀なる秀才であつた。小學校から大學まで、彼は常に模範學生であり、品行方正、學術優等であつた。

◇明治三十四年の春、盛岡中學に未曾有の大ストライキがあつた。當時學校派の頭目なる上級生の田子一民と、ストライキ派の副將なる下級生の私と、貸席杜陵館の大廣間で、一騎討の大論戰をやつた事がある。どちらが勝つたか忘れたが、更に下級生の石川啄木などが、隣の室で羅漢廻しかなんかやり乍ら、猛烈に彌次者に聲援して居た事だけは記憶して居る。當時亂暴で横着で、先生困らせを能事として居た筆者などに比較して、田子一民の、健實で、正統派的で、中庸を外れない好青年振りが思ひ出されて微笑まされるではないか。

◇それから警部さん部長さんを經て、社會局に入り、一寸洋行としやれて後、知事まで經上つたが、四年前の總選擧に盛岡で高橋是清老と爭つて落ち、爾來民間で羽翼を整へながら、地盤の地固めをしいし

い、今日を待つたのは人の知るところだ。本黨から政友會へ轉じた爲に、多少不快に思つた人があつたかも知れないが、盛岡に地盤を有して居る田子にしては、それも亦やむを得ないと同情者は言ふ。

◆彼は若い時分には、秀才々々した神經質な男であつたが、近頃四十肥りで脂が乘り、從つて人間にも寛厚の肉が付いたやうだ。文章は天品で、中學時代から相當筋の通つたものが書け、洋行土産の著書などには可なり見るべきものがある筈だ。辯舌もお國柄に似ず非常に立つ方、議會の一花形たるには充分過ぎる程の力を持つて居る。若い時分には好んで慷慨淋漓たる――幾分氣障な――演說をやつたが、地方牧民の經驗は、その鋭鋒を軟らげて、情理を盡す立派な說得者にしたらしい。

◆前半生あまりに苦勞が過ぎたためか、田子の性格には、賢こ過ぎ、如才が無さ過ぎる所があつて、政治家としての線の太さを欠きはしないかと危まれる。彼が見かけによらず隱れたる敵を持つて居るのもその爲か。好漢モウ少しボーッとする修業を積めば、參與官、次官と、出世の階子段が眼の前にチラ〱するだらう。

久原房之助（政友）

◆サーベルを捨てた田中首相が、久原房之助に算盤を捨てさして、同じ穴の政界に迎へた、たゞそれだけの事だ。が、好況時代に、日本一の大成金であつた人だけに、世間では物事をさう單純には考へない。事實また單純に考へさせないやうな段取りにもなつて居る。

◆暫らく事實に就いて見やう、久原が從來投資して居た事業と手を切り、政友會に入黨して、代議士に打つて出るといふ前後、久原鑛業の株が五圓方下つた。百五十萬株が五圓づゝ下ると、當つて見るまでもなく、〆て四百五十萬圓也。これが一代議士として、政友會へ入黨したための、お賽錢と思ふと甚だ小さくない。

◆往年若尾璋八が、代議士を止して專心東電の仕事をするといつたばかりに、忽ち二三圓東電株が上つた事がある、話は余事に亙るが、それとこれとは正反對で面白い。

◆これだけの犧牲を拂つて、取つて六十一歲の久原房之助が、政治の一年生で御座いますと、議席に起つたり坐つたりして、滿足して居られるものかどうか、積つて見ても解るだらう、單純に考へられないと言つたのはそこの事だ。

◆昨年久原が財界視察といふ名で歐洲へ出かけた時、世間では既に大臣としての箔を付ける爲だと言ひ傳へた。歸つて來ると拓植大臣になるだらうとも噂されたが、本人に聞くと「拓植大臣ではネ――」と苦い顏をしたとかいふので、扨は外務大臣、と噂は段々大きくなつて行つた。

◆田中首相は、久原房之助の爲にどんな座を作つてやるか、それは暫らく成行を拜見するとして、ここでは、ほんの少しばかり、彼の過去と人柄について話さうと思ふ。

◆久原が藤田組で育つて、小坂鑛山を仕上げ、日立鑛山を手に入れて歐洲戰爭當時、二億――と稱する大成金になつた經路は人も知る通り

だ。それだけになるには、元より境遇もよかつたらう、幸運が續け樣にいい目を見せてくれたせゐもあるだらう。が併し、單にそれだけではない、彼の健實な努力と、機を見るの明と、英雄的な氣魄が無かつたら、たとへ一時にもしろ、氣の好い運の神樣も、久原を伊達にも日本一とは言はせなかつたであらう。

◇けれども、久原のエラさは、寧ろその悲境時代になつてから、眞骨頂を發揮された。日本一の大成金も、すつかり沒落して、一時は危いとまで言はれたが、久原はよくそれに堪へて、將棊倒しの成金の中に、毅然として不拔の土台を据えてしまつたのは敬服すべきであつた。言ふまでもなく、久原の命は銅で、戰後それが滅茶〳〵にいけなくなつた時、久原は「銅は十年目に一度波瀾がある」と稱し、絕大な自信を眞つ向に、大正九年から、十三年まで無配當を續けて、見事この血の出るやうな苦境を切り拔けてしまつたのである。

◇久原には幾多の美點がある、眞面目で、謙遜で、大膽で、と久原家の人は言ふ。しかし、それにも優して、久原を價値づける一つの特長は、多くの「よき友人」を持つて居るといふ事である。そのボン・ナミの一人に、田中義一首相があることは申すまでもない。

◇よき友を有するのは、彼が情誼に厚いためで、政友會に黨籍を有しながら、民政黨又は民政黨系にも、澤山の交友を持つて居るのはその一例である。彼の活動力は又非常に旺盛なもので、時間を無駄にしない爲に、便所の中にも電話を引いて居るといふ噂がある。本當か嘘かは知らないが、この話を聞いて私は、電氣が臭氣を傳へない事が、何んと幸せな物理的特性であらう。と、つく〴〵考へなければならなかつた。

田昌（民政）

◇財務官で外國に居る時分、よく支那人と間違へられた相だ。名前が支那人臭い上、風采も何んとなく日本人離れがして居る——外國でなくたつて、確に支那人と間違へないとは誰が保證する——などと口の惡いのが言ふ。

◇あれで、田健次郎男の甥で、間違ひもなく、最も純粹なる大和民族だ。尤も叔父さんの七光りでエラくなつたと思はれるのが嫌なためか、田健治郎の甥だと言はれるのを、ヒドく嫌がるさうだ。叔父の田は、何方かと言へば政友會に同情のある人で、甥の田昌はチヤキ〳〵の民政黨員、オン大濱口の股肱を以て任じて居ただけに、田男に甥で御座いと喧傳されては困るとの意味もあるだらう。

◇今度の總選擧ほど、大藏畑の人を多く出した事は無い。田はその內でも錚々で、年も若く、頭もよく、海外事情、特に財政に通じ、研究心も旺盛だから、將來は民政黨內閣の大藏大臣を以て擬せられぬ事も無いとは言へまい。

◇大學を出た時は、銀時計にあり付けなかつた相で、當時そんな事のやかましい大藏省では、さぞ肩身の狹い思ひをした事であらう。尤もそれが發奮の動機で、間もなく課長に拔かれ、各省の豫算にナタを

顧び過ぎて、監獄官で外國に逐ひやられたなどといふ、愉快な經歴を持つて居る。アメリカの財務官から、本省の主計局長に抜擢された時は、前例の無い出世とされたが、危まれ乍らも案外よく勤めて、加藤内閣の時、濱口藏相の次官に抜かれ、爾來早速、片岡、三代の藏相に歴任し、若槻内閣に殉じて、今度議會に打つて出たのである。

◇民政黨へ入つたのは、濱口の知遇に感じた爲であらう。片岡の女房役では、大骨を折らせられたが、とうとうあの大破綻で、選擧の時も、政友會あたりから手痛く攻撃されたものだ。人間は見かけによらぬ確り者で、戰鬪力もなかなか旺盛、江間式氣合術の道士で、白双渡りがウマいなどは、あまり氣味のいい隠し藝ではない。

池田敬八（民政）

◇官報に廣告を取つて「官報の民衆化」を遂げた人だ。印刷局の從業員の裸體檢査を禁じて、從業員から神様のやうに崇敬された人だ。それで劍道は二段の名人、親分肌で、行屆いて、大手町では馬鹿に評判のよかつた人。これは新議員中の一異彩でなくてはならぬ。

◇官吏から立候補は珍らしい事でないが、現職の官吏が、民政黨に走つたのは、鈴木内閣も驚いたらうが天下も亦大に驚いた。その原因は濱口總裁の人格に惚れ込んだ爲だとも言ひ、後藤の鳩山君あたりが、大臣な顏で威をしやくるのが癪にさわつた爲だとも言ひ、江木翼などと好かつた爲だとも言ひ、白い眼で政友會から見られた爲だともいふ、恐らく、その全部だらう。

◇お國の三重縣から立つて、宗教がよかつたせゐもあらうが、憲政の神様の尾崎咢堂を抜いて最高點は鮮かであつた。その爲にひどい目に逢つたのは濱田國松で、政友會に取つては、全く思はざる伏兵であつたとも言へる。

◇この神刀無念流の達人にして、名吏として鳴らした池田敬八を迎へたことは、民政黨の爲にはたしかに一異彩を加へたものである。華やかさは足りなくとも、堅實さが無類だ、數多い變り種の中にも、この邊が間違ひもなく、強大なドレッドノートとしての將來を持つものであらう。

藤沼庄平（政友）

◇大本教退治で有名になつた人だ。京都府の警部長時代、變裝して綾部に入り込み、鎮魂歸神の秘密を探つたなどは、少し探偵小説じみて愛嬌がある。

◇その後、清浦内閣時代に、茨城縣知事から警保局長に抜擢されたが、これは非常な出世で、今でも吏人の噂に殘つてをる位。けれども時利あらず、總選擧で散々のミソをつけて、藤沼無能とまで言はれたなどは後がよくない。思ふにこれは、藤沼が無能な爲ではなく、護憲三派に幸した時運のせゐであつたと見るべきであらう。

◇清浦内閣の瓦解と共に浪々の身となり、長い間春に回り逢はなかつたが、これも大本教の祟りではなくて、疑もなく時運のせゐであ

る。田中内閣に拾はれて新潟縣知事となり、偶々縣議戰に逢つて、今度は雪辱の積りかなんかで大に馬力をかけた。總選擧となると、早速野に下つて大童の逐鹿戰に加はる、彼に取つては、境遇轉換の大事な賽の目をかけた勝負であつたらう。

◇辯も巧み、氣もよく廻り、以前は八方美人とか氣障とか言はれた事もあるが、近頃は腰も低く、相當貫錄も備つたと言はれて居る。出世が早過ぎて、あまりに若く警保局長になつたのが、藤沼の爲には重大な躓きであつたとも見られる。水野系の最もイキの良いところとして、將來を囑目すべきであらう。

守屋榮夫（中立）

◇社會局畑から名乘りをあげて、年も若く元氣もよく、頭も辯舌もあるところ、幾分田子一民に似て居る。齋藤總督時代に、水野總監の秘書で朝鮮へ行つた事もあるが、それから研究やら視察やらで、外國へ行つた事もある筈だ。文章と演說が大の自慢で、これは、本人の自惚をあまり割引かずに承認しても大した間違は無い。

◇當然政友會に投ずべくして、中立で立つて居るのは、言ふに言はれぬ事情があるらしい。或人はそれを、選擧前學術講演で選擧區の宮城縣下を打つて廻つた爲だとも言ひ、或人はそれを、既成政黨に懲たらなさから、洞ケ峠に日和を見て居るんだともいふ。併し、政府の舞いた算盤に、政友系中立の最も鮮明な色彩の所有者だとして乘ることは疑もない。水野の子分といふ過去があるにしても、人間に幾分清新の氣と明るさがあり。言論一點張で、關係の六つかしい宮城縣から出ただけの事はあるとされて居る。

栗原彦三郎（民政）

◇山王臺の猛者、栗原彦三郎を議會に送つたのは、愉快なる普選の收穫の一つであつた。往年議場へ蛇を投り出して、四百の議員を慄え上らせたのは、栗原自身ではなくて、栗原の書生だといふ事だが、何しても蛇投げ事件とは全くの無關係者ではなく、民政會の院外團に無くてはならぬ名物男であつた。

◇往年田中正造翁が、鑛毒事件で奔走して居た頃、彼は十七才で初めて演壇に立つた、同志の最年少者で、郷黨は田中翁を「大栃鎭」と呼び、彼を「小トッチン」と呼ぶといふのは、洒落にしても嬉しい敬稱ではないか。

◇彼は「田中正造翁の精神を傳へるものは我輩あるのみ」と日頃自負して居る。學歷は無いが氣慨はある、金は無いが、交友はある。容貌魁偉、それに相應して身體もデッカイ癖に、話をすると平常の聲が女のやうに優しい。多くの場合、聲の優しい人は、デリケートな感情の持主だ。豪傑風の彼が、人間として案外いい味を持つて居るのはその爲かも知れない。

◇一と度び演壇に立つと、文字通り獅子吼する。河野磐州翁程の人が

彼の辯說を「熱血の詩」と稱讃したといふのは羨ましい。靜岡事件當時、腹を切ると駄々をこねて、谷干城を引張り出したり。西久保市長追出し騷ぎの時、頭山翁を擔ぎ出して、氣の弱い市議を虐殺したり、逸話は甚だ少くない。

◆非公認で郷里から出て、公認を蹴飛して當選したところも栗原式で面白い。あれで蘭を栽培し、刀も鍛へ、馬に乘り、三十一文字も仕る相だ、何しても變つた豪傑だ。

漢那憲和（民政）

◆漢那は沖繩の縣寶だと言はれた、逐鹿場裡に起つと、翕然たる同情、名物の颱風ほど全縣下を吹き捲つた。今は豫備海軍少將だが、曾て大佐の頃、今上陛下歐洲御漫遊に際し、御召艦香取の艦長に拔擢されたといふ榮譽ある過去を持つて居る。

◆苦勞力行の人、親孝行で、秀才で、尚侯爵家に認められ、その愛嬢の婿となつたといふもう一つの愉快なる過去も持つて居る。芋蔓では無くて蘇鐵の國の出だけに、海軍では大に志を伸ぶるに至らなかつたが、政界でその代りウンとやらうといふ意氣込らしい。

椎尾辨匡（中立）

◆坊さん候補の中に、首尾よく當選した唯一人の椎尾辨匡は尾張の德川家の菩提所、建中寺の住職である。帝大出の秀才銀時計組で、大正四年「大乘佛教論」を書いて文學博士となり、頭のよいのと、人物の確かりしてゐるので、本人が尻込するのを、無理に宗派から押されて立つ事になつた。宗教法案でも出たら、一枚絡の立役だらうと見られて居る。

小俣政一（民政）

◆お膝元の第四區から、小俣政一が最高點で當選したのは、疑もなく西久保市長追出し騷のお蔭であつた。當時、久保田刑事部長對小俣政一の問題といふものは途方もなく振つたもので、あの一時は、論ずる迄もなく天下周知の事であらうと思ふ。

◆見事な禿げ頭で、短身で、鬪爭的で、血の氣が多くて、市會では彼も亦一箇の名物であつた。が、どう同情を以て考へても、あれだけの成績で當選するほどの人物とは思へない、西久保を最後まで擔ぎ通して、留置場に叩きこまれても屈しなかつたところが、妙に本所つ兒の同情を買つたものであらう。考へて見ると運の良い男だ。

伊藤仁太郎（政友）

◆痴遊先生も代議士になつた、申す迄もなく普選のお蔭だ。立候補前後五回、全くこの邊で札を納めさせなきや、江戸つ兒も思ひやりが無さ過ぎた。

◆星亨の玄關番に住み込んで、政友會へ入つたのは星より一年早かつたといふ氣焔、言論壓迫時代に同志と政治講談をはじめ、同志は悉く

く政治家實業家に鞍替して了つたのに、彼一人寄席に踏み止つて、三十年來、伊藤も井上も大隈も、友達扱に呼び捨てて、江戸つ兒を煙に卷いたものだ。話術はさすがに手に入つて居たが、運が惡くて萬年候補となり、危らく下積みになるところを、普選で芽を吹いたのは結構な事だ、さぞい丶心持だらうとお察しする。

佐藤安之助（政友）

◆『オレに投票する積りで、佐藤に頼む』と田中首相に言はせたといふ、光榮ある候補者だ。陸軍少將で、名題の支那通で、語學の天才で、俳人肌骨、これだけ條件が揃つて居ると、變り種としても大關格だ。
◆日清戰爭で一脚を失つて、それから眞劍に勉强をはじめ、陸軍部内切つての支那通になり、田中首相の支那顧問格、何んか立志傳めくのも面白い。

立川太郎（政友）

◆鹿島の人、サーベル畑だ、警視廳の方面監察として令名があつたが、後、神樂坂署長ですつかり土地に信用を植付けてしまつた。三木武吉があまり幅を利かせたので、警察署長の椅子を棒に振つて候補に立ち、三木を向ふに廻して二度まで落ちたが、今度は三度目の正直、普選に惠まれた一人だ。

武藤七郎（民政？）

◆武藤七郎を民政黨に數へるか、政友會に數へるか、これは面白い問題だ。新しい言葉で言ふと『武藤七郎は何處へ行く』とでもあらうか。政友會に入黨屆が出て居るとも言ひ、金吉が生きてる内は、政友會へ行くもんかと言つたともいふ。金吉武藤君の壽命に賭けては惡いが、この二つの噂は場合によれば兩立する。
◆頭腦もあり、力も相應だ、民政黨が三公認を誤るに急で、武藤七郎をいぢめ過ぎたのが、一番惡かつた。民政黨も憎たら、同苗金吉も憎い、武藤七郎たるもの迷はざるを得ない。

石坂養平（政友）

◆評論家として、淸新な頭の持主なる石坂養平が、政友會から出たのは一應不思議なやうだが、地主で多額納税者で、埼玉縣大里郡奈良村に、美的百姓で逍遙自適して居ると聞いたら、誰でもナール程と思ふだらう。
◆酒も煙草も、そして女も嫌ひといふピューリタンだ。權謀政治に慊たらない時が來たら、どんな態度をとるか見物だ。本人は「理解ある黨内の若手と結び、議會を純化させて、明るい政治の中心になり度い」といふ、石坂君ならずとも、最初は皆んなさう思つて居る、サテそれが大政友會で通るかどうかゞ問題だ。
◆併しこんな純情で頭のある人を、政友會へ入れるのは、天下の爲に却つて幸ひかも知れない、暫らくお手並拜見としやうか（元）

無產黨新代議士のプロフイル

木村毅

(一)

私が東京第五區から立候補してゐる加藤勘十君の最後の應援演説を終へて、それから事務所へ立寄り、二三の雜用をすまして家に歸りついたのは十九日——いや既に投票日なる廿日の午前一時半頃であつた。

私は大久保町の投票立會人に指命されてゐる。で、投票の開始される午前七時までに、投票所へ行き着かねばならない事は重々心得てゐた。が何分にも連夜睡眠不足の疲勞と、早朝からの來客のために、投票所なる小學校の立會人席に着いた時は指定の時刻より約二時間も後れてゐた。

この町には私の知人が多少ある。それらの人々には既に私個人で推薦状を出しておいたから、大抵加藤君に入れて與れたらうとは思ふ。が、彼等は多く勤め人か、學校の教授などだから、出勤前に早く投票して行つたと見えて、私が席に着いてからは私の知つてゐるやうた顏は一人も見えないので少々心細くなつた。

前から選擧權を持つてゐたやうなプチブルの間に交つて、法被を着た人、菜ッ葉服を着た人、巡査、市電從業員、廢兵などの交つて投票するのは、たとへ曲りなりにもせよ、普選の世なればこそだ。

雲をつくやうな巨漢が入つて來る。

『あ、太刀山が來ました。』と、側にゐた勞農黨の立會人の某君が袖を引く。

言ひおくれたが立會人は民政黨側から三人、政友會側から三人、社會民衆黨、勞農黨、日勞黨から各一人で、全部で都合九人だつた。

內田魯庵氏の令息で洋畫家の巖君が來る。私とは相識の間なので互に目禮を交はしたが、話は出來ない。一時間はかり後れて魯庵翁自身も投票に來られる。——午後には讀賣の文藝部の記者の淸水君の顏も見えた。

午後六時、愈々投票が終ると、立會人一同は火鉢の周圍に輪を作つて、未だ蓋のあかぬさきの『票算用』に漫談の話を咲かした。

『こゝは一向あてにしてゐないのだから、加藤君の票は少い』と、

私が言つたら、

『いや、そんな事はない。今朝最初に投票したのは三十四五の立派な紳士だつたが、加藤勘十と大きく書いた用紙をわざと折り疊まないで、立會人に見せつけるやうにして投票して行つた位だよ。』と、民政黨の斯波氏のための立會人某氏が言ひ、政友その他の諸君がさうだつたく／＼と之に和して、加藤君のは可なり入つて居るだらうと慰めてくれた。

翌廿一日は朝から日勞黨本部へ詰め掛けた。田所君、淺沼君などの顏が既に見え、麻生君、三輪君、加藤君など續々と詰め掛けて來る。みな片唾を呑んで戰況を待つのだ。

電話のベルは發狂したやうに鳴り續けてゐる。

『松谷さんも加藤君も當選確實だ。』

『安部さんの票數は斷然群を拔いてゐる。』

『菊池寛の澤山取つたには驚いたな。松屋の特報板の前で女學生が歡呼を擧げてるよ。』

——立替り、入替り新聞記者諸君が來ては戰況を報告してくれ、寫眞班は二度も三度もマグネシユームを焚いた。

午後二時頃には安部磯雄氏の當選は最早動かぬものとなつた。無產黨の候補中、まつさきに當選の確實に分つたのは實に東京第二區の『安部さん』であつた。

（二）

併し安部さんに就いては何事かを書くべく餘りに有名だ。その儘に日本の社會運動の全歷史の生きた縮圖で、如何に反對黨の人とて氏の當選を冀はなかつた者は一人も無からう。極左翼の猛者でさへ『今に勞農黨の天下になつても、安部さんだけには、レーニン政府がクロポトキンを優待した以上に、優待するのだ』と、明日にも內閣を組織しさうな事を言つてゐる。

武士の子に生れ、基督教で人格を陶冶して、そして早くから社會主義を信條とした氏は、人を待つ事は極めて寬大だが、自ら持する事は非常に謹嚴で、警視廳のスパイにだつて嘗つて噓を言つた事がない。隨つて從來の概念の政治には不向きで、政界の墮落の餘りなひどさに愛想を盡かして、早く政治を見切るのではあるまいかと懸念する者もある。事實、同志社や早稻田豫科長、早稻田政治科長など、學校行政に當つては餘りに正直で政策の皆無なために大して業績は擧がらなかつたらしい。併し一生を賭して漸く闘かひ取つた無產階級の政治的進出だもの、少女が氣に入らなくなつた人形を捨てるやうな、氣紛れな眞似をされやう筈がない。

東京朝日新聞の報ずる所によると、安部さんを衆議院議長にしたらとの話もあるらしい。だが、それに對してはみんなが、屹度生一本過ぎて島田三郎と同じく成功しまいと言ふ。だが本當は、安部さんのや

うな人が議長になつても立派に救けて行くやうな議會にならなくては駄目なのだ。

厚顔無恥な野郎共のお揃ひの今の議會に、安部さんが一つの議席を占められた事は、何だかはきだめに鶴が降りたやうな清爽な感じを與へる。

安部さんに次いで日勞黨へ當選確實の報の入つたのは神戸から立つた河上丈太郎氏である。この人は情熱に於ては『神戸の河上肇博士』であり、人格の高さに於ては『關西の安部さん』である。私の所へよく來る青年で阪本勝君の愛弟子がゐる。昨秋の縣議戰には阪本君が立候補して河上氏が事務長となり、今回の總選擧には河上氏が立候補して阪本君が事務長となつた。その青年は兩回とも運動員になつたが、『關西に來て感心した事は一つもないが、河上さんの人格にだけは頭が下つた』としみじみ話してゐた。この人のためには大原社會問題研究所の高野岩三郎博士や森戸辰男氏も動き出した位だ。

氏は大正四年東大法科の出身、學生時代はその筒袖姿と雄辯とで有名であつた。高文試驗も苦もなくパスしたが名利を求めない性とて、學校としても大して映えない關西學院に閉ぢ籠り、青年子弟の訓育に努める傍ら、辯護士として貧しい勞働者のために面倒を見てやつてゐる。

東大法科出の中では恐らく桁外れの新居格君がこの几帳面な河上氏と同期であつた事は、運命も自ら織りなした對照の奇に、得意の微笑を洩らしてゐるであらう。新居君が西下の砌、河上氏が學校のために講演を依頼すると彼は快諾しておきながら、時間に無關心なる事、恰も學校で取つた政治學のノートに對すると同じく、彼はそれを忘れて了つたのである。そこで講演は翌日に延期したが、此の日も約束の時間に遲るゝ事正に五十分にして漸く顔を見せた。

河上氏は生徒の手前氣が氣でなく、校門まで出迎へてゐたが、新居格の姿が見えるや、放蕩息子の父がその息子の歸りを迎へた如くに馳寄つて、てれた新居君が再度の違約を辯解しようとするのを押し止め、『君の事だから、遲刻が五十分や一時間で濟んだのなら結構、結構』と、あの今戸燒の狸の如き尨大なる腹をしてゐる畏友を相擁して喜んださうだ。

（三）

勞農黨は京都に於て二人の代議士を出した。而もそれが揃ひも揃つた『性道』の大家で、一人はその方面の學的研究家なる山本宣治君、一人はその方面の實行家なる水谷長三郎君。

名にし負ふ勞農黨のヨターリンなる水谷君は、加茂の水でみがき上げた色男のうよ／＼ゐる京にも並ぶ者の無い一代の艶福家で、今度も或る女學校を借りての演說會の際、三旬の舌戰に咽喉破れて聲出でずと見るや、聽衆の中から嬋娟たる佳人が瓶子を捧げて壇に進んだとの話には聊かあてられた。

この師にしてあの弟子あるかの歎を發する人があるかも知れないが、水谷君は謹厳な河上肇博士の高弟である。數年前、君の醜名京洛に高く響き渡つた時、博士は君の將來を心配して一場の訓戒を加へられた。その時君の用ゐた逃手こそは、政治家としての君の將來を充分に約束するものがある。

但し讀者はその豫備知識として、河上博士青年時の出世作に『社會主義評論』なる高名の一書あるを知つておくを要する。更に又該書の終末には博士若氣の筆の誤りから『これまでに予が惚れたる女七人あり』なる感傷的な述懐あるを知つておくを要する。最後に博士は後年この書を毛虫の如く嫌つて絶版に付された事を知つておくを要する。

今では滅多に古本屋にも見えない珍本だが、水谷君はいつの間にかそれを手に入れてゐて、博士の訓戒が終ると、懐中から該書を取出し、その『惚れたる女七人』の一句を指さし示して、『先生、これは何うです。』と詰めよつた。これには流石の河上博士が、丁度資本論解釋の缺陷を論敵から突かれたやうに『ウム』と言つて沈默されたとか、されなかつたとか言ふ話である。

願はくば水谷君よ、君が前陣の醜名にあの得意の一手で、首相でも農相でもいい、うんと取つちめて呉れ。不肖嘱々々。

例のパスで無産黨議員中一等車へ只乗りの魁をして喜んでゐる程茶氣漫々な彼は、又都下の或る草庵に女歌人江口章子を訪ふてしみじみと久濶を叙してゐる程、情の濃かな彼である。もしそれ世界經濟學の一夜、洋燈の影に法學士經濟學士の名刺をふり廻した秘話に到つては言はぬが花であらう。

山本宣治君も蟠りや屈托のない、愉快な男である事は水谷君と甲乙なしである。十八才家を飛出して、大隈侯の玄關番をし、十九才カナダに渡つてコックや、鮭漁師や列車ボーイもやつた履歴があると言ふが、その頃の話は私は一向知らない。熊野神社前を歩いてゐるのとばつたり出會はして友人から初めて紹介された時の彼は京大と同志社の講師をしてゐた。その後鳥取で性學の講演に中止を食つてから急に名を擧げ、産兒制限の理論では安部さんと並んで東西の兩大關と言はれる。壇上で科學的猥談を初めると自分で陶酔して了つて、臨監の巡査に引つ張り卸されながらも、尚ほ喋々として辯ずる事を止めない。

京大學生事件で家宅捜索を受けた時、出る物も出る物も生殖論の著書にあらざれば研究材料の淫具だつたので、さすがの巡査もあきれたと言ふ。忘れぬ中に言つておくが彼は宇治の花屋敷の若旦那である。京都では山本、水谷の兩勞農黨候補が揃ひも揃つて美ン事落選したので、警察部長がそのため譴責されたとの話もあるが、いづれにせよ兩君とも新議會の珍種であるには違ひない。

（四）

京都が水谷山本兩君を出して勞農黨のため萬丈の氣を吐いたと同じく、大阪は鈴木文治、西尾末廣兩氏を當選させて社會民衆黨の努力を

示した。

鈴木氏に就いても何事も語る必要はない。三度迄國際勞働組合會議に勞働代表として出席した事だけでも充分に氏の過去の功績を暗示してゐる。今回の政戰がやつと緒口につきかけた頃ある場所で偶然賀川豐彦氏に會つたら「木村さん、困つた事が出來た。大阪では鈴木君と阪本（孝三郎氏）とが對立候補として打つて出た。兩方から應援に來てくれと言ふのだが、兩方とも關係が深いのでどちらへも行く事が出來ない。あなた、一つ日勞黨へ行つて今からでも何とかならんものか話してみて下さい。私もこれから社會民衆黨へ行つてなるべく喧嘩をしないやうにと言つて來るから。」と言はれた。

併し私のやうな木ッ葉黨員が何を言つたつてどうにもなる者ではない。對立は對立のまゝで鬪はれて、他の對立區が凡て危ぶまれたと同じく、鈴木氏の當選も危ぶまれてゐた。然るに開票の結果が意外にも最高點であつた事は、さすがに友愛會以來の古い歴史が物を言つたのである。巨軀雄辯、噂によれば影でこつそり田中義一と面會したと云ふ位な度胸もある人だから、無産黨進出初期に於ては確かに何事かをなし得る人であるのは言ふまでもない。

鈴木氏を大阪で立てたら大丈夫と太鼓のやうた判を押して輸入候補にしたのは西尾末廣氏だと言ふ事である。勞働運動者として檢束された最初の人も氏なら、又同じく勞働運動者として治安警察法に觸れて一番に下獄したのも氏だと云ふ勞働閲歴は耳にする事久しいが、私は不幸にしてこの人には未だ正式にも何の一つの交りも持たない。たゞ私の長兄が大阪市で小學校の校長をしてゐるが、西尾氏の住居はその近くにあり、氏の令息令嬢はみんな兄の學校の生徒である所から、折々は兄の口を通して氏の噂を聞かないでもない。

兄も初めは有名な勞働運動者として非常に氏を畏怖したらしい。ある時一人の女生徒が運動場で足を折つたが、たま〳〵それが西尾氏の令嬢だつたので、兄は何か大いに拗ちこまれはしないかとひどく心痛した。が、氏は格別何も言つて來なかつた。その中、學校で父兄會を開催したので、座席を取つておいて未だ足の癒らぬ令嬢にも案内すると、西尾氏は自分でそれを負ぶつて出席されたさうだ。

私の聞き違ひでなければ何でもそんな話だつたと思ふが、その後私の兄が西尾氏に尊敬を拂ひ出した事は勿論だ。

無産黨の新代議士は必ずしも純然たる知識階級の出身のみではない。中には勞働者として、乃至は勞働運動家としての長い閲歴を有する人もあるが、併しその人達だつて一度位は私立大學の門を潜つて、知識階級的洗禮を受けてゐる。然るに西尾氏だけはそんな閲歴が更になく、十五の年郷里の漁村を飛出して大阪工廠、大阪鐵工所、汽車會社と渡り歩いても、常に勞働者として終始した。そこに氏の無産黨議員としての何よりの強味があり、議會の一異彩たる所以もある。近頃は氏も繁忙らしく、住居は依然として兄の校區だが、度々自動車の出入に隣近所の女房達

の眼を驚かしてゐる。私は先日西下した時あの邊りを通つて、ある女が『職工でも代議士になる世の中だから』と誇らかに言つてゐるのを耳にした

（五）

九州の八幡も亦二人の無產黨議員を出して、さすがに勞働王國たるの名前を耻しめなかつた。一人は石州津和野藩主龜井伯爵の分家と云ふ無產黨議員には適はしからぬ長い肩書きのついた龜井貫一郎氏である。

氏は大正六年の東大法科出、すぐ外務省に入つて天津領事官補になつた。柔道は二段、腕には充分覺えがある、アメリカ（？）の巡査が無禮を働いたので、美ン事街上に取つて投げたとの話を、かつて大佛次郎君から聞いた事がある。

氣の毒な事にダンスホールに出入した夫人の事から官を退いたのだが、今度の選擧では運命の與へたこの蹉跌の復讐を、美事に遂げたわけだ。

淺原健三君は、今度當選した八名の無產黨議員中、見方によれば西尾氏と相並んで、實は最も刮目して活躍を期待さるべき人であらう。君が嘗ての盟友で、今回の選擧に無念の敗戰をした加藤勘十君は、八幡市開票の第一回發表の結果、君が確か四千何百票しか取つてゐなかつた號外を見て、『八幡で六千票取つておくと淺原も大丈夫なのだがなあ……併し外の連中にも澤山取つたのが無いから、大抵大丈夫だらうな』と感慨深げに語つてゐた。所が二回、三回と發表の結果が報告さるるに隨つて君の票數は增し、遂に最高點で當選した。

淺原氏にも私は何の縁故も持たないので詳しい事は知らない。中學を途中で退學して、住友の忠隈炭坑のカンテラ磨きとなつて日給十二錢に有ついたのが勞働生活の振出しである事、十六の春兄さんが數年掛つて貯へた大枚九圓二十錢の金を貰ひ受けて上京した事など、新聞や雜誌を通して知つたのみである。

大正五年頃は日本大學の法科に通つてゐたが、集會所の二階に下宿して、政友會の院外團なる鐵心會と云ふ壯士團の一員にもなつてゐた。加藤勘十君と知り合つたのはその頃である。

その後兩者の間に暫く音信が絶えたが、大正八年八月には、氏は八幡製鐵所の勞働者二千人を糾合して日本勞友會を組織し、翌九年二月五日には製鐵所第一回のストライキを敢行した。尤も此れはサボタージユによる變則ストライキで、廣場に於て要求書をつきつけたのだが、八日には治警第十七條で同志十名と共に捉へられ、十一日には愈愈下獄ときまつた。その時一切の後事をこの人に頼めよと言つて左右の同志に指名したのが加藤勘十君である。

急電に接して飛んで來た加藤君は、同じ月の廿四日第二回のストライキを敢行し、工場閉鎖を行つて、林立する煙突から吹上げる煙を絶えさせた。

これから淺原君の血淚の歷史が續く。大正十一年の紀元節には同志會の大示威運動を行ひ、暴力團と抗爭して重傷を負ふた。三月には講習會を開いて東京から佐野學氏を聘し、麻生久、加藤勘十の兩君も、かなり長い間滯在して、北九州機械鐵工組合を指導しながら封建的反動勢力と鬪ふた。

多分この時であらう。麻生久氏と佐野學氏とが八幡の町で落合ふた。麻生氏は佐野氏のどことなく落ちつかない樣子を見て、『餘りあせつて無茶な事をやるなよ』と言ふのを別れの言葉にしたとの插話を耳にした事がある。天下を震撼した例の共產黨事件は實にこの年の初夏に起つたのだ。

大正十三年淺原君は中央無產政黨の結成に先立つて民憲黨を組織し、今では市會に四人、縣會に一人の議員を送り、氏も亦めでたく代議士となつて中央の議政壇上に見える事となつた。十年の苦鬪が立派に實を結んだわけである。

機略縱橫、氏はその友人にさへも滅多に正體を押へさせるやうな事はない程で、非常な熱情家、そして一代の雄辯家である。氏は言ふ

『全國無產政黨の濫立、雜生！從つて早生したる全國政黨相互の階級的對立と、感情的爭鬪はいよ〳〵その中間を深く大きく展開して行つた。全國の同志は、この過誤を總清算しなければならぬ。否、今正に全國同志の手に淸算されつゝあることを唯一の愉快とする。民憲黨は黨命を捨てゝこの大淸算の先頭に起つべきを誓ふものである。勞農黨は、日本無產運動の左翼的進行に對する、沒すべからざる名譽と、他面消火を勇敢急速に自己淸算しつゝある。日勞黨は一九前派の機運に聯動しつゝある。勞農、日勞の合同は我等の使命である。少くともその共同戰線は無條件に決行さるべきものである。しかして社會民衆黨へ、一歩も二歩も接近しなければならぬ。』(大阪朝日新聞による)

附記

より多く齊藤の閑人である私は、實際運動家に知己も少ないし、それを傳する材料もない。そこで改造からこの稿の依賴を受けた時、自分の任に非るを思ふて辭退し、別に適當な友人を推薦したのである。併しその時私は富士の裾野の、電報や特別配達も一向きかない田舍にゐたため、改造からの手紙を受取る事も遲れ、隨つてその返事を出すことも遲れた。そしてもう代人に交渉する暇のない程締切日が切迫してゐた。そこで止むなくペンを取つたのだが、何しろ山の中の事とて材料も無ければ、聞きに行く所もなく、一々の事件の眞否をたゞす方法もない。或は誤謬もあらうかと思ふが、その點は玆にプロフイルられた八氏、名前を引合ひに出した諸君、及び讀者の宥恕を乞ふ次第である。

米價調節策の正體

八木澤善次

新聞紙の報ずる處によると政府は米價低落を阻止せんがために近く勅令によつて「工業用原料として農林大臣の許可を得たもの又は通商條約關係のものに非ざる限り内地及び植民地に對する米及び籾の輸入を禁止する」(東京朝日、三月二日)とのことである。勿論之れは社會政策政府を標榜する政友會内閣の農業者保護政策の一つであらう。然しながら今次の米價維持政策は果して一般農民を利する結果となるだらうか?

農產物、殊に重要農產物の價格の安定を來たさしむることは啻に一國の農業政策、從つて農民保護政策の見地、或は農產物生產者の見地から云つて必要なるに止まらず、食糧政策の見地、或は一般消費者の見地からするも緊要である。重要食糧品たる米の價格の變動が常ないことは投機者流を利するばかりで、其の生產者並に消費者を常に苦惱の中に落し入れてゐるのである。米價の安定は生產者をして生產に着手する時期に於いて生產後の處分結果を大體豫想することを可能ならしめるまたそれは價格の變動を利用して巨利を博せんとする中間商人の惡策を制約して消費者をして安定せる生活を續け得しめる。之れ國民經濟上大なる利益でなければならない。

現に近世に於ける我國農業者(地主ではない)の沒落は端倪を許さゞる變幻極りない米價の變動が其の大原因をなしてゐる。大正九年二、三月の候一石五十四、五圓もしたのが其の出來秋たる十二月頃から急激なる下落歩調を辿つて翌十年の一、二月頃には二十五圓臺に暴落したのであるが、若し之れで直接生產者たる農民が窮迫し沒落しないならば、そのことが寧ろ不思議であると云はねばなるまい。米價の暴落によつて最も苦しむものは直接生產擔當者たる農民達であつて、決して單なる地代所得者たる地主ではない。かるが故に直接生產者たる農民からすれば米價の安定は緊要不可缺のものでなければならない。

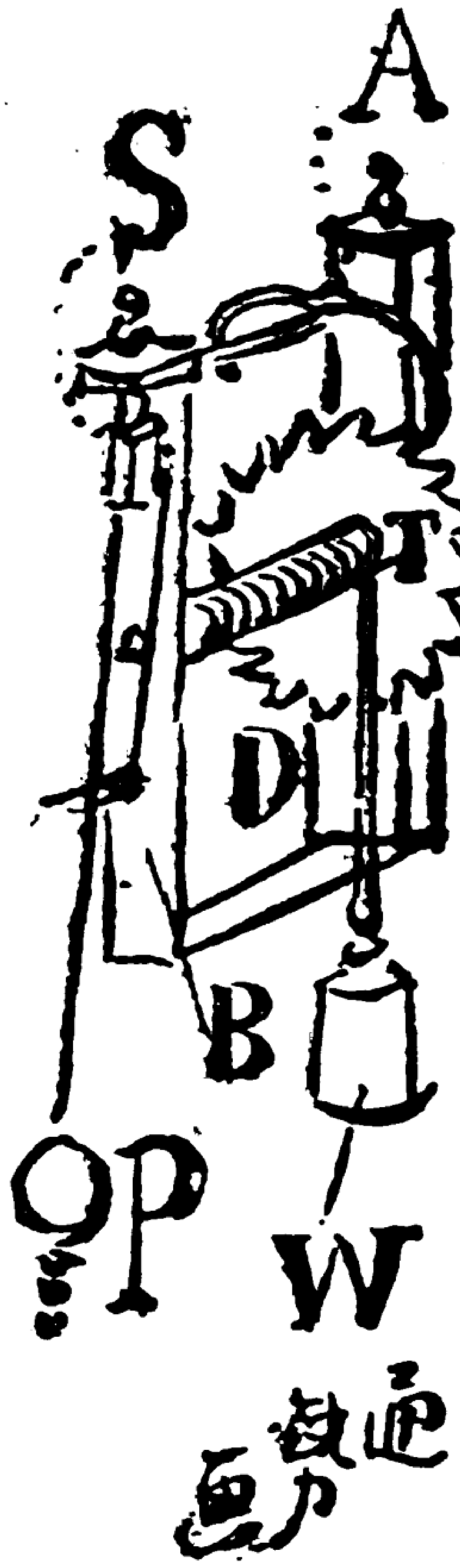
然しながら我國の米價の日別變動を見ると大體に於いて十一、十二、一月の候に安くし五、六、七月の候に最も高い。而して此の十一、十二、一月は小農が生產信用を辨濟する季節である。思ふに小農なれば小農なる程取商信用の獲得不能のため收穫した後から之を處分して以て肥料代其他の生產信用の辨濟に當てなければならないため、また米價に對する信賴を保ち得ないため、價格の安いことを考慮する餘裕もなしに市場に投賣して持米を處分せんとし、ために愈々益々米價の低落を來たさしめる結果となるのであらう。

果して然りとするならば米價調節は、實際の農業擔當者たる一般農民を經濟的に保護せんとするならば、此の十一、十二、一月の候に米價調節策を講ずべきであつて、其の以後に於いては殆んど必要ないのである。若し之れが必要ありとするならば、それは米價の一般的低落期に賣延べする資力を有する地主又は富農だけである。此期以外に於いて一般貧農は賣るべき米を持たない。

從來の政府は一般農民の利益に最も深き關係を有する、十一、十二、一月の候にどれだけの有效なる米價調節策を講じて來たであらうか?いつでも是等の一般農民にとつては其の必要のなくなつた、だが之れから持米を賣らうとしてゐる地主、富農——而して是等のものは强大なる政治的權力を有する——にとつて重大なる利害を有する時節に政府は米價引上げ策を講じては來なかつたらうか?一般農民救濟の名目を以て。

米價調節策は、今次のものに於ても、決して貧農救濟のためではない。たゞ地主と富農との經濟的利益保護のためだ、而して消費者、從つて一般民衆を一部投機者流や地主富農の搾取に委せんがためにである。

(三月五日)



クロポモール

（ロシア）ヴエーラ・インベル作
藏原惟人譯

一

クロポモールと云ふのは無限に長い、細い口をもつた特別なブリキの藥罐のことである。この藥罐の内部に火を入れ、そしてその上に水を入れる。水の中にはアンチヤールのやうに有毒な液體が注がれる。火が燃えて、水が沸騰する。そして前に述べた口から汽笛のやうに、眞直ぐな蒸氣が奔出する。でこの蒸氣が到る所に浸透すると、その時銀行家にとつては恐慌と混亂とが初り、そして恐らくは長老會議があつて、遂には死がこれに續くのである。何も彼もが——蚤の半分位の大さしかない小さい子供までが死んでしまふ。尤も一週間か二週間經つと、まるで空氣の中からでも湧いて來たやうに、また生れて來る。しかしこの二週間の間に人間の神經は既に恢復して、彼は再び微笑みながらクロポモールを持出して來る。尤も微笑みに對しては私は責任がない。微笑みはないかも知れないのである。

さてクロポモールとは何であり、それはこの世の中でどう云ふ使命をもつてゐるのであるかと云ふことは、明かになつたことゝ思ふ。しかしどんなものでもその直接の使命の他に、副次的な機能をもつてゐるものである。しかもその孰れが重要であるか、誰が知らう？　人殺しの短刀で薔薇を截ることも出來る。眼のないハンケチで殺人の相圖をすることも出來る。クロポモールの火で戀を燃やすことも出來るのである……

それがどんなに不思議に見えても、洋菓子（はかり賣りと箱入）や蜜菓子（一斤九十錢）やその他のお菓子が、生活を非度く傷ましくしてしまふことがあり得る……ある目撃者の手記の中に、マリー・アントアネツトが舞踊會の前に一時間ほど閨の暗闇の中に坐つてゐて、その時に彼女の美しい眼が輝きと清らかさと冷しさとを増して、それが宮廷の人々の氣を奪ひ、そして革命の到來を早からしめた、と云ふことが書いてある……リヨーリヤ・ウエリホーワの所では、尤も彼女は暗闇の中にはゐなかつたが、その眼はそのやうな冷しさと清らかと輝かし

さと、金色の暖かさと青玉のやうな深さとをもつてゐて、彼女の半ば子供のやうな顔の中にこのやうな美しいものを見るのが不思議な位であつた。

人が舊エリセーエフ（現在の莫斯科消費組合）の店にやつて來る。彼は忙しく、氣がくしやくしてゐる、彼は重い折鞄をかゝへ、重い上靴をはき、頭からは免職になりはしないかと云ふ重い考へが離れない。彼は一斤九十錢の蜜菓子を買ひに來る。そして突然お菓子の上に、怒つた二つの青玉を見る、と云ふのはリヨーリヤ・ウエリホーワはこの菓子を賣つてゐるのであるが、それが非度く彼女には酷々として、彼女はこの菓子とこれを買ふ人達とを目の敵にしてゐる、そしてそれ等は彼女にとつて苦蓬よりも苦かつたからである。

するとその男はこの眼を見て、頭がぼんやりして、何でもかまはず買つてしまふ、蜜菓子をもう一斤と、彼が子供の時から大嫌なハルワ（蜂蜜と胡桃でこしらへた菓子）を二片買ふ。そして彼は用のないハルワと後悔の念とを抱いて家に歸つて行く。

白い上衣を着、薄色の髪を滑らかに梳きつけ、兩頰には紅色を櫻の花のやうな柔らかいしみのやうに見せて、リヨーリヤ・ウエリホーワは一日中蜜菓子や洋菓子を賣つてゐる。そして夜になるとマルメラードが彼女の喉を絞める恐ろしい夢を見る。

蜜菓子やハルワを賣つてゐる他の人達――ナターシヤ・キリロウイッチや、マルーシヤ・エゴローワや、包裝掛のマルーシヤ・リンクや、會計掛のエレーナ・フエドロフナでさへ、お母さんや、お父さんや、名付親や、伯父さんや、何だか怪しげな從兄弟や、まるで一種族になりそうな親類をもつてゐる。所がリヨーリヤ・ウエリホーワは一人ぼつちである。地球は大きい。そして暴風や破綻や地震がそれを揺り動かす。サワラには砂の龍卷が起る。グリーンランドの氷山がヨーロッパに滑つて來る。莫斯科消費組合（舊エリセーエフ）の店では二度支配人が代つた。しかし、この砂や氷や火や支配人の混合物の中で、本當にリヨーリヤ・ウエリホーワを必要とし、また彼女にも必要であると云ふ一つの原子でもあるであらうか？

リヨーリヤ、ウエリホーワは臺所に近い六尺と八尺の部屋に住んで居た。しかしその代りにその部屋は暖かい。壁紙はなく、白く塗つた壁には、置戸棚の上に、ハムレットに扮したチエホフと、エッフエル塔と、同志カーメネフの肖像とが懸つてゐる。

住居には七つの部屋がある。そしてその部屋の一つ一つには各々別別な人が住んでゐる。三つの部屋には新しい人達が住んでゐて、彼等は夜、異つた時間に泣く、だから夜は一晩中彼等によつて占領されるのである。だがその代り二階下にはピアノが住んでゐて、それは夜晩

く鳴り出す。ピアノは叙情的な魂をもつてゐるのだ。それは「シルワ」や「バヤデルカ」やショパンのワルツやを奏でる。柔かい、甘い、そしてハルワのやうにぱさ〱とした響が、床を通してリョーリヤ、ウエリホーワの所に流れ込み、そして六尺に八尺の彼女の部屋を滿す。時々この脆い響の波の中で耳は、丁度ハルワの中の胡桃のやうに堅い丸い諧音に行當る。そして「シルワ」の甘さ——それはリョーリヤ、ウエリホーワの持つ唯一の甘さであるのだ……、彼女は、臺所で彼女の藥鑵が沸立つ間、「シルワ」を聞いてゐる。遂に藥鑵が沸立つ、がリョーリヤ・ウエリホーワはそれに氣が付かない。藥鑵は、文字通りに、沸騰してしまふ。それは大膽にも蓋を斜に踊らせ、口笛を鳴らし、唾を吐き、騷々しい惡口を呟き、そして遂には、その騷ぎの名殘りで石油コンロを消してしまふ。その時リョーリヤ・ウエリホーワはやつと氣が付く。彼女は藥鑵を自分の部屋に運び、同志カーメネフの人の善さそうな狡さうな眼の下でパンと好物の腸詰を切り、そして喰べる……

株式仲買人のレオニード・エフゲニエーウイッチ・オボーエフは、自分の仕事が良くないとこぼしてはゐるが、かなりに偉さうな風采をしてゐる。毎朝化粧室のことで此處の住人達と彼との間に不愉快なことが起る。レオニード・エフゲニエーウイッチは、自分の體を尊敬するからこそ、二十五分以上ゝ洗ふのであると云つてゐる。そしてレオニード・エフゲニエーウイッチが遲く起きる日には、すべてがとも角も好都合に運ぶ。たまに勤めに行かなかつた人が、或に女か子供が、二度扉を引張つて、不機嫌に去つて行く位なものである。

所が朝の九時には、全く違ふ。朝はこの家の居住人の誰もが、どんなに少ししか自分の體を尊敬しないものでもが、顏を洗つて、勤めに駈けつけなければならない。で、偶然レオニード・エフゲニエーウイッチの所にも朝の仕事がある日には、彼は皆の包圍と個々の攻撃とを蒙る。

「もし〱、私の所では今日産業會議があるのですよ、」と同志オカヤンチックが足で扉を蹴りながら聲高に初める。「あなたは私に不愉快な思ひをさせようと云ふんですか。昨日私はあなたのお蔭で藥鑵にあつた冷い茶で顏を洗つた。だから今日は私はちやんと洗はなければならないんです。」

辯護士協會の會員であるソフイヤ・イサコフナ・ペルリスがそれに相槌を打つ、——

「私は第一こんな仕打が出來るものかどうかは分りませんよ、同志オボーエフ、これは本當にまるで集團的ではありません。其處からお出なさい。」

「お待ちなさい、今足を洗つてしまひますから、」——と化粧室の中からは天鵞絨のやうなオボーエフのバリトンと水のはねる音とが聞こえて來る。

そして遂に、廊下の動搖が恐喝的にまで達した頃、內務人民委員會に務めてゐる默々たる同志ハルフインによつて絶え間なく叩かれてゐた扉が開かれて、閾の上には、背廣を着、「プロカール」と薄荷の芳ひをさせたレオニード・エフゲニエーウイツチが現れて來る、そして齒楊子で自分の言葉を强めながら、云ふ——

「人間は自分の體を鍛練して清潔にして置かなければならない、[illegible]の中心だらうが地方だらうが同じことです。いや、ソフイヤイサーコフナ、如何お絡みになりました？」

レオニード・エフゲニエーウイツチは、廊下でリヨーリヤ・ウエリホーワに出會つて、丁度蓄音器の前のブルドツクのやうに、思はず立ち止る。そして短かく切つた髭を撫でながら、ひそかに云ふ——

「如何です、レーレチカ？　お目にかゝつて大變愉快です。我々の悲慘な現實の前に於いてあなたは、ベストウムの薔薇を思ひ出しますよ。でどちらへあなたはお急ぎです？」

所かリヨーリヤ・ウエリホーワは、かすかに頭を下げて、出來るだけ早くレオーニード・エフゲニエーウイツチの所から逃げやうと機をうかゞつてゐる、と云ふのは彼は誰よりも多く、あのあやしげな內容をもつた巨大な軟かい御菓子を彼女に思ひ出さしめたから。

時々レオニード・エフゲニエーウイツチは莫斯科消費組合（モスエリセーエフ）の店にやつて來て、其處で、青玉の眼の怒つた光を樂しみながら、なるべく長くリヨーリヤ・ウエリホーワの指先が見られるやうにと、殊更に四半斤づつ色々のお菓子を買ふ。サワラの砂漠には龍卷が起つてゐる。グリーンランドの氷がヨーロッパの岸に流れて來る。店の中では新しい支配人が歩きまはつてゐる、しかし誰も莫斯科消費組合（モスエリセーエフ）の菓子部に於けるこの嫌らしい揶揄に對しては氣をとめやうとはしない。

或時、夕方、吹雪の中を、例のピアノが殊更に優しく殊更に淋しく、「バヤデルカ」を歌ひ、そして家中が刑罰の前のエヂポスのやうに（刑罰は實際次の夜に來たのであるが）靜り返つた時、憂愁が恐ろしい力をもつてリヨーリヤ・ウエリホーワの心に襲つて來た。それは老後になつて見れば幸福の前徴であつたと知れるものゝ、その當時は耐へ忍ぶことの出來ないあの甘才娘の恐ろしい憂愁であつたのである。藥舖がタルスクのナイチンゲールのやうに沸立つたのも、同志カーメネフが狡さうに辛辣さうに微笑したのも、みんな無駄であつた。——リヨーリヤ・ワエリホーロの心は次第に苦しくなつて來たのであ

る。そしてもう既に彼女に喫煙の傍の緑のソファーに横になることも出來ず、今は彼女の爲に書卓ともなり食卓ともなりまた化粧台ともなつてゐるカルタ用の卓の傍に坐り込んでしまつた、卓の上には彼女の愛する脚本と圖書館から借りて來たエレンブルグの「十三本のパイプ」とが横つてゐた。

彼女はもうどうしても寢ることが出來ないので、その六尺と八尺の部屋を對角線に歩き始めた。しかし床の下ではピアノが尚も淋しく尚も快く歌ひ、そして床中が響いた。床からは、丁度森の中にある六尺と八尺の小さな沼の中からのやうに、恐ろしい霧が立昇つた。リヨーリヤ、ウエリホーワはもう部屋の中を對角線に歩くことが出來なかつた。で彼女は再びカルタ用の卓の前に倚り、そしてエレンブルグの「十三本のパイプ」の上に頭を垂れて、あの廿才娘の耐へ難い憂愁の中に身を委してゐた。と其瞬間、彼女はその肩の上に熱い重たい手を感じたのである。リヨーリア、ウエリホーワは、一層低く卓の上に身を傾け、眼をつぶり、そしてそれを開いた時、自分の前に背廣を着て非常に上機嫌なレオニード・エフゲニエーウイッチを見たのである。

「私は二度も叩いたんですよ」とレオニード・エフゲニエーウイッチは說明した、「それに答へなかつたので、這入つて來ました。」

リヨーリヤ・ウエリホーワは濡れた髮を、涙に濡れた髮を額から除けて、レオニード・エフゲニエーウイッチを見た。この瞬間には彼でさへもが彼女にとつては愛らしいものに見えた。呪はしいピアノは風琴のやうに吐息し、雪は窓を打ち、そして心臓は何物かを求めてゐた。そこに、たとへ背廣姿であるとは云へ、彼が現れて來たのである。

レオニード・エフゲニエーウイッチは六尺と八尺の部屋の中に一時間半程坐つてゐた。そしてこの間に彼は輝かしい成功を收めたのである。先づ第一に彼は自分の全生涯を物語つた、而もその生涯は全く波瀾曲折であつたのである。自分の生涯を語りながら、彼はリヨーリヤ・ウエリホーワの手を小指から肘まで、肘から親指まで、接吻し始めた。これを彼が三回繰返して、もう既にこの二つの地點の間の正確な知識を獲得した時の頃である、突然ピアノがその聲を停めた。バヤデルカの魂はリヨーリヤ・ウエリホーワの心から飛去り、そして心臓は次第に平らかに冷靜に打ち始めた。レオーニード・エフゲニエーウイッチはこの變化を認めずにはゐられなかつた。が彼は少しも周章する所はなかつた。

「所で、」と彼は立ち上りながら云つた、「私はあなたに『お休みなさい』を云はして戴きます。で明日は、若しあなたさへ差支へなければ、『バヤデルカ』のオペレットに御案内致しませう。革命のあらゆる成果と共に、舊世界から殘されたオペレットは、疑もないプラスです

からね。あなたは、オペレットに行らしつたことがありますか、レーレチカ？」

リヨーリヤ・ウエリホーワは、「否」と答へる、するとレオニード・エフゲニエーウイツチは、決定的にのぼせ上つてしまふ。

「行らしつたことがないんですか？　でも何と云ふ美しさでせう！最近技術の應用、オーケストラ、それに女優スウエトラーエワ、——とても素的な聲ですよ、——何しろ一ケ月に千三百留ですからね。休憩時間には食堂もあります。いやとも角明日行つて見ることにしませう。」

魅惑は大きい。リヨーリヤ・ウエリホーワは「えゝ」と答える。

翌日の夜、劇場には、——パヤデルカと、シルクハツトのヤロンと、赤い花と頭被をつけた東方の王子とがあつた。しかしそれが重要なものではない。そこではオーケストラが彼女の床の下でピアノが歌つたのと同じものを繰返した。……「おゝ、パヤデルカ、タラ、ラム、タラ、ラム、」と。そしてリヨーリヤ・ウエリホーワは、頬を紅に染め、鶯チンデルの店から買つた新しい上衣を着て、第七列目の № 11 の椅子に坐つて、全身を戰かせてゐる。そして № 12 の椅子には非常に滿足さうなレオニード・エフゲニエーウイツチが、短く切つた髭を撫でながら、熱い手で彼女の小さい細い肘を抱きながら、小聲で「おゝ、パヤデルカ」を歌つてゐるのである。

二

しかしその間に南京蟲は何をしてゐるのであらうか？　その日まで、モスクワ市ハモフニーチエスキイ區の家の一つの半地下的な場所に棲息してゐた南京蟲達は、パヤデルカが第三幕目で赤い薔薇の芳香に醉はされてゐるその時に、ある相當なお役人の寢臺の蒲團の下で、緊急會議を開いてゐた。そこで何が語られたか、そして何故にあの半地下的な場所が南京蟲の集團を滿足させることをやめたのであるか、誰も知つてゐるものはない。それは誰も知つてゐない。しかし事實は、この會議の後直ちに、南京蟲の無數な密集部隊が、隙間を拔け、電線やストーブの煙突を傳つて、この家のあらゆる所に全面的進出を行つたのである。エヂポスの刑罰はこの家の全機構を、そして特に今まで主として油蟲の棲息してゐた台所やその近邊の部屋を襲つて來た……！

同志カーメネフは、壁の上から、ぢいつと何かを試すやうに、芝居から歸つて來たリヨーリヤ・ウエリホーワを眺めてゐる。リヨーリヤ・ウエリホーワは當惑してゐる。レオニード・エフゲニエーウイツチは彼女に、——友情と世話と、また彼女の舊い靴の哀れな狀態の故に新しい靴と、愛と、一週三回のオペレットとを、彼女に申込んだので

ある。リョーリヤ・ウェリホーワは恐ろしくてならない、レオニード・エフゲニエーウイッチは、彼女にとつて、莫斯科消費組合（消エリセーエフ）のカッサ——そこに樂しげな圓い銀貨を投げ込んでその代りに平單な灰色の紙のチェックを受取るそのカッサのやうに思はれてならないのである。彼女は自分の、たとへ餘りに尊いものではないにしろ、朗らかな圓やかな生涯を、レオニード・エフゲニエーウイッチに委すことを恐れてゐるのである。しかもパヤデルカはあのやうに優しく歌つてゐるのに、彼女は孤獨であるのだ……

リョーリヤ・ウェリホーワは遂に寢入つてしまふ、そして頭被を被つたレオニード・エフゲニエーウイッチが、花をもつて彼女の所に近寄つて來て、耳の下を接吻する夢を見る。接吻は非度く嫌らしく非度く刺々してゐる。皮膚はその爲に燃える、次第々々に強く燃える。この傷みが薄い夢の被ひを破る。リョーリヤはもう眠つてゐない。しかし目覺めて見ても耳の下の一點が何だか燃えてゐる。そして手の上にも、右の肩の下にも、或る何かの點が燃えて傷む、そしてそこから火花が出ないのが不思議な位である。リョーリヤ・ウェリホーワは電氣をつける、そして枕被ひの上に一匹の大きい長い南京虫とボタンの周りに中と云ふ字の形をして並んでゐる丸い小さい澤山の南京虫を見る、リョーリヤ・ウェリホーワは毛布を跳ね除ける、そして彼女の足に添ふて南京虫の行列が動いて居り、その中の多くのものはもう死んでゐるのを見る。リョーリヤ・ウェリホーワは飛上る、彼女の全身が燃える。彼女は喰はれた場所を冷い水で冷したら、多少氣持がよくなるであらうと考へる。彼女はタオルに包つて臺所の水道の所に駈けてゆく。しかし水道の下の水受けの底の所には耳が一つしかない大きな鼠がゐて、水を飲んでゐる。リョーリヤ・ウェリホーワは死んだやうになつて化粧室に飛込んでゆく。彼女は扉を押し開く、そしてそこに浴槽の上に低く、腰まで裸になつた彼女の全く見知らない男を見る、彼女は突嗟の間にそれが盜賊であると思つた。男は振返る、とそこに縞のタオルに包まれ、眼の代りに二つの黄色い疑問符をもつた驚怖の化身が立つてゐるのだ。男は手拭掛から上衣を取つてその中に濡れた手を通し、こうして自分の裸體を隱す。そうして口を開く——

「タワーリシチ、あなたは大變吃驚なすつたやうですね。でも別にたいしたことはないんです。勿論私が戸を締めなかつたのが悪かつたのです。みんな眠つてゐると思つたもんですから。それに突然あなたが來られたのです。しかしいづれにしても御安心下さい。」

「あなたは一體何處からいらつしやつたんです？」とリョーリヤ・ウェリホーワは齒を顫せながら訊ねる。「あなたはどなたです？　私は一度もあなたを見たことはありませんわ。どの家の方です？」

「どの家ですつて、タワーリシチ？　私はこの家に住んでゐるのですよ。サモカートフの所の部屋を半分借りてゐるんです。唯私の仕事

が夜だものでして、私は活動寫眞の技師をしてゐるんです。で何日遲く歸つて來ます。活動がはねるのが遲いものですから。それにあなたはもつと早くお寢みになるのでせうね。だから私達はお會ひもしないんですよ。」

「今は何時でせう？」

「もう二時ですよ、タワーリシチ。十五分位前でせう。であなたは何故お寢みにならないのです？」

「南京虫、」と恐ろしい小聲でリヨーリヤ・ウエリホーワが答へる。「もう南京虫だらけなんです。まるでどうにも仕樣がないんです……」

濡れた上衣を着、額には濡れた茶色の髮を垂したこのタワーリシチは、注意深く歩きながら、リヨーリヤ・ウエリホーワについて彼女の部屋に這入つて行く。二人は力をあはせて枕被ひやシーツから南京虫を緑色のガラスの電燈の傘の中に振り落して、それが這ひ出さないやうにと新聞で包んだ。それから濡れた上衣のタワーリシチは寢臺の頭中に移し、その前の脚の下には水を入れた茶碗を据え、後の脚の下には矢張水を入れた皿を置いた、――と云ふのはリヨーリヤ・ウエリホーワの所にはもう茶碗がなかつたから。そうして彼は云つた、――

「ではさあ、タワーリシチ、お寢みなさい。明日私はあなたにクロポモールを持つて來てあげませう。それはこんなに長い口を持つたブリキの噴霧器なんです。中に火を入れ、その上に水を入れます。水が沸騰する。そしてその口から強い細い流れをなして蒸氣が飛出つつて云ふ仕掛けです。何のことはない、例へば汽笛を鳴らす時の汽罐車ですよ。御覽になつたことがあるでせう？　南京虫なんかすぐ死んでしまいますよ。所で私の名はエーゴル・パヴロウイッチ テレンチエフ。あなたに御知合が出來るのが大變に愉快です、タワーリシチ。お寢みなさい。」

そうしてエーゴル・パヴロウイッチ・テレンチエフは注意深く足を運びつゝ出て行く、――南京虫のはいつた電燈の傘を抱きながら。

リヨーリヤ ウエリホーワは再び横になり、再び夢を見る。レオニード・エフゲニエーウイッチを見る。彼は芝居に出て來るのと同じ鋲頭のついたネクタイをしてゐる。所がその鋲頭の一つ一つが――大きた南京虫に見える。それから、灰色の眼、濡れた髮、上衣を見る、上衣にはボタンが一つ取れてゐる。それは確かに活動寫眞館で取れたのに縫ひ付けて呉れる人がゐないのだ。

朝になる、南京虫が非常に廣い地域を占領したこと、そしてその攻撃の力は根據所を遠ざかるに從つて弱つてゐると云ふこと、が明かになつた。

一日中リヨーリヤ・ウエリホーワは洋菓子（はかり賣りと箱入り）を、そして特に見本菓子を賣つてゐる。全モスクワが見本菓子の上に建て

られてしまつたと思つてもよい位だ。あの大理石のやうた光澤をもつた蜜蜂子はリョーリヤ、ウエリホーワにとつてまことに呪はしい。彼女は、餓えて死んでも蜜蜂子は食べないであらうと確信してゐる。
夕方、リョーリヤ、ウエリホーワはカルタの卓に倚つて、同志カーメネフの心持皮肉な眸の下で、エレンプルグの第十二のパイプを讀んでゐる。パヤデルカと南京虫と額の濡れた騎兵との昨夜のことが彼女には夢のやうに思はれる。しかしランプに傘がない所を見ると、みんな本當に起つたことに異ひなかつた……

十時に、戸を叩いて、エーゴル・パヴロウイッチ・テレンチエフが這入つて來た。彼は昨夜と同じであつた。唯昨夜よりもきちんとした風をしてゐる。上衣には、似合はない色の、そしてまた似合はない絲でではあつたが、ボタンが縫付けてあつた。彼は右の腕の下にランプの傘を持つてゐた、そこには、深い皿の中にのやうに、何か横つてゐた。そして右手には――蒸氣の出てゐる非度く長い口をもつた異様な形のブリキの薬罐を持つてゐた。
「今日は、タワーリシチ、」と彼は云つた、「今日は月曜だもので、お休みなのです。私はクロポモールを持つて來ました。さあ何處にあなたの南京虫はゐるんです？」
南京虫はちやんと自分の場所にゐた。寢臺の隙間々々に南京虫の家族が坐つてゐた。斷末魔の小さい珊瑚のやうた南京虫が、寢臺が落ちないやうに支へてゐる二の場所に遊んでゐた。家族を持つた者は、その喰入るやうな流れを起して、人間に知られない生活の何はれてゐたその靜かた隱れたる南京虫の住家へと逃込して行つた。
「此處、それから此處も。此處も、」――とリョーリヤ・ウエリホーワは示指して行つた。

傘のないランプは明るい光を流した。活動寫眞のやうなくつきりした影が二つの頭の上に、二つの薄色の頭の上に横つた。そしてこの寫眞がそのクライマックスに達した時、扉が開いて、閾の上に、立派なネクタイ（青地に白い南京虫）を付け、微笑を浮べたレオニード・エフゲニエーウイッチが現はれて來た。尤も微笑は活動寫眞のやうに徐々に彼の顔から消えて行つた。
「南京虫なの、」とどぎまぎしてリョーリヤ・ワエリホーワが云ふ、「何處も彼處も南京虫だらけなの、一晩中に出て來たのです。まるで市場のやう……」

エーゴル・パヴロウイッチ・ブレンチエフは床から立上らずに、またクロポモールの爲にしかめた右の眼を動かさずに、右の眼でレオニード・エフゲニエーウイッチを眺め、そして彼が來たのを好はない樣子であつた。
「私は、つまり、あなたを誘ひに來たのです、レンチカ、」とこれも亦た眼をパチ〳〵しながら時々にレオニード・エフゲニエーウイッチが云

つた、──今日は月曜で芝居はないんです。ですが私の所に今、「墮胎」と云ふ映畫のシナリオを作つたドクトル・ガールチンの講演會の切符が二枚あります。講義は「墮胎と避姙法」と云ふんです。あなたにも未來の女として是非とも必要だと思ひます。それに……」

「あなたは何だつてそんなに急いでゐるのです？」とエーゴル・パヴロウイッチ・テレンチエフは、注意深く蒸氣の流れを見詰めながら斷乎に云つた、「私の考へではまだそんなことは時期が早いと思ひます……」

「私は今日よく眠れなかつたのですの、」とその場を取持ちながらリヨーリャ・ウエリ・ホーワが遮つた。「何處から來たのだかまるで分らない南京虫が。それでエーゴル・パヴロウイッチさんがクロポモールを持つて來て下さつたんです、そして……」

四對の眼（同志カーメネフの眼も數へて）は空中を、煙つた寢台の上を横ぎつた、四對の眼、その中の青玉のやうな一對は、驚いて見え、その爲にまばゆい光を發してゐた。

「餘計なことでした、」と遂にレオーニード・エフゲニエーウイッチは云つた、「全く餘計なことでした。エレーナ・コンスタンチノフナ（彼は初めて彼女をこう呼んだ）あなたは何故夜、私の所にいらつしやらなかつたのです、私の所には南京虫なんかゐなかつたんですのに。それは、南京虫に引寄せて手傳つてもらうやうな風をして夜中に若い男を自分の部屋へ入れるよりは、勿論、許すべき事ぢやありませんか。──

エーゴル・パヴロウイッチ・テレンチエフは、徐ろに床から立上り、そしてクロポモールを振り廻すことによつて自分の言葉を補ひながら云つた、──

「もし、あなたは、」と彼は扉の方に近づきながら云ふ、「ドクトル・ガールキンの「墮胎」と何とか法と云ふ講義に急いでいらつしやつたんぢやありませんか。では急いで行らつしやい、でないと……遅れますよ……」

こうしてレオニード・エフゲニエーウイッチは、ドクトル・ガールキンの講義に急いで出て行つた。

エーゴル・パヴロウイッチ・テレンチエフは、再び蚊のそれのやうな口をもつたクロポモールの上に身を屈めた。

「タワーリシチ、あなたは何だか隨分感動されたやうですねえ？」と彼は訊ねた、「顔がすつかり變つてしまいましたよ。南京虫のやうなものでも注意を向ける必要がありますね。それよりもどうです、二人して茶でも飲みませんか、蜜菓子で、──實は私此處に持つて來たんです……」

その夜、同志カーメネフは異常な出來事の目撃者になつた。彼はリヨーリャ・ウエリホーワが蜜菓子を喰べて、生れて初めてそれを甘味しく思つたと云ふことの目撃者となつたのである。

Nonsense Story
四次元の世界

毛髪がピアノの線にふれる時

阿部徳藏

一

男は彼等の作品が好きだつた。彼等とはショパンとリストだ。

男はピアノを弾いてゐた。彼等の「メイドンス、ウイッシユー」を。

男の指の正確なタッチが、優しい少女の祈りを旋律の中に織込んで、美しい和音に響かせながら此曲を運んで行く。あるひは高音部に、あるひは低音部に、移り變る旋律に依つて男は、藝術の上にのみゆるされてゐる尊い恍惚の境ひにはいつて行く。

夕闇が、野にも山にも、打續く峰のあなたおもてを僅に殘して、勿論、彼のゐるこの山莊にも、通り魔の靈を呼集めながら、迫つてゐた。

二

曲が進んで第三の變格部に入つた。男は二三の魔和絃を響かせながら、嬰イ音の和絃を激しく打つた。その瞬間、男の指は樂鍵の上でぱつたり止つた。足はペダルに吸付けられてゐた。目は空に輝く妖星のひとつを瞶んで。

彼が石像に變つたといふことは、物象の震動に大變動が起つたことを語るものではあるまいか？

此時、ピアノの樂鍵に通り魔の靈が一度に憑依した。一齊に算を亂して亂れ散るピアノの樂鍵！骸骨が破裂した時の樣に。ピアノの中の線が、一時にうおつといふ叫びをあげた。此響に交つて、毛髪がピアノの線に接觸する纖細な響きが、大變動を動した物象の震動を通し

て、幽靈の騷ぎの樣に流れてゐた。突然！ 興奮患者の驚きにまさ、ピアノの中から蒼白な女の手が突出て來た。其手が一筋の小路を描きながら、下から男の頸に抱きついた。散亂した樂鍵のひとつひとつが、ひゆう、いゝ、ひゆう、いゝと宙を飛んだ。それが室の隅に集ると、一列に並んで、ふたゝび「少女の願ひ」を奏で始めた。木琴が踊をうたひ、通り魔が拍子を取つて。仙女來！ 四條を透通るもの！ テレキニーシスの起る前の出來事だ。

三

窓際の長椅子で、石像は女からの手厚い介抱を受けてゐる。女は石像の蘇生の爲に全力を盡してゐる。冷い水が石像の口を割つて注がれた。

ウイスキー、白葡萄酒等々。と女が考へ得られるだけの手當が。しかし默々として動かない。可愛想に！ 女は遂に泣出した。石像の蘇生が自分の力の外にあることを知つた時、女は通り魔の靈を呼んだ。通り魔が來て笑つた「御婦人つてありがたいものだなあ！」いひながらフットボールの要領でこの石像の背中をぶつた。石像はもとの男に變つた。女は思はず男を抱締めた。男は靜に目をあいて。

女の顏が！ 一度も見たことのない女の顏が、ふと彼の目に映つた瞬間、彼はまさしく正氣付いた。彼はゴム鞠の樣に飛上つて、「誰だッ」と叫んだ。といふよりも怒號たのだ。

四

彼が何よりも嫌だつたもの！ それは、ピアノの彈奏中人にはいられることだつた。だから彼は、彈奏の間際には、入口の扉にも、窓のガラス戸にも、嚴重に、鍵をかけておいた。『此頃合彼は何だからだ！』といふ理性的の驚きは感じてゐなかつた筈だ。勿論その暇もなかつたし。たゞ見たことのない顏！ でたりなければ、理想といふものを、完全に理想といふものを超越した女の顏！ これなんだ。彼をあんなに驚かせたものは。それが不意打ちだつたので、彼も思はず怒號してしまつたのだ。

しかし心が落付くにつれて、女をどなりつけたといふことが、もし相手の感情を害はしなかつたかと心配し始めた程、女は魅惑そのものであつたのだ。

五

「わるかつたわねえ。あなたをこんな目に合せてしまつて。あたくし、なんておわびしたらいゝんでせう？」

男は周章てた。

「僕こそ！ どなつたりして……。」

「まあ嫌だ、そんなこと。あたり前ぢやあないの。あたし、家宅侵入罪つていふの犯してゐるんですもの。どんなに叱られたつて、ぶた

れたつて、……だけど、もし貴郎が赦して頂けるなら……。」

甘える様に男の傍へ、すり寄つて女は長椅子に腰をかけてゐる。

ヘラヘラ、フッフッ、ハッハッ！

「おや何だらう、あの聲？」

氣味惡さうに男が聽耳を立てた。

「ほうつとけばいゝわ。ぢきにやんでしまふことよ」

女は案外平氣でゐる。

此時、花瓶にさした溫室咲きの紅い花が、二三度グルグル廻りをしたかと思ふと、──奇術士、ロベール・ウーダンをさへ驚嘆させたであらう巧みさで──いゝいゝひよつこり人の顏になつた。とその顏が、目も鼻も口も滅茶苦茶にして、

ヘラヘラ、フッフッ、ハッハッ！

「あいつだ！　笑つてるのは。」

氣色ばんで、男が立上らうとすると、

「いゝつていふのに。あれ先刻の通り魔なんだわ。歸りがけにあたし達のこと、揶揄てゐるの。通り魔の老爺さん、とても剽化者よ。でも仕方がないとも思ふわ。ねえ、からかはれたつて……。」

フフフッフッ！

男が笑ふ。

六

「あなた不思議に思はない？　あたしのこと何だと思つてること？」

其處なんだ。絶えず彼の頭を惱ませてゐたのは。しかしうかつに其問題に觸れて、もし相手の感情を害してはといふ心配が、彼に沈默を守らせてゐたに過ぎなかつた。今女から、かうきかれたといふことは、彼にとつてもつけの幸といはねばならぬ。

「一體あなたはどういふ方なんです？」

きゝかへされて、今更女の顏には不安の色が漂ひ始めた。

「さあ、お話しゝてもいゝんですけど、いゝえ、是非々々きいていただかなければならないんですけど。でも、もしお話しゝてそんな奴嫌だつてあなたにいはれてしまつたら……。」

「馬鹿な！　もし僕がさう思つてるくらゐなら、とうに其處きいてた筈ぢやありませんか。ねえ、さうでしやう。」

「えゝ、それはさうですけど……。」

しばらく女は考へてゐた。と、

「ほんとうにあなた嫌つていはないこと？」

「斷じていひません。」

「ではお話ししますわ、思ひ切つて。あたくし……ほんとうは……人間ぢやあないんですの。」

七

「俺はもう歸りたいんだ。だがねえ、乘りかゝつた船ぢやあ仕方がな

いからねえ。實は今迄待つてたんだ。もう心配することはないんだから、お前の身上、何もかも打明けておしまひよ。」

天井裏で親切な通り魔が、心配相な顔をしてゐる女にいつてきかせる聲がした。

八

女中が來て、「先生がいらつしやいました」といつた。ピアノの先生である。十許になる男の子が、飛上つて喜んだ。讀みかけの本をほうり出すと、あたふた玄關へかけつけた。「先生ッ」かういつた時には、先生の胸に漂ふサイクラメンの香氣に顔を埋めて、子供は、なよやかな袖の中に包み込まれてゐた。

子供はグランドピアノの前に腰を下してゐる。シュウマンの「夢」を弾きながら。

「此處、かうオ?………あッ、先生」

「いいのよ、どうか弾いてゝ。」

「ですけれど先生は………。」

ぐつたりとして先生はピアノの横へ凭れてゐる。目には、子供を驚かせた涙を一杯に溜めて。

ふたゝび子供の指が樂鍵の上を動いた。各々が獨立した生物であるかの様に—

白い小さい指を、凝視したまゝ先生の顔は臘石の様に白くなつた。

子供が緘口の紐を打つた其時から。

幻想の境へ立ち入れば、かみきつた白い小さい指から血液が一滴—

ポタリとピアノへ落ちた。それは先生の涙だつた。

九

瘋癲者の目を除いては、決して見ることの出來ない速力で、自動車が宙を飛んでゐる。稲妻のジッグザッグが縦横に折れ亂れる合間々々を潜抜けて！　狂人の様に運轉してゐた男も、遂に氣を失つてしまつた。「危いッ！」かう思つた瞬間には、棒立ちに突つ立つた電光の火柱へ、微塵となつて自動車は衝突してゐたのだ。と火柱も自動車も、電光そのものゝ性質に依つて、閃く一瞬の間に消失した。後にはひとりの蘇生した運轉手を殘して。

男が運轉臺だと思つてゐたのは、自分の室の長椅子だつた。ハンドルではなくて、女の腕を力一杯に握りしめて。男の汗がダラ〳〵女の腕から指へ傳つて流れてゐる。

「行つて來て？」

女がきいた。ウイスキイのコップを男の口へあてがひながら。

十

男は目を擦つてゐる。

「夢かしら？」

「…………。」

「現實！　まさに現實だわ。」

『……N先生！　あゝN先生だ。N先生と一緒に僕はピアノを彈いてたんだから……さうだ、足掛け二十年も前の出來事だ。』

「二十年！　まあおろかしいことよ！　千年！　いゝえ、一萬年だつて！　現實つていふ事實はあくまで現實だわ。オールマイテイだつて動すことの出來ない！」

「そりやあ駄目だ。あなただけの主觀なんだもの、僕には通用しやしない。やつぱり夢？　でなけりやあ幻影？　だつたんだ。」

「科學者はさういふかも知れませんわ。」

「科學者でなくつても。」

「いゝえ、違ひますわよ。」

女は眞劍だつた。

十一

「あたしつていふ靈媒者を通して、あなたの心靈が四次元の世界へ突入つたの。まあきいて頂戴、よくつて。四次元の世界つて、まだ現代科學に未知の世界なんですからねえ。かなり寛大な學者だつて、今の樣な事件が起つた場合、靈魂の記憶―フイジカル　ブレーンに關係のないレミニセンス―つていつちまうんでせう。でもそれだけにいつてくれる人、實際はひらけてゐる方の學者だわ。その中で、間違へちやあ嫌よ、四次元の世界の中でよ、あなただけの過去の二十年つていふ永い永い歳月が、電光のひらめくひまに逆行して、現在のあなたが、現在の儘で、二十年前のあなたに戻つたんだわ。矛盾！　つていふ？　この事！　いゝえ。其時なんだわ、時間の逆轉つていふ異常な變動が止つたのは！　ですもの、今のこの事實、夢でもなければ幻影でもありはしないわ。あなたは確實に二十年前のあなたに戻つたの。くどいけど現在の儘でよ。此事！　現實つていはないで、まあ何ていつたらいゝんでせう？」

十二

女は自分の言葉に釣込まれて、不知不識夢の境ひへはいつて行く。男も考へさせられた。が、

「では其時、僕の身體は何處にあつたんです？」

はつとして、女は女に戻つた。羞恥の影が女の顏に動いた。ほんの瞬間だが。

「抱いてたんだわ、あたしが。あなたがあたしの、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、………とても力があるんですもの。」

ガランス色に室の中を染め出してゐる和かい光線は、いかにもコージイな感じを人の目に與へてゐる。室一面に漂ひ流れるその光の中へ、女は、大膽に腕の附根まで捲り出した。火焰の樣なアヌマダガム

の幻想に憑依れて？　汗に潤んだ女の白い腕には、また男の、、、、、、、、、、、、、、けを鮮明に殘してゐる。女は恍惚それに觀入つてゐた。もう其時には、女の腕に、アンノウン　フォースが作用きかけてゐたのであつた。やがて靜に、其腕が動出した。蛇使ひの呪文に操られる毒蛇の様に！　腕は、見えない力の跡を追つて、男の後へ、、、、、、、、、、、、、、、、ついてゐた。ググ！　腕が、男の頸を少々づゝ引寄せる。無邪氣な自動人形の機巧？

通り魔も安心して歸つた後だ。

十三

其處には夢から覺めた樣な兩人があつた。殊に女は、怪火の妖靈に心臟の奧深くくひ入られて、……いたいたしいほど。

十四

二十年前の話だ。N先生がピアノを敎へてゐた時、可愛と思ふ激しい情愛が涙となつて先生の目に湧き出て來た。その涙の中には一個の水の精が宿つてゐた。ポタリと涙がピアノの上へ落ちた。そして變ロの弦を導く線の上にのつた。無心でシユウマンの「夢」を彈いてゐたその子が、はからず變ロの弦を打つたのも丁度其時だつたのだ。突然不可解な自然の力が作用いた。涙の中の水の精は、その力の作用に依つて、子供の打つたピアノの音と共に、水の世界から音の世界へ移り變つた。

その時、そのスピリツトが、特に「女性」といふ性を具へて音の世界へ現出たのも、子供に愛着した先生の一念が涙の中の水の精にこびりついて、容易に入り込めぬ音響の世界まで到達してゐたからだつたのだ。——先生自身は知らないことであつても。

さうして生れたその女性が、今こゝにゐる此女であることはいふまでもないことだ。だから此女は男の彈いたピアノの音の精であつて、かつN先生の懸念を相續して現れ出たのである。

十五

其後二十年、男はピアノを彈かない日はなかつた。自然女が男に逢はない日もなかつたのだ。女は年を過すに從つてこの男が好きになつた。いつか好きといふ程度を通り越してゐた，どんな日でも女は、男の住んでゐる三次元の世界へ飛んで出たいと、萬有に祈りを捧げぬ日はなかつた。しかし兩人は次元の相違といふ玄妙な帳に遮られてゐた。

突然、女が三次元の世界へ出現出來る時が來た。偶々男が「少女の願」を彈いたといふことに依つて。

男は彼の持つ強い藝術の力で、彈奏の半から不知不識白い恍惚境にはいつて入つた。そして彼が嬰イ音の和絃を激しく打つた瞬間　彼は完全な恍惚狀態になつてゐたのだ。其時！

彼の心靈は彼が食色よりも熱愛する音樂！　の世界へ突入つた。こ

の都合當然の事ではないか。この兩性の心靈が、四次元の世界の中にあつて、まつたく一個に結付き溶合つて、岩壁をも打貫く強い々々魔術力に變つたのは！　そしてその魔術力だ。音響の精の具體化現象といふ稀有なる事件をこの山莊の一室に惹起したのも。

十六

「そろ々々歸り度くなりやしない？」

「まあ、思ひもよらないことよ」

「さうかしら、二十年も住馴れた四次元の世界！」

「どうしてそんなことをきくの？」

「どうしてつていふわけもないけど。」

「ぢやあよしてよ、そんな話。あたし三次元の世界へ來て、もう自分から歸られない身體にしたつてこと、あなた知つてるぢやあないの。」

「知らないや。」

「薄情ねえ！」

「薄情さ、理由をいはないんだもの……。」

「だつて、……困るわ、あたし。」

顔を背けて窓から、女は暗い戸外を眺めやつた。

十七

「あんたにお山の木が揺れて、まあひどい木枯、三日月様が散りさうだわ。寒さうでお氣の毒ねえ。三日月様、あたしずゐ分仲よしだつたんですもの。」

「何です？　三日月様と仲よし！」

男は吃驚してきゝかへした。

「えゝ、だけどそんなに驚くことなんかありはしないわ。あたし、始終お目にかゝつてたの。四次元の世界のもの、音の世界だつて、匂の世界だつて、みんな肉體つてものがないんですもの。思想ッきりで生きてるんですからねえ。お月樣が空に光つて、まあ美麗だ、あたし行くわ！　たゞ思つたゞけよ。でももうお月樣の處へ行つちまつてるの。深い々々水の底で、青い藻が波にゆれて、おゝ美しいこと！　つて思へば、もうあたし水の底へはいつちまつてるわ。高いお山の土の中に、ぴかつと光る寶石が、あたしにはようくみえるの。飛んでつたわ。ちひさい、輝いた、可愛い、石の中へ、ひとりぼつちではいつちやつて、あたしあなたのことを考へてたの。お友達もずゐ分あつたわよ。菫や蒲公英が廣い野原に咲く時分、色の精や、匂の精や、陽炎の幻の精なんかと、蝶々の羽根へのつかつたり、まつさをな草の上をころがつたり、ほんとうに好き勝手に、あたし仕度い放題に遊んだわ。まあ思ひ出すとねえ、四次元の世界ッていふ肉體のない世界！　ずゐぶん樂しいこともあつたわよ。」

十八

「始めてきいた。四次元の世界ッて、實に僕の理想境だつたのだ。」
感心する男の言葉を遮ぎつて、
「いゝえ、それはもう昨日のこと。あたし今日から三次元の世界の人になつたんだわ。」
女はきつぱりいひ切つた。歡喜と幸福とに輝く目をみ開いて。
彼女はまさに幸福だ。こんな若い潑溂とした肉體！　生氣そのものの樣な！　と彼といふ彼女の永遠の戀人！　この二つを彼女は一度に天から授けられたのだもの。邪魔といへば此上もなく邪魔な肉體！　しかしこの邪魔な肉體があつて始めて彼の存在といふものも肯定されるこの喜び！　そして自然が三次元の世界のものにだけ與へてくれた歡樂！
どうしてこの事を謳歌せずに居られやう？　彼女は、滿身の力を擧げて、この次元を異にした世界の歡樂に彼女自身を捧げやうと思つたのである。
「もうあたし、何ていつてもあなたを離さないことよ！」
これこそ、心の底からの彼女の聲であつた。

十九

置時計の周圍に妖氣が漂つた。女はすぐにそれを直覺した。時計に憑物がしたから、なんでも知り度いと思ふこと、きゝさへすれば時計が鳴つて返事をする。一つ鳴れば「イエース」、二つたれば「ノー」、三つ四つ五つ、チン々々……連打すれば「勿論々々……」といふことだと男に話した。
「そいつあ面白いや。すぐきいてみやう。」
男が眞面くさつて時計にお辭儀をした。
「この婦人は僕を愛してゐますか？」
時計がチンと鳴つた。
「今度はあたし。あたしに並んでゐる人、あたしを愛してゐますか？」
時計が「チン」と鳴つた。兩人は顏見合せて笑つた。
「もう一度僕が。僕の膝の上へ手をのせてる人は、何物よりももつと〳〵僕を愛してゐますか？」
時計が「チン々々々……」と滅多打をした。
「ぢやあたし、いゝこときくわ。あたし達ふたりより、もつと〳〵相愛してゐる兩性がこの世界にすんでゐますか？」
時計が「チンチン」と二つ鳴つた。兩人は手をたゝいて喜んだ。と男は思ひ出した樣に、
「時計が二つ鳴つたよ。もう二時なんだ。そろ〳〵寢なくちやあ。」
女はかぶりをふつた。
「ねむくないわちつとも。さつきの珈琲とても濃かつたんですもの、

あたしすつかりうかされちまつて、……」

「珈琲のせいかねえ？　ほんとうの原因」

「どうでせう。さう思はない？」

「當てゝみやうか、金的を、ポッーンと。」

「いゝわ、謎をかはすから。」

「ねるのが……惜いんだろ。」

「まあ、凄いわ。透視術者！」

「驚く可きマインド、リーディング！」

「アンコール、アンコール。」

「もし交靈會だつたら……。」

「素的よ。とてもセンセーショナル！」

「おだてゝゐるね。」

「あたしのひいき目？」

「だけど困つたねえ、だん／＼更けちまふし。あ、いゝものがある。

エロナール。」

「まあ嫌だ。そんなもの飲んでねるくらゐなら……いゝぢやないの、明日ねれば。」

「宵張娘！」

「だつて……四次元の世界のこと、まだ／＼きゝたいつてさつき、そいつてたぢやあない？」

木枯か電燈を吹消した。三次元の世界の幸福に歡喜舞踊する男女の姿が、影絵の如く星の光に描き出されてゐた。

二十

眩暈、恍惚、忘却、——之等の交錯する室内の雰圍氣は、遂にその均衡を保持することが出來なくなつた。その結果として起るものは？物象の震動數の變化と、それに伴ふ怪異現象の出現だ。勿論現代科學からみてのだが。

假に現象そのものだけを拔出して考へれば、怪異はもとより怪異だ。しかし、さういふものゝ起るといふことに、すでに々々必然性がある以上、やはり其事實をも自然の法則の中に入れねばならぬ。だから、決して、現象を呼びかけて、超自然的といつてはならぬ。何だ？その現象といふものは。心靈學者の力說するテレキニーシスの純粹現象であらうか？疑ふ。

二十一

男と女が長椅子に腰をかけてゐた。靜に長椅子を離れて、兩人は空中に登つて行く。驚く可きレギテーシアンの現象だ！嘗てハーリー・ケラーが全世界を驚倒せしめた大魔術！。——これから此室内の出來事に關しては、引力の法則等々の科學的術語は禁物にして貰ひ度い。花瓶にさしてある花が、ひとりでに拔け出して室の中を動廻つた。ピアノの蓋が自然にあいて雑多な曲が奏で始めた。カチンといふ音を

合圖に、鳩時計の針が逆に動いた。水さしが、不意に飛上つて、コップに水を注いだ。一切がマハトマ アンダンの奇現象!。

此時窓のガラス戸を透通つて、紫丁香の花片が一齊に室の中へ雪崩込んだ。思考の世界から雪の樣に! 茴香、木犀、百合、等々の精靈は水鬼となつて床から舞ひ登つた。色彩、芳香、韻味、之等が入り違ひ錯雜する催眠の焦點を通して、遙い遙い空の果てから三日月が驀進に飛んで來た。それが兩人の頭の上で廻つた。刻々に早く、はてはモーターファンの樣に急廻轉を始めたので、さながら滿月の如くに見えた。その月の中から、二羽の白鳥が飛出して、後になり先になり室の中を翔廻つてゐた。ふと一緒になつたと思つた時、たちまち一羽の大きい鳥に化けた。空中に浮んでゐる卓子の上へのつて、喉を鳴しながら勢よく羽搏をした。と、その鳥が天を仰いで、寫象に向つては夢幻泡沫! 自個獨身は、消えよとばかりに鳴き叫んだ。怪奇な古像に殘されてゐる白鳥の魂をそのまゝに。

二十二

炎々と燃えてるロージクルーシアンの怪火!

生靈は幻の靈衣に包れて火のカーテンを抜けた。後には、數奇の一念をカーテンに殘して。スピリットの影だ。影が笑ふ。N先生ッ?! 男が飛びついたら、霧は、その影をくるみ込んで、思考の世界へ上つた。男の摑んだものは? 淡い〳〵サイクラメンの香氣! と妖術に操られた靈魂の訓練!

ピアノに凭れてゐた男が靜に目をあいた。その瞬間、彼の腦裏に閃いたふたつの恍惚境! 彼は考へた。考へてゐた。考へてゐる。突然、ピアノの樂鍵が一齊に飛上つた。彼等は叫んだ「靈術!」と。彼はひとつを選ぶことが出來た。鋭い靈術に依つてのそれを。四次元の世界?

近代物理學とパル教授の錯覺

稻垣足穗

三鷹村東京天文臺の辻技師は、友人山內恒身君をとほして私の知ることができた新進篤學の士ですが、私はこの四月に天文臺を案內してもらつたお禮のつもりで、自分の二三の著書——いづれもお月さまやホーキ星のお伽集を送つておきました。その辻氏が、近頃木星がよく見えてそれをかこんでゐる衛星の工合が、ちやうど太陽系を外苑から眺めるやうで面白いから、やつてきてはどうかといふハガキを、山內君ならびに私へよこしてくれました。私たちが再びその郊外の高臺へ出かけたのは前週の火曜——十月二十三日の空が暮かゝつてくる時でしたが、こんな夕方からの客の何人にも經驗されることについて、私はこのペンを取るのではありません。それから二時間も經つて、主人が望遠鏡室からキラキラと星にかざられたまつくらなコンクリートの路をたどつて、ピカ〳〵した長い廊下のわきにある靜かな、青いシエードの電燈がともつた辻技師の部屋へ歸つてきたときでした。こんな田舍だからといふ前おきで以前にもしたやうに、ハムとパンをテーブルの上にひろげ、アルコールランプであたゝめた紅茶をもてなしたがら、辻技師は、ふいに思ひついたやうに、「あなたなら知つてゐるだらう」と云つて、ヘツサンカンといふ奇術師はほんとうにゐたのかどうかといふことを、私へ問ひかけました。これは此方が思ひかけませんでした。夕方顏を合はしたとき山內君から、私の短篇集に關する意見が求められたのですが、辻氏はさう云はれて、はじめて氣付いたやうに私へ禮を云ひ、面白いよと山內君の方へ答へただけでした。そして、なほ山內君から私の作のモーチフになつてゐる簡單な天文學についての言葉が出されたときも、やーと云つて辻氏は苦笑したのみでした。實際子午儀といふのをのぞいて、そこの十字線へやつてくる恒星をつかまへて日本ぢうの時間の標準をきめてゐる辻光之助氏に取つて、それらは少し困る事共にちがひありません。天文學者が私たちの知つてゐる部分のやうなローエル博士やフノマリオン氏でないとは、むろん私とて知つてゐるし、純粹の學問上においても、辻氏に對する山內君の稚拙は、既に辻氏が一瞬のあいまいなことにふれないといふ點におかれてゐるやうでした。そして自分とは大して年齢もちがはぬ辻氏が、

すでにそんな常人にはゆるされぬ高尚な科學のよろこびを知つて、こんなへんぴなところに孜々としてたゆまない日々を送つてゐることは、私にはうらやましいとさへ思はれてゐたのですから、そんな口數少ない人が、困つたものだとしながらも、自分のお伽噺を讀んでくれたであらうことはよくわかつてゐたのです。ところが、やにはにそんな質問が呈されたので、山内君はそれを私の作品のもたらした何かの功果だと受取つたのでせう、「辻はこれでなかく泣きどころを持つてゐるのだよ」と云ひながら、そこにかゝつてゐる額緣の、中世紀風な美人畫から、マホガニイを光らせてゐる長方形の箱の方を示し、あそこに入つてゐるレコードは、みんなシューベルトだともつけ加へました。

「天文學といふものが宇宙をひろめて行き、お天道さまだつてお星さまだつて、吾々にはごらんのやうに何の趣味もない計算問題として扱はれてゐるが、一方、タルホ君に見るやうなお星さまはどうしたものかな、お星さまが酒場へやつてきたりホーキ星が自動車ととつ組んだりすることもどこかにほんとうらしい――それにこんな考へは昔は全くなかつたものらしい。近代耽美派文學（さう云ふのかどうかよく知らないが）の一形式だといふ他に、もつと根據を持つたものらしい」――かういふことを辻技師が、半ばひとり言のやうに云ひ出したのは、れいのハッサンカンと、それから私の或る作品のヒントについての質問に對して、私が辻氏に答へてからでした。――この機會につけ加へますが、ハッサンカンといふのが、谷崎潤一郎氏によつて紹介されたインドの妖術師の名前であることは、諸君の大部分が御承知のところと思ひます。私も調べてみたことがありますが、即ち、そんな人物が今から五十年ばかり以前に、カルカッタに住んでゐたといふことは、ヴンセントスミスその他著名な東方研究家の記載に認められることなのです。潤一郎氏はスミス氏の記述のみに據つてゐたやうですが、ジョンオーマンといふ人のにはどれくらゐ信用できるものかどうかハッサンカンが修業をしたといふ近代文明から絶緣したヒマラヤ山の奥に、そゝり立つ高さの知れぬ絶壁の中間を切りひらいた石の街や、そこに集る妖術者のことまで見てきたやうにかいてあります。從つて、谷崎氏に親しくその幻術實驗の機を與へたといふインド志士ミスラ氏は作りものらしいが、ともかくハッサンカン一派が、眼の一轉と共に忽ちかき消える地球に入れかはつて出現する大千世界を信じ、みづからい、デジンと稱する魔神の力を借りて、無數の菩薩や悪鬼が曼陀羅をゑがき出してゐる須彌山界に遊行してゐたことも、決して一小說家の空想ではないとこゝに云ひ切れます。――後者の私の作品といふのは、「廿世紀須彌山」といふ標題なのですが、これは別にインドの幻術とは關係がありません。地球の尖端といふものが發見されてそこが避暑地になつてゐる。この虛空に突出した岬をさまぐな天體がとほる、或晩ロスといふ氣まぐれな男がオートバイにまたがつて、折から近づいた土星にとび移つて環の上を一周したといふ珍事が行はれた……何か

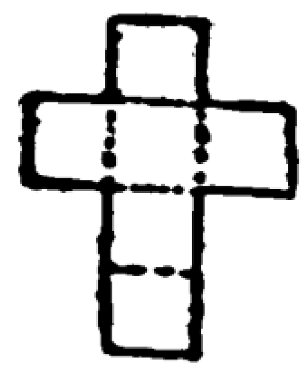
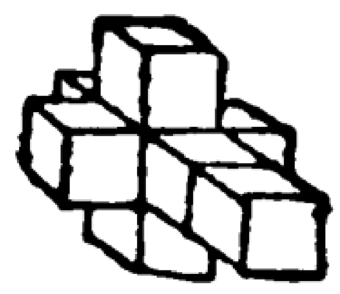
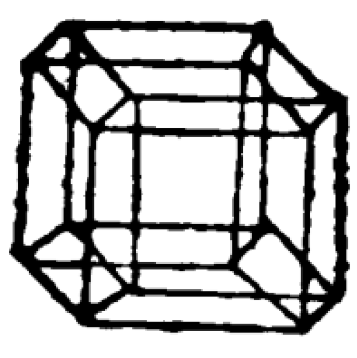
自動車のタイヤの廣告畫から思付いたそんなたわいもないものでしたが、それにしても今晩、そんな話題を、眞面目らしい口吻の元に聞き正す辻技師にはどんな意向があるのでせう？　時代における或る意識が電波のやうにつたへられるのは面白い問題だと云つた辻氏が、ちよつと調子が合はなくて笑ひそこねてゐる山内君ならびに私へ語るところによると、地球が圓筒形をしてゐなければならぬと主張してゐる物理學者があつて、これを想像說にとゞまらしめずにその實在を證するに直接の貢獻をしたのが、じつにそのハッサンカン一派の妖術とされたものである。且つ面白いことに、こんなあたらしい須彌山の絕頂においては、菩薩や惡鬼羅刹に入れかはつて、全くタルホ君の作品に見るやうなさまぐ\な天體のお化が出沒し、人々もまた土星の環の上をあるいたり、星によつてタバコに點火したり、ホーキ星を原動力にした飛行機をとばすやうなことを實際にやつてゐるらしい……

へーエといふやうな顏をさすがの山内君もしてゐました。辻氏は私の作をよんで、てつきりこの最近ヨーロッパ學界の傳說（？）から材を得たと考へ、しかも自分たちにも知られなつたものを私がどこから知つたらうかといふことに少なからぬ興味を抱かされてゐた結果が、今の質問になつたのだと云ひました。そして自身は、當面の事柄よりむしろ、そんなふうに一つの意識とか幻想とか云はれるものが、具體的なミヂアムを持たなくても傳はるといふ點に感心してゐる模樣でした。結局それは、こんな沈着な人にも合理的であればあるだけ藝術というものを期待する瞬間を約束されてゐる證據であつたやうに私には受取られ、それによつて、近頃自分の心にひそんでゐる事物を神祕的に解釋するくせへの光明をもたらされたやうに感じられもしたのです。それはさうとして、初めて耳にしたその月と星のフエアリーランドの圓筒狀世界とは？　一口にはさう云はれたものゝ一たい何物なのか、この問題は次の瞬間當然に起つてこなければなりませんでした。むろん私のかくものに似たものをかく作家のことなどではないでせう、しかも一學說に止つたものではないと云ふなら？——口に出した以上、私たちのそんな意向を避けられないと思つた辻氏は、それについては、アインスタインの業績が、ようやく一般的になりかけた七八年以前、歐米人の間につたへられ出した一つの謎語に氣付いてもらはなければならぬと云ひはじめました。"Pallo city" 口に出されてゐると、なるほど私もまるで知らぬものではありませんでした。私はたしか、カリガリ博士のフイルムを紹介する外國の雜誌の片すみでその名をはじめて知つたのですが、何でもそれによると、表現派のアイデアはパル教授といふ物理學者の世界觀から作れ、かゝる狀態の世界をパルシチイと名づけるといふやうなことしかわからなかつたのですが、これは當時二三の人たちの間に云はれ出してつひにそのまゝになつてしまつたやうです。それでその後私の知り得た範圍をこゝにちよつと傳へませう。——大戰直後、いづこからともなく囈語のやうにつたはり出した「パル都」は、單に「パル」アメリカにおいては "City of

Up-side-down" 即ち「さかさまの市街」とも呼ばれますが、このものは地球上のどこかに在り、或る特別な人々だけが飛行機及飛行船を利用する「ホワイトムーンライン」と呼ばれる秘密な航路をたどつて行くことができる……しかも、そこは吾々には到底考へ及ばぬ不可思議をもつて充され、言語に絶するすさまじいところであると共に、うつとりとするやうな場所でもある。これ以上は何人にも知られないのですが、こんな題目は刺戟を求めてゐた戰後の人々の好奇心をそゝるに恰好な話題になつた。スカンヂナビヤ半島のどこかに建設された人工樂園だと云ふ者もあるし、いやそれは一種の秘密結社の標語にすぎなくて、名のやうに具體的な何物も存在してゐるのでないとも云ひ反す者もあり、さまざまな取沙汰が交されてゐるうちに、フランスの名士數名が夏期三ケ月の間全く消息を絶つて、それがパル都へ避暑に出かけたためによるとのことから探險隊まで繰出されたといふ風説が加はるに及んで、官憲のまなこもひとへに「ホワイトムーンラインの神秘」に向つて光り出した。が、これは實際に行はれたらしい一部好事家の探索の結果と共に、つひに何ら得るところがなかつた。……大たいこんな次第にあるのですが、辻技師にそへて山内君が口に出したところによると、この言葉は、今日なほさかんに流行して謎の代名詞を努めてゐるかたはら、あたかもその出所がいづこかに實在してゐるやうなそゝのかしと感銘とを人々に與へてゐると云ひますから、くはしいことは諸君に親しい歐米の事情に通じた方面からきいてもらふことに致していゝでせう。が、この「パル都」なるものこそ、他ならぬ今述べた奇異な風説の上に立つた暗澹世界の頂點にあるユートピアであつて、即ち、ホーキ星やお月さまのお化が出没する、日本にうつしては Inagaki Taruho Fantasy の大本山であると辻氏は云ふのでした。もはや科學風な趣味に基いた活動寫眞や電氣仕掛のルナパークであつたとするべく、あまりに大袈裟な、さらに頓狂な代物かを意味してゐなければなりません。いやどういふものか？

「さかさまの都會」の謎を思ひがけない機會に明された山内君と辻技師との間には、すぐ解析や物理學上の用語を使つた問答がやり取りはじめられました。即ち「地球上に如何にしてそのやうなところが有り得るか？」といふことは、すでにそのやうに面倒な分野にぞくしてゐるのでした。私に二人の對話が理解できたら、そして使つてもいゝ二三の方程式に諸君が我慢をして下さるなら、この奇怪の理由について何らかの暗示をすることができると考へるのですが、つひに自分の無力を告白せねばなりません。しかし「そんな都會もかういふやうなところから考へられるのではなかろうか？」といふ臆測の一端を述べて、話をこゝまで進めてきた責任をのがれたいと思ひます。しかも、そんな不名譽の上塗として、こゝにも、歴々この私のやうな意圖を持つた人々にくり返されてきたものを使ふべく餘儀なくされるか知れません。それは山内君乃至辻技師の目をとほすべくして一時且つ都合上集されないといふ種類でありますなら、すでに私が何事を云はうとして

ゐるのかおわかりの方は、どうかこの次の二次元の問題にとばし下さるやうにおねがひします。

私たちが平面を回轉させるときは、一つの點が軸になつてゐます。立體を回轉するときには、一つの直線が軸になります。その次に、一つの面がそのまゝ軸になる回轉が行はれなければならないことは、久しい間物理學者に考へられてゐました。もし、點を軸としてしか物體が回轉できないとしたら、a圖のやうな十字形の平面が立體になるといふのは、私たちには大へん不思議なことでせう。が、直線を軸とする回轉法を知つてゐるから、私たちは點線のところから折りまげて、何の造作もなくそれを一つの方面體に組立てゝしまふ。同じ理屈で、面を軸とする回轉法を手に入れたら、今日の私たちには奇妙なb圖のやうな木片をたゝんで、八體形・(?)とでもいふものが造られるはずなのです。これは、私たちが空間を測る物尺であるいづれも直角にまじはつた三つの軸——その三本のいづれに對してもさらに直角にまじはつてゐるところの世界を意味します。

もしかゝる世界から、一つの閉された箱に向つて手をのばすなら、私たちは箱のふたを開かないで、その内部の寶石を取り出すことができる。たぜなら、直線内の二點をとほる直線が、どうしてもその直線以外へ出られないやうに、平面内の二點をとほる直線もまたこの平面以外へは出られません。それから立體內（空間の部分）の二點をとほつてゐる直線は、どうしてもその空間以外へは出られません。今もし、寶石にふれた私の手が、箱のふたにもふれると云ふのなら、それはすでに寶石と箱との二點をとほつてゐるわけだから、私の手はその空間以外にあるのではない。しかし手はすでにその空間のそとから差し出されてゐるのだから、箱にはふれずに内部の寶石を安々と取り出してしまふことになります。さらにこゝでは、右の手袋を裏返してもやはりそれを左の手袋として使用できるし、一物體をクルッとそのまゝに、それが映つてゐる鏡のなかへおしこんでしまはれるし、地球から廿四萬哩をへだてた月の世界も、火箭船などいふ面倒なものを持出さずに、空間をたゝんですぐお隣りへ引きよせることができる。この左右を征服するといふことは、すでに左巻のカタツムリの體液を右巻のカタツムリに注射して、そのねじがあべこべにできるといふことで成功しつゝあるのです。即ち、こんな仕末になつてくるなら、地球は格別まんまろいわけでもなくなつてきます。然らばそれがなぜ特に圓筒狀だと云ふのか？

私たちの中學校で教はつた幾何學においては、三角形の內角の和は二直角ですが、これを地球面に應用しようとすれば少なからず間ちがひが起つてくる。即ちそこが平面ではないからです。こゝに非ユークリッドの世界がひらけてきますが、しかも平面及直線の定義に從つて

それがさらに多種多様の分野にわかれ、最も先端に立つ者の場合は、取扱はれる空間の曲率によつてリーマン面とかロバチエウスキイ面とかいふやうな區別が立てられてゐることは、私たちのすでに知つてゐるところです。そしてこのやうな特異性が、事物の職能を求めれば求めるだけ強調されねばならないことは、相對性理論の恩人によつても力説されてゐる。カントが私たちに先驗的にあたへられたものとした時間と空間とは、じつは私たちが經驗を述べるのに最も簡單で便利なものとして使ふところの時間と空間にすぎなくて、私たちといふのは決してそんな唯一の時間と空間を強ひられてゐる者でないことが明らかにされてきたからです。さうであるなら、こゝに實用（それは常に私たちの理想的事業を功利生活といふ目安によつて低下逡巡させるものである）といふことに關心をしない立場によつて、いかなる理論がいかに尖端的に發展されてもいゝわけである。古いむかしから私たちの心を把へてきてゐる所謂魔術とは、正しくそのやうな分野の存在を約束してゐるものである。それが考へられないからといふことではなく、きつと考へられるのだといふことの上に私たちの熱心がかゝつてゐます。いや現に私たちが住んでゐるところこそそのやうな魔法の世界なのです。たゞそれをハッキリとさせねばならぬため、今日までの私たちには一つの止めどころが必要とされてゐたといふに過ぎない。卽ち、地球が圓いとは限られなかつたなら、そのかはりに與へられるさま〴〵な形體のうちから或る一つが採用されても毫も差支へはなく、花火仕掛のホーキ星が涼み客の喝采を博すといふなら、花火仕掛ではないホーキ星が任意の納涼客のまへにとばされることにも些かの不都合は見出されない。

つまり、吾々が知られなかつた函數を發見するなら、こんどは事柄の方がそれに飛び寄つてくることになるといふ輓近物理學上の重大な着目に事柄は立脚してゐるのです。この點においても、パル教授といふ人物は注目さるべきだが、一説にそれはCollège de Franceの高名な學者の變名だと云はれてゐるものゝ、ほんとうはパル市民の他に知る由もないのだと辻技師は云ひました。このへんからやうやく話がわかつてきたやうですからお傳へしませう。それは大たい次の意味にあつたやうでした。

――物理學者のなかには、幾何流儀の人と解析流儀の人とがあるが、パル教授は前者の極端なタイプにぞくした。そして專ら論理を俟つて徐々に進むといふかはりに、直觀をもつて一擧にその高峯へ登つてしまつた。その結果、どんなに山や谷が凹凸してゐても、それらの曲線を平均にしたとき地球の表面はまるくなるといふことのかはりに、自分の立つてゐる周圍、それと同じやうに他にも屹立してゐる圓錐や六面體やピラミッドやその他のあらゆる形體が、ぎつしりと入りまぢつて、そこに構成した不思議な結晶體としての世界を見た。吾々の進展が停止されてゐないかぎり、球體といふことはとりもなほさず

このことに他ならない――このことにしなければならないと考へた。かゝるパル教授は「球の歪みとしての他の各形體」といふことを主張する。一言に云へば、あらゆる形體とはさま〴〵な狀態における球――即ち球の變態としてのみ解釋されるといふのだが、それは夙に傾倒してゐるベルグソン學說による、世界を沈下するもの（空間性）と、上昇するもの（時間性）とに大別することに立脚して、前者を球に向つてゐるもの、後者を球に逆行するものとするのである。空間性に支配されてゐる自然は、球に向つて次第に昏睡に陷りつゝあるが、時間性（從つて今日においてその唯一の完全なモデルである人類の意識は）は、球への下降から極力ぬけ出ようとしてゐる――といつて結局はわづかにその運動を妨害するといふ範圍を出ないが――ものである。一見矛盾のやうであるが、かゝる立場における機械性――即ち球に反抗してあへて六方體や圓筒をこしらへようとする努力とは、吾々をして今日の位置あらしめ將來もまたよるべき唯一の武器である。（即ち、球への調和運動を破らうとするためには、どうしてもそれから分離した別の調和體系でもつてそれにあたり、もつてその傾向をあべこべに利用するのほかはない。決定をもつて決定を止めようとすることなので、吾々自身が機械になるといふことは毫も意味しない）これを持たないときにこそ、返つて吾々は植物や動物における場合のやうに、生きる力を物質性のなかに痲痺させてしまふことになる。然らば、かゝる球への反抗とはそも〳〵何を意味したものであるかといふに、それは球への完成に何を意味するかといふことゝ同様に何とも云へないものである。なぜなら、そのやうに吾々が殊更の合理性を追つかけるといふことそも〳〵が、パル教授の場合、つまり派生的に發達したものである吾々の「關係の智識」に基づくメカニズムの一つに他ならぬと解釋されてゐるからである。（これはどこかに藝術上の造形主義者の徑路と似てゐるが、事實、所謂エキスプレショニズムの發生にあたつて、パル教授の世界觀が影響をしてゐることは、さつきもちよつと述べたカリガリ博士の場合で私は知らされてゐます）――ところで、球と四ッに組んだとも云へるそんな素材の重積を機械としてうごかすためには、獨立の意力による切斷がほどこされねばならぬ。これが行はれなかつたときつひにその姿のまゝに凝固した戰鬪紀念碑として吾々は亞鉛鑛や水晶を知つてゐる。パル教授においては、吾々が實行しようとするときには集團の力を借りなければならぬが、未知に突き入るためには完全に獨立であらねばならぬ。教授の所謂「吾々の平板」は、たゞそこにさま〴〵な角度で突起するトゲ（？）によつてのみ上昇にねじ上げられるのである。即ち、特異と飛躍によつてのみ世界は發展し、かゝる仕事を除けばつひに吾々なるものは存在せず、物質的利福とはかゝる事業に便益を供するかぎりにをいて吾々に價値を有してゐる。そして、無數のトゲの發生によつて目まぐるしく、おそらく死すらも突破して、上昇するヒユマニチイの平板上においては各人が各人である以上如何なる世界も可能であるが、それが爛熳たる社會を約束してゐるかぎりは、錯綜の間を明瞭ならしむる原則が存

はれてあらねばならぬ。いかなる規約にも共通な根據がなければならぬ。そのやうな一般的「群」の概念としてもち來されたのが、近代意識に訂正着色された須彌山である。しかもこれを鮮やかにするには、周圍の不適當なものをふり落すだけで充分である。……しかし、かう云つてしまふと、話は隨分お伽めくやうだが、たゞ經驗に獨立して組立てられた世界が、理論上吾々の日常世界とは氣候を異にしたもの――通俗的に云ふならば大へん涼しいところであるといふ點にをいて、たま〳〵功利生活に關心をしない素材に適用されるに至つたもので、それらの人々の息ぬきこそパル市街であり、峻嚴な境界のつれ〴〵を慰めるために造られたものこそ赤やむらさきの花火式天體であるが、教授自身は依然として純粹な理論物理學者である――少くともそんな臆測を許す人物であることは忘れてはならぬと辻技師が云ひました。

即ち、それは一つの形而上學的な存在なのです。少くとも語られたところ以上を出ない今日においては、さういふより他はありません。どこにもないしかしどこかにあるそんなパラダイスへ行くために、やはりデジンに似たものが呼び出されるのか、それとも眞空管のなかの火花をどうとかするといふやうなことなのか？　いづれとも云へない。すでに「左の手袋をひつくり返してやはりそれが右の手袋であるやうな都會」は、「こんな私たちの如何なる點においても取入れられない世界」にぞくしてゐる。もしも取入れられたなら、それは何らかの實用を約束することになる――しかしそんな卑近な動機を全然目安にしない點において、パル氏は初めてそのやうなおどろくべき可能性を示したのではありませんか？

辻技師もこの事柄は、つい先日オランダの天文臺から送られてきた書物のなかにあつたパンフレットによつて初めて知つたといふわけで、その夜の話も實は該記載の概要なのでした。三哩ほどの夜道をステーションにまで私たちを送つてくれる自働車が、表で待つてゐた短かい時間に、あか〳〵した研究室の方から辻技師はその書物を持つてきて見せてくれましたが、そこには南洋の不思議な卷貝を想はせるやうなかたちをした、何とも知れぬへんてこなもの、見るとなるほど、うなづかれもするが、口では説明の仕様もない物象の交錯や、その間に嵌つてゐる奇異な發光體の寫眞が數葉はさまれてゐました。他のページはまたゴチャ〳〵に入りまぢつた曲線や聯立方程式によつて埋められてゐました。これこそほんとうの「廿世紀須彌山」の概念をあたへられたやうにおぼえた私は、そのちひさいコロタイプ版からも、ちよつと目がくらむやうな氣持にさせられずにをられませんでした。もしも一たんこんなものを認めたなら、その瞬間私たちの現實といふものが、お話にもならぬみぢめさに縮つてしまふといふことが充分に豫想されたからです。それで、この本は吾々も注文しようとしてゐるものだから、ついでにあなたの分も取寄せようと云つてくれた辻技師にさへ曖昧な返事をした私は、本の方は見ようともせず、何かに不機嫌な心持でくらい玄關の石段に立ちました。たゞその本の名が "Physique moderne et l'Illusion de Professeur Pulle" 即ち、この記述の題名に用ひたものであつたことだけをおぼえて。――

魔法修行者

露伴學人

魔法。

魔法とは、まあ何といふ笑はしい言葉であらう。

然し如何なる國の何時の代にも、魔法といふやうなことは人の心の中に存在した。そして或は今でも存在してゐるかも知れない。

埃及、印度、支那、阿剌比亞、波斯、皆魔法の聞えたる國々だ。

眞面目に魔法を取扱つて見たらば如何であらう。それは人類學で取扱ふべき箇條が多からう。又宗教の一部分として取扱ふべき點も多いであらう。傳説研究の中に入れて取扱ふべきものも多いだらう。文藝製作として、心理現象として、其他種々の意味からして取扱ふべきことも多いだらう。化學、天文學、醫學、數學等も、其の歴史の初頭に於ては魔法と關係を有してゐると云つて宜しからう。

從つて魔法を分類したならば、哲學くさい幽玄高遠なものから、手づまのやうな卑小淺陋なものまで、何程の種類と段階とが有るか知れない。

で、世界の魔法に就いて謂つたら、一月や二月で盡きるわけのものではない。例へば魔法の中で最も小さな一部の厭勝の術の中の、その又小さな一部のマジックスクェアーの如きは、まことに言ふに足らぬものである。それでさへ支那でも他の邦でも、それに病災を攘ひ除く力があると信じたり、或は又之を演繹して未來を知ることを得るとしたりしてゐる。洛書といふものは最も簡單なマジックスクェアーである。それが聖典たる易に關してゐる。九宮方位の談、八門遁甲の説、三命の占、九星の卜、皆それに繫いてゐる。それだけの談さへも中々盡きるものでは無い。一より九に至るの數を九格正方内に一つ宛置いて、縱線、横線、對角線、何樣數へても十五になる。一より十六を正方格内に置いて縱線、横線、對角線、各隅、隣四方格、皆三十四になる。二十五格内に隨意に一より二十五迄を置いて、六十五にな

る。三十六格内に三十六迄の數を置いて、百十一になる。それ以上いくらでも出來ることである。が、其法を知らないで列べたのでは、一日かゝつても少し多い根數になれば出來ない。古代の人が驚異したのに無理は無いが、今日はバッチェット方法、ポイグナート方法、其他の方法を知れば、隨分大きな魔方陣でも列べ得ること容易である。然し魔方陣の事を談るだけでも、支那印度の古より、其歷史其影響、今日の數學的解釋及び方法までを談れば、一卷の書を成しても足らぬであらう。極々小さな部分の中の小部分でも其通りだ。然樣いふ譯だから、魔法の談などゝ云つても際限の無いことである。

我邦での魔法の歷史を一瞥して見よう。先づ上古に於て厭勝の術があつた。この「まじなふ」といふ「まじ」といふ語は、世界に於て分布區域の甚だ廣い語で、我國に於てもラテンやゼンドと通じてゐるのがおもしろい。禁厭をまじなひやむると訓んでゐるのは古いことだ。神代から存したのである。然し神代のは、惡いこと兇なることを厭し禁むるのであつた。奈良朝になると、髮の毛を穢い佐保川の髑髏に入れて、「まじもの」せる不逞の者などあつた。これは咒詛調伏で、厭魅である、惡い意味のものだ。當時既に然樣いふ方術が有つたらしく、然樣いふことをする者も有つたらしい。

神おろし、神がゝりの類は、これも蓋し上古から有つたらう。人皇十五六代の頃に明らかに見える。が、記紀ともに其處は假託が多いと思はれる。かみなびの神より板にする杉のおもひも過ず戀のしげきに、といふ萬葉卷九の歌によつても知られるが、後にも「琴の板」といふものが杉で造られてあつて、神教をこれによりて受けるべくしたものである。これ等は魔法といふべきでは無く、神教を精誠によつて仰ぐのであるから、魔法としては論ぜざるべきことである。佛家巫徒の「よりまし」「よりき」の事と少し似てはゐるであらう。

佛教が渡來するに及んで咒詛の事など起つたらうが、佛教さらひの守屋も「さま〴〵のまじわざものをしき」と水鏡にはあるから、相手が外國流で己を衞り人を攻むれば、此方も自國流の咒詛をしたのかも知れぬ。然し水鏡は信憑すべき書では無い。

役の小角が出るに及んで、大分魔法使ひらしい魔法使ひが出て來たわけになる。葛城の神を驅使したり、前鬼後鬼を從へたり、伊豆の大島から富士へ飛んだり、末には母を鐵鉢へ入れて外國へ行つたなどゝいふことであるが、餘りあてにならう譯も無い。小角は孔雀明王咒を持して然樣いふやうになつたといふが、成程孔雀明王などのやうな案氣なものを祠つて修法成就したら神變奇特も出來る譯か知らぬけれど、小角の時はまだ孔雀明王に就ての何もが唐で出て居なかつたやうに思はれる。一寸調べて貰ひたい。

白山の泰澄や役行者も立派な魔法使らしい。海上の船から山中の庵へ米苞が連續して空中を飛んで行つて了つたり、紫宸殿を御手製地震でゆら〳〵とさせて月卿雲客を驚かしたりなんどしたといふのは活動寫眞映畫として實に面白いが、元亨釋書などに出て來る景氣の好い譯は、大衆文藝では無い大衆宗教で、ハ、ア、面白いと聞いて置くに適してゐる。

久米の仙人に至つて、映畫もニコ〳〵ものを出すに至つた。仙人は建築が上手で、弘法大師なども初は久米様の居た寺で勉強した位である、中々の法使ひだつたから、雲くらゐには乘つたらうが、洗濯女の方が魔法が一段上だつたので、負けて落第生となつたなどは、愛嬌と涎と一緒に滴るばかりで實に好人物だ。

奈良朝から平安朝、平安朝と來ては實に外美内醜の世であつたから、魔法くさいことの行はれるには最も適した時代であつた。源氏物語は如何にまじなひが一般的であつたかを語つて居り、法力が尊いものであるかを語つてゐる。此時代の人々は大概現世祈禱を事とする墮落僧の言を無批判に頂戴し、將門が亂を起しても護摩を焚いて祈り伏せるつもりで居た位であるし、感情の絃は蜘蛛の絲ほどに細くなつてゐたので、あらゆる妄信にへばりついて、そして虚禮と文飾と淫亂とに辛くも活きて居たのである。生靈、死靈、のろひ、陰陽師の術、巫覡の言、方位、祈禱、物の怪、轉生、邪魅、因果、怪異、助行の超常力、何でも彼でも低頭して之を信じ、之を畏れ、或は此に賴り、或は此を利用してゐたのである。源氏以外の文學及び又更に下つての今昔、宇治、著聞集等の雜書に就いて窺つたら、如何に此時代が、魔法ではなくとも少くとも、魔法くさいことを信受してゐたかゞ知られる。今一一例を擧げてゐることも出來ないが、大概日本人の妄信は此時代に醞釀し出されて近時にまで及んでゐるのである。

大體の談は先づこれまでにして置く。

我國で魔法の類の稱を擧げて見よう。先づ魔法、それから妖術、幻術、げはふ、狐つかひ、飯綱の法、荼吉尼の法、忍術、合氣の術、キリシタンバテレンの法、口寄せ、識神をつかふ。大概は此等である。

此等の中、キリシタンの法は、少しは奇異を見せたものかも知らぬが今から云へば、理解の及ばぬことに對する怖畏よりの誇張であつたらう。識神を使つたといふのは阿倍晴明きりの談になつてゐる。口寄せ梓神子は古い我邦の神おろしの術が佛教の輪廻說と混じて變形したものらしい。これは明治まで存し、今でも邊鄙には猶ぞ存するかも知れぬが、營業的なものである。但し此には「げはふ」が連絡してゐる。

忍術といふのは明治になつては魔法妖術といふ意味に用ゐられたが、此は戰亂の世に敵狀を知るべく潛入密偵するの術で、少しは印を結び

呪を持する頓宜茶様の事をも用ゐたにもせよ、兵家の事であるのが其の本來である。合氣の術は劍客武藝者等の我が神威を以て敵の意氣を挫くので、鍛錬した我が氣の冴を微妙の機によつて敵に徹するのである。正木の氣合の談を考へて、それが如何なるものなるかを猜することが出來る。魔法の類では無い。妖術幻術といふはたゞ字面の通りである。然し支那流の妖術幻術、印度流の幻師の法を傳へた痕跡はむしろ少い。小角や泰澄などの奇蹟は妖術幻術の中には算して居ないで、神通道力といふやうに取扱ひ來つてゐる。小角は道士羽客の流にも大日本史などでは扱はれてゐるが、小角の事はすべて小角死して二百年ばかりになつて聖寶が出た頃からいろ〳〵取囃されたもので、其間に二百年の空隙があるから、聖寶の偉大なことや其の道としたところはおよそ認められるが、小角が如何なるものであつたかは傳說化したる其人に於て認めるほかは無いのである。聖寶は密教の人である。小角は道家では無い。勿論道家と佛家は互に相通つてゐるから、支那に於て既に混淆して居り、從つて日本に於ても修驗道の所爲など道家くさいこともあり、佛家が「九字」をきるなど、道家の咒を用ゐたり、符籙の類を用ゐたりしてゐる。神佛混淆は日本で起り、道佛混淆は支那で起り、佛婆羅門混淆は印度で起つてゐる。何も不思議は無い。たゞこゝでは我邦で云ふ所の外術幻術は別に支那印度等から傳へた一系統が有るのでは無くて、字面だけの事だといふのである。

扨「げはふ」といふのになる。これは眩法か、幻法か、外法か、不明であるが、何にせよ「げはふ」といふ語は中古以來行はれて、今に存してゐる。增鏡卷五に、太政大臣藤原公相の頭が大きくて大でこで、げはふ好みだつたので、「げはふとかやまつるにかゝる生頭のいることにて、某のひじりとかや、東山のほとりなりける人取りてけるとて、後に沙汰がましく聞えき」と云ふ事があつて、またしやれ頭にならない生頭を取られたといふのである。して見れば此人の薨去は文永四年で北條時宗執權の頃であるから、其の時分「げはふ」と稱する者が有つて、げはふと云へば直に世人が何樣いふものだと解することが出來るほど一般に知られてゐたのである。內典外典といふが如く、げはふは外法で、外道といふが如く佛法で無い法の義であらうか。何にせよ大體なことで、外法は魔法たること分明だ。その後になつても外法頭といふ語は有つて、福祿壽のやうな頭を、今でも多分京阪地方では外法頭といふだらう、東京にも明治頃までは、下駄の形の稱に外法といふのが有つた。竹齋だか何だつたか德川初期の草子にも外法あたまといふは有り、「外法の下り坂」といふ奇抜な語もあるが、福祿壽のやうな頭では下り坂は妙に早からう。

流布本太平記卷三十六、細川相模守淸氏叛逆の事を記した段に、「外

法成就の一上人鎌倉より上つて」云々とある。神田本問書には、「此志一上人はもとより邪天道法成就の人なる上、近頃鎌倉にて諸人奇特の思をなし、歸依淺からざる上、畠山入道諸事深く信仰賴入りて、關東にても不思議ども現じける人なり」とある。清氏は此の志一を賴んで、吒祇尼天に足利義詮を祈殺さうとの願狀を奉つたのである。さすれば「邪天道法成就」といふのは、吒祇尼天を祀る道法成就といふことで、志一といふ僧は其法で「ふしぎども現じける」ものである。これで當時外法と呼んだものは吒祇尼天法であることが知れる。蓋し外法は平安朝頃から出て來たらしい。

狐つかひは同じく吒祇尼法であるか知れぬ。然し狐を靈物とするのは支那にもあつたことで、禹が九尾の狐を娶つたなどゝいふ馬鹿氣たことも隨分古くから語られたことであらうし、周易にも狐はまんざら凡獸でもないやうに扱はれて居り、後には狐王廟なども所々に在り、狐媚狐惑の談は雜書小說に煩らはしいほど見える。印度でも狐は佛典に多く見え、野干（狐とは少し異はう）は何時も狡猾あるものとなつてる。吒祇尼天も狐に乘つてゐるので、孔雀明王が孔雀の明王化、金翅鳥明王が金翅鳥の明王化である如く、吒祇尼天も狐の天化で有らう。我邦では狐は何でも無かつたが、それでも景戒の靈異記などには、もはや靈異のものとされてゐたことが跡つけられる。狐は稻荷の使はしめとなつてゐるが、「使はしめ」といふことに就いては一說に「語呂」から生じた牽強な附會の解釋であつて、鳩は八幡の「はた」から、鹿は春日の第一殿鹿島の神の武甕槌命の鹿島より至り玉ひし「縁」から、鳥は熊野に八咫烏の縁で、猿は日吉山王の月行事の社猿田彥大神の「猿」の縁であるが如しと前人も說いてゐるが、稻荷に狐は何の緣も無い。たゞ稻荷は保食神の腹中に稻生りしよりの「イナリ」で、御饌津神である其の御饌津より「けつね」即ち狐が持出されたまでゞ、大黑樣（大己貴神）に鼠よりも緣は遠い話である。けれども早くから稻荷に狐は神使となつてゐる。と云つてお稻荷樣が狐つかひに關係の有らうやうは無いから、やはり此は狐に乘つてゐる吒祇尼天の方から出たことで、吒祇尼の法をつかふ者即ち狐つかひである。吒祇尼は保食神どころでは無い、本來餓鬼のやうなもので、死人の心を啖食したがつてゐる者なのであるが、他の大鬼神に敵はないので、六ケ月前に人の死を知り、先取權を確立するものであり、中々御稻荷樣のやうな福々しいものでは無いのである。吒祇尼は又阿修羅波子とも呼ばれて、其義は「飮血者」である。狐つかひの狐は人に禍や死を與へる者とされてゐる。して見れば吒祇尼の狐で、お稻荷樣の狐では無い筈である。大江匡房が記してゐる狐の大饗の事は堀河天皇の康和三年である。牛骨などを饗するのであつたから、其頃から吒祇尼の狐といふことが人の

思想に在つたのではないかと思はれるが、これは眞の想像である。明らかに狐を使つた者は、應永二十七年九月足利將軍義持の醫師の高天といふ者父子三人、將軍に狐を付けたこと露顯して、同十月讃岐國に流されたのが、年代記にまで出てゐる。やはり吒祇尼法であつたらうことは思遣られるが、他の者に祈られて狐が二匹室町御所から飛出したなど丶いふところを見ると、將軍長病で治らなかつた餘りに、人に狐を憑けるなど丶いふ事が一般に信ぜられてゐたに乘じて、他の者から仕組まれて被せられた寃罪だつたかも知れない。が、何にしろ足利時代には一般に然樣いふ魔法外法邪道の存することが認められてゐたに疑無い。世が餘りに狐を大したものに思ふところから、釣狐のやうな面白い狂言が出るに至つた、と斯樣いふやうに觀察すると、釣狐も甚だ面白い。

飯綱の法といふと愈々魔法の本統大系のやうに人に思はれてゐる。飯綱は元來山の名で、信州の北部、長野の北方、戸隱山につゞいてゐる相當の高山である。此山には古代の微生物の殘骸が土のやうになつて、戸隱山へ寄つた方に存する處がある。天狗の麥飯だの、餓鬼の麥飯だのと云つて、此山のみでは無い諸處にある、淺間山觀測所附近にもある、北海道にもある、支那にもあるから太平廣記に出てゐる。これは元來が動物質だから食へるものである。で、飯綱は假名ちがひの擬字で、これが有るからの飯沙山である。然樣いふ一寸異なものが有つたから、古く保食神即ち稻荷なども勸請してあつたかも知れぬ。ところが荼吉尼法は著聞集に、知足院殿が大權坊といふ奇驗の僧によりて修したところ、夢中に狐の生尾を得たり、なんど丶ある通り、古くから行はれてゐたし、稻荷と荼吉尼は狐によつて混雜して了つてゐた。文德實錄に見える席田郡の妖巫の、其靈轉行して心を噉ひ、一種滋蔓して、民毒害を被る、といふのも噉心の二字が吒祇尼法の如く思へるところから考へると、中々古いもので、今昔物語に外術とあるものも矢張り外法と同じく吒祇尼法らしいから、隨分と索隱行怪の徒には鍛練傳受されてゐたのだらうと思はれる。傳説に依ると、水内郡荻原に、伊藤豐前守忠繩といふものがあつて、後堀河天皇の天福元年（四條天皇の元年で、北條泰時執權の時）に此山へ上つて穀食を絶ち、何の神か不明だが其神意を受けて祈願を凝らしたとある。穀食を絶つても食へる土があつたから辛防出來たらう。それから遂に大自在力を得て、凡そ二百年餘も生きた後、應永七年足利義持の時に死したといふことだ。これが飯綱の法のはじまりで、それから其子盛繩も同じく法を得て奇驗を現はし、飯綱の千日家といふものは、此の父子より成立ち、飯綱權現の別當ともいふべきものになつたのであり、德川初期には白石の御朱印を受けてゐたものである。

今は飯綱神社で、式内の水内郡の皇足穂命神社である。昔は飯綱大明神、又は飯綱權現と稱し、先づ密教修驗的の靈區であつた。他からは多くは吒祇尼天を祭るとせられたが、山では勝軍地藏を本尊とするとしてゐた。勝軍地藏は日本製の地藏で、身に甲冑を着け、軍馬に跨つて、そして錫杖と寶珠とを持ち、後光輪を戴いてゐるものである。如何にも日本武士的、鎌倉若くは足利期的の佛であるが、地藏十輪經に、此の菩薩は或は阿索洛身を現ずとあるから、甲を被り馬に乗つて、甘くない顔をしてゐられても不思議は無いのである。山城の愛宕權現も勝軍地藏を奉じたところで、それにつゞいて太郎坊大天狗などゝいふ恐ろしい者で名高い。勝軍地藏はいつでも武運を守り、福徳を授けて下さるといふ信仰の對的である。明智光秀も信長を殺す前には愛宕へ詣つて、そして「時は今天が下知る五月かな」といふを發句に連歌を奉つて居る位だ。飯綱山も愛宕山に負けはしない。武田信玄は飯綱山に祈願をさせてゐる。上杉謙信がそれを見て嘲笑つて、信玄、弓箭では意をば得ぬより權現の力を藉らうとや、謙信が武勇優れるに似たり、と笑つたといふが、何樣して信玄は飯綱どころか、禪宗でも、天台宗でも、一向宗までも呑吐して、諸國への使は一向坊主にさせてゐるところなど、又信玄一流の大きさで、飯綱の法を行つたか何樣か知らぬが、甲州八代郡末木村慈眼寺に、同寺から高野へ送つた武田家品物の目録書の稿の中に、飯綱本尊一體に法次第一冊信玄公御眞身とあることが甲斐國志卷七十六に見えてゐるから、飯綱の法も行つたか知れぬ。

勝軍地藏か吒祇尼天か、飯綱の本尊はいづれでも宜いが、吒祇尼は古くから云傳へてゐること、勝軍地藏は新らしく出來たもの、だきには胎藏界曼陀羅の外金剛部院の一尊であり、勝軍地藏はたゞ是れ地藏の一變身である。大日經卷第二に茶枳尼は見えて居り、儀軌眞言等も傳來の古いものである。若し密教の大道理から云へば、茶枳尼も大日、他の諸天も大日、玄奥秘密の意義理趣を談ずる上からは、甲乙の分け隔ては無くなる故に兎角を言ふのも愚なことであるが、先づ茶枳尼として置かう。茶枳尼天の形相、眞言等をこゝに記するも益無きことであるし、且又自分が飯綱二十法を心得てゐるわけでも無いから、飯綱修法に關することは書かぬが、矢張り他の天部夜叉部等の修法の如くに、相傳を得て、次第により如法に修するものであらう。東京近くでは武州高雄山からも、今は知らぬが以前は茶枳尼の影像を頒へたものである。諸國に茶枳尼天を祭つたところは少からずあるが、今其法を修する者は有るまい。まして魔法の邪法のと云はれるものであるから、眞に修法する者は全く有るまいが、修法の事は、其の利益功能の有る狀態や理合を語らうとしても、全然然樣いふことを知らぬ人に

理解せしむることは先づ不可能であるから、まして批評を交へてなど語れるものでは無い。管狐といふ鼠ほどの小さな狐を山伏より受取つて来て、之を使ふなどゝいふことは世俗のやゝもすれば傳へることであるが、自分は知らぬ。天狗も荼枳尼には近縁なることで、愛宕にも太郎坊が有れば、飯綱にも天狗嶽といふ靈所があり、餓鬼曼陀羅のやうな荼吉尼曼陀羅には天狗もあり、又荼吉尼天其物を狐に乘つてゐる天狗だと心得てゐる人もある。むかし僧正遍照は天狗を飯綱の中へ籠めて燒いて灰にしたといふが、我等には中々其樣な靈力は無いから、不生いろくな天狗に脅されて懼つてゐる。伽藍天狗や聖天狗、雛天狗、天狗瑠璃天狗、其上に本物の天狗に出られたら叱られでもしたら堪らないから筆を擱く。

我邦で魔法といへば先づ飯綱の法、荼吉尼の法といふことになるが、それなら何樣な人が上に説いた人のほかに魔法を修したか。志一和尚天は言ふに足らない。山伏や坊さんは職分的であるから興味も無い。誰か無いか。魔法修行のアマチュアは。

存る。先づ第一番には細川政元を出さう。

應仁の大亂は人も知る通り細川勝元と山名宗全とが天下を半分づつに分けて取つて爭つたから起つたのだが、其の勝元の子が即ち政元だ。家柄では有り、亡父の餘威は有り、二度も京都管領になつた

其の政元が魔法修行者だつた。政元は生れない前から魔法に緣が有つたのだから仕方が無い。はじめ勝元は彼だけの地位に立つてゐても、不幸にして子が無かつた。そこで其頃の人だから、神佛に祈願を籠めたのであるが、靈驗か何かに因るといふなら其門徒の祈によつて好い子を授けられさうなところを、勝元は妙なところへ願を掛けた。何に掛けたか。武將だから毘沙門とか、八幡とか、頼むにしても宜いものを、愛宕山大權現へ願つた。勝元は宗全とは異つて、人あたりの柔らかな、分別も道理もはづれをせぬ、威儀も細かに、智慧も行届く人であつたが、流石に大亂の指揮をかついだ人だけに、やはり酷いところがあつたと見えて、愛宕山權現に願掛けした。愛宕山は七高山の一として修驗の大修行場で、本地は雷神にせよ三諸命にせよ迦具土神にせよ、いづれも恐しい神で、此坊は既に勝軍地藏を本尊とし、其の陰は太郎坊、天狗樣の據所であつた。武家の繁昌によつて愛宕に最も盛大なしであつたらうが、斯樣いふ譯で生れた政元は、生れぬさきより恐ろしいものと因緣があつたのである。

政元は幼時から此の譯で愛宕を信崇した。最も愛宕信崇は一時の世の風であつたらうが、自分の特別因緣で特別信崇をした。數々社參する中に、修驗者等から神怪幻詭の怪しい談などを聞かされて、身に浸みたのであらう。長ずるに及んで何不自由なき大名の身で有りながら、

葷腥を遠ざけて滋味を貪はず、身を持する謹嚴で、婦人間の艶聞を得たい望に現世の欲樂を取ることを敢てしなかつた。こゝは政元も偉かつた。惜しむらくは良い師を得なかつたやうである。婦人に接しなかつた。これも差支無いことであつた。自由の利く者は誰しも享樂主義になりたがる此の不穩な世に大自由の出來る身を以て、淫欲までを擯避したのは恐ろしい信仰心の凝固りであつた。そして畏るべき鐵のやうな嚴冷な態度で修法をはじめた。勿論生やさしい料簡方で出來る事で無い。

政元は堅固に殿廊に月日を過した。二十歳、三十歳、四十近くたつた。季世記に其の有樣を記してある。曰く、「京管領細川右京太夫政元は四十歳の比まで女人禁制にて、魔法飯綱の法愛宕の法を行ひ、さながら出家の如く、山伏の如し、或時は經を讀み、陀羅尼をへんしければ、見る人身の毛もよだちける。されば御家相續の子無くして、御内、外樣の面々、色々諫め申しける。」成程斯樣いふ状態では、常人は宜いが、周圍の者は畏れたらう。其の冷い、しやちばつた顏付が見えるやうだ。

で、諸大名等人々の斡旋して、將軍義澄の叔母の縁づいてゐる太政大臣九條政基の子を養子に貰つて元服させ、將軍が烏帽子親になつて、其名の一字を與へさせ、源九郎澄之とならせた。澄之は出た家も好し、上品の若者だつたから、人々も好い若君と喜び、丹波の國を此人に讓することにしたので、澄之はそこで入部した。

ところが政元は物狂を時々したので、此前の病氣の時、政元一家の内々の人々だけで相談して、阿波の守護細川慈雲院の孫、細川讃岐守之勝の子息が器量骨柄も宜しいといふので、攝州の守護代藥師寺與一を使者にして養子にする契約をしたのであつた。

此養子に契約した者も將軍より一字を賜つて、細川六郎澄元と名乘つた。つまり澄元の方は内々の者が約束した養子で、澄之の方は立派な人々の口入で出來た養子であつたのである。これには種々の説があつて、前後が上記と反對してあるのもある。

澄元契約に使者に行つた細川の被官の藥師寺與一といふのは、一文不通の者であつたが、天性正直で、弟の與二とゝもに無双の勇者で、淀の城に住し、今までも度々手柄を立てた者なので、細川一家では賞美して居た男であつた。澄元のあるところへ、澄之といふ者が太政大臣家から養子に來られたので、契約の使者になつた藥師寺與一は阿波の細川家へ對して、又澄元に對して困つた立場にたつた。そこで根が律義者のみで、心は猛く分別は足らなかつた與一は悶としたのである。

此主人政元はといふと、度々魔法に凝り凝つて、種々の不思議な事は

し、空中へ飛上つたり空中へ立つたりし、喜怒も常人とは異り、分らぬことなど言ふ折もあつた。空中へ上るのは西洋の魔法使もする事で、それだけ永い間修業したのだから、其位の事は出來たことと見て置かう。感情が測られず、超常的言語など發するといふのは、もとく普通凡人の世界を出たいといふので修業したのだから、修業が積めば然樣なるのは當然の道理で、こゝが慥に魔法の有難いところである。政元から云へば、何樣も變だ、少し怪しい、などゝ云つてゐる奴は、何時までも雪を白い、烏を黑いと、退屈もせずに同じことを言つてゐる扨々下らない者共だ、と見えたに疑無い。が、細川の被官共は弱つてゐる。そこで與一は赤澤宗益といふものと相談して、此分では仕方が無いから、高壓的強請的に、阿波の六郎澄元殿を取立てゝ家督にして終ひ、政元公を隱居にして魔法三昧でも何でもして貰はう、と同盟し、與一は其主張を示して淀の城へ籠り、赤澤宗益は兵を率ゐて伏見竹田口へ强請的に上つて來た。

與一の議に多數が同意するでは無かつた。澄之に意を寄せてゐる者も多かつた。何にしろ與一の仕方が少し突飛だつたから、それ下として上を剋する與一を擊てといふことになつた。與一の弟の與二は大將として淀の城を攻めさせられた。剛勇では有り、多勢ではあり、案內は熟く知つてゐたので、忽に淀の城を攻落し、與二は兄を一元寺で詰腹切らせて了つた。其功で與二は兄の跡に代つて守護代となつた。

阿波の六郎澄元は與一の方から何等かの使者を受取つたのであらう。悠然として上洛した。無人では叶はぬところだから、六郎の父の讃岐守は、六郎に三好筑前守之長と高畠與三の二人を付隨はせた。二人はいづれも武勇の士であつた。

與二は政元の下で先度の功に因りて大に威を振つたが、兄を討つたので世の用ゐも惡く、三好筑前守は又六郎の補佐の臣として六郎の權威と利益との爲には與二の思ふがまゝにもさせず振舞ふので、與二は面白くなくなつた。

そこで與二は竹田源七、香西又六などゝいふものと相談して、兄と同じやうな路をあるかうとした。異なつてゐるところは兄は六郎澄元を立てんとし、自分は源九郎澄之を立てんとするだけであつた。とても彼の樣に魔法修行に凝つて、たゞ人ならず振舞ひたまふやうでは、長く此世にはおはし果つまじきである、六郎殿に御世を取られては三好に權を張り威を立てらるゝばかりである、是非無いことであるから、政元公に生害をすゝめ、丹波の源九郎殿を以て管領家を相續させ、我々が天下の權を取らう、と一決した。永正四年六月二十三日だ。政元は其樣な事を被官共が企てゝ居ると

も知らうやうは無い。今日も例の通り冷な顔をして魔法修行の日課を如法に果さうとするほかに何の念も無い。然し戰亂の世である。河内の高屋に叛いてゐるものがあるので、それに對して攝州衆、大和衆、それから前に與一に徒黨したが降參したので免してやつた赤澤宗益の弟福王寺喜島源左衛門和田源四郎を差向けてある。又丹波の謀叛對治の爲に赤澤宗益を指向けてある。それ等の者は此の六月の末といふ暑氣に重い甲冑を着て、矢叫、太刀音、陣鐘、太鼓の修羅の衢に汗を流し血を流して、追ひつ返しつしてゐるのであつた。政元は其等の上に念を馳せるでも無い。たゞもう行法が樂しいのである。碁を打つ者は五目勝つた十目勝つたといふ其時の心持を樂んで勝たうと思つて打つには相違無いが、彼一石我一石を下す其の一石一石の間を樂む、イヤ其のたゞ一石を下す其の一石を下すのが樂しいのである。鷹を放つ者は鶴を獲たり鴻を獲たりして喜ばうと思つて郊外に出るのであるが、實は沼澤林藪の間を徐ろに行く其の一歩一歩が何とも云へず樂しく喜ばしくて、歩々に喜びを味はつてゐるのである。何事でも目的を遂し意を遂げるのばかりを樂しいと思ふ中は、まだ〱里の料簡である、其道の山深く入つた人の事では無い。當下に即ち了するといふ境界に至つて、一石を下す裏に一局の興は有り、一歩を移すところに一日の喜は溢れてゐると思ふやうになれば、勝つて本より樂しく、負けて亦樂しく、獲を獲て本より樂しく、獲ずして亦樂しいのである。そこで事相の成不成、修證の熟不熟は別として一切が成熟するのである。政元の魔法は成就したか否か知らず、永い月日を倦まず怠らずに、今日も如法に本尊を安置し、法壇を嚴飾し、先づ一身の垢を去り穢を除かんとして浴室に入つた。三業純淨は何の修法にも通有の事である。今は言葉をも發せず、言はんともせず、意を動かしもせず、動かさうともせず、安詳に身を清くしてゐた。この間に日影の移る一寸一寸、一分一分一厘一厘が、政元に取つては皆好ましい魔境の現前で有つたらう歟、業通自在の世界であつたらうか、それは傍からは解らぬが、何にせよ長い〱月日を倦まずに行じてゐた人だ、倦まぬだけのものを得て居なくては續かぬ譯だ。

吒吉尼天は魔だ、佛だ、魔でない、佛で無い。吒吉尼天だ。人心を噉盡するものだ。心垢を噉盡するものだ。政元は何樣いふ修法をしたか、何樣いふ境地に居たか、更に分らぬ。人はたゞ其の魔法を修したるを知るのみであつた。

政元は行水を使つた。有るべき筈の浴衣は無かつた。小姓の波々伯部は浴衣を取りに行つた。月も無い二十三日の夕風は颯と起つた。筒の戸倉二郎といふものは突と跳り込んだ。波々伯部が歸つて來た時、戸倉は血刀を揮つて切付けた。身をかはして薄手だけで遁れた。

翌日は戦だつた。波々伯部に戸倉を打つて四十二才で殺された主君の仇を復したが、管領の細川家はそれからは両派が打ちつ打たれつして、滅茶苦茶になつた。

政元は魔法を修してゐた長い間に何もしたかつたのでは無い。只足利将軍の廃立をしたり、諸方の戦をしたりしてゐた。今は政元の傳を筆にしたのでは無い。

政元より後に飯綱の法を修した人には面白い人がある。それは政元よりも遥に立派な人である。

関白、内大臣、藤原氏の氏の長者、従一位、かういふ人が飯綱の法を修したのである。太政大臣公相は外法の儀に生首を取られたが、此人は天文から文禄へかけての恐ろしい世に何の不幸にも遇はないで、無事に九十歳の長寿を得て、めでたく終つたのである。それは名高い関白稙家の後の九條稙通、玖山公といはれた人である。

稙通公の若い時は天下乱麻の如くであつた。知行も絶え〴〵で、如何に高貴の身分家柄でも生活さへ困難であつた。織田信長より前は、禁庭御所得は何の位であつたと思ふ。或記によればおよそ三千石ほどだつたといふのである。如何に簡素清浄に御暮しになつたとて、三千石では何様なるものでも無い。ましてお公卿様などは、それは〳〵甚だ窮乏に陥つて居られたものだらう。それで其頃は立派な家柄の人々が、四方へ流浪して、公家の武家達に身を寄せて居られたことが、雑多史料にや丶もすれば散見する。稙通も泉州の堺、——これは當時の居た處である、或は又西方諸国に流浪し、攝の十川（十川一存の一系だらうか）を見放つまいとして、搢紳の身ながらに笏や筵を擱いて弓矢箭鎗太刀を取つて武勇の沙汰にも及んだといふことである。

此人が弟子の長頭丸に語つた。自分は何事でも思立つたほどならば半途で止まずに、其の極處まで究めようと心掛けた。自分は飯綱の法を修行したが、遂に成就したと思つたのは、何處に身を置いて寝ても、寝たところの屋の上に夜半頃になれば必度鵰が来て鳴いたし、又路を行けば行く前には必ず旋風が起つた。と斯様いふことを語つたといふ。鵰は天狗の化するものであるとされてゐたのである。前に挙げた樹下謫仙も天狗の化した鵰を鉄網に籠めて焼いたのである。屋の上で鵰の鳴くのは飯綱の法成就の人に天狗が随身伺候するのである意味だ。旋風の起るのも、目に見えぬ飯綱が擁護して前驅するからの意味である。飯綱の神は飛狐に騎つてゐる天狗である。

かういふ恐ろしい飯綱成就の人であつた稙通は、實際の世界に於てもそれだけの事は有つた人である。

織田信長が今川を亡ぼし、佐々木、浅井、朝倉をやりつけて、三好松永の輩を料理し、上洛して、将軍を扶け、禁闕に参つた際は、天下

羊鬼神の如くに之を畏敬した。特に獷猂荒氣の大將といふので、月卿雲客も怖れ且つ諂諛して、恰も、古の木曾義仲の都入りに出逢つたやうなさまであつた。それだのに植通は其の信長に對して、立つたままに面とむかつて、「上總殿か入洛、めでたし、」と云つた限りで踪つて了つた。上總殿とは信長がたゞ是れ上總介であつたからである。上總介では強からうが偉からうが、位官の高い九條植通の前では、其のくらゐに扱はれたとて仕方の無い談だ。植通は位官をはづかしめず、且は名門の威を立てたのである。信長の事だから、是の如き挨拶で扱はれては大むくれにむくれて、「九條殿はおれに禮を云はせに來られた」と腹を立つて、ぶつゝいたといふことである。信長の方では、天下を掃淸したのである、九條殿に禮をいはせる位の氣でゐたらう。が、これは流石に飯綱の法の成就してゐる人だけに、植通の方が天狗様のやうに鼻が高かつた。公卿にも一人くらゐは斯様いふ毅然たる人が有つて宜かつたのである。

木下秀吉が明智を亡ぼし、信長の後を襲いで天下を處理した時の勢も萬人の耳目を聳動したものであつた。秀吉は當時かういふことを云出した。自分は天の冥加に叶つて今かく貴い身にはなつたが、氏も素姓も無いものである、草刈りが成上つたものであるから、古の鎌子の大臣の御名を緣にして藤原氏になりたいものだ。といふのは關白にならうの下ごゝろだつた。すると秀吉の其時の素はらしい威勢だつたから、宜しうござらう、いと易い事だ、といふので、近衞龍山公が其の取計ひを爲ようとした。其時に此の植通公が、「いや、いや、五攝家に甲乙は無いやうなれど、氏の長者は吾が家である、近衞殿の御儘には無るべきで無い」と咎めた。異論の有るのに無理を通すやうなことは秀吉の敢てせぬところである。しかも當時の博識で、人の尊む植通の言であつたから、秀吉は德善院玄以に命じて、九條近衞兩家の議を大德寺で聞かせた。兩家は各々剛く其の議を執つたが、植通の言の方が根據が有つて強かつた。然様すると流石に秀吉だ、「然やうにむづかしい藤原氏の蔓となり葉とならうよりも、たゞ新しく今までに無き氏にならうまでぢや、」と云つた。そこで菊亭殿が姓氏録を檢めて、はじめて豐臣秀吉となつた。

これも植通は宜かつた。信長秀吉の鼻の頭を一寸彈いたところ、お公家様にも斯様いふ人の一人くらゐ有つた方が慥に好かつた。秀吉が藤原氏にならなかつたのも勿論好かつた。此のところ兩天狗大出來大出來。

秀吉は遂に關白になつた。ついで秀次も關白になつた。飯綱成就の植通は屢々言つた。「關白になつて、神罰を受けやうに。」と言つた。果して秀次關白が罪を得るに及んで、それに坐して近衞殿は九州の坊の

津へ流され、菊亭殿は信濃へ流され、其の女の一条殿は車にて渡された。恐ろしいことだ、飯綱成就の人の言葉には目に見えぬ權威があつた。

和歌は勿論堪能の人であつた。連歌はさまで心を入れたでも無からうが、それでも緒餘として其道をも得て居た。法橋紹巴は當時の連歌の大宗匠であつた。然し長頭丸が植通公を訪うた時、此頃何かの世間話があつたかと尋ねられたのに答へて、「聚落の安藝の毛利殿の亭にて連歌の折、庭の紅梅につけて、梅の花神代もきかぬ色香かな、と紹巴法橋がいたされたのを人々褒め申す」と答へたのにつけて、「神代もきかぬとの業平の歌は、龍田川に水の紅にくゝることは奇特不思議の多い神代にも聞かずと詞を入れたのであるに、珍らしからぬ梅を取出して神代も聞かぬといふべきいはれは無い。昔伊勢の國で冬咲の櫻を見て夢庵が、冬咲くは神代も聞かぬ櫻かな、と作つたのは、伊勢であつたればこそで、斯樣に本歌を取るが本意である、毛利太膳が神主ではあるまいし。」と笑つたといふことである。紹巴も此人には敵はない。光秀は紹巴に「天が下しる五月哉」のの「し」の字は「な」の字歟と云はれたが、紹巴はまた此公には敵はない。毛利が神主にもあらばこその一句は恐ろしい。

紹巴は時々此公を訪うた。或時參つて、紹巴が、「近頃何を御覽なされまする」と問うた。すると、公は他に言葉も無くて徐ろに「源氏」とたゞ一言。紹巴がまた「めでたき歌書は何でござりませうか」と問うた。答へは簡單だつた。「源氏」。それきりだつた。また紹巴が「誰か參りて御閑居を御慰め申しまするぞ」と問うた。公の返事は實に好かつた。「源氏」。

三度が三度同じ返答で、紹巴は「ウヘー」と引退つた。成程此公の歩くさまには旋風が立つてゐるばかりでは無く、言葉の前にも旋風が立つてゐた。

源氏物語にも言辭事物の注のほかに深き觀念あるを說いて止觀の說といふ。此公の源語の注の孟津抄は、法華經の釋に玄義、文句とありて扨、止觀十卷のあるが如く、源氏についての止觀の意にて說かれたといふことである。非常な源氏の愛讀者で、「これを見れば延喜の御代に住む心地する」と云つて、明暮に源氏を見てゐたといふが、きまりきつた源氏を六十年も其樣に見てゐて倦まなかつたところは、政元が二十年も飯綱修法を行じてゐたところと同じやうでおもしろい。

長頭丸が時々教を請うた頃は、公は京の聚樂の門前の乾亭院といふ藪の中の朽ちかけた坊に物寂びた朝夕を送つてゐて、毎朝々々輪袈裟を掛け、印を結び、行法怠らず、朝廷長久、天下太平、家門隆昌を祈つて、それから食事の後には、たとへ机に憑つて源氏を讀んでゐた

といふが、如何にも寂びた、細々とした、すつきりとした。陳腐の氣の無い、平らな、落ついた、空室に日の光が白く射したやうな生活のさまが思はれて、飯綱も成就したらうが、自己も成就した人と見える。天文から文祿の間の世に生きて居て、しかも延寶の世に住んで居たところは、實に面白い。

或時長頭丸即ち貞德が公を訪うた時、公は閑棲の韵事であるが、和らかな日のさす庭に出て、唐松の實生を釣瓶に手づから植ゑて居た。五葉の松でもあらばこそ、落葉松の實生など、餘り佳いものでもないが、それを釣瓶なんどに植ゑて、しかも其の小さな實生の何様なるのを何時賞美しようといふのであらう。しかしこゝが面白いのである、出來た人で無ければ出來ない眞の樂みを取つてゐるところである。貞德は公より遙に年下である。我身の若さ、公の淸らに老い瘦枯れたるさまの賴りなさ、それに實生の松の綠りもかすけき小ささ、わびきつたる釣瓶なんどを用ゐてゐらるゝはかなさ、それを思ひ、これを感じて、貞德はおのづから優しい心を動かしたらう、どうぞ此松のせめて一二尺になるまでも芽出度おはしませ、と「植ゑておく今日から松のみどりをも、猶ながらへて君ぞ見るべき」と祝ひて申上げると、「日のもとに住みわびつゝも有りふれば今日から松を植ゑてこそ見れ」と、たゞ物を云ふやうに公は答へた。

其器其德其才が有るので無ければ何様することも出來ない運勢に生れ合せた人の、八十ごろの齡で唐松の實生を植ゑてゐるところ、日のもとの歌には隨涙の音が聞える。飯綱修法成就の人もまた好いではないか。

ある不幸な人について

武者小路實篤

自然は生長しつゝあるものゝ味方である。亡ぶものゝことは考へてゐない。自然は獅子を生かすことを考へる時、兎が喰はれることは考へない。雛の生ることは考へても、小鳥の食はれることは考へない。尤も自然は何にも考へてはしない。生命の法則がさう出來てゐるにすぎない。病菌がふへることを考へれば人間が死ぬことは考へない。兩方が生きる場合はいゝが、兩方が生きない場合、自然は勝手にしろと云ふ。どつちが生ても、どつちが死んでもかまはないと云ふ。云はないにしても事實はさうである。

だから自然は不幸なものに同情はしない。病人がいくら苦しんでも自然は一向無關心だ。それを見て無關心でゐられないものがあれば人間だけだ。しかしさう云ふ人間も多いとは云へない。

蜜蜂の世界では働けなくなつた蜜蜂は殺されるさうだ、其處に何等の私情がない。働いて働いてそして負傷して働けなくなると殺される。人間の世界でもそれに似たことが行はれるが、その話をきいて怒らないものは人間ではない。そして正しくつて負傷したものを大切にすることは人間界では美徳である。不正で負傷したにしてもそれを見たら同情しないわけにゆかないのが人間である。

自分が同じく負傷した時のことを考へることが出來るのは人間らしいことである。

しかしだからと云つて生長しつゝある自然の意志を無視することは出來ない。

孔子をして「この人にしてこの病あるか」と云はさした病氣にかゝつた人を見る時、我等は同情する前に嫌惡させられるのが普通なのは、その病氣が他人に染らないためだと見ることが出來る。皆がその病氣になつても平氣だと云ふ風につくられてゐては反つて困る。

それだけ病人はたゞ一層氣の毒であり、たゞ一層決心をつよくすることが必要になる。

○

自然はまた完全ではなく、少くも人間は肉體的にも精神的にも完全ではない。

自分は自然が無目的に盲目的に人間をつくつたと考へる時、人間の出來のいゝのにおどろく、そして生命を宿すためにつくられた肉體の完全さと微妙におどろく、しかし全智全能の神がつくつたものとすると、そんなことは僕は信じてはゐないが、人間の出來は不完全すぎ、もろすぎ、不公平すぎ、不幸な人が多すぎると思ひ、又自分達の生命の不安さがひどすぎると思ふ。

しかしどうして生きものには目が與へられてゐるかとか、人間には耳が二つ切り與へられてゐないとか、考へてゆくと餘程うまく無駄なくつくられてゐるのにおどろく。どうして目なんて云ふものが出來たのだらうと思ふと、不思議に思はないわけにゆかない。

必要に應じて生じて來ただけでは說明が出來ないやうに思ふ。何か生命と云ふものがあつて、それに適應する形が自ら生れて來たと考へる方が眞に近い氣がする。

そして我等の生命はいつも故障があることをよろこばず、故障にうちかつて常に健全になりたがつてゐる。

病氣で滿足しない。健康になり切るまでは肉體のことを忘れ切ることが出來ないやうにつくられてゐる。普通人が肉體に超越出來る時はたゞ肉體が健全な時だけに限る。

だが人間の肉體はもろいものであり、故障の多いものである。そしてその故障にもいろ／＼ある。生れつきのと、後天的のと、一時的なのと、一生つきまとうのと。

○

そして故障がある以上、人間にそれを癒し得られたい。しかしその故障がなほせるものならいゝが今の人力でなほせないものだつたら、あきらめるより仕方がない。しかしなほらないものか、なほるものか、その見切りをつけるのは容易ではない。人間は今迄何度も不可能と思ひ込んでゐたことを、可能にした。

簡單な例をあげれば、電話、電信、電燈、ラジオ、飛行器、潜水艇なぞは昔の人が想像も出來なかつたにちがいない。病氣をなほす藥の方でも今迄不治と思へたり、豫防方法がわからなかつたりしたものを何度も見出し、實行して來た。だから人力でなほせるもの、なほせないものと云ふ區別はつけ憎い。そして其處に人間の不確さがあるのだ。

あきらめるより他仕方がないと思ふ場合も、まだなんとかしたらなほりはしないかと思ふ。あまりに早くあきらめる癖が人間にあつては人類は進步しない。所がまたあきらめがあまりおそすぎるのも見いゝものではない。第一時間を無駄にし、一生を棒にふる危險がある。人間は自分に不可能なことはあきらめるより他仕方のないものだからである。そして可能な方面でうんと働けばいゝのである。

誰も人間に不可能のことを責めはしない。もしせめる人があればそれは馬鹿であり、暴君であり、恥知らずである。そんなものに責められるのは不名譽ではない。しかし可能な範圍で努力が不足してゐる

時、人は少くも自分では責むべきである。他人は責めることは出來ない場合が多いが、しかし少くもその時はその人を尊敬は出來ない。

○

例へば目くらの人に目が見へないと云つて非難する人があれば馬鹿である。見へないのはその人の罪ではない。しかしその人が目くらになつた原因には非難すべき場合も、同情すべき場合もあるであらう。しかし盲目になつてしまつた以上、その人の目の見へないことは非難出來ない。尤もその人が好んで盲目になつたり、なほるのをなをさなかつたりした場合は非難されるであらう。しかしそんな[illegible]た人は滅多に居ないであらう。

僕が聞いた話に、盲目の人が盲目の故で皆に尊敬され、自己の存在をはつ切りされてゐる人があつて、目をなほされるとその自分の特色がなくなるからなほすのを考へてゐると云ふ人があつたが、話だからあてにはならないが、萬一そんな人がゐたらそれは非難してもいゝと思ふ。しかしそんな人は例外の例外で、多くの人は目が見へるやうに出來るだけのことをやつて見て、そしてやむを得ず思ひ切つてゐる。さう云ふ人は責めるわけにはゆかない。

しかし自分が目が見へないこと許りなげいて他の方面を生かすことを全部的に忘れてゐるものがあれば利口だとは思へない。不可能のことは不可能とし、自分の可能なことの方に全力を向ける方が賢い。盲目の人が音樂をやるなぞは當を得たものである。又僕の友人に盲目の詩人がゐるが、その人は三十近かくで、完全に盲目になつた人だが、盲目になつてから詩がめき／＼とよくなつた。

つまり眞劍にならないと生きられないから、あまりに淋しいから、又あまりに苦しいから、かくものが自づと鍛えられて來た。

人間にとつて目は隨分大事な役をしてゐるが、しかし人間は目許りの動物ではないから、目が見へないでも生かす方面はいくらでもある。そのいくらでもある方面に全力をつくした人は尊敬すべき人だ。

○

又死病にとつかまつた人があるとする。早くあきらめるのは悪いが、しかしあはてゝます／＼身體を悪くする人よりも、天命は何かに任せて出來るだけ賢く養生する人が賢い。尤も苦しい時に平靜にしろと云ふのは云ふ方がまちがいと思ふ。しかし第三者の立場にたてば身體をわるくするやうなふるまいをいゝことだとは云へない。

それに反して苦しみをたつて、立派な態度や心がけのとれる人には我等は感心しないわけにはゆかない。

それは不可能なことをしたのではない、自己に許された可能をよく生かしたからだ。

○

トルストイの手紙にかう云ふ文句がある。

「オプチン修道院には、三十年以上も、左の手丈しか動かす事の出來ない不隨の老人が大地に病臥してゐました。醫者は、苦痛が強いに違

いないと言ひましたが、彼は一言も訴へないのです。そして絶えず十字を切り、聖像へ感謝の眼差を投げ乍ら、微笑しつゝ、如何に彼が神に感謝してゐるか、又、如何に彼の中に燃ゆる生命の火花に對して喜んでゐるかを示して居ました。何萬の訪問者が、彼を見やうと、修道院へ來るのでした。そしてこのあらゆる活動の可能性を奪はれてゐる人間から、如何許り多くの善が世に擴まつてゐるか計る事は困難です」(外山完二譯トルストイの手紙一六——一七)

人は不可能なことをしない事はせめない、可能の範圍に於て美しい心が生る時、人々は涙をながしてよろこぶのである。

健康な人は可能の範圍が廣すぎるのである。それはよろこびであるが、それだけ散漫になりやすい。可能な範圍がせまくなるに從つてやけを起さない人はより深いものを生かすことが出來るやうになる。否むしろより深いものをたよつて生きないと生きることが苦しくなると云つてもいゝ。

死の宣告をうけた人や病人から深い魂から出る聲をきくのはよく經驗する處である。彼等はなまやさしいものをたよるわけにはゆかないから。

○

人間が他の動物とちがう面白さは心靈界と云はれる部分が非常に多く與へられてゐるからである。

人間の健康なよろこびは動物的なものであり、自然的なものである。そのよろこびもたしかに深い。朗かであり愉快であり、何にもかも忘れる。僕はそのよろこびを讃美したいものだ。それは白晝の喜びであり、大びらのよろこびである。人生にそれがあるのは、人間が健康で生てゆくことを望むもの丶意志から出てゐる。その意志はまちがいのないものであり、深いものである。この世に病人はたへたことはないし、死んでゆく人もたへない、しかし健康な時は健康のよろこびを十分味はふべきである。

しかし人間はいつも健康と云ふわけにはゆかない。いつ死ぬかわからない。いつ大けがするかわからない、いつ死病にとつかまるかわからない。

健康になりたくもなれない時が多い。少くも必ずさう云ふ時がくる。

人は健康許りを傲るわけにはゆかない。その時いくらあわてゝも、もだえても死の神は許してはくれない。

自分の處へおちこんでくるのを待つてゐる。もがけばもがく程、死は近づいてくる。

この時平氣でゐられる人は少ない。

そして平氣でゐられない人には心靈が目ざめてくる。

○

自然はガムシヤラのものである。

すべてに生きよと命じてゐる。そして死の恐怖を與へておきなが

ら、どん〳〵殺されてゆくのを平氣で見てゐる。

虫や小魚の食はれることはどの位ゐかわからない。食はれる爲に生てゐると云つてもいゝ位ゐである。

逃げるだけは逃げるやうに神經的につくられてゐながら食はれなければならない小魚を見るのは見ぢめである。だが自然である以上仕方がない。小魚は又小さい生物を食つてゐるであらう。

しかし少くも人間になると、自然は我等を死の恐怖だけで支配しない。又我等が逃げる力がなくなつても生る力は與へられてゐる。また人間は野蠻時代を脱し切つてはゐない。しかし生命の維持に肉彈をもつて戰ひ得ないものも平和に生きられる用意をしつゝある。人情が其處に入つてくる。

この人情があるので人間は全部的に生きられるやうになる。

○

もつとはつきり云ふと、

自分は人間だから他の動物のことは知らない。恐らく人間に近い動物には心靈界が存在してゐると思ふ。だがその範圍が人間程大きくない。

この心靈界は肉體とはなれては我々には考へることの出來ないものだが、しかし肉體の健康はその人の心靈界の健康を語るとは云へない場合が多い。健全な身體に健全な精神が宿ると云ふ言葉はあるが、しかし健全な精神と云ふ意味がはつきりしない。そして人間によつて肉體的な人もあり、精神的な人もある、比較的の話だが。そしてある人は他人の生命には冷淡であり、他人が死ぬのを見ても平氣であり得るが、他の人にとつてはさうはゆかない場合が多い。電車なぞにのつても、偶に精神的でない肉の持ち主に時々出あふ。それ等の人は健康な肉體の持ち主であることが多い。

自分は心靈を肉體からはなれて存在するものとも思はないが、しかし心靈に目ざめ方の不足な肉體にはあまり用意がもてない。

なぜかと云ふと肉體はあまりに個人的なものであり、他人と共通しにくいものだ。一人が飯を食つたつて他の人の胃の腑ははらない。肉體の苦痛もその人に屬して他の人には感じられない。例外の場合に同感者にその苦痛がつたはることもあるが、それは滅多にないことである。

精神の方はさうではない。この方のは個人と個人を結びつけ、個人と全體とを結びつけるために存在する。

だから精神は他人につたはることで生きだすので、他人につたはらない時ははがゆさを感じる。そして精神力の強いもの程このはがゆさを感じる。だから孤獨感の強いもの程、精神力が強いとも云ひ得る。精神的な人間でないと淋しさを感じる必要は少ないと思ふ。

他人につたへたいものが少ないからである。同時に孤獨感が強ければ強い程心靈は目ざめてくる。飢を感じれば感じる程食慾が強くなるやうなものだ。

だから實感の強いダ・ヰンチや、ミケルアンゼロは精神的になり、實感の少ないチヽアンは精神的分量が足りない。

そして幸福な人は精神的要求が少なく、不幸な人が精神的要求の強いのも當然である。

不幸な女は詩人として秀れ、幸福になるに從つて詩がだめになることはよくあることである。

多量に精神的な人は別である。しかしその人でも不幸に愉快になれる時は心靈は居眠りがちになる。

○

すべての人が本當に幸福になり切つた時、心靈はます／＼活動するか、ます／＼居眠りするか、それはわからないが、しかし皆が皆幸福になつてしまつたら心靈は目ざめる必要がなくなるかも知れない。

しかしそれは夢の國の話である。

○

自分はこゝで話をかへて本題に入らうと思ふ。

不幸な人はどう生きたらいゝか。肉體的に惠まれない人はどう生きたらいゝか。

精神的にも惠まれない人、つまり白痴の人だつたら、どう生きると考へる餘地がない、だから問題はない。病院にでもいれて頭をなほせるだけなほすやうにするか、傍のものが親切にしてやつて出來るだけ平和にくらすやうにしてやるかゞおちで、當人には何にものぞめまい。のぞめる餘地があれば白痴ではない。

肉體的に不幸な人、たとへば盲人とか、聾者とか、不具に生れついた人とか、さう云ふ人は心靈の力によつて更に強く生きようとするのがいゝと思ふ。他に道がないと思ふ。尤も不具にもよる。一方にかけた人はかへつて他方に優るものである。二兎を追ふものが、一兎を追ふことになるから。

集注された力と云ふものは不思議に力づよいものだから。

昔の僧侶達が禁慾したのは、禁慾そのものに價値があるのでなく、禁慾することによつて精神力が倍加されるからである。

肉體的に禁慾を強いられたものは、倍加された精神力で生きるべきである。

孔子は「この人にしてこの病あるか」と癩病の弟子について嘆いたことがあるが、病氣は人間の道德のあるなしには容赦はしない。不德の人でも長命すれば、有德な人でも短命なことはよくある。肉體的不幸は道德律で支配されない場合が多い。だから肉體的不幸は當人にとつて不名譽でない場合が多い。よし不名譽の場合があつても、もつと不名譽な人で健康を損ねない人はいくらでもゐる。

肉體的不幸は耐え難いものではあるが、その人の不名譽にはならない。我等がそれ等の人に嫌惡をつい感じる場合があるが、それは健康に人々をしたがるものゝ意思から出てゐるので、道德心からはむしろ同情しなければゐられない。

同情されると云ふことはあり難いことではないかも知れない。しかし我等は病人の苦痛を見て同情しないわけにはゆかない。そしてさう云ふ人がいろ／＼の苦勞に參りながらも、美しき心を失なはず、又立派な仕事を完成してゆくのを見ると悲壯な感じを味はふ。

子規などもその點感心する。彼は苦しみぬき、はたの人にあたりちらしたらしいが、しかしそんな時でも自分の仕事のことは忘れず、立派な仕事をしてゐる。

僕の友人の木下利玄も同じ病氣でたほれたが、その苦しみは彼の歌をより深かいものにした。

歌や文學の仕事が出來ないものでも、自分の心がけを本當に鍛えていつたら、その心の深さはまづ近い人を感化し、さらに遠い心の無意識な領土にひゞいて、其處によき感化を與へ、又其處から反射的に深い神的な喜びを受けとるであらう。

心がけをよくすることは、最も深い喜びを受け入れる唯一の道である。この道を閉したものには迷ひがある許りだ。救ひは無意識な處において心と心が調和された處からくる。人間の心がけをよくしない運動は人間に食を與へることは出來るが、心のよろこびを與へることは出來ない。人間をして死に勝たすことは出來ない。人間をサバクに追ひやつて其處で食ひものを十分に與へれば人生は救へるものだと思つてゐるのに似てゐる。

我等は食へなければ困るのは事實だが、食へればあとは心がけをよくするに限る。しかしそんなことも超越出來る時は超越するがいゝ。精神上何等の苦痛を感じない時は、心がけをよくする必要は先づない。肉體に故障が起らない時、人は肉體のことは忘れるのがいゝ。腹がへる迄人は食ひもののことは考へまい。しかし腹がへれば食ふことを考へる。精神上に飢ゑや、さびしさを感じる時、人は自分の心がけを先づ正さなければならない。

○

不幸な人を救ふ力のあるものは人間の心靈である。之をよく生かすことが出來る時決心は新になり、深い生命はその人の胸に滿ちて、自づと元氣になり愉快になり喜ぶやうになる。

それには隣人と相愛せるやう自分の心がけをなほすことが必要であり、又自然や、美をたのしむやうに心を向けることが大事である。

人間は死ねば大地に歸る、自然と同化する。さうなれば議論はない。しかし生てゐる間も、人間は自然に逆つて存在するのではない。自然と調和して生てゆくのが賢い。我等は不可能なことは出來ない、可能の範圍で自然と調和することが必要だ。つまり自然をすなほに内に働かすことが大事だ。

心をしやちこばらしたり、理窟でつゝぱつてゐては駄目である。心を出來るだけすなほにして、そしてすべてを出來るだけ愛して見ることが必要である。

何を見ても腹が立つ、それは心のあり場がまちがつてゐるからだ。

だが思ひあがつたり、虫のいゝことを考へたり、不可能のことを考へたり、慾望に打ちまかされたりするからだ。

たとへば自分が病氣してゐるのに、皆はたのしさうに笑つてさわいでゐる、腹が立つ。自分は死にかけてゐるのに、看護婦はなま白い男と冗談を云つてゐる、腹が立つ。自分は罪もないのに不具で皆に嫌はれる、腹が立つ。

腹が立つのは更に自分の心がけをよくし、更に自分の心を鍛へるためにたつものとして尊敬すべき感情だが、つまり發憤と云ふことは決心を强くすることだが、しかし腹が立つから、自分の方をよりよくすることは考へず、相手をやつけることを考へる時、其處に人類の生長する意志に背く心がけが生れて來、其處で罰を受けて、見るものが皆腹立たしくなる。

病人は他人に自分の病氣をうつすのを恐れる間は、美しい心がけである。それは人類の生長を害しないやうに心をつかふのだから、その心がけは人類のよしと見る心がけだ。しかし自分だけが病氣してゐるのは馬鹿氣てゐる、他人も同じやうに苦しめてやらうと思ふ時、他人には嫌がられるし、人類の意志からは見はなされる。ますます〳〵やけになる。之けやけにさせる方もわるい。しかしやけになる方もいゝとは云へない。

あまりに相手が冷淡で、虫がよく、病人の生命を少しも愛せず、少しでも早く死ねよがしにあつかはれる時、病人が復讐的になるのは當然であるが、しかしそれはあさましいにちがいない。それは兩方が人類の意志からはなれすぎてゐる。

自分が病氣になるのを恐れるのはいゝが、それだけなほ病人に同情して、それがなほるやうに望むことが必要である。よし助ける力がないにしても。

其處の程度がむづかしいが、大事な處は、心がけがわるい處はよくするやうに骨折りそして人類の心に叶ふやうに自分の心がけをして、そして行動することである。

○

「君子は窮しないか。」から或人が孔子にきいた。孔子は「君子は元より窮す、しかし小人は窮すれば亂れる」と答へた。君子のことは云はなかつた。君子はこまるがしかし人類の意志を知つてゐる。それに逆はふとは思はない。

つまり參るか、又腹も立てるかも知れないが、自分の病氣を他人にうつさうと云ふやうなことは考へない。窮しても自分の人格はさげない。其處から光があふれてくる。

それならば心がけはどうしたらいゝか。

これは本當に苦しんだ人でないとわからない。そして自分なんか本當に苦しめば參るかと思ふ。しかしやがて苦痛はうすらぐ時がくるであらう。少くも僕の文章なぞをよむ心の餘裕のある時なら、僕の云ふ

ことわかつてもらへると思ふ。それで安心して、今自分が考へてゐる通りのことを云はふ。

心を静かにし、おちつき、そして心がよろこびに満ちるやうにすることが大事である。何か仕事が出來る時は、その仕事を忠實にするがい〻。仕事が光り出すまで。しかし仕事が出來ず、横になつてゐる時、又は夜中に目ざめた時、樂しい空想が出來る時はそれもい〻であらう。それが出來ない時は萬事何かに任せて、神經をなるべくおちつけ、身體をらくにし、口のわきに微笑をうかべてうれしさうな表情を輕くして見て、深呼吸を静かにやつて見るとい〻かと思ふ。之も無理になつたり、努力的になつてはいけない。僕は仰向けにねて身體をのばして静かにそれをやつて見ることで心と身體の調和をとり戻すことがよくある。うれしい表情にはある處までよろこびが從つてくるものだ。肺を廣くすると空氣が自づと入つてくるやうなものだ。

身體の調子と心の調子とをとることは、安息するために、又元氣をとり戻すためには必要である。睡眠する時間は出來るだけ心を静めることが必要だ。身體の元氣な時は少しは無理もい〻、時には大いに無理もい〻かも知れない。人間の身體はガラスでつくられてはゐない。鍛える程強くなる性質をもつてゐる。

角力とりは静かにしてゐるから力が出來るのではないことは云ふ迄もない。しかし病氣の時は別である。

○

心を静かにするのは樂ではない。思はなくつてい〻ことを思ひ、心配しないでい〻ことを心配し、あわてないでい〻時にあわて〻、果斷でなければならない時ぐづ〳〵するのは我等の經驗することだ。

もう一息の辛抱が出來なかつたり、用心が出來なかつたり、もう一段の決心が必要の時その決心が出來なかつたりすることは我等の日常經驗することだ。

だがそれで滿足してはならない。我等はたへず修養をすることが必要であり、又力を鍛へることが必要だ。

苦痛にかつのには、苦痛の元因にかつことが一番大事だ。腹が痛む時、その痛だけを辛抱せず、その痛みの元因の腹のわるい處をなほさなければならない。

その元因がなくなせない時はやむを得ないが、元因を知らずに苦痛だけをごまかさうとするのは拙劣な療治だ。

自分が先天的に不具であつたり、後天的に不具になつてなほらなかつたりした場合、元因は不具にあるのだから、なほしやうがないわけだが、しかし不具の缺點は人類の生長に役に立つ素質が足りないことにあるので、他人に笑はれるためにあるのではない。笑はれるのに平氣になれない場合は卑怯だと思つてい〻。笑ふ方が馬鹿である。それだけなほ一心に自分に許された方の仕事をすることで、身體の不具でない人に優る仕事をすれば、皆感心するにちがひないし、第一に人類から生る傲と滿足をおくられる。

人間の心につたわるのはどうしても矢張り人間の心である。心がよく鍛えられてゐる人に接する時、いつの間にか自分の心の内に尊敬の念が生じる。美しき心にふれると涙ぐむ、ありがたくなる。

身體はいかに不具であり、病氣であらうと我等はその人の心に動かされる。

たとへばすべての人から最も嫌はれる病氣の人でも、同病の人のために本當に働くことが出來たら、その人の話がつたへられる處、人の心は清められ、又決心を新にされるであらう。

○

愚か人は考へても始まらないことを考へ、くよくよしても仕方がないことをくよくよし、他人に恨んでならないことを恨み、他人に要求することが無理なことを要求する。

しかし賢い人は自分に不可能なことは天に任せ、考へても仕方のないことは斷念して考へず、考へるに從つて道が開けることを考へる。他人に要求しても駄目なことは要求しない。そして自然にたいしても無理は云はない。

同時に早くあきらめず、ひねくれない、少しでも希望があればそれを追求する、開ける道はすべて開かうとする。人間の能力を極度に生かしたがる。しかしその順序を知つてゐる。

醫者に信頼出來ることは信頼するが、しかし自分の心がけをなほせるだけなほすことは忘れない。

○

要するに、不幸な人間に生れつくのは閉口にはちがいない。社會的とか貧乏とかによつて不幸になる人のことはこゝではふれないことにするが、それ等の人のことについては既に多くの人が聲をからして云つてゐる。しかし他人に嫌はれる病氣にかゝつた人や、不具者はそれ等の人以上に不幸かも知れない。

しかしどつちが不幸であるかを論じるのは餘計なことである。自分はこの文章では、病人や不具者について云ひたい。

要するにそれ等の人は耐えられないいろ／＼の不幸や不愉快や淋しさに逢つてゐると思ふ。それだけ發奮しないわけにはゆかないと思ふ。そしてその結果、それ等の人から時々すぐれた人があらはれてくる。

自分はその不幸に打ちかてと云ふ力はない。自分だつたら先づ隨分參ると思ふから、しかし參り切つて許りはゐられない。どん底におちこんだら、其處からはい上つて見せるつもりでゐる。それより他しかたがない。

「私の力はこれだけです。
あとはあなたに任せます。」
から何かに祈れるものは仕合せである。
それより他は人間業では出來ない。
出來ないこと許り考へたり、失はれてとり返しのつかないものに許

り未練をもつたりするのはつまらない話である。それだけの暇があつたら、どうしたら自分は今より賢くなり、同病の人を肉體的に或は精神的に救ふことが出來るか考へる方がいゝ。それには先づ自分を救ふ必要がある。

自分がつまらぬことにくよくよしながら、他人につまらぬことにくよくよするなと云つてもそれは無理である。

自分は同じことをくり返すが、人間はまだ完全でないから、とり返しのつかない不幸に人間は落ち入りやすい。

そして不幸におち入つた時は、あはてるのが當然だが、しかしあはてゝ得をしないと云ふことがわかつた時は、落ちつけるだけ落ちついて、いかにしてそれから逃れるべきかを考へ、それが出來ないことがわかつた時は、その境にあつて出來るだけ自分と隣人の生命をよく生かせるやう骨折るのが賢い。

「しかしそんなことが出來るものか」と云ふものがあつたら、自分はその人の前に頭を深くさげて黙るより仕方のないものである。

(一八、三、五)

維新回天史の一面（其四）

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰　德富猪一郎

（第十七）攘夷論

孝明天皇にしても、將た朝彦親王にしても、朝廷の大勢はいづれも攘夷論であつた。又若干の少數者を除けば、大名でも、旗本でも、一般の武士でも、その多數と云はんよりも、大多數は攘夷論であつた。これが癸丑甲寅ペルリーの來航する以前の形勢であつた。

後世では攘夷論を極めて愚人の囈夢と笑ひ興じて居るが、當時に於ては後來開國論の一大先達と推稱せらる丶横井小楠抔も、その最初は攘夷論であつた。而して幕府當局者等も、いづれかと云へば、元より攘夷で、元より又鎖國で、唯だ大勢に餘儀なくせられて、和親修交といふことまでに折合つたのである。腹の底は勿論攘夷だ。横井小楠の詩に、

婦女還能見レ死輕。義肝國稱男兒名。紛紛援レ海彼何虜。此虜不レ殲誓不レ生。

とある。若し作者の名を蔽うて、之を攘夷家の大先達、藤田東湖の作とするも、誰も疑ふ者はあるまい。

民間の識者にしてこの通りであれば、最も世間の事に縁遠く在す朝廷の上に於て、攘夷論が行はれたる事は、當然過ぎる程當然である。

× × ×

今日の見識より評すれば、攘夷論が天理人道に反するのみならず、實際政治として、不可能であることは、論をまたぬ。然しながら幕府二百幾十年間鎖國の制度を維持し來つてゐるにも拘らず、藪から棒に外より來つて此の制度を破壞せんとするに際し、これに向つて抵抗を試みるといふ事は、不思議でもなければ、不都合でもない。寧ろ當り前の事と云はねばならぬ。

殊にペルリーの高壓的威嚇的態度は、我國志士の攘夷論を激發するに、──幕吏の膽を寒からしめ、彼等の腰を折らしめたる効能あると共に──與つて最も力あつたのである。されば攘夷論の激昂の一半は、米國水師提督ペルリーその人の責に歸しても差支へあるまい。

世間ではペルリーを日本開國の恩人として、久里濱に記念碑を建てゝある。それは恰も井伊直弼を開國の恩人として、横濱伊勢山に銅像を建てたと同じ意味だ。恩人であるかないかは姑く措き、ペルリーは決して日本の爲に大砲や軍艦を率ゐて、日本に來たのではない。

彼は米國の爲に──詳に云へば米國の利益を開拓する爲に──日本に來たのである。人各々その國家の爲にする。米國人たるペルリーが米國の爲に、日本に來たとて、何も我々が不足を云ひ、不平を訴ふる理由はない。唯だこれを無暗に有難がる者の心が我等には合點出來ないまでだ。

× × ×

井伊直弼は開國論者でもなければ、世界的知識の追求者でもない。唯だ彼は内外の勢に迫まられ、幕府の體面を維持し、幕府の命脈を繋がんとする一念よりして、止むを得ず安政條約調印の事に同意したのだ。要するに彼は不戰論者ではあつたが、決して開國的思想家ではなかつた。

その結果から云へば、ペルリーが米國の爲に、日本に迫つて開國せしめたのと、井伊直弼が、ハリスに迫まられて止むを得ず安政條約に調印を承諾したのと、何の擇ぶ所はない。結果は結果である。動機は動機である。我等は苟も感謝す可き理由があらば、感謝するに吝かなる者ではないが、感涙を流す必要

のないところに迄、感泥の安賣はしたくない。

× × ×

今少く具體的に、何故にペルリーが攘夷熱を煽つたかといへば、彼の態度だ。日本では長崎を外船出入の場所と定めてある。此の事は廣く世界にも知れ渡つてゐる事實だ。

即ち文化年間、露國使節レザノフは、その爲に長崎にやつて來た。又ペルリーの浦賀に來たのは、嘉永六年六月三日であつたが、露國使節プーチャチンの長崎に入つたのは七月十七日であつた。プーチャチンは元より浦賀に行く事も知つてゐた。江戸灣に深く入りて、肉眼にて千代田城の見える邊まで、軍艦を進むる事も知つてゐた。然も彼は日本の國法を守つて、柔順しく長崎に入り、然もその年を越すまで、長崎に滯在して居た——尤も暫くその間に長崎を去り、支那近海に遊弋したけれども——。

然るにペルリーは、日本の國法にかまはず、初から國法を破る決心もてやつて來た。元より彼は日本を征伐の爲に來たのでもなく、日本侵略の爲に來たのでもない。目的は平和であつた。それに就いては、我等も充分にこれを識認するに吝かでない。されどその手段は決して平和ではなかつた。

× × ×

彼は豫め日本人は平和では談判が捗らぬ。此の小賢しく、狡猾なる人種には——ペルリー其人等の言葉の儘——武力をもつて威嚇するの外はないといふことを、當初から決心し、當初からその見識、見幕をもつて臨んだのである。

而して彼は日本內地を占領する積りではなかつたが、萬一の場合には、琉球を占領する決心と、準備とをした。又小笠原島を米國の植民地とする方略を有し、其の意見書を、本國に致してゐる。而していざとなれば、江戸の市街を砲擊することはしかねまじき態度を示した。

而して彼は露はに戰爭とは云はぬが、若しこの要求を聽かねば、ぞく／＼軍艦を差向け、如何なる事になるかわからぬといふ——即ち我が云ふことを聽かねば、喧嘩づくでも、腕力づくでも、即ち戰爭しても、その目的を必ず達するといふ意氣込みを示したばかりでなく、其通りに聲明した。

斯くまでペルリーをして決心せしめたのは、日本の鎖國制度が、餘りに牢固であつた爲といはゞ、それも一種の理窟であ

る。然しながら善にせよ、悪にせよ、通にせよ、不通にせよ、その獨立國が獨立國として、その國法を二百幾十年定め、これを行うてゐつゝあるに際して、如何にそれが世界の大勢に適應せないからと云つて、案内もなく、それを踏破り、突破り、遮二無二威嚇恫喝の末、その目的を達せんとするは、當時の日本人として、苟も國家の體面なるものを自覺する者には、辛抱が出來なかつたであらうと思ふ。

× × ×

横井小楠はやがて開國論者となつたが、然も開國をするにしても、我より進んで開國するもので、彼より壓迫されて餘儀なく開國するものではない。所謂脅迫的開國は、これ結婚を名として、凌辱を加ふるものであると云うたが、これには何人も異議のないところであらう。

× × ×

假りに地をかへて日本人がペルリーの態度を以て米國に臨みたらば如何。米人は英國の議會が、米人の承諾を得ずして税をかけたからと云つて獨立したではない乎。それ程自分共の體面や、權利を重んずる者が、他國の國法を無視して、軍艦や鐵砲で國を開かしめたといつて、それを誇り顏に、自ら恩をきせて、得々たるべき理由はない。

その理由なき恩を恩にきて、有難がるほどの、お目出度き者が、我日本に一人でもあらば、これこそ實に不思議千萬と云ふも、差支へあるまい。日本の鎖國が、天理人道に反すると云へば、その日本の鎖國を暴力もて打破する態度は、猶更ら天理人道に反すると云はねばならぬ。

日本人も世界人類並の知識はもつてゐる。それで開國の必要は、無理押しに押さずとも、自ら覺醒する——否な既に識者の中には覺醒しつゝあつた。然るに斯かる擧動に出でたが爲に、かへつて覺醒せんとしつゝあるものまでも、國家の面目といふ一點からして、攘夷熱を煽つて來たのは、止むを得ぬ次第である。もとよりペルリーの威嚇手段で、幕府の當局者は、戰爭が恐い爲に、心ならずも開國といふ事になつたから、威嚇の結果が全く水泡に歸したとは云はぬ。確かに威嚇には、威嚇の功能があつた。

而してその功能は決して無代價ではなかつた。他力には日本人が外人を憎むの心。日本人が外人に對して釋然たらざるの

心。日本人が所謂外人に對する敵愾心なるものを挑發、激昂したることは、間違のない事である。
要するに攘夷の思想は、ペルリーの來るを待たず、固より存在した。されど彼の態度はその思想を刺戟し、其の思想を煽揚し、その思想を惡化せしむるに、尤も有力であつたことは爭はれない。

（第十八）京都論と江戸論

當時の時局を大觀するに、殆ど日本全國公武合體――朝廷も、將軍も、大名も、旗本も、武士も――いづれも一致協力して外難に當るといふ狀態であつた。元より對外の思想、及び對外政策に就いては、必ずしも意見が一致したとは云へない。一方には平和的開國者があれば、他方には又極端なる鎖國者があり、一方には絶對的攘夷を主張する者あれば、他方には不戰的妥協を得策とする者がある。併し大體に就いて云へば、癸丑甲寅の時勢に於ては、その行ふ手段方法に就ては、差別があつたにせよ、その精神は、先づ攘夷であり、而して其の多數は不戰的攘夷であつたに相違あるまい。語を換へて言へば、攘夷は攘夷でも、戰爭をしない攘夷であつた。即ち開國は好まない。併しながら戰爭も亦好まない。戰はしたくなく、外國人には來て貰ひたくないといふ、極めて虫の好き話で、とてもそれが完全に行はれ得べきものでない。此に於てか必然の結果として、繰延べ論は出で來つたのである。
幸ひに嘉永六年の中頃、將軍の代變りとなりたれば、それを口實にプーチャチンに向つても、三五年の後に決答すると云ひ、ペルリーに向つても亦た同樣の筆法を以て、應接せんと試みたのである。

× × ×

併し戰爭をせず、開港もせず、そのまゝ此の危機を經過するといふことは、誰にも出來ぬ藝當である。此に於てか勢ひ開國乎、非開國乎、鎖國乎、非鎖國乎、攘夷乎、非攘夷乎といふ問題を、いづれにか決着せねばならぬ事となつたのだ。
處が見識は二段として、局に當る者は責任があつて大事をとらねばならず、局に當らない者は責任がないとは云はぬが、自ら薄くして、勝手な論を吐く事も出來る。斯る次第で、幕府で

も、その局に當る者は、その人自身の個人的意見はいづれにありとしても、當局者の態度は、勢ひ外人に向つて妥協的となり、交讓的となり、從つてその結果は、好むにせよ、好まざるにせよ、開港たらざるを得ざるに至つた。

而して同じ江戸の勢力範圍の内にあるものにても、當局者でないものは、自然初からの鎖國攘夷の論を維持し、中頃或は少しくその實行すべからざる事を悟つても、己は必ずしもその議論の實行、不實行に向つて、直接の責任がないから、從來の行きがゝりを心ならず株守する者あり、中には頑迷にして遂に自ら悟らさる者もあつたであらう。

就中水戸一派の如きは、其の中心人物水戸齊昭の如きも、當初は眞面目の攘夷家であり、中には攘夷の實行し難きを知りても、尚ほ攘夷熱を煽りて、人心を鼓舞作興する方便となし、終りには心ならずも從來の行掛りからして、今更ら攘夷の看板を卸すことも出來ず、さりとて攘夷を實行することも猶更ら出來ず。此に於て心ならずも時勢に引摺られ、唯だ幕府當局の仕打に難癖をつけて、以て一時の快を逞くするが如き、極めて不徹底的なる態度を持するの止むを得ざるに至つたのであらう。

然も彼等の心事は、亦た頗る諒とす可きものがある。斯る非論理的、斯る表裡不一致的の態度を持するも、其の心持は天下の人心を振起するに存してゐたからだ。

× × ×

飜つて、京都の方をみれば、幾百幾十年、實際の政治より遠かり給うた朝廷であり、從つて世界の大勢とか、列强の現狀とか、若くは内外折衝の模樣とか、それ等を知ろし召す筈もなく、又畏れながらそれを知ろし召さしめんと努める者もなく、從つて京都が自ら鎖國攘夷の本家本元となるやうた狀勢を馴致したのも、決して怪しむに足らない。

斯の如くにして、擧國一致、公武合體であつたものが、自ら江戸論、京都論と、對外意見が二派に分れねばならぬやうになり來つたのは、如何にも痛歎の至りである。世間では京都の對外硬をもつて、これを全く水戸の手入れとのみ申してゐる者があるが、それは必ずしもさうではあるまい。

元より水戸齊昭が、その意見が幕府に容れられざる憤滿の餘、その親緣たる關白鷹司政通に向つて、種々の意見を申送つた事もあらう。又その臣石川徳五郎とか、鵜飼吉左衞門とか、京都

諸の者をして、それ〲運動せしめたこともあらう。單に江戸の自棄腹を京都に於て醫すといふばかりでなく、實際京都の守備が甚だ不安全であることを憂へて、眞に至尊の御身の上を心配し、その衷情を陳述したこともあらう。

併し京都の攘夷論は、決して水戸から輸入したる攘夷論でなく、云はゞ京都固有の攘夷論である。その固有と云ふことは、全く實際の政治から京都が隔絶してゐたからである。恐れながら孝明天皇でも、朝彦親王でも、人一倍聰明にあらせられても、對外の實務に就ては、何等御交渉はなかつたから、その眞相を知ろし召す可き手寄りがなかつた。

×　×　×

京都の攘夷論を一變せしむる方策として、最も正しく、且つ最も確實なる方法は、唯だ政權を京都の朝廷に奉還し、朝廷自ら外交の衝に當り給ふ事をもつて、最善の方法とするが、當時に於ては斯る事は行はれず。又行はんとする者もなく、朝廷も亦自らそれほど迄の思召なく、云はゞ朝廷は指導者としてよりも寧ろより多く批評者として、批評者の位置にあつて幕府を刺戟し給ひ、而して刺戟されたる幕府は、その所信によつて正々堂々、その信ずる所を申述べ、朝廷の御疑ひを解き、御安心願ふといふ事になつたらば、最も然るべきであつたが。幕府自らそれ程の自信もなく、彼等自ら止むを得ずして唯だ大勢に引摺られ、外人に壓迫せられて、此に至つたものであるから、朝廷に對するのと、外人に對するのと、兩樣の面を以てし、その極、朝廷にも不信、諸外國にも不信、双方から不信をせまられ、遂に自ら立往生するの止むなきに至つたのは、誠に以て笑止千萬と云はねばならぬ。

(第十九)　英明なる孝明天皇

如何なる世の中でも、多數が少數を率ゐるでなくして、少數が多數を率ゐ、若くは多數を代表してゐる。これは極端なるデモクラシーの社會でも、若くは極端なる專制政治の下に於ても格別の相違なく。癸丑甲寅の時勢に於て、京都側の勢力を代表したる者、若くはその勢力の中樞と申すべきは、恐れながら孝明天皇にて在した。孝明天皇は、恐らくは當時京都の朝廷に於ける一般の公家以上に、世界的知識を御所持遊ばされたとは思へない。

されど天皇は天皇陛下としての上御一人の御位に在し給ふといふばかりでなく、その御人格も、畏れながら餘程卓越してあらせられた樣に拜察せらるゝ。而して當時の志士が、いづれも英明の天皇として、欽仰し奉つたことは、吉田松陰が嘉永六年十月江戸から長崎に赴き、露國の船に乘込み、外國に赴かんとして、京都をよぎりたる際作りたる詩に

聞說今上聖明德。敬レ天憐レ民發ニ至誠一。鷄鳴乃起親齋戒。祈ニ掃妖氛一致ニ太平一。安得ニ天詔勅ニ六師一。坐使ニ皇威被ニ八紘一。從來英皇不世出。悠々失レ機今公卿。人生如レ萍無ニ定在一。何日重拜ニ天日明一。

とあるを見てもわかる。『從來英皇不世出』此の一句が、當時志士の孝明天皇に對し奉る心持を結晶したるものだ。

× × ×

隱れたるより顯はれたるはなく、陛下が草莽の一志士より、斯く迄仰がれ給ふを見れば、如何に英明にて在したかゞ思ひやらるゝ。又水戸齊昭の安政元年四月認めたる書中に、

『今上近代に之無御別段御勇氣もあらせられ、御元氣にあらせられ、さるかはり御□□□勢にまかせられ』云々とある。これにて如何に御精力の絕倫にて在したかゞわかる。

而して當時の朝廷に於かせられても、決して倒幕などの思召はなく、唯だ外交に關する御憂慮一點であつたと思はるゝ。尙ほ水戸齊昭は安政元年その意見書として、左の如き事を申してゐる。

『朝廷の儀、幾重にも御扱ひよろしく有レ之度き事。』

一ツ朝廷の御扱ひ宜しからざる儀聞きつけ候へば、必ず大名等へ惡智慧つけ申すべくと存奉候。併し乍ら朝廷に於ても、二百餘年斯如く太平に候へば、公邊に於て御扱ひ宜しく御不自由さへ無レ之候へば、決してこの御氣遣無レ之候へば、御宮御製作——按ずるに新御所御造營——をはじめ、御手入あそばさるゝ朝廷の御儀はいさゝか御儉約遊されぬやう、祈奉候。何程夷狄日本をとり申すといへども、名なきことは出來兼ね申すべく候。』

斯の如く幕府からさへ朝廷に向つて惡しく仕向けねば、朝廷の方から幕府に向つて惡しく仕向け給ふ樣の事はないものと、水戸齊昭等も思つてゐるし、又事實その當時はこれに相違な

く、云はゞ幕府も朝廷によつて國論を統一せんと欲し、朝廷も幕府によつて國家の安寧を保たんと欲し給うたことは決して疑を容れぬ。



近衛忠凞公肖像

（第二十）朝廷に於ける朝彦親王

扨その朝廷の中にて中樞に在す孝明天皇陛下の御力となり、御相談相手ともなるべき人は、誰であつたかと云へば、先づ近衛忠凞、三條實萬、とりわけ朝彦親王であつた事は、疑を容れない。

これから少しく朝彦親王の當時の事に就いて述べるであらう。

親王の行實には斯く書いてある。

『安政二年乙卯年三十二歳、十一月新營皇居成り、天皇還幸す。これより先親王に　勅して新殿安鎭法を修めしむ。これによつて内議に參す。毎三日一參、大抵日沒入朝し、夜に至りて退く。もつて常とす。又しばしば宸翰を賜ひ、問諮するところあり。親王知つて云はざるなく、云つて盡さゞるなし。天皇深く委任す。かつて曰く親王の朕を輔くる尋常通枝の比にあらずと。寵眷最も篤し。然れども事樞機に關するを以て多く秘して傳はらざるなり。』

この通りである。

× × ×

又當時越前の國主松平慶永が京阪事情探索として、人を派したる者の報告によれば、左の如き事が書いてある。

『一、主上は益御叡明之御事之由、其外青蓮院親王、三條公、久我公、中山公何方樣にも御人材の由。

一、或時青親王御上堂の節色々御相談有レ之、其節相談になるべき者無レ之候間、毎日にても上堂致す樣にとの御叡慮有レ之候御事之由、青親王御答には度々上堂仕候ては色々差支にも御座候間、其儀は御免被レ下候樣にとの御答被二仰上一候處、我等より指圖申す上は苦しからぬと之御叡慮之御事之由、餘は右に准じて仰ぎ奉られ候也。

此比は青親王每日之御上堂にて粟田宮に御歸り稀にて、禁裡御近くに御里坊有レ之、大方此坊へ御泊り有レ之候由、折々粟田へ御歸り有レ之候處、數日ならずして又御召有レ之と申位に御座候。

一、先年禁裏御炎上之節聖護院宮へ主上御開き被レ爲レ在候節、聖親王始諸役人轉動致し候て、御料紙文庫を初諸事御指支之處、彼之と申候て不二指上一候由。其節青親王には御草履にて御走り付被レ遊其時何とか申御側向之門外より御呼被レ遊、禁裡御炎上候間早々出よと被レ仰候て御走付被レ遊候よし、御供は追々走付候と申事——伺二御機嫌一有レ之候。然る處右諸事御指支之儀御聞被レ遊直樣御歸り有レ之、兼て御用意有レ之候御料紙文庫を始御夜具に至る迄悉く新しきものにて被二指上一其外御側向之多葉粉盆に至る迄御心付有レ之候由。又青蓮院宮へは櫃與侍局——當今皇

子御母君之由——姉大に御聞き有之候處、御掃除等迄被仰付置御待有之候由。御移之上青親王諸役人へ被仰付候に付、僧之身分に候得ば女子の事は不案内に候間、何事も御指支へ無之様夫々心を付候様にとて、鏡おしろい等に至る迄皆御買上げに相成候て被指上、又大丸屋へは早速被仰付候て、白紬五十疋とか御買上に相成候て女中末々迄被下候云々。其御行届之儀感服に難堪候。右之一ケ條を以て餘は推て知られ候。左候得ば此以後之御手配も大抵推て相分り候事と奉存候。』

又曰く、

『主上御初青親王、三條公等之御方は格別に外寇之事を御心痛に被為在候御様子。或時青親王之御咄に、十年は無難にゆき候哉と被仰候事も有之候との由承り申候。左候得ば此御方は必御心積り可有御座と奉存候』

× × ×

これは安政三年十一月附の報告であるが、これを以て見ても、如何に親王が當時の京都に於て重を持し給うたかゞわかる。尚又親王と親炙したる人々の語るところによれば、

『中川宮様の聰明な方は比類ない位でござりましたが、まことに御學問でもあらうものなら、天皇には御兄弟の中一番勝れて、殊に天下の有志に對して御話なされる模様など、實にうまいものでございました。又人と御爲に、聰明で、而してどうも察の強い御方でした。たいていおもんばかれば、しば〱當るといふ具合で、唐の太宗の如き御方でござりました。それで御學問はなく、只天禀にまかせておやりなさるから、時々御失策が出來ました。』（史談速記錄）

過を見て仁を知る。親王が如何に傑出したる孝明天皇の輔佐者で在されたかは、これにて知らるゝ。

（第二十一）將軍家定

京都にては不世出の英明なる孝明天皇の在しに、これに引かへて江戸にては、未曾有の時節に徳川各將軍の中にて、最も庸闇なる家定が當職にあつたことは、不仕合せといへば、これほど不仕合せの事はあるまい。若し當時八代將軍吉宗ほどの人が將軍であつたとしたらば、京都と相呼應して、或は上手くいつたかも知れず、然からざる迄も、幕府として、時と場合に應

する相當の働が出來たであらうに、如何にせん、家定は別に惡主、暴主などといふ類ではないが、しかも最も愚主であつた。

水戸齊昭はかつて松平慶永に書を與へて

『實に德川の天下は斯如く相成候ては、萬々一他家へ將軍を仰附けられ候ても、かれこれと德川家からは申兼ね候半。實に以て御同樣心配恐入り候事に候。御先々代御先代の如く御奢侈等は一切遊されず、御庭の鵞鳥などを御逐ひ遊され、又は御側にて豆小豆など煮候て、お側向へ下し遊され候なども御慰みの由に伺及候へば、御入發と申候ては遊されず候かに內々伺ひ及び候へども、御肝要之征夷之御任に候得ば、か樣の節は晝夜老若初め御役々召候て御直に御評議も遊され御直々御指揮遊されず候ては假令御觸れなどいで候ても行はれざる事と存奉候』

とある通りにて、彼は三十四五歲の壯年でありながら、十歲內外の子供の如く、常に鵞鳥を追廻し、或は豆を煮てこれを近臣に賜ひ、又は西洋小銃の來るやその劍附鐵砲をとつて、近臣を追廻すなどを樂しみとしてゐたと云へば、とても政治の實務に當りて、その主宰者たる任務を盡す事の出來やう筈はない。

×　×　×

或は曰く家定は世間の評判程の愚物ではなかつた。其の小姓であつた朝比奈伊賀守の所記によれば、先づ中通りの君主であつたが、其の容貌氣習が、餘りに人並外れてゐた爲め、斯く誤解せられたのだ。彼は濃い髯であつたが、諸大名出仕の時刻となりて、癎疾の痙攣の爲めに、如何とも爲しがたかつたが、小姓某が其顏を左手に抱きしめ、剃刀を當て、ガリ〳〵と剃り落して、其の無禮を謝したるに、『善くも仕つた』とて、却つて賞詞を與へた。又た或時大川御成の節、小姓某が、言葉荒く此川の水は、アメリカ大洋の水に通じて居ますから、當今の御時勢ゆめ〳〵御油斷めさるなと申したが、彼は頷きつゝ、『實其方が申す通り』と悅んだとある。併し此を以て直ちに彼が人並であつたとは云はれまい。彼は幼少の頃疱瘡に罹り、滿面の痘痕に加へ、癎症にて眼口時々痙攣し、首また之に從ひ、とても人前に出でられぬ容貌であつたと云ふ。而して老中共が、外交の事など持ち出せば、彼は直ちに落淚して、二の句は續がしめなかつたと云ふ程であれば、如何に辯解しても明主には相違あるま

い。

× × ×

徳川の政治は元より主として、老中がその責任の衝に當つてゐるけれども、最後の責任者たる將軍の賢不肖が政治に影響あるは云ふまでもない。殊に未曾有の變局に際し、事每に先例や舊慣を適用する事が出來兼ね、その事態に機宜の裁決を與へねばならぬ場合に於て、幕府が賢明なる將軍を必須とした事はいふまでもない。而して最も賢明を必要とする場合に、最も不賢明の將軍を戴くことは、如何に當惑であつたかは、今更穿鑿するまでもない事だ。

（第二十二）水戸烈公

飜つて、當時日本の支配階級に於ける重なる人物を舉ぐれば、先づ第一に指を水戸齊昭に屈せねばならぬ。次に島津齊彬に屈せねばならぬ。次に阿部正弘に屈せねばならぬ。その他越前國主松平慶永、土佐國主山內豐信、肥前國主鍋島齊正、筑前國主黑田長溥、尾張國主德川慶恕、若くは彥根城主井伊直弼、佐倉城主堀田正睦などがあつた。併しこの中に於ても兩橫綱は先づ水戸齊昭と、島津齊彬であつて、阿部正弘はいはゞ行司の姿であつた。

× × ×

試みに安政元年に於て見れば、齊昭は五十五歲、齊彬は四十六歲、正弘は三十六歲であつて、殆ど彼等は十歲づゝの距離があつた。五十五歲の齊昭は元よりその家柄に於ても三家の一であり、その年齡に於ても長老であつた。加之彼は文政十二年、三十歲にして部屋住よりその兄の齊脩の跡を嗣ぎ、水戸藩主となりて以來、天保十四年政治勵精のかどをもつて、將軍家よりいよ〳〵祖先義公の遺志をつぎ、誠忠を勵むべき旨を以つて、太刀鞍鐙、黃金等の賞を受くるに至るまで、その聲名は天下に轟き、殆ど朝野を動かした。斯くて彼はその翌弘化元年五月幕命によりて、隱居、駒込邸に幽居して以來、蟄伏すること足掛十年、嘉永六年七月に至つて漸く再び世に出で、將軍の命をもつて、國防の機務に參與することゝなつた。彼は年齡にしろ、位置にしろ、經驗にしろ、資望にしろ、何一つ不足なかつた。併し彼に最も不足であつたのは、天空海濶の大襟度であつた。彼にはあらゆる知識があつたが、又あらゆる才能をもつてゐた

する相當の働が出來たであらうに、如何にせん、家定は別に惡主、暴主などといふ類ではないが、しかも最も愚主であつた。

水戸齊昭はかつて松平慶永に書を與へて

『實に徳川の天下は斯の如く相成候ては、萬々一他家へ將軍を仰附けられ候ても、かれこれと徳川家からは申兼ね候半。實に以て御同樣心配恐入り候事に候。御先々代御先代の如く御奢侈等は一切遊されず、御庭の鵞鳥などを御逐ひ遊され、又は御側にて豆小豆など煮候て、お側向へ下し遊され候なども御慰みの由に伺及候へば、御入費と申候では遊されず候かに内々伺ひ及び候へども、御肝要之征夷之御任に候得ば、か樣の節は晝夜老若初め御役々召し候て御直に御評議も遊され御直々御指揮遊されず候ては假令御觸れなどいで候ても行はれざる事と存奉候』

とある通りにて、彼は三十四五歳の壯年でありながら、十歳内外の子供の如く、常に鵞鳥を追廻し、或は豆を煮てこれを近臣に賜ひ、又は西洋小銃の來るやその劍附鐵砲をとつて、近臣を追廻すなどを樂しみとしてゐたと云へば、とても政治の實務に當りて、その主宰者たる任務を盡す事の出來やう筈はない。

× × ×

或は曰く家定は世間の評判程の愚物ではなかつた。其の小姓であつた朝比奈伊賀守の所記によれば、先づ中通りの君主であつたが、其の容貌氣習が、餘りに人並外れてゐた爲め、斯く誤解せられたのだ。彼は濃い髯であつたが、諸大名出仕の時刻となりて、癇疾の痙攣の爲めに、如何とも爲しがたかつたが、小姓某が其顏を左手に抱きしめ、剃刀を當て、ガリ／＼と剃り落して、其の無禮を謝したるに、『善くも仕つた』とて、却つて賞詞を與へた。又た或時大川御成の節、小姓某が、言葉荒く此川の水は、アメリカ大洋の水に通じて居ますから、當今の御時勢ゆめ／＼御油斷めさるなと申したが、彼は頷きつゝ、『實其方が申す通り』と悦んだとある。併し此を以て直ちに彼が人並であつたとは云はれまい。彼は幼少の頃疱瘡に罹り、滿面の痘痕に加へ、癇症にて眼口時々痙攣し、首また之に從ひ、とても人前に出でられぬ容貌であつたと云ふ。而して老中共が、外交の事など持ち出せば、彼は直ちに落涙して、二の句は續がしめなかつたと云ふ程であれば、如何に辯解しても庸主には相違あるま

い。

×　×　×

徳川の政治は元より主として、老中がその責任の衝に當つてゐるけれども、最後の責任者たる將軍の賢不肖が政治に影響あるは云ふまでもない。殊に未曾有の變局に際し、事毎に先例や舊慣を適用する事が出來兼ね、その事態に機宜の裁決を與へねばならぬ場合に於て、幕府が賢明なる將軍を必須とした事はいふまでもない。而して最も賢明を必要とする場合に、最も不賢明の將軍を戴くことは、如何に當惑であつたかは、今更穿鑿するまでもない事だ。

（第二十二）水戸烈公

顧つて、當時日本の支配階級に於ける重なる人物を舉ぐれば、先づ第一に指を水戸齊昭に屈せねばならぬ。次に島津齊彬に屈せねばならぬ。次に阿部正弘に屈せねばならぬ。その他越前國主松平慶永、土佐國主山內豐信、肥前國主鍋島齊正、筑前國主黑田長溥、尾張國主徳川慶恕、若くは彥根城主井伊直弼、佐倉城主堀田正睦などがあつた。併しこの中に於ても兩横綱は先づ水戸齊昭と、島津齊彬であつて、阿部正弘はいはゞ行司の姿であつた。

×　×　×

試みに安政元年に於て見れば、齊昭は五十五歲、齊彬は四十六歲、正弘は三十六歲であつて、殆ど彼等は十歲づゝの距離があつた。五十五歲の齊昭は元よりその家柄に於ても三家の一であり、その年齡に於ても長老であつた。加之彼は文政十二年、三十歲にして部屋住よりその兄の齊脩の跡を嗣ぎ、水戸藩主となりて以來、天保十四年政治勵精のかどをもつて、將軍家よりいよ〳〵祖先義公の遺志をつぎ、誠忠を勵むべき旨を以つて、太刀鞍鐙、黃金等の賞を受くるに至るまで、その聲名は天下に轟き、殆ど朝野を動かした。斯くて彼はその翌弘化元年五月幕命によりて、隱居、駒込邸に幽居して以來、蟄伏すること足掛十年、嘉永六年七月に至つて漸く再び世に出で、將軍の命をもつて、國防の機務に參與することゝなつた。彼は年齡にしろ、位置にしろ、經驗にしろ、資望にしろ、何一つ不足なかつた。併し彼に最も不足であつたのは、天空海濶の大襟度であつた。彼にはあらゆる知識があつたが、又あらゆる才能をもつてゐた

が、すべての人を己に懐け、すべての力を一にするといふ抱容力と、調和力とがかけてゐた。此處を以て己の領土たる水戸一藩さへも、平かに治むることは出來なかつた。これは元より彼一人の罪でもなく、咎でもなかつたが、然も彼はその藩主たるの故をもつて、最も多くその責任を負はねばならぬ。彼が何故に一種の不平黨魁視せられたる乎。彼が何故に一方には味方をつくると同時に敵を作つた乎。それは彼が或はあまりに自己の意見を極端まで主張し、强ひて他の者をも自己の意見の中に、遮二無二投込まんとした爲であつたかも知れない。

× × ×

併し彼は單純なる理論家ではなかつた。策もあり、略もありといはんより、寧ろそれが多きに過ぎ、時としてはその人物、位置に不相應なる小細工もし、小邪氣も廻し、この人にしてこの事あるかと思はしめる程のことも、たまにはあつた。併しいづれにしても、當時の時勢は謝安出でずんば蒼生を如何にせんといつた如く、外難の出で來つた時には、彼をしてその局に當らしむる外はないといふ事が、當時の輿論であつて。島津齊彬の如きも、德川慶恕に向つてこの意見を述べ、横井小楠の如きも、藤田東湖に向つてこの意見を述べ、松平慶永の如きは、最も熱心なる齊昭の支持者であつた。

× × ×

併し事實に於ては、それが裏切られた。齊昭は將軍の命によつて日々登城することになつた。然れども彼もその意見が行はれずに不平であつたが、老中共や、その他の有志も彼には當惑した。云はゞ足掛十年の驅込に於ける彼の蟄伏は、不幸にして彼にとつては築石とならずして、寧ろ彼を邪推深く、意地惡く、片意地にならしめた。

彼は將軍から格外なる賞を受くるや否や、未だ一ケ年に至らざるに、たちまち非常なる懲罰を受けた。彼は己が最も信愛し、己が最も引立てたる寵臣結城寅壽等に裏切られた。彼は己の長子慶篤さへも、反對黨に擁せられて、寧ろ己に不利なる態度をとつたことさへあるのを實驗した。

斯る次第で、彼は其の腸中に、熱き鐵の汁を滿喫した。此の如くして彼の腹中は全く硬化し去つた。彼は人心の轉た賴み難きを體驗し、自ら天地間に何物をも賴む心なきやう、あぢきなき心地を生じた。

爾來彼は何となく世の中が恨めしくなり、世間が面白くたくなり、一種失敗者的、失望者的の人物として世に立つことになつた。從つてその議論がとかく非難、攻擊に偏して、やゝもすれば、その人、その位置に不相應と思はるゝ、無理難題を他に向つて強ふるが如きことゝなつた。元より彼が十數年以來、屢々建白した事が、殆ど一として行はれず、その行はれぬ結果は、忽ち覿面にあらはれて、癸丑甲寅の騷となりたるを見て、彼の胸中には『樣をみろ、云はぬ事ではなかつたではないか。』といふ念が萠し來るも、人間の常として強ひて咎むべきではなかつたが。併しそれが心ばかりではなく、言葉の上にも、態度の上にも、餘りに露骨にあらはれ來つて見れば、彼に接觸する者は彼の過去に於ける先見に敬服するよりも、寧ろ現在に於ける大人げなき言行を指摘せずには居られなかつた。

彼は己れの寃罪のかずくを自ら筆記して不愠錄を著したが、然もその實は不愠でなく、大愠錄とも云ふべきものであつた。諺に『艱難汝を玉にす』と云うたが、十ケ年の蟄伏は、彼を善化するよりも寧ろ惡化した。恐くは彼はこの十ケ年に於て時勢に直接の接觸を失ひたるばかりでなく、その一大政治家としての、當初よりあまり廣くたかつた度量をいよく狹くし、當初よりあまり片意地でなかつた彼をいよく片意地にし、當初よりあまり無邪氣でなかつた彼をあまりに邪氣深くし、當初よりあまり細工師でたかつた彼を、いよく細工師たらしめた傾があつた。

(第二十三) 島津齊彬

島津齊彬は、薩摩の國主であれば、加賀、仙臺と共に外樣大名の筆頭に立つてゐた。薩摩は關ケ原以來德川氏も決して心を許さなかつたが、薩摩も亦德川氏に向つて心を許さなかつた。德川氏でも、若し弓を挽く者があれば、誰よりも先づ薩摩であらうと考へてゐた。されど內輪は內輪として、表向きには島津は德川に向つて恭順し、德川は島津を禮遇し、殊に島津重豪の養女は將軍家齊の御臺所となり、島津と德川とは親戚の間柄となつた。先づ表向は圓滑であつた。

× × ×

重豪は薩摩に於ける一大英主にして、その遣口は先づ平淸盛を思はしむる者があつた。その子齊宣は三十七歲、文化六年

六月、重豪の意に逆らうて、餘儀なく隠居した。その子齊興は十九歳にして家督を相續した。されど重豪は隠居しつゝ猶その孫齊興の後見をなし、天保四年八十九歳にして逝くに及んだ。

齊彬は齊興の長子にして、曾祖父重豪の死する時には、二十五歳であつた。されば齊彬は誰からよりも、先づ最もその曾祖父重豪から感化を受けたと云はねばならぬ。現に文政九年シーボルトが江戸へ來つた時には八十二歳の重豪は、次男奥平齊高と、十八歳なる齊彬とを伴ひ、大森にて彼を迎へ、種々の誨を受けてゐる。齊彬が夙に西洋の文明に心掛け、その知識を取入れ、その機械、物産、製造、工業等に心を用ふるに至つたことも、自ら淵源ありといはねばならぬ。

× × ×

されど當時島津家の家庭の事情は、なかなか面倒であり複雜してゐた。重豪の沒後、齊興は自ら政を専にしたが、その政治は主として、調所笑左衛門が掌握してゐた。調所は薩藩の財政を整理し、その財政の基本を確立するに於て大功ある一人であるが、併し同時に種々の弊害の製造主であつた事も亦た爭はれない。

齊彬は夙に賢明の名があり、當時の幕府の當局及大名中にも、頗る評判高き一人であつた。而して將軍家慶時代、天保改革の實行者水野忠邦の如きは、彼を油斷のならぬ漢として、常に猜疑の眼を彼に向つて見張つてゐた。それは兼ねて薩摩を德川氏の敵と考へてゐた譜代大名の錚々たる水野には、斯る英明非凡の男が出で來つては、德川氏の爲に不利であると考へたからであらう。然るに又薩摩の藩中に於ても、彼の英明を不利なりとし、彼を排して、その弟周防、卽ち他日の島津久光を立てんとしたる者共も少くなかつた。云はゞ薩摩の當局者の傾向が、先づその通で、それには久光の生母岡田氏おゆらの力といふ齊興の妾が、その主謀者の一人でなければ、少くともその贊同者の一人で、表裏内外、互に相策動した。

かゝる場合に於て、如何に齊彬が苦心したかは、言をまたぬ。彼は四十二歳まで猶鹿兒島藩主たる事を得なかつた。その間、嘉永二年彼が四十歳の時には、鹿兒島に所謂近藤くづれと稱する騷が起つた。それは當局の面々が齊彬の父の隠退をさへぎり、齊彬の英明を忌みて、種々の陰謀を運らすを憤りて、同志相議し、その對策を講じたが、忽ち當局者の爲に致され、

或者は切腹を申付けられ、或者は遠島を申付けられ、或者は自宅に幽閉せられ、その騒はひいて嘉永三年に及んだ。斯る場合に於て、齊彬は何等その渦中に捲込まれるところなく、恰も泰然として薄氷の上を歩き來つた。

これより先き、彼の生んだる子供は、從つて生るれば、從つて死し、從つてこれは毒殺でなければ、呪殺であるとまで思はれたほどであつたが、彼はそれ等の事に別段心を動かす如き事なく、恰も尋常一樣の觀をなさしめた。これを見ても、彼が如何に卓絶なる大襟度、大度量の持主であつた事がわかる。斯て彼は嘉永四年、やうやくその父齊興隱居したれば、その跡を嗣いで、島津家二十八代の主となつた。

× × ×

しかも尚ほ父齊興は隱居ながらも薩藩の政治に若干の關係を持ち、彼によつて用ひられたる諸有司も尚ほその局に當つて、彼をして充分の手腕をふるはしむることは、頗る困難であつた。それにも關らず、彼齊彬は極めてすべての事を圓滿に、しかも尚ほその中に己の欲するところを執り行つて行つた。

齊彬と齊昭とは、その共通性が少なくなかつた。双方共に精力家であつた。双方共に筆まめであつた。双方共に多藝であつた。多能であつた。多角的であつた。双方共軍事、兵制に就いて、多大の興味を以つてゐた。双方共に大艦巨砲を造るの必要を感じ、これを製造する事に骨折つた。

彼等は互に蘭書の借貸をなし、互に書物の取りやりをなし、互に知識の交換をなしてゐた。されどその共通點はこれに止つて、齊彬は何をも排斥することをせず、己に抱擁し、己に籠絡し、己に使用する事をこととし。齊昭は、己に異なる者を排斥し、攻撃し、これと戰はねば止まなかつた。要するに齊彬は八方無敵を目的としたが、齊昭は破邪、顯正を目的とした。

この兩人が如何なる働をなすかについては、尚ほ此の後語あるべき事もあるが、先づ兩人たるもの〻人物が、斯の如く異つたる性格を持つてゐるといふ事を、心得ておく事が何より大切である。

（第二十四）阿部閣老

尚ほそれに次いで語らねばならぬのが、阿部正弘である。阿部正弘は、三人中最も年少者であり――即ち齊彬よりも十歳、

齊昭よりは約二十歳の年少者である。その資格、領知も兩者に比して、譜代大名十萬石餘に過ぎないが、然も彼は年齡不相應に、最も老練なる一人であつて、年に於て若く、經驗に於て老いたりとも云ふべきであつた。彼は必ずしも開國家でなかつた。彼は堀田正睦ほどの開國知識もなく、又井伊直弼ほどの奮鬪力もなく、又水野忠邦ほどの經綸もなかつた。

されど彼は大なる手練の持主であつて、しかも常にそれを善用するをつとめた。彼は何人にも否と云はせざる力をもつてゐた。それは、彼の壓迫の力でもなく、誘惑の力でもなく、自ら人をして彼の云ふところに、贊成すること能はさるなからしめたのである。

即ち議論そのものでなく、議論そのものを說き出す彼のタクトが實に鮮かなものであつた。彼は當時に於ける一大調和力であつて、彼の幕府の中樞點となつてゐる間は、最もやかましく、最も氣むづかしく、最も手に負へない齊昭さへ、尙ほ幕府と極めて良好といはさるまでも、決して背馳するに至らしめなかつた。

況んや妥協家と妥協家との齊彬の間は、極めて親密であつた。彼は齊彬によつて重をなし、齊彬も亦彼によつて重をなし、島津と徳川の大番頭たる阿部との、個人的關係のみならず、外様の一大有力者たる薩藩と、徳川の間を圓滿ならしめた。加之江戸と京都との間も、とにもかくにも圓滿ならしめたことは事實だ。

阿部あるの間は、京都、江戸、及び諸大名、この三要素が全くとはいはぬが、三拍子、足並みを揃へてゐたことは事實であつた。

早稻田大學

政治經濟講義

法律講義

文學講義

上掲三講義は本大學各學部の課程に基き、眞に必要缺くべからざる課目を掲載せる名實共に本邦唯一の大學教育普及機關である。今や新學年を開始するに當り、各講義とも内容に大改造を施し、時代の進運に適應せる新知識を滿載して一般好學の士の購讀を待ちつゝある。

◇各講義とも

▼四月上旬第一號發行
▼修業年限一ケ年半
▼毎月一回發行
▼學費月一圓二十錢
▼各册菊版四百頁以上

各講義とも **内容見本** 申込次第無代進呈

中學講義・商業講義・高等女學講義・電氣工學講義 以上四講義も新學期開始 申込次第各科別見本進呈

東京牛込 **早稻田大學出版部** 電話牛込 三三三三 四四七七 四四 五六八九 番

懸賞創作發表

昨年末をもつて締切つた懸賞募集創作は、總數千三百三十篇の多きに達した。先づそのうちから約百篇を豫選し、更にその中から二十五篇を嚴選し、最後に左の如く決定しました。一般に優れた作品の集つたことは愉快に堪へないが、もつとスケールの大きいものがあつてもよいと思つた。當選圏内に入るべき戯曲の無かつた事は殘念に思つたが、當選外の作品にも夫々の意味に於て捨て難いものが多數あつた。

一等當選　放浪時代（小説）　龍膽寺雄

二等當選　泥濘（小説）　保高徳藏

佳作として『極々の女』『巷』『農民』『芳蘭』『青葉まへ』『豐からき愛』『最後の曙線』『模範村』『陸地の上の島』『骸骨亂舞』の十篇は比較的いいものと思つた。此のうちから二三篇は選外入賞として三百圓を贈り本誌に登載することとなるだらう。

略歴

龍膽寺雄

一九〇二年四月千葉縣佐倉町に生る。小學及び中學は茨城縣下妻町にて終了。慶應義塾醫學部に入學。文學及自然科學の二岐路に迷ひ四年の後これを廢す。以來今日に到るまで家郷を顧みずボヘミアンライフを送る。

保高徳藏

大正四年早大英文科を卒業。同年より六年四月迄讀賣新聞社に記者として勤務。同年四月より八年四月迄博文館編輯部に女學世界記者として勤務。同年四月より十二年九月迄專ら賣文生活を營む。同年九月震災後郷里大阪に赴き、父の遺業を手傳ひしも、十五年四月再び上京、もとの賣文生活を續ける。

懸賞創作募集

一、昭和四年四月號に掲載すべき創作を募集す。

一、〆切は本年拾壹月卅日とし原稿枚數は百五十枚以內とし應募原稿は一切返還せず。

一、賞金は壹等一人壹仟五百圓、貳等一人七百五拾圓、又選外として三四篇採用することあるべし。

一、應募者は履歷書壹通別封添付すべし。

一、一、二等の版權は本社に歸す。

放浪時代（當選）

龍膽寺雄



一

ギルフイラン　ラヂオ商會の飾窓を飾り終へて、——金を受け取つて、いつもの樣に曾我たちと彼等の仕事場で落ち合ふために、上野行きの電車へ僕が飛び乘つたのは、かれこれ九時を廻つた時分だつた。暮れがた暫らく振りで快よい夕立ちが、東京の半天を襲うて、それがわづかの間だつたが、銀座の鋪路をも掠めたので、夜に入つてからそこ等はすつかり、不透明な晝間の蒸し暑さを消散させてしまつた。停留所で電車を待ち合はせて居る間、ちよいと氣にして空を仰いでみると、亂雲がもの〳〵しく未だ頭の上にどよめいて、時々未練がましい電光が、すみの方から神經的な光りを走らせて居た。それが、——若しかすると、もう一と雨ぐらゐは沫かせない限りもない、と、さう威嚇して居るかの樣でもあつた。

わづかな雲ぎれが空に浮遊して居ても、時にはそれが、——曾我たちの口調を借りれば、——心あつてするかの樣に、——しつこく仕事の邪魔をして、眼立つた影響をば彼等の收入にも與へる。さう云ふ、云はゞお天氣商賣なので、若しかすると仕事を斷念して、一と足先きに駒形へ歸つて居るかも知れない。さう僕は、窓の外を流れる、眼ま

ぐるしい光りの渦へ、焦點のない眼を投げたまゝ考へて、うつかり乘換へも貰はないで、廣揚に切符へ鋏を入れさせてしまつた自分の輕はづみを悔いた。――ちよいとした今日の仕事の首尾が、知らず識らず僕を輕卒にして居たのだ。

しかし、ひどい雜閙と一緒に電車から吐き出されて、廣小路の停留所の、あはたゞしい光りの錯綜の眞ん中に立つた時、僕は東京の空ではめつたに仰げない樣な十五夜過ぎの月が、明るい清淨な顔面を、雲のきれ目から現はしかけて居るのを見た。

地面は未だ濡れて居た。絶え間なく十字街を縫ふ自働車のヘッドライトや、あはたゞしく人波に切られて搖らいで居る店の灯りや、高いところで忙がしく明滅する廣告燈、さう云ふ樣なものが眼まぐるしい光りの交錯を、濡れた鋪路へ燦然と落として居た。夕立ちと一緒に一時はそこ等が白くなるくらゐ地面へ敷いたと云ふ雹が、そこ等の溫度を吸つたのだらう。僕は素肌へぢかに着けた、よごれたポオラの服地を通して、皮膚の引き締まる樣な冷氣を一時に覺えた。

丹我はカフヱK・の前の、いつもの暗い三角帶へ望遠鏡を据ゑて、ぽつ/\ぐるりへ人を集めかけて居た。「宇宙の謎月世界の觀望五分間十錢」と、筆太に墨をにじましたさらしの旗を、肩から背へたらして、電柱の根へ踏ん張らした三脚の一本へ手をかけて、猫背をやゝこごめ加減に、ぢつと空を仰いで居た。――白いパナマを滑稽に眼立たせた會社員風の男が、熱心に望遠鏡を覗きながら、彼の説明をきいて居た。

雲は最早彌縫の餘地なく大きくさけて、白くきはどく月光に縁どらせて、晴れた空を淵の樣に黒く大きく抱いて居た。指ほどの小さな雲きれが月面へかゝつて、輕く光りを吸つて、消えようとして居た。――さうした靜かな、眼立たない存在が、きらびやかな、眼まぐるしい下界の姿と、恐ろしい奇妙な、一種の對象をなして居た。

熱心に月面の説明を續けて居る丹我と、人の肩越しに輕い眼挨拶を交はしてから、僕はまばらな人垣から數歩それて、――トロリーの支柱にもたれて、はすに空から落ちる街燈の光りの下へ頁を擴げて、落ち付かないあたりの氣配には無關心に、何やら讀物に讀みふけつてをる、繭子のそばへ寄つて行つた。彼女は白い水兵服につばの狹い白い麥藁と云ふ、眞夏の夜だが、寒むぐ/\しいみなりをして居た。

「今？」

彼女は跫音に顔を擧げると、最初に輕く微笑んでみせて、それから、持つて居た小さな桃色表紙の本、――それは英語のリーダアだつた――をはすに胸へ抱いた。さうして、鐵の柱から身を離して、

『降られなかつて？』

と、寄つて來た。

『はじめたばかりだな、こつちも。』

『えゝ。』

彼女は膨らんだ上衣の隱しから、小さな、赤い、乾葡萄の紙箱を出して、僕の手のひらを仰につかまへたまゝ、二三度ぶつつけて、中のものを黑く濕めつぽくそこへあけた。さうして、

『儲けちやつた、かみなりさまで。』

と、自我の横顏を盜み見て、いたづら〳〵しくさゝやいた。

『なぜ?』

『み、や、こ、座。……』

と、彼女は眼元へ小皺を寄せて笑つた。さうして、落ちたかた〳〵の靴下を引き上げて、僕の手のひらの乾葡萄をちよいとつまんだ。——夕立ちを機會に活動寫眞でもおごられたのだらう。

『どうだい。何かをごらうか僕も。』

さう云ひかけて、ふと、

『寒むかアないのか?』

と、彼女の肩やからだのあたりなどを觸はつてみた。糊のこはい、白い服地の下が冷いやりして居る。——指の先きまで魚の樣に冷たい。

僕は彼女に料理表を袋の中へしまはせて、續いて妙な樣に上衣をして、濡れた歩路を横切つて、とつつきのカッフェKの、瀟洒たすたいれの彈條扉を押した。さうして、棕櫚竹の鉢のわきへ突つ立つて、存外客のたてこんで居る客間を、一とわたり物色してみた。

『どうぞこちらへ。』

と、給仕女が僕の前へ輕く腰をかゞめた時、ぴよん〳〵とぬかるみを跳んで、ついて來た彼女が、僕のわきに立つて、

『空いてるわあそこが。』

と、勝手な席を見つけてそつちへ僕の手を引つ張つた。——僕たちは首振り旋風器が時折り金色に灯を映して居る、とある壁ぎはの、小さな大理石の卓子を挾んで、はすに籐の腕椅子へかけた。

『何がいゝ?』

彼女のとつてくれた獻立表に、ぼんやり眼をさらしたまゝきくと、彼女は帽子を脫いで、ひつくり返しに卓子のはしへ載せて、頰の邊でもつれたおかつぱを邪魔げに掻いて、ひよいとかた〳〵の脚を僕の椅子のはしへ載せた。——靴下の編み目が一箇所のびて、孔になつて、そこから男の子の樣な肌の荒らい腓が覗いてゐた。

『何でもいゝわ。』

と、彼女は無雜作にほんのくぼで云つて、音を立てゝ靴下の上から

聲を掻いた。

『お腹にたまらないものがいゝかい？』

と云つて、獻立表を置きかけると、

『ね。』

と、彼女は髪を揺すぶつて、顏を擧げて、

『お魚のフライを喰べない？』

と提議して、それから脚をおろした。

僕たちは蝦のフライを注文して、それから果物のサラダと弱わい洋酒を二杯とつた。お腹を空かして居たと見える魔子は、蝦を尻尾まで喰つて、さうして、潮の様にソオスを湛へたお皿の眞ん中へ、レモンの皮をちよつぴりと輪形に殘した。──ナプキン紙で口のぐるりから顏まで拭きかけたので、僕はポケツトから畳んだ手巾を出して、卓子の上へ投げてやつた。

『兄さんの景氣はどうかな。』

外の鋪　路へ出てから、さう僕がひとりごとを云ふと、

『いゝわきつと。』

と、彼女はだしぬけに大きな聲を立てて、まるめた手巾を僕に渡した。

曾我の姿は、幾重にもとりまいた人の輪の底に埋まつて居た。はげしい街路の騒音を縫つて、時折り彼の熱心な演説口調が、外まで洩れて來た。──月はさつきとはよほど位置を移して、頭の眞上へ近付いて居た。夕立ちの通つたあとの空には一片の雲影もなく、いつの間にはびこつたのか、厚い朧ろな蒸發氣の奥へ一つ二つ星を鏤ばめて、赤く不確によどんで居た。大きな赤い仁丹の廣告燈が、その濁つた立體の奥で、正確な間を置いて明滅して、その反映をこつち側の鋪　路まで投げて居た。人の輪の肩越しに覗くと、中央の、赤くぼやけた月面へ向けられた、望遠鏡の眞鍮の筒にも、その明滅する赤い光りが、きらきらと溺れた様に映つて居た。望遠鏡を覗いて居るのは、ごく若い──十六七の、學生風の男だつた。

『……左様、最高峰がアルプスでは四千五百ミータアと云はれて居ますね。總體して月面の山岳は、非常に高く、そして急峻です。アルプスなんぞは低い部類です。……そのちよいとわきに、黒いまるい斑點が見えますね。あれも火山で、プラトオ山と呼ばれて居るのですが、御覧の様に火口が非常に暗いので、月面觀測の上では一つの謎になつて居るのです。……』

時折り何かの具合で聲が高まると、さう云つた彼の説明口調が、はつきりこゝまで聞こえて來た。

『盛んだぜ。』

『えゝさうよ。』

鐵柱の下に立つて、曾我をとりまいた一團を批評的に見ながら、僕たちはそんなことを云ひ合つた。

『五分で十錢。一時間でまア一圓。……三時間でざつと、……』

さう云ひかけると、彼女はこゞんで脚を掻きながら、

『だめよ。』

と輕く否定した。

『あたしせんだつて時計で、よく時間をはかつてみたのよ。そしたら、平均一人が十分と一寸よ。そんならさうと、始めから看板へ向いといた方がいゝわね。識らないと五分で十錢は高いつて云ふわ。』

さう云つて、袋の中からまたさつきの本を出して、燈の下で頁を披げながら、

『弱はつちやつた。Have been の使ひかたがわからなくつて。……誰か敎へてくんないかなア。』

と、柱傳ひに地面へしやがんだ。

二

十徳をつけた、俳句の宗匠風の年寄りが望遠鏡を覗いたのが最後で、——曾我が機械を疊んだのは、かれこれ十一時に近い頃だつた。

その間に僕は快適なバルザツクの短篇小説を十頁ほど讀み、妹はこぼして居た和文英譯の宿題を、どうやら片付けたらしかつた。

『お待ちどう。』

帽子を脱いで、科學者らしい幅の廣い、冴えた額をよごれた手巾で拭きながら、曾我は機械をかつぎ上げた。

『どうだい。』

『ふん。』

曾我は靜かに笑つて、

『景氣は滿月のせゐだ。……夕立ちで街の口にちよいと邪魔されたんでね。』

さうして、

『薄つ腹が空つた。……魔子は?』

と、妹を顧みた。

『どうだい。熱い珈琲でも一杯呑んでかうか。』

『よからう。』

曾我はすぐに同意した。

『どこにしよう。』

『風月は?』

『いゝだらう。』

線路を横切る時、自動車に遮きられて、啓子だけが一人向かふへ取り殘された。電車と自動車とが次ぎ〳〵に僕たちの間を遮きつた。

『早くおいで！』

啓子はきよろ〳〵左右を見張してから、ぴよん〳〵と細い脚で線路を飛んで來て、曾我につかまつた。

『さア。僕は蒸し菓子にしようかな。』

深い緑色のクッションに腰を落ち付けてから、僕は瀬戸の灰皿を引き寄せながら云つた。

『蒸し菓子に珈琲か。變だな少し。……おれはビーフサンドヰッチか何かにしよう。啓子は？』

『あたし？』彼女はまたさつきの樣に、帽子を裏返しにして椅子の上へ置いた。――彼女はそばに立つて居る給仕を振り仰いで、自分は菓子も珈琲もいらないから、クリームソオダがいゝと云つた。さうして、

『赤いのよ。』

と、付け加へた。――給仕は笑つて卓子のそばを去つた

氣前よく電車をごつて、僕たちが駒形へ戻つたのは、それから小一時間してだつた。大家のK・タクシーは未だ煌々と店を電燈で輝やかして、――自動車は二臺とも出拂つて居た。帳場の成瀬さんが、禁煙と貼り札をした亞鉛の壁の前に、のんきにパイプをくゆらして、立つて居たので

『御勉強ですね。』

と、聲をかけると、成瀬さんは厚い近眼鏡をきらりと光らして、いつもの癖の、妙に不徹底な笑ひかたをして、

『いや。』

と、四角い顎を撫でた。

懷中電燈で鍵孔をさぐつて、建てつけ惡るく錆びた鐵の扉を開けると、眞つ先きに靴をかゝへた啓子が、コンクリートの狹い階段をのぼつて行つた。溝をまたいだ古いどぶ板が一枚踏み折られて、水につかつて居るので、僕たちは懷中電燈で地面を照らし〳〵、痛んだのをのけて、別なのをあとへ寄せて、ざつとそこを繕ろつた。と、――仄かな灯りが階段の上からさして來た。

表てのタクシーがもと（と云つてもつひ二三年前のことだが）油店だつた時分に、油倉だつたと云ふこの陰氣なコンクリートの建物は、今でも、――中に居て暫らくして慣れるとさうでもないが、――外から歸つて來たてなどには、ぷんと古風な髮油の匂ひが鼻に觸れる。僕たちが借りてゐる二階は、疊み敷きにすると二十疊くらゐの廣さだが、震災の折りの痛みをそのまゝそこに繕つた、古びたコンクリ

ートの壁をむき出して、床には古い油のしみが黒く輪を描いて居り、天井の漆喰は剝げて、埃をかぶつた蜘蛛の巣が、すみずみへ幕を張つてゐた。それでも、壁ぎはへ据ゑた雑魚寢用の大きな寢臺だの、二三のがらくたな家具などと云ふ樣なものが、殺風景ながら人の住まひにはまがひのない、一種の雰圍氣をつくつて居た。

南向きの厚い、狹い窓の下には、不細工な、大きな卓子が一つ、それをとりまいて、古びた椅子が三脚、それが僕たちの勉強机でもあれば、食卓でもある。椅子は古道具屋で順順に集めたので、それぐ形ちが違つて居た。――炊事場は東の窓ぎはで、金網を張つた四角い蠅帳が一つと、眞鍮の新らしい石油焜爐と、その他鍋釜の類や刄物などが、手製の流し臺のきはに雑然と置かれてゐる。――水は下の路地口の、大家と共同に使つて居る水道の龍頭から、一々バケツで酌み上げて來るのだ。

寢臺は箱自動車の燒けた鐵骨を利用したので、古い自動車のクッションを三つ並らべて、その上を大きな五布布團で覆うた。僕たちは四角い大きなその寢臺へ、三人でいつも雑魚寢をした。――

――續けさまに三つ四つくしやみをした魔子が、登校服を脱いで、つけ紐のある古びたメリンスの單衣に着換へて居る間に、僕は繪の具箱をおろして、散らばつた畫架の邊をちよいと整理した。さうして、隱しから胡蘆を出して、一本咥へて火をつけて、ふとそこへ立つた儘ま、かきかけてはうつてある畫架のパステルへ、暫らく眼をつけた。繪はつまらない雑誌の口繪の模寫で、飾り窓の背景に積まれたものだ。

――曾我が機械をごつんぐ階段へぶつつけながら上がつて來て、ヨオロッパの詩人の樣な姿を戸口に見せたのは、それから暫らくしてだつた。彼は大股に部屋をつつ切つて、卓子のそばまで來ると、ごとんとそれを卓子の上に載せて、

『やれぐ。』

と、肩のあたりを撫でた。さうして、手を延ばして僕の隱しから煙草を出して、一本ぬいて指の間で揉みながら、

『どうだつたい今日は。』

と、椅子を動かした。――二つ三つ仕事の話をし合つてから、彼は椅子へ落ち付いて、正しく卓子へ向かつて、さうして、懷ころから自慢の菖蒲革の財布を出して、白銅を一とつかみほど、ざくぐと卓子の上へ積んだ。――僕のと合はせて勘定すると、十九圓と八十二錢あつた。

『剛氣だな！』

さう僕たちは、ひとつことを一緒に云つた。と、――だまつて口を

動かして居た魔子が、袂から銀紙にくるんだチョコレートボンボンを一つ出して、財布のわきへもつともらしい顔をして置いた。

『隠しといたな。』

『うゝん。』

と彼女は頭を振つて、――もつれた髪を掻いて、

『識らない。這入つてたんだ。……』

と、簡單に辯駁した。――曾我が半分喰つかいて、中味をすゝつたあとを、僕はつまんで口へ入れた。

『十日こいつが續いたら財産家だがなア。』

『どうして！　三日でもだ。……』

『これだけだつて財産家だわ。』

彼女が白銅を愛撫しながら、まじめに、詠歎的な口振りを漏らしたので、一緒に僕たちは吹き出した。――僕たちはそのうち十五圓を豫算箱の中へ入れ、殘りを三分して、三人で同額ほどづつ分けた。これは僕たちの小遣ひだ。

『多謝。』

と、魔子は分け前の、――彼女にとつては一週間分の小遣ひである一圓五十錢を、ちやら／＼と白木綿の兵隊手袋の中へ落とし込むと、咄嗟に口をくゝりながら云つた。風變はりな彼女の財布は、かうして蛾がとまつた様に、寢臺の頭のところの壁へ、釘にかゝつて居るのだ。

夜更けと共に幾分づつか氣溫が高まつたが、それでも、いつもとはずつと涼しかつたので、僕たちは寢冷えを恐れて、毛布を一枚よけいに寢牀へ持ち込んだ。

『靴下のまゝかい？』

不作法にのばして來た彼女の脚をつかまへてみると、靴下をつけたまゝなので、僕は膝のところで靴下止の金具をはづして、先きの方へこかしてとつてやつた。と、彼女はくるりと寢返つて、こゞんで、もうかた／＼の方を自分でとつた。さうして、僕の頸のところへ、むしやくしやに髪をたはめたまゝ、すぐに無心な寢息を漏らしはじめた。

三

美術材料商の聚美堂と僕たちとの間に、以前からもくろまれて居た、僕の作品の個人展覽會は、店の主人の石原さんとの間の交渉がまとまつて、いよ／＼實現する運びになつた。一と口に云へば、今まで行き惱んで居た店仕切りの問題について、やつと僕たちの間に妥協が成立したのだ。會場として店を提供することは、僕たちの友情を假りに置いても、美術商の立場として充分に賛成だ。たゞ、それはそれと

して、こちらでも商賣を持つて居る以上は、會期中とてまるで店を閉めて置くと云ふわけには行かない。會場の一部でなりと、商賣が出來る程度でなくては。——さう云ふ、尤もな石原の意見で、結局、店を適當に二分して、一時的な店切りをすること、それ等に關する一切の費用は僕たちが負ふこと、さう云ふ條件のもとに、當分店を僕たちに開放することになつたのだ。

『賣れたら割前の多少は戴だけますかな』

そんなことを、金錢に淡白なこの友人は、云つたりした。

『無論です。』

賣上げの二三割は彼に贈る腹で居た僕は、さう冗談の樣に應じた。

翌る日、——僕は店仕切りの設計について、最後の決定を與へるために、神保町の店へ出かけた。さうして、商賣の暇な石原さんと、店の土間に立つて、僕の作つた設計と引き合はせて、色々細部の相談をした。それによると、大工の手間を半日ほどと、十五六圓も材料をかければ、それで充分な豫定だつたのだ。

ざつとその問題が決定すると、僕は彼に便箋と店の名を刷り込んだ封筒とを貰つて、その場で三通ほど大阪へ手紙を書いた。幾分自信のある作品は、主として大阪へ殘して來てあるので、いよ／＼展覽會を開らくとなると、それ等を取り寄せなければならないのだ。中にはお話にもならない樣な金額に代へられて、ひとの客間に、紫香に額縁へ收まつて居るのなどもあるが、大部分は郷里の「愛臙ソオス」本舗の主人の、中島氏の許へあづけて來てあつた。僕が大阪の放浪時代に畫いたもので、大部分は彼の保護のもとに、云はゞ金錢に屈託のない身分で、こだはりなく自分をぶつつけた、——一と口に云へば、まじめな作品だつたのだ。大阪で展覽會を開らいてくれる筈だつたのが、ある事情から、實現を見ないでしまつたのだつた。

しかし、——この問題については、僕自身にも多少の疑惧がないわけではなかつた。ここ二三年の間に、多少は伸びたつもりである僕の眼が、果たしてそれ等の古い作品によつて、過去に滿足させられた樣に、現在も滿足させられるかどうか。——殊によるとそれは、折角計畫した展覽會に、致命的な結果を與へない限りもないのだ。

『しかし、』

と、手紙を書き終へて、封の糊を壁のところでぴた／＼と貼りつけながら、僕はひとりごとを云つた。

『……僕にはまた僕の苦勞があるのでしてね。』

『お互ひにね。』

と、石原さんはあつさりと合槌を打つた。

『ところで、……一體いつ頃になる豫定です。』

『さア。……』

『繪は殘らず向かふから來るんですか。』

『いゝえ。……こつちにも四五枚はあります。』

『それで、〆めて？』

『左樣。……二十枚は出まいと思ひますけれどね。』

さう云つて、もう一遍僕は店のぐるりを、見廻してみた。

『多過ぎませうかね。』

『繪にもよるが。』

と、石原さんも僕のまねをして、假りの店仕切りを想像して居るらしい眼をして、つぶやいて、

『まア、並べられるだけ並べるんですね。若しかしたら即賣をやつて、その跡へ埋めてもいゝでせうな。』

『さうですね。……へえ。あすこの時計塔の硝子が、この方へ反射するんですね。』

――陽覆ひの下べりを掠めた淡い陽が、商品臺の脚の一部を明るく蔭から覗いて居た。

パステルの背景畫を一枚仕上げて、昨日のギルフイラン商會へ持つて行くつもりなので、石原さんに別れると僕はすぐに、午飯のかはりにパンとバタを買つて、まつ直ぐ駒形へ戻つた。

仕事のまちまちな僕たちは、從がつて生活も思ひ思ひで、早い話が、三度の食事すら一緒にとるなどと云ふことは、月のうちに數へるほどもない。――大抵、一番早く朝起き出して、家を出て行くのは魔子だ。電車にまるまる一時間も乘らなければならないところに學校のある魔子は、感心に朝は誰にも起こされずに一人で起きて、そこ等をことごとく云はして、紅茶を沸かして、パンぐらゐを嚙つて行く。

その次ぎは大體に於いて僕だが、これはいつもさうとは限つて居ない。仕事が仕合はせと（僕自身には不幸にも）重なつて居ると、べらぼうな時刻にでも家を飛び出して行かなければならない代はりには、仕事でも暇だと時間に制限なく、寢牀にごろごろして居ると云ふ風だ。

曾我に到つては、度はづれな夜更かしをする男なので、朝はいつも思ひきつた寢坊をして居るが、これはきはめて規則的な生活だ。その規則が云はゞ世の常のものと、大分ずれがあると云ふだけの話で、いはゆる「四半晝夜のずれ」と彼が公言して居るところのものなのだ。

一體彼は、その科學者的の風丰と、詩人風の、多血的な性格とが暗示して居る樣に、極はめて多面な趣味と才能とを持つた男で、これと云つて彼に不得意なものは殆んどない。詩を作らせれば詩を作るし、繪をかゝせれば繪をかく。自分は活動家をもつて任じて居るが、

それで居て興に乘れば、カルメンの一とくさりぐらゐは滑らかに喉を顫はせる。自然科學は彼が自から「系統的に學んだ唯一の」と稱するところのもので、この傾向の趣味は、彼の極端な近眼をば、天空にまで向けさせたのだつた。

彼の語學はとりわけしつかりしたものだつた。五箇國ぐらゐの原書は難澁なく讀んだ。(貧乏で讀む書物は合惜となかつたが。)從がつて、飜譯は彼の定收の一つだつた。

「人間にとつて職業がパンぢやない!」

さう云ふ解釋を生活にくだして居る彼は、そのあらゆる多面な性格を多面のまゝ生かさうと、いつも試みて居た。その一つでもが彼の實生活から缺けたら、彼は手や脚を一二本落つことしたぐらゐには不足を感じるのだ。彼の口調を借りれば、つまり「廣い淵つぺらな才能」をもつて、「廣く淵つぺら」に世を渡らうと云ふのだ。――生活はいつも窮迫して居たが、それによつて彼は彼の主張に、とり立てゝ矛盾も感じないらしかつた。

要するに、彼の放浪性は僕に輪をかけて徹底して居たのだ。――彼はこの二年ほどを天文の研究に沒頭した。さうして、渦狀星雲の正體はどうの、キンネツケの軌道と木星との關係はどうのと云つた問題で、再々食卓を賑はした。

彼は殆ど二十頁ほどの圓周率を[illegible]で[illegible]つて、枕頭へ貼つたさうして、一年ほどの間に、六百何頁と云ふ[illegible]なのに膨大してしまうた。あたかも天體をそれによつて膨大する樣に。

「宇宙の襞に住む細菌どもよ!」

などゝ、彼は土曜の夜の盛餐(僕たちは土曜の晩には經濟の許す範圍で、食卓に贅をこらす習慣だつたのだ。)の折りに、安ウヰスキーの乾盃で上機嫌になつて、卓子のはしを叩いたりなどした。

實生活についてそんな寛容な解釋を持つて居る彼は、また妹の魔子に對しても、その主張をそのまゝ適用して居た。年頃に近付いた娘をつかまへて、彼は猥談に近い性論をやつたり、――一と口に云へば、恐ろしいがさつな兄として、彼に臨んで居たのだ。

「魔子!」

ある時彼は、今述べた樣な機嫌で、婦人問題に論及して、一としきりしやべつたあとで、妹をつかまへて云つた。

『……お前は幾つだつけな。』

『十七よ。』

と、彼女は素直に答へた。

『十七?』

のんきな兄は、赤い眼を慚ししばたゝいて、彼女の淺黑い[illegible]を見

た。

『はて、……おれは君の年を一つ間違へて居たわい。すると、生れたのは？』

『千九百十一年よ』

と、彼女はキユラソオのグラスヘレモンの汁を絞り込みながら顔を擧げた。彼女は皮膚のやゝ荒らい、肉の締まつた素脚を長々と二本、寛衣の下へむき出して居た。

『君はもう充分に婦人だ。』

と云ひかけて、あつはつは！と、彼は一人で笑つた。

『何と大膽な脚を出した婦人だな。……』

彼女はまじめに身をねぢつて、自分の脚を眺めた。さうして

『なぜ？』

と、彼を見た。――そのきまじめさがもう一度彼を笑はせた。

『兄さんはさう思つてるんだぜ。』

と、彼はグラスを擧げて、成たけ眞面目になつて云つた。

『早く君の戀愛を祝福したいものだとね！　えゝ？』

彼女はグラスを卓の上へ立てて、恐ろしい酸つかい顔をして、こくりと喉を鳴らして、から〳〵んと中の氷を鳴らして、それを卓子のはしへ置いた。さうして顔を擧げて、

『だから、早く戀愛をしたげるわ。』

と、頰の後ろへ髪を揺さぶつた。

僕がコンクリートの階段をこつ〳〵引つて行くと、この戀愛の讃美論者は今起きたところと見えて、卓子に向かつて、今朝の新聞の上へ乾いたパンをほぐしかけて居た。這入つて行つた僕の顔を見ると、新聞紙の上へ散らばつたパンの屑を、一とゝころ拂つて、「張作霖背天白日旗を掲ぐ」と云ふ、初號活字のみだしを指さして、

『でどうだい。』

と、さも〳〵嬉しげに云つた。

『……糞まじめで支那に同情する奴の面が見てえ！』

と、彼は口をもく〳〵動かしながら、舌を干燥させて云つた。

『と云つて、……茶化す奴アなほ莫迦だが。』

さうして、

『あいつは君、水がから〳〵だぜ。』

と、不精髭ののびた顔で、窓のゼラニウムの鉢をさした。

四

『出かけるかい今夜も。』

ほゞ繪の仕上げをすましてから、窓きはで機械の掃除をして居る杜

我にさうきくと、
『うん。』
と答へておいて、やゝ暫らくして彼は、
『行くよ。』
と、顔を擧げた。
『魔ア公のは昨日ですんだんだつけな。』
『さア。……もう一ン日くらゐありアしなかつたかなア。』
——彼女はこの三四日、銀座のS・化粧品店で新らしく賣り出して居る、輸入香水の廣告配りを頼まれて、半日九十錢のわりで、そこで働らいて居たのだ。仕事と云ふのは香水をしました廣告のカアドを、店の前に立つて通る人に配るだけで、彼女は毎日放課後店へ寄つては、暮れがた香水くさくなつて歸つて來るのだつた。
『面白いかい商賣は。』
さうきくと、
『面白い。』
と、大して面白くもなげな顔で彼女は答へた。さうして、お友だちを見つけるとみんなつかまへて、香水紙を分けて、めい〳〵に配らせてやるんだなどと、づう〳〵しいことを云つた。しかし、——學校から學校へとしじう轉々し、よしたり、また這入つたりして、十七にもなつて未だ二年で居る彼女に、さう親しい友だちなどがある筈はないのだ。それに、假令へさうでないまでも、「良家のお嬢さん」とこの放浪性の娘とが、しつくりしたお友だちづき合ひなどが、出來さうにもないのだつた。
『上野で今夜も待ち合はせる都合かい？』
『さア。はつきりと約束もないが、』
と、友人は研解劑をことんと卓子の上へ載せて、
『どうかね。やつて來るかも知れない。』
と、曖昧な口調を洩らした。
『さて、』
と、僕は繪を大きな紙挾みへ挾んで、——簡單に外出の仕度をして、
『……僕は出かけるぜ。遅れたら上野へ廻る。ウヰンドウがとれたら遅くなるほかないが。』
『往き給へ。』
と、彼は恐ろしいまじめな眼で、——指へ挾んだレンズ越しに僕を見た。
——尾張町で電車を降りて、ちよいと後へ戻つて、昨日のキルフイラン商會へ行つて、一寸ウヰンドウの出來榮えを眺めてから、挨拶を

して店へ這入つた。バツクの約束が一枚あるのだ。——一週間ほどしたら中のバツクを一度取り換へる。ウヰンドウの裝飾は廿日に一遍換へればいゝ。——さう云ふのが僕たちの（懷ころ都合から編み出した）主張なのだ。

『いゝ繪だ。』

と、若い主人の林さんが首をかしげて褒めてくれた。

『もう一枚、月じまひまでにかいて來てくださるわけですね。』

『よろしかつたら。』

と、僕は荷箱の上の擴聲器の埃を、ちよいちよい指で撫でながら云つた。

『繪は要するに、誰のでもかまはないのですけれどね。……僕のでよかつたらお易い御用です。』

さう云つて、

『この受信器はこれでいくらぐらゐするんです。』

と、青銅色に着色した木箱を指した。

『それですか。』

と、主人は暫らくして繪から眼を離して、

『安ものですそりア。……しかし、よく這入りますよ。どうです一つお買ひになりませんか。未だお持ちではないんですね。』

『われわれのポケツトマネエぢや少々ねえ。……』

主人はほつと笑つて、御冗談でせうと云つた。さうして、もう一遍繪を見て、

『ところで、おいくら差し上げたらいゝでせう。』

『さうですね。……五圓ぐらゐはづんで戴けますかね。』

二圓のつもりでかいたのだが、繪は見手と値段とで價値がきまると云ふことを、僕たちは經驗上識つて居るのだ。——主人の顏を見ると、

『さうですか。』

と、存外氣輕に立つて行つて、帳場へ上がつて、よごれた五圓紙幣をひらりとざるの上へ載せてくれた。

『どうも御苦勞さま。……おやア、あとのもお願ひします。』

『承知しました。』

と、僕は汚ない紙幣をそのまゝズボンのポケツトへ突つ込んで、

『どうぞまた。……近所へ少し吹聽して下さい。』

と、笑つて店を出た。

（儲けたぞ！）

店を出ると、僕はぴよんと鋪路の上で踊つてみた。さうして、しきりなし行き交うて居る自動車の間を素捷こく拔けて、向から一側の

鋪路の上へひらりと跳び散つた時、
（や、忘れた！）
と、危なく膝を立てゝ、立ちどまつた。もう一枚別の繪を挾んだ紙挾みを、店へ置いて來たのだ。
——何の商賣についても同じことだが、ウヰンドウの注文でもバックの賣り込みでも、それぐ\そのみちのこつがあるので、上手な釣り師が巧みに魚のつぼをさぐる樣に、やはり僕たちも慣れるにつれて自然にその呼吸を會得する。第一に、——店頭の裝飾に幾分でも注意を拂つて居る店と、さうでない店とは、ウヰンドウの板硝子をちよいと見ただけでもわかる。いくら念入りに磨き立てた硝子でも、人なみな僕たちの面構へを摑つたり歪めたり、さんぐ\に虐待して映す樣だつたら、もうおしまひだ。勞銀の經濟的運用に拔け目のない主人公と、氣の毒な小僧君たちとに敬意を表しただけで、さつさとそこを素通りすべきだ。
そのかはりに、多少でも脈のある家へは、一度や二度ことはられたところで、根氣よく通よふ。尤も、氣のきいた店頭裝飾でもやつて居ようと云ふ店には、時に恐ろしい先輩がそれを主宰して居て、とんだ小僧扱ひか何ぞで、追つ拂はれない限りもないが。——
『今日は。』
さう云つて軒をくぐると、大抵最初はお客さまと間違へをされて、恐ろしい叮嚀な扱ひを受ける。——主客が自然と顚倒されるまでは、どうも變てこだ。
『新らしいウインドウの裝飾をしてみたいんですけれどね。』
そんな調子で口を切る。
『ウインドウがやくざでは何にしても仕樣がありませんけれど、……うちのぐらゐですと、まア骨折り甲斐がありますから。……』
おだてるんぢやない。これは事實だ。
『近所を一つあつと云はせる樣な、人眼を惹く、から藝術的なやつをやつてみますが、いかゞです。近所の廣告にもなりますから、僕の方でも一と肌脱ぎませう。なに、費用は、せいぐ\五六圓から十二三圓どまりです。それに材料は永久に使用出來ますから。……』
さうして、見本の模形圖を見せるか、幸ひ近所に僕の手でやつたのでもあると、
『向かふのS・商店、御存知ですね。あれは僕がやつたのです。ちよいとこゝから御覽下さい。……あすこの主人も、店頭裝飾などにはなかなか頭の進んだかたでしてね。』
さう云つた調子で、段々と說き落として行く。相手が髮でも綺麗にわけて、青々と髭を剃り立てた、肉付きのいゝ若主人ででもあると、

これでころりと落とされる。おかみさんと年寄りとは絶對にためだ。店をくゞつて、古ぼけた柱時計などが、かたり〳〵と頭の上で錘を曳きずつて居る樣だつたら、そこ等の品物でも物色して、またどうぞとか、お合憎さまとか頭を下げさせて、飛び出して來る。――時計はしば〳〵、單に「時」を支配して居るばかりではないのだ。

最近僕が手をかけたウヰンドウの數は、全市を通じて目拔きのところに、二十一二箇所あつた。ウヰンドウを飾り終へると、大抵簡單な口約束ぐらゐはして置くので、パックはその中のどれかへ持つて行けば、大抵は難なく引き取つてくれる。約束の確かなところへは、つひでに麿子などに持つて行つて貰ふ樣なこともある。小半日もつぶして一枚仕上げると、確實にそれははけるので、曾我の一枚八十錢の飜譯同樣、僕には定收と云つてもいいのだ。

――別の一枚のパックを、豫定して置いたM・食料品店へ片付けてから、十軒ばかりウインドウを物色してみたが、思はしくないので、一とまづ切り上げた。新宿まで遠乘りをすれば、二軒は確かなところがあるのだが、昨日の今日だ。此ころ都合で萬事の豫定を組むのが、僕たちの方針なのだ。

S・香料舗の前を通つたが、麿子の姿は見えなかつた。學校が未だ退けないのだらう。橙色の陽覆ひへかつと午後の陽あしがとまつて、蠟石の青い柱が濡れた樣に光つてゐた。人はみな陰つた方を歩いて居た。ひなたを歩く人々は、みな帽子をかしげて陽を避けるか、さもなければ、歩きながら忙がしく扇を使つて居た。その眩しい白い反映が、網膜の裏側へ、變な、えがらつぽい殘像をとゞめた。

暮れかた僕は汗だく〳〵になつて駒形へ戻つた。さうして、仕事にでかけようと仕度をしかけた曾我と夕食を喰つて、久し振りで寢臺の下からギタアを出して、調子を合はせてみた。

「そろ〳〵出かけるかな。」

「往き給へ。」

僕はギタアを抱いたまゝ、手を延ばして卓子の上のすぐりを抓んだ。

「……僕は今夜は出ない。」

「さうか。」

曾我は三脚臺のサックを肩へかけて、ズックの鞄をさげて、窓から顔を出して空を仰いだ。

「雲はねえな。……よし。」

――こつ〳〵と小さな跫音が階段を昇つて來て、亂暴にドアが外から蹴開らいた。さうして、鞄と帽子とを一つに抱いた麿子が、少しのびたおかつぱをうるさげに搖さぶりながら、

『只今。』

と、這入つて來た。

『……くたびれちやつた。』

と、彼女は持つて來た包をどさりと卓子のはしへ落とすと、いきなり皿を引き寄せて、中のすぐりの房を取り上げた。——安婦人香水の猥じみた匂ひが、彼女の全身から烈しく發散した。

『おでかけ？』

『うん。』

曾我はドアの隙間へ靴の頭を入れて、

『おい。何からめえものでもこさへて置け。』

と云つて、それから妹に送られて、階段を降りて行つた。

『上げようか。』

と、彼女はドアを閉めて戻つて來ると、ポケットから一と束の香水紙を出して、ぼさりと卓子のはしへはうつた。さうして、別のポケットから新らしい一圓紙幣を二三枚大事さうに出して、卓子の上へ果物皿を錘にして置いて、

『魔子ちやんの儲けだよ。』

と、内懐をして、吊るしたすぐりの房へぱくりと喰ひついた。

五

一人の兄のほかに、兩親もきやうだいも、その他肉親らしい肉親を持たない魔子は、さう云ふ境涯にごく小さな時分からはうり出されて育つたゞけに、かうした生活に浸たつて居て、とりたてゝ不滿も淋しさも感じないらしかつた。要するに彼女は、——兄同樣、身について廻つたあらゆる運命を、至極自然に見て來たのだ。

幼年時代を兄と、伯父の家や叔母の家や、一度などは、どう云ふ關係からか、以前彼等の兩親に雇はれて居たと云ふ、女中の家などゝ云ふ風に、轉々と宿り先きを變へて、ひとの厄介になつて歩いて、最後に、そこが落ち付き場所だと思ひ込んで居た母の實家の、深川のとある廻米問屋が、株の失敗で潰滅してからと云ふもの、曾我の口調を借りれば、永久の放浪的運命が、彼等の前に開らけたのだつた。ただ何より心強よかつたのは、曾我が曲りなりにも、自活の自信が出來るだけ大きくなつて居たことだつた。彼は駿河臺にアパアトメントの一室を手に入れると、そこへ十一の妹と小さな世帶を持つた。さうして、片手間に飜譯をやりながら、M・書店の編輯部へ這入つて、S・博士の監修する家庭百科辭典の編輯の手傳ひをした。彼等はその頃月二十圓の定收と、その他不定な飜譯の原稿料十五六圓とで、その小さな

世帯を維持して居た。

僕が、――僕にとつてたつた一人の肉身である母親の再婚から、(それだけが直接の原因ではなかつたが、)家を飛び出して、學校をよして、中途はんぱな繪かきのまゝ、危なつかしい世渡りをはじめたのは、丁度その時分だつた。ある手蔓から、同じ百科辭典の挿繪かきを頼まれて、色んな打ち合はせや何かの都合から、S・博士のところで折り〱落ち合つたのが、僕たちの間に今日の様な友情が開らける動機になつたわけなのだ。

その編輯の方の仕事が片付くか片付かないかに、僕は東京の生活が苦るしくなつて、(物質的にもさうだつたが、精神的にも僕は、半生の最も深刻な懊惱時代にぶつかつて居た!)そのまゝこつちを飛び出して、大阪で暫らく自由生活をした。ウキンドウの裝飾などを思ひついたのはそこでなのだが、大分その間に僕は商賣的な世渡りのすべを心得た。

ところが、――そこで僕はまた曾我たち兄妹と、偶然めぐり合つたのだつた。それは曾我たちが、僕と全たく同じ様な動機から、「あつかましい仕事」をしに、大阪へやつて來たからで、僕たちはだしぬけに路傍で會つたのだが、幸ひその時には僕の方の生活が比較的安定して居たので、彼等にもさうひどい生活の脅威は與へないですんだ。

その頃僕は、箕面に近い櫻ヶ丘の文化住宅地に、一軒家を持つて居た。偶然な機會からある保護者に引つ立てられて、飛びきりな條件のもとに、彼の保護を受けることになつて居たのだ。――それが「菱形ソオス」本舗の主人の、中島氏だつた。

僕たちが大阪を引き上げたのは、それからまる一年してゞ、ふとした事情から彼の保護を辭したのだが、存外にこの行動は成功した。――建設者の役割りの一つとして、震災後の東京は、やくざな美術家の一人にも、寛大な抱擁の手をのばして居たのだ。

――櫻子はすぐりを殘らず征伐すると、流し臺のそばへ寄つて行つて、そこ等をことこと云はして、洋皿へコオンビーフだのなまのキャベツなどを盛つて來て、マヨネエズソオスをかけ、フォークでぐるぐる掻き廻した。――自分の夕御飯の仕度だ。

「未だそのソオスは何ともないかい。」

「何ともないわ。」

と、彼女はもつともらしい顔をして、フォークの先きをしやぶつて、

「哀しみの極はみを彈いてよ。」

と、窓の僕にねだつた。

彼女は御大葬の折りにラヂオで聴いたと云ふ「哀しみの極はみ」

を、僕がギタアを抱きさへすれば、必らず一度は弾かせることにして居た。最初のうちは、耳へとまつたきれぎれな断片を、口笛で吹いたりなどして居たが、それ以來それが氣になつて仕方がないと、しじうこぼして居た。僕も最初の抑揚の淺い、あの階調の部分しか覺えて居ないので、彼女にねだられてもそこだけしか弾けないのだが、それでも彼女は滿足で、でたらめな、即興的な章末のだらく\とついた哀しみの極はみを、いつも耳を澄ましては聽き入るのだつた。——

『働らいて、それから御飯はおいしいだらう。』

『おいしい。』

と答へて、彼女は頤へくつつけた御飯つぶを、注意されてフォークの先きでとつた。

『パンもあるぜ今日買つたのが。』

『さうを？』

と、彼女は氣のない眼をして、

『いゝわ。』

と、小さな梅干の種を、お皿のはしへ吐き出した。

——すぐ頭のところへ聳えた、福助足袋の大きな廣告塔が、眼まぐるしく變轉するエルミネエヨンの反映を地面まで投げるので、僕のからだの半分は絶えずそれに彩どられた。深川、本所一帶の工場地を包む夕べの騷音が、時折り隅田川を上下する發動汽船のポンく\云ふ音をまぜて、低く窓へ迫つて來た。——電燈のまはりを舞つて居る灰色の蛾が、彼女の額や華奢な唇の邊を、時折りちらと黒く切り、また非常に大きな、ぼやけた影を、壁へも投げた。

『U・ちやん！』

と、彼女は一人で食事をすまして、椅子から立つと、皿をかたしながら僕を顧みた。

『海へはいつ出かけるのよ。』

『いつでも。』

と、僕はギタアに氣をとられて、迂濶な返事をした。

『あといくらぐらゐ？』

豫算箱の金が百圓になつたら、天幕を持つて沼津へ行かうと云ふ、僕たちの避暑計畫なのだ。天幕だのその他の附屬品は、もう半歳も前から心掛けて、ぼつく\準備をととのへて居たのだつた。

——彼女はお皿の下から紙幣をとると、

『これもいれていゝ？』

と、顏を擧げた。——僕はギタアを膝へ抱いた。

『いくら貯つたんだい？』

『三圓とね。……。

と、彼女は隠しから五十錢銀貨を一枚と、孔のあいた十錢の白銅を一枚と出して、卓子の上へ並らべて、

『……六十錢よ。』

『おやア、紙幣だけ入れてお置き。……この五圓も一緒に。』

『これは？』

『はんぱはとつてお置きお小遣ひに。そろそろ買ふものがあるだらう。まアこゝへおいで。』

『なアに？』

彼女が窓ぎはへ寄つて、僕のからだを攀ぢて、窓べりへ上りついた時、赤い大きな月が、河の向からの重なつた屋根の上へ、光輝のない圓板を、半分見せかけて居た。廣告塔の灯りは、今度は彼女のむき出した素足へ、その赤と白とに變はる光りの反映を投げた。

六

大阪から手紙の返事が來たのは、中四日置いた日の暮れがたたつた。十圓の大形ウヰンドウを一つ仕上げて、他に二つ新らしい注文をとつて、――こんな景氣は近頃にはないことだが、――景氣のついでにみんなに一圓五十錢の浴衣地を一反づつをごつて、腹をへらして歸つて來ると、猿股一つの素肌へ、自分で縫つた裾の短かい寛衣をまとつた魔子が、

『お手紙。』

と、無表情な顔で、中島氏からの手紙を僕に渡した。――窓の下には石油焜爐がぷうぷう音を立てて焔を吐いて、シチウ鍋が盛んに白い泡を立てゝ居た。魔子は夕飯の仕度で忙がしいのだ。

『はい。』

と、續いて、熱湯で絞つたタウエルを、ねぢパンの様に、目籠へ入れて持つて來てくれたので、僕は讀みかけた手紙を置いて、べたべたと肌へくつつく汗じんだシャツをとつて、窓から來る川風に吹かれながら、頸から腋から胸から腕まで、丹念に拭いた。

『卓子掛けみたいな模様だな。』

と、彼女のガウンのがらを批評すると、彼女はおぼつかない手で、洋皿の上へ卷甘藍を鍋から挾み上げながら、

『もと〳〵さうなんですもの。』

と、すまして答へた。彼女の説明によると、ヤアル幅一尺十三錢の卓子掛けを利用したので、もつと自慢なのは、――型が全然彼女の獨創だと云ふのだ。さう云はれてみると、なるほど風變はりだ。

『一寸短か過ぎるね。……こゝむと猿股が見えるよ。』

と云ふと、

「えゝ。布がちよいと足りなかつた。……」

と、相變はらずすまして答へた。

中島氏の手紙にはいつもの樣に、ロオゼ何とか云ふフランスの香水が、あくどくしましてあつた。風がパラ〳〵と手の中で頁をめくると、めまひがする樣な強よい匂ひが、むつと鼻を襲ふ。——鼠色のしやれた便箋には、せんだつて紹介した用件のほかには、何も書いてなかつた。

繪は殘らず送る手配をしたこと。どう云ふ風にして送つたらいゝのか勝手がわからないので、敷島（大阪で僕たちが行きつけた美術材料商だ。）へ行つて相談をしたこと。全部で十四點あるが、そのうちつぎの六點の中には、自分の欲しいのや、こつちで賣れる豫定があるのやなどがあるから、非賣の貼り札をして置いて欲しいこと。尤も特別に希望者があつたら、ざつと價格の標準を知らして置いて貰ひたい。など云ふ意味のことを書いて、人物畫を一點と風景畫を五點名指してあつた。

十四點のうち三點ほどは、二科へ出してしくぢつた奴で、いゝ、きむくに努力を傾けた作品だつた。僕にとつては出來不出來はともかく、涙つぽい追憶に充ちたものなのだ。中島氏が自分で欲しいと名指した人物畫は、魔子のだつた。彼女が白い毛布の上へ、マンドリンを抱いて横かで居る、表現派風の構圖のものだつた。——中島氏は魔子に、特殊なある好意を寄せて居るのだ。

「二科だの帝展なんて！……」

などと、てんで頭からけなしてかゝる魔子は、僕が僕自身の資格に自信を持ちたい野心から、その通過をなかば眼あてに、骨を折つて居るのを見たりなどすると、さも莫迦らしげに嬲どり〳〵した。藝術家が例へ相手が誰にしろ、他の藝術家の批評で作の出來をきめる。——そんな莫迦げた、言語同斷な話はないと主張するのだ。尤も、夜店に飾つてある、一枚八十錢ぐらゐのペンキ畫の額に感心したり、大道の名札書きの達筆に眼を奪はれたりして居る彼女のことだから、彼女自身がどんな眼で繪を見て居るのだかはわからない。

「展覽會はいつ開らくの？」

額へきら〳〵汗の粒をくつつけた彼女が、おかつぱをうるさげに掻いて、腕でそこをこすりながら、無興味げにきいたので、僕は手紙を疊みかけて顏を擧げた。

「店番は君だぜ？」

「うん。」

と、彼女はうなづいて、

「そのかはり、儲かつたら鑛物の標本を買つてくれるんだよ。」

と、付け加へた。――彼女が鑛物の標本を欲しがつてゐるのは、もう久しい以前からなのだ。兄に似て、どこか科學者肌の、綿密な追求心を持つて居る彼女は、學校で博物をはじめて、鑛物の敎科書を買ふと、恐ろしくそれに興味を持つて、暇さへあれば、未だ敎はりもしない先きの方まで、頁を引つ繰り返して居たが、そのうちに小遣ひをためては鑛物の標本を買つたり、專門的なその方面の著書を買ひ集めたりなどしてゐた。小川町の停留所に近い、ある鑛物商のウヰンドウは、彼女を惹く點で、反物屋や化粧品店をしのぐくらゐだつたのだ。

「……儲かつたら買つてやらう。」

煙草へ火をつけながら答へると

「箱のぢや厭やだよ。ばらのを一と組だよ。」

と、彼女はもつれたおかつぱの蔭で、狡猾な眼をした。――

曾我は朝早く圖書館へ出かけた。暮れがた前には戻つて來て、夕飯をすましてまた仕事に出かける豫定だと、彼は出きはに告げた。――近頃はてんぐが仕事に忙がしいので、めつたに三人が一緒に食卓につく折りがなかつた。食卓には今日は魔子の心づくしで、ダリヤの盛り花などまで添へてあつた。

――もう二た月僕は母に會はない。三つで父をなくした僕を、十九まで育てるために、あらゆる苦勞と云ふ苦勞(要するに貧乏苦勞だが)をし盡した彼女は、遂々貧乏暮らしに行き詰まつて、R・家の幼ない店主として僕を殘して、H・家へ嫁いだ。十九とは云へ、一と通り貧乏暮らしの中を拔けて、人並みには世間を識つて居た僕は、彼女の再度の結婚が、單に彼女の口實の樣に、「已むを得ない」生活の手段のためだけではないと云ふことを、殆んど冷たく理解して居た。二た言目には死んだ父さんがと云ひくして、僕を勵ます鞭にも、彼女自身を慰さめる口實にもして來た彼女は、この二三年眼立つ樣な孤獨と寂寥との中に浸たつて來た。――僕は僕の年なみの解釋ではあつたが、H・と母との接近に、もつと切實な理由のあるのを推察出來た。しかし、それは彼女と僕との關係を、今日の樣に決裂させた直接の動機ではなかつた。何よりいけなかつたのは、――誰れもが一度は人生の懷疑者になると云はれる、その頃の僕の年齡と、さうして、彼女が僕をもくるめたその運命に、確かで直面しなかつたことだつた!

(お前の將來のために。)

(R・家のために。)

(つまり父さんの遺志に添ふ樣に。)――

さう云ふ幾つもの、見かけは美しい口實が、彼女を粧ほはせるかはりに、醜くい、さもしい、懷疑深いヴェイルで、その殉情をまで覆うてしまつたのだ。彼女からの最初の送金を、あなたはH・の妻で、H・

の三人の子供たちの母である筈だ云々と云ふ、冷たい、義務的な言葉を添へてつき返してしまつて、學校を中途で飛び出して以來、僕たちの關係は未だもとへ恢復されては居なかつた。彼女の肉身の子として、表て向き一と通りのつき合ひはしながら、僕たちの心持ちは、變に昔喰ひ違つたところから、遠くそれたまゝで居たのだ。——再婚後あまり幸福ではないらしい彼女から、其而の住まゐへあてて、彼女の義理の子供たちの履き古した靴を直して送つてよこしたり、自分で洗濯屋へやつて、綺麗にしてかぶる様にと、H・の古い夏帽を送つてよこしたりしたのを、僕は説明の出來ない一種天探女な氣持ちから、そのまゝ彼女に送り返してしまつた。かうして、僕は自から望んで、たつた一人の肉身から離叛した。

『さうやつて、まア自分の天探女で苦しみ給へ。』

さう曾我は時折り、例の苦もなげな、のんきな調子で云ひ〳〵した。——時とすると冷嘲的にすら見えるさうした態度の底に、僕は彼の例の無口は、うづく様な友情といつも感じた。

『親子だなア。……』

彼女からの書信などが時折り、郵便受けの中へ折り込まれて居たりするのを見ると、開らいてしみ〴〵とそれを讀んだこともない僕の前で彼はほがらかに微笑んだりした。

『他人ぢやから根氣よく、こんなつむじ曲りの御機嫌とりはしまいて。』

——丁度そこへ、いゝどんと亂暴に外から扉が開いて、當の曾我がひよつこり顔を出した。彼は床を歩きながらふん〳〵小鼻を鳴らして、臺所の方を見たが。

『うめえ匂ひがしやがるな。』

と、ひとりごとを云つて、長くのばした髮を額ぎはにもつらしたまま、帽子を器用に壁へ投げかけて、かゝへて來た古い大きな手製の紙挾みを、どさりと卓子の上へ載せた。さうして、科學者風の透つた瞳で僕を見て、

『歸つた。』

と、くたびれた様な挨拶をした。

『何だいこりア。……』

『おみやげだ。』

僕は卓子の上の紙包みを、赤い紙テエプを切つて開げながら、相變はらず窓の下で晩御飯の仕度に餘念もない廣子を、ちよいと來る様にと呼んだ。

『なアに？』

踏み臺の上へ載つて、棚からナプキン（紙）をおろさうとして居た彼女

女は、高いところからちよいとこつちを見おろしたが、卓子の上のものを見ると、だしぬけに床へ跳びおりた。

『あら。あたしのおみやげ？』

――曾我は自分でがさ／＼と包み紙を開けて、中の浴衣地を見ると、

『……着物ぢやア喰へねえな。』

と、不服氣につぶやいて、しゆつ！と卓子の面で蠟マッチを擦つた。

七

新美堂の店仕切りは、はじめてみると存外手間どつて、曾我にも手傳はせて、骨組みだけにざつと一日潰した。――間口二間半奥行き二間と云ふ店土間を、縱に眞つ二つに仕切るのだが、境界は天井と床とへ最初にぬきを渡して、その間へ幕を張らうと云ふのだ。かた／＼の半分へ商品棚を並べたり、縮緬を吊るしたりなどすると、みかけが急にせゝこましくなつて、からだを斜めにしないと通れない樣なところさへ出來た。

『こりア窮屈かな少し。……』

さう云ふと石原さんは、

『こゝへかうして坐つて往來を見ると、隧道の中から外を覗いて居る樣ですよ。』

と笑つた。

そのわりに、しかし片側は感じのいゝ、ちんまりした小部屋になつた。鐵色の壁とクリーム色の布とが向き合つて、やゝ不調和な、――間に合はせらしい感じを出したが、それはしかし、繪をかけると存外眼立たなくなるかもわからない。それよりも不都合なのは、とつつきが壁ででもあつてはそこへ大きな繪の一つもかけられるといゝのだが、合憎二階の階段口がそこへせり出して居るので、どうにも他に手のつけやうがない。――それが見かけ上の何よりの缺點だつた。

『殘らずかけられるかなア。』

昨夜とどいた繪を一枚々々褒めてくれた曾我が、金槌をさげたまゝそこ等を見廻して云つた。

『さア。……』

僕もあやふやな眼で、

『どうかねえ殘らずは。……まアいゝさ。少しは殘つたつて。』

繪は大體して、僕の期待をさう裏切りはしなかつたが、ごく初期のものには多少、筆觸の生硬なのや何かゞないでもなかつた。しかしをかしなことには、それがみんな中島氏の特に指定してよこしたものば

かけなのだ。尤も、――それ等は初期の作品だけに、一層まじめでもあり、生で、情熱的ではあつたが。

『明日の晩ぢやア飾りますよ。』

さう歸りに僕は石原さんに云つた。

『あとは、宣傳を一つ拔け目なくやるんですな。何なら少しお手傳ひをしますよ。』

と、石原さんが「隧道」の中から出て來て、陳列室の入り口に立つて、賭場の様なない明るい部屋の様子を見ながら云つた。

『さう。若しかしたらお願ひします。今夜はこれから歸つて、少し宣傳法の研究でもしませう。』

『繪よりかそつちの方が上手かも知りませんよ。この男は。』

と、曾我があとから笑つた。

カフエT・で簡單な夜食をとりながら、僕たちは暫らく宣傳の手段や順序について、まじめに相談をし合つた。さうして、とり敢へずポスタアを澤山かいて、目拔きの通りの美術店や洋食店や、各大學の揭示場と云ふ様なところへ貼つて、更に、廣告ビラを二三萬すらせて、自分たち三人と、若しかしたら店の若衆にも手傳はせて、會期中街で配ること、ざつとさう云ふ具體案を立てた。

――ポスターは大きなのは、畫用紙の全紙へクレヨンか水繪でかくこと、小さなのはパステル用紙へカット風に入れて、多少の空地を殘して、若しかしたらそれ〴〵店の番號で、――例へば季節の献立ぐらゐは書き添へられる様にすること、明日は一日魔子にも學校を休ませて、ポスタアかきを手傳はせ、明後日は彼女は午後から、僕たちは晩から、ポスタア貼りとビラ配りとをする。ポスタアは出來上がり次第、漸次中心地から擴げることにして、それには曾我と僕とがかゝること、魔子は學校の戻りに當分會場へ廻らせて、店番を兼ねて表てへビラを配らせる。とまアさう云ふ様な計畫を立てた。

『ポスタアの材料もつひでに買つて來うぢやないか。……二十枚の三十枚のつて、一日にア骨だぜ。』

『さうだな。』

『パステルはおれが引き受けた。……あのポスタアぢやアなんてんでも、仕様がねえからなア。』

と云ひかけて、曾我はと拍子もない大きなくしやみをして、そこ等ぢゆうの人々の注意を集めてしまつた。

『宣傳てえやつアかうやらなきア。……』

と、彼は厚かましく嘯ぶいて、から〳〵聲を立てゝ笑つた。やゝ醉ひが廻つて居たらしい。

畫用紙だの繪の具などを一と荷物買ひ込んで、家へ歸ると、魔子はもう

寢て居た。暑いので寢臺の上を轉がり廻つて、かた脚で蚊帳をつつ張つて居たので、そこへ血を吸つて膨らんだ蚊が、ぶん〳〵群れて居た。

『莫迦、莫迦。……』

と、僕は彼女のからだを、かんてんでも動かす樣にぐにや〳〵と、寢臺の眞ん中へ轉がして、脚を毛布でくるんでやつた。

『十二時だな。』

と、彼は蚊帳から出ると、卓子の上の硝子の置時計を見て云つた。

『どうだい。……構圖だけでもざつと、とつとからぢやないか。』

『さうだな。』

『この卓子はかうして、こゝへ茣蓙を擴げるんだ。』

『うん。……』

『大量製産てえやつは、』

と、彼は階段の上の欄から、埃を叩いて茣蓙をおろしながら云つた。

『……機會を短縮しなきアいけねえ。』

さうして、それを部屋へかつぎ込んで來て、卓子をずらして、廣く床へ敷いた。茣蓙は以前この部屋の一部に敷いてあつたので、僕たちが部屋を今の樣に改ためる前に、捲いて欄へ載せて置いたのだが、時々折り必要に應じては、おろして使ひ〳〵して居たのだ。

僕たちはその上へ低く電燈を吊るした。

『どうだい、このくらゐぢやア。……』

彼は紙を四つに疊んで、僕を顧みた。

『少し狹いかな。三つ折りにしちやアどうだらう。』

『からか。……』

『大き過ぎるかな？』

『……さうでもあるめえ。』

『おい。一寸この脚をどかした。……コップがあるぜそこに。』

『オウライ！』

僕は畫用紙を擴げると、靴を脱いで、茣蓙の上へしやがんで、眞つ白い、變てこに視覺を迷はせる紙の眞ん中へ眼をつけた。――曾我も同じ姿勢で、三つに疊んで切つたパステル用紙へ、ぢつと思案深げな眼を据ゑて、だまつた。

『蚊遣りはもうなかつたつけかなア。』

『さア。……』

『さアぢやアねえ。その箱ア空かい。……いや、椅子の上だ。』

夜が更けると共に、蚊の襲撃が猛烈になつた。――それが半裸體で働らいて居る僕たちのぐるりで、わん〳〵うるさく羽音を立てた。

曾我は何をやらしても人なみにはやる男で、風韻はなかつたが、綺麗な、器用な繪をかいた。しかも、これはアカデミツクだの、これは印象派だの、これは表現派だのと、一枚一枚に構圖や文字や紙形まで變へ、僕がやつと素描を終へて、水繪の具を溶かしはじめた頃には、もう五枚から仕上げて居た。

『君のはみんなに一つ構圖でいゝんだらう？』

と、彼は立つて來て、畫用紙の面を縦横に走つた、荒らつぽい鉛筆の線に見入りながら、つぶやいた。

『さう。いゝだらうと思ふけれど。』

『いゝとも〳〵！』

と、彼は煽動的な口調で、

『こゝへU・R・個人展覽會と、かう縦に大く、ゴチツクに入れるんだな。』

『面白い。』

『ふふふ。』

と、魔子が蚊帳の中で、妙な力のない、空虚な笑ひかたをしたので、僕たちはぎよつとして繪筆をおいて、そつちを顧みた。──蚊帳の中は、寢臺の眞ん中にはすに黒く、彼女のからだが轉がつて居るだけで、ひつそりして居た。

『どうだいあの寢ざうは。……』

と、曾我はちよいと立つて云つて、またしやがんだ。

僕たちが仕事を切り上げて、裸かになつて寢床へ這入つたのは、二時過ぎだつた。枕をはづして轉がつて居る魔子を、眞ん中へ押しやつて、そのあとのむか〳〵と凹んだところへからだを横たへると、すぐにまたこつちへ彼女は寢返つて、やけた華奢な脚を、汗ぼつたく僕の脚へからませた。

『仕様のねえ婦人だな。』

『仕様のねえ婦人はいゝが、』

と、曾我は近眼を敷布の上へ近付けて

『……こいつめ、キヤラメルをしやぶりながら寢たんだよ。』

と云つて、べと〳〵に溶けた飴の塊まりを、指で摘んで引つ張つて、敷布から剝がした。

八

翌日一日僕たちは二階へ籠もつて、たゞ口一つたゝく暇をも惜しんで、ポスタアの制作に沒頭した。曾我は約束の小形なパステルを引き受け、僕と魔子とは一日畫用紙の上を匍ひ廻つた。さうして、暮れがた灯ともし頃までにやつと大形のを十枚と小形のを四十枚ほど仕上げ

た。

朝起きぬけに、すぢ向かひの印刷屋を急かして頼んだ廣告ビラは、五千枚だけ刷り上がつて來た。曾我が『どうだいおれの名文は。』と威張つた、叙事詩風の宣傳文は、五號活字でインクの匂ひ高く、紙面に躍つて居た。——

夕飯には炊事に勞力をさくのをいとつて、隣りの洋食屋から十五錢のハヤシライスを三人前とつた。さうして、食後直ちに繪の飾り付けに、僕たちは家をからにして神田へ向かつた。

若しかすると店の近所で、ビラ配りをさせるかもわからないと云ふので、僕たちは廣告ビラと、出來上つたポスタアの一部とを別に用意して持つて、魔子にはよそ着を着けさせることにした。

『着物でい〻？』

と、彼女はトランクを開けてみて、中から友禪の單衣を見付け出すと、紅色のきらびやかな模様に眼を惹かれたと云ふ風に、僕たちを顧みた。

『君がよけりアい〻さ。』

『これよ。』

と、彼女は細く疊んだ、——去年唯一のよそ行きにして著たその友禪を出して、僕たちに見せた。

『そいつを著るんなら著る樣に、その面ぢやアまづいな。』

と、曾我が云つた。廣告配りは本人が眼立つほどききがい〻と云ふのが、平ぜいの彼の主張なのだ。

彼女が卓子の上へ鏡臺を立て〻、手のひらでクリームなどを溶いて居る間に、僕たちはざつと荷物の整理をした。——存外重くもあり、嵩ばりもするので、どこかでリヤカアでも借りて來て、それへ積んで運んで行かうと僕が主張した。

『お待ち魔子。』

その相談が未だきまらないうちに、突然曾我は大股に窓の下へ歩いて行つた。さうして、髮が少しのびたから鋏んでやらうと云ひ出した。

『さうしよう。』

と、僕が決定的に云ふと、

『さう。』

と、曾我はちよいと思案顔をしたが、『なアに？』と魔子が、恐ろしい眞つ白けな顔を振り向けたので、突然僕たちは吹き出してしまつた。

『ぢやア一つ交渉して來るぜ。』

『さうか。……どこにある？』

『そこ等にあるだらう。』

魔子の後ろへ廻つた曾我が、ちやきちやきと勿體らしく鋏を鳴らしはじめたのをあとに、僕は階段を駈け降りた。さうして、自動車屋の武瀬さんと相談をして、二三軒近所をきゝ合はせることにした。

存外容易に交渉がまとまつて、――引つ張つて來た車を路地口へつけて部屋へ上がつて行くと、曾我は未だちやきちやきと、魔子の頭の廻りで鋏を鳴らして居た。

『だめだよ。おい動いちやア。……』

『ちよい待つて。……』

『どうしたんだよ。』

『痒くつて。……』

さうして、著物の袖から手を突つ込んで、脇のあたりを掻きながら、

『見てないでU・ちやん蚊でも扇ぎな。』

と、鮮やかな口紅を二つに割つた。

一と足先きに荷を積んで自轉車を乗り出した僕が、石原さんや店の若衆たちに迎へられて、荷をほぐして、みんなに手傳つて貰つて、二つ三つ繪をかけはじめた時、曾我が盛装の魔子と連れ立つてやつて來た。曾我の指圖と見える充分に濃い目なお化粧と、大人びたおかつぱと、きらびやかな縮緬とが、彼女を人形の様に綺麗に眼立たせた。

『どこのお嬢さんかと思ひましたよ。』

と、肥えた石原さんが眼を細めて笑つて、彼女を迎へると、彼女は遠慮もなく彼の兩手をつかんで、

『こんな魔子だつてもあるのよ！』

と、かぽかぽ木履を鳴らしてみせた。

『ぢやア、こいつを持つて行つて配るんだ。百貨店の前がいゝだらう？』

『みんな？』

『みんなつて、配られたらみんなでも配るさ。』

さう云つて、曾我は部厚い廣告の束を彼女に渡した。

『君たちも誰か一人行つて、手傳つて上げ給へ。』

さう石原さんが、若い店員たちを見廻すと、誰もちよいと氣遲れがしたと云ふ風に、若い娘の前でためらつた。――一番美男のY・さんは、ぽうと瞼の邊を明るめて、眩しげに彼の視線から眼をそらした。

『いゝわよ一人で。』

と、氣輕に魔子がたつて行かうとすると、

『まアお待ち。』

と、石原さんは後ろから呼びとめた。

『お嬢さんて、一人で夜歩きなんぞをするもんぢやありませんよ。Y・お前行つて手傳つてお上げ。』

さう云つて、眞つ赤になつた石原を魔子につけて送り出して、からから聲を立てゝ彼は笑つた。——

繪は二點を除しただけで、比較的たつぷりと餘裕をとつて飾れた。大形のポスタア三枚は、石原さんが自分で糊と刷毛とを持つて行つて、店の前の立て看板と、どこか近所へ貼つて來た。

『引つ立つたぜ。』

と、曾我は最後のをかけ終はると、そり身になつて、壁面を見廻してつぶやいた。

『値段表はすぐ下へ貼るかな。』

『わきへ、壁へとめられないかい？』

『さう。……正札付きつて風でもなア。』

石原さんが安全ピンを持つて來てくれたので、幕の方のはそれでとめた。

『安すぎますねこりア。』

と、値段表を一と通り見廻したあとで、石原さんが無責任な批評をした。

『……みんな賣れますぜ。』

『まア、さうありたいもんですがね。』

と、曾我がひとりごとを云つた。

『へえ、非賣つてのがありますな。おや魔子ちやんのだ。U・ちやん。こいつアわかつて居るが、こつちの三點はどうしたんです。……賣却ずみですかね？』

『失禮なことをおつしやいますな。』

と、僕はまるめた紙屑を彼の方へはうつて云つた。

『却は訂正なさい。』

『へえ。本當ですか。』

『お隣の方に先約がありましてね。』

『それは〳〵！』

と、石原さんは仰山な表情をしてみせた。

すつかり飾りつけがすんで、石原さんと手金の問題や何かについて、二三打ち合はせをすましてから、ポスタアの位置の檢分かたがた、魔子たちを迎へに行つてみた。ポスタアは店先きの立て看板に一枚と、もう二枚は、交叉點に近いある繪端書屋と、すぢ向かひの臺灣料理屋の店とへ貼られて、氣はづかしいほど遠眼にも眼立つて居た。——魔子たちは百貨店の明るいウヰンドウの前で、盛んに活動して居た。夜更けて人影がまばらになつた折りでもあり、彼女の艶でやかな

娘共は、大びらに周圍の視線を集めて居た。
『あとこれだけよ。』
と、彼女は三分の一ほどになつたビラの殘りを、遠くから振つてみせた。——お化粧と身なりとに過剰な自信を持つて居るらしい今夜の彼女は、さうした多くの視線の中に居るのが、ひどく愉快げだつた。
——骨折り賃に、歸りにアイスクリームをごつて、一旦店へ戻つてから、僕は曾我たちと別れて、再たびリヤカアを乘り出した。駒形へ戻つたのはかれこれ十二時過ぎだつた。ウヰスキーを一杯づゝ吞んではポスターを貼つて歩いたと云ふ曾我は、大分いゝ景氣に醉つて、麗子に世話をやかせて居た。
『豫定通りに行つたな!』
『然り!』
などと、彼はよろ〳〵しながら、帽子を天井へぶつつけて踊つた。
寢床へ這入つてからも、僕たちは莫迦々々しい景氣のいゝ話をし合つては、はしやいだ。麗子は宵のお化粧のまゝ猿股一つになつて、暑げにあちこち轉げ廻つた。僕が彼女の腕へ手を廻して、唇の間へ尖つた輪をつくつてみせると、彼女は下へ敷いたおかつぱをむしやくしやにもつらしたまゝ、顏を寄せて來て、紅の大きくはみ出た、未だ子供らしい堅い唇を、ぐいと亂暴に押しつけた。——彼女からすると、これは意味のない習慣なのだ。

九

翌朝未明に起きて、殘りのポスタアを仕上げると、僕たちは麗子が學校へ出たあとで、地圖を擴げて、掲示の場所と都合のいゝ道順とを、注意深く研究して、それから、めいめい手わけをして、それをかかへて家を出た。
僕が引き受けた大形のポスタアは、幾分を市内の主だつた美術商へくばる豫定で、それは石原さんに交渉を賴むことになつて居るので、僕はまつ直ぐ神田の會場へ向かつた。
曾我は市内や郊外の目拔きな通りを、十八箇所ほど選んで、そこの美術商や、洋食店や、書店や、樂器商などへ、直接行動をとることにして、一と束ポスタアをかゝへると、まづ手近からだと笑ひながら、路地口からすぐに淺草の方へ向かつた。
會場はすつかりもう整理が屆いて居た。石原さんの手になる、U・R・氏洋畫作品展覽會、入場無料と筆太に記された立て看板が、氣はづかしいほど眼立つて、店の兩側に立てかけられて居た。陳列室の氣分は夜と大差はなかつた。欲を云へばもう少し光線が欲しかつたが、それも入場者が莫迦々々しくこまない限りは、さうさわりにもならな

さうだつた。

『今遭つたでせう素敵な美人に。』

と、石原さんがつや〱脂肪光りのする大きな顎を撫でながら笑つた。――初谷が女で、その上に素敵な美人だと云ふのだ。

――一日脚を棒の様にして歩き廻つて、四時一寸過ぎに、豫定の枚數を豫定の場所へ貼り終へて、店へ戻つて來ると、會場は身動きも出來ない人ごみを外まで溢らせて居た。

『大變な騒ぎだなこりア。……なには、曾我は未だ見えませんか。』

云ひ様のない複雑な感情に胸を壓されながら、窮屈な商品陳列の間を拔けて、K・さんにきくと、彼は愉快げに笑ひながら、

『未だお見えになりませんよ』

と答へて、石原さんが自分で陳列室に整へてゐるから、行つて御覧なさいと教へてくれた。

『厭やだよ。……やつ等ア色んな批評をしてやかるだらう。』

と、僕は幕の向かふの落ち付きのない、さはめかしい氣配を氣にしながら、變に顔を赧らめた。――僕は今度の催ほしの結果については、もと〱二様の豫想を持つて居た。一つは、――總體して世間の人々が、思つたより閑散で、裕福で、たか〱みな美術の愛好家で、しじう餓えた様な眼をして、何かをあさつて居る。そんな連中は大抵傳統だの歴史などと云ふ様なものには無關心で、要するにいゝものになら純粋に氣持ちを傾むける。厭やなものだと二度と最早振り向きもしないかはりには、惚れたとなると（繪のよしあしよりは結局惚れるか惚れないかゞ問題なのだが）、大膽に人にもそれを共鳴させずには承知をしない。さうして、批評と云ふものをいつの場合にも、彼等自身に即して、無遠慮に、づけ〱とやつてのける。――そんな手合ひが繪かきをば有名にもすれば、また富ませもするのだ！　そんな連中が押すな〱で立て込みはしまいか？

それとも、――存外世間の人々が、英國人の様に保守的で、くすぶつて居て、店の立て看板をちよいと見たゞけで、U・R・ふん、きかない名だな。ぐらゐのことで、鷹揚にステッキを鳴らしながら、そこを通り過ぎてしまふ。――彼等は新らしいものに對しては恐ろしい健忘症だが、覺えて居ることだけは百萬遍でも繰り返す。帝展や二科などの、ごく〱通俗な繪かきの名を、一ダアスほど覺えて居て、節季には展覧會場を百歩で拔けて、山氣のたつぷりな彼等の大作品にでも出つくはすと、なるほど！　てな顔を、きいた風に傾むけてみせる。

要するに、十間の眞ん中へ立てば、ぐるりの繪が殘らずさはりなく見られる様な、閑散な景氣をば、結果に於いて現出するのだ！

僕の豫想はこの二つの間を、びく〱もので往復して居た。今日そ

ちこちの學校をめぐり步いて、好奇に溶けた學生たちの雜沓の中で、臆恥もない大きなポスタアを貼りながらも、所々この不安な、落ち付かない氣持ちは、毛蟲が匍ふ樣にむづ〳〵と、僕のからだを匍ひ廻つたのだつた。

『今頃急にこんなにこみはじめたんですか？』

『いゝえ。』

と、K・さんは明るく笑つて、

『年頃からずつとかうです。……豫約の方も相當たさうですよ。』

『どうだか。……』

『いや本當。』

さう云ひかけて、

『いらつしやいまし。』

と、K・さんは立ち上がつた。振り返ると、客と思つたのは案外、幾月か振りで向ふ信濃町の母だつた。――彼女もこゝで僕をいきなり見出だしたのは意外だと云ふ顏をしてK・さんの方へ會釋を返すと、僕のそばへ寄つて來た。

『お前居たのかい。……どうかと思つてねおつ母さんは。……』

さう云つて、見る〳〵彼女は睫毛の蔭に淚を光らせて微笑んだ。

『どうしてこゝに居るつてのがわかりました。』

『怪我さんがお葉書を下すつてね。』

と、彼女は大事に持つて來たらしい、薄よごれた葉書を、懐ころから出してみせた。――葉書には彼の筆跡で、U・君の繪の展覽會が、神保町のこれ〳〵のところで開かれるから、會期中に是非一度見に來てくれる樣にとしたゝめて、店の位置の略圖まで、入念に書き添へてあつた。

『御親切さまにわざ〳〵。……』

と、彼女は葉書を戻されると、大事さうにまたそれを懐ころへしまつて、

『怪我さんはいらつしやらないの？』

と、濡れた瞼をしばたゝいた。

『居ません。』

『さう。……有り難うございます。どうぞお構ひ下さらないで。』

と、彼女はK・さんに椅子をすゝめられると、辭退をして、壁ぎはへ身を寄せて、

『繪は向かふに飾つてあるの？』

『えゝ、さうです。』

『一寸見せて戴かうかね。おつ母さんにはわからないけれど。……』

さう云つて、はじめて彼女は袂から手布を出して、鼻をかみ涙を拭いた。

『でもまアよかつた。駒形へ行かうか、こゝへ来ようかと、さんざ迷つてね。……今日はお前、父さんの御命日だよ。これも何かの因縁かもわからないけれど。……』

と云ひかけて。

『こゝへかけて、お店のお邪魔になりはしないかしら。』

とひとりごとを云ひながら、遠慮深く腰をおろして、――僕にもかける様にと勧めて、

『おつ母さんはね。……曾我さんからお端書がなくても、今日はお前のところを訪ねて、お位牌は御覧らないまでも、心持ちだけでもお前とお祀りをしようと思つてね。……本当なら、お前がお仏壇くらゐはちやんと持つて、こんな時には品川の叔父さん御夫婦に、本所の伯母さんぐらゐはお呼びをするのが、当然なのだけれどね。……今年はお前、父さんの二十一周忌だよ。』

『さうですか。』

『さうですかつてお前、……呑気な子だね。』

と、母は涙のまゝ淋しく微笑んで、

『よその家へ行つたお父さんにお位牌をあづけたまんま、何もかも忘れて、うつちやらかして置くなんて。……』

さうして、手を延ばして、はづれたボタンを直してくれて、

『それでね。……おつ母さんは今日は、曾我さんもいらつしやるし、御迷惑をかけるのも何だから、お前とどこかその辺へ出て、父さんのお寫眞でも見ながら、一緒に御飯でも喰べようと思つてね。』

さう云つて、

『これは恐れ入ります。……どうぞお構ひ下さらないで。』

と、奥からK・さんの運んで来たお茶を、腰を低めて受けた。

『僕は今日は忙がしいんです。……曾我にも、こゝの奥さんにも、色々手傳つて働らいて貰つて居るんですから……』

『そりア。……』

と云ひかけて、突然頼もしく彼女は睫毛から涙を降らして、

『……そんな、そんな返事をお前、たまたま来たおつ母さんに……』

『とにかく、一寸その辺まで出ませう。ここでは店の邪魔にもなりますから。』

彼女の様子に當惑して、晴れぐしい今しがたまでの氣持ちもすつかり曇らせて、不機嫌に僕は椅子から立つた。さうして、忙がしく涙を拭いて居る彼女を、殆んどせつかちに促がし立てゝ、店を出た。なぜかこんなところを、曾我やK・さんや娘たちに、僕は見られたく

なかつたのだ。——

『御飯どきには少し未だ早いけれど。』

外へ出ると、少し彼女は機嫌を直して、古びた傘の陰へ僕を入れて云つた。

『今日はおつ母さんもそのつもりで來たんだから、……ちや、かうしない？　何かお前喰べたいものでもないかい？　この邊で手近に。』

僕は不愉快な眼で彼女を見た。さうして、汚ない亞麻色の髮を、乏しくひつ詰めに結つた、低い彼女の頭を見おろして、哀れみと云ふより、眉見の狹い樣なみすぼらしささへ感じた。

『何でも僕はいゝんです。おつ母さんの好きなものになさい。』

『お前は洋食がいゝんだらう？』

僕はだまつて、彼女のかざした傘の陰から、ちら〳〵はみ出す、自分の磨れた赤革の靴を見つめた。さうして、ふと、名狀しがたい、空虚なわびしさの中へ落ち込んでしまつた。——僕はいつぞや、贋子が玩具箱に使つて居る、壞れた小さな竹行李をひつくり返した時、セルロイドの汚れた人形だの、古びたクリスマスカアドだの、クレヨンのかけらなどと一緒に、手垢のついた、古い妙な格好をした木塊が二つ、轉げ出したことがあるのを思ひ出した。彼女はその時それを僕に示して、

『パパとママのお位牌よ。』

と、簡單に説明した。——そんな記憶が、わびしい、空虚な影を見いて、僕の頭の中をかすめた。

『こゝはどう？』

だしぬけにさう母に云はれた時、僕はふつと自分をさまして、さうして彼女を見た。と、傘の陰になつた、やつれた、貧相な彼女の顏が、水底をすかす樣にぼやけて、溶けて、殆んど見わけもつかなくなつて居るのに僕は氣付いて、自分で氣はづかしくなつて、そこからさつと眼をそらした。——

＋

高我と贋子と三人連れ立つて、食堂から歸路についたのは、かれこれ十一時を過ぎた時分だつた。日開け劇々三階の看板濟みがあつて、十七階の手付けが這入つた。花園さんから金を受け取つて、だまつて店を出て、だまつて小半町歩いてから、僕たちは期せずして立ち止まつて、あつはつは！と聲を揃へて笑つた。

『おい。ありアみんな儲れるぜ。』

と、高我は濡れた樣にきら〳〵灯りを映した、市街の軌道の眞ん中を歩きながら、恐ろしいいつ拔けの、大きな聲を立てた。

『惜しかない？　みんな賣れちやつて。』

さう僕は、曾我にも負けない付け景氣で云つた。——しかし、僕は今夜はひどく變に空虚だつた。むしやくしやにたゞ淋しかつた。先に會つたせゐとも思へなかつたが、無論瓊子の云ふ樣な意味でもなかつた。もつと内部に芽ざしたものだつた。墓場の中の死骸でも若しかして持つて居れば、と思はれる樣な氣持ちだつた。人生の創始から終末を通じて、その底を貫ぬくあの「虚無」が、どう云ふ氣まぐれかでひよつこり生活の表面へ、その片鱗を見せた。——さう云つた樣なものだつた。

『どうだい。そこ等で一杯祝盃を擧げようぢやないか！』

と、須田町の電車の交叉點まで來た時、突然立ち止まつて曾我が提議をした。

『よし！』

と、僕はすぐに賛成した。瓊子は二三歩先きで立ち止まつて、僕たちを顧みた。

『うさぎはどうだい。』

と、曾我が續いてまた云つた。

『瓊子ちやんはどうだ。』

『いゝわ。』

と、彼女は甘へた眼をして僕を見た。

僕たちは連れ立つて、萬世橋驛に面した小さなうさぎ料理店の、表ての鐵のドアを押した。

けばけばしく化粧つた女たちがごちやごちや居たが、こつちが女連れの客だつたので、うるさくそばへは寄らなかつた。——瓊子は學校の歸りに店へ寄つたまゝなのだが、着物も改ためて居たし、お化粧もやゝ念を入れて、いつもの子供らしさをなくして居たので、女たちはこの年輩な同性に對して、さう無關心ではあり得ないらしかつた。

『鍋にでもしようか、それとも、……』

と、僕が獻立表をひつくり返して居る間に、曾我は何はともあれ、——と云ふ調子で、いゝなまを三つ注文した。

『あたしはいゝわ。』

と、彼女が無遠慮に注文をとり消すと、

『祝盃だ！』

と、彼は押つ被せて、

『鍋で結構。そのほかうまさうなものがあつたら二三品、何でもいゝや。……』

——彼が獻立表をひつくつて、女給の一人と何やら交渉をし合う

て居る間に、僕は魔子と新聞を覗いた。

『あら、兩國の花火だつたのね今夜。』

彼女は膝頭で僕を突つついて云つた。

『つまらないわ！……』

『見られるもんか人出で。』

『だつて綺麗だからさ。』

『兩國のかい？』

『いゝえ、裏の。』

『すみません。……』

と、窮屈げに椅子の後ろから割り込んで來た女給が、白く泡のたれたコップを三つ、めいくの前へ並らべたので、僕たちはそれぞれそれを手にした。――可なりいける割りにすぐに顏へ出る僕は、魔子が平氣な顏で黄金色の液體を、コップの底まで呑み干すまでに、もうこめかみの邊の血管に、輕い壓迫を感じかけた。

料理が二三品運ばれて、やがて鍋が煮え立つて來ると、醉つてそろそろ愉快になつた曾我が、例によつて盛んにまくし立てはじめた。

『毎歳これから一度づつ展覽會を開らくんだな、K・三月の暮らしはそれで出ちまア。……さうやつて、幾らでも負擔を輕くしといて、のんきにこつくやるんだ。本當の仕事はやつぱり、生活と切り離さなきアなア。……綺麗だつて天女だつて、おんなじこつた。お月さまのあばた面を俗人どもに覗かせてやつてたところで、生涯うだつはあがらねえ。……なア魔子。』

『さう？』

と、彼女は鍋のすみへ、やつと葱の白味を追ひ詰めて、おかつぱを擧げた。

『さうつて、こいつ。……』

と、曾我は調子を拔かれて、あつはつは！と天井へ反響する樣な聲を立てて笑つて、

『おウい！』

と、女給を顧みて、コップの尻で卓子をまた叩いた。

――やつとつかまへた青電車が、新聞の散つたあとの、からりとした廣小路へかゝつた時、曾我は、瞼へ輕く血をのぼせて眠むげた風で居る魔子をわきへ置いて、熱ぼつたい口を僕の耳へ寄せた。祝盃の上げ不足な彼は、彼女を中途から家へ歸して、この機嫌で一晦日のお祓め一に出かけようと云ふのだ。月の經費をなるべく魔子に切り詰めさせて、僅かをつくつて、それを僕たちしか知らない使ひみちに融通して、一と晩をあるところで過ごして來るのを、いつか僕たちの通り言葉で、さう云はれる樣になつて居た。晦日までには未だ一週間からあ

つたが、昨日は昨日だ。——さう云ふのが、曾我の意見だつた。

『賛成！』

僕は今にも涙にぶつ破けさうな、妙な、空虚な上機嫌で、彼の意見に賛成した。今日昼と、父の忌日の御馳走だと云ふ、時刻でもない御飯を喰べた時、彼女は財布の中にたつた一枚だけ挾んであつた、熨しをした様に折り目だつたよごれた五圓紙幣を、卓子の隅から『お小遣ひ』と云つて差し出した。——それが僕の上衣のポケットへ、くちやくちやに押し揉まれたまゝ這入つて居た。僕はそこへ手をやつてみて、その湿めつぽい、石鹸の様な不気味な感觸をもつた紙片をまさぐりながら、ふと皮膚の荒んだ、不快な、ある三十女の顔を思ひ浮かべて、脂つぽいおくびを胃の奥に感じた。——

電車が雷門前でとまつた時、

『鷹子。』

と、曾我は彼の肩へ頬を凭らして、くたびれきつて寝入つて居る鷹子を、ゆすぶり起こした。さうして、『あら。』と、充血した眼を開けて、やゝうろたへ気味に、ズックの鞄をさげて、立ちかけた彼女を、

『ちよいとお待ち。』

と、呼び止めた。

『兄さんたちはこれから一寸、廻るところがあるからね。お前先きに歸つて、寝ておいで。……よく戸締りをしてな。』

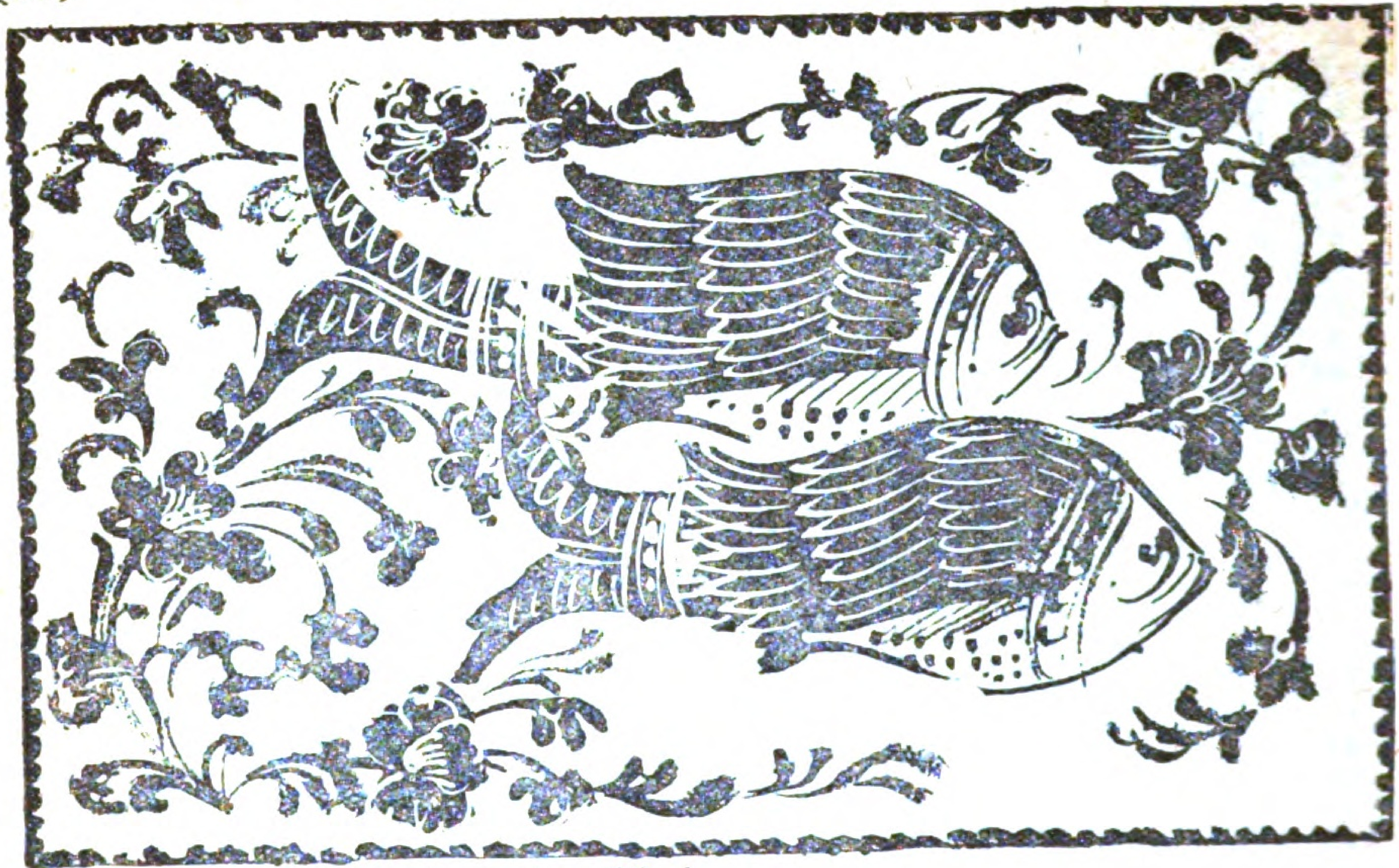
彼女はぐつたり萎えたからだを、ドア口にさゝへたまゝ、素直にうなづいた。さうして、少し跛になつたと云ふ靴でびつこを引きながら、電車を降りて行つた。

彼女の白い襟頸が、ちよい〳〵窓の下を縫つて、自動車のヘッドライトに切られて、——ためらつて、車道を横切らうとした時、窓から首を出した曾我が、追ひかける様にまた聲をかけた。

『おい！……あけがた寒むくなるから、毛布を入れて寝なよ。風邪をひくから。……』

電車がごつんとまた動き出した時、僕は彼女の仄白い姿が、電車の最早途絶えた、人気のない、暗い、薄暗い通りを、びつこを引き引き駒形の方へ歩いて行くのを見た。

——完——



裸木

「明るい人」の終篇

犬養健

一

山の鳥の減つてしまつた停車場の入口に、高木、禎三、それから松子が小さい甥や姪を連れて集つた。上田町の在でこれも保養してゐる助手と研究の打ち合せをするために高木がその汽車で發つので、あとの者は見送りに來たわけだつた。高木は都合によつては、その儘歸京するかもしれないと云つてゐた。

やがて峠の隧道を二十幾つか抜けて來た物靜かな電氣機關の列車と、平原の色褪せた薄の穗のなかを忙しく走つて來た普通の列車とが二つのプラットフォームの間に平列した。平原を來た旅客たちは降りて手拭を清水に浸してゐた。十五分の停車で、構造のちがつた双方の機關車が此處でたがひに入れ替るのだ。

子供達は煤をかぶらない、その黒光りのした電氣機關車の傍に駈けて行つた。松子は強い日を傘で除け、子供達の見張り役になつて構内の木柵へ倚りかゝつてゐた。その間禎三は高木の荷物の數なぞを調べながらも、ひとり落ち着かずにゐた。この同じ汽車で

梶田も出發すると高木から聞かされたゝめだつた。

この土地ももう十分だ。變化のない生活には倦き倦きした。しかしさて汽車へ乘つて小諸の友達のところへ立ち寄るか、それとも、もと自家の病院にゐたことのある伊香保の開業醫の家へまはるか。まだ定めてない。――梶田はこんな調子だつたと高木が云つてゐた。

それにしてもと、この三四日といふもの全く梶田に逢はなかつた禎三は大時計を仰いで見た。

「ほんとにこの汽車かしらん」

「なに。あの先生は默つてゐるんだよ」大小まぜて三つ四つあるトランクのなかに立つて、ひと纏めにしたそれらの鞄を隱しのなかで弄りながら高木は笑つてゐた。「五分以上はどうも停車場で待ちたくないと云ふのだからね。――さう。禎にも知らせずじまひか。暢氣だなあ」

梶田はしかし、高木の話よりは早めに貸自轉車に乘つて驛道をやつて來た。梶田はまるで散策でもするやうにゆつくりペダルを踏み、同じやうに荷物自轉車を走らせて來た運送店の主人と話し込んでゐた。

そして禎三のすぐ足もとに見覺えのある柳行李が抛り出された。

梶田は何か違ふ人間に見えた。禎三の豫期したとほりだつたがその變り方は禎三の想像とは異つて、普段よりも感情を激しくあらはさずに、却つてそれを押へてゐた。冷やゝかな爆發物を聯想させた。

それが梶田の好みなのだ

「おい。行先きはきまつたかね。お見送りのかたにも御挨拶をねがつてゐるんだよ。――上りか、下りか」

「うむ」

梶田は禎三の傍で、強いて笑顏を作つてゐた。

「尤もまだ十二分ある。禎にしちや大出來だ」

このやうに、高木の方がすべてくはしい經緯を知つてゐる樣子を見て、その數日のうちのあまりに大きい變化を禎三は今更はつきりと――それにしても何か腑に落ちないやうな工合に感じてゐた。梶田と連れだつてよく鐵道便の問ひ合せに來たをりの同じ改札口や、同じがらんとした三和土や、同じ時間表で動いてゐる赤帽が眼の前に揃つてゐるのだつた。……

「お歸りでございますか、梶田さん」子供達を促して、櫻子が彼に近づいた。「そろそろお引きあげだつて伺つてをりましたけれども、ついぼんやりして失禮いたしました」

「いゝえ」と梶田がごく自然に答へた。もともと堅苦しい物言ひは彼の流儀だつた。「僕だつてけふのお歸りまでぐづぐづしてゐたんです」

「何しろベルが鳴つてから改札口を跳び越えんばかりにして通るのがいゝと云ふのですからね、櫻子さん。――好き好きだなあ」

しかし梶田は松子の前で、さういふ常談には笑顔を見せたまゝ取り合はなかつた。それらはごく自然な謙遜だつた。排斥から來てゐるのか、弱味を見せまいとする負嫌ひから來てゐるのか。――しかしそのほかに、それは梶田の環境、むつかしく云へば梶田の持つ一種の品格に原因してゐるのだと禎三は思つた。いかにも適度な快い動作だつた。禎三は今さら年下の純粋な友達として梶田を視ないわけに行かなかつた。――だがその感情には、梶田が何か松子に對して稍積極的な態度に出はしまいかといふ、あれ以來の豫期の一時に除かれた淸淸しさも混つてゐた。

時刻が來て、列んだ乘客がプラットフォームに出た。ゆつくり切符を買つてゐる梶田だけが遲れた。二つの機關車はそれぞれ停車場から半町ほどさきの軌道のうへで、野天のひかりを浴びながら何度も細かく退いたり停つたりしてゐた。やがて梶田が渡橋から現はれた。梶田は高木とは反對の列車に乘つた。

「やあ、それでも時間までには極めたんだね」窓から首を出してゐた高木がすぐさま揶揄つた。「なんだ、別れ別れにしたのか」

「うむ。一所だと、第一、二等切符なんてものを買はなくちやならないからな」

事實梶田は高木の車台とちやうど對ひ合はせに平列した「上り」の三等車に乘り込んでゐた。

「なるほどこれあ考へたね」出發の前の晩方に禎三の餞別に貰つたあの太い煙管を銜へながら、高木ひとりがどういふ譯かしきりに快濶にしてゐた。「そこにゐればお見送りの方々がわざわざ兩方のプラットフォームを往つたり來たりしないでも、そら、此處から見廻しで濟むからね。これあいゝ」

「ほんたうに」松子がその三等車の窓を透して梶田に微笑んで見せた。「梶田さん、此處から不精して御免遊ばせ」

しかし高木のその思ひつきの言葉は、この場合いつもならば一人離れて梶田の傍へ行くべきなのだと考へてゐる禎三のために、偶然にも辯解してくれたやうなものだつた。

「一時間と少しか。――ちやうど上田にゐる頃に二百二十日だなどといふのは感心しないなあ」まだ發車にもならない窓先きで、高木はもう旅びとらしい顧慮を洩らしてゐた。「一番このなかで誰が貧乏くじを引くのだらう。つまり東京へ早く歸るかといふのさ。ひとつ、ゆつくり構へてゐる避暑人種を排斥しやうぢやないか。――梶田君か僕か。僕といふところだな、先着は」

「いゝえ、わたくしかも知れませんわ」

禎三と竝んだ松子が釣り込まれて子供らしく云つた。

「それあ正男さんの幼稚園をどうとか云ふんぢやありませんか？　それならばやはり僕の方が早いさ」

「いゝえそのほかに別の用で」──その松子の聲を聞きとりながら、後ろの車台の梶田が凝つと眼を外らせてゐた。「もしかすると福島さんと御一所になるかも知れませんわ」

「君はまた何で歸るの」と高木が禎三へ振り向いた。「淑子さんがあとで心細かないか」

「伯父の法事でね。だからすぐ引つ返して來るんですよ」依然としてあまりに表情のない梶田に注意を奪はれながら、禎三が答へた。「伯父つて、つまり此處の家を貸してくれた伯母のです。十七回忌ですか。──家を借りた義理といふと現金だけれども、あの伯母はわれわれには普段からよくしてくれるのでね」

「高木さん」不意に梶田が後ろの窓から乗り出して遮つた。「君は上田にどのくらゐ居るの」

「僕かね」高木はまるで隣りの家へ話しかけるやうに半身をその「上野行」へ振つた。「まあ四日と思つてくれ給へ。いや五日かな。僕はこれで、ちよつと冒險のヒントを見つけたのでね。──どうだい、東京へ歸つたら奢つてくれないか」

そこではじめて高木の特別な上機嫌の謂はれが禎三には分つたわけだつた。

「それあ通に答つて貰ふんだなあ」梶田は、高木のその語氣に溢れた様子が殊更に羨しいといふ顔を見せた。「五日と──ぢやあひよつとすると、伊香保が案外つまらなかつたら押しかけるかも知れませんよ」

「上田へかい？　しかし君」高木はちよつと惘いた様子だつた。「別に見るところもない土地だぜ。僕はちつとも構はないがね」

「いゝんですよ。──その昔風の本陣といふやつ、君の話だと何だかよさゝうぢやありませんか。──僕はどうせぶらぶらして、ノオトの殘りでも少しづつ寫してゐれあいゝんですよ」

その口振りから推して、梶田には此の土地を引きあげるといふほかにさし當りの目的のないことを禎三は直感した。だがそれ以上に、彼れにだけ感ぜられるその語調の急な變化から、蜻蛉の多い井戸端で云つた梶田のあの「打ち明けるべき一人」といふのが高木ではないのかと、ふと思ひついた。さうか、高木だつたのだなと禎三は考へてゐた。

「なんだ。上田でやるくらゐならニコルの家で續ければいゝのに」高木はどうも腑に落ちない様子だつた。「あれあ君、銀杏のいゝ部屋ぢやないか」

「ほんたうに」と松子が無邪氣に云ひ添へた。「梶田さんさう遊ばしたら」

「いゝや平唐との差しむかひはもう澤山だ！」

禎三はいつの間にか自分とすれすれに並んでゐた松子から離れて、窓先きをあちこち無意味に歩き廻つてゐた。——調子のいゝ挨拶は止してくれ！ かう今の梶田の返事が彼の耳には響いた。努めてはゐるものの梶田の抑制はやはり二十歳代の若々しい抑制だつた。梶田はあゝいふ事のあつた後に、松子と一所に東京へ歸るといふ自分の遣り口を悔つてゐるのだと、禎三は思つてゐた。しかし彼にしても松子と最初から打ち合はせをしたわけではなかつた。姉らしい姉の幹子からそれを頼まれた時に、彼には別に斷る何の理由もなかつたのだ。いまでもそれは自分の勝手だ。彼は強いてから考へようとしてゐた。

「おい、梶田君から——」と眼の前の高木が呼びかけて、封筒を禎三に取り次いだ。インキのいろが落ち着いてゐて、けふ書いたといふ手跡ではなかつた。

「あとで讀んで下さい」

と、これはまた走り書きの鉛筆でいま記した事は明らかだつた。禎三は思はず顔を擧げた。しかし梶田はちやうど立ち上つて網棚の手荷物を始末してゐるところだつた。乘客がたて込んで來たのだ。

發車の早い「下り」の鈴が鳴つた。乘客のごたごたした中を縫つて松子はもう一度梶田に挨拶してゐた。松子は背伸びしながら、梶田の見えるその場所を譲らうとして何度か禎三へ振り返つてゐた。その松子のためといふ具合で、禎三は一瞬間梶田と眼を合せた。習慣的に彼は何か聲をかけやうとした。しかし梶田はこれを故意に外らせた。

「皆さまにどうかよろしく仰有つて」松子が耳の傍で云つてゐた。

「よろしく——」

禎三がそれを眞似た。

「ぢやあ、例の書いたものゝとほりに、萬事やつて貰ひ給へ」と八重子に就て注意したのは此方の列車の高木だつた。たゞ、特別に馬鹿な事さへしなければ大丈夫だよ」

そして梶田の方の郵便車が構内の信號機を通り過ぎないうちに、今度は高木の下り列車がプラットフォームの端で大きく迂回したから、潮の土堤にゆつくり隱れて行つた。

二

何か驛夫に呼びたてられて松子が荷物受付口へ行つてゐる間に、禎三は人のゐなくなつた待合室のベンチに腰をおろして梶田の手紙を開い

いた。

「──君はあの晩の君の話を、さう重大なものでなかつたやうに見做さうとして居られます。君のその後の静かな態度で、僕にはそれがよく分ります。その方がまつたく君らしく、また君にとつて賢い生活法なのでせう」

こんな風に堀田は几帳面な、そして几帳面なところに却つて強い心持のあらはれてゐる、さういふ細かい文字で書いてゐた。

「そして先夜の君の考へ方から推せば、君のさういふ態度は賢いうへに当然なのかも知れません。しかし僕にとつてはあの晩の話は重大なのです。僕は若いのです。僕は生活の波瀾を避けないのです。若いといふことを僕は固執するのです。さういふ自覚を持つてゐる僕があの事柄に十分な重要さを置くのは当り前です。だから君と僕とはまるで態度が違ふのです。君にとつては一晩の酒のうへの座談にしてしまつた方が賢いといふあの出来事も、僕にとつてはさうは行かないのです。だからあれに就いて君とお話してももう何もならないのです。あれ以来町で君を遠くに見かけても、別にお傍へ行かうとしなかつたのはそのためです」

「しかし僕は出来るだけ潔癖に振舞ふつもりです。かういふ好みもやはり君からの影響だと思ふと正直のところ少し反抗したいのですが、しかし今はまだそれが僕の身に附いてゐる限り、僕は素直に現在の僕らしくその潔癖に従ふつもりです。ですから、君が松子さんとこれまでどほり往き来したり話し合つたりされても、僕は出来るだけ適当に、冷やかにそれを傍観してお見せするつもりです。僕にはそれが出来る筈です」

「しかしかう云つても、あの晩の話をあれきり僕が断念したのだと思はれては間違ひです。僕はそんなに弱くはありません。しかし、この話はもう止しませう──」

「それから東京に帰つたあとで、二番目の妹にはあの話を少し、輪郭だけ、するかも知れません。今まで黙つてゐるといふ事は、これまでも恋愛の問題その他で僕のことを比較的細かく心配してくれてゐる妹に、あとで少し工合がわるいのです。これは一寸お断りして置きます」

「御大切に。病気のなほつた八重ちやんによろしく」……

往来から捜しに来た雪谷の長男に呼び立てられて、禎三ははじめて待合室を出た。その帰り途に高木老人にもあらためて礼を云ひたいために、彼は松子と一所になる手筈だつた。それに彼は茅子にも一寸会つて置きたかつた。

「どこへ行つていらつしやいましたの」
松子は旅人向きの旅館の多い停車場前の廣場で彼を待つてゐた。
「もうさきにお歸りになつたのかと思ひましたわ」
「それよりか、あなたこそどこへいらしつたんです」
「あゝわたくしこそね」松子は笑つて片手の風呂敷包みを擧げて見せた。「梶田さんがこれを置いてらしつたもので、あちらへ呼ばれて參りましたの。お名前がついてないので赤帽が迷つてゐましたわ」
そのとほり松子は、彼にいま手紙を殘して行つたばかりの梶田の持ち物を大事に抱へてゐるのだつた。
「なんだ、早速忘れ物ですか。暢氣者だからなあ」
かう云つたものゝ、彼には松子と調子よく梶田の噂をするのが何か變なものだつた。「暢氣者」といふ形容も今のこの場合空々しかつた。
「それでも結局は梶田のものと分つたんですね」
「えゝ、それが梶田さんには少しわるかつたのですけれども」と松子がやはり笑ひながら單純に云つてゐた。「わたくしがなかなか開けて見ましたの。どうせ今度お目にかゝつた時にお詫びしますわ」
その瞬間祐三はその包みに對する妙な嫌惡を打ち消すことが出來なかつた。
「さうしたらなかなか可愛らしいものが入つてゐましたわ」祐三とは反對に、松子はなぜか不愉快[illegible]つてゐた。「お土産にせうね。羽二重の人形で出來てゐる鉛筆しなんぞか」
「似合はないなあ」
「ほんたうに」松子は祐三の言葉を一番素直に解つてゐた。「でも、折角のいゝお兄さんのお土産を、どういふ風にいたしませうね。あなたに預つていたゞきませうか」
「さうですね――」
祐三はあきらかに當惑してゐた。
「それともお手紙で問ひ合せて下さいますか。梶田さんがすぐにお入用だといけませんわ」
「えゝ」彼は自分でもよく判るほどに曖昧な返事をした。「芳子にでも聞かせて置きませう。僕はすつかり無精で――」
子供達に取り卷かれて、二人はその時新らしい舗道を往きとは違つて眞直ぐに高木の家の方角へ歩いてゐた。だが松子は顔を擧げて、しばらく彼を注視してゐた。
「どうかなさいましたの」
「どうしてゞすか」
「だつて、さつき停車場でもちよつとそんな風に思ひましたわ」
「松子さんなかなか鋭敏だなあ」

禎三は不自然に高く笑つて紛らせた。

「まあ鋭敏だなんて、はじめてゞございますわ」松子はしかしさう云はれると浮き浮きした血色を見せてゐた。「それは、わたくしだつてそのくらゐ分りましたわ」

「停車場でね。――梶田の様子がですか」

口に出してすぐに禎三はその云ひ過ぎを後悔した。

「いゝえ、梶田さんはよく存じませんもの。それよりかあなたが少し――いつもより變でいらつしやいましたわ。一體どうなさいましたの！」

さうさう、梶田はすべて「思はせ振り」な態度を立派に排して見せると、さつきの手紙で先手を打つて來てゐたつけ、禎三はそんな事をぼんやり考へてゐた。

「えゝ、少し云ひ合ひをしたのです」

「議論を遊ばしたの。――何の議論でいらつしやるでせう？」

松子は首をかしげた。

「ちつと松子さんにはお當てになりにくい議論です」

「六つかしい事でせう。さう云へば高木さんともこの間議論はしたさうね。――おやあ生意氣に當てるのなんぞあきらめませう」

禎三はこのやうに快活に振舞ふ松子を見たことがなかつた。道の兩側に煤けた鐵道官舎の家並が續いて、その裏にはまた線路が遠く追分、小路の方に走つてゐた。そしてかういふ露路を歩くと殊更官舎風に目立つて見える子供達は、活潑に駈けまはつて叔母からもう一町ほども離れてゐた。しかし松子の單純な若々しさも子供達に劣らなかつた。松子は十六七の娘のやうに足を伸ばしきつたといふ様子で、自分のする事に悪意を持つ慣れのない人間の傍にゐる氣輕さを少しも隱さうとしなかつた。

「なんだ。高木さんと議論した事まで知れてゐるんですか。困りましたね」禎三もその松子の様子に惹き込まれてゐた。「でも高木さんは閉口してゐたでせう。僕は隨分勝手なことを喋つたのだから」

「いゝえ、何だか喜んでいらつしやいましたわ。なにか高木さんをお褒めになりましたの？　あなたを話しいゝ方だつて、姉に感心していらつしやいましたわ」

「僕が話しいゝか知らん。親類の者にはどうも話せない人間といふ事にされてゐるのだけれども」

「いゝえ、それはお話しいゝと思ひますわ」

「大變また保證して下さるんですね」

「えゝ保證しますとも」

「なぜですか」

「なぜでも、——それは、いたしますわ」

殆んど二人きりの電車の醉ひた雰圍氣のうへで、彼は思はず松子を振り返つた。松子は窓の上、大き過ぎるいつもの眼を彼に注いでゐた。豫期以上に動搖してゐて、苦笑に似た微笑だつた。順三は不意に、あまりにも自分に近過ぎる松子を見たやうに思つた。しかしその體つきを松子は、正面の意地わるい西日のためなのだといふ風に裝つてゐた。

「ちやあ僕が話しいゝといふ事にして」順三が常識まじりに、努めて平靜に云つた「あの晩には、さうさう、松子さんにも若しかすると當てはまるやうな話が出たんですよ」

「どなたがお出しになりましたの」

「僕がです。餘計なことをしたものでせう?」

「さあ、事柄によりますわ」松子は笑つて子供らしい上眼を使つた。

「どんな事でせう」

「どんなつて、あなたのお留守中にいつぞや、幹子さんともお話したやうな事柄だけれども」

「ああ、それならば姉から聞きましたわ」

「なかなか早い方ですね。聞いてどうお思ひになつたかなあ」

「それは、有り難いと思ひましたわ」前方のひと處を視つめてゐる松子が語氣を強めた「嫌味ですわ」

「たゞ有難い、だけですか。——まるで試驗のやうでせう?」

「えゝ」松子はまた緩かに笑つて見せた「ですから、福島さんにはせいぜい油斷すまいと思ひましたわ。あんなにそおつと研究していらつしやるのですもの」

「研究?」順三が一寸困つた「それあ普段お噂するからですよ」

「それも芳子さんから伺ひましたわ」

「ちやあ松子さんこそ」順三は知らず知らず本性から喜ばしい聲を立てた「いやいや知つていらつしやるのだ。用心しよう!」

「知つてゐますとも」

「一體あなたは何でも呑み込んでいらつしやるんぢやありませんか。それだのになぜ、始終つまらない議論ばかりなさるんですかね」故意と氣輕な口調だつたが、それにしてもこのやうな言葉を現在松子に向ける機會のある事を、順三は今さら不思議に思ふのだつた「なぜ、そんなに自分の性質を無駄にしようとなさるんです。僕には分らないなあ」

しかし順三のこんな唐突な言葉を、松子は急には呑み込めない樣子だつた。

「僕が高木さんと議論したといふのも、やはりさういふ風な事柄なん

ですよ。つまり——意志しない人は結局半分しか生活してゐないのだつて、僕が云つたんですよ」

「何をしない人?」

「意志しない人が——」

「それがわたくしに當てはまりますの」

松子が低い、しつかりした聲で尋ねた。

「當てはまりますとも。亂暴な事を云つてお憤りにならないでせうね」

「憤りはいたしませんわ。——え丶、さうね、ちよつと當てはまりますわ」

「そら御覽なさい」道の工合で向ひ風になりながら、後れ毛をうるささうに撫つてゐる松子に、禎三は熱心に話しかけた。「僕はちつとも貶してゐるんぢやありませんよ。でも、傍から見てゐれば今の松子さんで十分なんです。始終さうお噂してゐるんですよ。でも、傍から見て十分だといふのはやつぱり他人の立場の話ですからね。——松子さん自身から云へば、まだまだ松子さんらしい幸福の餘地が殘つてゐるやうな氣がして仕樣がないのです。誰だつてそれを歯痒いと思ひますよ」

「そんな事が!」昂奮を抑へようとして、松子は知らず知らず表情を硬くしてゐた。「わたくしなんぞ、どうせさう特別に仕合せにはなりませんわ」

「どうしてそれが分るんですか」禎三は憤つたやうに云つた。「さきの事がちやんと分るのは偉いなあ」

「だつて、人なかに自分からどんどん入つて行く勇氣なんぞ、わたくしにはありませんもの。——またそれでもいゝのですわ」

「そんな勇氣のことを云つちやゐませんよ」禎三がやはり氣短かに遮つた。「松子さんは實際の事柄をそつちのけにして、話してゐらつしやるのだからなあ」

「實際の事柄つて、何でせう」

禎三は默つた。

「分りましたわ」

躊躇ひながら松子が云つた。

「それも姉がお喋りしましたのね」

「え丶少し。北京のことや、それから巴里の事を。——僕がけふ頑強なのはそのためかも知れませんよ」

「あんな事、もう思ひ出したくありませんわ」松子は禎三に嘗て見せた事のない、自身を嘲けるやうな微笑を口もとに浮べてゐた。「あゝいふ事をいちいち氣にしてゐたら、わたくしなんぞ限りがありませんわ。——わたくしはわたくしなりに引つ込んでゐれば氣樂ですわ。——結

島さんが心配して下さるほどの事もありませんわ。――あんな事、いろいろの方がたゞ父への義理で次つぎに持つていらしつたゞけの話ですもの」

「さうですか。それならば別に何でもなかつたわけですね」

祐三の言葉には多少の皮肉が交つてゐた。しかし彼は松子の表情から、やはり何か隠してゐるのだと察した。

「さうでしたか。僕はまた――松子さんのつまらない引つ込み思案のために何かいゝ縁談が止めになつたやうに、幹子さんから伺つたものだから」

「まあ、姉はいろいろの事をお喋りしましたのね」松子は流石にちよつと不快な顔を見せた。「でも、ひとの悪口を云はないのと、その方を褒めたのとはまるつきり違ひますわ。さうでせう？――姉は意味も分らないのに、本當にいけませんのね」

「それあお姉さんがいけないのぢやないんですよ」祐三は困つてそんな風に執り成した。「僕が餘計な事をしたんですよ」

「そんな事はありませんわ」松子がはつきり打ち消した。「えゝ姉はあの時分、わたくしを少し疑つて居ましたわ。それで時々鎌をかけるやうた事を云つたりして」

「どんな事をですか」

松子は顔を赧らめて躊躇した。

「つまりわたくしが何か――かう、嫁かうと思ふ方を自分で極めてゞもゐるやうに思つて居たやうですわ」

二人は黙つた。うねつた道筋を曲ると急に眼界の開けた草原に出て、子供達はそこを通行したらしかつた。二人はやはり黙つてその草原を横切つた。だが「嫁かうと思ふ方を自分で極めてゐた」などといふ言葉から受ける漠然とした嫉妬のために、彼はかへつて急に冷靜に戻つて行つた。ひとりで力んでゐる自分が滑稽なものに思はれて興醒めして來た。叔母の遅れたのを訝つたのだらう、子供達は突き當りの土堤に腰を下して待つてゐた。彼等は松子を見ると合圖した。小さく見える合圖だつた。

「あゝあ。大變な議論をしましたね」祐三は土堤のうしろに廻つた町の遠景を見透しながら、稍々氣不味い笑顔を向けた。「松子さんと僕とは初めつから、まるで考へ方が違つてゐるんですよ。それに氣がつかなかつたのは馬鹿だつたなあ」

「さあ、左うでございませうか」

松子は一瞬間、苦痛を押し隠すやうな顔つきをした。

「さうぢやありませんか。何故つて、僕は自然の成り行きといふものをちつとも信仰してゐないのに、松子さんはそれをひどく信仰してい

らつしやるんぢやありませんか。まるで生れつきのやうに——」

「わたくしだつて憎んでさうしてゐる譯ぢやありませんわ」松子は又もや妙にそぐはない、取り亂した物言ひで繭三を遮つた。「本當はわたくしは我儘なのですわ。注文が多過ぎるかも知れませんわ。——そんなに成りに行きにばかりまかせてゐるやうに見えますかしら。——でも、それを誰方も信用して下さらないのは無理もありませんわ。このとほり口下手で、家の誰にも云はないのですから」

「なぜまた仰有らないんです。幹子さんでも兼輔さんでも全く云ひいい方ぢやありませんか」

口とは全く反對の事を——松子の態度を——淡く望んでゐた事のあつたゝめに、繭三は強いてさう云つてゐた。

「そんな事わたくしには出來ませんわ」

「どうして出來ないのです」

「どうも——出來ませんわ」

「それあむしろ臆病だ」

「森島さんはわたくしを虐めていらつしやるんです」

ほとんど惡意に近い眼差を松子が向けた。

「どうしてゞす。僕だつて冗談に出過ぎた事をしてゐるんぢやありませんよ」

「そのくらゐ分つて居りますわ」繭三が氣がつくと松子は崩れた膝を立て、泣き出しさうな表情を向ひ風に曝してゐた。「でも、森島さんの仰有るやうにしたら、わたくしなんぞ樂になくつて——それこそ重荷になつて。どうなることでせう！」

松子の云ふ意味が繭三にはよく呑み込めなかつた。だが知らず知らず二人とも早足になつてゐて、子供達のゐる土堤にもう近づいてしまつた。そして子供達のなかに入れば無論差し向ひの時のやうには話が出來ないのだつた。さうすれば、松子はまた昨日のとほりの距離を持つた松子になつてしまふだらう。——

「それあどういふ意味なんですか」

足袋の汚れるのも構はず雜草の中を足早に突つ切つてゐる松子へ、彼は追ふやうにして從いて行つた。

「この徑からもう少し廻つて行きませう！」

「もうほんとに止めにいたしませう。本當に」

まるで繭三に恐怖でも感じてゐるかのやうに、松子は振り返りもせずに拒むのだつた。

「えゝ、大變いゝ事を澤山伺ひました。でも、出來ないものを出來ると仰有つたつて、それは無理でございますわ。わたくしの意氣地のないのは前から御存じぢやございませんか」

そして松子は自分に懷いてゐる子供達のなかに交つてしまつた。

土堤を越したすぐ後ろの白い川底のやうな道は、いつぞや高木がはじめて八重子を診察した夕方に自轉車を走らせた、あの舊縣道であつた。そして此處でも取り替へ工事のすべて終つた電信線が靜かに鈍く光つてゐた。松子と祐三とはその道を再び子供達に取り卷かれて歸つて行つた。

少し後れて歩きながら、祐三は松子が何か勘違ひしてゐるのだと考へてゐた。しかし彼が正男の相手になつて、手を引いたり面白い話をしかけたりしてやつてゐると、松子はそれが悅ばしいのだといふ樣子を見せて、正男の笑ふたびに柔らいだ笑顏で振り返つてゐた。が、先刻の話の續きに就いては、やはりその氣配さへ見せなかつた。

祐三だけが「隣り家」へ廻つて、高木夫人に挨拶して出て來た時には、松子は井戸端で子供達と足を洗つてゐた。水音が起つてほかの響を消してゐたためもあつたが、俯いた松子は泰然として少しも祐三に氣がつかなかつた。平生に似合はず客に對して迂闊だつた。素足の松子に遠慮して彼が植込みの外で待つてゐると、三人の足へ注がれた餘り水が土管をとほして溝の工合の不完全な往來へにじみ出るのだつた。彼はその揃つてゆく形を手持不沙汰に眺めながら、賴光の話に就いては梶田はいづれ直接に意見を云ふでせうと、幹子に報告しようと考へてゐた。實際梶田は彼にさう云つたのだから——。

「由紀ちやん。由紀ちやん」

から呼んで、幹子が偶然に勝手口から顏を出した。そして彼女は正面の祐三を眼ざとく認めた。

「おや、森島さんもう御用がお濟みになりましたの」

幹子は透し見して驚いた樣子だつた。

「松子さん。お通しもしないで、あなた一體なにぼんやりしてゐるの」

「まあ。ちつとも知りませんで」

松子が何事もなかつたやうに、姉の前で控へ目に彼を誘つてゐた。

三

その藥局の表口はもう閉されて、「來年は七月一日より」と貼札に記した文字が硝子戸の裏からも透いて見えた。祐三はその硝子戸を脊にして、娘の藥の調合の出來る間、荷造りを眺めてゐる若い店員と話し込んでゐた。すつかり空になつた白塗の脊高い商品棚に取り卷かれたその床には、石鹸、化粧品、運動靴、靴下、ラケットと、避暑地向きの洋品が種類分けもなく散かつて、祐三はうつかり足も動かせない工合だつた。

彼はもう三十分も其處にゐた。藥劑師との約束の時間よりも早く來てゐた。窓にたつた白瀬の商品棚と足元の石鹸の塊から發つ強い匂とは彼に大掃除のをりの記憶か何かを聯想させた。やつと今しがた藥劑師は散步から歸つて來たのだ。表向きは既に閉店したので藥劑師もいゝ、のうのうと山の空氣を吸ひに出かけた譯だつた。それでも、松露草を摘みなぞして來た藥劑師は顧三が大分待つたと聞いて氣の毒がつてゐるたつどうです、お孃さんに」と早速花束を空想に差し出したりした。

だが顧三はその間の三十分くらゐ、少しも退屈しなかつた。——彼には其處で時間をつぶす、別の目的があつた。

別の目的を持つた彼は[illegible]の短い用具を捕まへて、[illegible]つぎつぎに雜談の種を持ち出してゐた。が、その間も彼は表の道の足音や硝子戸を透して見える人影に絶えず鋭い注意を向けてゐた。散步に行つた藥劑師ではなく、彼はやはり松子を豫期してゐた。午後の日課を受けた松子が硝子戸を開けて立ち寄るのを凝つと待つてゐた。

この藥局に松子が——恐らく松子[illegible]が今日も來ると聞いたのは前日の事だつた。前の日に彼は、投藥口に松子の末の兒の名前で調劑した藥瓶の乘つてゐるのを見つけた。「赤ちやんがわるいのですか」と彼が意外に思つて尋ねた。さう云へば停車場の歸りに寄つた折に赤ん坊はいつもよりも不機嫌だつたやうにも思はれた。「いゝえ、それあ[illegible]ですよ」藥劑師が小さな窓から說明した。「石炭質の錠劑です。骨を丈夫にするのです、明日までに、あなたの方のお藥と一所に作つて置けばいゝんですよ。外國へ行つて來た奧さんはよくお使ひになりますた。——さうさう、その奧さんがあなたの事を訊ねていらつしやいましたつけ」

そして藥劑師の話だと、その「奧さん」は顧三がやはり昨日のやうに立ち寄るかを訊ねてゐたと云ふのだ。——すると、顧三と藥劑師との立ち話を聞いてゐたボオイが横合ひからいやあれは奧さんではない、奧さんの妹だと云ひ出した。二人はしばらく默つてゐた。しかし二人とも結局は小さな投藥口を隔てゝの印象で、これだけでは顧三にもはつきりした判斷が下せなかつた。

「そんなにあの御姉妹はよく似ていらつしやるのでしたかね」

不得要領の藥劑師が彼に訊ねてゐた。

「えゝ、よく似てゐます」

顧三は答へたきりだつた。

今、商品棚の傍で[illegible]のポケットから取り[illegible]した錠劑の、[illegible]の說明を聞きなどしながら、自分の眼と耳とがまるで「待ち伏せ」の場合に近いほどに感覺を働かせてゐるのに氣がついてゐた。内氣な松子がさういふ事を人に尋ねる。……いや、どうしても有りさうにない事だつ

た！　しかしその有りさうにないといふ希望までが妙に力を帯びて彼をしつかり囚へてゐた。松子は依然約束の日取りどほり訪ねて来なかつた。そのために一層、松子の其後の様子を眼のあたり見たいといふ龍三の氣持は或る加速度を作つて強まつてゐた。あの日彼の云つた事を松子がどう解つたか。どう誤解したか。松子はやはり彼と一所に歸京するのか、それを止めたのか。──

　彼はこのやうな現在の自分をどう扱つていゝか分らなかつた。たしかにそれは一種の發熱のやうな状態だつた。距離感の顛倒に立つやうに松子の體質にとつて何かの輔けになり得る人間は自分一人なのだ、ほかに誰もゐない、確かにゐない、こんな風に考へる癖が今彼には知らず知らず誇張されて附き纏つてゐた。だがこの發熱のやうな状態を癒す方法としては、さし當り松子に出逢つて其後の様子をはつきり觀察するより他にないやうに、彼には思はれた。まして松子は龍三の言葉を何か解り違へた儘になつてゐるではないか。

　たゞの平凡な空地になつてしまつた季節外れのテニスコートの前を、何度か他所の母親が他所の子供を連れて通り過ぎた。秘密の待ち合はせに似た心持がその度びに龍三を悩しませた。餘人にではなく、松子にかういふ氣持を現在抱いてゐる事實に、彼は驚いた。しかしその恐怖はまた歡びに、生活の新らしい歡びに不思議にもよく似通つてゐた。一體このやうな自分をどう扱つたらいゝのだらう！　しまひに彼は、何度か若い局員との無駄話を不當に切り上げて歸らうとした。迷つた。しかし結局郵便局のその局員は八重子の家の隣から市内の店といふ店に取り持つて、更に佛蘭西製だといふラケットをわざわざ箱から出して彼に買ふ事を奨めたりした。

「どうです。亞米利加ものと違つてテニスを楽しむやうに出來てゐるんですよ。この振り工合と來たら──ひとつ振つて御覧なさい」

「なるほど」

　そして彼は又ずるずるに腰を据ゑるのだつた。

「なるほど。ゴツゴツと太くなくつて、やつぱり佛蘭西らしいところがあるな」

「一局じまひで御引したら、この間うち大概出てしまひましたよ。どうです一本。──高木先生も買はれましたぜ」

「高木さんが？」彼は高木と夜更けまで喋つた晩を懐しく想ひ返してゐた。「だつて出來やしないぢやないか、あの身體で」

「誰つて運動をするといふ想像だけでもわるくないのでせう。──隣生命館の事務所だけあります。立派な室内運動場が出來て、あすこはいゝ運動熱は盛んですからな」

話のうちに龍三は、こゝの郵便局員が特に高木に對して或る偏見を抱つ

てゐる樣子を知つて行つた。そして彼は、はじめは左程に思はれなくとも段々人に親しみを持たせる高木の人柄を、頼もしいものに思つてゐた。――その時だつた。何の豫感もなく扉が開いて幹子が入つて來た。昨日とほゞ同じ時刻だつた。

「いゝ折にお目にかゝれました」

と、幹子は龍三を認めると、近づきながら頬笑んで云つた。龍三は一方ほつとした。やはり昨日來たのは幹子だつたのだと直感した。

「あとでお宅まであがらうかとも思つてをりましたけれども、丁度いい折でございました」

幹子のつゝましい語調には、夙うに龍三の來てゐるのを豫期したやうな響きがあつた。だがすべて開け放しにしたこの物言ひは、今の瞬間まで松子をばかり一人極めに心待ちしてゐた彼には十分手痛かつた。彼はまるで幹子が用心深く松子を押し留めて、その代りに自身で出かけて來た證據を見たかのやうな衝動を受けた。

投藥口に顔を並べながら、彼はつとめて他の話題に紛らせてゐた。

「もう此處も縮るさうですから、せいぜい藥を仕込んで置かうと思つて――」

「どちらさんでも同じ事でございますのね。たうとう本當に、ひと夏經つてしまひました」

「そろそろ此處は赤ちやんには冷え過ぎはしませんか」

「でも由紀子もやはり生れたてに瑞西で育てた事がありますから」

「やつぱり彼地はこんな氣候なんですか」

「えゝ、そつくりと云つていゝくらゐ。――それに東京ですと、やはり婦人の躾と育て方があまり違ひますのでね。出來ることなら此處でゆつくりやつて行きたいと思ふものですから。――いろいろ面倒だものでございますね」

ふと龍三は、幹子がどうも平常の儘の幹子でないことを感じてゐた。平常の幹子は同じやうに穏やかではあるが、もつと社交馴れて或る禮儀を保つてゐた。ところが今幹子は續けさまに開け放した物言ひで親しげに龍三へ近寄らうとしてゐた。そこに何か原因がありさうだつた。

果して、各各の調劑をやがて受け取つて二人が寂れた往來に出た時に、幹子は前からそれを考へてゐたやうに切り出した。

「少し御一所にその邊まで參りませうか」

或る不安から龍三が町角に立つた儘黙つてゐると、幹子はもう一度附け足した。

「それから後でお宅へ廻るやうにいたしませう。――與倉は、昨日濱田さんからお便りを戴いたのです」

ああ、さうだつたか、と瑞三は思つた。小春日和に似た頭上からの日光が彼の膝に浸み透らうとしてゐた。そして彼は、決心したやうに、幹子の云ふなりに表通りを横切つた。

「恐れ入ります」

と幹子が彼のすぐ横で云つてゐた。まるで大切な事柄に就ての礼の言葉のやうだつた。して見ればやはり瑞三はたゞ「御一所に歩き」に誘はれたのではなかつたか！　二人は軽便鉄道の踏切を例の「狗溜り」の方へ越して、垣根もない田園風な別荘の両側に続いてゐる原地に出て行つたが、何か云ひ悪い用事を荷物のやうに背負つてゐる窮屈さが、しばらく双方の間に蟠まつてゐた。

「ねえ森島さん。梶田さんはなにかお気持をわるくなすつたのではないでせうか」

雑木をとほしてその辺の、軒並みに雨戸を締めた別荘の間取りを主婦らしく眺めながら、幹子が先づ口を切つた。

「一體どんな事を伺ひに来たんです」

東京の郊外の分譲地のやうに遥くまで画面に拓かれた、人通りのない道を歩きながら、彼は先刻よりは落ち着きを取り戻してゐた。

「あなたには別に気をわるくする訳もないでせう」

「さうでございませうか。――あゝいふ詳しい方たちに縁談の御相談なんぞを持ちかけて、それはわたくしもわるかつたのですけれども――梶田さんはそんな事、責任のある事柄なんぞ出来ないつて、お怒りになつたんです。その時の云ひ方が何だか」

幹子は当惑した面持だつた。

「怒つた調子なんですか」

「えゝ」

「でもあなたには怒る訳はれがないぢやありませんか」

「それはさうですけれども」

「僕には見当がついてゐるんです」一寸躊躇した後に瑞三が云つた。

「梶田は僕に怒つてゐるのです」

幹子は何か解りかけて来たといふ表情で彼を見据ゑてゐた。

「さうでせうか。だつてそれはまた別のお話ぢやございませんか」

「別の話ぢやないんです」

結局縁談で断れる事だ。高木からか他からか。第一梶田自身が打ち明けるかも知れないのだ。こんな風に彼は考へてゐた。

「梶田はね――すつかり云ひませうか――松子さんを嫌ひなのぢやないのです」

「まあ。どうしてまた」幹子はまつたく驚いた様子だつた。「だつて第一妹をさう御存知でもないぢやございませんの」

「僕の話で段々好きになつたといふんです」

一度昂奮するともう後に戻れない祐三が強ひ被せるやうに聞かせた。

「それを、僕が賛成しなかつたもので結局僕にはかなり怒つてゐるんですよ」

　幹子は返答に困つたやうに、默つて歩いてゐた。二百二十日に近い小雨が度び度び夜のうちにあるらしく、路端の楓や四手の濕つぽい葉はその四五日の間に何となく色づき出してゐた。

「森島さんがあまり妹をお褒めになり過ぎるのですわ」

　しばらくして幹子が獨り言のやうに云つた。

「さうでせうか」

「さうですとも。妹にも一體それがいゝ事はございませんわ」

「何故です」

「あなたに——どう云つたら上手く申しあげられるでせう——つまり妹は、少しあなたのお考にお頼りし過ぎるのですわ」

　それは輕くも重くも解れる言葉だつた。いや重く解れば非常な重量を加へて來る言葉だつた。今度は祐三が默つた。今しがた幹子が默つたよりもずつと長い間默つた。

「こんな不躾な言ひ方をして、それこそお氣持がわるいでございませうね」彼の様子を見て悧巧な幹子がすぐに取りなした。「でも、あなた方ですからこんな事を申しあげられるのですわ。あなたたの堀田さんだの——北京のお附き合ひなんぞを考へるとかうも反對なものかと思ひますわ」

　一瞬間祐三は、それが今日は有りの儘を云つてくれといふ世馴れた諷刺ではないのかと思つた。しかし幹子の何か感動した表情を見てとると、彼はその邪推を打ち消してゐた。

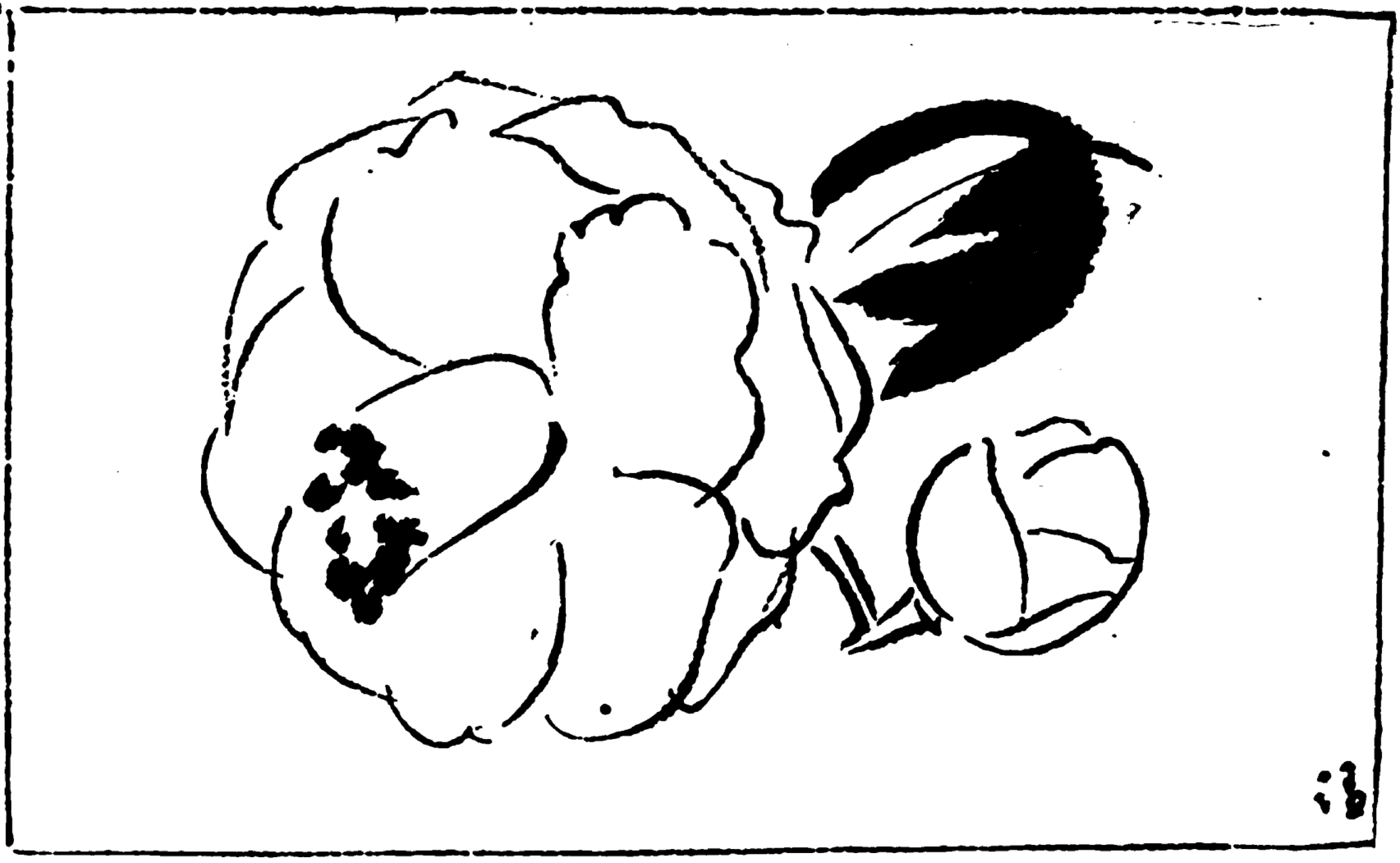
「わたくしの申し上げる意味が分つて下さいますかしら」

「えゝ分ります」

「お氣に障つてはいらつしやいませんの」

「そんな事ありません」

「おやあ、ほんたうにいゝ折でございました！」幹子が朗らかなと云つてもいゝ聲で心から繰り返してゐた。「この三四日、森島さんに一度ゆつくりお話が出來たらと思つてをりましたが」（未完）



關ヶ原後日物語

近松秋江

登場人物

島友勝(二十五六歳)
島保勝(友勝の弟、二十二三歳)
かぢ(兄弟の母、亡勝猛――左近――の妻、五十歳前後)
德川家康。
家康の家來、獄吏など、
その他百姓の男女。

第一幕　一場

美濃と近江との國境にある、人里遠き山中。
慶長十五年頃の九月中旬。深山幽谷の趣よろしく、滿山の秋色まさに闌にして、かすかに聞ゆる溪流の響もいと物寂びたり。四方を取り圍みたる峰又峰の間から齊く晴れたる秋の空澄みて見ゆ。さながら太古の如き閑寂の中に、時々枝から枝にわたる幽禽の啼く聲がする。

島左勝の新助、弟信勝の左内、いづれも髷落せる姿にて、ところ〴〵縫はぎした襤褸衣を身に着け、新助は吹矢筒を携へ、左内は小弓を持ち、腰に二三羽の小鳥の獲物をぶら下げてゐる。

新助　あそこの樫の木に鵯が二三羽ゐたが、逃かしてしまつた。

左内　私は又、向うの木立でおしい山鳩を取り逃がしました。

と、いひながら二人は、そこにある株の上に腰を掛ける。

新助　弓にはまた力の入れがひがあるが、吹矢では何としても手ごたへがうすい。

左内　しかし、獲物は澤山居るやうでござりまする。

新助　うむ、その獲物が多いだけに一入殘念だ。今年は雉子や兎は食べられぬぞ。

左内　でも、この弓があれば、それくらゐの鳥獸は大丈夫獲られまする。

新助　勿體ないことぢや。……その小弓一つが、我等母子三人の露命を繋ぐ唯一の方便となつた。

左内　あの石田殿から父上が御拜領なされた鐵砲だけは、賣るのが惜しうございました。

新助　俺も賣りたうはなかつたが、どうしようにも爲方がない。

左内　あの鐵砲さへあれば、雉子や兎はおろか、猪でも狸でも射て捕るに雜作もないのですがなあ。

新助　もう言ふな。今更、米鹽の代に賣り拂つた、鐵砲を惜んだところで返らぬことだ。……鐵砲どころではない、我等の身體までも賣らねばならぬ時節がおい〳〵迫つて來た。(新助は沈吟するごとくいふ。)

左内　エッ？

新助　いや、なに…………(わざと氣を變へたやうにして、)今日は天も秋空に好く晴れて心持のいゝ日だのう。左内、お前は、戰場には居なかつたから、よくも知るまいが、俺は忘れることが出來ぬ。十年以前の丁度今月今日、關ヶ原の戰爭は今日の夜から明日にかけて始まつた。父上や兄上の勇ましい働きは、今思ひ出しても胸が躍るやうだ。

左内　その時の戰の模樣は、折々聞かしてもらひまするが、何度聞いても飽きませぬ。父上や兄上が、黑田や加藤の關東勢の爲に重圍に陷り、わづかに一方の血路を斬り開いて猶勇なされる有樣は眼に見えるやうでござりまする。…………(感慨深さうに)兄さん、お父さまは本當にその時横山主政の手の者に殺められたのでございますか。私は、自分の僻目か、何だか、まだお

父さまが生きて何處かに居られるやうに思はれてならないのでございます。

新助　うむ。………俺も時々そのことは思つてみることがあるよ。

左内　取ら戰死なされたといふことになつては居りますが、あの戰爭の後、重賞を懸けていくら探しても、島勝猛の首も胴も探し得た者がなかつたといふではありませんか。私達がこの山中に隱れて居るのと同じやうに、お父さんも何處かに隱れてお出でなされるのではありますまいか。

新助　さうさ。………しかし、もう時勢は全く家康の天下になつてしまつた。假ひ存へておいでなされても戰死したも同然だ。

左内　お父さんもお氣の毒ですが、私は一層義勝兄さんの戰死なされたことが惜へられます。まだ、やつと十八やそこいらで、偉い働きをしたものだと思ひます。

新助　うむ。あの兄さんには感心する。兄さんの一騎當千の若武者振りには、さすがの關東の奴等も、一時刀を控へて見て居つたよ。お父さんのお仕込みで眉尖刀を使ふのが鬼神のやうであつた。

左内　それを殺したのは殘念だつたなあ。兄さんは、その時最期の模様をよく見ましたか。

新助　いや、殘念なことには見届けてゐることが出來なかつた。どうしようにも仕方がない。慶長五年九月十五日の戰、父上は治部少殿の先鋒となつて、三千の兵を二手に分ち、親から一手を率ゐて、雲霞の如く寄せ來る敵陣の、眞只中へと馬を躍らして乗り入れた。關東勢の目ざす敵は、たゞ石田殿、その股肱と頼む父上の目覺ましい働きに、それ、島左近を打ち取れと、黒田、加藤、生駒、細川の勢より打ち出だす矢玉は雨霰。何しろ味方は小勢、敵は多勢。暫く戰ふうちに、效なく擊ち滅らされ、われ等は父上のおん供して兄上とともに、やうやく一方の血路を開いて落ちゆくを、藤堂高虎、京極高知の軍勢、それと見て行く手に立ち塞がり、島勝猛が落ちるぞ、それを逃がすなと追駈け來る。父上もろ共若々三人は、死に者狂ひになつて戰つたが、四方の敵は、ますく近く攻め寄すばかり。父上も、一旦は、最早これまでなり、そち達も、潔う覺悟をせよと仰せられたが、その時忠義の者あつて、君にはおん大事の場合でござる。ゆめく早まりたまふべからず。某おん名をたまはり代つて討死仕らん間、とくく落ちさせたまへと申すにより、さらば今一戰と、ふたゝび圍みを突いて走るところへ藤堂玄蕃允かさじと背後より名乗り掛けて斬つてかゝる。兄上、肥

と駒を引つ返へし、互に太刀をすてゝ、馬上ながら、むずと組み、兩馬の間にどうと落つ。敵は名にし負ふ數十度の戰場を經し古武者、敵にとつて不足はなし、兄上は初陣の功名手柄はこの勝負と、あはよく玄蕃を下に組敷き、鎧通し逆手に取り直し、玄蕃の首を掻切らんとするところを……(新助 [illegible]然として[illegible]かる)

左内　(新助の物語に、うつとりとして)あの、鎧通し逆手に取り直し、玄蕃の首を掻切らんとするところを……

新助　玄蕃の小姓、主君の大事と駒を飛び下り横手より……(眼をしばたゝく)

左内　兄さん……(襤褸の袖にて涙を拭ふ)

新助　お父さんと俺はその間に敵に遮られて互に見失ふつてしまつた。

左内　それでは、義勝兄さんは、全く、お父さんと兄さんとのお身代りになつたのですねえ。

新助　今更いふのも愚痴だが、だから、西方がもし最後の勝利となつてゐたら、兄さんの戰死は大した手柄だが、かうなつては全く犬死も同然だ。兄さんも地の下で安心して眠れまいよ。

左内　お父さんは、その時どつちへ逃げたのでせうかなあ。兄さんとは、すぐ見失つたのですか。

新助　さうだ。お父さんは、たしか、あの時兄さんと玄蕃の組討ちも、御覧にならなかつたらう。

左内　だから、何處か、遠くへ逃げて去つて隠れてゐるんぢやないでせうかなあ。私には、どうしても、そんな氣がしてならないんです。故太閤殿下は申すまでもなく、假名文字さへ碌に書けなかつた人だし、その他大名といふ大名が大抵無學文盲な者ばかりの世の中に、お父さんは、早くから孫呉の書などを讀んで兵法にも明るく、それに、お母さんから今までよく話して聴かされるのですが、また、石田殿に出仕する前に、大和の郡山で筒井家に仕へて居られた時分、本能寺の亂後、主君に勸めて、明智方の使ひの者を巧みに追ひ返した計略などは、太平記で讀むお楠正成のやうではありませんか。それほどの智略猛です。私はお祖父さまは、もと對馬から出た人だといひますから、お父さんは對馬へでも逃げて居られるのではあるまいかと思ふのですがなあ。

新助　はゝゝゝ。(笑ふ)あの二度の朝鮮征伐があつてから後、あちらとの交通は近年内地同様に便利になつたといふことだが、交通の便利になつたにつれて徳川殿の眼もそこまで光が屆く。不屆

田殿小西殿が大津の陣に送られ、それから京中を引廻はされて、生恥を晒した上に六條河原で首を斬られたといふて、今に至るまで後の世の物笑ひの種になつてゐるが、石田殿の心中を察すれば、ひたすら死を急ぐばかりが武士の本懐ではない。延元の正成は、七度び人間に生まれて、王賊を滅さんといはれた。吾々が母上を扶けて、この人里離れた山中に禽獣を伴侶として十年の春秋を空しく過したのも、萬に一つ父上の無事なお姿に會はれはせぬかといふ果敢ない望みがあつたからだ。といふて、今は六十餘州悉く徳川殿の威光に靡かぬ草木とてもない。うつかり人里へ出て、島左近の名を口にでもしようものなら、忽ち訴人される。………今日までは、小鳥が餌を漁るやうなことをして、漸うやく母子三人の露命を繋いで來たが、もう、この上は手を束ねて餓死するより他はない。お母さんには、こんなことを、あんまりお聽きに入れたくないし、のう左内、どうしたものだらう。

左内　お母さんも、しかし、そのことは、常に心配して居られるやうです。生半自分といふ足手まとひがある爲にお前達の世に出る妨げになるといふて。

新助　はゝゝゝ（笑ふ。）俺も、そのことなら、時々聞かされる。まさかお母さんも、吾々兄弟が、石田の臣島左近の倅と名乗つて出て、無事に立身出世が出來るものか、出來ぬものかぐらゐのことがお解りにならぬ道理もないのだが……

左内　兄さん、私は時々こんなことを思つてみるんです。

新助　どんな事を。

左内　兄さん、何とかして私は、泉州堺まで忍んで行くことは出來ないかと思つてゐるんです。

新助　泉州堺へ行つてどうする。

左内　堺港まで行けば、それから先は自由な海路が開けて居ります。お祖父さまの故郷の對島へなりと、島津殿の本國薩摩へなりと行かれます。もし運よく薩摩まで辿り着くことが出來ましたら、たゞちに琉球に押渡り、遥羅、呂宋と世界は廣い。今徳川家の威光に靡く日本六十餘州のほかに、到る處、吾々の生きる天地はあらうと思ひます。かうして、平家の落武者のやうに、狹い谷の底で母上と三人、無慘々々と一生涯老朽ちるのは無念ではございますまいか。

新助　その志は健氣至極だが、（新助笑ひながら頭を振つて）いや、どうしてどうして。今、わづかな米鹽の代にも窮してゐる身が、路用とてもなく、まさか乞食をしながら遠き旅路もなるまい。

況して、世間の取沙汰には、舟路の固めも近頃一入嚴しいと聞く。用心深い徳川殿のすること。大阪が倚ほ今のまゝである間は、鵜の目鷹の目で人の出入りを見張つてゐる。

左内　それは、さうでもございませうが、たかゞ、乞食同然の姿に窶れた私一人くらゐ、いか樣にしても脱け出る道はございます。兄さん、あなたはこゝに居て母上に孝行を盡して下さいまし。そして、お願ひでございます。私一人を、死んだものと思つて、行けるか、ゆけぬか出してやつて下さい。私は、お母さんや兄さんと御一所に居るなら、どんな不自由をして、たとひ明日餓死しても厭ひはしませぬ。しかし、徳川殿の威勢の下に、おめおめと老ひ朽ちるのが私には無念でなりませぬ。石田殿をはじめ、亡き父上の靈を慰めるには、それよりほかに、もう好い手立てはなからうと思ひます。

新助　その心は俺も同じだ。だが、しかしお前がその志を決行すれば、いづれ生きてはふたゝび會へないものと覺悟せねばならぬ。

左内　もとよりその覺悟でございます。

新助　さうか。………晩くもあれ、早くもあれ、いづれにしても吾々二人は生きながら今生の別れをせねばならぬものならば、左内、俺を死なしてくれ。

左内　（驚いて、）えッ、何と仰せられます。

新助　俺を先きに死なしてくれ。

左内　兄さんを先きに死なしてくれと。それでは兄さん、あなたは、どうせ、かうして居ては近いうちに母上もろ共三人餓死しなければならぬと思ふて、それで一人だけ先きへ死なうといふ覺悟でございますか。

新助　いや、さうではない。まあ、よく聽いてくれ。俺は十年前關ヶ原の戰場で、父上や兄上と一所に死出のお伴をする筈であつたのが、今まで死おくれてゐたのだ。俺は今日となつても徳川殿の武威に靡く心はないが、しかし、時勢に逆らふばかりが武士の本懐ではない。今から三十年前、太閤殿下毛利攻めの最中、流石小早川隆景殿ほどの名將にても、時勢と觀ずれば、潔よう羽柴秀吉殿に一歩推讓られた。その小早川殿の光風霽月の心中は、われ等幼少の折柄、南都持金院に隱居なされたお祖父さまの友保殿から時々話して聞かされた。小早川殿こそは天晴れの武士ぢやといふて賞めてござつた。今、徳川殿を除いて日本國を鎮撫する武將は他にはない。關ヶ原以後既に十年の歳月を隔つれど、徳川殿は、倚ほ石田の殘黨を、重賞を懸けて求められ

るといふことぢや。既に破れ、さりとて再擧の望みもなく、徳川殿の武威は增すばかり、力に及ばぬ敵討の企てをするは愚かの至り、何事も時節ぢや。左内お前は、俺と共に駿府に赴き、島左近の伜友勝を捕へたりと僞り訴へ出よ。さすれば必ず重賞に與かるに相違ない。その褒美の金を以て、せめて母上に孝養をいたしてくれ。

（左内、返事をせず、やゝしばらく沈默してゐる。）

新助　俺はとうからその覺悟で居るぞ。

左内　（斷然として、）兄さん、それは、情けない仰せです。……私が兄さんを、島勝猛の子を生捕つたといふて訴へ出られますか。私ももう疾から死ぬ覺悟はして居りました。どうぞ兄さんの代りに私をお父さんの子を生捕つたといふて、駿府に連れていつて下さいまし。

新助　いや、かうなつたら、兄だから、弟が生捕つたといつて訴へてはならぬといふ道理はない。俺は又弟のお前を罪人にして突出すには忍びない。後生だ。俺を死なしてくれ。

左内　いや、それはなりませぬ。既に兄さんは關ヶ原の戰場にも出て、武士の子として一人前の働きをなされました。私はあの時まだ幼少だといふて、戰場に連れていつてはもらへませなんだ。兄さん、お願ひでございます。せめて私に、關ヶ原の[illegible]左近の一子であるといふ名乘りを揚げさして下さいまし。

新助　だが俺はお前を無々と駿府の奉行の手に渡すに忍びない。

左内　いや、もう、そのやうな氣の弱いことをいはないで下さいまし。ぜひとも私を島勝猛の子にして下さいまし。お願ひでございます。

新助　お前が、たつてそれを望むなら、心まかせにすることを、俺は妨げはせぬ。しかし、お前も知つてゐるとほり、もう家には一合の粟を買ふ代にも事を缺く始末ぢや。駿府に訴へ出るには急がねばならぬ。

左内　仰せまでもございませぬ。これより直ちに身支度して

新助　早速出立いたさうか

（遠くで小鳥の啼く聲がする。舞臺廻る。）

二　場

前の場と同じ山中。やゝ趣を異にしたる溪流のほとり。どちらを向いても高い峰に閉されてゐるが、谷川の畔に少しばかり平らかな地面があつて、五六坪の菜園畑などがある。舞臺の中央に茅、[illegible]竹などにて屋根をしつらひたるあばら家。正面の上手

に佛壇。下手には煤けたる板戸の押入れなどあり、その前には、圍爐裏に煤竹の自在鉤にてつるしたる鐵瓶をかけてあり、その下手に鍋、釜の、いぶせき臺所道具を置き並べてある。前の場の二人の兄弟の母かぢ、五十餘の老媼。今は往昔に變れたれど、十年前までは、近江佐和山二十萬石の城主石田三成隨一の股肱の臣と頼まれた島左近の後家らしき氣品が、何ほどことなく殘つてゐる。

かぢ　（ひとり言をいひながら爐端を起ちあがる。）この間中の雨も止んで、久しぶりの、めづらしい好いお天氣。めつきり、美しい秋空になつた。新助に左内は、この好い日和に小鳥を捕るに夢中になつて、何處まで遠くへいつたことやら。ねつから戻りが遲い。今日は九月十四日、明日は、關ヶ原で戰死なされた左近殿や、作新吉の命日。どれ、お燈明なりと上げませう。

かぢは起つて佛壇の前にゆき、燈明を上げて、念誦してゐる。

そこへ、百姓の額藏大根の束を持ち下手の粗朶垣の扉をあけて入つて來る。

百姓　ご免なされて下されまし。

かぢ　（振顧つて）おゝ、誰れかと思ふたら、額藏どの。

百姓　今日はめづらしいお天氣になりました。

かぢ　ほんに好いお天氣になりましたなあ。

百姓　（携へて來た大根の束を座の上に置きながら）これは、ほんの少しでござりまするが、私のところの菜園畑から取つて取つて來た大根に惣でござりまする。

かぢ　それはまあ、いつもながら、額藏どのゝご親切。ありがたうござります。わたくしの處でも、あのとほり倅どもが、子供のするやうな徒戲に、菜畑を作つて居りますが、まだ一向食べられるやうにはなりませぬ、ほゝゝ。（笑ふ。）

百姓　（これも笑ひながら。）はゝゝ。鐵砲や弓を射るのはお上手か知れませぬが、菜や大根を作るには、又こちと等のやうな、生れながらの百姓でなければ出來ぬことでござります。

かぢ　ほんにそのとほりでござります。

その時又下手の入口より額藏の妹おふゆ大きな風呂敷包みを背負つて入つて來る。

おふゆ　兄さんお前もこゝに來てゐさんしたか。わしは、もうこの間から頼まれて居つた晒を、今日父さんが里へ下りていたついでに馬に載せて持つて來さんしたゆゑ、（かぢの方を見て、）なあ、わしがいそいで持つて來ました。

かち　（そちらに笑顔を向けたから、）おゝ、それはそれは。いかいご苦勞でござつた。いつもながら、兄妹衆のご深切。きつと忘れはしませぬぞよ。

おふゆ、背から風呂敷包みを取り下し、上り先に置きながら、

おふゆ　それから、若狹の鯖も少しござります。

かち　それはまあ、重ね〴〵のご芳志。ありがたうぞんじまする。

百姓　それにしても、今日は新助どの左内どのゝ姿が見えぬやうぢや、どうなされたな。

かち　二人の伜は、今日はめづらしい秋日和になつたゆゑ、さだめし小鳥の獲物が多からうといふて、早うからその小鳥を捕りに出ました。

百姓　さうでござるか。これから又、小鳥は脂がのつておいしうなるからなあ。

そこへ丁度、新助と左内とが前の場と同じ身裝で歸つて來る。

百姓　おゝ、噂をすれば影とやら、戻つてござつた。

新助　左内二人たゞ今歸りました。……おゝ、これは額藏どのにおふゆどの。

百姓　たんと獲物がござりましたなあ。

おふゆ　兄さん鵯がゐる。青鳩もゐる。

かち　今も額藏どのとお前達の噂をして居つたところぢや。額藏どのやおふゆどのに又、いろ〳〵な品をもらひました。お禮をいふて下され。

新助　それは毎度ありがたうぞんじます。（頭を下げる。）

百姓　何の、なんの。……それでは、妹、そろ〳〵お暇にしようかの。（額藏煙管を筒に收めて立ちかける。）

新助　あゝ、ちよつと待つて下され。これ左内、その鵯と青鳩を一羽おふゆどのに進じてくりやれ。

左内　心えました。

左内、獲物の中から鵯と青鳩と一羽づゝ、とつて、おふゆに與へる。額藏とおふゆとは嬉しさうに、幾度も禮をいつて、下手木戸より歸つてゆく。

新助　（着物の裾のまはりをはたきながら、母の前に進み寄る。）

新助　母上、早速でござりますが、吾々兄弟少しく母上にお願ひ致したいことがござります。

かち　外から戻る草々改つて、この母にお願ひごととは、何事でござるの。聞かして下され。

新助　それは、ほかでもござりませぬ。今日小鳥を捕りながら、弟左内とも相談いたしましたことでござゐますが、私共血氣の身體で、何時までも、ぶら／＼遊んでも居られませぬので、然るべき主君を求めて奉公いたしたうございます。

かぢ　（驚き且つ審かしむ體にて）何といやる。然るべき主を求めて奉公したい。……そち達は、まあ、氣でも狂やつたか、足許から鳥の翔つやうなその思ひ立ち。考へてもお見やれ、世上に奉公の出來る身體であるか、できぬ身體であるかは、お身達もよう辨へておゐやる筈ではないか。それに、今日に限つてそのやうなことをおいやるのは、何ぞ仔細がなうては叶はぬ。その仔細があるなら、この母の納得するやうに話して聞かしてくだされ。

新助　いや、今日に限つて足許から鳥の翔つやうな申出で。その御不審はご尤もでございまするが、それには格別の仔細とてもございませぬ。母上のご存じのとほり、關ケ原にて父上や兄上に先立たれましてより、ついまだ昨日のやうに思ひながら、此の山中にて日を送りましたが、指折り數ふれば、もはや今月今日にて丁度十年の春秋を經ました。これも世の盛衰にて致し方なきこととは申しながら、吾等兄弟の者の不甲斐なさゆゑに、年老いたまひし母上にまで朝夕の不自由をさせまゐらするは、何としても心苦しき次第でござりますゆゑ、奉公を思ひ立ちましてござります。

かぢ　そのやうなつもりでゐやるか。孝心深いそち達のことゆゑ、この母に不自由をさせまいとの、その志は、いつに變らずうれしうござるが、この母の心は又、出世ざかりのそち達をば、たとひ世の盛衰とはいひながら、十年にあまる長い歲月、禽獸のほかには棲むものゝない、此の山中にて空しく老ひ朽ちさするが笑止とも不憫とも、たゞの一日もそのことを思ひ忘れた日とてはない。なれども今の世は、空飛ぶ鳥も落す德川殿の天下。世を忍ぶ日蔭者の身で、命を無事に、いづかたへなりと奉公のなるお身達か、お身達でないか、よう積つてお見やれ、この山の中を一足たりとも人里へ出て行けば、たちまち石田の殘黨ぢやといふて生捕らるにきまつてゐる。たとひ母子三人の者、狐狸の伏す床に水を呑んでなりとも一日の壽命を無事に過せば、一日だけの仕合せ。看す／＼敵の手に捕へられて、首斬らるゝを承知でお前達を出してやることは、この母には何としてもなりませぬ。この母一人を後に遺しどうせいといやることぞ。

新助　慈み深い母上の、そのご趣旨は、私どもゝよう肝に銘じて忘

れはいたしませぬが、石田の殘黨を捕り盡さうとする德川殿の掟は嚴しいとは申しながら、何といふても關ヶ原以來既う十年の歳月を經て居ります上に、德川殿の天下は大盤石。もはや誰れが何と蹶いても齒は立ちませぬ。從つて德川殿のお心は自から御寛大。瘦せ浪人の島左近の伜二人がわづかな扶持に有附いたところで、直ちに引捕へられて首を斬られるとは定まるまいかと存じまする。少し路は遠うございますれど、やゝ心當りのこともございますれば、これより左內と兩人にて、直ちに駿府にまゐり、酒井殿を經て直き〱に御奉公を願ひいでようかとぞんじまする。

左內　母上、どうぞお聽き許し下さいませ。

かぢ　そち達が、たつての望みとあらば、この母も、ぜひにといふて留めはしませぬ。したが今日に限つて、俄かの思ひ立ち。これには何ぞ、ほかの仔細がなうては……（かぢ、はたと思ひあたるやうに顏を曇らす。）

新助、左內　えッ。（兩人、母の顏色をうかゞふ心持ち。）

かぢ　あゝ、いや。……そんなら思ひ立つたが吉日。少しも早う支度をして出立ちしたが、よろしからう。

新助　早速のお聽き入れ。ありがたうぞんじまする。……左內、然らば急いで支度をいたさう。

左內　心得ました。

かぢは思ひ切りよく起つて、煤けた板戸の戸棚から古つゞらをとり出し、たつた一枚の藏つて置いた衣類を取り出し、效々しく兩人の旅裝を手傳ふ。

かぢ　十年の間この山奥に籠つてより、人里へは出たことのないそち達。駿府まで長い里程。必ず共に道中に氣を着け、一日も早う無事に戻つて下され、母は今日から、歸つて來るのを待つて居りまするぞ。

新助　母上こそお一人にて、さぞご不自由でござりませうが、どうぞ暫らくの間御辛抱をねがひまする。遠いと申したところで、これより駿府までの東海道は、格別の山阪とてもなく、道は思ひのほか樂と聞いて居りまする。

かぢ　私のことは心配しやるには及ばぬ。よう心の知れた額藏どのや、おふゆどのに賴んで、又折々に來てもらひますゆゑ、安心して居て下され。

新助　どうぞ、左樣にねがひまする。

そんなことをいひ交はしたから、旅裝をとゝのへ、兩人脚絆草鞋を着ける。

左内は時々脚絆。おつけの紐を結ぶ手をとめて、そつと涙を拭くこなしなどよろしくある。

かち、眼ざとくそれに眼を留め一寸しむ體。やがて佛壇の下の抽斗から金袋を取り出して來たる。

かち　これは、まさかの時の用意に、私が無いものにして蔵ふて置いた、いさゝかの金。路銀に持つて行きや。

新助　いや、路銀ならば、不自由ながら間に合ふだけのものは持つて居りまする。どうぞ、これは母上の方におしまひおき下され。

かち　家に居る者には當座の用はない。旅にゐては、何かと心細い。持つて行きやれ。

新助　左様でござれば、しばらく私がお預りいたしておきまする。

(新助その金を懐中に收める。)

新助　しからば、一寸いつてまゐりまする。くれ／＼もお身にお氣をおつけなされて下さりませ。

かち　そち達も大事にして下され。

左内　(そうつと暗涙を拭ひながら、)母上、それではお暇申しまする。どうぞお身體をおいたわり下さいまし。

三人、よろしく見えにて、　　幕

二幕　一場

駿府城内、番士の詰所。

前の幕より五六日後の夕方。

正面、左右とも大形の襖。

甲乙丙丁の番士、三十歳から四十歳くらゐ。徳川時代初期の簡素なる身裝にて坐つて話してゐる。

甲　大御所様の御病氣も、一時はどうならせられることかと、吾々共に至るまで一同心配いたし居つたが、思ひの外早く御本復あそばされ、安堵いたした。

乙　それに又、尾に鰭をつけていろ／＼の風說を取沙汰するものあり、とかく人心穩かならずと見受けましたが、それもい、鹽梅に靜まり申した。

丙　それにつけては、先頃の猿樂の御催しは、何よりの、好い御思附きでござつた。城内一同に拜觀を賜はつた席に大御所様、將軍様、御親子御そろひにて御出あそばされ、御健かなる御樣を拜しては、あらゆる噂も忽ちどこかへ消えてしまひました。

丁　いよ／＼徳川の天下は、御代萬歳であるな。

甲乙丙　御代萬歳である。

乙　しかし、上様の御武威によつて、かう世の中が俄かに泰平になつては、吾々共武士の仕事が、だんだん無くなりはしないかと、いささか心元ないことだな。

甲　いや、それは、又、武士にも似ず、あまりの取越し苦勞といふもの。………それ、あまり大きな聲では申されぬが、駿府からは、まさか聞えはすまい。………大阪といふものが、徳川にとつては、まだ一つの目の上の瘤ちやて。武士の仕事は無くなりはせぬ。

乙丙丁　うむ（三人うなづく）

丙　おう、そのことについて、ふと今思ひ浮んだ。關ヶ原の戰爭以來既に丁度十年に相成るが、石田の殘黨はもはや、のこる隈なく捕り盡されたらうな。

丁　まさか、もう殘つてゐる奴はなからう。たとひ一人や二人生き殘つてゐたところで、今、草木も靡く徳川に對して、何事を仕出來すものか。

甲　いや、さうでもあるまいぞ。大阪には、徳川の天下に對して不平を抱く食ひ詰め者が無數に轉げ込んでゐるさうだから、中には手強い奴が居るかも知れぬ。

丙　う、あの紀州の九度山に、從順しい顏をして隱退してゐるといふ眞田父子などが第一番に曲者だ。

乙　それから、あの石田の家來の島左近はどうしたらうな。——たしかに死んだらうか。あの時戰場に居た者の話によると、左近が眞先に黑田の手の者に討たれたのを見たといふものがあるが、後で、いくら死骸を探しても、首も胴も見附らなかつたといふではないか。

甲　左近については、また違つた話もある。黑田の手に死んではゐないといふ方が、どうも本當らしい。勝猛の首級を上げた者が、たしかに有るなら、五千石や一萬石は疾うに御勸賞にあづかつて居る筈だ。誰れも名乘つて出ないところが不思議だて。

丁　或はさうかも知れん。しかし、また、どこかに生命を繋いでゐたにしても、さすがの左近でも、もう今日となつては、手も足も出はせぬ。

丙　それは、そのとほりだ。

（下手より番卒一人入つて來る。）

番卒　申上げます。

甲　何事ちや。

番卒　只今、あちらへ、石田三成の殘黨を生捕つたといふて、訴へ出た者がござりまするが、いかゞ取計ひませうか。

甲　四人の番士、互に顏を見合せ、きつとなり、いづれも番卒の方を見詰める。

番卒　なに、石田三成の殘黨を生捕つたと、訴へ出た者がある。

甲　左樣でござります。

乙　甲、又、他の三人の方を無言で顧みる。

甲　噂をすれば影といふが、方々何と思ふ。

丙　何と思ふといつて。………今もいつてゐたとほり、關ケ原の戰爭から既に十年を隔てゝゐる。少しく黴の生へた話だな。

丁　關東で、石田の殘黨に重賞を懸けて探ねてゐるといふ事を聞き知つてゐる奴等の贋者ではあるまいか。迂濶なことは出來ぬぞ。

甲　しかし、もしそんな奸計をする氣があるなら、十年も過ぎた今までべん／＼と待つても居まいよ。（番卒に向ひ、）何はともあれ、こちらに引連れい。

番卒　はい、心得ました。（番卒退く）

島新助、同左内、前幕の旅裝姿、左内は腰細付にて、新助その後より細を捕りながら、番卒に案内せられて出づ。庭前のよき處に蹲まる。

四人の番士堅唾を呑んで、そちらを見詰める。

只今、石田三成の殘黨を生捕つたと、訴へ出でたのは、その方か。

新助　はい、左樣でございます。これなる若者は、石田三成の家來島左近勝猛の倅左内と申す者でございまする。此度私の手で生捕りましてございます。

四人の番士、ぎつくり驚いて、再び互に顏を見合す。

甲　なにと申す。これなる若者は、島左近勝猛の倅であると。

新助　左樣でございます。

甲　して、これ、それなる若者。そちは、島左近の倅、左内と申すか。

左内　はい、左樣でございます。

甲　……しかと相違ないな。

左内　……左近の倅に相違ございませぬ。

甲　して、その方は左内をば何地に於いて捕へた。仔細をいへ。

新助　はい。關ケ原とは、あまり遠くもございませぬ、近江と美濃との國境なる山中にて、測らずも、島勝猛の遺族が隱れ住むことを、樵夫の告げ知らせによつて、探り得ましてございまする。

甲　うゝ。

丙　して、その方は何者だ。

新助　（顏を俯けて、少時考へる）はい、私は、たゞ、その附近の里に住ゐまする百姓でございまする。

甲　そちは今、島勝猛の遺族が隱れ住むといつたが、遺族とは誰れ

だ。勝猛は居らぬか。

新助　はい、勝猛は見受けませぬ。たゞ、これなる若者と、母かぢと申す五十あまりの老婆とが住んで居りました。

甲　うむ。……ともあれ、石田三成の家來島左近の伜を生捕つたとあつては近來の珍沙汰である。早速上樣のお聞きに達せねばなるまい。何分の御沙汰あるまでしばらくこれにて控へて居れ。

新助　はい。（頭を下げる）難有うぞんじます。

番士甲、奥へ入る。やゝ暫くして又立ち出づ。

甲　只今、事の次第を上樣へお聞きに達したるところ、奇特に思召され、御褒美として小判拾兩その方に下される。難有く頂戴いたせ。

新助　はゝ。（低く頭を下げる）

奥より若き侍士三方に載せたる褒美の金を持ちて出る。

新助、膝をついたまゝ緣先に進み寄つて、紙に包んだ褒美を受け取り押し戴く。

新助　はゝ、難有く頂戴いたしまする。

甲　（番卒に指図して）これなる勝猛の伜は、追つて御詮議あるによつて、改めて御呼び出しになるまで牢屋に入れ置け。

番卒　はゝッ。

甲　確かと警固いたせ。

番卒　かしこまりました。

甲　これ、美濃の國の百姓とやら、その方には、もはやお構ひなきによつて、勝手に引取つたがよいぞ。

新助　はゝ、難有き仕合にぞんじまする。

番卒、左内の腰繩をとつて引立てる。

番卒　さあ、立つた、立つた。

左内、無言のまゝ立ち上つて番卒に引かれてゆく。新助、うつとりとなりて、尚ほさりかねてゐる。

甲　これ、その方には、もはや用事はないぞ。

新助　はゝッ。（と、吃驚して、吾れに返つた體。）

二　場

同城内、牢屋塀外。舞臺正面上手より下手のよきところまで厳しき高塀。塀にそふて松の立木などあり、上手の方に潜り戸一つあり。下手の方は奥の方に塀が折れ曲つてゐる。

前の場より五六日後の夜半。

少時舞臺空。やがて番卒二人、上手の方より一人は松明を持つて先に立ち、一人は槍を持ちて出で、無言のまゝ下手の方に入

つてゆく。

舞臺又、少時空。

新助、前の場と同じ身裝にて下手より立出で、四邊に氣を配りながら、松の立木に潛み、塀内の樣子を伺ふ。但し新助は、弟を牢屋より連れ出さんとするにあらず、たゞ、左内の囚はれてゐる牢屋の傍を立ち去りかねて、徘徊するものと知るべし。

夜警の番卒二人又上手より出で來る。松の木蔭に人影の動くを認めて、隼の如く飛びかゝる。

番卒一　こら、何者だ。

番卒二　かゝる眞夜中に、牢屋の附近に忍び寄るとは胡亂な奴。(松明を差付けて新助の顏を照らす。)

新助、おとなしく、うづくまる。

番卒一　はて、此奴は何處かで見たやうな奴だ。

番卒二　いかにも。われ等も、そのやうな氣がする。

番卒一　うむ。(うなづく)思ひ起した。此奴は、いつぞや、島左近の伜を生捕つたと訴え出でた者ではないか。

番卒二　さういへば、なるほどそれにちがひない。……一これ、さうであらうがな。直に白狀せい。

新助　恐れ入りました。

番卒一　それにしても何用あつて、かゝる眞夜半に牢屋附近を徘徊し居つたか、不都な奴だ。さあ立て。

新助おとなしく捕へられて引いてゆかれる。

三場

駿府城内、德川家康の居室。

上手床の間には鎧櫃、刀架などあり、刀を持ちたる小姓一人。他に近侍の士二人。他の侍士、下手庭より出で來る。

侍士　仰せにしたがひ、島左近の伜を連れてまゐりました。

家康　おう、さうか。こちらに呼び入れい。

侍士　(下の方に向ひ、)島新助、同左内兩人の者これへ出い。大御所樣のお召なるぞ。

新助、左内の二人番卒に引かれて下の方より出で來る。家康その方を、じつと見やりながら、

家康　苦しうない、もつと近う呼べ。

侍士　はゝツ。特別の御仁慈なるぞ。ずつと進みめされ。

新助、左内　はゝツ。(膝行して少しく前に進む。)

家康　(顏を和げながら、)島左近の伜新助とやら、聞けば、そち達は兄弟といふではないか。その兄弟でありながら、何故に、弟一人

を罪人の如く装ひ、左近の倅を生捕つたと詐り訴へいでたるか。

新助　はゝッ。(頭を下げる。)恐れながら、申上げまする。弟一人を左近の倅なりとお上を欺き訴へ出でましたる儀、重々の不屆、いかやうにお咎めを蒙りまするとも、いさゝかの怨みも存じませぬ。その仔細は、吾々兄弟關ヶ原の敗戰に父兄に先立たれましてより、このかたたゞ一人の老母を扶養いたしながら、美濃の國の山中深く潜み暮して居りましたなれど、長い歳月の窮迫に、おはづかしき次第でございまするが、今はたゞ坐して餓死を待つより餘儀なき有様に立ち至りましたところで、弟左内と相談の上、いづれか一人の身を賣つて、乍恐重賞を蒙り、その金にて老いたる母を扶養いたさんとの所存にて、かくのとほり、訴へ出でましてございまする。

家康　うゝ。……して、一旦弟を連れて訴へ出ておきながら、深夜に牢屋の畔を徘徊いたし居つたは、何故であるか。

新助　(頭を下げて、そつと涙を押拭ひ。)弟左内がたつて自分を島勝猛の倅と名乘り出でさせてくれと望みまするより、その意にまかせましたなれども、老母の犠牲とは申しながら、看すく弟を死地に置いて、私一人無事に存へまするに忍びず、不覺の至りにございますれど、先達つてより連夜御牢屋の畔を徘徊いたして居りました。お上を欺きましたる不屆、この上の御慈悲には、何卒少しも早く、弟諸共御處刑ねがひたうぞんじまする。

家康　兄弟の情として、さもあらう。……して母は、此度のことを存じて居るか。

新助　いや、母には何事も明かして居りませぬ。たゞ、駿府にまゐり、しかるべき主君を求めて奉公いたすためと申して。

家康　それでは、母は、その方達からの好き音便のあるを待つて居るであらう。

新助　左様でございまする。

家康　武士たる者は勝つても敗くるも時の運ぢや。時運に乘じて事を企つるは、英雄の常である。そちの父島左近は一代の英雄であつたぞ。石田治部に仕へて、幾度好い策略を献じても、用ゐられなんだが、臣節を守つて最後まで忠義の志を變へなんだ。家康も左近のやうな家來が欲しいものだ。

新助　はゝッ。恐れ入りまする。

家康　(侍臣を顧み。)殺すに惜しい若い者ぢや、追つて何分の沙汰するまで、酒井か本多に預けて、勞はつてつかはせ。兩人もうよいぞ、行け、ゆけ。

新助、左内　はゝッ、難有うぞんじまする。(低頭する。)徐



花婿の感想

—一名、流行を追ふ男—

横光利一

一

彼は寶石商の廻轉ドアから現れた。花嫁が待つてゐるのだ。彼は薫りの高いメラクリノを吸ひながら、雨に濡れた乞食の前を通つていつた。彼はふと昨夜の結婚式に七面鳥に突き刺つたナイフの上から、ちらりと閃めいた友人の皮肉な微笑を思ひ出した。その眼は彼に云つてゐた。

「たうたうか。」

「たうたうだ。」

彼は不意に、どつかり落されたやうに淋しくなつた。

彼は玄關で車を捨てた。傘を傾けた妻が濡れた矢車草を持つて庭の雜草の中から戻つて來た。

「ひどい降りになつたもんだ。」

「まア、こんなにね。着物をお着返へになりましたら。」

二人は茶室へ這入つた。彼はクションの中へ沈み込んだ。長い間の戀愛が成就して二人は今は何も云ふべきことがないのである。窓の外では五月の雨が蕭々と鳴つてゐた。妻は水差しの水を壺の中へ注ぎながら、

「お疲れになりましたの。」

「うむ、ちよつと。」

壺へ落ちる水音が孤獨な半音を立ててゐた。彼は買つて歸つた指環を妻の前に差し出した。白い寶石が妻の掌の中で輝くと彼女は云つた。

「まア、これは美しいオパールね。雨が降ると、此のオパールは不機嫌になつて仕方がないわ。」

彼は默つて妻の顔を眺めてゐた。無論、こんなことに喜ぶ彼女ではないと云ふことは知つてゐた。が、まだ彼女の寶石に對する値段の鑑定力を樂しむ餘地は殘つてゐた。

「いくらだと思ふかね。」

「さうね、云はない方がいいらしいのね。」

紅茶がテーブルの上へ運ばれた。ふと、彼は、いつたいこれから二人で何をしやうと云ふのか、と考へた。紅茶から昇る湯氣が壺に刺さつた矢車草の花瓣の間をほのかに揺れながら廻つてゐた。窓にあたつた雨がガラスの上を膨れた尖端で降りて來た。子供が遠くで低くうめくやうに泣き始めた。

「少し、寒い。」と彼は云ふと自分の周圍を見廻した。

忘れられた寶石が一點の滴りのやうに光つてゐた。彼はそれを取り上げるとあらためて眺めてみた。と、急に太古の幻想が、斷られたやうに鮮かに浮んで來た。

「もうそろそろ、夕御飯のお支度をしなければいけないわ。あ、さうさう、あなた、今日のお魚は、それはそれは美しいのよ。」

妻は忙がしさうに彼の傍から立つていつた。彼は紅茶を啜りながら、寶石よりも雨の中を潛つて來た魚の色に興奮した妻に面白さを發見した。

「しかし、さて、俺は何をするのかな。」と彼は呟いた。

彼はするべきことが何もなかつた。彼の田舎の家は大地主で金は月々送つて來る。彼の生活は無爲の憂鬱と戰つていくより仕方がないのだ。彼の妻は、彼の家よりも豐裕な生活の中で育つて來た。此のため、彼は金錢で彼女を喜ばすことは出來ないのだ。それたら、權威は？

權威はもとより彼の貧しい佛蘭西語より何もなかつた。

彼はソファーに横になると蒼茫と暮れていく外景を眺めながら、夜の風景について考へた。

衰へた梨の花が濡れた幹の上にとり殘されて白んでゐた。青葉に蔽はれた路の上を瘦せた荷車が通つていつた。その轍の油が黒く輝きながら雨の中へ消えていくと、彼は焦點を失つてぼんやりした。

彼は寶石箱から蒐集して來た寶石を取り出した。一時は彼は無爲の慰めから此の寶石の蒐集に腐心した。彼の妻の戀人時代に、曾て彼女に與へた指環の裏には羅甸語で種々な言葉が刻んであつた。

Qmnia uinct amor.

「愛は總てを征服する。」と彼は讀んでにやりとした。彼は知らない羅甸語を戀人に敎へるために困難したが故である。

トッパーズには憐ましく彼女を愛した初期の心が光つてゐた。ガーネットには彼女の絶え絶えな唇の色が忍んでゐる。エメラルドには敵を鞣した快感か。ブロードストーン、アメシスト、サードネツキス

——さうして、彼は彼女と結婚した。

Cara Sopora.

彼の妻の指環には、今は、（愛しき妻よ）と彫んである。彼は過去の記憶を並べるやうに掌の上へ寶石の數々を並べてみた。掌の上では暮色の底で冴え返つた寶石が、寂寞とした世界を造つてゐる。

「しかし、さて、俺は何をしたらいいのだらう。」彼は二人の行くべき路をまだこれから決定しなければならぬのだ。職業がないと云ふことは、生活がないと云ふことだ。彼は敵を鞣して彼女を誘惑したときの自信に滿ちた言葉を覺えてゐる。

「僕は、今に作家になる。さうしたら、」

彼の前は動かぬ寶石の上で生ま生ましく蘇つて來た。彼女のそのときの輝いた表情を思ひ浮べたからである。それに、自分は？ 彼は自分の頭腦が、一枚の原稿を書く度に、「青白い、」と云ふ形容詞ばかりを製造するのを知つてゐた。これで果して良いのであらうか。作家とは、生活を描く作者である。生活なくして、何の作家であらう。彼は此の點でも、第一の青白い落伍者になるにちがひないのを知つてゐた。

「よし、それなら、俺は金で生活を買つてやらう。金なら、金は他の誰よりも持つてゐるのだ。」

彼は立ち上ると寶石を握りながら、空虛な興奮を續けて部屋の中を往つたり來たりし始めた。

二

彼は或る日、附近の高臺に六千坪の敷地の空いてゐるのを發見して歸つて來た。彼は間もなく家を建てねばならぬのだ。彼はその敷地を

見ると忽ち快活な空想が開けて來た。彼は家の周圍の二千坪を花壇にし、その周圍の四千坪には瀟洒な借家を建て連ねる工風をした。彼はその夜圖面をひきながら妻に云つた。

「此の借家の周圍は路が第一に良くなければいけない。皆どこも芝生にする。」

「さうね、路が悪ければ穢いわ。」

と妻は圖面を覗き込みながら贊成した。

「それから、此の路は全部放散狀に花壇へ向つて集つて來るべきだ。」

「さうよ、それから噴水も欲しいわね。」

「運動場は五百坪と。」

「それから、家賃を安くしなければいけないわ。」

「それは勿論さ。だが、先づどう云ふ人物を入れるべきかと云ふことが問題だ。」

「わたしは、奧さまや子供を大切にする人が一番好きよ。」

「いや、俺は、人々のために此の借家を建てるんぢやない。」と彼は云つた。

「ぢや、あたし達の門番にするためなの。」

「お前は、どこでそんな皮肉を覺えて來たんだ。」

「だつて、人々のためにしないなら、何もわざわざ、そんな面倒なことをなんかしなくたつて。」

「お前はまだ氣がつかないらしいが、俺が借家を建てるのは、人々の生活を知りたいためだ。だから、なるだけ様々な人物を此の借家の中へ、入れ代り立ち代り入れやうと思ふのだ。例へば、人の妾とか、相場師だとか、體操の教師だとか、出來るなら掏摸の親分程度のものも、一人ぐらゐあつてもいい。」

「そんなことをなすつて、どうしやうつて仰言るの。」

「俺は作家になるんだ。作家になるためには、醫者がモルモットを飼ふやうに人間を飼養して、出來る限り廣く人間の生活を知らねばならん。所が、俺は生活らしい生活を一つも知らない。今の分では俺が机に向つても、頭に浮んで來るのは、お前の足だとか、唇だとか、まるで俺の頭はお前のフイルムみたいなもので、どこまでいつてもお前だらけだ。これぢや俺は、いつまでたつても出世のしやうがないぢやないか。」

「ぢや、あなたが出世をなさらなければ、あたしのためだと仰言るの。」

「うむ、まア、お前のためだと思つてゐてくれる方が、俺にはいいんだ。俺はお前を妻にするために、他の女を一人も知らない。俺はお前を幸福にするために、財産を減らすのは嫌ひだし、俺はお前の虚榮心

を満たすためには、労働者になり下がるわけにもいかないし、さうかと云つて、此のままでは、俺はお前の望む作家にいつになつたらなれるのか、俺にはさつぱり分らないのだ。」

かう云ひ出すと、急に彼は、眼前の妻が仇敵のやうに見えて來た。

——俺は此の女のために、帝京を擲げて來た。俺は此の女のために、大學を中途で止めた。俺は此の女のために、生活を忘れて來た。さうして、俺は此の女のために、馬鹿な出世を望まなければならないのだ。いつたい、此の女とは、何者だ。——

彼は鉛筆を投げ出すと、がらりと變つて妻の顔を見詰め出した。彼は妻の醜惡な部面ばかりを、検事のやうに探索した。が、彼の頭に映る妻の醜いものは、悉く彼の男を狙ふなまめかしい彼女の皮膚に變化した。と、彼は忽然として立派な馬鹿になつてゐた。彼は初めて自分の運命が、妻の皮膚の中に疊み込まれてあるのを洞察すると、ぼんやりした。

——此の女さへ死んでくれれば、俺は虎になるだらう。ただ、此の女さへゐなければ。——

「俺は盲者になりたい。」と彼は不意に云ひ出した。

「あなたは今何を考へてゐらしつたのか、あたし、ちやんと知つててよ。あなたは、あたしがもうお嫌ひになつたんだわ。」

「さうだ。」

「だつて、仕方がないわ。あたしはこんな女なんですもの。あなたのことなんか、あたしにはちつとも分らないんだし、」

「俺は貧乏になりたいんだ。そればつかりが念願なんだ。俺はお前のことを思ふと、貧乏にはなれないのだ。俺の出世は、貧乏になることだ。俺は生活を知りたいのだ、生活を。」

「ちがふ、ちがふ、あなたは、あたしがお嫌ひになつたのよ。いいの、もうあたしは、何もかもあきらめてゐるんだから、」

「お前は、俺が貧乏したら、見向きもしないにちがひないのだ。俺はそれが恐いのだ。」

「噓だわ、噓だわ、あなたは、あたしを嫌がらせやうと思つて、貧乏におなりになりたいのよ。分つてゐるわ。」

妻は立ち上ると、泣きながら隣室の方へと去つていつた。彼は妻の後を追ほふとした。が、急にやめると、日記を取り出して盲人のやうに暴烈に書きなぐつた。

——俺は貧乏を願ふほど、最早や贅澤な生活に這入つてゐる。俺の生涯の願ひは、恐らく貧乏にならんがための願ひであらう。だが、俺をして、かく黄金の上に坐らせたのは何者であらうか。これは俺が坐ら

りたくて坐つた坐席では決してたい。人々は上へ登らんことを欲する。だが、俺は下へ下らんことを欲しなければならんのだ。俺から金を奪へ。俺から土地を奪へ。俺から要職を奪へ。貧しきものは幸ひなり。

三

彼は最新流行の自働車を一臺買はふと思つてゐた。どうすれば金がなくなつて妻を同時に喜ばせることが出來るかと考へたからである。彼は青い實を空中に巻き上げてゐる葡萄棚の下へ椅子を持ち出して、外國雜誌を讀んでゐた。群生した鹿草の花が毛のやうな感觸を逆立てゝ、彼の足もとまで襲つてゐた。彼は廣告に出てゐる自働車を妻に見せて云つた。

「どうも、から新しい自働車が早く現れて來ると、俺は買ふ氣がなくなつて了ひさうだ。一ケ月に殆ど二つゞつ新しいのがやつて來る。カデイラツクやフランクリンが流行つたと思つたら、今度はスタッツ・ビーアスアローと云ふ奴だ。」

「ぢや、もつと新しいのがぞくぞく出て來ると、いゝんだわね。あなたがお買ひにならなくつて、結局あたしがありがたいわ。」

「お前は自働車を慾しくないのか。」と彼は云つた。

「あなたが慾しいんぢやありませんか。あたしはあなたが、ときどき譯の分らない溜息をおつきになることだけ、ひかへて下さればそれでいゝわ。」

「それぢや、俺はいつまでたつても、貧乏になれつこはないらしい。」

「そんなにあなたは、貧乏におなりになりたいの。」と妻は云つた。

「うむ、なりたい。第一こんなに金があつては、是れ休せんと言つて即ち休し難しだ。そら自働車を買ひたいの、そら家を建てたいのつて、こんな馬鹿々々しいことなんか、俺はいつまで考へてゐなくちやならないのか、分らないぢやないか。もつとも俺は、お前の家より金があつたら、貧乏にはなりたくなかつたかも知れないが。」

「あなたは、あたしへの當てつけに、今迄そんなことばかり仰言つてゐらしつたのね。」

「うむ、そりや、そんな所もあるにはある。しかし、俺は生れてからお前と同樣、金を使ふことより他は知らないんだ。こんなことを續けてゐたら、此の先、お前と俺とはどんな風になるのか知つてゐるか。罰よりあたらないんだよ、罰より。」

「そんなら、貧乏におなりになつたらいゝぢやないの。あたしに氣兼ねなんかなさる必要は、ちつともないわ。」

「お前は貧乏つて、どんなものだか知つてゐるのか。」

「だつて、あなただつて、御存知ないぢやありませんか。」
「いや、貧乏つて云ふものは、お前や俺や、こんなものぢやないのだ。貧乏と云ふものは、どうすれば今日一日の飯が食へるだらうかと考へることなんだ。所が、俺たちは、どうすれば今日一日の暇が潰れるかと、そればかり考へてゐなければならないんだ。これぢや、結局、死ぬのを待つてゐるのと同様だ。」
妻は良人を壁のやうに見降すと、窓を向いて欠伸をした。
「今日はお天氣がよくつて、何よりだわ。」
「お前には、貧乏の話は分らないんだよ。」
「あたしには、あなたのお話なんか、何もかも分らないわ。ラフォルヌがフォルムを造つたの、マレルブがデュベレーより馬鹿だとか、やつと此の頃、マラルメのお話だけはなさらなくなつたと思つたら今度は貧乏のお話よ。」
「俺たちは、なかなか貧乏にはなれないんだから、なるだけ貧乏の話だけなりしなくちや、いけないんだよ。もう俺とお前とは、愛に關する話ばかりやつて來すぎたんだ。お前だつて、もう愛の話だけはこりこりだらう。」
「あたしは、あなたのやうに、さう流行物を追つてばかりゐる性質ぢやありませんの。」
「馬鹿を云へ。俺だけなり流行物を追はなくちや、誰が追ふんだ。俺を攻撃する連中は、流行物を追ふだけの能力がないからだ。」
「それはあなたが、御自分の物を何も持つてゐらつしやらないつて云ふ證據だわ。」
「それは、俺が教へてやつたことぢやないか。俺は自分の物を持つてゐると思つてゐる奴に訊きたいんだが、いつたい彼奴らは、何を持つてるんだ、何を。人間と云ふものは、病氣以外に持つてるものは、何もないのだ。そもそも彼奴らが、何か持つてると思ふのからして、病氣なんだ。」
「おや、あたしも、病氣かしら。」と妻は云ふと笑ひ出した。
「お前は、何を持つてるんだ。」
「あたしは、あなたを持つてると思つてゐたわ。」
「だから、お前は俺に苦しめられて喜んでゐるんだ。お前は近頃痩せて來たが、それは俺を持つてるからだ。そんな下らぬものは、さつさと捨てて了ふに限るんだ。」と彼は云つた。
しかし、彼はさう云ひながら、ひやりとした。二人の間へ隠してゐた短劍の鯉口を、知らぬ間にちらりと抜いたと同様だつたからである。彼は霞草の花を蹴りつけながら、妻の顔を仰いで見た。妻は暫く默つてゐてから、良人のやうに霞草の花を足蹴にしながら小聲で云つ

た。

「あなたは、よほど危險思想を持つてらつしやるのよ。だから、そんなことばかり仰言るんだわ。」

「俺は、お前を持つてるんだ。こいつはなかなか危險思想さ。俺を始終お前の傍へ縛りつけといて、朝は午後の一時まで寢かしとくし、晝は晝で、のらくら花ばかり眺めさすし、何か話をすると、俺をお前の低さまでひきづり降ろさねば承知しないし、俺が何か高尚な思想を得やうとして骨折ると、愛がないとか何とか云つてぐづぐづ云ひ出す。こんな危險思想はあるものか。俺が自由に選擇出來るのは、もうお前を愛することだけより何もないのだ。」

「それは、あたしの云ふことだわ。」

「俺はひとつ、お前を一生、愛して愛して愛しまくつてやらうと思つてゐる。さうしたら、お前はいつたい、どうするだらう。俺は早く、それを見たいもんだ。」

「そんな結構なことつて、なくつてよ、どうぞ御自由に。」

「よし、覺えといてくれ。俺はもう直ぐ、お前の顰めつ面ばかり見せられるのは、定つてゐるんだ。人間は追つかけられるのと逃げられるのと、どつちが生來好きなものかと云ふことは、まだどこの國の哲學にも現れてゐないのだが、俺はひとつ、今度は駁の稽古をやめて此いつの研究をしてやらう。」

妻は皮肉な微笑をゆるがせて良人に云つた。

「ぢや、もうデュペレーの研究は、おやめになるの？」

「うん、もうデュペレーの時代ぢやなささうだ。俺はお前か貧乏か、どつちか一つを片方づつ追つ驅ければ、それでいいんだ。此の二つは近來の流行だ。俺は流行と云ふ流行は、どこまでも追つ驅けなくちや、承知の出來ない性分なんだ。」

「あなたのやうな人も、近頃の流行だわ。」

「皮肉と云ふものは、相手と自分に差があるほど出容いもんだが、お前もだんだん俺から放れていくと見えるね。大ぶん皮肉がうまくなつて來た。しかし、皮肉を云ふのも、今の中だぞ。」

彼は急に椅子から立ち上ると、靈草の周圍を廻つて罌粟畑の傍へ蹲み込んだ。彼は漸く蕾の出かかつた罌粟の蕾を眺めながら、突然どうすれば名聲を輕蔑出來るかと云ふことについて、畑の隅で苦しみ出した。

四

彼はいつものやうに寶石を探しに街の中へ出かけていつた。彼は寶石が何故高價なものかと云ふことを知つてゐた。

「それは人間を瞞してゐるからだ。」と彼の思ふのが癖である。

彼はビルヂングの高層な窓にたかつて煉瓦を嵌め換へてゐる職人を見た。それは鳥のやうに見えた。鳥には立體が平面に見えるにちがひないと彼は思つた。彼はぼんやり空中を仰いでゐると、不意に足もとから人間の聲がした。見ると道路に蹲つてゐる青年が風呂敷の上に玩具を並べて彼を仰いでゐた。その玩具の盡くのものも、また子供を瞞すことばかりに興味をもつて造られたものであつた。すると、青年は玩具の中から彼を見上げてにやにやと笑ひ出した。彼は不快になつた。彼は去らうとして歩き出すと、

「あなた、吉村さん、」と青年は呼びとめた。

彼は振り向いて青年の顔を見直した。

「ひとつ、何んでもいいから買つて下さい。負けときますがね。」

「君は僕を知つてゐるんですか。」と彼は訊いた。

「知つてますとも、僕はあなたと小學校が一緒ですよ。」

しかし、彼にはそれが誰だか分らなかつた。彼は暫く青年の黒い顔を見降ろしながら默つてゐた。

「さうですか、ぢや、ひとつ、おもちやを買ひませうかね。しかし、僕は君を知らないんですが、お名前は?」

「御存知ないでせう。僕はあなたよりよほど下でしたよ。谷澤と云ふんです。」

すると、彼は雜閙した人波の底に蹲んでゐる青年の眼の中から、急に茫々とした故郷の青い風物を感じ出した。

「ははア、漸く思ひ出しましたよ。どうも失禮しました。」

「いや、僕こそ、一度お尋ねしたいと思つてゐたんですが、こんなことをしてゐるもんですから。」

「さうですか、あなたが谷澤さんですか・お變りになつたものですね。」

彼とは全く關係のなかつた存在が、突然眼前に現れて確かな古い記憶を街の中で匂はせてゐると云ふことは、彼には平凡なことではなかつた。

「もうずつと、こちらにいらしつてゐるんですか。」と彼は訊いた。

「二年ほどになりますかな。なかなか、こちらも上手く行きませんで、困つちまひますよ。」

「どこか、學校へでも行つてらつしやるんですか。」

「いや、今はどこへもいつとりません。初めは夜學へちよつと足を突つこみましたが、此の頃は、これ専門にやつてるんです。」

「此の玩具は相當賣れるものですか。」と彼は訊いた。

「駄目ですね。そりや、賣れる日は賣れますが、まア今の所、面白く

ありませんな。しかし、これでも僕らの村の者が造つてる玩具ですから、さう拋つたらかしてをくわけにも行きませんから、仕樣がありませんよ。」

彼はあらためて玩具を見た。木製の粗雜な赤い顏から、背中を押せば眞つ赤な舌の飛び出る玩具である。

「これは村で造つたもんですか。」と彼は訊ねた。

「さうですよ。此の頃は玩具を造る團體が出來ましてね。青年倶樂部が夜仕事にやつてゐるんですが、ときどき面白いのを造つて來ることがありますよ。こんなものぢや、つまりませんがね。」

「村では此の頃の生活はどんなものです。少しぐらゐはいい方ですか。」

「いいも惡いもありませんよ。そりや、田舍にゐちや、お話になりませんな。一日の日當が、あなた、たつた四十錢ぐらゐなもんですからね。」

「それで、皆の者がやつていつてるんですか。」

「やつていつてるんぢやありませんよ。ありや、しがみついてるんですな。一生懸命に働いて、一段であなた、いい所で一年に七俵、そんなもんですかな。それで、何んでせう。一軒で平均一町づゝとしても、その中の半分は地主へ納めつちまふんでせう。それに、馬とか牛とか、こいつがまた入りますからね、全くあれぢや、やりきれたもんぢやありませんよ。」

「ぢや、地主と云ふのは、どのくらゐとるんです。」

「まア、かう云つちや失禮ですが、吉村さん所なんかは、二萬俵もおとりになりますかな。こりや、あなた所ぐらゐなもんでせうが、とにかく、われわれのやうな貧乏人ぢや、一年かかつてまア二百五十圓、と云ふ所がいつぱいですね。」

彼は玩具の前で、顏がだん〱赤くなつた。その苦痛な生活の故に玩具を作り、その貧困の故に都會の子供を狙ひ出した村民の生活、――彼は自分の生活を考へた。貧困を例へば寶石を買ふやうに求めてゐた自分の富裕な生活を。

「僕は田舍のことは、何もかも母親任せにしてあつたもんですから、ちつとも知らなかつたんですが、なるほど、それぢや、あまりひど過ぎますね。あなたん所の地主はどこなんです?」

「あなたとこですよ。」と青年は云ふと、煙草に燒かれた黒い齒並を卑しさうに開いてゐた。

「僕とこ?」

「さうですよ。あなたが私の地主ですよ。」

「僕が君の地主か。」

「さうですとも。」

彼は突然大きな聲で笑ひ出した。

それは犬の喰はへて來た着物のやうに汚れてゐた。彼は青年の着てゐる着物を見た。彼は自分の着物に眼をやることが出來なかつた。彼の紬の着物は身體から浮き上つて彼の心の中で旗のやうにばた〱と騒ぎ出した。

「いつたい、どうなるんかね、それは。」と彼は云つた。

「所が、地主の方は地主の方で、これもまた困つてゐるんですよ。何しろ税金が高いんですから、小作人の納めた米くらゐぢや、追つゝかないんですよ。いづれこれぢや、どつちも共倒れに定つてます。早い話が、私のやうにかうして田舎から、街へ街へと飛び出して來る奴ばかりふえて來ましたからね。まだ〱喧嘩してゐられる間は、いゝんですよ。いまに喧嘩にも何もならなくなりますさアね。」

「それで、おもちやを造るんですね。」

「さうですよ。子供瞞しと云ふ奴で、はつはつはつは。」

二人はビルヂングの下で、投げ出されたやうに笑ひ出した。が、彼は、小作人の貧困のお影で、今迄十六世紀のフランスの詩人を研究してゐられたのだと氣が附くと、眼前の玩具の群れが、一齊に自分に向つて舌を出してゐるやうに思はれた。

「此の玩具を、みんな僕が買ふとすると、つまり、どう云ふ風になるんですかね。」と彼は云つた。

「どう云ふ風と仰言ると？」

「つまり、どう云ふ風な結果になるんですか。金の具合が？」

「そりや、結構ですな。一つ、どうです。なかなか上手いのがそのうち出て來ますから、買つてやつて下さいな。」

「いや、さうぢやなくつて、僕がいつもみな買つて了ふとすると？」

「そりや、そんな有り難い話はありませんよ。そりや、皆が喜びますよ。」

「しかし、僕の金は、村の人が造つてくれてるやうなもんですよ。僕は阿母から貰つてゐるんですからね。その金で、つまり村の人の造つてくれた金で、村の人の造つたおもちやを買つたつて、何もならないんぢやないですか。」

青年は暫くぼんやりして彼の顔を眺めてゐた。と彼は急に笑ひ出した。

「なるほど、そいつは一寸、難かしいですな。」

「これは今ちよつと考へついたことなんだけど、出來るなら、僕が買ふやうにしたいんだが、どうです。僕が村で出來る玩具を全部買ふことにして、それをまた僕が勝手にどこへでも賣るやうな風にしてをれば、いいんぢやないんですか。」

「そりや、さうですとも、なかなか結構ですよ。」

「さうすると損をしただけ、僕が引き受ければいいんですからね。」

「さうです、さうです。賛成ですな。」

「それでは、僕はいよいよさうしませうかね。」

「さうしていただければ、結構ですよ。私も出來るだけお手傳ひさして貰ひますよ。それは、しかし、うまい話ですな。」

青年は喜ばしさうに胡坐をかき直すと、流れて來た一團の新らしい人波を見上げながら勇ましく手を打つた。

「さアさア、皆さん、農民おもちや、お買ひなさい。此のおもちやは、舌を出しますよ。子供さんの喜ぶおもちや。さアさア皆さん。安いおもちやをお買ひなさい。」

彼は暫くは眼が廻つたやうに玩具の赤い勢ぞろひを眺めてゐた、が、急に、轉んでゐた自分の生活を路傍から拾ひ上げたやうな寂しさを感じて來た。

五

彼は突然藏書を賣り始めた。書畫骨董を賣り出した。蓄積された藏書の嵩を崩し出した。さうして、彼の書齋には、眞赤な舌を出して笑つてゐる玩具の群がいたる所に並べられた。

或る日、彼の妻は、彼が賑やかな玩具の群れを眺めてゐる背後から、彼を眺めて笑つてゐた。彼は振り返ると妻に云つた。

「どうだ、これは俺とこの祭りだぞ。」

「もうデュベレーやマレルブは、ゐなくなつたのね。」と妻は云つた。

「うむ、あいつらは、十七世紀の幽靈さ。」

「ぢや、今度のそれは、何の幽靈なの？」

「これは、俺たちの神樣なんだ。」

「まア、神樣が舌を出したりしてるのね。」

「うむ、さうだ。マレルブやデュベレーに、またおい出と云つてるんだ。」

妻は袖口で口を壓へて笑ひ出した。と、彼も思はず笑ひ出した。部屋の玩具の笑つてゐる中で二人の笑ひは擦れ違つて放れていつた。

「俺は、もうお前がいくら笑つたつて、恐くはないんだ。」と彼は云つた。

「そんなことは、今に限つたことぢやなくつてよ。」

「いや、これからに限つたことなんだ。今迄俺は、お前の笑ふのをひやひやしてたんだが、しかし、もういい。俺には俺の覺悟が出來た。」

「あなたでも、そんなにあたしを、問題にしてゐて下すつたの。ありがたいわ。」

「お前と云ふ奴は、俺には前から大問題だつたんだ。何か俺が仕やう

としても、心を修めて未だ無心の地に到らず、と云つた所で、すぐお前のことが氣にかかつて困つたんだが、いいかい、もう今日からあきらめてくれ。」

「おや、あたしもデュペレーみたいに、抛り出されてしまつたのね。」

「いや、俺が抛り出さなくても、もう直ぐお前は飛び出していくに定つてゐる。お前は俺を包んでゐる新らしい空氣の中では、生活することの出來ない、、と云ふ奴を持つてゐる。」

妻は柱の傍で不平に細々と揺られると彼に云つた。

「あなたは、あたしを、幽靈みたいに思つてらつしやるんだわ。」

「いや、お前は幽靈を呼び出す巫女だ。男と云ふものは、いつでも、、の云ふことを聞かなくちや生きていくことは出來ないもんだが、、、と云ふ奴は、此奴は幽靈ばかり入れてゐる怪物だ。」

「おや、此のおもちやは、あたしの、、と戰つてゐてくれるのね。」

「さうだ、お前の、、と戰つてゐるんだ。よく見といてやつてくれ。しかし此奴は、お前がいくらぶち碎いたつて、どしどし田舍から送つて來る。俺とこの土地で働いてゐる村民達は、全部お前の、、と戰つてゐるんだ。此のおもちやは、お前の、、を狙つて飛んで來てゐる彈丸さ。」

「まア、いやなおもちやね。赤い顔をしたりして。」

妻は玩具の群れを横目で睨むと、くるりと彼に背を向けて小聲で云つた。

「もうあなたは、あたしがおいやになつたのよ。」

「だから、お前は、、だと云つてるんだ。お前が今頃そんなことを云ひ出せば、また俺は幽靈に瞞されるんだ。俺はもういつぺん、デュペレーやマレルブに頭を突つ込んで、何をしやうと云ふんだ、何を。」

「そんなことぢやないことよ。あなたは、あたしに、――もう、云ふのはいや。」と妻は云ふと、玩具の一つを手にとつて指で舌の先を突つき出した。彼は彼女の頭の組織に興奮すると卓を叩いて饒舌り出した。

「お前も、もういい加減に考へてみてくれ。田舍の者は、田畑で働いただけでは食へないんだ。お負けに俺の家へは年貢を納めなければならないんだ。いいかい、ここだよ、俺の家は地主だ。小作人は俺の土地で働いて食つてゐるとは云ふものの、年貢を俺に納めなければならないために、働いただけでは食へないんだ。だから、此のおもちやを造つてゐるんだ。もし俺が年貢を彼らにそのままやつてしまへば、誰も彼も食へるのだ。」

「ぢや、お百姓の食べられないのが、みんなあたしの故だと仰言るの。」

「それが實は、俺の阿母がやつてゐるのだが、しかし、阿母は阿母で

俺のためを思つてやつてくれてゐるだけぢやない。お前の、、から出て來ようとする俺の子供のためなんだ。」

「それであなたが、あたしをお嫌ひになつたつて云ふ、そんな理屈にはならないわ。」

「だから、そんな理屈だと誰が言つた。」

「でも、そんなことで、あなたがあたしまで敵になさらうなんて、ずゐ分あなたは、ひどい方よ。」

「そこ、そこ、そこが、、の云ふことなんだ。俺が俺の田舍の者に同情をして働かうと云ふときに、さう云ふ風にすね出すのが、、、だと云ふんだ。俺が彼らに同情をしなければ、俺の家で誰がするんだ。俺の妨害をするのは、お前の、、の働きだ。俺は阿母の、、なら、いくら妨害されたつて恐くはないのだ。しかし、お前の、、となると、俺には恐くてならないんだ。だから、俺が村民のために働かうとするときの、最も有力な妨害をするものは、お前の、、以外の何ものでもないのだ。」

「それはあなたが、今迄あまり暇人だつたから、そんなことを仰言るんだわ。」

「それはさうだ。しかし、こんな暇人を作らして苦しめたのは、誰だと思ふ。」

「それもあたしだつて、仰言るの？」

「お前は、もう一人暇人を産まうと考へてゐる怪物さ。」

「ぢや、あなたは、何なの。あたしや子供に貧乏させようと骨折つてゐらつしやる怪物ぢやないの。」

「俺たちは遊んで食つてゐるんだ。農民達は働いて食へないんだ。然も遊んで食つてゐるのは俺とお前とただ二人だ。働いて食へないものは、數百人ゐるんだ。それも俺とお前を遊ばせて食はすために、數百人が働いて食へないんだ。分つたか。」

妻は暫く默つてゐてから横を向いて彼に云つた。

「あなたも、案外お坊つちやんね。」

「何だと。」

「おもちやが舌を出して笑つてゐるわ。」

「お前は、人の食へないのを、笑つて見てゐることの出來る人間か。」

「だつて、あなたは、食べていける人まで、食べていけないやうに思つてらつしやる人間よ。あなただつて、十七世紀の幽靈だわ。」

「お前と俺との間には、こりやだい分、距離がある。もう別れたくちやいけないときだ。歸れ。」

「あなたは、あたしよりも、田舍の人の方がそんなに大切なら、歸つて上げてよ。」

「歸れ。」

「歸るわ。」

「家内のものは、俺だけぢやないんだ。働いても働いても食へないものだつて、家内はあるんだ。そのものの家内になつてみろ。」

「だつて、あなたのやうな良人を持つた奧樣にだつて、なつて御覽になるといいわ。何をし出すかしれないんですもの。」

「それはお前が不幸だつたんだ。俺の知つたことぢやないんだ。」

「さうよ、あなたは。何んでもさうなの。あたしが食べられなくなつて、のたれ死にしたつて、俺の知つたことぢやないつて仰言つてよ。あたしは、あなたのやうな氣まぐれな人の所へ來たのが、いけなかつたんだわ。もつと、貧乏な人の所へ來てゐれば、こんな目には乘らなくてすんだのよ。」

「それなら俺は、どうすればいいんだ、どうすれば。」

「あなたは、土地もお金も、可哀相な田舍の人に、みんな上げておしまひなさるといいのよ。そんなものなんか、あなたが持つてらつしやるからいけないんだわ。裸體になつて、着物一枚で、音の出るおもちやを抱いて、ふらふらしてらつしやればいいぢやないの。それも出來ない癖に、可哀相だ可哀相だつて、だいたいが生意氣だわ。」

彼は突然水のやうに靑ざめた。彼は玩具を攫むと、妻に向つて投げつけた。テーブルをひつくり返した。インクが潑剌として飛び散ると、懷中時計がガラスを破つて窓の外へ飛び出した。

「エテ。」

「歸れ。」

「あきれた人ね。」

「歸れ。」

妻は散亂して飛んで來る玩具の手足に叩かれながら、從容として笑つてゐた。彼は花瓶にささつた櫻の花をひき拔くと、振り翳した。妻は花の下をかい潜つて良人の傍へ馳け寄ると、猫のやうに彼の胸へ抱きついた。彼は妻の身體を突きのけた。

「歸れ。貴樣には、用はないのだ。」

妻は櫻の花に打たれながら、良人の首に手を卷きつけて云つた。

「ね、ね、靜かにしてよ。あたしが惡いんだから。あたし、あなたに歸れつて云はれたら、もう行くとこがないんですもの。ね、ね、あたし、あなたの云ふことなら、何んでも聞いてよ。貧乏も我慢をするわ。」

「向ふへ行け。」

「いやいや。」

「行け。」

「あたし、あなたの仰言ることは、よく分つてゐるのよ。だけど、ただあなたがあまり紙の様に思つたから、あんなことを云つたんだわ。あたしは、どんな目に乗つたつて、かまわないのよ。あたしは、何を云はれたつて、いづれあなたの云ふままにならなけりやならないのは、定つてゐるわ。」

彼はだらりと櫻の花を下げたまま、砕けたガラスの破片を眺めてゐた。いつの間にか遠く逃げ去つた美しい暴力を眺めるやうに、彼は舌を出した人形の中で恍惚として突き立つてゐた。

「抱いて、抱いて、」と妻は云つた。

彼は妻の肉體の壓力を激しく感じた。と、チューブのやうに、だんだん彼の頭の中から村民達が押し出された。ふと彼は投げ出されたままに倒れてゐる玩具の群れを見た。彼は自分の二本の腕が妻の身體を抱きかかへてゐるのに氣がついた。と、再び村民達の生活が、牛のやうに浮んで來た。彼は胸に埋めてゐる妻の隠れた顔を押し上げて云つた。

「おい、お前は、舌を出してゐるんだらう。」

「あなたは、どうしてそんなことを仰言るの。」

「舌を見せよ。舌を。」

妻の脣の端がひき吊つた。彼女は默々として良人の胸を突きのけると、隣室の方へ去らうとした。彼は淋しい斷念を感じた。彼は彼女の手を持つと云つた。

「お前は、俺を騙さうとしてゐるんだ。」

「あたしを騙したのは、あなたぢやありませんか――」

「俺を墮落させるのは、お前だ。」

「放して、放して、」

彼は妻を柱の傍へ押し倒した。崩れた妻の足もとが、溢れ返つた花籠のやうに輝き出した。と、彼は絶え難い疼痛を瞬間に感じた。彼はぼろぼろ涙をこぼしながら、妻の傍へ寄つていつた。

「俺は、もう駄目だ。お前には敵はない。俺を殺すなり、生かすなり、勝手にしてくれ。俺は人間だと云ふことが、もう悲しくて仕様がない。」

妻は抱かうとする良人の腕の中から擦り抜けると、羽根の生えた女のやうに部屋の外へ飛び出した。

「死ね、死ね、」と彼は叫んだ。

が、逆に、彼は壁に向つて自分の身體を投げつけた。

「死ね、死ね、」と叫びながら。

が、ふと彼は、再び壁に身をぶち衝けやうとしたときに、皮膚の下で、痙攣的な苦悶にごと〳〵暴れてゐる胃を感じた。彼は立ち止つた。

「俺は、もう少し賢かつた筈ぢやないか。たつたこれだけだつたのか。馬鹿々々しい。」

彼は彼自身の占めてゐる空間の意義が分らなかつた。彼は蹲み込むと、光つた眼をして、悲しげにガラスの鋭い破片を鄭重に掌の上へ拾ひ出した。間もなく彼の唇からは、フランスの幼稚園の童兒の習ふ健康な章句が、呪文のやうに流れて來た。

Puis, comme la petite p'eurait, elle l'a embrassée pour la consoler, et, de son pas léger, elle a continue son chemin. Soyez bons les uns peur les autres.

六

彼の家へ、荷造りされた玩具の箱が陸續と田舍から到着した。彼は彼の村から出て來てゐる青年達や無職者を糾合した。さうして、彼は彼らの手分けをすると市内の各所へ玩具の露店を出さしめた。彼は日記の一頁へ書きつけた。――農村の擡頭、都會への進軍――

彼は漸く爆發したやうであつた。彼には計畫はなかつた。彼は彼自身を破壞すればそれで良かつた。彼は困厄に遭遇したことのない善良な果斷を持つて、故里の邸へ、村の青年倶樂部へ資金を投下することを命令した。

彼は市内の玩具店から玩具店を馳け廻つた。夜になると、彼は市内の地圖を擴げて展開していく露店の位置へ新らしい點を打ち込んだ。

彼の妻はもう彼のすることには默つてゐた。或る夜、彼は不精な妻に算盤を持たして云つた。

「お前も、もういい加減に働くがいい。遊んでゐると、愛だとか、戀だとか、さう云ふ幽靈ばかりが出て來るんだ。俺の働くのも道樂にはちがひないが、同じ道樂でも、愛だとか戀だとか、そんなことばかり云つたり考へたりしてゐる道樂よりも、どれほどこの道樂の方がさつぱりしてゐるか分らないんだ。いいかい、算盤を一つ、入れて貰はう。」

彼が露店の賣上げ高を讀み始めると、妻は彼の聲に應じて默つて指を動かした。彼は云つた。

「締めていくらだ。」

「十三圓四十六錢。」と妻は答へた。

「良ろし。諸事をその調子でやつてくれ。」

「まア、いつの間にやら、玩具やの奧さんにされたのね。」

「所が、それで始めて賢くなつたのさ。」

「おや、これより賢くなつたら、今に乞食にならなきアならないわ。」

「そのうち、追ひ追ひ、乞食にもなれるだらう。まア、もう暫くの所

だよ。」
「それも、此の頃の流行なの。」
彼は彼女の答へに行き詰つた。が、ふと、彼は今に妻と別れなければならないのであらうか、と考へた。すると、彼には妻が、遠く放れた對岸の小さな人のやうに思はれ出した。彼は妻の顔を眺めながら、二人のどこに龜裂が生じてゐるのかを探ぐつてみた。
「おい、お前は俺と、いつか別れさうな氣がしないか。」
「さうね、何んだか、そんな氣もするわ。」と妻は云つた。
「お前もさうか。」
「ええ、」
「實は、俺もだ。」
「ぢや、もう、あなたとあたしは駄目なのね。」と、妻は云ふと、靜に落ちつき拂つて考へ出した。
「すると、彼には急に、二人が別れるときの現實が、忽然と今眼の前へ現れ出したやうに思はれた。
「ぢや、しやうがない。今の中、ひと思ひに別れやうぢやないか。」と彼は云つた。
「ええ、」と彼女は答へた。
「お前はそれについて、何も云ふことはないか。」
「ええ、何にもないわ。」
「ぢや、それでいい。」
二人は默つて了つた。彼は身體がだんだん冷たくなるのを感じた。が、彼は、どうして此の重大な二人の別離が、此のやうに平靜に流れて來たのか分らなかつた。
「お前はそれで、本當か。」と彼は訊いた。
「ええ、」
「不思議だ。」
「明日、あたし、歸つてよ。」と妻は云つた。
「しかし、どうしてかう簡單に別れられるやうになつたのか、お前は知つてゐるのか。」
「もうそんなことなんか、どうでもいいわ。」
「さうだ、そんなことは、どうでもいい。俺達は別れれば、それでいいんだ。しかし、それではあんまり、あつけないぢやないか。何んとか、大きな喧嘩でもしなければ、」
「もう、何も仰言らないで、」
「うむ、もう云はぬ。しかし、俺とお前とか、かうして今頃別れなければならないと云ふのは、こりや、俺に罰があたつたんだ。長い間、小作人を虐めて來た罰だ。」

さうだ、罰にちがひない、と彼は思つた。

「今に、俺はお前と別れた後で、苦しむのは定つてゐるのだ。しかし、小作人が俺の家から苦しめられて來たことを思つたら、俺の苦しみなんか、何んでもないんだ。」

——罰をあてよ、罰を。

彼は首を延ばして待つやうに、明らかに妻の心の去つていくのを眺めてゐた。

「あなたは、そんなにいつも小作人のことを思つてらつしたの。」と妻は云つた。

「いや、俺は小作人のことなんか、思つてるんぢやないんだ。ただ俺たちは、あまりうまい汁ばかりを吸ひすぎて來たのが、氣がひけるのだ。」

「だつて、そんなことは、仕様がないわ。」

「仕様がない。しかし、仕様がないと云つたつて、こんな現象に氣がついた以上は、そのままでゐられないのが人間だ。これも、どうにも仕様がない。俺が譬へこのままお前と一緒に生活を續けていつても、今の俺の行動は續けていくより仕様がない。俺は俺の財産を、今にだんだん村の者にやつていくのは定つてゐるんだ。」

「ぢや、あたしが歸れば、あなたは樂々なさるのね。」

「それはどうだか分らないさ。しかし、俺は玩具とお前から攻められてゐるんだから、お前が歸れば、お前から攻められないだけ、俺は樂にはなるだらう。」

「ぢや、あたしは歸つてよ。」

「うむ、歸れ。俺はいつか一度は、必ず罰を受けねばならんのだ。」

そして、彼はむつと默ると、彼女が歸つた後の心の準備をひとり着着と進めてゐた。

——いづれ、彼女は俺に一文の金もないならば、來る筈のなかつた女にちがひないのだ。

——もう歸つてくれ。これ以上ここにゐるのは、俺を侮辱することだ。

彼の心は一本の憤りを中心に、冷く妻の前で光つて來た。

「あたしがこんなに、あなたに攻められるのも、矢つ張り何かの罰なのね。」

「さうだ、罰だ。」と彼は云つた。

「でも、あたしたちは、もうこれ以上何もすることがないんだから、別れることが、だんだん樂しみになつて來たのかもしれないわ。前にはあたし、結婚と云ふものがもつと樂しいものだと思つてゐたんだけど、それが結婚してみると、實は別れることが樂しみになるなんて。」

「もう、何も云ふな。云へば、また二人がくつ附いて了ふに定つてるんだ。」

「だつて、あたしは別れるのが、樂しみなんですもの。もうあたし、いよいよ別れるんだと思ふと、何んだか急に嬉しくなつてしまつたわ。」

彼は妻の浮き上つた喜びの色を眺めると、逆に落ち込んでいく自分の敗北した苦しみがだんだんと重くなつた。

彼は默つて憂鬱に窓を開けた。青葉の匂ひが清冽な空氣と一緒に流れて來た。すると、月のない隣家の庭園から靜かな秋蟲の銀の音がきしみながら聞えて來た。

「もう、春もおしまひだ。」と彼は云つた。

「さうね、春が來て、夏が來て、秋が來て、冬が來て、春だと思つたらまた夏ね、どうしてかう同じことばかり續くんでせう。」

「しやうがないさ。」

と彼は云ふと、どつかり腰掛けるやうにソファーの上へ寝轉んだ。

七

翌日、彼は朝早く起きると昨夜の不氣嫌のままで外へ出ていつた。

彼は市内の玩具店を廻り歩くと谷澤の據けてゐる露店の方へ廻つてみた。密集して疾走する電車、自働車、オートバイを背後に受けて、谷澤は流れる都會人の人々の足もとから勇ましく叫んでゐた。

彼が傍へ寄つていくと、谷澤は彼を仰ぎながらはしやいで云つた。

「あ、さうさう、昨夜、故里から手紙が來ましてね。どうもあなたの評判で田舍は大へんださうですよ。あなたのお母アさんが、大ぶん澤山なお金を青年倶樂部へ下すつたさうですが、お影で何んでも、四つばかり新らしい玩具が造れるつて書いてありましたよ。あなたの所へはまだ何とも云つて來ませんか。」

「いや、別に、」と彼は云つた。

が、彼はいつの間にか、自分が地主から一躍玩具製造會社の資本家になつてゐるのに氣がついた。そして、自分の受けた報酬は何であらうか。――彼は昨夜から續いてゐる致命的な妻との爭ひを思ひ出した。多分、彼女は今頃は家から逃げ出してゐるにちがひないのだ。しかし、それが俺の願つてゐた希望であらうか。俺は彼女を愛してゐた。俺は彼女と共に進歩することを願つてゐた。だが、俺はあまりに勝手に、ひとり激しく進歩しすぎた。

――俺は何故に進歩したのか、と彼は考へた。

――俺はあまりに、愛について考へすぎたからであらう、と彼は思つ

——それなら、愛とは何んであらうか。

無論彼には分らなかつた。

——それなら、進歩とは何んであらうか。

これも彼には分らなかつた。

——それなら、俺は何をして來たのか。

彼は玩具の傍で一切のことが分らなくなり出した。ただ彼の頭に噴き上げるやうに浮んで來たものは、彼を愛した昔の妻の無思想な皮膚だけだつた。さうして彼は、今は自分のして來たことが雲のやうに馬鹿馬鹿しく見えて來た。

——俺は彼女には逢ひたいのだ。と彼は思つた。

彼は彼女と爭つたことがだんだんと苦痛になつた。彼は慌しく心のままに家の方へ歩き出した。彼は彼女のゐなくなつた家の中を想像した。と、彼は自分の立つてゐる地面が直ちに何故に動かないのかと考へた。彼は妻の皮膚を摑へるために最も速力のあるものを物色した。彼は自働車に飛び乘ると、灯のついた街の中を妻に吸はれるやうに疾走した。

しかし、彼が家へ着いたときには、もう妻の姿は家のどこにも見えなかつた。彼は暫く積まれた玩具の荷の中を搜さうに廻つてゐた。と、急に、彼は骨を拔かれたやうにぐつたりした。

——これが一人になつた狀態か。

彼は自分の心理を見詰めてみた。疲れた身體の底では過去の幻想だけが、無力な歎息のやうに沈んでゐた。

彼はぶらりと下つてゐるタオルをとつた。すると妻の匂ひの中から、彼女の幻影が春のやうに浮んで來た。彼はタオルを取り落した。彼は押し迫つて來る後悔の波の中に突き立つたまゝ、暗い家の中を見廻した。いつも見馴れた壁の斑點が、新鮮な模樣のやうに浮き出て來た。落ちてゐる紙切れが彼の眼に逢ふと、急に聲をひそめて沈まり出した。彼は書齋へ這入ると電氣をつけた。と、並んだ玩具の群れが、一齊に舌を出した。彼は復讐された自分を感じた。

「靜だ。」

彼は玩具の群れを一つづつ眺めてみた。

——お前は俺から妻を奪つた。

——お前は俺から愛を奪つた。

——お前は俺から今日命を奪ふにちがひないのだ。

彼は絨氈の上へ仰向きに倒れると、兩手を擴げて溺れたやうに歎息した。と、玩具の群れは、彼の眼を開く度に、

「靜だ、」

「靜だ、」

「罰だ、」

「罰だ、」と笑ひ出した。

――笑へ、笑へ、笑へ、と彼は云つた。

が、彼は急に、眉を顰めた。彼は泣き出しさうになつた。彼は眞つ青になると、突然杉のやうに立ち上つた。

――よしッ、

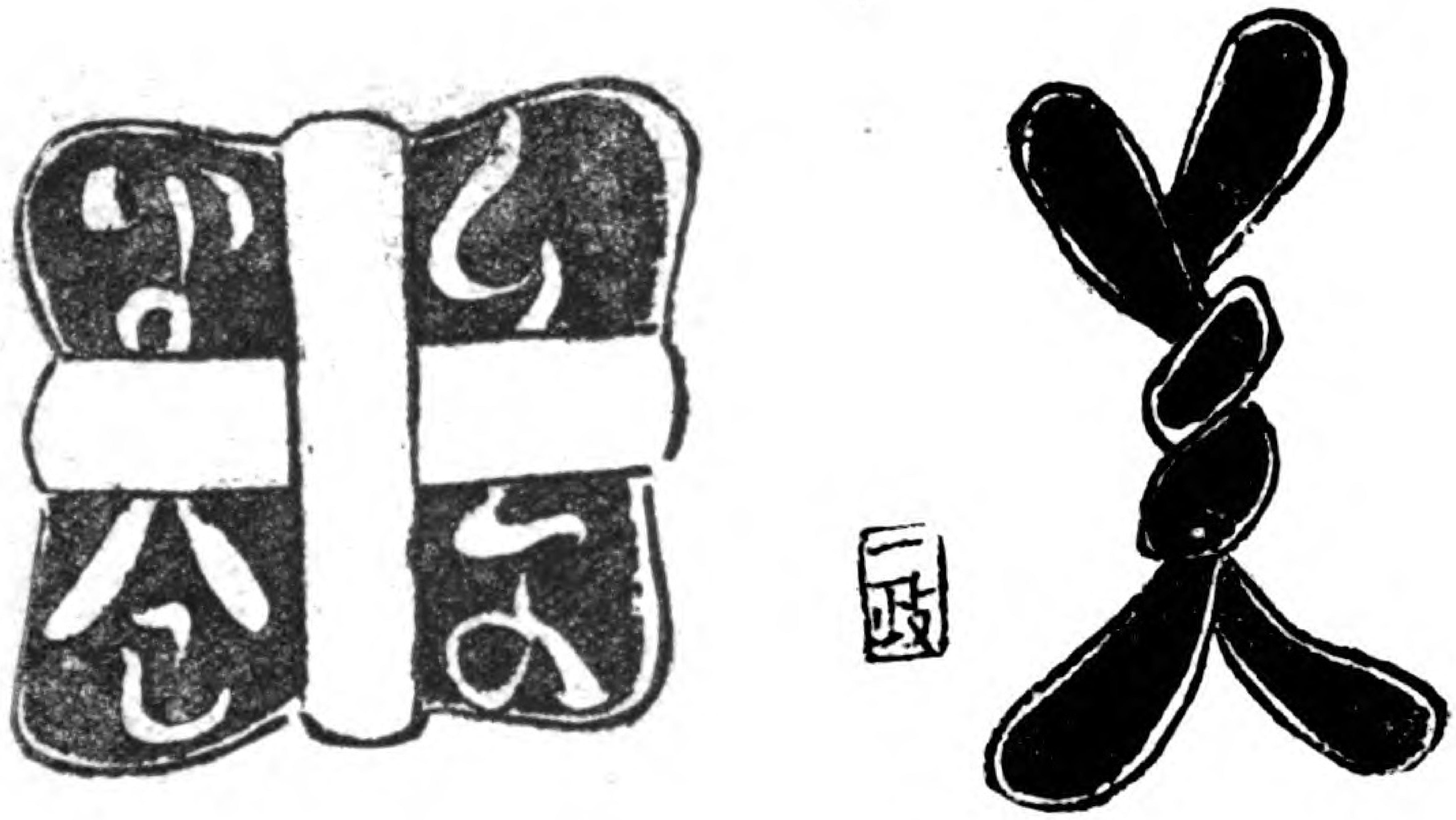
――やるぞ。

――裸體になれ。

彼は息を飲み込んだ。彼は玩具の群れを掻き集めると袋に入れた。すると、彼は決然として表の方へ飛び出した。

その夜、ある賑やかな街角に玩具の露店が一つ増した。それは新らしく起き上つた彼の初めての露店であつた。彼は向ふ鉢卷に颯爽たる勇姿を見せ、流れる都會の人波に向つて突喊するやうに叫んでゐた。

「さアさア、皆さん、農民おもちや、お買ひなさい、此のおもちやは舌を出します。子供さんの喜ぶおもちや、さアさア、皆さん、農民おもちやをお買ひなさい。」



父來たる

瀧井孝作

一

十二月二日立ち夜汽車で國の父のくると云ふハガキを二日の朝受取り、自分は凡そ氣のない風で讀むのだつた。何年振で會ふ父に滿足させる備へもいまだにない宅で、また丁度新年號の仕事の最中で、つまり今父に來られると迷惑の方が餘計にあつた。が窓の外を見また机に坐り父にチキ會ふと思ふとへんに微笑が湧いたりした。それから今年七十三才の父の、乘合自動車や何遍か乘換へる汽車の道中がまた案じられて自分は

「岐阜まで、迎へにいかうかしらん」

と妻に向くと、妻は今度初めて父に會ふ訳で

「岐阜迄」

と氣のない風に見え、妻は今父に來られる宅の方のみ頭にあるらしかつた。

自分は左う岐阜迄出かけたい氣持はなかつた。時間を見て、行く氣持が强く起きたら出迎へたいと、机の上で、汽車の時間表をたゞ繰つてみた。岐阜へは奈良から午前の汽車で立たぬと間に合はん樣で、父の來る時間は岐阜へ五時について京都乘換だと時間が

半田で明日の朝つく、名古屋に廻り龜山で乘換ると今夜の十一時につく之は旅馴れん父は知るまいが或は人に教はる事もあるし名古屋廻りだと鵜沼から電車で名古屋に出る方が近道で、すると出迎へに岐阜より先きまで行かぬと會へんかも分らん。斯くしらべて躊躇してゐたら午前の汽車の時間は經ち、行けなくなつたが、自分は矢張何度も時間表をしらべてみた。父の來ると云ふ事に思ひ耽つて居たい樣な心持だつた。

　また父の目を悦ばせるのに擬て見ておいた水仙の蕾を裏畑で剪つて床の間の瓶に活けかへたりした自分は、娘のトシコに向つて

「飛驒のお祖父さんがくるヨ」

　と四才の娘が未だ見ぬ祖父の事など理解はないけれど曰つて聽かせたりした。

　自分の机の脇で、妻はたづねた。

「大阪の叔父さんとこへ、見えることハガキ出しときませうネ」

「それは來てからでいゝヨ」

　自分は父は何日か滯在すると思つた。

「それよりあの布團を早く拵へなさい」

「私はトシコのを著て寢るし、お父ちゃんの大きい夜具ナニして、間に合ふワ」

「何うせいるものだから」

「でも。今は有るので間に合ふでせう」

　客布團は皮だけ以前縫つてあつて、綿は今度餘分の收入のある折買ふと云つてゐたから、父のくる矢先この布團を造り父に眞新ラの蒲團を著せたいと思つたが、妻は、いつも仕事のできんこちらに非難めいた口吻で、勘定高くいま綿は買へないと云つて承諾しないのだつた。自分はかく從はん妻にムッとし更に情けない氣持にされ、布團造る造らぬは物分れの形で口をきかなんだら、妻も机の脇より立つた。

　この夕方、仕事の樣子を訊きに來た雜誌社の××君に向き自分は、始の方三枚出來たきりで書悩んでゐ又明日から父の相手で仕事は〆切日には出來上らんと思ひ、國の父が急に今晩か明日來るのでと父を口實に約束を斷つた。××君は肯づき二月號へやりかけの方書いてくれと述べて歸つた。自分は〆切日から釋放たれて妻にさう傳へたら

「では年の暮にも、はいらないのネ」

「まあさうだ」

　と自分は可笑しくて笑ひ〳〵自分も妻も哀れに思はれた。

　宵に雨が降り出し、少し寢て起きて机に向ふならひの自分は庭さきの雨をきゝつゝ眠り、十時前に目醒めた。父は十一時の汽車で、もし著けば夜更けで分りにくからうと、自分は停車場へと向つた。雨の中

の小一時間もかかる道のりを脚々行つたら、矢張徒勞に了つた。父は京都泊りで明朝七時につくときまり又玆まで出迎へにと思ふと驛前の宿屋へ泊り込みたい位にうんざりした。雨上りに復歩いて戻り勞れきつて、机の脇の寢床の脱穴へすぐはいつた。

五時に隣の茶の間のトシコのオシツコに起きた氣配で、目さめた自分は、けさ停車場へ行くのにトシコと共に出迎へたら孫を見て悦ぶことと思はれ、この思付きにひどく興味を抱いて自分は起きた。妻は寒くて風邪ひくからとトシコを遣る方に不賛成で、或はさうかと思つたがトシコは行きたがつた。深山着込めば宜いと、鞠の如き姿になるまで色々着せて、手袋の手首を握つて自分は出た。

外は未だ薄明りで吹く風に道は乾きかけてゐ、トシコは踊るやうに水溜りをよけ元氣に歩いた。自分は子供と歩く折絶へず耳目に觸れる物皆を喋舌るならひで何かと口をきいた。公園では今柵を開けられた元氣な鹿の列も見え、春日の參道の落ちた大木の椋の梢も目に仰がれた。街では路の上に泥が多くて自分はトシコを手かけで背に負ぶつて行くと、背中で金太郎サンと藥種屋の看板か何か見ては呼んだ。停車場では、待合室の窓から線路の方へ向きトシコは繪本で見覺えた汽車の實物を見、お爺と指したりした。

「お祖父さんと自動車に乗らうネ」と一週子供にオシツコをさせて出口で待つと、汽車が着き人中に父の姿が見られず、父位の年齢の老人が見えたら當てはめて父の樣子をせめて想ひたかつたが七十才位の老人も見えず、各々出口を出て去つた。出口の垣に摑つたトシコと自分はのこり、父は京都の驛前の宿屋に泊り二番列車に乗るのだと思つた。八時半まで待ち京都二番の汽車がついたが、父は見當らず、汽車を出た一人の老人は見ると、見覺えのある春日の神主で七十前と見受られたが今日はひどい衰へた顏で、仲人と驛前の自動車の中へ入つた。自分は次の汽車を待つて東庇の外側のベンチに日向ぼこをした。トシコは賣店のパン一つたべちらし、マントや帽や手袋や皆脱ぎ廣場へ驅出たりした。九時半に京都から又汽車がつき、父は矢張見えず、自分は今度は驛前のうどん屋へ立寄り、玉子とじ二ツ取つて悠くりトシコは一つ美事にたべた。それから十時半の汽車にも父は居らず、次は十二時半であと二時間間があるし自分は待つ方をあきらめた。歸りかけるとトシコは砂利の上に蹲んで立たなんだ。自動車の方を見てゐた。

「お祖父さんこないから歩かう」

トシコはきかぬので、仕方なく無駄費への自動車に乗つた。自宅の前へ來て止ると近所の者の目が皆振向いた。

妻は手に電報をもち出てきて

「さつきに大阪からきましたヨ」

と渡しそれはチチキタスグコイ」カメダとあつて、父は大阪に行つたのだ。昨晩京都から奈良へ乗換は出ないと分つてすぐ大阪の叔父の宅に向つたらしい。

電報見て自分は早速出かけやうとし、晝ご飯はと云はれてまた父の酒の肴にとつてあるサイで食事した。父はいづれ此方に來るけれど一刻も早うみんなに會ひたからうと思はれ自分は

「三人で行かう」

と妻に向き、それで妻も出支度をした。暖いからトシコの毛糸の服は下着を一つ脱がして、年寄のために用意された置火燵は消して、三人して出かけた。

二

農人橋の叔父の宅にはもう玉造の方の自分の妹がシヅコとアキコと二人の子供連れて來て居た。妹の良人のFが先年父と折合はずに國元を出たのだつたが、今日父は、娘や孫たちにはこだはらずに面會したらしい。妹は自分を見て會釋し幼いアキコを寢かした二階へ上つた。

父は衣服きかへて奥座敷の手焙火鉢の上へ煙管もつ手をおいた。年寄つて瘦せて顔は鳥に似てアゴが短かかつた、と自分は前に寫したことを思ひつゝ久々で父の顔を見た。七十の年齢で活氣のある眼で血色もよかつた。叔父はそこにゐ、酒の香もたゞよひ晝の食後たつた。自分はおそく來た詫びのかはりに、停車場で四時間も待つたとすぐこぼしたら、叔父は

「うん、昨晩十二時にドン〳〵叩いて誰やしらんと起きたら兄貴やつたで」

といつた。父は

「俺や奈良へ行くやうにハガキやつたけど、實は大阪に用があるんで、おみを玆へ呼ぶ方が都合がよからずと、途中で思ひなほしてなあ。こんどは專賣特許のことで來たから」

と柔かい調子で、父をば頑固一徹と思ひこんだ自分は稍意外の氣持をうけた。

父は煙管を莨入にいれてから、自分の妻の初對面の挨拶をうなづいて受け、トシコも

「飛驒のお祖父さんごきげんよう」

と習つた通りにお時宜したら、すぐに蜜柑と菓子とつまんで與れたり甚だ物やさしかつた。

「トシコはいつかの寫眞よりも瘦せとるゾなあ」

と父は氣にしたから自分は

——（父來たる）——

「あのまゝ育つたら、大女だ」

「これで丁度宜いのやろ」

と叔父も曰つた。トシコは同い年のシヅコと遊び婁も茶の間の方で叔母と一しよになつた。

自分は父が專賣特許のことで來たと云ふが何かまた出願のつもりだらうと思つた。自分は以前に大阪のY特許事務所の事務員だつたし父がそれを使つて便たと分り、其考案したものを自分はまづたづねるのだつた。すると父は

「くるま屋みたやうな仕事ぢやあに」

と此方へ向いた。自分は俥屋と云ふことはへんで他の話かとぼんやりして聞いた。父は二ッ考案し雛形と圖面とに拵へて來たと曰つた。

「雛形は重たかつたけど提げてきたで、見てくりよ」

「どれ見よう」

自分は父の考案にさほど期待を持たなんだ。指物師の父は家業の傍、發明新案を夢に描いて昔から物にならん雛形など幾つ造つたことだらう自分の子供時分も度々見られたし、今から十四五年以前自分がY特許事務所にゐた折父は實用新案の許可を一遍とつたが其ハガキ入齒の品も賣行きの方で失敗だつた。一昨年父は自分の所へY特許事務所への紹介狀が欲しいと云ふ國の人二人寄越したこともある。昨年父は製板機械をば宅で組立てたさうだが似寄りの機械が他にあつて父のそれは發明にも新案にもならなんだ。父の七十以上の年迄もつゞくこの情熱と根氣は尊いと思ふけれども離れて云へば父の道樂仕事だつた。かく思ふ自分は父のけふ持つてきたと云ふ物を見守つた。片輪のバスケットの中から木造の雛形がもち出され、五月幟の矢車に似た形で厚ぼつたい物でゴロリと疊の上に轉がされた。これは車の具で輪の中央の轂、俗に觚とも云はれるものだつた。又今一ッの方の薄い紙の圖面を手に擴げて見せた。荷車の輪に添へた裝置で坂上る時は力になり下りにはブレーキになる裝置だつた。父は轂の方特許が受かると荷車にも荷馬車にも應用し中々販路が廣いと氣を入れてゐた。

自分は聽いて俥屋でなく荷車製造の方と分つたが、考案は完全なものか何うかよく分らなかつたし構造も詳しくきく興味も持てず、トラックの自動車の用はれる今日では、荷車の一部分の改良など二ッ共つまり時勢遅れの考案だと思ふのだつた。一ばん大切な點だし自分は思つたことを一言父に曰つておきたかつた。

「貨物自動車がドシ〱はしるから、荷車のこんなのは何うかしら」

「自動車は高くつくで一般に用はれまい」

「追々安くなるし今に誰でも持つやうになる」

「自動車をかい。そんでも飛驒あたりの山坂では未たく荷車を用ふ

ゾなあ」

自分はこの上父の氣を挫きたくないし、非難は差控へた。叔父は話のあいだ傍にをらなんだが、父が切角きたんだし父の思ひどほりにして、出願の方でY特許事務所へ案内しようと思つた。父に旅疲れがないかたづねて、父は

「くたぶれてをらん。そしや、Y事務所へつれていつてくりよ」

とすぐに曰つたから、自分はまづ事務所へ電話できいて、Y氏は不在だつたが出願の用向は分るとのことで行くことにした。父は舊式のおもたい二重廻しと割合新しい中折帽と着て、自分は雛形の角ばる風呂敷包み手にさげて、市内電車で向つた。

北濱の濱家並の軒に六朝風の字の札が掛つた事務所で、自分はかほ見知りの若い事務員に會つて早速用向をもちだすのだつた。父は傍におかれたお茶など呑む餘裕もなく雛形の方から先に話し、先つき叔父の宅でも曰つたが、國の人のとつた新案の千代田鑑は飯のふくおねばのながれを受ける溝が新案で併その煙筒の開閉の辨もまた一ツの新案になつてゐると手眞似して、輿の考案の簡單さも是で差支へまいと辯じたりした。ストオブが暖まつたからと又奥の方に導かれて父はふかい肘掛椅子にこしかけ、硝子戸ごしに大川の水と中之島と繪の如く見える此室の景色を一寸ほめた。茲で別の事務員が代つて會つた。自分と初對面の人で用件の聽取方など技術家らしい風の關係だつたが、父はまた千代田鑑を引例に曰ひだしたり、技術家が登録請求範圍の記述の場合に然々に改めたらよいといつても父は己れの考へた通り中々改めやうとしなかつた。今一ツの考案の圖面の方は、分りにくい圖面を段々に説明して何うやら面白さうだと云はれた。父は之に荷輪車と名づけて曰つてゐ、しかしへんな名稱で妥當でないと笑はれたが父は矢張荷輪車と名づけたがつたりした。一應他に似た考案がないか、荷車も世間に用はれてをらんで特許や新案になつたものが百以上もあり一應しらべて見る、明後日の午前中にしらべておくと云ふことに話が定つた。自分はそれで出願手數料など何程かときゝ、自分の心得た大正二三年と今日では四倍に上つたと分つて何分便宜に取計つて欲しいと曰ひおいた。表ての上り口に戻り自分はおもたい二重廻しを父の背から着せかけ、事務所から出て、難波橋の袂にきた。

「このあたり見物は措かずもなあ」

「さう。未だくたぶれんかな」

「くたぶれん」

「では農人橋まで、わりに近いから歩かう」

自分は乘物の方へ氣が向かず、矢張田舍者だつた。濱側の舗道の上をば悠くり天神橋の袂にきて右に折れて松屋町筋を南に向つた。自分

は明後日の午また特許事務所へついてこないでも濟むと思ひたう曰つたら、父はきゝいれてこの道筋なら分りよいし電車よりも安心だから歩いて一人で來やうと曰つた。父はあすは大阪城の見物にいく以前は中まで見えなかつたと話しお城は是から此方の方角だろと父は歩きながら、四五遍も來た大阪で地理の見當も稍つくやうだつた。自分は頷さで明後日出ることも斷つたが、國からきた父に頭は向いて何か沁沁と肩並べて、街中を戻つてきた。

夕飯の前に風呂で、自分は從弟に脊中をながさせつゝこんな話をした。

「僕が曰つたつて父はきかんから仕方ないけど、特許や新案は受からん方が宜いと思ふ。受かるとまた、あるかないか知らんが資本をばつぎ込むことになるし、大てい賣れない損物だからな」

「さよか」

と從弟は素直に只聽いた。この心持は皆んながもち自分は口にだいた譯だ。叔父も父と發明の話はしない風だつた。叔父は下痢で腹が弱つてゐ晝の酒が伺いけなかつたと云つて夕飯に葛湯か何かやる風だつた。

父は叔父がのまんといふから、そりや淋しいゾなあと一人で酒杯をもちあげるのだつた。父は、一樣のお茶でないと不服相にするトシコとシヅコに肴を分けてくれたりした。父は入れ齒の音させて物をたべた。父は元氣で何の話にも口をだしよく知らずしてしやべつた。自分は明後日用がすんだら夕方でも奈良へきたらよいと曰ふと、父はきこゑん振りで

「刺身のツマのこんな大根は器用に手で刻むんぢや、器械でしたやうぢやがみよ。この青いのは菁ぢや。西洋菁ぢやが、宅の近所で××も作つてをつたが西洋菁はまことに軟かいことい」

とこんなに父は刺身のツマをたべつゝ他の話をし、自分は曰つたことが他の話でまぎらかされて不滿足に思つた。父が叔父の宅にゐるのだし明後日の夕とたらはつきりきめたくないのだと解れたが。

夕飯のあと妹は子供が直ぐ眠たがるからと玉造の方へ歸るのだつた。父の土産の三島豆をシヅコは持つて行つた。父は自分らにも土産をくれた。古びた茶の罐に入れた三島豆と何か反物と出いて、自分は直ぐ開けかけたら父はもらひ物の裏地だと曰ひ、自分は相變らず吝い父だと思つた。父はそれから食後の卓の上へ夕刊を擴げて見た。

「近江銀行も未んだ話がつかんと見える、なあ」

「そんな記事は僕は讀まん」

と自分は話かけられてブアイソに返事し、自分は傍の父に段々不滿足が積つてくるやうな氣分だつた。自分のブアイソは父に分つたやう

だつた。

「おみたちは泊るのか」

「いや奈良へ歸る」

と叔母に自分はすぐ返事し、そして支度して立つと皆んなは上り口にきて見送つたが、父は奥の卓の上に矢張新聞をひろげて見てゐた。

三

中一日經て父は大阪の叔父の案内で奈良にきた。宅では妻も背いて例の寄布團を昨日仕上げたのだつた。父は昨日Ｙ特許事務所で、調べた結果兩方共似た事もあるが少し異ふで出願してみたらとのことで實用新案願に兩方依賴したと曰つた。叔父は住吉と堺の汐湯とけふ案内しやうとしたら直ぐ奈良へ向ふといつたから連立つてきたと曰つた。叔父は傍の日向の障子二枚外づし庭や畑などよく見えるやうにした。

「障子の内法の寸法が些つまつてをることい、この家は」

と父は大工の詞で、鴨居と敷居とのあいだの詰つて居る即ち建具の丈けが低いと曰つたから、自分も叔父もこれで當り前だと曰つたら父は叔父に向いて

「そこの家も内法が低いと思つた、上ミ方は一體にこの寸法であらず」

と、父は敷居の上に立つて自分の身長でしらべる工合で、手を白髪のうすい頭に載せて二寸程すく鴨居にも觸つてみた。また坐つて座敷の襖も緣側の障子の方もすこしあけつ丶そこに自分で立つてみたりした。

「玆はデカイ邸ちやぞ」

と父は方々見まはし、元の座につくと裏手の枯生を眺めつ丶、手すきに草除して野菜や苺を作つたらよい、然し汝たちの年では未だ畑イヂリの氣も起きないだらうと曰つた。

酒がはじまり父は膝もとにトシコがゐたら見蕩れて

「トシはえらい好い子ぢや。これで赤い衣こしらへてもらへヨ」

と財布から五圓札一枚だいて手に持たせるのだつた。自分は默つてゐたら傍の叔父は

「結構なことようしておくれた」

と曰つた。妻は臺所から出てきて父に共禮曰つた。叔父は自分に向つて仕事の方は何うかと訊き、七月以來今年の下半期何も書かんと告げたら、妻もへんに卒直で

「それで先日も喧嘩をしたんですの。わたしの貯金も、もうないんですヨ」

とこれはこんな通帳も大阪へ明らさまにもち出さうと先日も妻は言つたのだつた。で叔父から、毎例踏るやうでは商賣も成立たんだろうと商品並に言はれ自分は作品も商品の方面から返事して、悪いものばかり作ればたちまち信用がおちるから弱ると辯解した。すると父の詞は

「家計が立たんやうでは、どうならずも。俺やおみの商賣は元からあこんまりよいと考へんのおやあ」

と全く此方の仕事の性質をば認めん風で、自分は心持呆然とした。父は酒で頭にまで汗かき手拭をとつてはふきふき、元氣に喋舌つた。

「衿元付合をせんやうにせにやダチカン」こんな詞で派手付合は否定し國の町でも派手に男賣つた某々などは大方つぶれたと噂したり、今日の時勢のけはしい事をば悪い事する奴の取締りや罰は當人だけでなく當人の家族や町内にまで及んだら悪事もさうやれまいと昔の五人組の制度を持たいて曰つたりした。父の詞に異はないけれど自分は其考へには一々反對したい氣がされたが只聞くだけにした。

程よい酒で切上げ食卓も片付いて父とトシコと庭へでたあと、叔父は妹の良人のFの事を聽かせた。Fは昨日の朝出勤の途中立寄り、父は會ふまいと二階から降りんので叔父はでは今後Fも國へ歸つても僕へたち寄れんし第一妹が困るわけだから今晩はんといかんと說いたら父は漸く納得し、F自身も悪かつたと一寸頭をさげて万に和解し、昨日の晩は共に飲合ひ、けさFは父へ土産物も出したと云ふ事だつた。自分は聽いて肯いて

「それは有難う」

と叔父の取成に頭を下げ、父が傍へきて叔父は目の前の事に話をかへた。

別れて大阪へ戻る叔父へ裏畑に咲いた水仙の花數本剪つて紙でゆはへて土産にやつた。父と自分と門の方に見送りにたちでたら、叔父は玄關で何か一寸話してゐた。それを妻は自分に斯く告げた。

「さつき叔父さんは仕事ができんでは年暮に借金せねばならんだろ、他處へ行かずと大阪へ曰つてくれば用達てるからつて。わたし人にお金の事いはれた例はないでしよ宅はもうこんな風と思ふと其折寒氣が出ましたわ」

父の傍へトシコはつきゝりで白髮頭いぢつたり膝や肩にかき上り、老人は重味に壓され相で

「あぶに乗つたく」

と肩車の國詞「あぶ」の動作もやつたりした。風呂が立つとトシコはお祖父さんとお湯に入ると曰つて中々肯かず、さすがは肉親で斯く懐つくのだつた。風呂の中でトシコは、お祖父さん幾つ茲へ幾ていく

かと訊き、二ッ寢て行くと答へたら指でこれだけ三ッ寢て行けと曰つてこんなにませた口をきいたさうだつた。

晩の食卓で、父は一昨日は從弟に案内され大阪城の龍石虎石など見物したと曰つて、また奈良は昔一遍きて、五十年も前の事で西南戰爭の前の年父は二十二才の初旅だつたと語つた。それは四十日程巡つて歩き、遠州の秋葉山尾張名古屋伊勢の大神宮、伊勢を立つて三日目に大和の初瀬寺にきて泊り、奈良からくらがり峠越へて大阪へ出、京都見物もし、これだけの旅に連中銘々の出分が八圓何十錢、他に自身の小使錢もそれ位つかつたが、もの丶安い時分で田舍の宿屋は一泊十錢大阪邊の上等の宿屋で十六錢位で、奈良は印判屋大阪は堺筋平野屋佐助京都は三條小橋釘ぬき屋に泊つたと云ふのだつた。

次の日の午前、父の見物の案内に自分とトシコとつれだつて出た。近所の新藥師寺の東門から境內に入れば堂の後ろの垣ごしに自家の裏庭が見えるのだ。玆の金堂の屋根の勾配のゆるやかな工合見て父は大工だから建築の方は分つてほめた。南門から田甫のへりに出て高圓山の方みて「冬枯れで何もないことい」と父は云つたが自分は空つと枯らびた今が奈良で最も好い時節だと思つて氣持のちぐはぐを感じた。

春日の若宮、本社と毎例の道順に見て廻つた。神馬の所の厩番がトシコに向いてへんに莞爾し見ると宅の近所の小母サンだつた。嫩草山は禿たらしく枯れて上は際立つて聚た桝に見え、父は五十年前の時ここの路はもつとせまかつたやうに憶出し、また大佛殿は足場掛があつたと曰つた。大佛殿の中でトシコは柱の潜抜孔をば何遍も犬のやうに潜り抜けたりした。南大門の前眞直く商品陳列所へきて父に商品陳列所へ入るかときくと見んでもよいといつた。博物館見るかときくと父は博物館は見やうといつた。館內で父は乾漆木芯の骨組の前に立盡し良い形だとほめ父のことばに感じがあつたが、けれどもまた刀劍鎧兜などの室から中々出ん父にはいら〳〵された。公園で父は未だ興福寺に廻らうと曰つて足も達者にみえた。ずつと下もの南圓堂と猿澤の池の傍まで行つてみた。

戻りには疲れたトシコを手で負ぶつて、天滿宮の高臺でベンチに休んだ。見はらしのよいベンチの上から町の中に二棟の白壁のSさんの宅が見え、Sさんの世話で妻を娶つた自分は今度來た父が挨拶に行けばよいと昨日も考へてみたが父は些も曰ひださんのだつた。

「あの白壁がSさんの宅だ」

「ふうん彼處か」

「Sさんへは一遍挨拶に行くといゝか」

と自分は玆でいふと

「俺や、おかずも」

と父は曰つた。自分は一寸白らけた氣持にされ父と折合はん風に不キゲンに宅の方へ步いた。

宅で、父は明日京都の智恩院へ詣つて夜汽車で國に向ふ豫定といふから、自分は引留めもせず、手荷物は兩方乘合自動車へ持込めんから土産物や僕の本贈りの雛形は郵便小包にさせて、小包に造つた。

晩に、父は明日京都の勝手が分らんでと案内されたい風に曰つたが、自分は岐阜迄出迎へ樣と思つた位だから京都の案内位は容易い訣だがへんに億劫で、ついて行くと曰はなかつた。

次の朝停車場迄送つて行つた。自分は父に務めんでも我儘曰つてもよいと思つて京都行は斷つたら一人行つても勝手は分らず」と父も曰つた。さうして自分はプラットフオ ムから汽車の窓の父の白髮頭を見送つた。

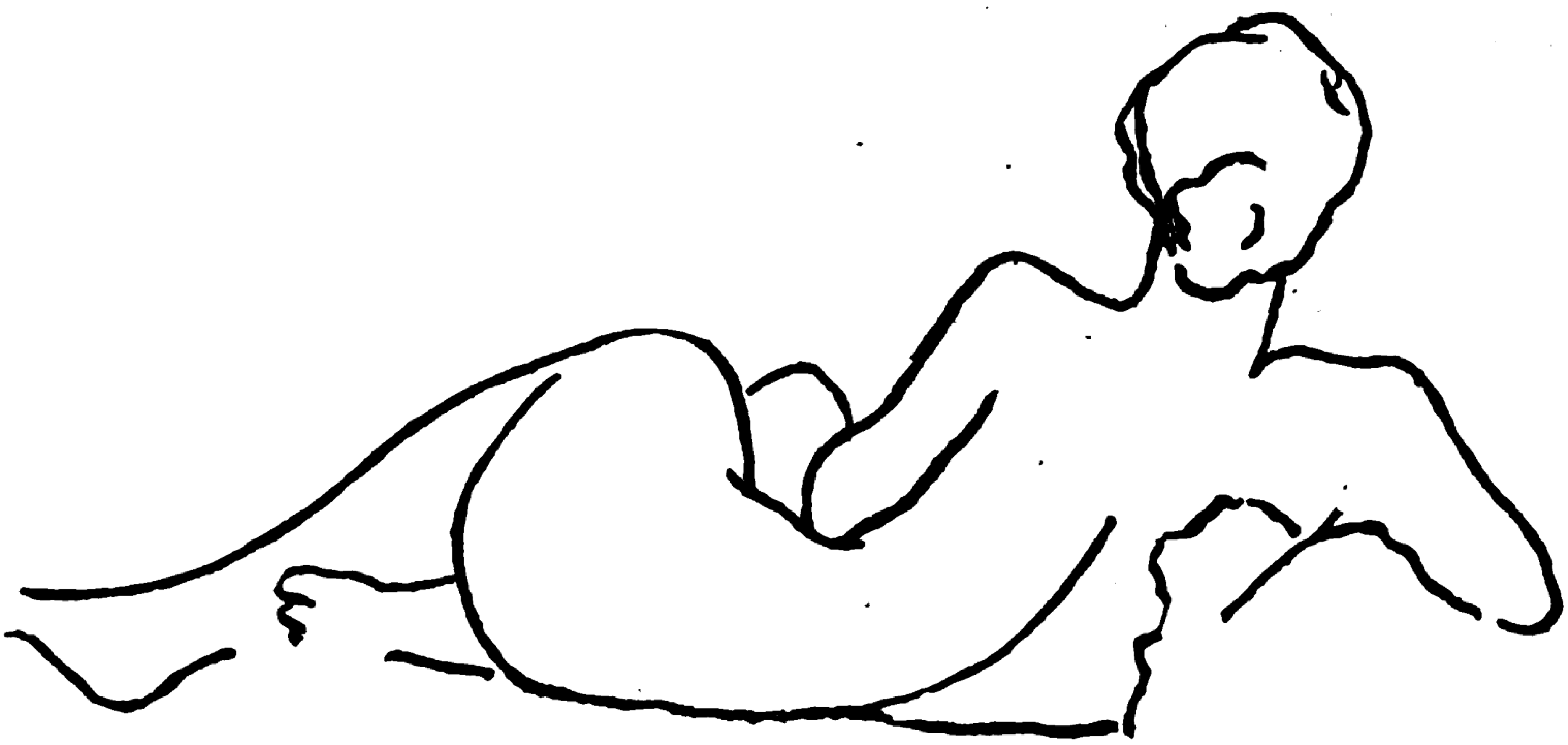
妻は自分に向いて曰つた。

「年寄つて隙かなものネ、お歸りになつた跡何か淋しいわ」

「老うた愛嬌がある、なあ」

と父の俤が憔悴と共に目に浮んだ。然し合へば度々いらくされたし、妻子持つと父に隔たると云ふことも漸く知つた自分だつた。かく好劇家は持たん此方へ父の言葉つきは感染つて、跡何日も自分の口元から國訛がとれんのだつた。

（三年一月）



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その二

ところがそれから二三日たちますと、又モデルの時間に校長先生が這入つていらしつて、私の繪の前に立ち止まつてはにやにやお笑ひになるんですの。さうして「柿内さん」て仰つしやつて、「柿内さん、どうも此の繪は變ですね。ますますモデルに似ないやうになつて來ますね。いつたいあなたは誰をモデルにしていらつしやるんですか」つて、妙に冷やかすやうな眼つきで私の顔をじいッと視つめるんですの。「おや、さうでございますかしら。モデルに似てをりませんですか」つて、わたくし癪にさはりましたものですから、わざとさう云つてやりましたの。だつて校長先生は繪の先生ではないのでございませう?――はあ、日本畫の方の受け持ちは簡井春江先生なので、始終おいでになる譯ではなく、ときどきやつていらしつて、何處が惡いとか此處を斯うせよとか仰つしやいますので、ふだんは生徒たちが勝手にモデルを見て畫いてをりますの。校長先生と云ふのは、隨意科の方に英語がありまして、それを教へていらつしやるんださうですけれど、學士でも何でもございませんし、何處の學校を出ましたんですか、學歴なんか

ゝゝゝゝもろくろくないらしい方なんですのよ。それは後になつてから分つたんでございますが、教育家と云ふよりは學校經營が上手な人なので、つまり一種のやり手なんでございますね。さう云ふ校長さんなのでございますから、繪のことなんか分る筈はございませんし、餘計な嘴を入れる必要はないのでございます。それに又、學科の方はたいがい專門の先生たちに任せきりにしてめつたに教室を見廻ることなんかございませんのに、その時間に限つてわざわざやつていらしつて、わたくしの繪を何とか彼とか仰つしやるんですの。「へえ、さうですかね、あなたは此の繪が此のモデルに似てゐるつもりなんですかね」つて、皮肉な口調で云はれましたものですから、此方も空惚けてやりまして、「はい、わたくし繪は下手でございますから、似てをりませんかも知れませんけれど、でも自分では一生懸命モデルの通りに寫しましたつもりでございます」つて申しますと、「いや、あなたは下手ではありません。なかなか上手に書けてゐます。しかし此の顏は、どうも誰か外の人に似てゐるやうに思はれますね」つて、又さう仰つしやるのです。「ああ、顏のことでございますか、顏はわたくし、自分の理想にかなふやうに書いてみました」つて申しますと、「ではあなたの理想と云ふのは誰のことですか」つて、隨分くどいんでございますの。それからわたくし、「此れは理想なのでございますから、別に誰と云ふ實在の人間を描いた譯ではございません。觀音さまのお顏にふさはしいやうに出來るだけ淸らかな感じを持たせましたのですが、それではいけないのでせうか。顏までモデルに似させなければ惡いんでございませうか」つて申しましたの。すると、「あなたはたいさうむづかしい理窟を仰つしやる。しかし理想通りのものが思ひのままに書けるやうならば、此の學校へ繪を習ひに來るには及ばん。理想通りに書けないからこそモデルに就いて寫生するのではないですか。自分勝手の繪をかくくらゐならモデルを使ふ必要はありません。まして此の觀音さまがモデル以外の或る實在の人間に似てゐるとしたら、あなたの理想と云ふものも甚だ不眞面目に思へますね」つて仰つしやるので、「わたくし少しも不眞面目ではございません。假りに此の顏が誰方かに似てをりましても、その方のお顏が觀音さまの感じを出すのに適してをりましたら、それを寫しても藝術的に疚しいことはないと存じます」つて申しますと、「いや、それがいけないのです。またあなたは一人前の藝術家ではありません。あなたがその人の顏を淸らかであると感じられても、萬人がさう感じるかどうか、それが問題です。さう云ふことから兎角誤解が起るのです」つて云ふ譯なんですの。「へえ、誤解つて、どんな誤解が起るんでございませう? ぜんたい似てゐる似てゐるつて、誰に似てゐるんでございますの、どうか仰つしやつて下さいまし」つ

て云つてやりましたら、ちよいとどぎまぎして、「あなたは薄情な方ですねえ」つて仰つしやつて、それきり校長先生は默つておしまひになりました。わたくしその時は校長さんをやり込めてやつたので、喧嘩に勝つたやうな氣がして、ひどく痛快でございましたわ。けれど大勢の生徒たちの前で議論したのでございますから、それがすつかり評判になつてしまひまして、間もなく變な噂がひろまるやうになりましたの。つまりわたくしが光子さんに對して同性愛を捧げてゐる、光子さんと私とが怪しいと云ふのでございます。――それが前にも申しましたやうに、まだその時分は光子さんと口をきいたこともなかつた程なのでございますから、出鱈目も出鱈目、實にひどい嘘なんですの。尤もわたくしは、うすうすみんなが蔭口をきいてゐることぐらゐは感づいてをりましたものの、それがそんなに騷がれてゐるようとは夢にも存じませんでした。何しろ身に覺えのないことなのでございますから、何を云はれましても平氣なもので、まあ、世間の人ツて隨分好い加減なことをいひ觸らすもんだ。附き合つてもゐない人同士が怪しいなぞと、いくら作り事にしてもよくまあそんな嘘ツぱちが云へたもんだと思つて、あまり馬鹿馬鹿しいので腹も立ちませんでしたの。ただ心配になりましたのは、わたくしはそれで構ひませんけれど、光子さんの方はどう思つていらつしやるか、嘘から飛んだ係り合ひになつて迷惑していらつしやるに違ひないと考へますと、それからは斯う、學校の往き復りなぞに出遇ふことがありましても、何だか氣がさして、先のやうにお顏をしげしげと見守ることが出來ませなんだ。さうかと云つて、思ひきつて此方から話しかけて、お詫びをすると云ふやうなことも、――それが却つて變なことになりますし、なほさら迷惑なさるかも知れませんので、さうする譯にも參りません。それでわたくしは光子さんに行き遇ひますと、出來るだけお詫びの心持ちを外に現はすやうにしまして、小さくなつて、下を向いて、こそこそと逃げるやうに側を通り拔けましたが、さうしながらも、先樣が怒つていらつしやりはしないか、どんな眼つきをしていらつしやるか、矢張り氣がかりだものですから、擦れちがひさまにそうツと顏色をうかがつたりいたしました。ところが光子さんの御樣子は以前とちつとも變つたやうなところはなく、別に此方を不愉快に思つていらつしやる風にも見えませんの。あ、さうさう、此處に寫眞を持つて參りました。此れを御覽下さいまし。此れはおそろひの着物が出來ました時に二人で記念に撮りましたので、新聞にも出たことのある問題の寫眞なのでございます。此れでもお分りになりますやうに、かうして並んでをりますと、わたくしが引き立て役を勤めた形で、光子さんは船場あたりの娘さんの中でもちよつとづば拔けた器量なのでございますの。(作者註、寫眞

を見ると、おそろひの着物と云ふのは如何にも上方好みのケバケバしい色彩の物らしい。柿内未亡人は束髪、光子は島田に結つてゐるが、大阪風の町娘の姿のうちにも、その眼が非常に情熱的で、潤ほひに富んでゐる。一と口に云へば、戀愛の天才家と云つたやうな氣魄に充ちた、魅力のある眼つきである。たしかに美貌の持ち主には違ひなく、自分は引き立て役だと云ふ未亡人の言は必ずしも謙遜でないが、此の顔が果して楊柳觀音の容姿に適するかどうかは疑問である。）先生はかう云ふ顔だちをどうお考へになりまして？　日本髪がよく似合つてをりますでせう？——はあ、お母様が日本髪がお好きだとか云ふことで、ときどきお結ひになりましたの、學校へおいでになる時でも。——
——そんな學校でございますから、制服なぞはございませんし、日本髪の着流しでも何でも構ひませんのですから、わたくしなんか袴を穿いて行つたことはございませんのよ。光子さんも、たまに洋服をお召しになることがございましたが、和服の時はいつも着流しなのでした。此の寫眞ではお顔のせゐで私より三つぐらゐお若く見えてをりますけれど、ほんたうは一つ歳下の二十三、——生きていらつしやれば今年が二十四なのでございます。しかし光子さんの方が一二寸せいが高うございましたし、それにお綺麗な方と云ふものは、自分では器量を鼻にかけないつもりでも、やはり何となく自信のある様子が態度に現はれるものでせうか、それとも此方に引け目がありますとさう云ふ風に見えますのでせうか、その後親しくなりましてからでも、幾分から云へばわたくしの方が姉さんでありながら、いつも妹のやうな氣がしてをつたのでございます。

で、その時分、——と申しますのは、話が前に戻りまして、まだお互ひに口もきかないでをりました時分、前に申しましたやうな噂が立ちましたことは光子さんの耳へも這入つてをらない筈はございませんのに、それにも拘はらず、光子さんの様子は少しも前と變らないのでございます。わたくしの方では疾うからお綺麗な方だと思つて、噂が立ちません時分には、光子さんがお通りなると、それとなく傍へ寄つて行つたりいたしましたけれど、光子さんの方ではとんと私なぞ眼中にないやうな様子で、すうッとお通りになつてしまひますが、そのお通りになつた跡の空氣までが美しいやうな氣がするのでございます。もしも光子さんが例の噂を聞いていらつしやるとしましたら、いくら何でも私と云ふものに注意なさらない譯はないでございませう。イヤな奴だとお思ひになるか、氣の毒だとお思ひになるか、何とか素振りに見えさうなものですのに、さつぱりさう云ふ風がございませんものですから、私の方も段段づうづうしくなりまして、また傍へ寄りましてお顔を覗き込むやうになりました。すると或る日、お午の休み

に休憩所でぱつたり出遭ひますと、いつもすうツと澄まして通り過ぎておしまひになるのに、どう云ふ譯かにこツとなすつて、眼でお笑ひになるのです。それで私思はずお時儀をしてしまひますと、直ぐつかつかと寄つていらしつて、「わたくし、あなたに此の間から大變失禮してをりました。どうぞ惡くお思ひにならないで下さいましな」つておつしやるんですの。「まあ、何を仰つしやいますの。わたくしこそお詫びを申し上げなければならなかつたのでございますが」つて申しますと、「あなたがお詫びをなさることはありませんわ。あなたは何も御存知ないのよ。わたくしたちを陷れようとしてゐる者がをりますから、御用心遊ばせよ」つて仰つしやいますの。「へえ、それは誰でございますか」つて伺ひますと、「それは校長先生なのよ」つて仰つしやつて、此處では詳しい話が出來ませんから、何處か外へ行つて、お晩御飯を一緒に附き合つて下さいませんこと？　さうしたらいろいろ、ゆつくり聞いていただきますが」つて仰つしやるものですから、「何處へでも御一緒に參りますわ」つて、二人で天王寺公園の近所にあるレストランへ參りましたの。それから光子さんが洋食をたべながら話して下すつたんですが、わたくしたちの事に就いて惡い噂を云ひ觸らしたのは實は校長さんなのだと仰つしやるのです。成る程さう云はれて見ますと、用もないのに教室へ這入つて來て、みんなの前でわざと私に恥を搔かせるやうな事をすると云ふのが、ずゐぶんおかしい。魂膽があつてしたものとしか思はれない。けれどいつたい何のために校長さんがそんな噂を觸れ廻るのかと申しますと、目的は光子さんにあるのださうで、何でも彼でも光子さんの品行に就いて惡い評判が立ちさへすればいいのだと云ふのでございますの。それが又どう云ふ譯かと申しますと、その時分光子さんに結婚の話が持ち上つてをりまして、先はMと云ふ大阪でも有名なお金持ちの家の坊つちやんで、光子さん自身は氣が進んでもいらつしやらなかつたさうなのですが、お宅ではたいさうその緣談を望んでいらしつたし、先方でも光子さんを欲しがつていらしつた。ところが或る市會議員のお孃さんで、やはりそのMさんへ緣談を持ちかけてゐる方がありまして、光子さんの方と競爭の形になつてをりました。――光子さんは競爭のつもりではなくつても、市會議員の方では大敵が現はれたと思つたのでございませう。何しろMさんの坊つちやんは光子さんの器量にあこがれていらしつてラヴレターを寄越したくらゐなのですから、それは大敵に違ひございませんの。それでその市會議員の方では八方へ運動しまして、成らうことなら光子さんにケチを附けようと云ふので、もう今迄にも隨分いろいろと、光子さんがお店の店員と醜い關係を結んでゐるとか、外にも男があるらしいとか、有ること無いこと云ひ觸らしてをりましたんださ

うでございますが、まだそれだけでは飽き足りないで、とうとう學校の方へ手を廻しまして、つまり校長さんを買收したんでございますね。あ、さうさう、それからその前に、――話が少々こんごらかつてをりますけれど、――その前にその校長さんが、校舍の修繕をするからと云ふので、光子さんのお父様に、お金を千圓一時融通して貰へまいかと云つて來たことがございますんですつて。光子さんのお宅ではお金はうんとおありになるんですから、千圓ぐらゐ何でもなかつたのでございませうが、おほびらに寄附金を募るのなら聞えてゐるが、一時融通してくれと云ふのはをかしい、それにあれだけの校舍が千圓のお金で修繕出來る筈もないし、どうも分らない話だと云ふやうなことで、お父様はお斷りになつたのださうですの。光子さんのお話だと、さう云ふことを云つては、お金の有りさうな生徒の家をいたぶるのが校長さんの癖なのださうで、借りたお金は一ぺんだつて返したことはございませんのですつて。それも校舍の修繕に使ふのなら格別、校舍と云ふのはまるでもう豚小屋みたいに汚くつてぼろぼろになつたり、荒れ放題にしてあるのでございます。――はあ？ いいえ、そのお金は自分の生活費に使つてをりますの。校長さんと云ひましても高等師範出のやうな人で、おまけに奧さんが矢張りその學校の刺繍の先生をしてをりまして、夫婦でお金持ちの生徒に取り入つては、日曜のたびに遠足會だの芝居の連中だのつて、そんなことばかりやつてをりますものですから、なかなか暮しが派手なんでございますの。それでお金を貸して上げればたいさう御機嫌がよいのださうですが、お斷りすると、陰へ廻つてその生徒のことを糞味噌に申しますのですつて。つまり光子さんにはさう云ふ恨みがあるところへ持つて來て市會議員に頼まれたのでございますから、どんな惡辣なことだつて致しかねないのでございます。「ですからあなたはわたくしを陷れるために利用なされなすつたのよ。わたくしは仕方がないとしましても、あなたこそ飛んだ御災難ですわ」つて、光子さんは仰つしやいますの。「まあ、そんな深い譯があつたのでございますか、そんな事とはちつとも存じませんでしたが、それにしましてもあなたと私とは今日までお附き合ひもしてをりませんのに、あまり出鱈目が過ぎるではございませんか。捏造する人も捏造する人なら、皆さんがそれを眞に受けると云ふのが不思議でなりません」て申しますと、「あなたはそれだから吞氣よ」つて仰つしやつて、「噂が立つたものだから、二人はわざと學校では口をきかないのだつて、みんなさう云つてゐますのよ。それどころか、此の間の日曜に二人が大軌電車へ乘つて奈良へ行くところを見たと云ふ人さへあるんですのよ」つて仰つしやるんです。わたくし呆れてしまひまして、「まあ、誰がそんなことを申すんでせう」つて云ひますと、「なんでも校長さんの奧様から出たらしいんですの。それはそれはあなたが考へていらつしやるより十倍も二十倍も陰險なんですから、お氣をつけなさいまし」つて云ふ譯なのでございます。

（つゞく）



燕（一幕三場）

佐藤春夫

老婆——少し氣がへんである。
お粂——四十位の女。
いさ——老婆の孫。お粂の娘。十二三。

1

百姓の家とも漁師の家とも思へる小舍の一室。廣い土間の向ふに入口がある。土間のこちらは茣蓙を敷いた板の間である。建物は黑く煤けてゐる。この部屋と奧の間とを仕切る古びた障子には時折焰の影がさす。入口の外は薄明るい。部屋の中は殆ど暗い。入口からの鈍い外光と、障子に映る焰の影とでやつと人物の有樣などは認められる。

老婆、年齡不明、女にしては頑丈な體格。しかし中風のやうな病氣で半身不隨になつてゐる。それが板の間の土間に近い所へ坐つてゐる。その側に孫娘のいさが立つてゐる。

戸の外では激しい風の音がして、明けつ放した入口からも時折風が吹き込んで部室の障子が揺れ震へる。

お粂（彼女は障子の影の次の間から話しかける）いさ！ なぜ早くかいどを締めんか。そこから這入つて來るんぢやろ、風があふつて危くて火がもされん。

いさ（母には何も答へずに祖母の耳元で大聲で云ふ）かいどを締めんと危い〳〵て火をもされんと。

お粂（いさの言葉につけ足すように、叫ぶが如く）障子も何も今に飛んで了ふよ。

老婆 待て、待て、親燕が今に歸つて來るのぢや。それまでかいどを開けて置いてやらんと燕がかあいさうぢや。

お粂（叫ぶが如く）ばさま。何を云ふのぢや、いくら燕かてもうこの暗がりに、そとでこの風に吹きつさらされて何んでうろついてゐるもんか。もうとつくに巢へ歸つたんぢやろ。構はん、構はん。早くかいどを締めてままを食べにお出でよ。

老婆 いいや、いいや。親燕はさつき出たきりまだ歸らんのぢや。このしけであれも餌が見つからんのぢや。あれが歸るまで開けて置いてやらんと、あれは歸れんわい。

お粂（叫ぶ）歸つたのぢや、歸つたのぢや。ばさまは眼が霞んでそれが見えなんだのぢや。それにきまつてゐる。ばさまのとろい眼でこの暗りに燕の番したとて燕のつの字も見えるものかのう。

老婆（半呟くが如く）さうぢやない、さうぢやない。おれはもう毎年毎年かうして燕の番をしたれてゐて、巢立ちする燕をまた一度も見のがしたことはない儀ぢやわ。もう巢立ちして飛んで了ふといふ時には、二日も三日も前から親子の素振りで分るのぢや。今日はこのしけでさへなければ、あれ等は飛び立つ積りぢやつたのぢや。わしには何もかもちやんと見通しぢや、親の燕はさつき行つたぎりまだ歸らんのぢやわい。眼は見えいでも羽音の氣配でもわしにはちやんと分るのぢや。嘘ぢやと思ふたら踏つぎと蠟燭とを持つて來て巢の中を覗いて見るがいい。ひよつと歸つてゐるならおれも安心ぢや。門を締めて貰はう。

この時風特に激しく表口より吹き込む。

いさ ばさま。それぢやこうしよう。少し——燕の出這入り出來る程開けて置いて外は締めて了はう。どうぢや、それでええぢやらう、のう。

老婆 踏みつぎを持つて來て覗いて見ろ。

いさ うちにや、そんなものあない。（言ひ乍ら土間へ下りて行く、さうして九尺を二枚で締める頑丈な障子を締める。重さうで立てつけ

のよくないもの。締め切らずに二三寸だけ隙けて置く）ばさま、これでえゝぢやろう。（子供の機嫌を取るやうに）、ねえ、ねえ、かうやつて置けば大丈夫ぢや。燕は賢い鳥ぢやさか、こゝから抜けて來るよ。

お粂　さうぢや　さうぢや、さうして置けば大丈夫ぢや、さうして置いて早うこつちへ來てみんなまゝを食ふのぢや、こんな日は早くしまうてしまうのが第一ぢや。いさよ、いさよ、こちらへばさまを連れて來い。

　次の間に灯を燈したらしく障子が明るくなる。

いさ　ばさま、（祖母の側に寄り添ふてその手を自分の肩に掛けながら）、そら立つのぢや。

老婆（不精無精に立ち上る努力をしながら）どよつこいしよつ。

いさ（殆ど老婆と同時に）どよつこいしよつ。

　老婆はいさの肩にすがつて歩き出す。

×　×　×　×

×　×　×　×

2

次の間。高い所から釣りランプの鎖が下つてゐる。薄暗いランプが燈つてゐる。ランプのホヤは上の方は煤けて曇つてゐるが下の方は奇麗に磨かれてゐる。大きな紙製の傘がその上に被さつてゐる。奥の方に火の氣の無くなつた爐が見える。古びた荒壁の上にはいさの古い習字などが張られてある。その傍に佛壇のやうなものが見える。習字の紙は釣りランプの火が時折り風が入つて揺れる。三人にしては大き過ぎる木の飯臺に老婆とお粂といさとが坐る。

老婆　かういふ晩には火の用心が何よりぢや。

お粂　それを知つてゐながらなぜまた早うかどを締めてくれんのぢや。こんな晩に火を焚きたうないと思ふたが飯が無くなつて了ふたのぢや、今日はいゝもんがゆぢやぞ。

いさ　ほんとうにえらい風ぢや。

お粂　こんな風をうちの中へ吹き込ましては障子が飛んで了ふばかりぢやない。それで無うてさへ潰れたがつてゐる小舍ぢやもの、めちやめちめちやに砕けて飛んで了ふぞ。（小聲でいさに）表は隙けてあるんぢやろう、しつかり締めて來ておくれよ、――戸も。そつと行かんとばさまがうるさいぞ、ばさまはまるで氣狂ひぢや、燕のことさへいへば。

いさ立つて出て行く。すぐ歸つて來る。

老婆（いさを見咎めて）どこへ行つて來たんぢや。

いさ　ご飯の前ぢやもの、――途中ぢや惡いと思ふて小用して來たんぢやよ。

三人食事を始める。

お粂（耳を傾けて）たうとう雨も降つて來た。沖へ出てゐる舟がなければええが、いや、じげには今日は一艘もない筈ぢやが餘所の濱には出た舟もないと限られんわ。毎年この季節にはきつとこんな早風が來るのはどういふ譯けぢやらう。よう忘れんわい、いさ、お前のぢいさんやとうさんが佛になつたのもこんな風のお蔭ぢやつた。仕方がない、うちばかりぢやないわ。いや、じげから十七艘出た舟が一艘も歸らんのぢや、お前が恰度また腹の中にゐた時分のことぢや。

老婆　何をつまらん話を始めたのぢや。子供にそんな話をきかして何になるかよ。

お粂　ばさまは氣の强さうなことをいふ人ぢやが、いさ、ばさまはお前が生れた時から（小聲で）少し氣が變になつたのぢや。お前の顏を父さんに見せてやり度かつたとそんなことばかり云つて、氣病をしたのぢや。いつも頑固な强情なことばかり云ふばさまぢやが、大根はやさしい人なのぢや。それでなきや、わしらも迚も辛抱は出來なかつた筈ぢや。

老婆（耳を傾けてゐたが小聲の話がきこえぬので）お前等は何の話をしてゐるんぢや。

お粂（淋しく笑ひ乍ら）燕の話をしてゐたのぢや。

いさ（母と同じやうに笑ふ）ばさまが燕の好の話をしてゐたのぢやわ。

老婆　おれは毎年毎年燕の番をしてゐて、巣立もして飛んで行く燕をまた一度も見逃したことはない程ぢや。燕は旦那衆の軒でなければ來んといふが嘘ぢやわい。それが嘘ぢやなけやこのばばあのうちも旦那衆ぢやわい。

お粂　ばさまはそれが自慢ぢや。

老婆　それはさうと親燕はもう來たぢやらうな。

お粂　とつくに來てゐるよ。燕ぢやとてこの吹き降りに何んでいつまでもうろ〳〵してゐるものか。

老婆　さうぢや、さうぢや。あれは賢い小鳥ぢや。

いさ　波の音が段々强くなるのう

お粂　さうぢや、風が酷いので分らんが風が絶えるとえらい音がしてゐるな。まるで地鳴りぢや。津波でもせねばええが。

沈默

お粂　夏蜜柑はみんな落ちたぢゃらう。夏蜜柑はしまひぢゃさか落ちてもえゝが、蜜柑は大事ぢゃ。

いさ　稻は？

お粂　稻は大丈夫ぢゃ。大丈夫ぢゃ、まだ風に當る程に延びてゐるものかよ。――うちのような芋作りはどんな風でも何の心配もないわい。（さびしく笑ふ）

いさ（手で額の汗を拭きながら）芋粥はうまいが食ふと暑いのう。

いさ食事終り立つて食器の後始末をしようとする。

お粂　構はんとおけ、あしたのことにしよう。（默つてゐる老婆に）ばさま、默りこくつて何を考へてゐるんぢゃの。

老婆（お粂の顔を見上げて）何も考へてないわ。

お粂　こういふ晩には早く寢るに限るのぢゃ。（獨言らしく）ぢゃが、こんた風と波とではおち〱と睡つてもゐられぬわい。

いさ　橋が流れねばよいがのう。

お粂　雨はそれほどには降つてない。

×　×　×　×　×　×　×　×

3

翌日朝。風雨の音全く止みたゞ時々昨夜の名殘らしく波の音が聞える。

Ｉと同じ場面。

いさ老婆を助けて入口の間の端土間に近い所に老婆を坐らせる。

老婆（呟くが如く）靜かなええ天氣ぢゃ。お前等が巣立ちには以つて來いぢゃ。まてまて、今にかどを開けてやるぞ。

いさ土間に下り草履をつつかけて表の戸を隙ける。その時光線とともに戸外から燕が驀進に入口を潜り抜ける。

いさ　あッ、あッ、

老婆　親燕ぢゃないか。――それ見ろ！

燕再び戸外へ翔けり去る。老婆顔を捻ぢ向けて梁の上を見上げる。次の瞬間土間を見下す。

老婆　やッ！（驚駭。沈默。續いて喚く）お粂、出て來い。出て來い。いさ、これを見ろ。

お粂（障子を開けて覗き乍ら）ばさま、なんぢゃのう、大きな聲を出して。

いさ（振り返つて、同時に）やつ（走り寄つて土間から生育した燕の子を兩手に一杯掬ひ上げて、それを老母とお粂との眼の前に突き

出す。

お粂　何んぢや！　どうしたのぢや。

老婆　何を言ふのぢや、夕べお前等が殺したのぢや。歸らぬ中に親燕をお前達が締め出してしまつたんぢや、――その留守に子供があばれて落ちたのぢや、知れたことぢや。きまつてゐる。きまつてゐる。

お粂　さうかしらん。そんな筈はあるまい。風に吹き飛ばされて落ちたんぢやらう。

老婆　何をいふんぢや。親燕は今戸を開けるのを待ち兼ねて飛び込んで來たわ！

いさ　それはほんとうぢや。

老婆　（始めは強く段々力無げに）お前等はまだ日も暮れ切らん中に燕の親を締出して了うたのぢや。うちの中は暗くてもまだ戸外は明かつたのぢや。――いつも岬へまだ日が當つてゐる時分にでも、ここのうちは日が翳つて了ふてうちの中が眞暗になつて了うことを、お前等は忘れて了うたか。うちは夜でも空は暮れずに殘つてゐたのぢや。……………

この時燕再びせわしく入つて來てまた飛び去る。いさ、燕の後を追ふて開けかけて五六寸隙いてゐる戸を開けつ放して、戸外へ駈け出す。

戸外は輝くような朝。その朝の光の中に空を仰いでゐるいさの姿がくつきりと浮び出し、これにくらべて室内の老婆とお粂とはただ黒い影のやうに感ぜられる。

いさ　（子供らしく手を上げて叫ぶ）燕！　燕！　空一面。何處から來たんぢやらう、燕が集つた。

老婆　（低く力強く）知れたことぢや、みんな勢揃へをして今日は海を越えて立つんぢや。その中でうろ〳〵子をさがしてゐるのがうちの燕ぢや――見ろもう來年からはうちへは燕は來るものか。

無言のお粂が最も悄然として立つてゐる。

父よ悲む勿れ

麻生久



一

大正十一年二月始の、或吹雪の激しい日の午後の事であつた。降り積む雪の中を喘ぎ喘ぎ進んで來た夕張線の下り列車が、雪に塗れた重たい長い身體をM驛のプラットホームに横たへると、三等列車の中から皆の客に交つて降りて來た卅二三の青年があつた。

彼は全で雪と云ふものを知らない國からやつて來でもしたかの樣に、頭には古びた黒の中折帽を、無雜作に被り、襟卷も無く、手袋も篏めず、服の上には、最早あらかた毛の擦り切れた古外套を着てゐるばかり、それに、持物と云つては、左の腕に抱へてゐる、これも極く古びた黒の折鞄たゞ一つであつた。

けれ共、見るからに頑丈とした其體格、沈着てはゐるが、飽くまで明るい元氣に滿々た其風貌は、てんで、寒さなんかを氣にもとめてゐない風に見えた。

彼は、プラットホームに降ると、暫時そこに佇んで誰かを探し求める樣に四邊を見廻した。けれ共、吹き晒のホームには吹雪を避けて乘降を急ぐ者の姿ばかり、夫れらしい者の姿は何處にも見當らなかつた。そして降り立つた客は何時の間にか立ち去つて、プラットホームには彼一人取り殘されて仕舞つた。それでも彼は別に狼狽てるでもなく、一寸の間に全身に降り積んだ粉雪を一と搖りしてから、皆の後を追つてのそ〳〵と階段を昇り、橋を渡つて出口の方へ歩て行つた。

雪の曠野に建てられた停車場は、吹雪に晒されて、待合室の中まで粉雪が舞ひ飛び、停車場前の灰色の廣場を默々と歩いてゐる者は、皆長い外套に全身を包み、大きな頭巾を頭からすつぽりと被り、やゝ俯向き加減に、のそ〳〵と歩いてゐるので、全で、熊が立つて雪の中を歩いて居るやうに見えた。

彼は、一人遅れて改札口の外に出ると、もう一度そこに佇んで、あちこちと、そこいらを眺め廻したが探す者の姿は何處にも見えなかつた。そればかりでなく、又一しきり外から吹きつけて來た粉雪が、遠慮會釋もなしに彼の顔を埋めたので、流石の彼もたじたじとなつて、顔を反けざるを得なかつた。と、不意に彼の後の方から聞き覺へのある快活な聲が耳に這入つて來た。

『黒田君、こつちだ。こつちだ』

彼は思はず其聲に振り向くと、矢張袋の様な外套に全身を包み、大きな頭巾を被り、長靴を穿いた背の高い一人の青年が、急いで彼の方にやつて來るのを見つけた。すると、彼は満面に微笑を浮べながら、

『やあそんな處にゐたんだね』

と叫ぶと、近づいて來た青年の方に手を差し延べて其手をぐいと握りながら、今度は彼も快活な聲で浴びせかけるやうに云つた。

『危なく雪中の迷兒になる處だつた』

彼の前に立つた青年は、これも満面に悦ばしげな微笑を浮べながら叫んだ。

『いや、僕は又君が餘まり出て來ないもんだから迂路〱してこつちも迷兒になりかゝつてたんだ』

彼はさう叫びながらも、ふと相手の餘りに無雜作な服裝に氣が付くと、又第二の叫び聲をあげた。

『こ奴あいけない。此吹雪にそんな恰好ぢや餘り亂暴だ。』

彼はさう叫ぶと急いで自分の頭巾を外しにかゝつた。けれ共相手の青年は直ぐにおつ被せるやうに夫れを遮つた。

『大丈夫〱。止し給へ。雪にかけちやあ僕の方が先輩だよ。それより橇は大丈夫かい』

『橇? 橇なら最早準備が出來てるんだ』

『そ奴は有難い』

『でも蓋がなくて吹き洒しなんだが』

『そ奴あなほ有難い』

相手の躊躇したやうな態度を見ると、頑丈な青年は又おつ被せるやうに叫んだ。

『箱橇なんかに乘る奴は雪の味を知らん奴だ』

『でも君の仕度ぢや幾ら何でも……』

『心配しなくとも大丈夫だよ。君はまだ北海道の雪を知らないんだ。そら此通りサラ〱だよ』

彼は笑ひながらさう云ふと、相手の外套を摑んで無雜作に一と揺すり揺すつた。すると水氣のない粉雪は氣持ちよく外套の上から辷り落ちた。

『ハ、、、、』

二人は顔を見合せて快活に笑ひ合ひながら雪の廣場を橇の待つてゐる方に歩いて行つた。

二

橇をつけた馬は、鬣にも脊にも、いつぱい粉雪を浴びながら、前足を真直ぐに揃へ、頭を高く擡げて、キット前方を凝視ながら、如何にも雪に強い北國の馬らしく、元氣に滿ち滿ちて、吹雪の中に出發の命令を待つてゐた。

二人は腰掛臺に降り積つた粉雪を拂ひ落すと其上に飛び乘り、馭者の方に叫んだ。

『おーい。賴むよ。出して呉れ』

今まで爐ばたで煙草をふかしながら二人の來るのを待つてゐた老馭者は、その聲を聞くと立ち上つて荒いだみた聲で夫に應へた。

『おーい。今行くよ』

彼は煙管を筒の中に落し、夫れを外套のポケットに突込むと、のそのそ橇の方にやつて來て、一寸吹雪の空を見上げてから默々として馭者臺に腰を下し馬の手綱を取つた。

軈て、強い掛聲と一緒に、ピシリと云ふ氣持のいゝ鞭の音が馬の尻で鳴ると、馬は、ぐいと曳かれた手綱に、頭を高く擡げ、鬣を打ち振り、たじ／＼と二三歩後ろにしざつて、あがいてから、今度は足を取り直して馳け出した。

『お客さん寒かんべえ。えゝ惡く今日は霜が無くなつたゞ。でも此雪あ長かあねえよ。最早空が明かるんで來たゞ』

老馭者は、馬が調子よく馳け出すと始めて口を切つた。成程、さう云へば一寸の間に空が少し明かるんで來たやうだ。

『おつさん心配はいらないよ。うんと飛ばして呉れ。いゝ氣持だ』

頑丈な青年は、灰色の空から渾渾と降りそゝぐ粉雪を滿身に浴びなが、如何にも氣持よげに叫んだ。

又しても氣持のいゝ鞭の音が唸ると、橇は驀らに馳け出した。そして間もなく町は後方に消えて、曠漠たる雪の野原が現はれた。踏み馴らした雪の野道は又新しい雪を被つて、何處が道だか見分けがつかなかつたが、馴れ切つた馬は、規則正しい足取りで、雪煙を立てながら、鼻からは激しい息を吹き／＼馳け續けた。

二人の心は、何となく痛快な男性的な氣持ちに襲はれて、其張り切つた氣持ちは橇を襲ふ吹雪の寒さを克服する樣に思はれた。

頑丈な青年は相手を顧みながら快活な聲で云つた。

『どうだ、佐多君、雪の北海道の炭坑運動は。痛快ぢやないかね。でも最早半年になるから日本のシベリヤが厭になつたかねハヽヽ、』

『ハヽヽ、大丈夫／＼。僕も最早すつかり雪の人間になつちやつた。でも去年の秋の末に雪がチラ／＼やり出した頃は厭だつたね』

『ハヽヽ、あの頃は誰だつて厭だよ。全く陰鬱だからねえ。流石の君も參つたかね』

『まあそんな具合だつたなあハヽヽ、。併し最早今となつちや退引ならん。支部は續々出來るし、資本家の奴等あ計畫的に壓迫して來たか

らねえ。雪どけにや一と戰爭だ。奴さん等あ賃銀が下げたいんだが組合を怖れてるんだ。支部の連中も殺氣だつて來た―

さう云つた彼の言葉の調子の中には激しい戰ひに對する牢固たる決意が籠つてゐた。けれ共、彼はさう云ひ終ると、今度は幾らか聲を落して不審げに云つた。

「だが、今度、不意にこつちに來た用は何だかね」

それを聞くと頑丈な青年は落着いた聲で應へた。

「うむ。君には未だ何も知らせなかつたが少し僕の家の事でね。君は何か噂を聞かなかつたかね」

「うむ、一寸聞いた。M炭坑會社に合併されるとかつて。どうしたんだらう」

「なあに經營が絶望になつたのさ。小資本で炭坑なんぞやれはせんよ。どうせ沒落すべき運命を背負つてる奴は沒落するさ。だがその話は今夜ゆつくりやらう」

頑丈な青年は幾らか重くるしくさう云ふと今度は輕い快活な調子に返つて云つた。

「それより北國の女はどうだい。雪の樣に肌が白くて美人が多いだらう、ハヽヽヽ」

「ハヽヽ、全く綺麗だ」

「どうだい。運動には勇敢でも其方は臆病かね」

「ハヽヽ、まあそんな譯だ」

二人の青年は何の蟠りもなく顏を見合はせて高く笑ひ合つた。そして、其高い、快活な、力強い笑聲に降りそゝぐ粉雪を刎ね返すやうに思はれた。

三

二人の青年を乘せた橇が、曠漠たる雪の野原を突き切つて、遙か行手に、明るい光の密集したB炭坑町を見出したのは、最早雪の野原が黄昏れかけた午後四時近くであつた。雪は何時の間にか小止みになつたけれ共、空は相變らず灰色に蔽はれてゐた。

「あの光がB炭坑だ。最早近い」

脊の高い青年は、その光の方を見やりながら叫んだ。

「何て綺麗な光だらう。こんな景色は最早何年振りに見るんだか」

頑丈な青年も次第に近づいて來る其光の方を見やりながら氣持ちよげに云つた。

間もなく橇は雪に埋められた町に這入つて、これも雪に埋もれた氷柱に閉された、炭坑町の粗末な二階家の前に止つた。

「さあ着いた。これが僕等の巣なんだ」

脊の高い青年は眞先きに橇から飛び降りるとさう叫んだ。そして今度は道よりも低くなつた暗い家の入口の方に向つて叫んだ。

「おーい。今着いたよ」

すると、中から、幾分狼狽たやうな荒つぽい聲が直ぐに應へた。

『おーい』

そして三つの黒い影が續いて入り口の處に現はれた。

背の高い青年は、馭者の方に向いて、

『おすさん有難う』

と云つてから、今度は橇から降り立つた頑丈な青年の方を顧みて、

『さあ這入らう』

と促しながら、先きに立つて家の入口の方に降りて行つた。二人が降りて來るのを見ると黒い影の一つが大きな聲で、ぶつきら棒に云つた。

『ええ遲かつたんだなあ。寒かつたんべえ』

その聲の中には坑夫特有の人なつこさと温たかさとがあつた。二人は直ぐに其暗い入口から家の中に這入つて行つた。その家の中も同じやうに薄暗かつた。

背の高い青年は、家の中に這入ると、土間に立つて外套を脱ぎながら、無雜作に快活な調子で新らしい客人を皆に紹介した。

『そら、この人が君達の長いこと待つてた黒田さんだよ。それから此三人は、鳥山君に、篠原君に、藤田君、三人共熱心な會員なんだ。それからも一人、あれが鳥山君の妻君、今日は黒田さんが來るので御馳走をこしらへてるんだハヽヽヽ』

その聲を聞くと、薄暗い臺所で、せつせと何か御馳走をこしらへてゐた卅位ゐの質朴さうな女が、一寸こつちを向いて丁寧に頭を下げた。三人のうちの二人は、最早三十五六位ゐ。今一人はまだ廿二三の元氣な青年であつた。そして皆の顏付や、様子の中には、自然を相手に働いてゐる者に特有な、素朴さと正直さと、人なつこい人間らしさとが漲つてゐた。

頑丈な青年は、皆の前に立つて、温たかに微笑しながら默つて頭を下げた。

三人は最早以前から名前は聞いてゐるが、顏を見る事は今が始めてだ、石垣のやうにがつしりしてゐる癖に直ぐ親しめさうな氣のする彼の前に、何となく遠慮らしく、併し心の悦びを包み切れぬやうに、にこ〳〵して立つてゐた。そして彼が頭を下げると、皆も狼狽て頭を下げた。

階下の、廣いけれ共たゞ一間の室には陰氣な薄暗い電燈が一つとぼつてゐるばかり、たゞ、室の中央にある大きな爐裏には、如何にも炭坑夫の家らしく、石炭の塊が惜し氣もなくくべられて、盛んに赤い焔を立てながら粗末な室の中を輝かして、電燈の薄暗い光を補つてゐた。そして爐の上に釣るされた自在鍵には大きな鍋が掛けられて、何か御馳走がぐつ〳〵と煮立つてゐた。

頑丈な青年は上り口に腰掛けて、しみついた様になつた靴を脱ぎながら、如何にも氣持ちよげに室の中を見廻して云つた。

『やれ〳〵何年か振りに故郷に歸つた。今夜はゆつくり爐端で胡坐が組めるなあ』

『この味は東京ぢやあ味はへん』

二人はやつと靴を脱いで上にあがると、どつかと爐端に胡坐を組んで、兩手を差し出しながら冷え切つた身體を温めた。新らしく投げ込まれた石炭の塊は、パチ／＼と勢ひよく音を立てて跳ねながら、直ぐに黒い煙の中から赤い舌を出し始めた。

四

軈て、裏の方で風呂の火をたいてゐた若い坑夫が、大きな聲で呶鳴つた。

『風呂がわいたよ。這入らねえかね』

それを聞くと背の高い青年は思はず叫んだ。

『そ奴あうまい處に氣が付いた。さあ黒田さん這入らんかね。こんな巣でも風呂だけはあるんだ。寒い時には風呂に限るからね』

『そ奴は有難い。ぢや失敬しやう』

彼はさう云つて立ち上がると、直ぐに服を脱ぎ猿又一つになつて、頑丈な身體を運んで裏の風呂場の方に出掛けて行つた。

軒から掛け出しになつてゐる板屋根の粗末な風呂場は、周圍が藁でかこつてあるばかり、その板屋根からは、長い氷柱がいつぱい垂れ下り、骨を刺すやうな寒氣が、彼の強い皮膚を突き破るやうに容赦もなく迫つて來た。

『寒いねえ。有がたう』

彼は釜の前にしやがんで火をたいてゐる若い坑夫に聲を掛けると、湯槽の中にその太い身體を沈めた。若かい坑夫は元氣よく云つた。

『温るかあねえかね』

『大丈夫だ。有がたう』

『寒かつたんべえ、先生や頭巾も被つてゐねえんだもの、ひでえや』

『ハヽヽ、僕は北海道の生れだから雪なんか平氣だよ。君も北海道の生れかね』

『わつしや九州の直方だ』

『九州？ そ奴あ遠い處から來たんだねえ、ぢやあ北海道は寒いだらう』

『うむ初めはちつたあ寒かつたがもう馴れちやつて何でもねえや』

『ぢやあ來てからもう何年になるんだ』

『もう十年だあ。』

『十年！ もう長いね。ちつとは金が儲かつたかね』

『ハヽヽ、儲からねえや。儲からねえから組合を組織する樣になつたんだ』

『うむ、さうだ。組合はうまく行つてるかね』

『うまく行つてるよ。皆一生懸命だ。會社の奴等あ壓迫しやがるんだよ。壓迫しやがたつて今ぢやあ皆團結の威力つて事あ知つて來たからね。それに佐多さんと來ちやあ、全く勇敢で鐵のやうに強えんだからねえ。會社の奴等あひでえ事おつかながつてるんだ』

若かい坑夫は釜の石炭を掻き廻しながら、彼の方を見上げて、快活

な聲で小氣味よくさう云ふと、氣持よげに高く笑つた。

彼も風呂の中で身動きもせずに、『段々熱くなつて來る湯に身體を溫めながら其愉快な話に聞き入つてゐたが、思はず若かい坑夫の無邪氣な笑ひ聲に釣り込まれて自分も高く笑つた。

『ハ、、、、佐多君は强いよ。でも此頃は稼ぎはどうかね。組合が出來てから良くなつたかい』

若い坑夫は夫れを聞くと急に憤慨する樣な調子で荒つぽく應へた。

『會社がそ奴がいけねえんだ。會社の奴等あ、景氣のいゝ時にや散々つぱら儲けときやがつて、近頃、ちつと不景氣になると、二言目にやあ不景氣だ不景氣だつて云ひやがつて、稼ぎを惡くする事ばかり考へてやがるんだ。今に雪がとけたらストライキをおつ始めなくちやあ駄目だあ。』

その聲の中には强者に戰を挑まうとする弱者の單純ではあるが、決然たる意志が籠つてゐた。

彼は夫れを聞くと、底力のある眞面目な聲で訊いた。

『うむさうだ。だが皆は元氣はあるのかい。それに力は』

若い坑夫は決然と應へた。

『元氣はあるとも〳〵。今に聯合會を作つて皆一緒にでか〴〵にやるんだ。夫れまでうんと組合の力を强くするんだ』

『さうだ、組合をもつと强くしなくちや駄目だ』

彼も風呂の中から低いが底力のある聲で夫れに應へた。石炭の燃え熾かる赤い焰に照らし出されながら、彼の方を凝視してゐる若い坑夫の素朴な原始的な顏が、急に生き〳〵として燃え上るやうに見えた。

彼は夫れを見てゐると、何か知ら遠く戰ひの中に來たやうな鬱勃たる氣持ちを覺えて思はず立ち上つた。

『あゝ、すつかり溫たまつた。有がたう』

『もう上るかね。背を流してやらう』

『いや〳〵有がたう。もう結構、さあ佐多君に這入るやうに云つて吳れ給へ』

彼は眞赤になつて外に飛び出した。骨を刺す樣な北國の寒氣も、最早、張り切つた彼の肉體から刎ね返されるやうに見えた。

五

軈て皆が風呂から上ると、爐を圍んで、素朴ではあるが、樂しい賑やかな夕飯が始められた。爐に据ゑられた鐵瓶には燗徳利もつけられた。それでも三人は黑田が酒を飮まないのを知ると、

『なあんだ。どつちもやらねえんだねえ』

と、失望したやうに云つてから、

『しやうがねえや、ぢやあ俺等三人でやるべえハ、、、、』

と云つて、燗徳利を取り上げた。それを見ると佐多は笑ひながら、

『馬鹿にしてらあ。君達あ他人に飮ませるよりや自分の腹の虫が可愛い癖にハ、、、、』

と、冷やかした。

『こ奴あ堪られねえ。佐多さんと來ちやあ、ほんとに口が惡りいんだかられねえ』

そこで二人は飯を、三人は猪口の遣り取りを始めた。如何にも坑夫の妻らしい鳥山の妻君も爐端に坐つて、御馳走のない事を喞ちながら、夫れでも愛嬌よく給仕を始めた。

三人は段々酒が廻つて來ると、遠慮もなくなつて、會社の横暴な事や、坑夫生活の悲慘な事を、眼の前に敵が坐つてでもゐるかのやうに、大きな聲で罵倒したり憤慨したりしだした。

『でえ一、俺あ自分の娘や嬶の尻を小頭役人の人身御供にしやがつてる奴の面が氣に喰はねえんだ。胸糞が惡くたらあ。今に雪がとけたら、奴等あこつぴでえ目にあはしてやるから。糞喰へだ』

いつも役人と喧嘩ばかりして、割の惡い稼ぎをさせられてゐる、竹を割つた樣な篠原は目玉をむいて一人で憤慨した。彼の腹の虫は煮えくり返つてゐるやうに見えた。

けれ共、思慮深かい鳥山は、猪口をためるやうにして飲みながら、重い口調で云つた。

『さうだよ。春になつたらなあ。だが俺等は自分の足許を氣を付けにや駄目だぜ。何しろ未だ他人樣の褌で角力を取らうつて奴が多いんだからなあ』

彼は此炭坑の組合の支部長で、此山に來てから最早十三年にもなるのだが、今度佐多と一緒に運動を始めてから、眞先きに血祭に上げられて首を切られた。彼にはその時の、坑夫達の、おず〴〵した卑怯な態度が頭の中に殘つてゐた。

若い藤田は、元氣一方で、單純に勞働者の勝利の日がもう眼の前に迫つて來てゐるやうな氣持で、黑い生き〴〵した無邪氣な瞳を輝かしながら、やつと飯を食ひ終つた佐多に云つた。彼の顏は酒にられて頰は火のやうに燃えてゐた。

『おい、佐多さん。D炭坑なあ。あの會社の用心棒の奴等あ、今度佐多の奴が來やがつたら生かしちやあ返されえつて云つてやがるんだ。俺あ奴等がそんな眞似をこきやがつたら先きにどてつ腹あに洞穴をあけて異れらあ。奴等あなあに會社の目腐金でやつてやがるんだ。あ奴等あなら百人來たつて俺一人で澤山だよ』

『ふゝゝゝ御用暴力團たんかを怖がつて鑛山運動が出來るか、馬鹿野郎』

それを聞くと、佐多は飲みかけの茶碗を口のそばにあてがいながら、愉快氣に云つた。こんなにして坑夫達と、一緒に、話をしてゐる時の彼の顏は、無邪氣な小供のやうに見えた。

その廣い額、薄いけれ共眞直ぐに兩方に走つてゐるその眉、細く鋭く輝いてゐるその眼、引き緊つたその唇、痩せたその相貌、それ等は一見して、此青年の長い坑夫生活の苦鬪の上に築かれた、不屈の闘爭力と强い意志とを表はして、彼の印象を朴訥ではあるが、幾分險く

してゐた。けれ共、彼の微笑した時の細い眼は、これ等の一切を裏切つて、彼の相貌を非常に無邪氣な親み深かいものにするのであつた。

黒田は、いつも頬笑みながら默々として飯を食ひ皆の話を愉快げに聞いてゐた。

貧乏と忍從の生活を運命づけられた坑夫の妻君は、苦勞で老けて見える顔に微笑をたゝへながら、急がしく給仕をした。それでも、元氣のいゝ皆の話は、彼女の胸の中にも、何か知ら新らしい希望と悦こびとを吹き入れたと見えて、其優しい眼が生き〳〵と輝いて見えた。

こんなにして、雪に閉まれた炭坑町の汚ない小さな家の圍爐裡端は、何とはない温たかな、そして強い希望に滿ち〳〵たのであつた。

六

夕飯が濟んでからも、皆は爐を圍んで、長い間、元氣のいゝ愉快な話を續けた。そして二人の坑夫達が歸つて行つたのは、最早大分夜更けてからであつた。夫れから二人は、やつと佐多の室になつてゐる二階へ上つて行つた。

二階は六疊一と間で、疊は古ぼけ、黄色な壁の處々は禿げ落ち、天井の薄い汚ない板はそり繰り返つて、如何にも粗末至極な感じを與へた。そして室にある物と云つては、床の上に亂雜に積み重ねてある幾册かの本と、床の傍に据えられた小さな机と、其上に載つかつてゐる幾册かの帳面と、インキ壺とペン位ゐな物で、室の中は狹いなりにがらんとして淋しく冷たかつた。けれ共、たゞその中で、床の間に、はりつけられたマルクスの肖像が、室に埋まつた暗黒そのものゝやうな顔を、薄暗い洋燈の光にぼんやり照し出してゐるのが、此單調で粗末な室の中に、何か知ら、神祕的な力強い生命を吹き込んでゐるやうに思はれた。

黒田は室の中に這入ると四邊を見廻しながら云つた。

『これが所謂君自身の巣なんだね』

彼の聲の中には此冷たい單調な生活の中に長い間苦鬪してゐる、同志に對する思ひ遣りの情が籠つてゐた。けれ共、佐多は事もなげに、

『さうだ、これが僕の炭坑運動の巣なんだ。この裏からは、直ぐに坑夫長屋が一と目に見える』

と、云ひながら、窓の雨戸を一枚開けた。と、窓の直ぐ外には、無限に續いてゐる樣な夜の雪の野原が現はれた。

『やあこ奴はいゝ』

と、黒田は窓の傍に近寄つて外を眺めた。吹雪はあとかたもなく過ぎ去つて、晴れわたつた冷たい空には、氷つた無數の星が、今にもこぼれて落ちさうに散らばり輝いてゐる。月のない星夜の深かい闇は、遥く野原を蔽ふて、其闇の下には寂寞たる雪の野原が薄白く廣がつてゐる。

『どうだ。こんな氣持のいゝ夜があるだらうか。僕は最早北海道の冬を四年も見なかつたんだ』

黒田は窓の閾に腰掛けて遠くを飽かずに眺めやりながら、靜かに云つた。

『ほら、あそこが坑夫長屋だ。此山の坑夫は今千人位ゐ。そのうち組合員が現在三百人程だ』

佐多は黒田の後に立つて窓の右手の方を指さしながら、氣持のいゝ明瞭な口調で云つた。雪に埋められてゐる坑夫長屋は、無數の密集した電燈の光に照らされながら靜かな眠に落ちて居た。二人は默つて暫時の間、茫やりとその景色に見入つてゐた。

更けた夜は全く寂寥としてゐた。けれ共、凝つと炭坑町を蔽ふ夜の寂寥に耳を澄すと、その中には、何處か地の底からでも湧き出て來るやうな重苦しい響が籠つてゐた。そして其響は何か知ら呻いてゐるやうでもあり、挑んでゐるやうでもあつた。此憂鬱な呻は、自分の手で機械と云ふ怪物を創り出して、何時の間にか其下に壓しひしがれながら、血で血を洗ふ鬪爭を續けてゐる、愚劣な人間の宿命に對する意識せぬ歎きであるのか。夫れとも亦、どてつ腹に洞穴を開けられて、縱横無盡に大切な骨を抉り奪られてゐる、地殼の訴へ得ざる呪ひの呻であるのか分らない。たゞ夫れはひつきりなしに續けられてゐる底苦しい呻であるのだ。

『鑛山つ奴は、何處かに挑むやうな鬪爭力があるねえ』

黒田は獨り言のやうにさう云つてから、今度は思ひ出したやうに佐多の方を向いて云つた。

『さうだ。これから君に、今度僕がこつちにやつて來た譯を話さなくちやならない』

そこで二人は窓を閉めて、火鉢に火もない寒い室の中で、外套を脊にひつ掛けながら、向ひ合ひに胡坐を組んで坐つた。

『さつき、君に一寸話した僕の家の事なんだがね。實は最早愈々駄目になるらしいんだ。君も夫れに就て何か耳にしたと云つたね。どんな風か知らん』

黒田は幾分考へ深かげにしんみりさう云つてから、佐多の方を見遣つて訊いた。

七

佐多は黒田の話を聞くと、眞面目な顏に幾分氣遣はしげな表情を浮かばせながら答へた。

『うむ、近頃は勘定の拂ひが惡いんで、坑夫が非常に不安に陷つて居るらしい。二三日前も代表者が二人程やつて來て、組合を組織したいから僕に來て呉れと云ふんで、近いうちに行く事になつてゐる。M炭坑會社に合併されるつて噂もあるんだが眞實か知らん』

『さうかね、そ奴あ眞實だ。もう前から行き詰つて居たんだがね、親父が頑固だから今まで遣り繰りしてゐたんだ。M炭坑會社は早くからあの炭坑を狙つて親父に資金の融通をしてゐるんだ。親父は僕には何も云つて來ないがね、妹から手紙が來てゐるんだ。一度讀んで

恕れ給へ。その中には厄介な事には、妹の結婚問題か絡んでゐるんだ。まあ僕の今度こつちに來た任務は、妹の問題を解決する事と、没落すべき運命に立ち到つた親父の炭坑を、如何に片附けるかつて云ふ事なんだ』

彼は落着た調子でさう云ふと、鞄の中から一通の手紙を取り出して佐多に渡した。

その手紙は、大きなレターペーパーに、細かな、併し判然した文字で書かれた、長いものであつた。

佐多は、眞面目な冷靜な表情を浮かべながら、夫れを讀み始めた。彼は何時でも物事を考へて夫れを處理しなければならぬ時には、そんな表情をするのが癖であつた。

……兄さん、今度は隨分長い間御無音しましたわねえ。此前の手紙を出してから數へて見れば最早半年からになるんですもの、時の經つのゝ早いには全く驚いて仕舞ひますわ。でもこの半年は私にはほんとに夢のやうに過ぎ去りました。

……私は兄さんの事は不絶思つてゐるんですけれど、一度だつて兄さんの事は心配なんかした事はありません。兄さんは恐らく心配される事なんか不必要な人間なんでしやうねえ。でも何故だか、私は兄さんの事を考へてゐると、何時でも、机に頬杖をついて、默つて健康に笑つてゐる姿が眼の前に浮んで來るんですもの。兄さんが監獄に這入つた時だつて私はちつとも心配なんかしなかつたわ。

……それだのに、私は何時も不健康で、つまらぬ事に心配したり、迷つたり、悲しんだりしてゐるんですもの。私の肉體や心は、何故[illegible]のやうに強く頑丈にならないのでしよう。私は始終自分自身を激しく鞭打ちたい氣持に攻められてゐます。

……父は、此頃非常に焦々して氣短かになり毎日癇癪ばかり起してゐます。酒も澤山飲みますし、健康も勝れないのです。けれ共、父をそんなにさせる原因は、父の炭坑が愈々駄目になつたからなのです。

……兄さんも知つてゐるやうに、一昨年の瓦斯か爆發してから、經營が非常に困難に陷入つたのですが、父の頑固さは、無理から無理を重ねて、苦しい經營を續けて來たのです。けれ共、今度の不景氣では、最早どうする事も出來ない破目に陷つて仕舞つたのです。そして近頃はどうかすると、坑夫達の勘定さへ滯り勝ちで、皆は非常に不安な狀態なのです。

……最初、非常に好意を見せて資金の融通をつけて吳れたM炭坑會社は、此頃は最早、一錢も出さないばかりでなく、全く態度を變へて、今まで融通した金の返濟を迫り、夫れが出來なければ炭坑を讓り渡せと云つた態度に出てゐるのです。

……父は夫れを非常に口惜がつて、俺を罠に掛けて騙した、と、云ひ續けてゐます。父の顏を見てゐると、云ひ知れぬ、痛ましさを感じます。

……けれ共、小資本のものはM炭坑會社のやうな大きな會社とは、到底競爭して行けませんわ。昔から、あちこちにあつた炭坑は、何時の間にか、あの會社の物になつて仕舞ひ、今では殘されてゐるのは父の炭坑ばかりですもの。時を待つて、じり〳〵と小さい者の首を縮め、結局いゝ潮時に有利な條件で自分の方に奪ひ取るのが、あの會社の常套手段なんですもの。そして今度は、最後にその運命が父のところにやつて來たのです。父は、俺の眼玉の黑いうちはあの會社には渡さないと頑張つて、先月は東京まで出掛けて行きました。

八

……けれ共、幾ら東京まで出掛けに行つても駄目だつたのです。誰も今頃、こんな處に飛び込んで來て、あの大會社と競爭するやうな無法者はゐませんわ。東京から、すご〳〵と歸つて來た時の父の顏は、ほんとに悲痛で見てゐられませんでした。

……兄さんのやうに頑丈で肥つてゐた父も近頃はめつきり瘦せて、ひどく年老いて來ました。そして晩酌の量丈けは段々增えるのです。酒に醉つた父の顏は、ほんとに悲痛と云ふ言葉そのものです。あの會社を散々罵つた揚句には、兄さんの事まで思ひ出して、不孝者と罵るのです。それから、お仕舞ひには、乾度、皆を、馬鹿ッ、馬鹿ッと無意味に呶鳴り散らして、草臥れて寢て仕舞ひます。

……父と母とが北海道に移住して來てから最早三十年近かいとの事です。そして今、父の上に大きな沒落の運命が來たのですもの。父にとつて見れば忍ぶ事の出來ない悲痛な事でしやう。

……夫れでも母は、父の機嫌のいゝ時を見はからつては靜かに云ふのです。

『お父さん。私達は最早年を取つたのだから炭坑を止めて、旭川の方に引つ込んで、も一度百姓になりましやうよ。その方が心配がなくて、どんなに安心だか知れやしない』

母は、旭川の方にある家に引つ込んで、靜かな平和な生活に返る事を望んでゐるのです。父はどうかすると、母の言葉をしんみりと聞いて、『うむ、うむ』と頷くのです。そして、つひ最近は、外の方法も絶望に終つたので、父もそこに腹を定めたのでした。

……處が最近になつて、ふつと地から湧いたやうに、又新らしい問題が持ち上つて來たのです。それは一週間程前に、札幌の忠助叔父が突然やつて來て、炭坑問題に絡んだ私の結婚問題を持ち出したのです。

……兄さんは、最早忘れたか知れないけれど、札幌の忠助叔父の家の隣に、白煉瓦で塀をめぐらした大きな邸があつたでしやう。兄さんが未だ高等學校に行つてゐる時分、夏休みに歸つて來て札幌に行つた時には、よく其家にも遊びに行きましたわねえ。そらあの時兄さんより四ッ五ッ年下で、中學に行つてゐた青年があつたでしやう。宅雄さんと云つた。その時私は未だ小學校の生徒でしたつけ。よく私を遊

びに連れて行つては、色んな物を買つて與れたわ。どちらかと云へば優しい方の青年でしたわ。

……その青年が今は最早、東京の工科大學を出て、今では空知の方の或る炭坑に出てゐるのです。尤も家があの通りですから、別に生活のためではなく、炭坑の研究のためださうです。

……兄さんは最早、あれつ切り會はないのですから、忘れて仕舞つたでしやう。私は二年程前に、偶然札幌の叔父の家で出會つたのです。その時は、もう學校を卒業して、炭坑に努めてゐたので、昔とは樣子も態度も全で變つて立派な青年紳士になつてゐました。そして其態度の中には進步的なところもあり、兄さんの噂や、勞働問題の話もしてゐました。けれ共、私達は叔父の前で、一寸言葉を交した丈けで、別に深かい話もせずに、それなりに別れ、その後は一度も會つた事はなかつたのです。

……それが、不意に今度、忠助叔父の手を通じて、結婚を申込んで來たのです。そして、結婚が成立した曉には、父の炭坑を引受けて自分で經營すると云ふのです。

……父は其話を聞くと飛び上つて悦こびました。母も不贊成な譯がありませんわ。けれ共、私の性質を知つてゐる母は、眞正面からどうせよとは云ひません。たゞ『さうなつたらお父さんはどんなにお悦こびだか』と云ふ丈けです。父は『お前も一生の事だからよく考へろ』と云ひましたけれど、父にとつてはそんな事は最早定まつた事で、ほんとに私に考へる事なんか許してはゐないのです。父は私の返事を待たずに、どし／＼話を進めてゐます。そして、其人が、三日程前に、忠助叔父と一緒に私の家にやつて來ました。その名目は父の炭坑の視察と云ふ事だつたのですけれど、私を見に來たのである事は分つてますわ。父や母は、私を心配して、着物を着換へさせやうとしたり、頭を結ひかへさせやうとしたりして氣をもんでゐました。

九

……私は何だか皮肉な樣な氣がしたのですけれど、餘まり母が氣遣ふものですから、髪も結ひ、着物も着換へて、座敷に出て逢ひました。けれ共、挨拶した丈けで別に何の話もしませんでした。心なしか、少し顏を赤めてゐました。その人は、ほんとに善良さうな人のやうに思はれました。けれ共、それは兄さんとは全然反對な世間普通の立派な紳士ですわ。身なりもきちんとして、立派に見えました。そして歸つてから直ぐに手紙を寄越しました。甘い手紙ですわ。私は別に返事も出しませんでした。

……けれ共、兄さん。私は、不意に私の前に湧いて來た此問題が、私をほんとに困難な十字街に立たせてゐるのを感ずるのです。そして身近に迫つて來た、一つの深刻な運命が私の意志を試みてゐるのです。右すべきか。それとも左すべきか。

……年老いた父の悲痛な顏、訴へるやうな優しい母の眼ざし、それ

等のものは、私を考へる暇もない程、感傷的な氣持ちに押し進めて行くのです。

『結婚したら良いではないか。さうすれば父や母は悦こぶのだもの』

……長い間、自分と云ふものを失つて來た女の忍従生活は、幾らか自分に考へてゐる事があつても、激しい一つの運命が身近かに迫つて來れば、手もなく其流れの中に巻き込まれて自分の姿を見失ふのです。私の弱い心は今その抵抗し難い運命に押し流されながら、私の理性は、皮肉な程冷やかに、それと戰つてゐるのです。

……私は多くの無教育な女達が、父や母の犠牲になつて、自分の身を賣る事の無意味で罪悪な事を知つてゐるのです。そして日本の道德は夫れを孝行だと強ひて來ました。けれ共自分の身を賣らなくとも、一つの政略のために女が結婚の犠牲にされて來た事は、教育のある家庭では數へるのが愚かな位ゐです。それとこれと何の相違があるでしやう。

……私がその人と結婚したら父や母は悦こびますわ。それさへ何時まで續くでしやう。何れ又今と同じ運命が來るのですもの。そんな事は今からだつて分つてゐますわ。けれ共そんな事は私には問題ではないのです。此炭坑を人手に渡さないために結婚して、私自身が又炭坑主の奥さんになる事が厭なのです。

……私の理性も、私のほんとの感情も、そんな事を希望してゐないばかりでなく、激しく反對してゐるのですもの、私はそんな事とは全然別な世界に生きる事を希望してゐるのですもの。もつと判然自分を掴んだ力強い生活を………

……兄さん、私は此二三日自分の心が非常に昂奮してゐるのを感じます。私は最早、何も彼も、父も母も家も打ち棄てゝ、兄さんの處に飛んで行きたい氣持に迫られてゐます。夜、一人になつて、寝床に這入つてからは、屹度、明日こそはと決心するのです。けれ共朝になつて父や母の顏を見ると、その決心は何時の間にか霧のやうに消え失せて、又その重苦しい一日が暮れるのです。

……私は自分の弱い意思に激しい鞭を當て續けてゐます。けれ共、私の足は重い鎖に繋がれたやうに一歩も前には進みません。

……私は未だ諾とも否とも云ひませんけれ共、父は腹を定めてゐますし、そして母を攻め立てゝ居ます。母は何時も心配氣な眼ざしで私を眺めてゐます。私には母のその眼ざしが身を縛る重い鐵の鎖のやうに思はれます。

『兄さんがゐて呉れたらねえ。あれもほんとにどう云ふ了見なんだか』

母は溜息をつきながらさう云ふのです。

……あゝ私は強い力が欲しい。何か強い力が不意に現はれて、大きな腕で、ぐい／＼と私を引つ張つて、自由な野原に連れ出し、『さあお前は最早一人だ、勝手に行きたい方に行け』と云つて呉れるといゝ。

私の意志は今立ち竦んでゐるのですもの。

……兄さん一度救つて下さい。そして私を暗い處から連れ出して下さい。

……兄さん、私は近頃一人の若かい娘さんと知り合ひになりました。その娘さんは父の炭坑に働いてゐる坑夫の娘なのです。年は未だ廿才ですけれ共、ほんとに確かりした立派な娘さんなのです。

一〇

……其娘の父は家の山で最早八年も働いてゐる立派な坑夫ですけれど、半年前に落盤で負傷してから未だ良くならないのです。家には母親と、三人の弟と一人の妹があるので、手當丈けでは食べて行かれないので、その娘は今撰炭場の方に働いて家の暮を助けてゐるのです。

……何時か私が見舞ひに行つた時に、初めて會つたのですが、最初は私を避けるやうにして、どうしても打ち解けなかつたのです。けれ共、今では二人は最早すつかり仲良しになつて、私の事をお嬢さんなどとは云はなくなりました。

……學校は珍らしく高等小學まで卒業してゐるのです。無口ですけれ共、ほんとに勇敢で思慮深かい娘ですわ。そして組合から送つて來る雑誌や何かを熱心に讀んでは、勞働運動と云ふ事に對して深い考へに耽つてゐます。父の負傷は、娘の心を非常に強く刺戟した様です。

何時か二人で話合つてゐた時、はつきりした口調で私に云ふのです。

『私達坑夫の運命なんてものは悲しい惨めなものに定まつてゐるのですわねえ。父のやうに真面目に酒も飲まないで、小供の時から働いても、お金なんぞはちつとも殘らないし、そして殘る物と云つたら、負傷と病氣と貧乏ばかりですわ。今度のやうに父が負傷すれば最早其日から私達は食べて行かれないんですもの。私が働けるから未だ飢え死にはしないけれど、私がゐなかつたら弟や妹たちはどんなになるんでしやう。父も最早一生働けないんですもの。夫れだつて誰も來て助けて呉れる人なんかありはしない。私達は自分の力で自分を守るより仕方がない。都會の方では勞働者達が組合つてものを作つてゐる相ですけれど、私達坑夫も早く夫れを作らなければならないわ』

……兄さん、私は此娘の言葉を聞いた時に、ほんとに深い考へに沈ませられました。そして私は此娘を心から尊敬してゐます。私は二人で色んな事を、しんみりと話し合つてゐる時、ほんとに自分が生きてゐる事を感ずるのです。

……けれ共、近頃は、こつちにも、段々兄さんの方の組合が出來始めたやうです。新聞も書きますし、坑夫達も何處に行つても、組合の話をしてゐると聞きます。父の炭坑の役人達も、よく父の處で話してゐますわ。そして東京から來てゐる、佐多とか云ふ人の事が大變噂されてゐます。屹度兄さんの方の人なんでしやう。會社側では其人を非常に怖れてゐます。何でも足尾銅山の坑夫をしてゐて、監獄にも這入

つた事のある人だ相です。非常に眞面目な頭腦な人だと聞きました。

……M炭坑會社の山にも組合が出來たと云ふので大狼狽をやつてゐます。雪どけになつたら大ストライキが起りさうだと云ふので、夫れまでに組合を叩き潰すと云つて、必死に壓迫を始めてゐるとの事です。父の山の坑夫達も此頃は不安な狀態になつてゐます。

……何かしら近頃になつてから北海道にも生き／＼した新らしい空氣が動き始めて來ました。あちこちで色んな問題が起つては騷がれてゐます。新聞紙は盛んに勞働運動を危險思想だと鼓吹してゐます。けれ共、そんな事に頓着なしに新らしい生活は社會の中から生れて行き始めたのです。雪がとける頃になつたら、北海道の炭坑には、ほんとに大きな坑夫達の運動が始まり、ストライキも起るかも知れません。そんな事を考へると、最早一と時も躊躇してゐられないやうな氣がします。

……兄さん、一度歸つて來て下さい。そしたら、何も彼も、ほんとに何も彼も、皆一度に片附くやうな氣がします。今は總てが、新らしい生活を求めて、行くべき方向を望みながらも、押し切るべき堰を押し切る事が出來ずに、そこに溜つて、たゞぐる／＼と渦を卷いてゐるのです。そして誰かゞ一と押しに其堰を押し切るのを待つて居るのです。

……私は兄さんに長い手紙を書き終つて、私の堰が切れ始めたやうな氣がします。今夜は父は札幌に行つて留守です。そして自分の子供の心も知らずに、私の結婚の話を進めてゐるのでしやう。ほんとに私は父を氣の毒に思ひます。けれ共仕方がないのですもの。

どうか此手紙が着いたら一日も早く歸つて來て下さい。

兄樣　　　　多喜子

二

佐多は長い手紙を讀み終ると、暫時の間、その手紙を持つた儘、その中に含まれてゐる意味を明瞭に纏めるやうに、默つて俯向いてゐた。それから彼は靜かに顏を揚げて、黑田の方を眺めながら、落着いた聲で云つた。

「これは結局どうしたらいゝんだらう。そして僕のしなくちやならん役割は何だらう」

佐多の、手紙を讀み終るのを待つてゐた黑田は、それを聞くと、纏めて置いた考へを一度に吐き出すやうに云つた。

「そ奴は、結局、親父の炭坑をあの會社に渡す事で皆片がつくのさ。妹の事もねえ。たゞ問題なのは、親父の山に働いてゐる坑夫の事だがね。僕の親父は頑固なんだが、昔の武士の血が殘つてるから坑夫は割合に可愛がつて首なんざあ容易に切らないんだ。それで、あの會社が坑夫をどんな風に引き繼ぐかゞ問題だ。大分首を切るかも知れん。そ奴の對策を君にやつて貰はなくちやなるまいさ」

『そ奴あ大丈夫だ。どうせあの會社とは遲かれ早かれ一と決戰やらなくちやならないんだから』

佐多は夫れ丈けは直ぐに引き取つて無雜作に返事をしたが、それからあとは幾分躊躇するやうに云つた。

『だが、妹さんの結婚問題はどうなんだらう。大分昂奮してゐるやうだが、そ奴は考へもんぢやないかなあ』

黒田は夫れを聞くと、笑ひながら、寧ろ輕い冷やかな調子で云つた。

『そ奴は惡いセンチメンタルな常識だよ。そんな事をしたら、妹を犧牲にして問題を一時延ばす丈けさ。父や母は此際旭川に引込む方が結局幸福だし、これから生きて行く妹を犧牲にするのは、つまらん罪惡だ。それぱかりぢやない。そんな事をして見たつて又第二の今度が起るよ。そんな工學士に炭坑の經營なんか出來るものか。働かばかりの財産を煙にする丈けさ。必然つて奴あ、僕の家だからつて素通りはしないからねえハ、、、』

『ハ、、、さう簡單にやられちやあお仕舞ひだ。たゞ問題が餘り近いんでねえ』

『ハ、、、そ奴が君いけないんだよ。人間て奴あ、餘り問題が近か過ぎると、つい助平根性が出るんだ。そして卑屈な膏藥貼りをやりたがるんだ。早く思ひ切れば少しの犧牲で濟むものを、思ひ切らないからも一つおまけをつけるんだ。親父なんぞは詰り最上の夫れなんだ』

彼は、力強い聲で、吐き出すやうにさう云つた。彼の言葉の中には、相手が幾分でも、此事件が自分の家に關する事のために遠慮したり氣兼ねしたりしない樣にと云ふ心遣ひが籠つてゐた。

佐多は夫れを聞くと、

『やあ、もう分つた。僕が間違つてたハ、、』

と率直に相手を押へるやうに云つてから、磊落に笑つた。彼の素朴な強い顏の表情の中には、相手の徹底的な態度に對する深い同感と親みの情が溢れて見えた。二人は何の蟠まりもなく氣持のいゝ聲で、高く笑ひ合つた。そして其高い快活な笑ひ聲は、淋しい薄暗い空を急に明るくした樣に思はれた。

黒田は直ぐに快活な調子で續けた。

『夫れぢや今度は簡單に話を運ばう。第一に何時でも戰爭が始められるやうに親父の山に組合の組織が必要だ』

『うむ、そ奴は直ぐに出來る』

佐多は簡單ではあるが自信を以て答へた。

『それから、僕の手紙を氣付かれん樣に妹に渡して、君が一緒に連れて來て貰ひたいんだ。それは妹から事情を聞いて策戰を樹てるためなんだ』

『よし、それも承知した』

『それから、も少し僕の來た事を祕密にして置きたいんだ。さつきの二人は大丈夫だね』

『大丈夫だ』

『それぢやあ萬歳だ。最早何もない。時に君は何時妹の處に行つて呉れる』

『明日の朝早くに行かう』

『そいつは有難い。夫れぢやあ僕は今直ぐ妹に手紙を書かう』

『その間に、僕は僕等の寝る巣を作らうハヽヽ、一緒に寝るのは久し振りだなあ』

『ほんとに久し振りだ』

そこで、一人が机の前に坐つて手紙を書いてゐる間に、一人は穢ない布團を押入から取り出して、二人の寝るべき巣を作り始めた。

二

黒田の父の炭坑は、夕張から三つ程手前のK停車場の近くにあつた。初め、此炭坑が採掘され始めたのは、最早二十年も前の事であつた。それから僅かの間に持主が三人も變つて、黒田の父の手に渡つたのは、あの世界大戰が始まる直ぐ前の事であつた。

黒田の父は、中國筋の或る大名の家臣として相當な家に生れた一人子であつた。彼が生れてから未だ間もない赤ん坊の頃に、日本の國を土臺から揺り動かして、社會組織を根底から變へて仕舞つた、維新の大暴風雨がやつて來た。年號が明治と改つてから間もなく、廢藩置縣と云ふ事になり、大名と云ふものが無くなつて仕舞つた。それから、武士の魂とされた帶刀は禁ぜられ、今まで大切に頭の上に載つけてゐた、チョン髷は、ザンギリ頭と代り、主君から貰つてゐた食祿は僅かばかりの公債と云ふ手切金を名殘にして、お上に召し上げられて仕舞つた。

そこで食祿に離れた武士達は、僅かばかりの手切金を元手にして、これから先き、妻子を抱へて一家の生計を考へねばならぬ破目に立ち至つた。

夫れでも、どちらかと云へば、冷靜で利殖の道に長けてゐた祖父は、此天地を洗ひ流すやうな大暴風雨に出會しても、小さな一家を支へて行くのには少しも困らなかつた。彼は、

『こんな時には、暴風雨が定まるまで、舟は港で錨を下してじつとしてゐるのが、悧巧な船頭の取る道だ』

と云つて、貰つた公債や、蓄へてゐた金の利子で、つましく一家の暮を立てながら、自分は最早世を遁れたやうな氣持で、花を作つたり、讀書をしたりして、平和な晩年を送つた。けれ共、彼は、

『これから、世の中は、何でも學問の世の中だ。學問がなければ世の中は渡れぬ』

と云つて、自分の一人息子には、せつせと學問を勵ませた。

だが、世の中を達觀した彼の父は、一人息子が修業を終つて、世の中を渡り始めない前に、つい三日程病らつて、ぽつきりと此世から消え失せて仕舞つた。その原因は良く分らなかつたが、彼の長い間の親

友であつた老漢法醫は、老友の死體を診察して、「酒が好きだつたから心臟が痺れたのだらう」と云ひながら、がつかりした樣に老の眼をしばたゝいた。それで、誰れも、さうだと納得して疑ふ者はなかつた。

夫れはちやうど、明治十八年の夏の事であつた。一人息子が、東京から夜を日についで歸つて來た時には、彼の父は、最早、堀り起された墓場の土の中に、靜かに眠つてゐた。交通の不便な當時、東京から中國まで駈けつけるのは全く容易な事ではなかつた。

東京で法學と云ふ學問を頭の中に詰め込んで歸つて來た若い一人息子は、頭髮を綺麗に延ばして、チックと云ふもので綺麗に後に撫でつけ、鼻の下には、ピンと先きの刎ね上つた八字髭を生やし、官員でなければ着ない、洋服と云ふものを家にゐても着てゐた。そして、頭の中には、立派な自由民權の新思想と、極端な歐化主義の思想とを叩き込んでゐた。

彼が歸つて來ると、家の中は、見る／＼變つて行つた。父の書齋に置かれてゐた古風な机は、惜し氣もなく物置の中に放り込まれ、彼が大工を怒り飛ばして新たに作らせた、變な形をしたテーブルと椅子とが、座敷の眞中に持ち込まれた。和本は戸棚の中に蟄居を申しつけられ、その代りに、洋裝の本が新らしく造られた書棚に背を並べた。床の掛物は櫃の中に放り込まれて、その代りに、ジヤンジヤツクルツソウの銅版の寫眞が額緣の中に入れられて、そこに掛けられた。

彼の家には、變な洋服を着た男や、小倉の袴を穿いた壯士風の若い者が、朝となく、晝となく、夜となく出入して、口角泡を飛ばしたから、家の内には人間と云ふものがゐないかのやうに、大きな聲で、自由民權の議論を戰はし、政府の攻擊に花を咲かせた。

そして、一人息子は、時々プイと家を飛び出すと、十日も廿日も家に歸つて來なかつた。

時たま歸つて來たかと思ふと、財布の中に金を詰め込んで又ぷいと飛び出した。それで家の中は、時に暴風雨に襲はれたやうに賑やかになつたり、又急にひつそりと死んだやうに靜かになつたりした。

三

年老いた彼の母は、氣狂じみた此のハイカラ息子のする事を、たゞ呆氣にとられて眺めてゐるばかりだつた。實際、彼女にとつては、維新の騷ぎよりも、もつと凄まじい有樣の息子のする事に、何を云つてよいか、取りつくしまがなかつたのである。彼女は餘り家の中の事が分らなくなつて息子のする事が氣狂ひじみて來ると、默つて佛壇に燈明をとぼして、何時までも／＼亡き夫の位牌に向つて、口の中で何か息子の事を訴へながら、俯し拜むでゐるのを唯一つの慰めとしてゐた。

こんなにして十年の歲月が瞬く間に流れ去つた。その間に彼は妻をめとつて子供丈けは三人も生むだ。けれ共、最初の二人は生れると直に死んで仕舞ひ、三人目丈けが達者に育つた。

子供ばかりではなかつた。その十年目に、彼の母も此世から消え失せ

た。

彼は母の死に目にも逢はなかつた。その時も彼は家を忘れて選擧運動に熱中してゐたのであつた。

彼は歸つて來て、母の冷い死體のそばで、涙のうちに妻から、彼の母が、死ぬ間ぎはまで彼の名を呼び通したと云ふ事を聞かされた時には、流石に、彼の兩眼からは、慚愧の涙が、ぽろ〳〵とこぼれ落ちた。

彼は、母の死後は、もうあまり外を出歩かなくなつた。そして思ひ立つたやうに、急に財産の整理を始めた。彼は整理して見て、此十年の間に、父の殘して行つた財産が餘りに殘り少なになつてゐるのに今更ながら驚愕した。それから彼は、一年程、何處にも出ずに家の中に引つ込んで深かく何かを考へてゐた。

一年間の蟄居生活は彼の心の中に一つの大きな變化を齎した。彼は母の一周忌を濟ますと、不意に殘りの財産を引き纏めて、親族にも相談せず、彼の妻と、三つになる彼の息子の忠雄とを連れて、北海道の旭川の方に移住して行つた。

彼は、そこで先づ、開墾事業を始め、農園を經營し、牧畜をやり出した。それから北海道の事情に明るくなるに從つて、色々な事業に手を出した。つまり一と口に云へば、金儲けに熱中し始めたのである。

そして彼の事業は小さいながらも着々と成功して行つた。

こんなにしてゐる間に、又十三四年の歳月が矢の様に流れ去つた。

そして彼が最後に手を出したのが炭坑であつた。けれ共、彼が今の炭坑に手を出さうとし出した時には、彼の妻は夫れに強く反對した。

『お父さん、そんな危ない仕事に手を出すのは止めましようよ。昔からそんな事をする人を山師と云ひますよ。私達は此儘で結構ではありませんか』

けれ共、彼は妻の云ふ事などは耳にもかけなかつた。

『なあに大丈夫だよ。今に大きな金が轉げ込んで來るから』

彼は炭坑を手に入れると、旭川の家には留守番を置いて、氣の進まぬ妻をせき立てながら、今の炭坑の方に移つて行つた。

彼の豫言は見事に適中した。彼が炭坑を手に入れると間もなく、大きな金が彼の方に轉かり込み始めた。世界戰爭が始まつて、世の中は好景氣に見舞はれ始めたのだ。つまり幸運が彼の方に頻笑みかけて來たのである。

彼の幸福は、たゞに夫ればかりではなかつた。一人息子は段々成長するに從つて學校の出來もよく、今では最早、東京の法科大學の學生となつてゐる。そして旭川で生れた容姿よしの娘も、札幌の叔父の家から女學校に通つてゐる。その息子と娘の學校を卒業する日を待つ事は、二た親にとつて、どんなにか心を樂しませた事柄であつたらう。

彼の幸福は、正に其時こそ絶頂にあつた譯である。

けれ共、人生の行路は、一度幸運が頻笑みかけて來ると、とん〳〵拍子によくなつて行く代りに、又一度、一寸でも躓づいて、其際に躓

運の手が差し延べられだすと、次ぎから次ぎへと、今まで築き上げた幸福を破壊して、無残に素裸體にして仕舞ふまでは、悪戯の手を休めない。

そして、何時とはなしに、彼の身の上にもそんな廻り合せがやつて來始めたのであつた。

一四

彼の不幸は、先づ第一に、一人息子の身の上から始まつた。

彼が安心し切つて其卒業の日を待つてゐた一人息子の忠雄は、愈々學校を卒業して歸つて來た時には、彼が私かに期待してゐた人間とは似ても似つかぬ、全くの別な人間になつて仕舞つてゐた。息子は將來に對する彼の希望を平氣で皆退けてしまつたばかりではなく、する事もあらうに、自分の家を棄て去つて、勞働運動に身を投じ、而も直接親に弓を引くために、鑛山の運動を始めたのである。そして平氣で監獄にまで這入るに至つては、全くの狂氣ざたとより外には、意味さへのみ込めなくなつて仕舞つた。

彼の息子のかうした蹉跌は、彼の頑固な心の中にも、何か知ら、鉛の様に重い不快な氣持を植え付けずにはをかなかつた。そして彼は其息子と、最早四年も會はないのである。

次ぎの不幸は、場所を變へて、今度は彼の仕事の上に、その姿を現はした。それは大正九年の春に、彼の持つてゐる炭坑の中で、一番炭質がよくて而も出炭量の多い一つの坑が、突如として大断層に見舞はれた事であつた。その日は、折惡しく彼は身體の具合が惡くて寢てゐたのであつたが、午後の五時頃、突如として大地を搖がすやうな大音響がしたかと思ふと、彼の家の硝子窓は、激しい音を立てゝ破壊されて行つた。彼が寢床から夢中に刎ね起きて現場に驅け付けた時には、彼の一番大切な坑口からは、物凄い黒煙が渦卷きながら吐き出されてゐた。そして次ぎから次ぎへと移つて行く爆發を止めるためには、坑を密閉して、一番禁物の水を通すより他に方法はなかつた。こんなにして、彼は、その中に働いてゐた百五十人ばかりの坑夫と一緒に、大切な一つの金箱を、たゞ瞬間の間に失つて仕舞つたのであつた。

第三の不幸は、踵を接したやうにやつて來た。

それは大正九年の後半期に至つて、俄然、暴風雨のやうに日本の經濟界を襲つて來た、底知れぬ不景氣であつた。あらゆる事業は打撃を蒙らぬはなく、海嘯に襲はれた跡のやうに、基礎の薄弱な事業は、ばた〳〵と倒されて行つた。

春の瓦斯の爆發のために蒙つた、致命的な打撃の上に、暴風雨の様に襲來した此不景氣に見舞はれた彼の炭坑が、どんなに慘憺たるものであつたかは、想像に難くない譯だ。

彼は、どうにかして事業を繼續して行くためには、今まで儲けた金を、またゝく間に吐き出して仕舞はねばならなかつた。けれ共一度傾

の抜けた大きな穴は、少しばかりの埋め土では間に合はなかつた。彼は何時の間にか資金の調達に狂奔し始めた。そして例のM炭坑會社から、不利な條件を忍びながら、資金の融通を受けて、次第に退引ならぬ深味にはまつて行つたのも其ためであつた。M炭坑會社は彼の所有する鑛區の中で、彼が未だ氣付かずにある有望な場所のある事を、秘密な調査に依つて良く知つてゐた。そこで、最初は心よく、そして段段に條件を持ち出して、今では眞綿で首を締めるやうに退引させぬ處までこぎつけたのである。

彼は、ほんとに、瞬く間に借金の山を背負つて仕舞つた。

一時は、二千人から居た坑夫は、今では殆ど解雇されたり、自分から退山したりして、三分の一位いに減つて仕舞つた。武士氣質の殘つてゐる彼は、彼の山がこんなになつて、坑夫の首を切らねばならぬやうになつた事は、忍び難い苦痛であつた。

賑やかで景氣の良かつた町は、荒びれ果てゝ至る處に空家が出來て這入る者はなく、壞れかけた家は修繕する者もなくて、荒れるに委せられた。

頑固で負け嫌いな彼は、必死になつて頽勢を挽回するために焦り抜いた。けれ共、それは、暴風に逆つて飛ばうとする小鳥の努力に等しかつた。

そして、今や、彼の炭坑が、いや／＼彼自身の運命が、どんな道を辿りつゝあるかは、既に讀者の知られる通りである。人生が、さうだ、あらゆる人生が、彼の生きて來た生活と一緒に彼に置き去りを食はして、どし／＼と前の方に進み出したのかも知れない。時代と云ふものは薄情で冷酷なものだから。

一五

佐多が、黒田から頼まれた使命を果すために、父の炭坑長屋を訪れた日の日暮方の事であつた。町端れの小高い岡の上に建つてゐる炭坑主の家の玄關に立つた、十八九に見える一人の坑夫の娘があつた。

その娘は、仕事場からずつと來たらしく、石炭で黒く汚れた、荒い縞の筒つぽを着て、腰には赤い細紐を締めてゐた。髮は後頭のところに、くる／＼と無雜作に束ね、見るからに粗末な風をしてゐたけれ共、顏はきりつとしまつて、その樣子の何處やらに、普通の坑夫の娘には珍らしく、幾分氣品のある、落着いた確かりした處が見られた。

娘は、玄關口に立つと、判然した聲で、

『御免下さい』

と、丁寧に呼んだ。そして暫時、返事を待つやうに、凝つとそこに立つてゐた。けれ共、內は森閑として、誰も出て來る氣配は見えなかつた。そこで娘は、も一度前よりも高い聲で、

『御免下さい』

と、呼んだ。すると、今度は、內から、

『はい』

と云ふ、これも若い女の聲が、聞えて來た。そして、間もなく玄關の内に人の出て來た氣配がして、硝子戸が内から開けられると、そこに、どちらかと云へば小柄な、色の白い、顏立ちのはつきりした若い女の姿が現れた。内の女は、玄關の前に立つてゐる娘の姿を見ると、突嗟の間に、その美しく澄み切つた、深い黑い瞳に、親しみ深い微笑を湛えて、いくらか吃驚りした樣に聲を掛けた。

『まあ、貴方でしたの、私誰かと思つて……』

その聲は外の娘の聲と同じやうに、はつきりとしてゐた。外の娘も、内の娘の姿を見ると、ほつとした悦びの色を顏に表しながら、云つた。

『えゝ、私ね、不意に貴女に御用を頼まれた事があつて、お伺ひしましたの。それでも貴女が玄關に出て下さつて、ほんとに安心しましたわ』

それ丈け云ふと、外の娘は、幾らか四邊を憚かるやうな調子で小聲に續けた。

『貴女に頼まれた御用と云ふのは、少し秘密な事なんですの』

『おや、さうですの。どうしましやう……』

夫れを聞くと、内の娘は心持眉を寄せ、眞面目に物を考へるやうな表情をして、一寸相手の顏を覗つた。けれ共、直ぐに其表情は消えて、決心のついた明るさに返りながら、口早に云つた。

『ぢやあ、お上んなさい。私の室にしましよう。それがいゝわ』

そして、相手を誘ひ入れるやうに道を開いた。けれ共、外の娘の顏には明かに困惑の色が浮んだ。そして、一寸自分の容を顧みながら云つた。

『でも、私こんな容をしてゐるんですもの』

それを聞くと内の娘は、眉をしかめて、強く夫れを打消すやうに云つた。

『まあ、そんな事、ちつとも構はないぢやないの、貴女にも似合はない』

『でも、お宅では誰か……』

『いゝえ、夫れは大丈夫なの。今日は父は留守ですし、奥に母と、台所に女中がゐる丈けよ。それに貴女の事なら、内中皆知つてゐるんですもの、私の室で何を話してゐたつて怪まれる事なんぞ何もないわ』

『さう、それでも私こんな容をして餘りですわ』

外の娘は、も一度自分の身容を顧みながら、頬笑んで云つた。

『まあ、未だそんな遠慮をしてゐるの。さあ早くお上んなさい』

そこで、二人は玄關の内に這入つて上ると、長い廊下を傳つて、離れのやうになつてゐる此家の娘の室に行つた。

多榮子……讀者は最早とつくに、内の娘が多榮子な事を承知されたに違いない……は相手の娘を自分の室に案内して、座布團をすゝめると、立つた儘、

『私、一寸母に貴方のいらつした事丈け云つて來るわねえ。變に好は

れると知つてつまらないから』

と云つて室を出て行くと、暫時して、自分でコーヒーを入れて歸つて來た。

『お待遠樣でした』

彼女は晴々した聲でさう云つて娘の前に坐つた。

一六

『さあ、最早、これで大丈夫よ。どんな秘密な話でもホ、、、』

多榮子は、も一度快活にさう云ふと、相手にコーヒーをすゝめたがら又言葉を續けた。

『私に頼まれた秘密な言傳つて何でしやう』

娘は直ぐに内懷から一通の手紙を取り出して、夫れを多榮子の前に差し出すと、落着いた、はつきりした聲で云つた。

『私、此手紙を佐多と云ふ人から貴方に秘密に渡して與れつて頼まれたんですの。それからまた外にも色々言傳つた事があるんですけれど、夫れは、貴女が此手紙を讀んでからにしますわ。その方が、話がよく分ると思ひますから』

多榮子は其手紙を受取ると、不審氣に、

『まあ、私に、こんな手紙なんて何でしやう』

と云ひながら夫れを眺めた。その手紙には、表に宛名も書いてなければ、裏にも差出人の名前も書いてない、白紙の儘の封筒であつた。

『まあ可怪な手紙ねえ。宛名もなければ差出人の名前もない……』

多榮子は、幾度もそれを眺めてから、いくらか不安げな、それでゐて好奇心に誘はれるやうな、複雑な表情をしながら云つた。そして今度は相手に訊ねるやうに、

『これ私に間違いないのねえ』

さう云つてから、彼女の前に落着て坐つてゐる娘の顏を、凝つと眺めた。

『えゝ、間違いないですわ。私が自分でことづかつて、自分で持つて來たのですもの』

はつきりとさう答へて多榮子を見返した娘の眼の中には、『自分を何故信頼しないの』と云ひたげな表情がちらと浮んだ。多榮子は、突嗟に夫れに氣付くと、今度は頬笑みながら、輕い謝まるやうな調子で云つた。

『あら、さうだわねえ。ホ、、、貴女が持つて來て下すつたんですもの、間違いはないわ。御免なさい。餘り不思議な手紙だものだから』

二人はお互ひに顏を見合はして、親しげに頬笑みあつた。そして多榮子は、今度は何の躊躇する事もなく、急いで封を切つて、その中から、無雜作に疊まれた、一枚の小さな紙切を取り出して展げた。

その瞬間、多榮子の表情は、突嗟の間に、或る云ひ難い驚きの色を現はした。その驚きは、それが悲しい事であれ、又悦こばしい事であれ、餘りに突然な事に出會した時に、突嗟の間に起る驚きであつた。

そして彼女の唇からは無意識の間に小さな叫び聲があげられた。

『まあ、これは、兄さんからの手紙だわ』

彼女は、紙切を展げた瞬間、中にも名前は書いてなかつたけれ共、其文字に依つて實嗟の間に、夫れが兄の書いたものである事を知つたのであつた。

その手紙は非常に簡單ではあつたが、注意深く書かれてあつた。多榮子は、食ひ入るやうにして夫れを讀んだ。

……先日の手紙を讀みました。僕は昨日こちらにやつて來た。一度、多榮さんに會ひたいので、此手紙をことづけた者に萬事賴んであるから、口實をうまく作つて、悟られぬやうに、其人と一緒にお出でなさい。佐多君は絶對に信賴の出來る人間です。

……朝早く出れば其日のうちに家に歸れるから、家の方は何とでも都合がつくでしやう。

……それに今は雪が降つてるから、頭に頭巾を被れば、外を歩いても人目にたゝない。

……總ては會つた時に聞きもし、話もします。さよなら。

多榮子の紙切を持つてゐる細い指先は、微かに顫え、緊張した顏の表情の中に輝いてゐる、黒い深い二つの瞳は、其紙切の中に吸ひ込まれて行くやうに見えた。

でも、其緊張し切つた表情は暫時たつと、今度に、非常に、冷靜な落着いた表情に變つて行つた。そんな風になるのは彼女の癖であつた。彼女は、手紙を手に持つた儘、相手の顏を眺めながら、落着いた聲で云つた。

『これは私の兄さんからの手紙ですわ。ほら貴女にもよくお話した』

『えゝ、さうですつてねえ。私も聞きました』

娘は頬笑みながら靜かに應へた。

『でも、どうして貴女に託けたのでしやう』

多榮子は、又不審氣に夫れを訊いた。

一七

『それは貴女の手紙からですわ』

と、娘は事もなげに答へた。けれ共多榮子は夫れを聞くと、又しても意外な事のやうに吃驚りして叫んだ。

『私の手紙ですつて』

『えゝ、貴女から兄さんに出した手紙の中に私の事が書いてあつたのでしやう』

『あゝ、さう〳〵。私書いてやりましたわ。それで……』

『それで、今日、佐多と云ふ人が見えて、此手紙を秘密に貴女に渡して呉れつてお賴みになつたのですわ』

『まあ、さうでしたの。それですつかり分りました。ほんとにお世話

様でしたのねえ』

多榮子は、それですつかり理解が出來て、安心したやうにさう云つて微笑んだ。そして暫時、默つてから、今度は、しんみりした調子で訊ねた。

『それで、私はこれから、どうしたら良いのでしやう。明日兄のところに行くのでしやうか』

『え〻、明日の朝、六時半の一番で、佐多さんは、停車場の少し手前の曲り角……御存知でしやう』

『え〻、知つてますわ』

『あの曲り角で貴女を待ち合して、一緒に行くさうです』

『さうですか』

多榮子は、何か心の中で考へてゐるやうに、幾分重苦しく應へた。

暫時經つてから、又娘は思ひ出したやうに云つた。

『それから、貴女は、その時佐多さんに、何も話をなすつちやいけないのですわ』

『おやまあ、隨分むづかしいのねえ。まるで啞の旅行のやうだわ。ホ、、、』

二人は輕い氣持になつて、思はず顏を見合せながら笑ひあつた。多榮子は幾らか好奇心にかられるやうな調子で相手に訊ねた。

『佐多さんて、どんな人でしやう。貴女はもうお會ひになつたのですわねえ』

『脊の高い、痩せた、坑夫らしい方ですわ』

娘は、何の飾り氣もなく率直に答へた。

『脊の高い、痩せた、坑夫らしい方……』

多榮子は其言葉の中から、未だ見ぬ佐多の姿を眼の前に描き出してもするやうに、さう云つてから、又訊ねた。

『そしてどんな風采をしてゐるのでしやう』

『さうねえ。黑い外套を着て、長靴を穿いて矢張り黑い頭巾を被つてゐますわ』

娘は、佐多の服裝を思ひ出すやうに、順々にさう云つてから、自分でも可笑しくなつて笑ひ出した。多榮子も笑ひながら云つた。

『まあ、それぢやあ、外の人達とちつとも變らないのねえ。分るでしやうか』

『でも、夫れは直ぐに分りますわ。其様子で』

『どんな様子で』

『どんなと云つて、何處か様子に普通の人と違つたところがあるんですもの。勞働運動をする人らしい……』

『ぢやあ、一目見たら直ぐに分るのねえ』

『え〻、直ぐ分りますわ』

多榮子は、その返事を聞いてから、一寸何かを考へるやうに默つて、それから又訊いた。

『その方は、どんな風の方でしやう』

『どんな風の……』

娘は多榮子の訊いた意味を解し兼ねるやうに反問した。

『え丶、どんな風つて、まあ一と口に云へば貴女の會つた時の感じよ』

『それは、さうねえ、まあ大變率直な方ですわ、何だか、棒のやうに……』

多榮子は、夫れを聞くと思はず笑ひ出した。

『まあ、貴女の批評は、ほんとに奇拔ねえ。棒のやうに率直ですつて、ホ丶丶丶』

『でも、私そんな風に感じたのですもの』

二人は又互ひに顔を見合せて笑ひ合つた。

『棒のやうに怖い方なの』

『い丶え、そんな事ちつとも無いわ。それは一寸見ると、眞面目な、強い顔をしてゐるけれど、別に傑さうな風もない優しい面白い人ですわ。誰とでも直ぐに親しんでお友達になるんですもの。怖がるのは會社丈けですわ』

『まあ、そんな風の人なんですか。ぢやあ、家の兄と似てゐるのねえ。そして今夜は何處にゐらつしやるんですの』

一八

『長屋で、皆と、秘密に會合して、組合をつくる事の相談をしてゐますわ』

娘は率直にさう答へた。多榮子は直ぐに又其先を問ふた。

『愈々組合が出來るのですか』

『え丶、此間から其話が持ち上つて、代表者の人達が、佐多さんの處に頼みに行つたのですわ……』

娘は、つい話に釣り込まれて、そこまで云ふと、何か知ら、多榮子に對して、氣の毒な痛ましい淋しい氣持がして、口をつぐみながら多榮子から眼を外らした。彼女は、多榮子の家が、そして又多榮子自身が、今どんな境遇にあるかを良く知つてゐるのであつた。彼女の心は、毎日毎夜、自分自身が經驗してゐる苦しい坑夫生活、それから悲慘な自分の家庭、それ等のものから惹き起される感情からして、資本家に對する強い憎惡に燃えてゐたけれ共、今かうして二人で向ひ合ひに坐つて、沒落して行く此家の事を考へ、多榮子の身の上の事に思ひ及ぶと、何か知ら悲しい淋しい感情が胸に迫つて來るのを禁ずる事は出來なかつた。

多榮子は、娘の氣持が何となく、自分に對してそぐはなくなつて行くのを感ずると、寧ろ、きつぱりした聲で云つた。

『道子さん。貴女は、急に何か私の家の事や何かを心配してゐるのぢやなくつて。何だか私にはそんなに思へるわ』

娘は、それを聞くと、淋しく微笑しながら打ち消すやうに云つた。

『い丶え、そんな事はありませんわ。たゞ餘りねえ……』

『そのあんまりがいけないのよ。私は先刻貴女から家の事を心配して

歎いても、私自身がちつとも心配してゐないんですもの。そして私自身が兄の弟子にならうと決心してゐるんですもの。未だ父や母には、きつぱりは云はないけれど、そら貴女にもお話した私の結婚問題ねえ。あれもきつぱり斷る事に決心してゐますわ。そんな事は無意味な事ですものねえ。私はそんな生活をちつとも望んでたんかゐないわ。何も彼も棄てゝ無くなつて仕舞つたら、その時こそ、眞實に貴女たちと一緒になれるのねえ。もう直ぐよ。でも、山かこんな風になつたので皆はさぞ不安でしやうねえ」

多榮子は、夫れ丈け云つて仕舞ふと、何となく輕い氣持ちになつて、訊ねた。

「えゝそれは不安ですわ」

娘は、俯した眼を上げて多榮子の顏を見ながら應へた。

「皆は、どんな風に云つてゐるのですか」

「どんな風つて、さうねえ。色々な噂があるのですわ」

「例へば」

「例へば、炭坑會社に合併されるとか」

「それから」

「休山になつて仕舞ふとか」

「それから」

「それから、貴女に、大變な御金持のいゝ婿さんが來て、愈々大仕事を始めるので、も一度、景氣がよくなつて、皆の賃銀があがるんだとか」

それを聞くと多榮子はつい笑ひ出して仕舞つた。

「大變なお婿さんね。でもまあ皆は、よく色んな事を想像してゐるのねえ」

二人は顏を見合はして輕い氣持で笑ひ合つた。娘は又云つた。

「でも、その方が、此間、山を廻つて見物して行つたんですもの。役員達は又大きな法螺を吹き立てるんで、皆が騷いでゐるのですわ」

「貴女もその方を御覽になつて」

「えゝ、私達の働いてゐる處にも見えましたわ」

「どんな風に思つて」

「立派な方だと思ひましたわ」

「ホゝゝ、眞實にねえ、立派な方ですわ。私も、今から何年か前だつたら結婚したかも知れないけれど、今では、あんな立派な方では私には勿體ないわホゝゝ」

多榮子は、さう云ふと、考へ深い眼をして自分を冷かすやうに高く笑つた。そして又娘の方を向いて、しんみりした聲で云つた。

「人間の考へつて妙なものねえ。何年か前までは、尊敬してゐた人でも、今になつて見れば、最早、尊敬どころか、何の興味もなくなつて、その人が、段々つまらなく、空つぽの人形か何かの様に見えるのねえ。自分の住んでゐる世界が違つて仕舞ふんですもの」

さう云つてゐる間に多榮子の心の中には、或る説明しがたい、愉快な様な、又皮肉な様な感情が湧き起つて自分自身を縛り付けて行く様

に思はれた。彼女は、何か知ら高い聲で力いつぱい叫びたい様な氣になつて云つた。

『道子さん。ほんとに最早私達が一緒になつて働く時が迫つて來たのねえ。組合を確りつくらなければいけないわ』

一九

多榮子は、娘が歸つてから後も、長い間机の前に坐つて、凝つと動かなかつた。そして兄の手紙を、幾度もくく、繰り返し讀んだ。さうする事は、何となく兄に會つてゐるやうな氣がするのであつた。すると、眼の前に、いつもの、机に頬杖をついて、健康相に笑つてゐる、兄の頑丈な姿が浮んで來るのであつた。

『あゝ、明日は兄さんに會へる』

彼女の心の中には、待ち遠しい其叫び聲がひつきりなしに起つて來た。

彼女は其待ち遠しい兄に、もう四年間も會はないのである。兄が卒業して歸つて來た時、その兄は、父の意見を皆退けて仕舞つた。兄が歸つて來ると父と兄との間には險惡な空氣が流れ始めた。そして、或夜、父は、何を訊いても、何を云つても、たゞ默つて笑つてゐる。えたいの知れぬ息子に對して、大きな癇癪を破裂させて仕舞つた。

『ぢやあ、お前はこれから何をしやうと云ふんだ。大學まで卒業して』

『さあ、何と云つて、まあ、これから、ゆつくり考へましやう』

息子は、いつもの無邪氣な調子で、怒りに燃えてゐる父の顔を平氣で眺めながら答へた。父の癇癪玉は即座に破裂した。

『馬鹿ッ、貴樣は、何のために大學を卒業したんだ。貴樣のそのざまは何だ。俺を何と思つてる。未だ年をとつても、貴樣等に馬鹿にされる程耄碌はせんぞ。馬鹿者ッ』

それが、父と子との物を言つた最後だつた。其次の日、兄はぶらりと家を出たつきり、最早歸つて來なかつた。

父は、息子がゐなくなると、暫時の間は、毎晩、母をつかまへて息子の罵倒を續けた。

『あ奴等は味噌と糞とを一緒くたにする奴だ。社會主義など、生意氣千萬な。俺だつて坑夫は可愛がつてる。あれ等が今日飯を食つて行かれるのは誰のお蔭だ。生意氣なつ』

母親は、そんな時には悲しげな様子をして父親に云ふのであつた。

『お父さん。貴方のやうに、あれの事を惡く云ふものではありませんよ。お父さんだつて東京から歸つて來た時にはあれのやうだつた。死んだ、お母さんは、ほんとに心配して苦に病んでゐらした。東京と云ふ處は、若い者を一度位は、皆あんな風にする處なんでしやうよ。今にあれだつて氣が付く時が來ますよ』

それでも負け嫌いな父は、自棄になつて今度は母を罵つた。

『馬鹿ッ、俺とあ奴とが一緒になるかつ。貴樣からが、そんな考へだ

から、あ奴が図々しくなるのだ』
それからは、最早母は黙つて何も云はなかつた。
兄の名前が、ちよい／＼新聞に出るやうになつてからは、遂々父は不機嫌になつた。
『見ろ、あ奴は、俺の云ふ事を肯かんばかりか、遂々親に向つて弓を引き始めたぞ』
そして、息子が、監獄に這入つた事が新聞に出た日には、一日中、自分の書斎に引込んで、ウヰスキーをあほり続けた。それから幾日かして、彼は朝出掛け、もう出すばかりにしてある小包が玄関に置いてあるのを見つけると、忽ち破裂した様な叫び聲をあげて呶鳴つた。
『お崎ツ、一寸来い』
母はその聲に驚いて、玄関に出て来ると、忽ち第二の爆弾に見舞はれた。
『これは何だッ』
母はおろ／＼聲で答へた。
『お父さん、これは小包ですよ』
忽ち第三の爆弾が破裂した。
『馬鹿ッ、誰れがそんな事を訊いた。俺の家には親に弓を引いて監獄に行くやうな畜生にやる物なんぞは、何一つありやせん、こんなものは乞食にでもやつて仕舞へ、馬鹿ッ』
彼は、さう云ふと足を揚げて、小包を玄関に蹴飛ばした。母は、おど／＼しながら叫んだ。
『まあお父さん、監獄に這入つたものに……』
『馬鹿ッ、貴様の根性が曲つてゐるから、あ奴まで性根が直らんのだ。こんな物を送つたら貴様も叩き出して仕舞ふぞ』

二〇

けれ共、父にとつて畜生に等しい其兄も、多栄子にとつては、又とない、優しい懐かしい兄であつた。二人の兄妹は幼い時から、互ひに思ひやり深く育つて来た。兄が家を去つて行つた時には、彼女には夫れがどんな意味だか分らなかつたけれ共、彼女にとつて兄のする事は総て正しい事であつた。そして何時とはなしに、彼女の心は、兄のしてゐる事や其人間が、理解出来るやうに思はれて来た。
彼女は、學校を卒業して家に帰つてからは、努めて坑夫の生活を理解するやうに努めた。そして勞働問題や婦人問題に関する本も、父に隠して熱心に讀んだ。そして、彼女は變つて行く自分の氣持を何時とはなしに兄に抱き縋るやうになつた。それに對して、兄からはこまごまと、勞はり教へるやうな手紙が返つて来た。
兄妹は、遠く離れて會ふ事も出来なかつたけれ共、心は互ひに交ひ合つて、兄は、多栄子にとつて、自分を導く一つの大きな力であり光であつた。
こんなにして、多栄子は、自分の考へが、何時とはなしに兄の方に

引きつけられて行く其反面には、自分の家の責任が、段々自分の肩に重くかゝつて來てゐる事を自覺しない譯には行かなかつた。父は、兄の事を罵倒した後には、何時でも彼女の顏を眺めながら云ふのであつた。

「なあに、あんな奴がゐなくとも、多榮に養子をとつて、俺のあとを繼がせればいゝ」

夫ればかりではない。瓦斯の爆發、それに續いて起つた此不景氣、それから惹き起されて來た炭坑の經營難は、家庭では默つてゐても、そのために父の心が焦々して、其顏が著しく憂鬱になつて來たのは、誰の目にも直に感ぜられた。

「近頃のお父さんの顏を御覽、ほんとに土色をして、急に年をとられた樣だねえ。病氣にでもならなければいゝが。私はこんな炭坑なんぞに手を出すのは不賛成だつたのだけれど、お父さんは云ひ出したら、誰の云ふ事だつておきゝでないのだからねえ」

さう云ふ母親は、どちらかと云へば、冷靜で諦めのいゝ方であつたけれ共、その言葉の中には、深い心配が籠つてゐた。そして仕舞ひには、愛する息子の事を思ひ出しながら彼女の顏を眺めて、つくづく云つた。

「兄さんがあんなだから、お前はしつかりして貰はなければ」

多榮子は、其母の言葉を聞くと、自分の胸を目に見えない紐で縛られて行くやうな、せつなさを感ずるのであつた。

淋しい家の中は陰氣で憂鬱になつて來た。そして父と母とは、何時とはなしに、彼女一人を賴るやうな氣持になつて來た。

多榮子は、かうした家の中に居て、父にも母にも、自分の心持を隱く胸にかくして、表面は平凡に振舞ひながら、心の中には、成長して行く自分を抱きしめて、強く夫れを眺め續けた。それは、一面には父や母を裏切る事の心苦しさを覺えながらも、此淋しい憂鬱な家の中で、自分の心持を裸體にして、父や母を苦しめる事の不幸を思へば、未だしも夫れが選ぶべき最良の道のやうに思はれた。

愈々、父の炭坑が行き詰つて、M炭坑會社の手に移されるより他に方法がなくなつた時、父の悲痛な顏に心を痛めながらも、彼女の心の中には、希望の果される日の近いて來た悅びを禁ずる事は出來なかつた。彼女は何時か其日の來るのを待つてゐたのであつた。

「さうなつたら、父や母は、又旭川の方に歸つて暮す事になるし、其時こそ自分は素裸體になつて自分の道を進めるのだ」

彼女は、父や母には濟まぬと思ひながらも、其日が一日も早く來るやうに希つた。そして其日は愈々近いて來た。最後の努力を試みに東京に出掛けた父は、絕望のどん底に沈んで歸つて來た。彼女は父の其絕望に沈んだ顏を見た時さへも、心の中に悅びのあるのを感じない譯には行かなかつた。

彼女は、最早そろそろ、自分の新しい生活の門出のための準備さへも始めかゝつたのであつた。

けれ共、運命は、最後の一瞬で、恰かも彼女の意思をわざわざ試すために現れたかのやうに、突如として結婚問題を持ち出して來た。

編輯だより

◇本誌も發刊以來玆に十年になつた。この時に「無產政黨進出號」を出すのは大に意義あることである。安部、大山、麻生各黨首を始め各無產黨の精英が一人も殘らず情熱を傾けた力篇を下さつたことは本社の光榮とする所である。

◇この階級的進出が我政治史　議會史、社會史に特筆すべき出來事であることは勿論だ。選擧に對し無產各派が聯盟の出來なかつたのは痛恨事であつたが、それでも今回の議會陣に遲蒔きながら纏まりがついたことは先づ慶賀すべきことだ。今後無產政黨とブルジョア政黨とが實力に於て相對立が出來る日を今から待たれる。

◇「ヨッフェ氏の遺書」は勞農現代政治を知る上に、そしてプロ政治家の終焉を知る上に涙なしでは讀み得ぬ示唆多き讀み物だ。勞農建國の柱石が死の際に治療費がなくて自殺したことは我々をして考へしめるものが多い。

◇懸賞創作は一千三百三十篇のうちから一等龍膽寺雄（壹千五百圓）二等保高德藏（七百五十圓）を入選とした。現文壇の新銳の誰の作に比しても遜色はなからうと信じます。尙此外に二三人を秀逸とし各三百圓を呈し、順次每月一人づつ發表したいと思ひます。其の人名は五月號で發表します。詳細の「創作選評」は別項を一讀して下さい。

◇我社は今回の募集に對して感ずる所あり、玆に再前同樣の條件にて懸賞創作を募集す。一等は前同樣壹千五百圓二等七百五十圓この外に秀逸あらば何人でも採用する。本年拾壹月卅日を締切期として當選者は本誌昭和四年四月號にて發表する。

◇尾崎紅葉氏の戲作「著作先生夢中夢」の一篇が文壇のさる人の篋底から發見された。一百枚にあまる長篇で氏が漸く得意の時代に入らうとした時の執筆にかかる。珍稿だけに一讀をおすすめする。

◇本誌前號「左翼の二對立」に於て、鈴木茂三郎氏を「勞農」派同人としたのは、其の後調査の結果、「大衆」派同人に過ぎなかつたと筆者から取消申込があつたから、一言讀者に傳へておく。

◇「マルクス全集エンゲルス全集」は本月號に於て委細に發表すべき筈であつたが、內容を嚴選し、譯者を精選する必要上五月號で發表する。今度こそ百年二百年を通じての定本たるに恥ぢないものとする全部で十八卷の豫定◇それから「マルクス思想全集」をも近く發表する筈だ。マルクスを廻る代表的思想家の所產を全部網羅する大思想全集で、今までこれに類似せる數多の全集が出てゐたが、本全集出でて太陽の前の星の如く群小は總て影を潛めるであらう。全部で四十卷の豫定である。譯者も各々代表的の人々でこの二全集こそ千古に輝く全集であることを本社が力強く保證する。

◇「現代日本文學全集」の五月配本は「正岡子規集」とする、我國で最高の文境的收穫である松蘿玉液、墨汁一滴、病牀六尺、仰臥漫錄（一・二）曼珠沙華、歌よみに與ふる書、俳諧大要、俳句問答、隨問隨答、俳人蕪村、俳道人る。そして隨筆篇、小說篇、小品篇、歌論歌話篇、俳論俳話篇、評論篇、短歌篇（約六百首）俳句篇（約五百廿首）が全體系をなす。眞にこれ子規の精髓であるのみならず明治文學最高の集粹。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵税不要
壹ヶ年	六圓	郵税不要

昭和三年三月十八日印刷納本
昭和三年四月一日發行

東京市芝區愛宕下町四丁目六
編輯兼發行兼印刷人　山本三生

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

價（壹圓）
（郵税四錢）

發行所
東京芝區愛宕下町四ノ六
改造社
振替東京八四〇二
電話芝(43)一一三二・一一三三・一一三四

中條百合子著 最新刊

長篇小説 伸子

定價貳圓五拾錢 送料二十錢

四六判上製

作品のうへに、かくも鮮かに、年輪のごとく作家の成育の痕跡を現はしたものは稀である。「伸子もの」の力作を一纏めにし、中條氏の密接な關係にあつた生活の總決算が、即ちこれである。夫と婦との愛の破綻、幻滅のかなた、人間精神の高き戰ぎに、暢々と大きな時代の轉機を感知したもの、萬人顧愛の長篇である。哀愛、切々の息吹、ヒロインの中のヒロイン、生ける伸子の苦患に泪なきを得ない。今、中條氏は勞農ロシヤの光の前に、旅姿の孤影を曳く。「伸子」一卷を手にしてわれら限りなき敬愛を惜しまぬ。

著者	書名	定價	送料
谷崎潤一郎著	戯曲 愛すればこそ 愛なき人々	一、〇〇	一八
里見弴著	大道無門	二、〇〇	二二
武者小路實篤	母と子	二、〇〇	二二
武者小路實篤	愛慾	一、六〇	一八
武者小路實篤	第三隠者の運命	一、九〇	二〇
武者小路實篤	文學に志す人に	一、三〇	一六
菊池寛著	啓吉物語	一、〇〇	一八
里見弴著	文藝管見	一、二〇	一六
正宗白鳥著	ある心の影	一、六〇	一八
正宗白鳥著	歡迎されぬ男	一、五〇	一八
瀧井孝作著	無限抱擁	二、〇〇	二二
室生犀星著	庭を造る人	二、〇〇	二二
小山内薫著	戯曲 森有禮	二、〇〇	一八
山本有三著	西郷と大久保	一、[illegible]〇	一八

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

（忽卅版）

有川治助著

ヘンリ・フォード 人及びその事業

四六判 三百四十頁 寫眞入

恩地孝四郎裝幀

定價壹圓 送料十八錢

本書に對する反響

本書が空前のセンセーションを起し、重版又重版、應接にいとまない盛況であるは、本書が如何に資本家にも勞働者にも大なる刺激と敎訓を與へつゝあるかを物語る。今本書に對する社會の反響の二三を紹介す。

○「フォード」を讀みて感激させられました。私も卒業後は渡米してフォード工場に働き度と存じます。（東大經濟科一學生）

○有川氏著のヘンリ・フォードは吾等農村民にも大なる刺激を與へ候。同書が如何に多くの愛讀者を有するかは小生の近くにも既に五人の購讀者あるにても十分推測致され候。（香川縣一農夫）

○東京書籍株式會社にては一月四日社員職工を一室に集め石川社長より『フォードを讀んで大に悟る所あり。今後全心全力を盡して彼の主義を本社において實現することに努め諸君の厚遇をも約す。諸君亦本書を熟讀玩味して能率の増進を畫策せられんことを』と宣言した。

内務事務官 坂千秋
司法參事官 三宅正太郎 共著

訂正増補 普通選擧法要綱

定價六拾錢 送料十六錢

目次

發行所 東京市芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

『家なき兒』讀後感懸賞當選者

締切期間の短時日なりしにもかゝはらず、世界大衆文學全集第一回配本「家なき兒」の讀後感懸賞募集の擧を發表するや、内地各府縣は素より遠く朝鮮各地より應募殺到し其數一萬七千二百餘通に及び係員の机上山を爲した。嚴選の結果左記の成績を示したがお斷りして置かねばならぬ事は、一等に該當する佳作が無かつたので、二等三等を増加して各位との約束の賞金を贈呈した事である。(係)

二等(賞金參拾圓)
二つの足音

京都市下鴨宮崎町一二八藤田方　堤　敏夫

人の世は果しなき魂の巡禮である。優しい直の懷も岩吉の爐邊も民にとつて最後の安息所ではない、それは暫しの中憩に過ぎぬ。やがて美登利老人の聲は優しく嚴かに命令する。「子供達前へ!!」

ひとり民ばかりではない人々は凡て現在の安逸を捨てゝ更に苦惱の世界へ旅立たねばならぬ。やがて永遠の故郷に息ふために。

二人の巡禮はフランスを立つて世界の端にまでゆく。ジャンと家なき兒――彼等の足音が聞える、一つは重く、一つは輕く。

二等(賞金參拾圓)
師と弟子

北海道瀧川町一ノ坂　佐藤信雄

眞實偉大なる教師とその弟子を見た。彼等は路傍や樹下を教室とし、眼に映るもの心に響くものから人生を學んで行く。美登里老人の冷かに見えて温かな心情、どんなに虐げられても、たゞ眞直ぐに歩んでゆく少年、僕はたゞ涙にむせび乍らも、朗かな力強い息吹を感じた。

二等(賞金參拾圓)
愛のコーラス

東京市外下目黒町三九九　加藤澪子

泪と共に讀み了つた、利己、猜疑、全て不純なものが洗ひ流され清く澄んだ、愛に滿ち高められた心になつた。本能的な愛を超越した永劫の愛の流れに胸の隅々までも潤ふのを感じた。如何なる窮境にも歪められてない民の純情、落魄しても誇を失はぬ美登里老人、永遠の母と云ふべき直、町子の美しき友情それらが私の心の奧で愛の歌を合唱するのであつた、あの竪琴の響に合せて。

三等(賞金拾圓)
氣品

中村孝

大向ふを狙ふ樣な刺戟はない、だが深刻な人生行路を品のよい流れるやうな文章で描いてゐる。靜かなセーヌの流を下る船の上から兩岸の變化に見とれるやうな興味、そして王城の白いドームの下で王子になつて家臣達から讀みきかされる物語のやうな氣品をその一篇は持てゐる。(東京市外大森町不入斗一三七一五中村勝哉方)

三等(賞金拾圓)
試練は教師

牧龍三

憂鬱な私の心は今は滿悦に波打つてゐる。それは偉大なる自立の精神を「家なき兒」から教へられたからである。私はもう學校教育の受けられない事を悲しまない、實社會の試練はこよなき教師であることを知つたからだ。私は初めて小說の尊い意義を見出し同時に低級なる文學が何の益もないばかりか、それから生れる空想の危險を知つた。「家なき兒」こそ貴い人生の讀本である。(住所不明乞御通知)

三等（賞金拾圓）

母として

山田外茂子

母は子供の魂の塒です、唯一の魂の棲家を離れた子供の運命を考へさゝれます。マローは私達全人類の母が、いとし兒のために告げてやりたい事柄をすつかり云つて異れました。何としても私はしみじみ母の責務を考へさせられました。（石川縣河北郡森本村字南森下ヌ一）

三等（賞金拾圓）

貧しき父

大川銀次郎

何もかも物質の支配する社會、愛する吾兒の前途を考へて暗然としてゐた、若く貧しき父親の私は此書に依つて物質よりも正しき自立獨行の大精神を養成せしむる事こそ愛する吾兒への最善教育であることを知り前途に大なる光明と希望を與へられた、斯くて此の全集は完全に私の家庭の糧となつた。（大阪市西區北堀江町四丁目庄野方）

三等（賞金拾圓）

教室より

鈴木銀一

家なき兒の話を教室でした。優等兒も劣等兒も皆泣きました。私は兒童達の瞳に人生への雄々しい希望が芽生えた事を感じました。「さ、行からよカビ」「子供達、前へ！」ダルトン案、エミールの精讀より家なき兒一卷の思想こそ私達初等教育家に教ふるところが多いことを信じます。（宮城縣刈田郡白石町長町）

三等（賞金拾圓）

愛と言葉

井坂居貞

此所に私は一個の宿命論者となつて謹んで「家なき兒」を讃夫しよう。カアペンタアの「愛は言葉を以てその眞實を語ることが出來ぬものだ。」といふ主張は完全に此の物語によつて辯駁された。何故なれば吾々は其所に流露するあらゆる人類愛に抱擁されて感激を堰止める術を知らないから。彼が生涯こそ吾々が同情し渇仰すべきものではないだらうか。（朝鮮釜山府草梁町府營住宅十八）

三等（賞金拾圓）

母の心

平尾ゑい

親無し兒がそんなに苦まねばならぬかと、「家なき兒」を讀んで私は考へさゝれました。私は今後、子供の爲に自分の身體を大切にして永く永く面倒を見てやりたいと思ひます。（大阪市西成區東四條三丁目七四〇）

三等（賞金拾圓）

母の眼醒

日下部しげ子

「家なき兒」を讀んでから不思議にも我が兒かわいさが增して來たのでございます。直の聰かな母性愛に感じた爲か、我が子を民の樣な素直な良い子にしたいためか、それともどんなどん底に落ちても愛されてゐる者は決して純眞さを失はぬもの、と深く感じました爲か、それとも恐らく此の書の全卷が私の母性愛を呼び醒して異れたのに違ひありません。（東京市外高田町雜司ヶ谷一宮多村方）

四等 一千名（賞品本社發行圖書券）

【東京府】○林正雄○服部正代○山崎秀明○市川條岸○滿川次郎○鈴木秀雄○佐谷與太郎○高志俊作○伊藤君子○神谷門一○安川國一○矢部信○岡本秀大○竹內安治○田中誠吉○住吉利夫○片山父吉○鈴木CD生○永瀬英一○高橋清○及川ふかし○田邊貞治○石川義大○森田義雄○武田生○千手昇○吉谷百子○今井生○橋本喜大○小谷岡誠○大石細籐○市原愛イ○東條忠三郎○入村幸吉○黒瀨守○沼邊秋政○藤井とみ枝○栄山吉良○青木新○鈴木民也○土居芳太郎○渡遠信○久保田道島○西山秀雄○永瀬正二○森野蝶二○白田すみ○富田宇藏○西優之埔○二木相策○那須潔○葛原國雄○矢島一司○石川健一○菊池洋四郎○森錦三○一司光人○内堅六郎○黒野則○石井正春○深尾實○白田佐平○廣江實○○中村淑大○大尾俊○馬日政雄○森貞夫○山内宗恭○石川良子○吉谷義子○堀江勲詠○原田多美子○船津善一○山田五十雄○黒岩喜代司○前田三平○吉村陽三郎○山木昇○本澤一美○介井清○原田久○川喫路渡文○井平槇二○松山陽一郎○神山峻○初谷安次郎○新納篠健○齋篠びろし○川村よし子○富野敬邦○柚木冊大 永松一郎○上田晴○金子豊一郎○大庭沼○田原勝之助○天野高光○荻野四方路○吉林甚一○小林一二三○山本三樹○奈設樹○宮崎一史○田中米吉○澤崎春美○藤井恒雄○深井貞子○玉木清次○青山清子○中村千秋○小川久○有木正仲○中谷菊次郎○幅鳥幸吉○謐谷等○旗武一○慶岡茂樹○高橋なをみ○柳川春風○岩永順壽○尾久志野○波良川仁○石川靜大○長谷川孝道○野日安梨子○野中正次郎○渡重二向三○小木いら子○梧仁非之○田中官○小堀元治郎 磯部倚夫○鋼野柳吉○佐藤兵吉○横川ホ範○秋安直緒○飯田神生○里見貞介○久木十美二○前田昭遠○大脇比昌志○鈴木喜一○謐谷恵吉○井原勇○原合英秋○沂藤春江 宮野啓太郎○田中貴子 管原陸邸○鈴木々助○谷川鐵之助○鼬谷愛一郎○澤幡成藏○依鐵雄○朝友盛秋○坂英男○加藤生○長田信○神谷潔○館孝一郎○松村喜五郎○田川定○田

中瀬三郎○田中館申一郎○八木田稔○井上清○
木宇知清郎○原瑞枝○牧光夫○湊戸徳雄○片樹
男一○神島一雄○日黑一郎○香取セツヲ○舟畢
焊○井川篤三○山崎清子○山下濤勝○馬場萬里
○山田敏一○野呂金四郎○中山靜人○日高博○
丸美代子○鈴木忠彌○鈴木濤香○高野健吉○井
上己男治○龍泉寺雅文○石川一拜○杉村筆山雄
○榮生田芳男○牧三郎○竹村勝○大廣忠雄○豊
澤定治郎○鈴木重三郎○和田五郎○井上進一○
館正大○高橋桃○○野本泰○樹田勝○松本紀一
○石山正重○石川濤○松尼一男○吉村勝治○杉
山登好○山田保子○及川光子○佐藤秀義○佐々
木ときわ○石賀忠文○久保田松太郎○九浦英子
○佐々木代樹○後蘇英一○高坂婦治江○玉木莚
子○樹原綾子○松下春大○土屋淑夫○吉岡梓子
○村山正夫○深澤龍太○水島生
【神奈川縣】○莊司正久○寺田仁○須藤利男○矢
部武敏○佐竹勇○谷子榮一○多田恒○山本光三
郎○諏訪生○桐谷友吉○田島とし江○鈴木孝○
昔川景昌○鶴岡脩秋○有山生○石川可夫○松京
清太郎○橋田文子○長谷川龍生○間瀬石二郎○
隅口政次○矢澤乙彦○柳川仁幸○山口大地○遠
藤茂○山田十内○間仲常郎○岩澤美代子○田中
美代治○桐生堯○徳川進作○小林五郎○森篤男
○皆川つね子○上田作々○吉田茂○坂下京二○
隅口粉太郎○齋藤敏雄○齋藤小司○竹内きよ○
高橋東平○戸田基○十重吉○小木骨秀男○三橋
和夫○佐藤幸永○田中幸夫
【埼玉縣】○永瀬房子○半田しん○千秋子○西
村愛司○指田長次○萩原愼司○茂木孝次○江口
動○原田愛助○新井時久
【千葉縣】○前田天虎子○宇都宮昌之○大和幸
男○小川秀作○篠竹○○池川友彌○遠藤紫波○
原田元○島田進○中村濤○小川芳郎○鶴澤中○
白石晃○金坂政明○太田幸次○佐藤俊之○宮崎
松太郎○竹澤幸治○岩井雅芳○中村良吉○石田
修○伊藤平四郎○椿木一○森靜夫○山田豊○齋
川一雄
【茨城縣】○眞柄武○○柄眞○三ツ矢孝一○鈴
小貞子○瀧本松兵衛○岡井藏雄○瀧本千代子○
平岡正雄○佐藤幸一郎○高橋甚吉○水野せつ子

○丸山政夫○塚田毅○山田齋一郎○大條正之助
○宮田敏○富澤千代子○山谷生○赤城定雄○白
石啓助
【群馬縣】○蘇井傳次郎○加芽井つね美○岡根
誠○齋藤素彦○林幸吉○臼田松子○眞下みのる
○上肥正太郎○丸山清花○黑内政一郎○小泉久
彌○藤岡みちお○齋藤駿○金澤泰治○藤井傳治
郎
【栃木縣】○青木林二○横山彦太郎○寺澤打三
○小池弘一郎○渡邊時夫○山崎眞○阿久津錦一
○安藤正雄○小川義男○青木林二○細島敏三○
豐田清吉○荒居寅一郎○鈴木米○伊勢威○櫻井
雪雄○相馬駒二
【山梨縣】○東森谷五郎○内田嘯治○内田榮一
○武田源久○横田寛次○久保寛徳○遠藤勝也
【福島縣】○高橋直英○賞友吉○鉄田弘道○高
橋加久吉○長谷川濤治○伊藤ヨシエ○渡邊米吉
○森信○千葉金一○須藤濤○山田三郎○枡子喜
次郎○高橋のぶ○池田加津知○眞田はるみ○駒
井總子○佐藤鎌松○遠藤靜子○千集助治
【宮城縣】○深海肖子○菅原雄○志田勝衛○
高田原次郎○佐藤正○楠良太郎○宇田道夫○廣
西貴直大○松津しけよ
【岩手縣】○千葉大祈○村上雄○冬辰雄○永山
祐門○菅原進
【山形縣】○菅原米代○豐田庄助○秋柴近子○
海藤秋等○板垣榮吉○石栗正治○高川久雄○近
藤侃一○高橋しげこ○樋口一夫○昌ヨシ○東親
米○長岡行男○駒込豐藏○高橋治○太川新重
郎○平山千秋○菅原美佐子○鈴木泰○内田東伍
○松田節子○水野千代子
【秋田縣】○佐藤易太郎○根元ウタ○木内勝天
○黑澤榮治
【青森縣】○末永衆藏○藤田吼衛○對馬彌一○
木村勇造○小野武士○古川福四郎
【北海道】○山木武雄○木村利補○玉森康平○
中津川信道○秋本操○野津毅七○浦口鐵男○中
尾靜○中川次吉郎○武藤源喜敏○山田稔○竹
田仲二○五森波奈子○原弘○仲村勇○仲下武○
高田香那子○今井久雄○松尾順吉○KK生○杉
町幸正○原弘道○坂田律夫○八木八郎
【長野縣】○今井彌平○中澤恒雄○濱谷治○福

岡彦廣○中島勝元○小平七雄○最上としえ○諏
訪敏○高橋兼治○宮下忠雄○清水忠男○荻原驗
夫○島田一郎○島田かづみ○五味祐寧○寺川良
子○新谷琴美
【新潟縣】○皆川春子○田村爲次郎○深井芳文
○篠川誠司○石黑直二○山笠左一郎○柴本正榮
○平野義忠治○渡邊直吉○平賀宮一○仲虎太郎
○竹下治○渡邊幸吉○島田キミ○深井芳文○鈴
木朝榮○竹内玉○五十嵐喜三郎○楠本崑陸○穎
木京代時○高橋二郎○中山素山○岡川則稻○西
明功雄○渡邊直吉○川上達太郎○千をみ生○中
賀利三○山本京市○伊藤敏雄○高橋重助○岩澤
荼榮
【富山縣】○井上廣子○神保清一○高橋治吉○
細玲子
【石川縣】○福村啓○西田登○松本精一
【福井縣】○谷川勇○田中康夫○西浦幽吉○山
口しげ子○中西義一○栄谷勝好○中谷次郎○平
尾正○村中真雄○幸森市太郎○栗本淡花○經
石房○中谷三郎
【靜岡縣】○木村鉉一郎○鈴木鑛一郎○村松圭
三○宮浦嵐一○大野力三○寺尾富藏○小野里理
重○渡邊君治○三宅金太郎○相良常明○中西誠
湖○高木みさ子○宮浦弘之○伊東正雄○臼井茂
○三岡間佐志○裕村文夫○河村よね○松井良太
郎○高山平治○茂木茂一郎○唐木健○高山重一
○森吉直城○河村七太郎○鈴木濤○杉浦正二○
鈴木餘作○伊藤志賞子○福永芳郎○阿部嘉志子
○伊藤宏○栗田好郎○井上なつ子○石原豐○松
非茂○富田正雄○中田信郎○竹村又七○千本濱
人○竹下補二○石川源二○上川道平○佐藤正大
○河村暁星○菊神德平○土屋登○三宅淺栄○山
田倣治○唐澤みよ子
【愛知縣】○吉江壽雄○新城銑太郎○古瀬魁○
伊藤弘志○中野俊吉○瀬戸徳三○松田珠子○矢
口貞子○若松良俵○市原稔裕○棚澤靜小○小川
正○新見逸二○村瀬虎之助○木村一郎○川崎一
○伊藤重平○高橋靜子○榊原一郎○内田眞二○
松川正為○森本波吉○石島正明○大村静雄○奥
田一英○野村並樹

【岐阜縣】○鈴木俊太郎○小森勇美子○小林政一○馬淵兵吉○林善次○鹿島一ト○西尾信○勝見○和子○河合劍造○上田秀雄○高橋義弘○村上吉ト○市川賢二○伊藤俊子○有里正朔

【三重縣】○井村貞三○米澤一○加藤富郎○幸原捌夫○杉本長英○宮崎孫樹○筒井牧二○矢倉千づ○矢野正男○伊藤幸子○島田俊二○中村久一○西田益三○宮永放丈

【滋賀縣】○大澤高志○淺井たき○澁谷利夫○黒田直二郎○高木芳子○森野平助○辻勇治郎○奥田八郎○山田正和○佐々木亮市○岡野弘三郎○伊瀬白武

【京都府】○前田覺○松井信一○廣瀬秀○沖武四郎○杉山誠○東章風○竹内はる子○石京榮三郎○長宗正二郎○尾形源太郎○宮田和夫○址川幾江○德地勇三○上田宇之助○上羽嘉治○川合益次○原田猾介○村田末太郎○長谷川清吾○小林照雄○富田篤造○阿波谷勝○市田正太郎○柴田喜美子○壹岐松三郎○本田義一○矢島榮一○白井純一○堀田彌榮子○宮川藤三郎○松山乃武夫○村山資郷○高木三郎○松尾南洲○山田案山子○フヂイ、ケイ一○光村耐三○成瀬余思夫○加納勉○辻武富

【大阪府】○木村直義○桂比呂詩○中西富士夫○福井善助○橋本しな子○山川光道○中原美世路○鈴木幸夫○桑山宮雄○士肥浴子○坂本初太郎○岩崎宮子○村田延雄○宮武猛夫○・義雄○黒石○早川昇○内海清方○岡本正久○澤尾信次○宮崎一郎○池水正直○野村不二男○村山信一○橋本啟雄○山崎喜一郎○前川英雄○稲垣義男○布生華武○早川錦治○野田晋○堤次郎○高橋騰○水田陽二○藤井良造○小菅政造○谷垣成郎○奥田銀之助○田尾正德○作野熊二郎○小野敬一郎○金銅不二大○松浪植吉○小池きく○太田原正利○岩田實○平野忠雄○岡木貞次郎○安井靜太郎○足立俳次○勝見芳雄○青木英七郎○南守○中谷喜甫○横山政子○舟桐○松山國二○中津井保男○山田つや子○佐川ゆみち○安宮務○伊藤よし子○竹澤太吉○佐々木三九一○朝尾佐一郎○三宅修太郎○細川新ゝ郎○中西仁一郎

○玉木一雄○大西信重○竹中左門○磯濱響○堀かをる○大嶋藤夫○梶木瀧助○奥本利信○濱上捨松

【奈良縣】○市田唯雄○川田燕○松村德三○米澤二郎○飯消勇夫○杉田賢三郎○森田昊○市田英三○河本まさ子○沖中史一

【和歌山縣】○安川迪夫○天津乙風○池田浩三○杉中花仙○古谷響至孝○山東喜一○中井正三郎○山本惠三○北野正一郎○野村猛彦○滿谷佐太郎◉小島義範○富士松信乃夫

【兵庫縣】○桐村條三○武本成行○細見恒○戸田伊三郎○平井德次○岩井武夫○若林羊子○馬詰精一郎○松本登美男○藤原安雄○船戸正晴○村田八三一○岡本義一○阿部美子○隈本篤○吉本隆平○青木一葉○生島幸雄○藤野千代治○山本保○西田明次○島田かしち○北村奈迪○佐野キヨシ○佐藤靜太○小原健○寄砂正男○花森安治○改田保二○波末恒彦○岡田好秋○大東恭爾○長谷川直次○平井尚一○瀬川ヒサシ○服部重雄○田中正夫○中島元子○赤羽幸雄○鈴木伊三夫○大西訓導○遠藤和夫○松下房雄○濱田四郎○脇谷清○豐島喜一郎

【岡山縣】○直原由大○横山玉樹○小橋金八○坂本德二○小畑はずみ○赤木三三郎○青木信義○山本恬靖○中山三郎○桐山憲次郎○牧野義人○田中栄太郎○建石健太郎

【廣島縣】○島本廣人○清水留吉○桑克己○村上四郎○兒玉千代吉○榊田三武櫻○中川貫一○熊本繁一○寺田友義○川端柳一○叶谷多津子○河村良次○椎木昇○岩靜大○新岡次郎○堂原一廣○丹羽壽三○岡村三夫○吉野茂○杉田屋兩○河村勇○齊木勤○寺内能三○原田源一郎○寺内友義○風來山人○田原喬○吉田一

【山口縣】○宮本清治○今井網男○寺田燕○鶴岡武夫○雨宮榮造○岡尾細之助○田村敏介○松澤儀平

【鳥取縣】○米澤榮雄○船木正作○澤井政野○豆野正夫○松本珠城○TA生

【島根縣】○勝田安雄○川本恒夫

【香川縣】○居石正文○小谷明三○石田祿一○矢野正峰○柴田忠義○有本勝之助○谷榮

【愛媛縣】○永野修彌○佐伯鬼代一○手島照一○山本一郎○杉浦敏男○枝本案尺○松野太助○一瀬金一○宮内重信○高津洋平

【德島縣】○越久公治○太田進○岡島瀧子○早雲義夫○豐澤一馬○喜多内アヤ子○宮田春男

【福岡縣】○明石精一○森田春人○藤野義秋○中村猪市○古川正憲○小川武郎○赤松懸應藤鮎次郎○中島富生○時貞徵美○入江英夫○長崎キミ○菅義光○筑紫二郎○瀧本猛○椎野悦朗○伊東隆助○安永義典○吉田悌二○秋村一馬○林三九男○狩野きん○坂井廉雄○坂田京平○高崎廉延○太田貢○高崎清一○大島しつ子○大島鎭子○杉本於花○青木純○伊口輝

【大分縣】○黒瀬富士也○坂井進○前島幸夫

【佐賀縣】○田中滿三○宮永久良

【長崎縣】○渡邊潤夫○岡村昌子○田崎信雄○小島貞太郎

【熊本縣】○岩崎はるゑ○岡本等○原田善十郎○辻政雄○米村武一郎○神戸三夫○坂本昌人○志賀誠子○清藤茂義○松村毅○木庭巳喜男○杉島貞平○大介光夫

【宮崎縣】○湯地つや○迫口壽吉○猪俣毅○紫田南枝

【鹿兒島縣】○高木光存○板元盛文○重信清

【沖繩縣】○山田有吉○島袋太郎○慶數永俊○大城山戸

【朝鮮】○鹽崎廉二○津田正見○林市郎○河野通○中宇永○吳曾根○山本幸昭○三角幸一○金能根○文性稲○中西一馬○黒松貫美之助○竹喜太郎

經濟學博士 本庄榮治郎著

日本社會史

従來の我國の歷史は貴族豪族のみの歷史で、庶民階級の存在を無視したものであつた。本書は古來我國に於て各階級が如何に發達して來たか？各階級間に如何なる社會問題が起つたかを研究したもので、他に類なき名著である。

（第一章）日本社會史の概念、（第二章）氏族制度の社會、（第三章）郡縣制度の社會、（第四章）莊園制度の社會、（第五章）分權的封建制度の社會、（第六章）集權的封建制度の社會、（第七章）日本社會史の特性○索引

菊判上製 二百九十六頁 定價二圓五十錢 送料二十四錢

日本財政史

本書は我國に於ける財政發達の歷史を說述せるもので、博士の著たる「日本社會史」の姉妹篇で、「日本經濟史」刊行の上は、此三部作によつて我國物質文明發達の歷史を明かにすべく企圖された書である。

（第一章）日本財政史の觀念、（第二章）氏族社會の財政、（第三章）郡縣社會の財政、（第四章）莊園社會の財政、（第五章）分權的封建社會の財政、（第六章）集權的封建社會の財政、（第七章）我國財政發達の特徵○索引○年表。

菊判上製 三百十六頁 定價二圓五十錢 送料二十四錢

近世農村問題史論

「日本社會史」の一補論たるべく著述されたるものにて、德川時代の農村を題材として農村問題の發生、農村社會の變遷を研究せるもの、新しき意味に於ての歷史的研究たると共に、又幾多溫故知新の材料を藏する書なり。

（第一章）農村問題の意義、（第二章）農業土地租稅制度、（第三章）農民生活の困難、（第四章）農民政策の根本問題、（第五章）人口の減退及び勞力の缺乏、（第六章）田地の兼併及び荒廢、（第七章）小作制度及び小作問題、（第八章）凶荒に對する政策、（第九章）農民暴動、（第十章）近世農村問題の特質○索引

四六判上製 三百六十頁 定價二圓三十錢 送料二十二錢

法學博士 末弘嚴太郎著

噓の効用

專門家でなければ理解出來ぬとあきらめられてゐる法律も末弘博士の麗筆に依ると苦もなく、何人にも解かるやうに說かれる。そして普通の所謂專門家が明かにし得ざる法律の眞精神まで掘る事が出來る。本書の收むる數篇、何れも興趣深き中に法律を知り社會を學ぶ事が出來る書

○噓の効用○改造問題と明治時代の省察○役人の頭○小智惠に捉はれた現代の法律學○民法改造の根本問題○佛蘭西勞働聯盟の動搖○過激社會運動取締法案批評○住宅問題と新借家法○工場法の改正について○世界的恒久平和の理想と國際勞働會議○陪審法案を讀みたる後の感想○無產者の立場より見たる陪審制度○婚姻に關する法律

四六判上製 四百五十四頁 定價二圓六十錢 送料二十二錢

農村法律問題

世の中は法律のみによつてのみ動いてゐるのではないが、又世の中の生活關係には法律問題となり易いものも多い。農村に殊にそれが多い。山林、水利、小作の問題は其の解決を法律に求める場合が多い。本書は農村に關する法律を理解し易き形式で書かれた通俗的にして面白くしかも深奥なる學說を含む萬人の必讀の書である。

○序章○第一章 部落有林野と農村生活○第二章 永小作の法律關係○第三章 小作問題と小作法、はしがき（一）小作權の確立、（二）小作權の繼續、（三）小作料、（四）小作人の土地使用權、（五）小作關係の始終に關聯して起る諸問題○第四章 小作爭議と小作調停法、等

四六判上製 四百十八頁 定價二圓五十錢 送料二十二錢

勞働法研究

勞資對立が益々露骨となるにつれ、勞働法の法學的研究は愈々必要となつて來た。著者は此種集團的勞働現象の法に關しては從來の個人主義的法律理論乃至法律概念の外特に新なる法律理論と概念との探究樹立を必要とする見解から各種の研究を試みたのが本書である。

○勞働組合法論、はしがき（一）契約自由の原則と勞働契約（二）勞働組合の法律上の地位（三）勞働組合法制定に關する諸問題結語○根本的に改惡せられたる勞働組合法案○「勞働組合取締法案」を評す○佛國新職業組合法○勞働協約と法律○佛國勞働協約法○就業規則の法律的研究○勞働爭議調停法解說○公益企業と同盟罷業

四六判上製 五百七十六頁 定價三圓 送料二十四錢

東京芝區愛宕下町 發行所 改造社 振替東京八四〇二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

株式會社秀英舍印刷